國譯禪學大成

第十四巻

國譯禪學大成第十四卷凡例

一、本大成第十四卷に收載する所の書は、大慧普覺禪師書二卷及び禪家龜鑑一卷の二部三卷なり。

一、以上の書中、大慧普覺禪師書は、略して『大慧書』又は『大慧書問』と稱し、支那宋代の僧大慧宗杲が、隨時其の門下の縉紳、居士等に對して、宗門上の要旨を說き與へし書牘文を、弟子慧然が輯錄し、それを更に淨智居士黃文昌が重編せしものなり。本書は大慧語錄三十卷の中、二十五卷より三十卷に至る五卷に包含せらる。而して我が國南北朝の初期に、既に印板に附せられ、盛んに叢林の間に喧傳せられしが、爾來數度の印行を見るに至り、其の中、最も普通に行はるゝものは寬永年間刊行の二卷本と正保四年刊の二卷本となり。其の他、大藏經に編入せられたる五卷本等あれども、今次、國譯するに際しては、主として正保本を底本となし、之に若干の刊本及び寫本を參考して脚注を施せり。

一、禪家龜鑑は朝鮮李朝の高僧西山大師退隱翁の撰述に係る。師が西山（曹溪）に住する際、諸種の經論・語錄を涉獵して、日用參禪辨道に最も必要なる言句を輯錄し、更に之

に親切精密なる注釋を附して刊行せしめしものなり。本書は朝鮮に於ては再度の刊行を見、我が國に於ては寛永十二年に初めて上梓せられて以來、數次の刊本現れ、明治以後には、續大藏經及び禪學寶典などに編入せられて發刊せられたり。今次、國譯するに當りては、寛永十五年版の素本と延寶六年刊行の頭注本とに據れり。

一、以上二部の書中、大慧書は、禪門の要旨を最も簡明直截に說述して、其の歸趣を窺ふには古今凡そ此の書に過ぎたるものはなく、古來參禪者のために、帳中の祕書と稱せられ、盛んに傳誦せらるゝ所なり。禪家龜鑑に至りては、「其の名僭に似て、天下の禪鑑と曰ふに足らず」といふ非難もあれど、當時、朝鮮に於ては禪敎混溢して玉石辨ずべからざる中にありて、本書の如き禪の眞旨を發揮し、詢々然として其の針路を誨示し、以て大衆をして大覺の門に導き入らしむるに足るものは希なり。是を以て本書は彼の普照禪師著の『修心訣』と共に、朝鮮に於ける禪宗の大要を知るには最も簡便なるものと謂ふべし。

昭和五年二月

編者　黃楊道人識す

國譯禪學大成　第十四卷

目次

國譯大慧普覺禪師書

解題

大慧普覺禪師書上下二卷は古來より略して大慧書と稱せられ、支那臨安府徑山の大慧禪師が居住その門下の縉紳居士等に書を以て禪門の要旨を說示したるものなり。而して禪師の遺錄三十卷は、宋の孝宗、乾道の末年、詔して大藏經に入れて流行せしめらる。本書は卽ち其の一なり。今其の大要を檢するに、上下二卷凡て六十二篇の中、「聖泉珪和尙に答ふ」と「鼓山の逮長老に答ふ」の二篇の外は、是れ咸當代知名の士に答ふる禪教の書簡集にして、彼が上堂、小參、法語などよりも大慧の眞面目を窺ひ、其の赤裸裸なる機鋒を知るには、最も簡便なるものなり。其の六十二篇の中、曾侍郎に答ふるもの六篇、李參政に答ふるもの四篇、富樞密・汪內瀚・呂舍人に答ふるもの各三篇、其の他は各一又は二篇づつなり。

其の說く所は、何れも教相によつて菩薩所證の修因の容易ならざることを述べ、聰明知解を呵して沒意知の所に向つて工夫すべく、邪師を斥け無智無念の工夫を呵し、動靜一如の工夫を凝して自己の般若上に向つて工夫すべきことを教へ、經言祖句を擧げて言外の自證自得を勸め、文字言句を離れて有無の心を調伏すべきことを諭し、己見を以て猥りに古德を判ずることを戒め、又官途にありては逆順閑忙一

如の工夫を鍛錬すべきことなどを訓へて、其の所說は主として俗世間事に渉ると雖も、其の訓ふる教理は深遠微妙にして簡明直截、將に參禪者の最上指針たるに足れり。

本書の編者は參學の慧然之を錄し、淨智居士黃文昌の重編とあれども、大藏經本には「宋徑山仁能禪院住持嗣法慧日禪師臣蘊門上進」とあり。顧ふに、是れは大慧語錄が大藏に編入せらるゝ時の編者にして、單行本としては古來「慧然錄、黃文昌重編」として行はれたるが如し。それに就いては我が五山版は勿論、支那刊本にも、矢張り「黃文昌重編」とあるを以て明かなり。

本書は我が邦叢林に流傳すること久しく、今猶ほ盛んに僧俗の間に傳誦せらる。今其の主なる刊本及び寫本を擧ぐれば、天正二年南化書入の二卷本、五山版の二卷本、支那版の二卷本、寬永の木活版の二卷本、同じく十九年刊の一卷本、正保四年刊の二卷本、慶安元年刊の二卷本及び明治三十六年刊の增冠傍注の二卷本、其の他、卍藏及び禪學大系などにも合編せられて行はる。而して本書の注釋書は本國譯本の外に、寬永十一年刊の大慧書抄四卷、寫本大慧書考證一卷、虛白著の大慧書頭書四卷、寫本大慧書別考一卷、同じく大慧書標注補考拾遺二卷、及び寫本大慧書漫筆三卷などあり、何れも參考に資するに足れり。

本書の著者大慧禪師の略傳は、本大成第十一卷「大慧普覺禪師宗門武庫」の解題に載せたれば、今は再錄せず。讀者宜しく彼に就いて看られよ。

國譯㋑大慧普覺㋺禪師㋩書上

㋥參學　慧然　錄
㋭淨智居士　㋬黃文昌　重編

㋠曾侍郎に答ふ　㋷天游　問書附

㋦開、頃㋸長沙に在りて圜悟老師の書を得るに、㋾公、晩歲相從つて所得甚だ是れ奇偉なりと稱す。之を㋻念ずること再三、今八年なり。常に恨むらくは、未だ親しく㋕緒餘を聞くことを獲ざることを、惟切に㋵景仰するのみ。㋟某、幼年より發心し、知識に

㋑名は宗杲、年譜に曰く、年十六歳の時、大に宗教を興し、濁世を照明すの語を取つて名つくと。杲を果に作るは誤なり。師の姓は奚氏、宣州の人なり、年十三にして慧雲齊公に投じ、十七歳にして薙髪す、三十七歳の時大悟す、初め徑山に住し、後に明月堂に退居す、三十八歳の時に紫衣を賜ひ、佛日大師と號す。また妙喜庵に居せしに因つて、自ら妙喜と號す、七十四歳の時、孝宗帝特に大慧禪師の號を賜ふ、隆興年中(西紀一一六三)に寂す、壽七十五、諡を普覺と賜ふ、圜悟克勤の法嗣なり、偈賛法語すべて五帙あり。聯燈錄十七、普燈錄卷十五、會元第十九、通載第二十、禪宗正脈第十九等に詳かなり。

㋺禪師とは禪門高德の尊稱にして、禪師號の始めは義堂日工集第四に云く、支那に在つては北宗神秀に始まる、又特に禪師號を賜ふは大慧に始まる。日本に於ては官賜の號とせらる、古くは道鏡を太政大臣禪師とせらる。諡號としては建長五年、建長寺開山隆蘭溪に大覺禪師を賜ひしは、其始めなり。

㋩書とは文體明辨に云く、書は

參禮して(レ)此の事を扣問す。弱冠の後、(ソ)婚官の所役を爲つて(ツ)工夫を用ふること純ならず、因循として今に至る。老いたり、未だ聞く所あらず、常に自ら愧歎す。(ネ)然も志を立し願を發すること、實に淺々たる知見の間に在らず。(ナ)以爲らく、悟らずんば則ち已みなん、(ラ)悟らば則ち須らく直に古人親證

叙なり、其言を叙布して之を簡牘に陳ぶるなりと。此書は但だ在家求道の士の爲に答ふる所なり。出家は叢林中に在りて朝參暮請するが故に此れに及ばず、故に只だ一二あるのみ。大慧が書に妙を得たること北礀文集七に見ゆ、卍庵の法語の跋に云く、「妙喜の長書、佛眼の普說、卍庵の法語は天下の三絕なり」と、又舊鈔に韓子蒼の大慧書を評するを引いて云く「古錦甕の如し云云。」

(ニ)參禪學徒の略、參は會承なり、慧然は大慧の法嗣なり。錄は紀なり、又は謄寫するを錄と云ふ。

(ホ)淨智は德を標したる號なり、居士とは梵語に迦羅越(くらばち)、四德を具する士の美稱なり。一に官仕を求めず、二に欲寡く德を蘊ふ、三に居財大に富む、四に道を守り自ら悟る。卽ち道義淨白にして居處する所、塵累なきものをいふ。

(ヘ)普燈十八に出づ。

(ト)大惠年譜に云く、「其陞堂の語要、普說、小參、法語等數十萬言あり、參徒道印編して六十巻とす、宗璉、曇密、宗演、淨智居士等、其の綱要をとりて六册として世に刊行す。詔して大藏に入れて聖教に同じうして以て永く傳ふ」と。

(チ)答曾侍郎の四字は、本書の首題なり、此には奉大惠禪師書と題すべきなり、然るに此は專ら大惠の書にして諸家の書を載するに非ず、故に今は問書を以て答書の意を發揮せんが爲に、之を問書の首に題して、特に注して問書附といふ。

(リ)天游は曾侍郎の字なり。會元二十、普燈廿三に出づ。

(ヌ)閑とは曾侍郎の諱なり、自ら諱を稱するは謙辭なり。

(ル)湖廣道の長沙府なり。

(ヲ)公は大惠を指す、師時に三十七歲、故に晚哉といふ、幼年より隨侍せしならば一倍よからんとなり。

(ワ)念とは圜悟の書に依つて大惠を念ふの意なり。

(カ)緖餘は殘なり、莊子に云く、「緖餘以て天下國家を治む云云」と、今の意は、縱ひ相見を得て我が爲に餘蘊なく說話し給ふと雖も、我れ遺忘なきを得ず、然らば寧ろ一たび相見を得て其說話し給ふ所の緖餘を聞かんことを希ふとなり。此れ曾侍郎の謙辭なり。

(ヨ)景は仰なり、慕なり、遠隔の地に在りて唯だ切に仰慕するのみとなり。

(タ)此の一段は此書の大綱なり。幼とは禮記に人生十年をい

の處に到て方に(ム)大休歇の地となすべしと、此の心未だ嘗て一念も退屈せずと雖も、自ら覺ゆ工夫未だ純一ならず、謂つべし志願大にして力量小なりと。(ウ)向には圜悟老師に痛懇するに、老師示すに(ヰ)法語六段を以てす。其の初には此の事を直示す。後には雲門、趙州の(ノ)放下着、(オ)須彌山の(ク)兩則の因緣を擧して(ヤ)鈍工を下さしむ。常に自ら擧覺せば久久にして必ず入處あらんといふ。(マ)老婆心切なること此くの如し、其れ(ケ)鈍滯甚だしきを奈せん。今幸に(フ)私家の(コ)塵緣すべて畢んぬ、閑居して他事なし、政に痛く自ら鞭策して以て(エ)初志を償ふにあり、(テ)第、恨むらくは未だ親炙教誨を得ざるのみ。一生の敗闕已に一一(ア)呈似す、必ず能く此の心を洞照して、望む

ふ。

(レ)宗門の一大事なり。

(ソ)婦を入るるを婚といひ、君に仕ふるを官といふ、卽ち妻子、公務をいふ。

(ツ)己事を究明することに心力を勞するを工夫といふ。

(ネ)此より大綱中の發心の事を述ぶ。大志大願もて佛祖の深玄底を究明せんと欲するなり。淺淺知見とは意識上の分別をいふ、若し知見情解を逞うして玄妙を求めんとせば、此時憍慢心おこり、魔其便りを得、これ心志輕劣の致す所なり。俗なほ然り、況んや出家をや。

(ナ)此れ曾侍郎の自ら假設の言なり。

(ラ)大光明藏上七に云く、生死心絕するを悟といひ、絕後更に甦るを證といふ。

(ム)これは五百由旬の三德、祕密の至極の境を大休歇の地といふ。三百由旬の小歇場に簡ぶ、正心論に云く、「一切の煩惱結縛を放下する、之を小歇といひ、一切の佛法知見、利生の念を放下するを中歇といひ、亦此念をなさず、善事をも放下す、是を大歇といふなり」と。

(ウ)此段は大綱中の知識に參禮するの語を演出す。

(ヰ)圜悟心要に四段の法語を載す、然るに今六段と云ふは、蓋し二段の法語は逸書の中にあらん。

(ノ)圜悟心要上に曰く、嚴陽尊者、趙州に問ふ、一物不將來の時如何ん。州云く、放下着。尊者云く、一物不將來、未審の箇の什麼をか放下せん。州云く、你を看るに放不下なり。嚴陽途に大悟す云云。

(オ)僧、雲門に問ふ、一念を起さず、還つて過ありや、無や。

らくは委曲に(サ)提警せよ。日用如何が工夫を做すべき、庶幾はくは(キ)他塗に渉らず、徑に本地とあひ契はんことを。(ユ)此くの如きの説話、敗闕亦少からず、但だ誠を投ずるに方つて自ら(メ)隱逃し難し、良に愍むべし。(ミ)至扣。』

叙(シ)べ及すことを承はる、幼年より仕官に至りて諸大宗匠に參禮す。(ヱ)中間、科擧婚官の爲に役せられ、又(ヒ)惡覺惡習の爲に(モ)勝たれ、未だ純一に工夫をなすこと能はず、此を(セ)以て大罪となす。(ス)又能く無常世間種々の虚幻、一も樂しむべきこと無きを痛念して、心を專らにして(イ)此の一段の大事因縁を究めんと欲す、(ロ)甚だ病僧が意に愜へり。然(ハ)も既に士人となりては、祿を仰いで生をなす、科擧婚官は、世間の免るること能はざる所の者なり、亦公の罪に

門云く、須彌山、此れ又直截省要、世、無事にして心を慮うし慮を靜にして、且く鈍工夫を下し、只管擧して看よ、之を久しうして當に自ら入處あるべしと。

(ク)則は法則なり、卽ち佛祖の語を以て學者の法則となすなり。

(ヤ)退歩工夫を鈍工といふ、此れ曾侍郎の語に非ず、謂く、念を克して回光返照し、著實に工夫をなすなり。

(マ)宗師の接得の丁嚀なるを喩ふ。

(ケ)鈍根泥滯の謂なり。

(フ)公朝に對して自宅を私家といふ。

(コ)塵緣は妻子眷屬の類なり。

(エ)これ幼年發心の語、又中間因循の語に應ず。

(テ)此れは前を結び後を生ずるなり。

(ア)呈似の似は猶ほ向と言ふが如し、又は示の義とし、呈の字に訓ず。

(サ)ひきたて、氣をつけるなり。

(キ)言は願はくば、方便の他塗に渉らずして、直に本分の田地に到らんことをとなり。

(ユ)上を結ぶの語なり。

(メ)隱逃云云は、覆藏し難しと言ふが如し。

(ミ)禮記注疏に云く、「至扣は頓首なり」と。今此は至禱に同じ。

(シ)此書は善財の緣を引いて示す、師四十六歲の時、雲門庵に於て作る所なり。此書の大綱は業性の如幻なることを示すなり。そは曾侍郎が業性を認めて罪に非ざるを以て大罪となし、念頭において怖畏す、故に大慧之を看破して其如幻を示す。中に先づ第一段に問書を擧げて讃許す、之に三節あり。初に宗匠に參すること

あらざるなり。小罪を以て而も大怖懼を生ず、(ホ)般若の種智を熏習するの深きに非ずんば、焉んぞ能く此くの如くならん。而も(ヘ)公の所謂大罪は聖賢も亦免るると能はず、但だ虚幻にして究竟の法にあらざることを知らば、能く心を此れ箇の門中に回して、般若の智水を以て垢染の穢を滌除して清淨にして自居し、(ト)脚下より去つて一(チ)刀兩段して、更に相續心を起さずんば(リ)足りなん、必ずしも前を思ひ後を念はざれ。既に(ヌ)虚幻と曰ふときは(ル)作の時も亦幻、受の時も亦幻、知覺の時も亦幻、迷倒の時も亦幻、過去現在未來皆悉くこれ幻なり。今日非を知らは則ち幻藥を以て復た幻病を治するなり。病瘥え藥除けば依然として只是れ舊時の人、若し別に人にあり

(ニ)無始曠大劫來、眞の善知識に承事して、

を叙す。宗匠とは宗門の師匠なり、匠とは物を成すなり、器の工師なり。これ自他の功成を明らむ、若し行解周からずんば自他咸く失せん。

(ヱ)第二節、工夫の不純を叙す。科擧とは朝廷、才智を選び之を科擧するに射策對射の名あり、射策は覆題、對策は露題なり。

(ヒ)已下二段の文は來書に之れなしと雖も、大慧、酌んで第三段の張本となす、惡覺等とは邪惡の知覺及び舊習煩惱なり。

(モ)主宰と作ることを得ず、却つて惡覺の爲に障へらるを謂ふ、卽ち道力の業力に勝たざるをいふ。

(セ)世人は顯はれたる罪をも猶ほ罪と思はず、公は工夫熟せざるを以て大罪となす、實に希有なり。此意は世人に比して竊かに其志深を贊歎す。

(ス)第三節、心を大事に專らにするを叙す。

(イ)見性成佛二なし、故に一段といふ。大事因緣は、本と法華方便品に出づ、此れ佛知見に悟入するをいふ。

(ロ)此れは總じて前を結んで讃許す、病僧とは蓋し大慧偶病あり故に云ふ。舊云く、病僧老衰なり、又卑下の語と並に不可なり。

(ハ)然云は第二段、小罪を怖るるを贊歎す、然の字は大罪の嗣を奪ひ、轉じて他に循つて贊し、且つ勸進するなり。

(ニ)無始とは大論三十一に曰く、「世間若しくは法、若しくは衆生、始めあるをなし」と、佛敎にては一切の現象、總べて因緣和合して成じたる者にて、有情は生老病死の四相循環し、世界は成住壞空の四劫を繰り返へすといふ、故に出生

法あらば、則ち是れ㋾邪魔外道の見解なり。公深く之れを思ひて、但だ此くの如く崖め將ち去つて、時時に㋻靜勝の中に於て切に須彌山、放下著の兩則の語を忘了することを得ず。但だ脚下より著實に做し將ち去つて、已に過ぎたる者を怖畏することを須ひず、亦必ずしも思量せざれ、思量怖畏すれば卽ち道を障ふ。㋕但だ諸佛の前に於て㋵大誓願を發せよ、願くは此の心堅固にして永く退失せず、諸佛の加被に依つて㋟善知識に遇ひ、一言の下に頓に生死を亡じて㋹無上正等菩提を悟證し、佛の慧命を續いで以て諸㋞佛莫大の恩を報ぜんと。若し此くの如くならば則ち久久にして悟らざるの理あること無けん。見ずや㋡善財童子、文殊に從つて發心して、漸次に㋧南に行いて㋤一百一十城を過ぎて㋶五

の始なきが故に無始といふ。今は昔の大昔よりといふが如し。劫とは梵語の劫簸の略、此に大時分、或は分別時分と譯す、大時間を數ふるに用ふ。

㋭般若は梵語にして智慧と譯す、法界の事理を照らして能く一切の眞理に通達する聖智をいふ。種智も亦佛所有の聖智にして萬有の本體を悟了し、又萬有の差別を明かに知る智なり。大論に云く、「因には般若と名け、果には薩婆若と名く」と。薩婆若とは一切種智と譯す、卽ち如來の智なり。然らば今は因果並べ稱して般若種智といふも、其體は一なり。今は知識に參じて成佛の智慧を種ゑ込みしをいふ。

㋬第三段、正しく他の問に答へて罪性の虛幻を示す。

㋣卽今當念の謂ひなり。

㋠第二念を起さざるなり。

㋷足はもうそれでよいとなり、曾侍郎痛く業障を怖れて念頭に在る故に、其れをして多を求めざらしむるなり。

㋦業罪は霜露の如し、惠日能く消除す、卽ち此下は幻の事を譯す。

㋸作とは善惡の業を起作するなり。受とは苦樂の報を受くるなり。幻治幻愈の外に曾侍郎あらばとなり。

㋾魔は梵語の魔羅の略、此に能奪命、或は障礙等と譯す、正智の命を奪ひ、又は修道、修善の障碍をなすが故なり。之に四魔、十魔あり。今は物を認める妄念分別心をいふ。次に、心外に道を求むるを外道といふ。

㋻坐禪をいふ。

㋕第四段、此は願力堅固なれば悟らずと云ふこと無きことを叙し、宿習を滅するの用心を

十三の善知識に參ず。末後彌勒、㋰一彈指の頃に於て頓に前來諸善知識の所得の法門を亡ず。復た彌勒の敎に依りて文殊に奉覲せんことを思欲す。是に於て文殊、遙かに右の手を伸べて一百一十由旬を過ぎて善財の頂を按でて曰く、『善哉善哉善男子、㋒若し信根を離れて心劣にして憂悔し、功行具せずして精勤を退失し、一善根に於て心住着を生じ、少功德に於て便ち以て足れりとせば、善巧に行願を發起すること能はず。善知識の爲に攝護せられじ、乃至是くの如きの法性、是くの如きの理趣、是くの如きの法門、是くの如きの所行、是くの如きの境界を了知すること能はず。㋼若しくは周偏智、若しくは㋨種種智、㋔若しくは盡源底、若しくは解了、若しくは㋗趣入、若しくは解說、若しくは

示す。

㋵無上菩提を願求するが故に大誓願といふ。或は云く、「此願文は大慧の自作にあらず」と、大慧本錄等にも此を載せず、然るに此等の語意を觀るに、彼の發願文の意に能く合するより見れば大慧の自作ならん。

㋟善知識云云は下に善財の緣を引く張本なり。

㋹阿耨多羅三藐三菩提の譯なり、此れ佛陀の智德を稱する一名號なり、佛は絕對智者にして、これより勝れたる智なきが故に無上といひ、隨つて空、有に偏せず、一切の偏邪を離れたる平等の聖智にして、三世の諸佛同等なるが故に正等といひ、菩提は此に覺と譯す、卽ち本有の理及び萬有の一一を明かに了悟するが故に、正覺或は正偏智とも譯す。

㋞心地觀經に云く、「眞法を以て衆生に施し、三寶の種を續ぎ斷絕せざらしむ、是を佛恩を報ずと名く」と。

㋡第五段なり、善財の因緣を引くに二節あり、今は善財を稱贊す。善財は華嚴經入法界品に出づる菩薩の名、文殊菩薩の指南に依りて南方に五十三人の善知識を訪ひ、參問して入法界の益を得、一生に成佛せし菩薩にして、童子と稱するは、己が憶解を立せず、專ら師敎に隨ふを表はす。

㋧南は明なり、智慧なり、北は暗なり、無明なり、是れ文殊の敎に依つて南に行く所以なり。

㋤一百一十城の事、華嚴疏鈔七十八、合論九十一、法華文句記四ノ一等に出づ、謂く、住、行、向、地の四十位に各因果あれば八十なり、妙覺を分つて十となし、之に因果あれば

(ヤ)分別、若しくは(マ)證知、若しくは獲得、皆悉く(ケ)能はじ。』(フ)文殊、是くの如く善財に宣示す、善財、言下に於て(コ)阿僧祇の法門を成就し、無量の(エ)大智光明を具足して(テ)普賢門に入り、一念中に於て悉く(ア)三千大千世界微塵數の諸善知識に見えて、悉くみな親近し、恭敬承事し、其の敎を受行し、(サ)不忘念智、莊嚴藏解脫を得

二十なり、合して一百。此の五位は並びに根本の三世諸佛法界體中の十波羅密を離れざれば一百十となる。

(ラ)五十三人の善知識の中に、比丘あり、醫師、女人、仙人、婆羅門、外道等あるも、皆是れ善知識の應現と知るべし。

(ム)一たび指を彈く時間をいふ、而し今此の彈指は驚覺の義なり、前に得る所の法門は子細に看來れば電の拂ふが如し、故に驚覺して三昧に滯らざらしむるなり。又は去塵の義、謂く說法言句の塵を去らしむるをいふ。要するに同義なり。

(ウ)此は善財は信根等を有する故に、能く法性を了することを反顯するなり。若し善財に信根なければ、文殊を見る能はず、隨つて百十城を透過する能はざるなり。

(ヰ)周徧智とは根本智、如理智なり、諸法の本體を照し、一切法を實の如くに了悟する智なり。

(ノ)此は如量智、後得智なり、種種無量の差別の境に通達する智なり。

(オ)竪に約して、法の深理を究め盡すを謂ふ。解了は橫に法界の諸法解知するをいふ。

(ク)趣入は自己が果海に入るをいふ、解說は他を敎化するをいふ。

(ヤ)化他を取る、即ち差別を識別するをいふ。

(マ)證知は體に就き、獲得は用に約す。華嚴疏鈔三十三上に十句を列ぬ。

(ケ)能はじと、善財は之に反す。

(フ)第二節、得益を論ず。

(コ)阿僧祇は梵語、阿僧祇耶の略なり、此に無數と譯す、人間の數へ知る能はざる大數をいふ、今は極數の菩薩が無數の長時を經て修成する無量の法門、功德を一時に頓に成就するをいふ。

(エ)大智は文殊にして如理智なり。

(テ)普賢菩薩は法界の理をつかさどる故に、今は法界に悟入するをいふ。

(ア)須彌山を中軸としたる世界、即ち須彌山世界を一千箇集めたるを小千世界といひ、此の小千世界を一千箇集めたるを中千世界といひ、更に此の中千世界を一千箇集めたるを大千世界といひ、此の小、中、大を合して一大三千大千世界といふ、この三千大千世界を一佛化敎の範圍とす。今は此の大千世界を碎いて微塵にした程の無量無數の善知識に一念中に見ゆとなり。一念とは短促の時間をいふ。これ法界の一切諸法は互に一と多と卽

たり。以至(キ)普賢の毛孔刹に入つて一毛孔に於て一步を行き、不可說不可(ユ)說佛刹微塵數の世界を過ぐ。(メ)普賢と等しく諸佛と等しく、刹と等しく行と等しく、及び解脫自在悉く皆同等にして無二無別なり。(ミ)恁麼の時に當つて始て能く(シ)三毒を回して(ヱ)三聚淨戒となし、(ヒ)六識を回して(モ)六神通と爲し、(セ)煩惱を回して菩提となし

入し、時間も亦一念と萬年と融卽するが故に、若し一度差別の見を離るれば之をなす易易たるのみ。

(サ)彌勒樓閣中にて得るなり、華嚴經四、施主妙嚴品に云云。

(キ)八十華嚴三十一、十回向品。また阿僧祇品、華嚴懸談一などに出づ。

(ユ)不可說とは、一十百千等の數の名目なり、小乘にては俱舍第十二に六十の數を立つ、大乘は華嚴經阿僧祇品に百二十四の數を立つ、其中の第百二十三番目の數の名なり。三藏法數四十三に華嚴を引けり。

(メ)善財の所行は普賢の行法と等しと云云となり。

(ミ)諸佛と同等の時を謂ふ。

(シ)貪欲、瞋恚、愚痴の三は一切の不善行の本となるもの、而して此三は吾人の善心、正智を障害すること、世間の毒の物を害するが如し。故に喩へて三毒といふ。

(ヱ)三聚淨戒の聚は多法を積聚するをいひ、淨とは過失を離るるをいひ、戒は非を防ぎ惡を止むるをいふ。一に攝律儀戒、これは止惡門にして、一切の諸惡を斷捨すべき誓約なり、戒律多しと雖も此の一戒中に攝束して遺すことなし、故に攝律儀といふ。二に攝善法戒、之は修善門にして、一切の善法は悉く實行すとの誓約なり、善法多しと雖も此一戒に攝束して漏らすことなし。三に攝衆生戒、これは度生門にして、一切の衆生を悉く荷負して利益を施さんとの誓約なり。今は三毒の汚を回轉し離れて、三聚の善を行じ、やがて智、斷、恩の三德と顯はるるをいふ。

(ヒ)六識とは眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識なり。識とは對境を了知する心をいふ、即ち眼識は青黃等の色を識別する等の如し。

(モ)六神通とは妙用測り難し、故に神といひ、作用塞ることなきを通といふ。一に天眼通とは被障細遠の物を明かに見、進んでは六道の生類が此に死し彼に生るる苦樂の相を見ること自在なるをいひ、二に天耳通とは細遠の言語音聲等を聞くこと自由なるをいひ、三に他心通、これは衆生の心中に思ふ所を知るに自在なるをいひ、四に宿命通とは自身及び他身の過去世に於ける生及び所作の事業を知ること自在なるをいひ、五に身如意通とは、身よく鳥の如くに飛行し及び其他の動作、意の如くなるをいひ、六に漏盡通とは、よく煩惱を滅盡して三界生死

㋜無明を回して大智となす。如上の遮の㋑一絡索、只だ當人末後の一念眞實なるに在るのみ。㋺善財、彌勒彈指の間に於て尙ほ能く頓に諸善知識所證の三昧を亡ず、況んや無始の虛僞惡業習氣をや。若し前の所作底の罪を以て實となさば、則ち現今目前の境界みな實有とならん。乃至官職、富貴、恩愛、悉く皆是れ實ならん。既に是れ實ならば則ち地獄天堂も亦實、煩惱無明も亦實、作業の者も亦實、受報の者も亦實、所證底の法門も亦實ならん。若し遮般の見解を作さば則ち盡未來際、更に人の㋩佛乘に趣くこと有ること無けん。三世の諸佛諸代の祖師、種種の㋥方便、翻つて妄語とならん。㋭承はる、公、書を發する時、㋬香を焚いて諸聖に對し、及び遙かに㋣庵中を禮して而して後に遣すと。

の苦惱を離るるをいふ。此の六通は佛陀は無論、阿羅漢の得る所の通力なり、今は吾人の不完全なる六識を轉換して六神通となすとなり。

㋝煩惱とは煩擾惱亂などとつづけて、即ち貪、瞋、痴等を始めとして、百八、若しくは八萬四千の煩惱ありとす、此等は吾人の曲つた汚れた心づかひにして、吾人の心身をかき亂し、惱ます作用を有する故に煩惱と名く。菩提とは覺と譯す、即ち大覺の智慧なり。然らば煩惱と菩提とは其作用を見れば、明暗の不同、染淨の差別ある樣なれば凡人は之を正反對のものの如く思へども、水と波と其體一なるが如くに、煩惱と菩提とは其體は一にして平等一如なり、故に吾人の心得をなほせば煩惱の其のままが菩提となる故にいふ。

㋜無明とは明は智の用にして、明照なしとの意にて、愚痴の煩惱なり、即ち人人本具の佛性及び一切法に於ける眞理を實の如く知る能はざるもの、而し前に煩惱とある故に、今これは一切煩惱の根本たる極微細の無明煩惱を指す。此無明を轉じて絕對眞理を照らす根本智となすとなり。

㋑一絡索とは猶ほ一段といふが如し。

㋺諸善知識の所に於て證得する所の三昧との意なり、此の文意は三昧を得て認むる法執すら、尙ほ能く頓に亡ず、況んや爲相の虛僞なる惡業惡覺等豈に頓に泯亡せざらんやとなり。三昧とは三摩地と同じ、定、等持、寂靜などと譯す、心を一所に住せしめて、邪僻、散亂を離るるをいふ。或は理智契合して平等一如の境をいふ。虛僞とは實體なきを表はす、習氣とは煩惱の異稱なり。

㋩之は罪業及び一切の法は如幻にして無實なることを結示す。若し一切法實ならば迷は常に迷、苦は恒に苦、樂は永久に樂、地獄は永く地獄、凡人愚者は常に凡愚にして遂に賢者、佛陀となることなけん。佛乘とは、乘は運載の用あるをいふ、佛陀の敎を喩へて乘といふ、即ち佛所說の大乘眞實の敎法は、能く衆生を乘せて迷界を出離して悟りの都に到り、佛果を成就せしむる故に佛乘といふ。併し今は佛果の位を佛乘と見よ。

㋥方便とは方法、便宜なり、名醫が病に應じて藥を授くるが如く、佛祖は權智を以て人智の淺深に應じて、種々の敎法を說いて敎化して妙理を悟らしむるを方便といふ、故に佛祖の方便言敎は凡を轉じて聖となし、迷を轉じて悟とし、苦を轉じて樂となすにあり、然るに人の悟りて佛果に趣くこと無しとすれば、佛祖の敎は皆妄語となるならんと反顯するなり。

㋭第七段、問書答書の誠實なることを解す。

㋬香の芳薰は能く穢を去り、人心を清淨にし、信念を發起せしむ、佛前に燒き、一は佛に供し、一は心を淨む。

公の誠心至切なること此くの如し、相去ること甚だ遠からずと雖も、未だ面言することを得ず、意に信せ手に信せて覺えず㋠忉怛すること如許ぞ。㋷繁絮たるが若くなりと雖も亦誠至の心より出づ。敢て一言一字を以て相欺かず、公を欺くは則ち是れ自ら欺くのみ。㋦又記得す、善財、㋸最寂靜婆羅門に見えて誠語解脫を得、過去現在未來の諸佛菩薩は、阿耨菩提に於て㋾已退なく現退なく當退なし。凡そ求むる所あれば成滿せずといふことなし、皆誠至の及ぼす所に由れり。㋻公、既に竹椅㋕蒲團と侶をなす、善財の最寂靜婆羅門に見えしに異ならず。又㋵雲門に發する書は諸聖に對し、遙かに禮して而して後に遣はす、只だ雲門が信許せんことを要す。此れ誠至の劇だしきなり、但だ相聽す㋟只だ㋹

㋣洋嶼の雲門庵なり。

㋠忉怛は字書に今に合する義なし、蓋し俗語ならん、今玆にては事をなすの煩雜なるをいふ、類書纂要十一に忉怛は言語甚だ多なりといへり、今の意に合ふ、忉は叨に作る可なり。

㋷繁絮は文章の長きをいふ。

此くの如く工夫を做せば、將來阿耨菩提に於て成滿すること疑なけん。

（ソ）又

（ツ）公、身を富貴に處して而も富貴のために（ネ）折困せられず、夙に般若種智を植うるにあらずんば焉んぞ能く是くの如くならん。（ナ）但だ恐らくは中ごろ此の意を忘じて、（ラ）利根聰明のために障へられ、（ム）有所得の心を以て前

（ヌ）第八段、最寂靜を引いて侍郎の誠語を證す。
（ル）五十三の善知識中第四十九の知識なり。
（ヲ）已退とは過去に退失せしことなしとなり。現退は現在をいひ、當退は當來にも退墮するなきをいふ。
（ワ）これは最寂靜の事緣を結して、侍郎の身の上に歸す。
（カ）蒲團とはあんぺらの類なり。
（ヨ）之は曾侍郎が大惠に對して書を發せしなり。雲門は洋嶼の雲門庵なり、雲門に三あり、一は海昏の雲門、二は洋嶼の雲門、三は小溪の雲門なり。洋嶼は五泉州の新江縣にありと。
（タ）聽は許なり、大惠が曾侍郎は菩提を成滿すること疑なしと相許すなり。
（レ）此の如くとは、上來一編の說法を指す。
（ソ）此書も曾侍郎に答ふなり、一書の大意は、知解は障となりて、休歇の地に到るを得ざることを叙す。
（ツ）第一段、歎許す。
（ネ）折困とは、五欲の順境界に沒頭せば、自由を得ざるの謂なり。
（ナ）第二段、知解は障となることを責む。中とは宿世と今世との中間なり。
（ラ）曾侍郎の病を擧げて之を責む。
（ム）證悟を求むるの心を以て法を摸索し、一物を認得するを有所得といふ、若し所得あらば、正知見現在せざるなり。
（ウ）頓放は物をほりだすを謂ふ、百丈彖に曰く、一切の物色頓放すと。
（ヰ）これは須彌山、放下着の則を指す、曾侍郎本參の話なるが故に。
（ノ）性命截斷するの端的をいふ、直下はそのままの義なり。
（オ）此の病とは知解を指す、此は第三段、知解、障となることを叙す。
（ク）衲子は禪僧の異稱、衲僧、野衲等といふ、これ衲衣を着るが故なり。衲或は納に作る、衲は補綴なり、即ち布片を縫ひ綴りて作りし袈裟をいふ。
（ヤ）省力とは勞力を省除するの謂にて、省悟の省にあらずと。凡そ修行の人に半熟、已熟、未熟あり、未熟の者は文字言句を蓄ふが故に劣力なし、然るに心を寄せて湛々に工夫せば漸く省力を得、即ち知解を離れ、分別の及ばざる處を省力の處といふ。
（マ）本分とは當人の受用すべき者をいふ、草とは禾草、料とは祿料なり、即ち豆麥等是れ也、これ馬を餧ふ物料なり、此義より轉じて、衲僧が師家より

に在いて（ウ）頓放することを。故に（ヰ）古人の直（ノ）截徑要の處に於て一刀兩段して直下に休歇すること能はず。（オ）此の病獨り賢士大夫のみにあらず、久參の（ク）衲子も亦然り。多くは肯て歩を退き（ヤ）省力の處に就いて工夫を做さず、只だ聰明意識、計較思量を以て外に向つて馳求す。乍ち知識の聰明意識、思量計較の外に向つて示すに、（マ）本分

與へらるる棒喝言句を本分草料といふ。
（ケ）當面は我が面前に當つての謂ひなり。
（フ）妄りに計しておもへりの意。
（コ）便ち是れ本分の草料なり、知解の輩は示すに、本分の草料を以てするを聞いて直下に喫する能はずして、法の傳授すべきありと謂へりとなり。
（エ）第四段、古語を引いて知解を泯すべきを證す。物とは對象をいふ、却とは達摩のいはゆる外諸緣を息め、内心、喘ぐことなき類の工夫なり、已熟の人は能く所緣の境も空と覺する故に、物を逐はず、緣境中に坐して而も常に緣境を却く。
（テ）大統は先、都てといふ義なり、綱宗は綱要宗旨にて肝要の謂なり。句を識云云は、碧岩の評に云く、「未透底の人は句に參ずるより、意に參ずるに如かず、透得底の人は意に參ずるより句に參ずるに如かず」と、意は縱ひ證悟の分あるも句を識らざるべからずとなり。岩頭の八字の語は百不思を引かんが爲なり、これ侍郎の利根の病を治するを以ての故に。
（ア）居頂とは大般若五百八十、布施波羅蜜多品に出づ、得住とは楞伽の自得本住法これなり。
（サ）歷々は分明の義なり、惺は亂想を破す、即ちうつかりとせぬをいふ。
（キ）此等は已熟の人の物を却くる樣子なり。
（ユ）恁麼は指示の詞にて「そんな、こんな」等の意あり、恁麼地に住着せば便ち不恁麼なり。
（メ）これ便ち外諸緣を息め、内心喘ぐことなき樣子なり。
（ミ）智論十一に曰く、「喩へば火焰の如し觸るべからず、手を燒くを以ての故に、般若の相も亦此の如く觸るべからず、火を以て邪見を燒くが故に」と。覊着とは般若を黏着するをいふ。
（シ）此れ義理や知解の通ずる處にあらず、若し向傍すべき處は般若にあらず、全身、火焰中に飛入りて初めて得べし。
（ヱ）第五段、聰明智慧、障をなす人を引いて證す。
（ヒ）舟云は淮南子十三に出づ、今は修行の人、種種の見解を起して邪道に墮するを喩ふ。外道二乘は自ら落處を作りて落つ、今は空に落ちんことを怕るるが故に、未だ空に落ちざる已前に早く知解に墮す、空と知解と異なりと雖も、其過失は相同じ。
（モ）第二節、引證、江西は古の楊州の地。

の草料を以てするを聞いて、多くは是れ(ケ)當面に蹉過して、將に(フ)謂へり從上の古德實法の人に與ふる有りと、(コ)趙州の放下着、雲門の須彌山の類の如き是れなり。(エ)巖頭の曰く、「物を却くるを上となす、物を逐ふを下となす。」又曰く、(テ)「大統の綱宗は句を識らんことを要須す。」と、甚麼かこれ句、百不思の時、喚んで正句となす、亦は(ア)居頂といひ、亦は得住といひ、亦は(サ)歷歷といひ、亦は惺惺といひ、亦は恁麼の時といふ。恁麼の時を將て等しく(キ)一切の是非を破す、纔かに(ユ)恁麼なれば便ち恁麼にあらず、是句も(メ)亦剗り非句も亦剗る。(ミ)一團の火の如くに相似たり、觸著すれば便ち燒く、甚麼の(シ)向傍の處かあらん。今(ヱ)時の士大夫、多く思量計較を以て窟宅と爲し、恁麼說話を聞いて便ち道ふ、

(セ)呂は姓、名は本中、字は居仁、道を妙喜に問ふ、官は翰林に至る。

(ス)此病とは空に落ちんことを怕るる病なり、侍郎に託して言ふ。

(イ)渠とは居仁を指す、佇思とは思惟し默するなり。

(ロ)計較安排を喝破するなり、これ大慧の氣風なり。

(ハ)茫然は長水疏に曰く、「冥昧にして明ならざるなり」と、之れ仁居なり。巴鼻とは明の獨立云く、「唐人の俗談なり、巴とは鼻端の把るべきに依つて言ふ」と、碧岩古鈔に云く、「巴鼻とは來由の謂なり、又取得の謂なり」と。

(ニ)第三節、上を結んで、勸策す。

(ホ)知解を泯絕して百不思の如く工夫をなさしむ。

(ヘ)これ源に逢ひし境界なり。

(ト)第六段、有所得を破す、中に今は正しく破す。

(チ)久遠の義を謂ふ、彌勒下生經云云す。

(リ)次に古語を引いて證す。傳燈九に傳あり。

(ヌ)般若の靈光は神妙にして量り難きを神光といふ、其靈光は凡夫に在りても聖者にありても昭昭として明なれば不昧といふ。今此には「知解を存すること莫れ」の一句肝要なり。

(ル)第七段、古德の語を引いて知解葛藤を斷ず、之に三節あり、初に知解を遣る。古德とは保寧勇禪師を指す、保寧錄上堂云云。

(ヲ)第二節、大慧、上の語を許す、一等とは之に過ぐるなきをいふ。

(ワ)泥は物を汚すの義をとる、今は人に接するに方便言句を以てするをいふ。卽ち本分向上に坐せず濁に下るなり。

空に落つること莫しや否やと。喩へば(ヒ)舟未だ翻らざるに先づ自ら水跳り下り去るに似たり、此れ深く憐愍すべし。近(モ)ろ江西に至つて(セ)呂居仁を見る、居仁、心を此の段の因緣に留むること甚だ久しけれども、亦深く(ス)此の病あり、渠豈に是れ聰明ならざらんや。某嘗て之れに問うて曰く、「公、空に落ちんことを怕る、能く怕るることを知る者是れ空か、是れ不空か、試に道へ看ん。」(イ)渠佇思して計較祇對せんと欲す。當時便ち(ロ)一喝を與ふ、今に至るまで(ハ)茫然として巴鼻を討ね著ず。(ニ)此れ蓋し悟證を求むる心を以て前に在つて頓放して自ら障難を作す、別事に干るにあらず。公、試に(ホ)此くの如く工夫を做せ、日久しく月深けて自然に(ヘ)築著磕著せん。(ト)若し心を將ちて悟を待ち、心を將つて

(カ)念過とは暗記の謂なり、意は此の語を暗記するのみにて子細に看ずとなり。鷓鴣、煎茶と叫ぶ、茶を與ふれども、もと知らざるの類なり。

(ヨ)第三節、前を結んで後を生ず。

(タ)一截云云は上の一刀兩斷の語に應ず。四路とは有心、無心言語、寂默を指す。葛藤とは文字言句をいふ。

(レ)淨裸々はあかはだかなり、倮は裸に通ず。

(ソ)擦り取るべきもの無きをいふ。

(ツ)第八段、古人の因緣を引いて、此事は知解の及ばざることを證す。聯燈十、傳燈十二などに傳あり。

(ネ)竹椅の類。

(ナ)驀胷云云は「向ふさまに、むなぐらをとらへて」といふ義なり。

(ラ)領領は合點した合點したとの意なり。

(ム)推出は、聯燈に托開に作る。

(ウ)膀榜は、有云く、膀は辻札の類なり、言句に渉らざるをいふ。

(ヰ)心を留めざるをいふ。

(ノ)忘念飜動の散亂心をいふ。

(オ)手脚を縛却すとは、驀胷に擒住の語に應ず、意は灑淡は計較分別なきが故に擒住せられて悟る、若し悟を待ち證を待たば分別計較に渉るなり。

(ク)一遭は一周の義なり。

(ヤ)第九段、知解のために名を安するなり、名とは識情をいふ。

(マ)安排とは安處排列の謂にて、次第に並べ置くをいふ。

(ケ)生死云云は科擧婚官に系る、曾侍郎之を苦となすが故に。

(フ)之は上の計較安排を破す、因に從前の罪業を恐るるを破す。

(コ)裏許は識情、知解を指す。

休歇を待たんと欲せば、脚下より參じて(チ)彌勒下生に到るも亦得悟すること能はず、亦休歇することを得ること能はず、轉た迷悶を加へんのみ。(リ)平田和尚曰く、(ヌ)「神光昧まず、萬古の徽猷、此の門に入り來つて知解を存すること莫れ。」又(ル)古德の曰く、「此の事は有心を求むべからず、無心を以て得べからず、語言を以て造るべからず、寂默を以て通ずべからず。」(ヲ)此れは是れ第一等、(ワ)泥に入り水に入る老婆の說話なり。往往に參禪の人只だ恁麽に(カ)念過して、殊に子細に是れ甚の道理と看ず。(ヨ)若し是れ箇の筋骨ある底、聊か擧著するを聞いて、直下に金剛王寶劍を將つて、(タ)一截に此の四路の葛藤を截斷するときは、則ち生死の路頭も亦斷え、凡聖の路頭も亦斷え、計較思量も亦斷え、得失是非も亦斷ゆ。當人脚跟下、(レ)淨裸裸赤灑灑として(ソ)沒可把ならん。豈快ならざらんや、豈暢ならざらんや。見ずや、(ツ)昔日灌谿和尚、初め臨濟に參ず、濟來るを見て便ち(ネ)繩床を下つて(ナ)驀胷に擒住す。灌谿便ち云く、(ラ)「領領。」濟、その已に徹することを知つて卽便ち(ム)推出して更に言句の之れが與に商量する無し。恁麽の時に當つて、灌谿、如何が思量計較し祇對し得ん。古來幸に此くの如き(ウ)

(エ)維摩經法供養品に云く、「悟に依つて義に依らず、理に依つて人に依らず、法に依つて識に依らず云云」と。南本涅槃經六にも出づ。今は之に反す故に昧却と云ふ。
(テ)本地の風光は現象界に就ていひ、本來の面目は人に就ていふ、其義は同じ。法のありの儘の處をいふ、妄念分別を離れたる正智の照す所をいふ。
(ア)第十段、識を轉じて智と成すをいふ。
(サ)鼻孔は文字は鼻の穴なり、自分の眼にて自分に見易からず、故に禪語に本分の事に比す、佛果禪師曰く、「始めて知る鼻孔もと面上にあることを」の類なり。
(キ)子細に看來れば識情に識情てふ體なし、識情の全體卽ち眞空にして妙智なり。
(ユ)東を眞智に喩へ、西を識情に

榜樣あり、如今の人總て將つて(ヰ)事とせざること、只だ(ノ)麁心なるが爲なり。灌谿、當初若し一點も悟を待ち證を待ち、休歇を待つ底の心あつて、前に在る時は、道ふこと莫れ擒住せられて便ち悟ると。便ち是れ(オ)手脚を縛却して四天下を遶り、拕いて(ク)一遭すれども也た得悟すること能はず、也た休歇を得ること能はじ。(ヤ)尋常、計較安(マ)排する底是れ識情、(ケ)生死に隨つて遷流する底も亦是れ識情、(フ)怕怖憧惶する底も亦識情、而今參學の人、是れ病なりと知らず、只管(コ)裏許に在つて頭出頭沒す。(エ)敎中にいはゆる識に隨つて行じて智に隨はずと、故を以て(テ)本地の風光本來の面目を味却す。(ア)若し或は一時に放得下して百思量計較せず、忽然として失脚し、(サ)鼻孔を蹋著せば卽ち此の識(キ)情、便ちこれ眞空の妙智なり、更に別智の得べきなし。若し別に所得あり、別に所證あらば則ち又却つて不是なり。人の迷ふとき(ユ)東を指して西となすが如し、悟時に至るに及んで西に卽して便ち是れ東、別に東あることなし。此(メ)の眞空の妙智は、太虛空と壽を齊しうす。只だこの太虛空の中、還つて一物の(ミ)他を礙得すること有りや否や。一物の礙ふることを受けずと雖も、而も諸物の空中に於て往來するこ

喩ふ。
(メ)第十一段、妙智の生死を碍へざることを示す。理事不二、情智一如の故に相障碍せざるなり。
(ミ)他とは空なり。
(シ)生死の全體卽眞空、眞空卽生死なり、故に善を作りて天に生じ、惡を作りて地獄に墮して苦を受く、是れ眞空の妙用にして別に眞空の求むべきなく、生死の認むべきなし。喩へば金を以て偶人を作るに、鬼を作れば醜、西施を作れば姸、而も金體は異ならざるが如し。
(ヱ)第十二段、信心を勸むる也。
(ヒ)聖人は業縛を被らざるが故に自在なり。
(モ)雲門、趙州の兩則の公案を以て相交へて語をなす、巧妙なり。一座とは一箇といふに同じ。

とを妨げず、此の眞空の妙智も亦然り。生死凡聖の垢染、一點を著くること得ず、著不得なりと雖も、而も㋛生死凡聖の中に於て往來することを礙へず。㋹此くの如く信得及し、見得徹せば方に是れ箇の出生入死に㋪大自在を得る底の漢にして、始めて趙州の放下著、雲門の須彌山と少分の相應あらん。若し㋲信不及、放不下ならば却つて請ふ、一座の須彌山を擔取して到る處に行脚し、㋝明眼の人に遇はば分明に㋜擧似せよ。一笑。

又

老龐㋑云く、「但だ願くは㋺諸の所有を空せよ、切に諸の所無を實とすること勿れ」と。只だ遮の兩句を了得せば、一生參學の事畢らん。㋩今時、一㋥種剃頭の外道あつて、自眼明かなら

㋝明眼に好き眼を有する人なり、下に一笑といふ故に上を弄語となす。卽ち戲謔して須彌山を擔取せよといふなり。或は明眼を法眼分明の人となすも可ならん。一笑は大惠と曾侍郎に系る。

㋜擧似は拈起をいふ。

㋑此書の大意は、大惠、曾侍郎が邪師の爲に誤まらるるを知りて之を破し、邪師に隨はざらしむるなり、その中、第一段に邪師を破せんとして先づ正意を評取す。

㋺意は有を空ずれば無に墮し、無を拂へば有に着す、故に喩へば兩方の扉扇(とびら)を開いて後、主人公を出すが如くす、片扉を開けば他の片扉、碍をなす故なり。

㋩第二段、邪解を列す、四節ある中、初に邪師の解。

㋥血脈論に云く、「若し自心是れ佛と見ば、剃除鬚髮のみにあらず、白衣亦是れ佛、若し性を見ざれば剃除鬚髮するも亦是れ外道なり」と。止觀輔行十に三種の外道を明す。

㋭山海經四に云く、「北號山に獸あり、狼の如くにして赤眉鼠目なり、獦狚と名く」と。或は獦狚は恐懼の貌。有云く、此獸詐死して人を欺き、近づけば則ち人を食ふ。故に今此には偸心の死せざるに喩ふ。

㋬第二節、又一師の邪解を擧ぐ。緣とは對境をいふ、卽ち六識を六境に留め、管領住帶せしめて妄情を亡ぜしむ、而して識情の蠢動暫く伏する故に、妄計して情を亡ずと謂へり、其實は皆是れ識情なり。

㋣失とは其意味を誤まるをいふ。臨濟和尙の曰く、眼にあつては見といひ云云、又曰く、分れて六和合となる等、此等

ずして、只管人をして死㋭獦狚地に休し去り歇し去らしむ。若し此くの如く休歇せば、千佛の出世に到るとも、也た休歇することを得ず、轉た心頭を迷悶せしめんのみ。又㋬人をして緣に隨つて管帶し、情を忘じて默照せしむ。照し來り照し去り、帶び來り帶び去つて轉た迷悶を加へて了期あること無けん。殊に祖師の方㋣便を失して錯つて人に指示して、人をして一向に虛生浪死せしめ、㋠更に人をして是の事、管すること莫らしめん。但只恁麼に歇し去り歇し得し來るときは情念生ぜず。恁麼の時に到つて、是れ㋷冥然として無知なるにあらず、直に是れ惺惺歷歷たりと。㋦遮般底更に是れ毒害、人の眼を瞎却す。㋸是れ小事にあらず、㋾雲門、尋常此の輩を見て把つて㋻人と做して看待せず、彼れ既に自

は皆用を示して其體を知らしめんと欲するなり、然るに若し之を認めば誤りの甚しきなり。

㋠第三節、又一師の邪解、蓋し册子上の語ならん。或は念念馳求の心を歇得すといふの類を引いて、邪師、人に敎へて言ふ、「既に册子上に此の如くいふ、迷と悟に管すること勿れ」と。

㋷無念無知の處に坐在す、これ識の邊際を認めて是となすなり。迦毘羅外道、八萬劫已前を知る能はず、其知らざる處を以て冥諦となす、之を冥然無知といふ。止觀輔行十云云。

㋦遮般底、以上は邪解なり、以下は大惠の破なり、心地に近きが故に更にといふ、更の字力あり、これ眞理に似たるが故に、正理を誤ること甚だしきをいふ。

㋸人を邪道に導き、妙悟を捨てて識情に帶ばしむるが故に小事にあらず。

㋾第四節、總じて上の邪師を破す。

㋻俗に所謂犬畜生の類なり。佛法を以て人情に當つべからざるをいふ。

㋕册子の語を手本となしてとの意。十八史略六に陶穀、太祖に對へて曰く、「樣に依つて胡蘆を書す」と。今の文意は、佛祖に言語なし、若し言語あらば則ち人をして成佛せしめざるなし、明眼得意の人は、佛祖深源底を見徹する故に、能く其意を得て其言を取らず、修道の人は宜しく其意を得て邪正を辨ずべきを訓ふ。

㋵道は知を離れ解を絕するをいふ。

㋟第三段、自下正しく大惠の正意を示す。

眼明かならずして、只管冊子上の語を將つて、㋕様に依つて人を敎ふ、㋵遮箇作麼生か敎へ得ん。若し遮般底を信著せば、永劫にも參ずることを得ず。㋟雲門、尋常是れ人をして坐禪し靜處に向つて工夫を做さしめずんばあらず。此は是れ㋹病に應じて藥を與ふ、實に恁麼に人に指示する處なり。見ずや黃檗和尙の云く、「我が此の㋞禪宗、㋡從上相承してより以來、曾て人をして㋧知を求め解を求めしめず、只だ云ふ㋤學道は早く是れ接引の詞なり、然も道亦學ぶべからず、情に學道を存するときは、却つて迷道となる。㋶道は方所なきを大乘心と名く、此の心は內外中間にあらず、實に方所なし。第一に知解を作すことを得ず、只だ是れ汝而今㋰情量の處を說いて道となす、情量若し盡くるときは

㋹應病等、元來に法に定法なし、只だ見法の要を示す。

㋞禪宗の宗名に就て云く、道宣、續高僧傳を編して十科を立つる中の習禪科に、達磨等を收むるは甚だ不可、故に林間錄上に之を破せり、又佛心宗とも稱すべからず、故に道元之を破せり。別に定まりたる名なし、或は靈山宗、祇園宗、佛眼宗等と稱するも可なり、何ぞ只だ佛心宗と云はん、禪宗と云ふも他家より稱するのみ、故に傳心法要に云く「禪宗と言ふは世間に隨順するの辭なり、總て宗旨を分つは末世の弊風なり」と。

㋡從上とは拈華微笑よりの以來なり。

㋧根本を以て末を求め、心を以て心を求むる故なり。

㋤學道と云ふ、早く是れ過失を生ずる故なり。蠅の熱鐵の上を渡るに全體熱鐵なるが如し、二なく別なし、二物對立して能所を分つが故に了期なし。

㋶方所あらば學ぶべし、求學を放下して返照する處に聖人あり、此の如く言ふときは或は今時、書を捨てて空しく光陰を送る人多し、此等の人を可憐愍者と名く。

㋰情量の處を、一本に「情量盡る處」に作る、即ち識の邊際を認めて是となし、以て情量盡くる處となす、此に於て八識田中に一刀を下して少分の相應あらん。

㋒此は說法に實なきを明す。天然眞實にして本來具足す、故に天眞といふ、虛空の頑鈍なるが如くにあらず。

㋼一向に說かざれば、法堂前草深きこと一丈ならん、故に强ひて說くのみ。凡そ放宗の徒

心に方所なし、此の㋒道天眞にして本名字なし、只だ世人識らず迷ふて情中にあるが爲に、所以に諸㋼佛出で來つて此の事を說破す。儞が了せざるを恐れて權に道の名を立つ、名を守つて解を生ずべからず。」㋨前來所說の㋔瞎眼漢、錯つて人に指示す、皆是れ㋗魚目を認めて明珠となし、名を守つて解を生ずる者なり、人をして㋳管帶せしむ。㋮此は是れ目前の鑑覺を守つて、而して解を生ずる者なり、人をして硬く休し去り歇し去らしむ。此は是れ忘懷空寂を守つて、而して解を生ずる者なり、歇して無覺無知に到つて土木瓦石の如くに相似たり、恁麼の時に當つて、是れ冥然として無知にあらず、又是れ錯りて方便解縛の語を認めて、而して解を生ずる者、人に敎へ縁㋘に隨ひ照顧して惡覺現前せしむるこ

の名相を執するは尙ほ可なり、今の我が禪門の徒、經意、儒書を穿鑿して空しく一生を過す者多し、實に可憐生となす。

㋨第四段、上の邪解を判ず、初に總じて判ず。

㋔瞎眼漢とはめくらと云ふこと、漢とは、今人を罵るに用ふ、痴漢、風顚漢等といふの類なり、(或は敬語に用ふることもあり、老漢といふが如し)、蓋し晉の末に胡、中原を亂すとき、胡人、中國人を罵りて漢といふ、之より始まると、事物紀原十。

㋗魚目は方便に比し、明珠は眞實道に比す、實道は言句に涉らざるなり。

㋳舊鈔一に云く、管は思量なり、帶は腰帶、喩へば帶の腰を絡むが如く離れざるの義、思量して捨てざるをいふ。

㋮第二節、大惠の批判、此れ情識の邊際なり、瞎漢、妄計して以て胸中に事を記せざる、これ即ち岩頭の所謂百不思の境界なりとなす。

㋘萬境に應ずる每に、自己を照顧せよとなり、緣とは所緣の境をいふ。

㋫蟲念暫く止みて、死漢に似たるを髑髏情識といふ。故に下の王敎授に答ふる書に云云。

㋙此は唯だ疑はざれば足ると云ふにあらず、若し疑はずんば何れの時にか悟徹あらん。

㋓此れは上の邪解の所以を立つ、放曠自在等の敎を全く不是といふに非ず、唯だ方便を認めて自然の見に墮するを以ての故に邪解となす。

㋢此れは臨濟の所謂外、凡情を取らず、內、根本に住せず等の語を誤るのみ、自然の體を守るは此れ根本に住するなり、

と莫れ。遮箇又是れ ㋘髑髏情識を認著して、而して解を生ずる者、人に敎ふるに但だ放曠として其の自在なるに任じて心を ㋙生じ念を動ずることを管すること莫れ。念起念滅本實體なし。㋓若し執して實とするときは、則ち生死の心生ぜん矣。遮箇又是れ ㋢自然の體を守つて究竟の法となして、而して解を生ずる者なり。㋐如上の諸病、學道の人事に干るにあらず、皆瞎眼の宗師、錯つて指示するに由るのみ。㋚公、既に清淨にして自ら居し、一 ㋖片の眞實堅固向道の心を存して、工夫の純一不純一を管すること莫れ。但だ古人の言句の上に於て、只管 ㋴塔子を疊むが如くに相似て、一層し了つて、又一層すること莫れ。枉 ㋱げて工夫を用ひば、了期あること無けん。但だ ㋯只だ心を一處に存せば、得ざる

根本に住すとは、不二の法を認着するをいふ。
㋐已下は上の語を結し、學者の過にあらず、もと邪師の過なることを判ず。
㋚第五段、正しく工夫を示す、初めに誡む。
㋖此文意は唯だ清淨にして自ら居るのみならず、更に眞實堅固向道の心あらば、縱ひ邪師に逢ふとも、爲に誤らるるをなし、人多く堅固の心なき故に皆邪師に誤まらるるなり。これ此の一篇の肝要なり。
㋴大惠は恰も塔を造るが如くに、言句の上に言句を付して重重に解會を生ぜしめんとするに喩ふ、子の字は助字なり。
㋱工夫辛苦の無益なるをいふ。
㋯第二節、工夫の法を示す。
㋛噴地とは大悟の處を形容して言ふ、㘞地といふに同じ。
㋽此れに二意あり、一は須彌山、放下着の兩則に於て疑破れずんば、只だ兩則に參じ、餘經等に亘るべからずと。一は兩則に於て疑不破ならば、只だ兩則に參ぜよ、更に或は下語し、或は頌を作りて知見解會をなすべからずと。後の義を是とす。
㋪第六段、前の邪師に對して決斷す、上來の件々邪師を破し、雲門を信じて只だ參ぜよと。
㋲王老とは南泉を指す、もと王氏の故に。
㋝これ第四書なり、大意は靜鬧一如なることを示す。第一段歎許す。
㋜四威儀は行、住、坐、臥なり。
㋑急流は世間の鬧を喩ふ。
㋺鄙懷は謙して言ふなり。
㋩第二段、靜鬧一如を示す、下三節あり、初に世間の塵勞を厭ふを責む、塵勞とは煩惱の異稱なり、塵は染汚の義、勞

底あること無けん。時節因緣到來して、自然に築著磕著して ㋛噴地に省し去らんのみ。「不起一念還つて過ありや也たなしや。」云く、「須彌山。」「一物不將來の時如何ん。」云く、「放下著、㋽遮裏の疑破れずんば只だ遮裏に參ぜよ。更に必ずしも自ら枝葉を生ぜざれ。㋪若し雲門を信得及せば、但だ恁麽に參ぜよ。別に佛法の人に指似するなし。若し信不及ならば、江北江南、㋲王老に問うて一たび狐疑し了つて、一たび狐疑するに一任す。」

又

㋝細かに來書を讀むに、乃ち ㋜四威儀の中、時に間斷なく公冗の爲に奪はれず。㋑急流の中に於て常に自ら猛省して、殊に放逸せず、道心愈久しく愈堅固なるを知る、深く ㋺鄙懷に愜

は擾惱勞役なり。即ち世の雜務に由つて起る煩惱は、吾人の身心を汚し驅役する故に名く。
㋥前緣は前生の緣なり、即ち前生にて半ば世緣を結び、半ば世間の塵勞を貪る等なり。
㋭第二節、引證、傳燈二十四祖摩奴多羅尊者の偈なり。流とは生死の流なり。
㋬これ亦生死をいふ。
㋣淨名は維摩詰の譯名なり、これ維摩經佛道品の文なり。高原陸地は靜に喩へ、卑濕淤泥は鬧に喩ふ。
㋠釋尊、或は達磨を指して老胡といふ。唐高僧傳二。
㋷華嚴經六、如來現相品、演義鈔云云。
㋦第三節、鬧中に靜を得べきことを明す。
㋸好惡底これ何物ぞと看よとなり。
㋾靜鬧の差別を超越するが故なり。
㋻第三段、贊歎、提撕す。
㋕第四段、靜鬧一如を示すの意を敘す。
㋵茫の字臨濟錄には忙に作る、楞嚴五に云く、「阿陀那は微細の識なり、習氣暴流の如し」と、今は迷妄の人をいふ。
㋟惡業擠子は吾人の形骸をいふ。
㋹第五段、前書を擧げて結す。
㋞これ第五書なり、大綱は、古人の方便を解することを隨喜す。第一段に讚許す。
㋡喘ぐこと無しとは心念間斷なく相續するを喩ふなり。
㋧第二節、具さに大惠も侍郎に同ずることを述ぶ。
㋤漆桶輩とは無眼子を罵る言なり、楞伽經に云く、「人の曠劫の無明結習の膠固なること、恰も漆を貯ふ桶の如し云云」。

へり。然(ハ)るに世間の塵勞、火の熾然なるが如し、何れの時か是れ了せん。正に鬧中に在つて竹椅蒲團上の事を忘却することを得ざれ。平昔、心を靜勝の處に留むることは、正に鬧中に用ひんことを要す。若し鬧中に力を得ずんば、却つて曾て靜中に在つて工夫をなさざるに似て一般なり。(ニ)前緣駁雜にして今此の報を受くるの歎ありと承はる、獨り敢て命を聞かず、若し此の念を動ずるときは道を障へん。(ホ)古德の云く、「流に隨つて性を認得すれば、(ヘ)喜もなく亦憂もなし。」(ト)淨名に云く、「譬へば高原陸地に蓮華を生せず、卑濕淤泥に乃ち此の花を生ずるが如し。」(チ)老胡の云く、「眞如は自性を守らず、緣に隨つて一切の事法を成就す」と。又(リ)云く、「緣に隨ひ感に赴いて周からずといふことなし、而も常に此の菩提座に處す」と。豈に人を欺かんや。(ヌ)若し靜處を以て是となし、鬧處を非となさば、則ち是れ世間の相を壞して而して實相を求め、生滅を離れて而して寂滅を求む。(ル)靜を好み鬧を惡む時、正に好し力を著くるに、驀然として(ヲ)鬧裏に靜時の消息を撞翻せば、其の力よく竹椅蒲團上に勝らんこと千萬億倍せん。但だ相聽せ、決して相誤らざることを。(ワ)又承はる老龐の兩句を以て行住

(ラ)正法眼藏三に衆に示すなり。年譜紹興四年に出づ。
(ム)楞嚴十、同釋要鈔六に出づ。
(ウ)湛入合湛と方便を捨てざるとの兩段。
(ヰ)第三段、隨喜して助激す。左右はおそばしゆうの如し、或は足下等といふが如し。
(ノ)諸聖の語は廣しと雖も、今正しく達磨を取る、諸異とは種種といふに同じ。
(オ)欄は杷と通ず、此は此事の端緒を得て少分の相應あるをいふ。
(ク)上の方便門の語に應ず、巳に捨てざれば則ち病となす、何ぞ捨てざるを慮らんや、旣に方便を借つて道に入ることを知る、何ぞ捨てざるを慮らんや、旣に方便を借りて道に入るを知る、何ぞ道に入らざるを慮らんやとの意を含む。
(ヤ)方便門を借りて而も方便門を

坐臥の銘箴と爲すと。善加ふべからず、若し正しく鬧の時に厭惡を生ずるときんば、乃ち是れ自ら其の心を擾すのみ。若し動念の時只だ老龐の兩句を以て提撕せば、便ち是れ熱時一報の淸涼散ならん。(カ)公、決定の信を具す、是れ大智慧の人なり、久しく靜中の工夫をなす、方に敢て這般の話を說く、他人分上に於て則ち不可なり。若し業識(ヨ)茫茫たる增上慢の人の前に向つて此くの如く說かば、乃ち是れ他の(タ)惡業の擔子を添せん。(レ)禪門種種の病痛、已に前書に具にす、識らず曾て子細に理會するや否や。

(ソ)又

諭すことを承はる、外諸緣を息め、內(ツ)心喘ぐと無うして以て道に入るべし、是れ方便門なり、方便門を借りて以て道に入るは則ち可なり、方便を守つて捨てざるときは則ち病となると。誠に來語の如し、山野之を讀んで歡喜踊躍の至りに勝へず。(ネ)今諸方(ナ)漆桶の輩、只だ方便を守つて捨てず、實法を以て人に指示するが爲に、故を以て人の眼を瞎すること少からず。所以に(ラ)山野、邪正を辨ずる說を作つて以て之を救ふ。近世魔强く法弱くして、湛(ム)入合湛を以て究竟とする者、勝げて數ふべからず。方便

守らざるを此の如しといふ。
(マ)竹篦子話は、大惠普說下、普灯十五等、一口吸盡の話は、傳燈八龐居士章に出づ。
(ケ)柏樹子話は趙州錄に二則を載す、普通に用ふるは初の則なり、全篇を知らんと欲せば本錄を見よ。
(フ)伎倆とは智謀才覺をいふ、或は能巧多藝なりと、卽ち偈頌を作る等をいふ。
(コ)提は其の耳を提くなり、撥は拾取なり、提撕に同じ。
(エ)第四段、夢覺一如を示す。
(テ)從容は舒緩の貌、或は轉じて、丁寧の義とす。
(ア)證を引くなり、これ大般若第三百三十、行方便品の文なり、舍利弗とは舍利弗多羅の略、鶖子と譯す、佛十大弟子の中智慧第一の稱あり、父は帝沙、母を舍利と名く、那爛陀に生る、大智度論に云く、「摩陀羅

を守つて捨てずして宗師たる者麻の如く粟に似たり。山野、近ごろ嘗て衲子輩の與に此の(ウ)兩段を擧ぐ、正に來書の所説の如くにして一字を差はず。(ヰ)左右、心を般若の中に留めて念念間斷せざるに非ずんば、則ち從上の(ノ)諸聖諸異の方便を洞曉すること能はず。公、已に(オ)欛柄を捉著す、既に欛柄手に在ることを得ば、(ク)何ぞ方便門を捨てずして道に入ることを慮らんや。但だ(ヤ)此くの如く工夫を做し、經教幷に古人の語錄、種種の差別言句を看んも、亦只だ此くの如く工夫を做せ、須彌山、放下著、狗子無佛性の話、(マ)竹篦子の話、一口に西江水を吸盡するの話、庭(ケ)前柏樹子の話の如きも、亦只だ此くの如く工夫をなせ、更に別に異解を生じ、別に道理を求め、別に(フ)伎倆を作すことを得ざれ。公、能く急流の中に向つて時時に自ら此くの如く(コ)提撥して、道業若し成就せざるときは、則ち佛法に靈驗なし。記取せよ記取せよ。(エ)承はる、夜夢に香を焚いて山僧が室に入つて甚だ(テ)從容すと。切に夢の會をなすことを得ず、須らく知るべし、是れ眞の入室なることを。(ア)見ずや、舍利弗、須菩提に問ふ、「夢中に(サ)六波羅蜜を説くは、覺めたる時と同じきか別か。」(キ)須菩提云く、「此の義幽深な

王に一女あり、その眼、舍利鳥(鶖鷺)の眼に似たり、依つて此女を舍利と名く、帝沙に嫁して一子を產む、その母舍利の產む所なれば舍利弗と命名す」と、弗多羅は子と譯す。

(サ)波羅蜜とは度、又は到彼岸と譯す、現在の不自由な苦惱多き生活を離れて、自由にして安穩なる境遇卽ち涅槃の岸に到るが故なり。之に六ある故に六度といふ、一には布施、これに二あり、財施と法施とにして他に肉的、靈的慰安を與ふるをいふ。二に持戒とは、諸惡を防止して身、口、意の行業を正しくするをいふ。三に忍辱とは、忍耐にして他より打罵等を加へらるるも、安忍して瞋恨せず、又順境逆境の爲に心を奪はれ亂されざるをいふ。四に精進とは勤勉にして肉體に於て精神に於て、

り、吾れ説くこと能はず、此の會に(ユ)彌勒大士あり、汝彼に往いて問へ」と。(メ)咄、漏逗少からず、雪竇の云く、(ミ)「當時若し(シ)放過せずんば後に隨つて一箚を與へん、(ヱ)誰れをか彌勒と名け、誰れか是れ彌勒なる者、便ち見ん氷銷瓦解するを。」咄、雪竇も亦漏逗少からず。或は人あつて、只だ(ヒ)曾待制、夜夢に雲門が室に入るが如きんば、且く道へ覺むるの時と同じきか別かし。問はば、雲門卽ち他に向つて道はん、「誰(モ)れか是れ入室の者、誰れか是れ入室を爲す者、誰れか是れ夢を作す者、誰れか是れ夢を説く者、誰れか是れ夢の會を作さざる者、誰れか是れ眞の入室の者。」咄、亦漏逗少からず。

(セ)又

來書細かに讀むこと數過、鐵石心を辨じ決定の志を立てて、肯て(ス)草草ならざることを見るに足れり。但だ此くの如く崖めば、(イ)臘月の三十日に到つて亦能く(ロ)閻家老子と厮抵し、更に頂門の眼を豁開し、金剛主寶劍を握つて、毘盧頂上に坐すと説くことを休めよ。(ハ)某嘗て方外の道友に謂つて曰く、「今時學道の士、只だ速效を求めて錯り了ることを知らず。」却

善法を修するに、勇悍に純一にして間斷なく進趣するをいふ。五に禪定とは一心不亂にて、環境の爲に心をかき亂されず、三昧心に住して餘裕あるをいふ。六に智慧とは、諸佛の覺母なるが故に、之を修研して諸法の性相を觀照し、下つては能く善惡邪正等を分別するをいふ。

(キ)須菩提は此に善吉、また空生と譯す、釋尊十大弟子の中の解空第一の弟子と稱す、此人の生るる時に家宅の諸器具等皆空となりし故に空生と名け、又家人驚いて生れし時の奇瑞を相占師に相せしに、これ吉相なりと答へしかば、又善吉と名けしと。此人は天性慈善にして、諍を好まず出家して道を得、慈心を起し、無諍三昧に入り常に善業を行ひしかば、又名けて善業と稱し

つて謂ふ、『無事にして、㋥縁を省き、靜坐して體究す』と、爲れ空しく時光を過す。如じ幾卷の經を看よ、幾聲の佛を念じ、佛前に多禮幾拜して、平生所作底の罪過を懺悔して、閻家老子の手中の鐵棒を免れんことを要せんには、此れは是れ愚人の所爲なり。而今㋭道家の者流、全く妄想心を以て㋬日精月華を想ひ、霞を吞み氣を服し、尙ほ能く形を留め、世に住して寒暑に逼められることを被らず、況や此の心此の念を回して、全く般若の中に在らんをや。㋣先聖明明に言へることあり、喩へば㋠太末蟲の處處に能く泊れども、唯だ火燄の上に泊ること能はざるが如し。衆生も亦爾り、處處に能く縁ずれども唯だ㋷般若の上を縁ずること能はず。苟し念念初心を退けず、自家の心識、世間の塵勞を縁ずる底を把りて回し來つて、般若の上に㋦抵在して今生に㋸打つて未だ徹せずと雖も、臨命終の時、定めて惡業の爲に牽かれ、惡道に流落せず。來生に出頭し、我が今生の願力に隨ひ、定めて般若の中に在りて現成受用せん。此れは是れ決定底の事、疑ふべきこと無き者なり。㋾衆生界中の事は學することを著ひざれども、無始時來習ひ得て熟し、㋻路頭も亦熟す。自然に之れを取つて㋕左右其の原に逢ふ、須らく㋵撥置することを著べし。乍ち知識の説著するを聞いて、自然に㋟理會し得ず、須らく決定の志を立して、之れと㋹頭抵を作すことを著ふべし。決して兩立せず、此㋞の處若し入得すること深ければ、彼㋡の處排遣することを㋧著ひず、諸魔外道、自

たりと。

㋙彌勒は梵語、昧恒履曳（Maitreya）の訛にして、慈氏と譯す、其母の姓慈なりし故に慈氏と名くといふ、本姓は阿逸多、此に無能勝と譯す、其慈悲及び智慧、餘人の及ぶ所にあらざるが故に名づくといふ。この菩薩は過去の善思佛の許にて發心し、今現に兜率天の內院に居たまひ、釋尊の入滅後、五十六億七千萬年にして成佛して此世界に出で、釋尊の後を補ひ、人天を敎化し給ふといふ。大士とは菩薩の異稱なり。

㋱咄とは人を叱咤し、罵る時に多く用ふる語なり、或は禪の妙旨、言說し難き爲に發することあり。巳下は大惠の語なり。漏逗とは、多く物の取り亂れたる場合に用ふ。

㋯當時とは須菩提が答ふる時なり。

㋛放過とは「とりはづす」、「やめる」等の意なり、これ舍利弗に系る、此義幽深なり。

㋓須菩提を詰るなり、本來名字なし、誰か彌勒と名けんと。

㋪曾待制とは曾侍郞が前の官名を呼ぶなり。事物紀原四に云く、「唐の永徽五年十二月五日、許敬宗に詔して每日、制を武德殿に待しむ、此れ始めて待制の名あるなり」と。

㋲これは曾待制これ何物ぞと拶す、或は大惠是れ何物ぞと拶するなり、入室の者を曾侍郞となし、入室をなさしむる者を大惠となす、入室の儀式を行する者は大惠なるが故に。

㋝第六書、大意は、決定の志を立つれば、必ず靈驗あることを示す。中に第一段は決定の志を證明して向上の機關を證明せず。

る底を把りて回し來つて、般若の上に㋦抵在し（続）

㋜草々は苟且（かりそめ）、容易の義、又雜亂して齊しからざる貌。

㋑死期の到るを喩ふ、即ち眼光落地の時。

㋺閻魔王のこと、地獄の王にして常に十八の將官と、八萬の獄卒とを從へて、世界の有情の地獄に來る者を審判し、懲罰して諸の不善業を遮止す、故に遮止、又は靜息と譯す、能く一切の惡を靜息し生類を饒益する故に閻魔法王とも名く。今は閻魔に抵抗すること、即ちに道力の業力に勝るをいふ。

㋩第二段、工夫漸く熟すれば、必ず靈驗あることを明す。

㋥世緣のみにあらず、看經等をも廢するをいふ。

㋭道家に託して靈驗あることを述ぶ。

㋬眞仙通鑑に云く、魏夫人、別殿に齎す、忽ち四眞人あり、來降して各各玉女に命じて脉歌せしむ、曰く土は日中の精を採り、下は黃月華を飮む云云。

㋣第三段、緣を般若に結べば決定して失せざるを述ぶ。

㋠酉陽雜爼に曰く「蠅の大なる者、首、火の如し、或は大麻蠅といふ、茅根の化する所なり」と。百丈錄に曰く「喩へば太末蟲の如し」と。洞山初錄にもこれと同じ文あり。

㋷般若に遠かりて親近せざるをいふ。

㋦抵は當なり、的なり、常に般若に念を懸けるをいふ。

㋸打は金銀を鑄るをいひ、又水を汲むをもまた打といふ。今は其の意を得ざるを云ふ。

㋾第四段、信を排遣することを述ぶ。

㋻世間の事をいふ。

㋕世間の事に於ては滯なく辨別

然に竄伏せん。生處は放つて熟せしめ、熟處は放つて生ならしむること、政に此（ナ）れが爲なり。（ラ）日用做工夫の處、欄柄を捉著して漸く（ム）省力を覺せん時、便ち是れ得力の處なり。

李（ウ）參政に答ふ　漢老　問書附

（ヰ）邴、近ごろ籌（ノ）室を扣く、伏して（オ）蒙滯を激發することを蒙り、忽ちに（ク）省入あり。顧み惟るに、（ヤ）根識暗鈍にして、平生の學解盡く（マ）情見に落つ、一取一捨、壞（ケ）絮を衣て草棘の中に行いて、適に自ら纒繞するが如し。今一（フ）笑に頓（コ）に釋く、欣幸量るべし。（エ）大宗匠の委曲に慈を垂るゝに非ずんば、何を以てか此（テ）れを致さん。（ア）城中に到つてより、著衣喫飯、子を抱き孫を弄し、（サ）色々舊きに仍る。既に拘帶の情を亡じ亦（キ）奇特の想をな

するをいふ。
（ヨ）おしのけること。
（タ）或人、大惠に言ふ「華嚴は解し難し」と、大惠云く「華嚴に離るること久し、故に解し難きなり、宿世に親近せざれば今世に於て般若を理會せず」と。今も亦其意なり。
（レ）頭抵は牛の頭を打ち合はすが如きをいふ。
（ソ）學般若を指す。
（ツ）彼處は世間を指す。
（ネ）著ひずは用ひずに同じ。
（ナ）入得すること深しの語を指す。
（ラ）第五段、前書を擧げて雍容として逼らざるをいふ。
（ム）省力とは、工夫提撕の力、得力は得悟の力なり。
（ウ）宋史列傳百三十四に李邴の傳あり、又會元二十にも見ゆ。
（ヰ）第一段、激發を謝す。
（ノ）籌室は師家所居の處を稱して言ふ。
（オ）蒙昧鈍滯なり。
（ク）省悟入得なり。
（ヤ）已下、前非を懺悔す。根識は根器、識知なり。
（マ）妄情見解。
（ケ）破れ綿なり。
（フ）一笑とは李參政の省入の處、此二字、書中に多くあり、猥りに放過すべからず。
（コ）頓に釋くは疑の釋けるをいふ。
（エ）大宗等は謝辭なり。
（テ）此を致すとは省入の處を指す。
（ア）第二段、自の得力を叙す。城中とは泉州を指す。
（サ）色色は事事物物の上をいふ。
（キ）悟得の處に於て奇特の想をなさざるなり。
（ユ）舊障とは煩惱なり、即ち從來の惡習煩惱なり。別に臨んで云々。第三段、重ねて提誨を請ふ。

さず、其の餘の（ユ）夙習舊障、亦稍輕微なり。別に臨んで叮嚀の語、敢て忘せず。重ねて念ふに始めて門に入ることを得たれども、而も大法未だ明かならず、應機接物、事に觸れて未だ礙なきこと能はず、更に望むらくは、以て提誨して卒に所至あらしむることあらんことを。遮はくは法席を（メ）玷すこと無からんことを。

（ミ）示諭す、城中に到つてより、著衣喫飯、子を抱き孫を弄する、色々舊きに仍る、既に拘帶の情を亡じ、亦奇特の想をなさず、宿習舊障、亦稍輕微なりと。三たび斯の語を復して歡喜踊躍す、此れ乃ち學佛の驗なり。儻（シ）し過量の大人、一笑の中に於て（ヱ）百了千當するに非ずんば、則ち吾家に果して（ヒ）不傳の妙あることを知るこ

（メ）玷の字「けがす」と點ずべし。
（ミ）第一段、聖胎長養せば自然に應機明白なることを叙す、已下四節あり、初には來書を擧げて稱嘆す。
（シ）第二節、妙道を自悟せることを叙す。過量は出格の義。
（ヱ）事事物物に當つて大悟の處あるを指す。
（ヒ）妙悟の處は他人に傳へ與ふべからざる故に、不傳の妙といふ。
（モ）下の富樞密に答ふ書に云云す、即ち初は李參政が默照邪禪を呵するを聞いて信ぜざりしが、後に悟りてより疑はずと云云と。
（セ）大惠の前には一切皆法門なるが故に。
（ス）光明とは智慧なり、助說は大惠の默照を破するを助くとも疑怒を壞すべからずといふなり。
（イ）傳とは師家にかかる、學とは學者に系るなり、
（ロ）頭の字は助字。
（ハ）第三節、佛語に契ふを歎す。
（ニ）復云云は極歎の辭なり。
（ホ）黃面老子とは、釋尊を稱したる言なり。
（ヘ）因緣に依りて生じたるものを有爲の法といふ。その實有にあらず、有に似て現生せる事物を、妄りに實有なりと執著せられたる物を虛妄の事といふ。
（ト）上の無言說に著せずの語に系る。
（チ）上の言說の道に依らずの語に系る。
（リ）暗とは、佛語、菩薩の語を見聞せざれども暗に合すと也。
（ヌ）波旬とは、又は波卑夜とも書す、此に惡、障礙、善等と譯す、魔王の名、欲界天の頂に住し、大象に乘り百臂を有し、種種

と能はず。㋲若し爾らずんば、㋝疑怒の二字の法門、盡未來際終に壞すること能はじ。太虛空をして雲門が口となし、草木瓦石皆㋜光明を放つて道理を助說せしむるとも、亦奈何ともせじ。方に此の段の因緣を信ず、㋑傳ふべからず學ぶべからず、須らく是れ自ら證し、自ら悟り、自ら肯ひ、自ら休して、方に始めて徹㋺頭なるべし。㋩公、今一笑、頓に所得を亡ず、夫れ㋥復た何をか言はん。㋭黃面老子曰く、「衆生の言說する所、一㋬切有爲虛妄の事を取らず、復た言說の道に依らずと雖も、亦復た無言說に著せず。」と、來書の所說、既に㋣拘滯の情を亡じ、亦㋠奇特の想を作さずと、㋷暗に黃面老子の所言と契合す。是の說に即する者を名けて佛說となす、是の說を離るゝ者は即ち㋦波旬の說なり。㋸山野、平昔大誓願あり、寧ろ此の身を以て一切衆生に代つて地獄の苦を受くるとも、終に此の口を以て佛法を將て、以て㋾人情と爲して、一切の人の眼を瞎せじと。㋻公、既に恁麼の田地に到つて、自ら此事、人に從つて得ざることを知らば、但だ且く㋕舊に仍る。更に大法の明未明、應機の礙不礙を問ふことを須ひざれ。若し是の念を作さば則ち舊に仍らず。㋵承はる夏を過して後、方に復た出づべし

奇異の相を現じ、常に其子女を人界に下して、惡人を煽動し聖者を惱ます、釋尊の菩提下に修道し給ひし時に、障礙を加へたるもの是れなり。

㋸第四節、上來の稱贊は人情にあらざるを敍す、山野とは大惠自らを謙遜して言ふ。大誓願とは、年譜十八に、大惠三十七歲の時に此誓願を立つ。

㋾人情等とは、愛想うけのよき樣に機嫌とりをすること、即ち此には李參政が未だ妙悟を得ざるに、既に妙悟せりと僞證せずとなり。

㋻第二段、他に求問することなからしむ、中に二節あり、第一節に正しく示す。

㋕これは李が書の語を用ふ、大法、無礙法を以て示すを、大無事、眞の無事とす。

㋵第二節、來書を擧げて、從容として逼らざるをいふ。夏と

と。甚だ病僧が意に愜へり。若し更に㋟熱荒馳求して歇ずんば則ち相當らず。㋹前日公の歡喜の甚だしきを見て、故を以て敢て說破せず、恐くは言語に傷られんことを。今歡喜既に定まる、方に敢て指出せん。此㋞の事は極めて容易ならず、㋡須らく慚愧を生じて始めて得べし。往々に利根上智の者は之れを得るに力を費さず、遂に容易の心を生じて便ち修行せず、多く目前の㋧境界に奪ひ將ち去られて主宰と作ること得ず。日久しく月深けれども迷ふて返らず、道力、業力に勝つこと能はず、魔其の便を得て、定めて魔の爲に㋤攝持せられて、臨命終の時亦力を得じ。千萬前日の語を記取せよ、㋶理は則ち頓に悟る、悟に乘じて併せ銷す。事は頓に除くに非ず、次第に因つて盡す。行住坐臥切に忘れ了るべからず。㋰其の餘の古人種種差別の言句、みな以て實となすべからず、然も亦以て虛となすべからず。久々に純熟せば自然に默々として自らの本心に契はん、必ずしも別に殊勝奇特を求めざれ。㋒昔水潦和尚、藤を採る處に於て馬祖に問ふ、「如何んが是れ祖師西來意。」祖云く、「近前來、儞に向つて道はん。」水潦纔に近前す、馬祖、㋼攔胷に一蹋に蹋倒す。水潦覺えず起き來つて、手を拍つて呵々大笑

は春夏の夏なり。

㋟熱荒は勢甚だしきの謂なり、意は、怱忙として敎化を請はば即ち當らず。緩緩地に言ふ故に大惠之を稱美するなり。相當らずとは、道に相應ぜずといふにあらず、此れ只だ公には似合はずとの謂なり。

㋹第三段、聖胎長養を勸む。

㋞菩薩三大阿僧祇劫の修行を要する所故に……。

㋡自己の見解を以て佛祖を較べ看るとは小事なり。拔隊禪師の如きは到る處人の證明を得と雖も、拈華微笑を透得せず、故に敢て自ら肯はざりき。

㋧色、聲、香、味、觸等をいふ。

㋤攝持とは狐につかれるが如きをいふ。

㋶見惑頓斷如破石、修惑漸斷如耦絲とて、理を障へる煩惱は見性と同時に頓に斷ぜらるるも、貪瞋等の事に迷ふ煩惱は

す。祖曰く、「汝箇の甚麼の道理を見てか便ち笑ふ。」水潦の曰く、「百千の法門無量の妙義、今日一毛頭上に於て底を盡して、㋨根源を識得し去る。」馬祖便ち他を㋔管せず。雪峯㋗鼓山の緣熟するを知りて、一日忽然として驀胸に擒住して曰く、「是れ甚麼ぞ。」鼓山釋然として了悟し、㋳了心便ち亡じて唯だ微笑して、手を擧げて㋮搖曳するのみ。雪峯の曰く、「子、道理を作すや。」鼓山復た手を搖して曰く、「和尙何の道理かあらん。」雪峯便ち休し去る。㋘蒙山の道明禪師盧㋫行者を趂ふて大庾嶺に至つて衣鉢を奪はんとす。盧公、石上に擲つて曰く、「此の衣は㋙信を表す、力をもつて爭ふべからず、公の將ち去るに任す。」明、之れを擧ぐるに動かず。乃ち曰く、㋓「我れ法を求む、衣鉢の爲にするに非ず、願くは行者開示せよ。」盧公の曰く、㋢「不思善不思惡、正當恁麼の時、那箇か是れ上座本來の面目」と。明、當時に大悟し、通身汗流れて泣淚作禮して曰く、「上來の㋐密語密意の外、還つて更に意旨ありや否や。」盧公曰く、「我れ今汝が爲に說くことは卽ち密意にあらず、汝若し自己の面目を㋚返照せば、密は却つて汝が邊にあり、我れ若し說得せば卽ち密ならず」と。三㋖尊宿の三段の因緣を以て公の一笑の中に釋然たるに較べよ、㋴優劣何如と。請ふ㋱自ら斷つて看よ、還つて更に別に㋯奇特の道理ありや、若し更に別にあらば、則ち却つて曾て釋然たらざるに似たり。㋛但だ作佛を知つて佛㋓の語を解せざることを愁ふること莫れ。㋪古來得道の士、自己既に充足して己が㋲餘を推して、機に應じ物を接

頓に斷じ盡す能はざるをいふ。

㋰第四段、大法明らめずの問に答ふるに二節あり、初に正しく敎示す。

㋒第二節、古則を引いて示す、傳燈八に潦を老に作る。藤とは拄杖のことなり。

㋼攔胷とは、むかうさまにむねにあたるなり。

㋨根源を識得したから、大に笑ひだしたとなり。

㋔かまはぬといふこと、卽ち證明せずの意なり。

㋗鼓山は傳燈十八に出づ、大惠普說四云云す。

㋳了心も亦亡ずるなり、これ快活の境界なり。

㋮東坡詩集廿五に曰く「火燃ゆるを搖曳といふ」と、今はその樣をなすなり。

㋘蒙山は傳燈四に出づ。

㋫盧行者とは、南宗の祖第六祖惠能禪師なり、傳燈五。禪宗に行者といふは、これより始まる。卽ち佛知見を開くべく、如法に修行する者を行者といふ。大惠普說二に云ふ、明上座、六祖を趁ふて大庾嶺頭に至り、衣鉢を奪はんと要す、六祖、其の來意の不善なるを見て、遂に衣鉢を石上に置き、身を草中に蹲る、明、力を盡して提げ起たず、此れ豈に是れ衣鉢に恁麽の殊勝あらんや、若し爾らば則ち達磨の所傳返つて捏怪を成す、所以に道ふ、佛性の義を識らんと欲せば當に時節因緣を觀ずべしと。蓋し是れ他の悟道底の時節因緣熟せり、驀然提不提、乃ち告げて曰く、行者、我れ豈に衣鉢の爲に來らんや、願はくば行者、慈悲もて我が爲に佛法を說け云云。

㋙信とは、傳法の信、卽ち標幟印信なり。

㋓此は凡夫の人に迫られて、早く詞を變ずるに同じからず、轆に當つて眞實を呈露す、轉處自由のところなり。

㋢明上座、惡念を懷き來る、故に善惡を以て答ふなり、衣鉢を奪はんとするは惡念、法を求むるは善念なり。

㋐密語とは、不思善の語より、本來の面目に至る語は密語なり。密意とは大悟と云ふ處なり、下の趙待制に答ふる書中に「密意とは便ち是れ日用得力の處なり」と對見せよ。

㋚外より內に返へること、卽ち本來の面目を照すをいふ。

㋖第三節、上を結ぶ、大惠いはく「此三段の因緣は公の分上に於て、豈に會せざらんや」と、一笑の一の字に當つて言ふ、甚だ巧妙なり。

㋴優といひ、劣といふことあるべからず。

㋱之は前の默默として自らの本心に契ふの語に應ずるなり。

㋯これは前の必ず別に殊勝奇特を求めざれの語に應ず。

㋛第五段、應接礙ありてふに答ふ、これ參政が初悟の處に比して言ふ。作佛とは道を悟るをいふ。

㋓意は應機接物を苦しむ莫れとなり、直ちに是れ作佛を言ふ、則ち佛は三阿僧祇を歷て成佛し給ひし人、故に語として解せざるなしと、此段は假設して言ふ、深き解をなすなかれ。

㋪これは大惠意ありて言ふ、李參政、近ごろ省入を得て、聖胎長養未だ熟せざるに、早く應機接物を要むる故に言ふ。

㋲餘とは、上の容易の心を生ずるの語に當るなり、これ字眼なり。

㋝胡の人なり、漢來とは漢の人

す、明鏡の臺に當り、明珠の掌に在つて、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ずるが如し。意を著くるに非ず、若し意を著くるときは、則ち實法の人に與ふるあらん。公、大法に明かに、（セ）應機滯り無きことを欲す。但だ且く（ス）舊に仍つて必ずしも人に問はざれ、久々に（イ）自ら點頭せん。（ロ）行に臨んで面稟の語、請ふ座右に書して、此の外別に說くこと無れ。縱ひ說くことありとも、公の分上に於て盡く剩語と成らん。葛藤太だ多し、姑く是の事を置く。

（ハ）又

邴、比ろ誨答を蒙り、深旨を備悉す。邴、自ら驗する者三あり。一には事に（ニ）逆順なく、緣に隨つて卽ち應じて胷中に留めず。二には宿習の濃厚、排遣を加へず、自爾として

來ればとなり。

（ス）此れは上の第二段に應ず。文の意は、求心を休めて聖胎長養せば、應機接物を何ぞ人に問ふを用ひんとなり。必ずしもの言は不定の詞、人に問ふも亦可なりとの意あり。

（イ）古人の語に於て自ら會得の分あらんとなり。

（ロ）第七段、總結して再び囑す。面稟とは、韻會に「稟は命を受くるなり」と、畢竟對面の謂なり。

（ハ）此書は問書にあらず、大慧の前書に答へしなり、次の答書は別に大慧より與へしものなり。今は第一段、驗を得ることを敍す。

（ニ）凡夫は逆順の境界に於て憎愛の念を長ず、今はそれに對して憂喜せざるをいふ。

（ホ）茫は迷昧の貌。

（ヘ）瞥地はちらりとみる、卽ち目を過ぐるなり。

（ト）自昧は妄語をいふ、三の靈驗なきに有りと言はば、人を昧まし自を昧ますなり、今は然らず、故に非といふ。

（チ）前書等は第二段、前書の文、別語にあらざるを敍す。

（リ）我が悟處を認めて無盡の法を盡さざるをいふ。

（ヌ）第三段、事も頓に除くべきことを敍す、此は上の事は頓に除くにあらずとの語を受く。又下の正性、助因の處を引合せて解すべし。現流とは吾人の八識の現行流注するをいふ。又は自心現の煩惱をいふ。

（ル）理は道理なり、李漢の意は、謂く、實に本性中に此の如き事なしと雖も、又命の如く、生滅の垢染を淨除するの道理なきにあらずとなり。

（ヲ）此書は李邴の書の後、久しうして大慧より李邴に寄するの

輕微なり。三には古人の公案、舊（ホ）茫然たる所、時に復た瞥（ヘ）地なり。此れ自ら（ト）昧す者にあらず、（チ）前書に大法未明の語は、蓋し（リ）恐らくは少を得て足れりとなす、當に擴く之れを充つべし、豈に別に勝解を求めんや。（ヌ）現流を淨除するときは、（ル）理は則ち無きにあらず、敢て銘佩せざらんや。

（ヲ）信の後益瞻仰を增す、識らず日來緣に隨つて（ワ）放曠、如意自在なりや否や、四威儀の中（カ）塵勞の爲に勝たれざるや否や、寤寐の二邊一（ヨ）如なることを得るや否や、（タ）舊に仍る處に於て走作なしや否や、（レ）生死の心に於て相續せざるや否や、但だ凡情を盡して別に聖解する無れ。（ソ）公、既に一笑に正眼を豁開して、（ツ）消息頓に亡ず。得力不得力は、人の水を飮んで冷煖自知

書なり。此書の大意は聖胎長養を示す。第一段、問候。信とは、書を寄するを信といふ。

（ワ）今、此の放曠とは拘礙なきをいふ、卽ち大悟の後の境界なり、前の邪師を指す所の放曠と異れり。

（カ）道力が業力に障へらるることは無きやとなり。

（ヨ）一如は猶ほ一體といふが如し。

（タ）舊に仍る等、悟了すれば卽ち舊に仍るなり。走作とは拘滯執着をいふ。此の如く數數之を言ふは、利根聰明の人は之を得るに容易の心を生じ、聖體長養を休めて、本との凡夫の如くなることあり、故に大惠、婆心をもてしばしば否否といふなり。

（レ）生死の心とは、取捨憎愛の心なり。

（ソ）第二段、聖胎長養を進む、已下二節あり、先づ悟處を擧げて第二節を發せんとす。

（ツ）凡夫の境界の消息なり、生死禍福は皆是れ消息なり。

（ネ）正しく長養を勸む。

（ナ）正性とは殺、盜、婬、妄の正性なり、助因とは、或は云く、五辛なりと。

（ラ）現業とは現在に果報を受くべき作業なり。違とは犯さざるの謂なり。

（ム）悟理の智見の前には、方便、修證なし、然し差別の事中に出づれば、方便、修證あり。

（ウ）古德とは寒山を指す、唐の太宗の時の人。

（ヰ）眞實とは樹木の心の堅きをいふ。

（ノ）公、試に之を思への語は上に屬する語なり。

（オ）第三段、上の語を結す。

（ク）臘月の扇子とは無用の處を云ふ。

するが如し、(ネ)然も日用の間、當に黄面老子の所言に依つて其の(ナ)正性を剜しくし、其の助因を除き其の(ラ)現業に違すべし。此れ乃ち了事の漢、(ム)無方便中の眞の方便、無修證中の眞の修證、無取捨中の眞の取捨なり。(ウ)古德の云く、「皮膚脫落し盡して唯だ一(ヰ)眞實のみあり、又栴檀繁柯脫落し盡して唯だ眞の栴檀のみ在るが如し。」と、斯れ現業に違し、助因を除き、正性を剜しくするの極致なり、(ノ)公、試に之を思へ。(オ)此くの如きの說語、了事の漢の分上に於ては大いに一柄の(ク)臘月の扇子に似たり。(ヤ)恐らくは南地寒暄常ならず、也た少くことを得ざらん。(マ)一笑。

(ケ)江給事に答ふ　少明

人生一世、百年の光陰、能く幾許かある、公、(フ)白屋にして家を起して(コ)淸要を歷盡す。此れは是れ世間の第一等受福底の人なり、能く慚愧を知つて(エ)心を回らし、道に向つて出世間、脫生死の法を學す。又是れ世間の第一等、(テ)便宜を討ぬる底の人なり。須らく是れ急に手脚を著けて(ア)面皮を冷却し、人の(サ)差排を受くることを得ず。自家(キ)本命元辰を(ユ)理會して、(メ)去處をして分明ならしむべし、(ミ)便ち是れ世間出世間、一箇了事底の大丈夫ならん。(シ)承はるに連日去つて參政と道話すと、甚だ善し甚だ善し。(ヱ)此の公、馳求の心を歇得して、言語道斷、心行處滅を得、差別の(ヒ)異路、古人の脚手を覰見して、古人の方便文字に(モ)羅籠せらるゝことを被らず。山僧、渠が此くの如くなるを見て、所以に更に曾て之れが與に一字を說かず、恐らくは(セ)

(ヤ)恐云云、この文甚だ巧妙なり、南地とは、李邴は泉南に居る故に言ふ。寒は大悟に比し、暄は智氣の發するに比す、これ李邴が工夫未だ純一無雜ならざるを謂ふ、故に扇子を用ひて此くの如く勸勵すること眞の大慈悲なり。

(マ)意は南地は暖國なり、冬月にも亦扇子を用ふべし、これ工夫未熟なるときは上來の說話も亦少くこと得ざるを喩へ、以て戯謔と成すなり。一笑とは上の臘月の扇子等の語は戯謔なるが故に、之を一笑するなり。

(ケ)江氏は萬姓統譜三に出づ、給事は事物紀原五に出づ、云く、「加官なり」。初め秦漢に別に給事黄門の職あり、後漢に給事黄門侍郎左右給事中あり、殿中に事あるを以ての故に給事中といふ。此書の大意は善友に親近し、高德を慕ふべきを叙す。第一段に他を贊許して勸導す。この書は師四十七歲の作なり。

(フ)白屋とは、漢書七十八に師古云く、「白蓋の屋、茅を以て之を覆ふ、賤人の所居なり」と。

(コ)淸要、官職緊しきを要といふ、今は官に依つて淸にして要ならず、要にして淸ならざるをいふ。

(エ)世間の心を回らすをいふ。

(テ)便宜等は上の受福底の語に應す、福祿相共に不足なし。

(ア)面皮等とは、人情の絕ゆるをいふ。例せば法然の念佛を勸むるが如し。

(サ)差排とは邪師の指示をいふ。臨濟禪師曰く、「山僧が人に指示する處の如くんば祇だ你が人惑を受けざらんことを要す、乃至、如今の學者の病は、不自信の處にあり」と。大般若四四八に云く、「菩薩に實智慧あるが故に、人の差排を受けず」と。

(キ)これは本命と元辰とにして、今は之を自己の本分に喩へしなり。因に一言せば本命とは人人の生れたる年の干支をいふ、その干支に當れる星を本命星といふ、如何なる人も其吉凶禍福は、一にその定まれる星宿の支配を受けるものとせり。又元辰とは、人の生るるや必ず陰陽の二星ありて其生涯の運命を司配す、その生年の當年星は、これを本命星といひ、陽八陰六の推步によりて見出されたるものを元辰といふ、この二者の一は必ず陰星にして他は必ず陽星なりとす云云。

(ユ)理會とは治作(をさめなす)の謂なり、理解の謂にはあらず。

(メ)去處とは眼光落地の處をいふ。即ち四大(肉體を組成せる地、水、火、風の四元素)分離して何れの處に去るか、その去處を知れとの意。

(ミ)其功成就せば、世出世の事に明達せる了事の人となり。大丈夫とは、止觀輔行二の二に云く、「佛性の理を見る、之を丈夫と名く」と。

(シ)第二段、善友に親近することを喜ぶ。

(ヱ)自下、あてこすりを言ふなり。臨濟云く、「馳求の心を歇得せば諸佛と別ならず」と。

(ヒ)異路の上に於て之を言ふ。脚手とは、古人の垂れ示せし一機一境をいふ。

(モ)眞實は那邊に在るかを覰ひ見て、文字等に迷はされぬとなり。

(セ)說かば既に了解せる人を馬鹿にすると云ふことになるから

他を釘置せんことを。直に渠が將來自ら山僧と說話せんことを要せんを待つて、方に始めて渠と共に(ス)眉毛厮結んで理會することあらん、只だ恁麽に便ち休するにはあらず。(イ)學道の人若し馳求の心歇せずんば、縱ひ之れと眉毛厮結んで理會すれども、何の益かあらん、正に是れ(ロ)癡狂外邊に走るのみ。(ハ)古人云く、「善者に親近するに霧露の中に行くが如し、衣を濕さずと雖も時々に潤あり。」と、但だ頻に參政と說話せよ、(ニ)至禱至禱。(ホ)古人の垂示の言教を將つて(ヘ)胡亂に穿鑿すべからず、(ト)馬大師、讓和尙の說法に遇ふが如き、云く、「(チ)牛に車を駕するに譬ふ、車若し行かずんば車を打たんか、牛を打たんか、卽ち是なる。」馬師之れを聞いて言下に歸を知る。遮の(リ)幾句兒の言語、諸方多

との意。
(ス)眉毛等とは、額を合すなり。
(イ)已下は李參政に言ふに似て、實は江給事に對して、あてこすりを言ふなり。次の痴狂云云の語も亦同じ。
(ロ)癡狂等とは、諸魔外道は種種の異見を生ずる故に、しかいふ。明眼の人、外道を見ば則ち痴狂なり、傳燈二十九寶誌和尙の十二時の頌に云く、「縱ひ饒多聞にして古今に達するも、またこれ痴狂外邊に走る」と。
(ハ)潙山の警策の文なり、善者とは暗に李參政に擬ふ。
(ニ)至禱とは、書簡文の通語、至祝といふに同じ。一說に願ひの辭なり、參政と說話せよとなりと。
(ホ)第三段、猥りに古人の語を解する無れと示す。
(ヘ)胡亂は俗語なり、未だ出處を詳にせず、韻會に胡は遐なり、遐の意は、北狄の人渺茫として據なきをとる、又一義に北胡は北狄を指す、みだりがましきをいふと。
(ト)已下は情解すべからざるをいふ。第六祖大鑑慧能―南嶽懷讓、―馬祖道一。
(チ)傳燈五、南嶽章等に出づ、車は身に喩へ、牛は心に喩ふ。
(リ)幾句兒とは、數句兒といふに同じ、いかばかりといふ義。
(ヌ)如雷等とは奇言妙句を吐くをいふ。
(ル)雲の如く等とは辯才無礙なるに喩ふ。
(ヲ)錯等とは、江給事が諸方の邪師に隨つて杜撰の注解をなすを言ふ。杜撰とは資訓音義に云く、「杜は塞なり、撰は造なり、述なり、言ふ意は古法に通ぜずして自ら造るなり、杜充庭が佛經を假りて道經を

少說法して、(ヌ)雷の如く霆の如く(ル)雲の如く雨の如くなる底、理會し得ず。(ヲ)錯りて名言に下つて語に隨つて解を生ず、(ワ)舟峯に與ふる書の尾、杜撰の解注を見るに、山僧之れを讀んで覺えず(カ)絕倒す。(ヨ)如來禪・祖師禪を說く底と(タ)一狀に領過し(レ)一道に行遣すべし。(ソ)來頌子細に看過す、却つて前日の兩頌に勝れ得たり。此れより之れを已むべし。頌し去り頌し來らば、何の了期かあらん。參政が如きに相似よ、渠豈に是れ頌を做ることを會せざらんや。何が故ぞ都て一字なき、乃ち法を識る者は懼るるのみ。間或は(ツ)一毛頭を露せば、自然に(ネ)山僧が痒處に抓著す。出山の相の頌に、(ナ)『到る處人に逢ふて、驀面に欺く、』と云ふ語の如きは、(ラ)叢林の與に(ム)點眼の藥と作しつべし。公、異日自ら見ん、必

作るが如し」と。ものの格にあはぬを云ふ、卽ち沒交涉なり。語に隨つて解を生ずとは、牛、車を駕の語に當る。
(ワ)第二節、正しく給事の杜撰なるを說く。舟峰は大惠の法嗣なり。
(カ)絕倒とは歎息の辭、然し今此には笑ふをいふ、滑稽居類書八五に「絕倒は大笑なり」と。
(ヨ)七帖見聞に云く、「禪に祖師禪、如來禪の二あり、禪機に上中下の三根あり、上根は向上の機、向上の一路は先聖も未だ傳へず、思量に涉らず、義味に墮せざる本來本是の機なり、中根は公案をもつて得法す、所謂狗子無佛性等、公案の一句肝膽に銘すれば、決して妄念に引落されず、此上中の二根を祖師禪と名く。下根は佛經所說の禪法を以て開悟す、これを如來禪と名く。達磨は教法に依らずして悟達す、これ祖師所行の心印なるを以て祖師禪と名く。如來禪は經教に依つて禪行を起すをいふ、如來の所說に依るを以てなり」と。仰山云く、「如來禪は師兄の會を許す、祖師禪は未だ夢にだも見ず」と。
(タ)一狀領過とは、方語に衆人同罪の意と、卽ち邪師と江給事と一狀に領過するとなり。
(レ)一道行遣は、流罪に託して言ふ、道は路なり、行はおこなふの意。
(ソ)第四段、頌を作ることを制止す。
(ツ)些子の義を露はすをいふ。李參政にかゝる。
(ネ)江給事が言はんと欲するに、早く李參政が言ふなり。
(ナ)佛、處處に會をむすび給ふ故に言ふ。
(ラ)叢林とは、僧の聚合團體に名

ずしも山僧が注破せざるを。(ウ)某、近ろ公の頓然として改變して、此の事の爲にすること甚だ力めたるを見る、故に(ヰ)此の書を作りて覺えず縷縷たり。

(ノ)富樞密に答ふ　季申

(オ)示諭す、(ク)蚤歲より此の道を信向することを知れども、晩年知解の爲に障へられて、未だ(ヤ)一悟入の處あらず、日夕(マ)體道の方便を知らんことを欲すと。(ケ)既に至誠を荷ふ、敢て自ら外んせず、(フ)款に據りて案を結して葛藤す。少許(コ)只だ遮の悟入底を求むる、便ち是れ道を障ふる知解にし了れり。更に別に甚麼の知解かあらん、公の爲に障をなす。(エ)畢竟して甚麼を喚んでか知解となさん、知解は何れよりか至る、障へらる丶者は復た是れ阿誰そ。(テ)只だ此の一

く、即ち大樹の叢生して林となるが如く、僧の衆合せるの意なり。祖庭事苑に云く「多比丘一處に和合せるを僧伽と名く、譬へば大樹の叢聚せるを林と名くる如く、諸の比丘和合するを僧と名け、僧の聚まる處を叢林と名くるを得云云」と。

(ム)此事を看ば、人、道眼を開くが故にいふ。

(ウ)第五段、語を結ぶ。

(ヰ)此等を見るに、此書は、大慧が別に江給事に寄するの書ならん、又初めに人生一世等といふ、前後較べ看ば、則ち答書にあらざること明かなり、然れば首題に答の字を置くは誤ならん乎。

(ノ)此書の大意は知解寂滅の法門を示す。富の傳は、宋史列傳百三十四等に出づ。樞密は君の秘密の文章を司る官なり。

此書は大慧五十歳の作。

(オ)第一段、切誠を許す。

(ク)蚤は早なり、少年をいふ。

(ヤ)一とは少分の謂なり。

(マ)體とは體達にて道に合するの義、又は道を以て我體となす、即ち自分が道になりきるを體といふ。

(ケ)正しく切誠を許す、既荷とは大慧、樞密の至誠を荷ふなり。

(フ)款は誠なり、敬むなり、罪人の白狀、心の奥底を顯はすなり。案を結すとは、居家用心辛集に律令體式に合するなりと。

(コ)第二段、自ら知解を以て障と爲すを責む。巳下四節あり、初に知解を求むれば障あることを示す。

(エ)第二節、牒說。

(テ)第三節、判斷して生死の一句を結ぶ。此は下の生死の根本に系る。

句に顚倒三あり、(ア)自ら知解の爲に障へらると言ふ、是れ一。自ら未だ悟らずと言ふて甘じて迷人となる、是れ一。更に迷中にあり、心を將つて悟を待つ、是れ一。只だ遮の三の顚倒、便ち是れ生死の根本なり。(サ)直に須らく一念不生にして顚倒の心絕すべし。方に知る迷の破すべき無く、悟の待つべき無く、知解の障ふべきなきを。人の水を飮んで冷煖自知するが如く、久久に自然にして遮般の見解をなさざれ。(キ)但だ能く知解と知る底の心上に就いて看よ、還つて障へ得るや無や。能く知解を知る底の心上、還つて知許多般ありや無や。(ユ)從上大智慧の士、(メ)皆知解を以て儔侶となし、知解を以て方便となし、知解の上に於て(ミ)平等の慈を行じ、知解の上に於て諸の佛事を作さずといふこと莫し。龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。終に此れを以て惱とせず、只だ(シ)他、知解の起處を識得するが爲なり。既に起處を識得すれば(エ)此の知解に即して便ち是れ解脫の場、便ち是れ出生死の處なり。既に是れ解脫の場、出生死の處は、則ち(ヒ)知底、解底、當體寂滅す。知底解底既に寂滅すれば、能く知解を知るもの寂滅せずんばあるべからず。(モ)菩提涅槃、眞如佛性、寂滅せずんばあるべからず。更

(ア)自の字、主眼なり。

(サ)第四節、用心を示す、これ一刀兩斷の端的なり。傳燈三六、澄觀國師傳にあり。

(キ)此れより富樞密自ら詰る。

(ユ)第三段、古德は知解を以て障となさざることを示す。これに三節あり、今は初。

(メ)維摩經に出づ。

(ミ)平等の慈とは、無緣の慈、即ち違順任運に與樂拔苦する、法性同體の大慈悲をいふ。

(シ)他とは上の大智慧の人を指す。

(エ)八識を轉じて四智となす、知解の外に解脫の求むべきなし、迷情を轉ずれば凡夫即聖者なるをいふ。

(ヒ)知解のその儘が寂滅なり、知解を抑へ滅して始めて寂滅なるにあらず、知解分別の全體が即寂滅にして、解脫自在の德用なりと了得せば、菩提涅

に何物の障ふべきかあらん、更に何れの處に向つてか悟入を求めん。㋝釋迦老子の曰く、「諸業は心より生ず、故に心は如幻なり」と說く。若し此の分別を離るれば則ち諸の㋜有趣を滅す。僧、㋑大珠和尚に問ふ、「如何が是れ大涅槃。」珠云く、「㋺生死の業を造らざる、是れ大涅槃。」僧云く、「如何が是れ生死の業。」珠云く、「大涅槃を求むる、是れ生死の業。」又㋩古德の云く、「學道の人、一念も㋥生死を計すれば即ち魔道に落つ、一念㋭諸見を起すときは即ち外道に落つ」と。又㋬淨名の云く、「衆魔は生死を樂ふ、菩薩は㋣生死に於て、而も捨てず、外道は諸見を樂ふ、菩薩は㋠諸見に於て動せず。」と、㋷此れ乃ち是れ知解を以て儔侶となし、知解を以て方便となし、知解の上に於て平等の慈を行し、知解の上

槃等も亦寂滅なり、然らば求むべき菩提等なく、復た捨つべき知解もなし、畢竟平等平等にして吾人の四威儀の其まゝが本地の風光、何の障、悟の論ずべきあらんやとなり。

㋲菩提とは、佛智、大覺の智慧の梵名にして、覺と譯す、眞如の理を證悟し、道の至極に到達する聖智をいふ。涅槃とは梵語の涅槃那の略、或は泥洹とも書せり、寂滅、圓寂、滅度等と譯す。迷妄を打破して證得する眞理の寂滅にして、生死の苦、煩惱の擾亂無き故に、消極的の名を附したるなり。即ち不生不滅の眞理は、常、樂、我、淨の四德を具へたる圓滿無碍なる絕對的理想境を涅槃といふ。眞如とは一往名に依つて解せば、眞は眞實にして虛妄に非ざることを顯はし、如は如常にて變易なきを表す、即ち常住不變の眞理を眞如と名けしなり、此の眞如は無量の靈能を具し而も自性を固守せざるが故に、能く活動して十界の染淨差別の諸法となる、これ現象即實在、或は吾人の本體、萬有の實體等といふ所以なり。佛性とは、佛陀たるべき靈性と云ふことにて、吾人の本來具有する所の眞如法性を指す。この性は自性清淨にして佛と寸分異なること無きも、凡夫は煩惱の爲に覆蔽せられて之を自覺せず、而し此性を具する故に、吾人も佛陀たるべき資格を有するなり。以上の四は或は體に就き、或は用に就く等各その名を異にするも、畢竟其體は一なり、宗敎的に菩提、涅槃、佛性と名け、哲學的に眞如といふなり。

㋝第二段、引證。これ普賢の偈

に於て諸の佛事を作す底の樣子なり。㋦只だ他、三祇劫空にして、生死涅槃、倶に寂靜なることを了達するが爲の故なり。㋸既に未だ遮箇の田地に到らず、切に邪師の輩に、㋾胡說亂道して、引いて㋻鬼窟裏に入れらるることを被つて、眉を閉ぢ眼を合して妄想を作すべからず。邇來、祖道衰微して此の流、麻の如く粟に似たり。眞に是れ㋕一盲、衆盲を引いて相牽いて火坑に入る、深く憐愍すべし。願くは㋵公、脊梁骨を硬著して㋟遮般の去就をなすこと莫れ。遮般の去就を做す底は、暫く箇の㋹臭皮袋子を拘得し、住して㋞便ち以て究竟となすと雖も、而も心識紛飛して猶ほ㋡野馬の如し。縱然心識しばらく停れとも、㋧石の草を壓すが如し、覺えず又生ず。直に無上菩提に取いて、究竟安樂の處に到らん

なり、然し普賢もと佛の威神力を假る故に、釋迦といふも妨なし。

㋜三有（欲、色、無色の三界）五趣（地獄、餓鬼、畜生、人、天）なり、趣は往到の義にて吾人が煩惱、業の力に由りて往き生るべき處なるが故に名づく。

㋑大珠は馬祖の法嗣なり、傳燈錄六。

㋺生死の邊際を以て、懸崖に手を撒することを示す。

㋩古德は黃檗和尙を指す、傳心法要に云云。

㋥生死を計すとは貪、瞋、痴、慢、疑の煩惱を起して計着するなり。

㋭諸見とは、身見、邊見、見取見、戒禁取見、邪見なり。或は一異有無等の妄見と見ても可なり、見とは推度の義なり。

㋬淨名とは維摩詰の譯名なり、維摩經五、問疾品に出づ。

㋣生死に樂着せざれども、衆生を救濟せんが爲に之を捨てず、常に生死海に住す。

㋠菩薩は有無の實相に達する故に、有無に自在を得たまふ。然も衆生、有に着すれば無を以て之を破し、無に執すれば有を以て之を破す、只だ度生の爲に假に有無を立するのみ、故に動ぜられずといふなり。

㋷第三節、上を判結す。

㋦他とは　隨を指す、三祇とは三阿僧祇耶の略稱、阿は無と譯し、僧祇耶は數の義なれば數を極むるも、人の算數にて知る能はざる大數をいふ、これ一箇の數の名なり。その數は三つなれば三祇といふ。劫も梵語、劫波の略なり、大時分などと譯す、これ亦非常なる大數を顯はす語なり。極大乘

と欲せば、亦難からずや。㋤某、亦嘗て此の流のために誤らる。後來若し㋶眞の善知識に遇はずんば、幾ど空しく一生を過すことを致さん。毎毎思量するに、直に是れ㋰叵耐なり。故を以て口業を惜まず、力めて此の弊を救ふ、今稍非を知る者あり。㋻若し徑截に理會せんと要せば、須らく遮の一念子を㋼嚗地に一破することを得

敎にては、菩薩は三祇百劫の長年月の修養をなして自利利他の功德を成滿して至極の佛陀となるものとす。然し時間は吾人の分別の上に認むるもと法の上に假立しだるものなり、其萬法は本來無自性にて互に融通す、隨つて時亦念劫融卽すれば、一念卽萬年、萬年卽一念なり、故に時間の眞相に了達して長短を定執せざるを空といふ。此の如く體得すれば、生死、涅槃一如なるを知る、故に寂靜といふ。
㋸第四段、邪說を避けしむ。三節あり、初に正しく避けしむ。遮箇の田地とは上の生死涅槃とともに寂靜の語を指す。
㋾胡亂に說道すと言ふが如し。
㋻情識分別に味着する等をいふ。
㋕丹霞和尙の語なり、傳燈十四に出づ。これは邪師の人を導いて惡道に墮せしむるをいふ。
㋵邪師の說法は知解分別なれば耳に入り易し、故に脊骨を立てて、邪師に錯られざることを要せよとなり。去就とは身のふるまひをいふ。
㋟第二節、邪師の益なきことを顯はす。これ邪師と邪徒とにかかる。
㋹臭皮袋子とは、五尺の形骸をいふ、六祖壇經、頓漸品に云す。
㋞安樂を以て究竟となすを破す。
㋡野馬とは、司馬曰く、「春月澤中の游氣なり」と。卽ち陽炎をいふ。これ心のむらむらと起るに比す。
㋧方便を知らず、枉げて辛苦を發すを誡むるなり。
㋤第三節、自ら昔の事を書して邪謬を證す。
㋶眞の善知識とは暗に圜悟を指す。
㋰叵耐とは、たへがたし、こらへえぬの義、又忍ぶべからずの謂、今此にはながしいことといふ意。
㋒第五段、工夫の用心を示す。
㋼嚗地は、正字通に「物の落つる聲なり」と、今は妙悟をいふ、卽ち囫地一下の處なり。
㋨按は止るなり、據る、按へる、抑へる等にて、種種分別する心を押へて、分別するもの何物ぞと究むる意か。六祖云く、「不思善不思惡、此れ按下の處」と。
㋔圜悟、大慧、宗風の振はざるを慮りて提撕の手段を下す、然らば話頭することば南宋の時代より始まるなり。然るに年を經るに隨つて一種の格式を成すに至る。
㋗無の字の工夫提撕なり。

て、方に生死を了得して方に悟入と名くべし。然も切に心を存して破ることを待つべからず、若し心を存して破る處に在かば、則ち永劫にも破るとき有ること無けん。但だ妄想顚倒底の心、思量分別底の心、生を好み死を惡む底の心、知見解會底の心、靜を欣ひ閙を厭ふ底の心を將て一時に㋨按下して只だ按下の處に就いて㋔箇の話

㋳意根とは第七識、併し今は意識をもて思慮を運しうすることを誡むるなり。
㋮揚眉等とは、一機一用をいふ。
㋘採は最度なり、帆を落すなりと、根は木の根、要するに今は思念に滯留するの意。
㋫無事甲裏とは、無用の處をいふ、部を分けて棚に打擧げて置くなり。事物紀原四に云く、今の祟文に錄する所の書、經、史、子、集を具へて、甲、乙、丙、丁の四部となるは、蓋し晉の李充に始まる。時に典籍混雜す、充、類を以て相從へ分つて四部となす、これ蓋しその始なり、魏の武、四庫の圖書を置くに甲、乙、丙、丁に分つて部となす。
㋙擧起等とは、師家の擧處に就て、はやがてんするをいふ。
㋓擧覺とは、擧起覺悟にて氣を引き立てること。
㋢月の十日とは甚だ早きをいふ。
㋐第六段、世務、工夫を妨げざるを示す。一郡等の一とは千に對していふ。一郡は樞密が領する所をいふ。千里とは天子の畿內をいふ。事とは事務をいふ。宋史志に云く、「天子の事を司るをいふ」と。
㋚古人とは臨濟を指すと、而し此文なし、恐らくは意を取るか。茂古林の天平錄三に出づ。これ閙中に於て靜中の工夫をなすをいふ。
㋖閙雜の全體、これ靜なるが故に。
㋴世法を除いて佛法を求めば、則ち遠くして遠きなり。
㋱これは富樞密に答ふる第二書なり、此書は紹興八年の作。
㋯第一段、隨喜問訊す。
㋛勇猛等の文、法華方便品に出づ。
㋽作爲の際とは、公務の際なり、相應とは此事に相應するなり。
㋪第二段、坐禪を好むを退く、二節あり、初に正しく靜坐を好むを斥く。
㋲古人とは法雲圓通禪師なり、坐禪儀に出づ。聯燈、普燈に坐禪儀を載せず、百丈淸規に之を載す。
㋝活計とは、少分理味を嚼み出すをいふ。
㋜靜勝とは坐禪をいふ。
㋑下に直閣公に答ふる書あり。
㋺料る所とは、上の私かに慮るに合す。
㋩第二節、靜勝坐禪の益なきを言ふ。餘あるの士とは、世事繁多をいふ。塵勞も亦世事紛冗をいふ。
㋥人とは邪師を指す。
㋭石の草等とは、靜を以て鬧を

頭を看よ。僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無しや。」州云く、「無。」此の一字子、乃ち是れ許多の惡知惡覺を摧く底の器仗なり。㋗有無の會を作すことを得ざれ、道理の會を作すことを得ざれ、㋳意根下に向つて思量卜度することを得ざれ、㋮揚眉瞬目の處に向つて㋘探根することを得ざれ、語路の上に向つて活計をなすことを得ざれ、㋫無事甲裏に颺在することを得ざれ、㋙擧起の處に向つて承當することを得ざれ、文字の中に向つて證を引くことを得ざれ。但だ十二時中、四威儀の内に向つて、時時に提撕し、時時に㋓擧覺せよ。「狗子還つて佛性ありや也た無しや。」云く、「無」と。日用を離れず。試に此くの如く工夫をなして看よ、㋢月の十日に便ち自ら見得せん。㋐一郡千里の

歴するを喩ふ。

㋬第三段、眞正寂滅を示す。

㋣驀地とは正字通に云く、「超越なり」と。

㋠一絲等、會元十二、南嶽の雲峯大悅禪師上堂に云く、「若し諸相は相に非ずと見ば、即ち山河大地並に過咎なし、諸上座、終日着衣喫飯し、未だ曾て一粒米を齩著せず、未だ曾て一縷絲を挂著せずんば便ち能く大地を變じて黃金となし、長河を攪して酥酪となさん、然も是くの如く着衣喫飯すと雖も、即ち衲僧門下、汗臭氣無きにあらず」と。

㋷心を得れば唯だこれ自利、利他は用、自利は體にして、日輪の出づる時自ら光を含むが如し、施とは施設なり。

㋦陀羅尼とは總持と譯す、一字の中に無量の教文を總攝し、一法の中に一切法を任持し、一義中に無量の義を攝し、一聲中に無盡の功德を藏する故なり。或は遮持と譯す、煩惱等の諸惡を遮離し、法身般若等の衆德を持達する故なり。

㋸神通遊戲とは神變不思議の用をいふ。神異不測を神と名け、自在無碍なるを通といふ。兒戲の如く幻師の幻術を弄する如く、物に着せず滯らず、自在なるを遊戲といふ。これ物に着せず、縛せられず隨つて自在に人類を救濟する力用をいふ。

㋾如意とは梵語の摩尼の譯名にて寶珠の名なり、故に如意珠とも摩尼珠ともいふ。此珠を所持すれば、願求する所、意の如く此の珠中より顯現するが故に名づくと。これ人人本具の珠を喩へしなり。解脱とは無碍、自在の德用をいふ。凡夫は煩惱業の爲に束縛せら

事、都て相妨げず。㋚古人の云く、「我が這裏は是れ活底祖師意」と。甚麼物か能く他を拘執するあらん。若し日用を離れて別に趣向あらば、則ち是れ㋖波を離れて水を求め、器を離れて金を求めば、㋴之れを求むれば、愈遠し。

㋱又

㋯竊かに知る、日來此の大事因縁を以て念となすと。㋛勇猛精進、純一無雜なること喜躍するに勝へず。能く二六時中、熾然たる㋽作爲の際、必ず相應することを得るや未だしや、寤寐の二邊一如なることを得るや未だしや。㋪如し未だしならば、切に一向に沈空趣寂すべからず。㋲古人喚んで黑山下の鬼家の㋝活計となす、盡未來際も透脱の期あること無けん。昨に來誨に接するに、私かに慮る左右必ず已に㋜靜勝三昧に耽著することを。㋑直閣公を詢ふに及んで、乃ち知る果して㋺料る所の如くなることを。㋩大凡世に渉つて餘あるの士、久しく塵勞の中に膠す。忽然として㋥人指して、靜默の處に向つて工夫を做さしむることを得て、乍ち胷中無事なることを得れば、便ち認著して以て究竟安樂となす。殊に知らず、㋭

れて自由を得ざるが、一たび佛陀の正教に依りて煩惱を離れ理を證すれば、直に生死の迷苦を出離して自在を得る故に、如意解脱門といふ、而も無限の自在なるが故に無盡藏といふなり。華嚴經世主妙嚴品及び入法界品に出づ。

㋻能事とは、能は獸なり、筋力ありて善く木に緣る故に、今その事を善くするを能といふ。事苑二の十三丁。

㋕故らに造作して然らしむるにあらずと。常分とは、もとより此の如しとの意。

㋵第四段、預め悟後の境界を叙して勸勵す。期とは大惠が期するなり。

㋟皎然とは大悟の境界をいふ。

㋹出世の事成就をいふ。

㋞世間法成就をいふ。再とは宋史本傳を案ずるに、紹興の年は大惠は徑山に住す、公は猶

石の草を壓すに似たることを。暫く消息を絕することを覺ゆと雖も、奈何せん根株猶ほ在ることを。寧ろ證徹寂滅の期あらんや。㋬眞正寂滅現前せんことを得んと要せば、必ず須らく熾然たる生滅の中に於て㋣驀地に一跳に跳出すべし。㋠一絲毫を動ぜず、便ち長河を攪して酥酪となし、大地を變じて黃金となし、機に臨んで縱奪殺活自由、㋷利他自利、施として可ならずといふこと無けん。先聖喚んで㋦無盡藏陀羅尼門、㋸無盡藏神通遊戲門、㋾無盡藏如意解脫門となす。豈に眞の大丈夫の㋻能事に非ずや。然も亦㋕然らしむるに非ず、皆吾が心の常分のみ。願くは左右快く精彩を著けよ、㋵決めて期す此に於て廓徹大悟して、胷中㋟皎然として百千の日月の如く、十方世界、一念に明了にして一絲毫頭の異想なくして、始めて究竟と相應することを得んことを。㋹果して能く是くの如くならば、豈に獨り生死の路上に於て力を得るのみならんや。㋞異日再び鈞軸を秉つて、君を堯舜の上に致すこと、㋡諸れ掌を指すが如くならんのみ。

又

㋥示諭す、初機、少しく靜坐工夫を得るも、亦自ら佳なりと。又云く、

州に在り、而して此時は旣に職を辭せし後か。鈞軸とは、樞密は中書と相對して重き官なり、其の樞柄を採ること、車軸を推すが如し、故に斯くいふか。
㋡諸掌とは明かにして且つ易きをいふ。論語八佾篇に出づ。
㋥これ第三書なり、第一段、靜勝に認著する初機を呵す、之に三節あり、初に正しく呵す。
㋤富が自ら靜勝に耽著して、而も之を知らざるを喩ふ。
㋶坐禪觀法すと雖も、根源を知らざれば益なし、只だ行住坐臥に心を着けて看よとなり。
㋰初死の人をいふ。しにもきらぬといふ義は不可なり、死人は體なり。魂不散とは用なり。
㋒第二節、古則を引いて、靜坐をなからず、初機も亦作佛することを叙す、此段は初機晩學

「敢て妄に靜見をなさず、黃面老子の所謂、譬へば人ありて自ら㋤其の耳を塞いで高聲に大いに叫び、人の聞かざらんことを求むるが如し、眞に是れ自ら障難をなすのみ。㋶若し生死の心未だ破せずんば、日用二六時中、冥冥蒙蒙地に㋰魂不散底の死人の如く一般なり。更に甚の閑工夫を討ねて靜を理會し閙を理會せんや。㋒涅槃會上に㋼廣額の屠兒、屠刀を放下して便ち成佛す。㋨豈に是れ靜中の工夫を做し來らんや、㋔渠豈に是れ初機にあらずや。左右此れを見ば、定めて以て然らずとなして、須らく差排すべけん。渠は古佛の示現をなすのみ、今の人此の力量なし」と。若し是くの如く見ば、乃ち㋗自らの殊勝を信ぜず、甘んじて下劣の人となるなり。㋳我が此の門中は、初機晩學を論ぜず、亦久參先達を問はず、若し眞箇の靜を要せば、㋮須らく是れ生死の心を破るべし。工夫を做すことを著ざれども、生死の心破らるれば則ち自ら靜なり。先聖所說の㋘寂靜の方便は、正に㋫此れが爲なり。㋙自ら是れ末世の邪師の輩、先聖方便の語を會せざるのみ。㋓左右若し山僧を信得及せば試に㋢閙處に向つて狗子無佛性の話を見よ。未だ悟不悟を說かじ、正に㋐方寸擾擾たる時に當つて、謾に提撕擧

なしといふことを引く。
㋼廣額云云は南本涅槃經十七、事死五等にある語。
㋨豈に是れ等とは、靜勝を斥く。
㋔渠とは屠兒なり。
㋗自己分上刹那成佛する殊勝を信ぜずとなり。
㋳第三節、初機晚學を並旋す。
㋮これは閙外に工夫をなすと雖も、生死の心を破らざれば則ち自ら閙なることを示す。
㋘寂靜卽ち方便なり。
㋫此とは、生死の破るる處を指す、佛の方便を設けたまふは生死の心を破らんが爲なり。
㋙先聖に過なしと結す。
㋓第二段、眞正の工夫を示す。
㋢今富樞密が靜勝に耽著するが故に、敵當して閙處等といふ。
㋐方寸とは自己の胷中といふが如し、擾はさわがしきなり。
㋚得力を覺する時を放過するなとなり、十牛の圖の繩索を取

覺して看よ、還つて靜を覺するや也た無や、還つて得力を覺するや也た無や。若し得力を覺せば便ち(サ)放捨することを須ひざれ。(キ)靜坐を要する時は但だ一炷の香を燒いて靜坐せよ、坐せし時は(ユ)昏沈せしむることを得ず、亦掉擧なることを得ず。昏沈掉擧は、先聖の呵する所、靜坐せんとき纔かに此の兩種の病現前することを覺せば、但只だ狗子無佛性の話を擧せよ。兩種の病、力を用ひて排遣することを著ざれども、當下に怗怗地ならん。日久しく月深くして、纔かに省力を覺せば、便ち是れ得力の處なり。亦靜中の工夫をなすことを著ざれども、只だ這れ便ち是れ工夫なり。(メ)李參政、頃泉南に在りて初めて相見せし時、山僧が力めて默照邪禪の人の眼を瞎するを排するを見て、渠初め不平にして疑怒相半ばなり。驀ち山僧が庭前の柏樹子の話を頌するを聞いて、忽然として(ミ)漆桶を打破して一笑の中に於て千了百當す。方に(シ)山僧が口を開けば膽を見て秋毫相欺くことなく、亦(エ)是れ人我を爭ふにもあらざることを信ず。便ち山僧に對して懺悔す、此の公、現に(ヒ)彼に在り、請ふ試に之れに問へ、(モ)還つて是なりや無や。(セ)道謙上座已に福唐に往く、識らず已に彼に到るや否や。此の(ス)子參禪辛苦

りて放さざるが如くに。

(キ)坐禪の用心を示す、此事は閙靜の上になし、只だ坐禪を好まば坐禪せよ、坐するも亦可なりと。これ前に靜坐に耽著するを呵す、故に富樞密が坐禪は一向に不可なりと思はん、故に言ふ。

(ユ)昏沈は禪床の病にて、昏々として眠むるが如く、くらくなるをいふ。掉擧とは、心おちつかず、さはがしきをいふ。

(メ)第三段、引證、富樞密相見の張本となす。

(ミ)無分曉、大悟の處をいふ。方とは李參政をいふ。

(シ)文意は、大惠、心肝五臟を突出して敢て覆藏せざるをいふ。

(エ)默照を說く人を惡むに非ずとなり。

(ヒ)彼とは泉南を指す。

(モ)虛實を問取するなり。

(セ)道謙は聯燈十七に出づ。

を喫すること更に多し、亦嘗て十餘年、(イ)枯禪に入る、近年始めて箇の安樂の處を得たり。相見の時、誠に渠に問へ、「如何んが工夫を做ん」と。(ロ)曾て良子となつて偏に客を憐む、想ふに必ず至誠に吐露せん。

李參政に答ふ　(ハ)別紙　漢老

(ニ)富樞、頃(ホ)三衢に在りし時、嘗て書來つて道を問ふあり、因りて葛藤を打すること(ヘ)一上、(ト)落草少からず。尙ほ爾も默照の處に滯在す、定めて是れ邪師に鬼窟裏に引入せらるること疑なし。今又書を得るに、復た靜坐を執して佳なりとなす、其の滯泥すること此くの如し、如何んが徑山が禪に參得せん。今次渠に答ふる書、又復た縷々として葛藤す、(チ)口業を惜しまず、痛く與に剗除す。又知らず肯ふて頭を回し、腦を轉じ日用の中に於て話頭を看るや否や。(リ)先聖の云く、「寧ろ戒を破ること須彌山の如くすべしとも、邪師に一邪念を熏ぜられて、芥子許りの如くも情識の中に在くべからず、油を麪に入るるが如し永く出づ可からず」とは、(ヌ)此の公是なり。(ル)如し之れと相見せば、試みに渠に答ふる底の葛藤を取つて一觀して、因つて箇の方便を作して此の人を救取せよ。(ヲ)四攝法の中に同事攝を

(ス)子とは白虎通に云く、男子の通稱。

(イ)偏枯の死禪に陷入す。

(ロ)これは只だ古句を引いて喩となすのみ。

(ハ)別紙とは、本書の外に遣はす添狀なり。

(ニ)第一段、富が邪に滯ることを示す。

(ホ)三衢は浙江名勝志十に、常山縣にあり。

(ヘ)一上とは一回の意。

(ト)落草とは、向上の地を離れ下つて、草裡の低下に落ちて人を接するなり、碧巖四十三則に、雲門曰く「此慈悲の爲に落草の談あり」と。不二抄二に云く「正路大道に在つて行かざるなり」と。

(チ)此事、元來說くべきなし、僅かに舌を動かさば即ち口業なり。

(リ)破戒の罪は尙ほ償ふべし、一

以て最も強れたりとなす、左右當に大いに(ワ)此の法門を啓いて其をして信入せしむべし。唯だ山僧が一半の力を省得するのみにあらず、亦渠をして信得及して、肯て舊窟を離れしむるなり。

(カ)陳少卿に答ふ　季任

(ヨ)諭を承く。意を此の段の大事因緣に留めんと欲すれども、根性極めて鈍なりとなす。(タ)若し果して此くの如くならば、當さに左右の爲に賀すべし。(レ)今時の士大夫多くは此の事に於て百了千當して直下に透脱すること能はざることは、只だ根性太だ利に、知見太だ多くして、宗師の纔かに口を開き舌を動かすを見て、早く一時に會し了るが爲なり。故を以て返つて鈍根の者の許多の惡知惡覺なくして、驀地に(ソ)一機

たび邪念情識に任せば救ふべからざるをいふ。
(ヌ)此公とは富樞密を指す。是とは物を指す詞。
(ル)第二段、同事攝を勸む。
(ヲ)四攝法とは、一に布施攝、若し衆生、財を欲すれば財を施し、若し法を樂めば法を施し、是に因つて親愛の心を生じ、我れに依つて道を受けしむるをいふ。二に愛語攝とは、衆生の根性に隨つて善言もて慰諭し、是に因つて親愛の心を生じ、我に依附して道を受けしむるをいふ。三に利行攝とは、身口意の善行を起して、衆生を利益し、是れに由つて親愛の心を生ぜしめ、道を受けしむるをいふ。四に同事攝とは、法眼を以て衆生の根性を見、その所樂に隨つて形を分けて示現し、其所作の事を同じくして利益に霑はしめ、是れに由つて道を受けしむるをいふ。仁王經中に出づ。
(ワ)此の法門とは同事攝を指す。
(カ)宋史列傳百三十六、萬姓統譜十七に出づ。宋史に季任を壬に作る。
(ヨ)第一段、却つて他の鈍根を示す。之に二節あり、初に正しく示す。
(タ)若し云云は、人をあしらひ、うやまふの意。
(レ)第二節、却つて利根を斥く。
(ソ)一機一境とは、拈鎚執拂をいふ。
(ツ)歷代の祖師出で來るも、他を勘辨し得ざるをいふ。
(ネ)胷中に道理なければ、洒落にして機境に動ぜず。
(ナ)利根の者を、華嚴には蛇舌に喩ふ。
(ラ)第二段、古を引いて上の事の證とす。南泉は馬祖の法嗣、傳燈八、傳燈二十八の二十八

一境の上、一言一句の下に於て撞發するには如かず。便ち是れ(ツ)達磨大師出頭し來つて、百種の神通を用ひ盡すとも也た他を奈何ともすること得じ、只だ他、(ネ)道理の障ふべき無きが爲なり。(ナ)利根の者は返つて利根に障へられて、啐地に便ち折れ、嚗地に便ち破ることを得ること能はず。假饒ひ聰明智解の上に於て學得するも、自己本分の事の上に於て轉た力を得ず。(ラ)所以に南泉和尚云く、「近日禪師太だ多し、箇の癡鈍の人を覓むるに不可得なり」と。(ム)章敬和尚云く、「至理は言を亡ず、時人悉かにせず、强ひて(ウ)他事を習ふて以て功能をなす、自性元塵境に非ざることを知らず。」是れ箇の微妙の大解脱門なり、有らゆる(ヰ)鑑覺、染せず礙せず、是くの如きの光明未だ曾て休廢せず。曩劫より今に至るまで固に變易なし。猶ほ日輪の遠近斯に照すが如し、衆色に及ぶと雖も一切と(ノ)和合せず、靈燭妙明にして(オ)鍛鍊を假るに非ず、了せざるが爲の故に(ク)物象を取る。但だ(ヤ)目を揑つて妄に空花を起すが如し、(マ)徒らに自ら疲勞して枉げて劫數を經、若し能く返照せば、第二人なし、(ケ)擧措施爲して實相を虧かずと。(フ)左右自ら鈍根と言ふ、試に此くの如く返照して看よ、能く鈍と知る者還つて鈍なり

丁南泉香語なり、近日禪師云云の次に云く「若し有らば出で來れ、你と共に商量せん」云云。今は少卿が鈍根を苦にする故に、鈍根に慣せざらしめんが爲に此を引くなり。
(ム)京兆府章敬寺の懷暉禪師なり、馬祖の嗣、之は上堂の語なり、會元三、三十四丁に出づ。
(ウ)他事とは至理の外の事、瓦を磨して鏡となすが如し。功能は功用藝能にて功行に同じ。
(ヰ)鑑覺は見聞覺知をいふ。
(ノ)和合は不染の義、靈は靈明なり。
(オ)修行して成ずるにあらず、本來解脱の故に。
(ク)目前の萬物、本來無なるを取つて自ら解を成す。
(ヤ)目を云は楞嚴經八。
(マ)凡夫は妄に衆法を現出して苦惱を受けて流轉すと、或は行

や無や。若し回光返照せずして只だ(コ)鈍根を守つて更に煩惱を生せば、乃ち是れ幻妄の上に向つて重ねて幻妄を增し、空花の上に更に空花を添ふ。但だ(エ)相聽せ、能く根性鈍なりと知る者、決定して鈍ならず。(テ)這箇の鈍底を守著することを得ずと雖も、然も亦這箇の(ア)鈍底を捨却して參ずることを得ざれ。取捨利鈍は人に在つて心に在らず、(サ)此の心、三世の諸佛と一體無二なり、若し二あらば則ち法平等ならず。(キ)敎を受け心を傳ふ、倶に虛妄たり、眞を求め實を覓む、轉た參差を見る。但だ一體無二の心、決定して利鈍取捨の間に在らざることを知得せば、則便ち當に(ユ)月を見、指を亡じて、直下に一刀兩段すべし。若し更に(メ)遲疑して前を思ひ後を算らば、則乃ち是れ(ミ)空拳指上に實解を生じ、(シ)根境法の中、虛しく揑怪す。(ヱ)陰界の中に於て妄に自ら囚執して了時あること無けん。(ヒ)近年以來一種の邪師ありて、默照禪を說いて人を敎へて十二時中、是れ(モ)事、管することと莫れ、休し去り歇し去つて壟を做すことを得ざらしむ、恐くは(セ)今時に落することを。往々に士大夫、聰明利根の爲に使はるゝ者多くは是れ鬧處を厭惡す。乍ちに邪師の輩に指して靜坐せしめられて、却つて(ス)省力を見て、便ち以て是となして、更に妙悟を求めず、只だ默然を以て極則となす。某、口業を惜まず力めて此の弊を救ふ、今稍々非を知る者あり。(イ)願くは公、只だ疑情破れざる處に向つて參せよ、(ロ)行住坐臥放捨することを得ざれ。僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無しや。」州云く、「無。」這の一字子、便ち是れ箇の生死疑心を破る底の刀子なり。這の刀子の欛柄、只だ當人の手中に在り、別人をして手を下さしむること得ず、須らく是れ(ハ)自家手を下して始めて得べし。若し性命を捨得せば、方に肯て自ら手を下さん、(ニ)若し性命を捨て得ざれば、且く只管疑不破の處に在つて崖め將ち去れ、驀然として自ら肯て命を捨つること(ホ)一下せば便ち了せん。那時に方に信せん、靜の時便ち是れ

人、六度萬行を立て五十二の階級に墮す、吾宗には階級に入らず、直に本性此の如し等と。

(ケ)擧措とは、處置動作なり、ふるまひなり。施爲とは安布施爲なり、なしなすなり。

(フ)第三段、眞心の「」に鈍根なきことを叙す。已下大慧の語。

(コ)鈍根を守るこれ一つ、其上に煩惱を生ずるなり、此れきのどくといふ意。今の煩惱とは貪瞋等を指すにあらず、世上に言ふ煩悶懊亂の謂なり。

(エ)相聽は下の語にかけて看よ。

(テ)第二節、鈍根を取捨することを嫌ふ。

(ア)鈍底を返照して看よとなり。

(サ)不昧の自己の本心に二なし、此れ仰山の所謂鈍底を知る底あり許多般なし、本性の上には利鈍なし、何の是れを嫌ふことか之れあらんと。金剛經に云く、是の法平等にして高下あることなしと。

(キ)受と傳とは虛妄なり、虛妄を徹證し虛妄の處を知らば、此れ傳法なり。

(ユ)月を見る云云は圓覺經三、楞嚴二に出づ、指を忘するは魚を得て筌を忘ずるが如し。

(メ)遲退疑惑、前を思云云は計較分別するをいふ。

(ミ)空拳等は、證道歌に出づ。涅槃經に曰く、「拳內に物なきが如し、此心上の中に利鈍なし」と。

(シ)六根所緣の境法。揑怪とは、此には奇を好み怪を好む心上法界の中には一物なし、無き處に於て一物ありと見るなり。

(ヱ)陰界は、色、受、想、行、識（初の一は物、後の四は心なり）の五陰と。六根、六境、六識の十八界となり。

(ヒ)第四段、利根の人却つて邪見に墮することを叙す、利根とは師敎を受けて早や合點するをいふ。

(モ)事とは一大事因緣。

(セ)道安否禪師の語、會元。

(ス)省力とは、省力得力にあらず、靜坐して僅かに安を得るをいふ。石の草を壓するが如し。

(イ)第五段、正工夫をなさしむ。

(ロ)下の文にかけて看よ、此一句心切の謂なり。

(ハ)自家、優婆塞戒經に云く、「我身自ら度脫す」と。

(ニ)これ煩惱相續を喩ふ。

(ホ)一下とは一度の意なり。證道歌に云く、「行また禪、坐もまた禪、語默動靜體宴然」と。

(ヘ)問ふことを著すとは上に屬して見るべし。

(ト)第六段、引文。此の文簡要なり、朱世英は林間錄下卷に出

閙時底、閙の時便ち是れ靜時底、語の時便ち是れ默時底、默の時便ち是れ語時底、人に(ヘ)問ふことを著ずとも、亦自然に邪師の胡説亂道を受けじ、至禱至禱。(ト)昔朱世英、嘗て書を以て雲庵の眞淨和尚に問うて云く、「佛法の至妙、日用如何が用心し、如何が體究せん、望むらくは慈悲もて指示せよ。」眞淨の曰く、「佛法の至妙は無二、但だ未だ妙に至らざれば、則ち互に長短あり、苟も妙に至れば則ち悟心の人なり。(チ)如實に自心究竟本來成佛なることを知りて、(リ)如實自在、如實安樂、如實解脫、如實清淨にして、而も日用唯だ自心を用ふ、自心の變化、把得して便ち用ふ、是と非とを問ふこと莫れ。擬心思量すれば早く不是なり、(ヌ)擬心せざれば一々天眞、一一明妙、一々蓮花の水に著かざるが如し。心清淨なること(ル)彼れに超えたり。所以に自心に迷ふが故に衆生となり、自心を悟るが故に成佛す。而も衆生即ち佛、佛即ち衆生、迷悟に由るが故に彼此あり。如今學道の人、多く自心を信ぜず、自心を悟らず、自心を明妙受用することを得ず、自心の安樂解脫を得ず。心外に妄に禪道ありとし、妄に奇特を立し、妄に取捨を生ず。縱ひ修行するも、(ヲ)外道二乘の禪寂斷見の境界に落つ。」(ワ)所謂

づ、雲菴は隱居處の名なり、僧寶傳二十三、續燈十三。上に行住坐臥放捨するを得ざれといふ故に、日用の事を引いて示す。

(チ)圓覺經普賢章、華嚴經五十二如來出現品に出づ。

(リ)此四句は常、樂、我、淨の四德を取るなり、自在は隱顯出沒自在にして、これ我の義なり。安樂は生死を放捨す、これ樂の德なり。解脫は世間、業縛を解脫したることにて、是れ常の德なり。淸淨は煩惱の汚を受けざるをいふ、これ淨の義なり。四皆法に稱ふ故に如實といふ。

(ヌ)擬心とは心を起して分別するなり。

(ル)彼とは蓮花を指す。

(ヲ)外道は斷、常に安住して、因果を撥無し、二乘は禪寂の處に耽著して捨てず、[illegible]行脚

修行、恐らくは斷常の坑に落ちんことを。其の斷見といふは、(カ)自心本妙の明性を斷じ滅却して、一向に心外に空に著し、禪寂に滯るなり。常見といふは、(ヨ)一切法空を悟らず、世間諸の有爲の法を執着して以て究竟となす。(タ)邪師の輩、士大夫を敎へて心を攝して靜坐して、事々管すること莫く、休し去り歇し去らしむ。豈に是れ(レ)心を將て心を休し、心を將て心を歇し、心を將て心を用ふるにあらずや。(ソ)若し是くの如く修行せば、如何してか外道二乘の禪寂斷見の境界に落ちざらん、如何してか自心の明妙受用、究竟安樂、如實清淨、解脫、變化の妙を顯得せん。(ツ)須らく是れ當人自ら見得し、自ら悟得して、(ネ)自然に古人の言句に轉ぜられずして、而も能く古人の言句を轉得すべし。(ナ)清淨摩尼寶珠を泥潦の中に置くが如し、百千歲を經れども亦染汚すること能はず、本體自ら清淨なるを以ての故に。(ラ)此の心も亦然り、迷ふ時に正りて(ム)塵勞の爲に惑はさるれども、而も此の心體は本會て惑はされず、所謂蓮花の水に著かざるが如し。(ウ)忽ちに若し此の心本來成佛なることを悟得すれば、究竟自在如實安樂、種々の妙用も亦外より來らず、本自ら具足するが爲の故に。(ヰ)黃面老子の曰

の眼を具せざるが故に、妄見に墮するなり。

(ワ)第七段、外道二乘の如く、禪寂に滯ることを叙す、此は雲菴の語を敷演す、巳下五節あり、初に外道二乘自心を明妙受用の語を敷演す。

(カ)本來具足の本明を外道は自ら斷滅すと雖も、實は斷滅するにあらず、妄計して異物を認むるのみ。

(ヨ)元來一切の法は無自性空なり、然るに……。

(タ)上の證道歌の斷常の語を解す、邪見を以て邪師の處を結判す。

(レ)心とは妄心なり。

(ソ)眞淨の語を以て邪師の敎化を結す。

(ツ)第二節、上の自心を信ぜず自心を悟らずの語を敷衍す。自ら見得すとは、自己本有の處を悟得するなり。

く、「定法として㋨阿耨多羅三藐三菩提と名くることあること無く、亦定法として如來の說くべき有ることなし。若し本體實に㋔恁麼の事ありと確定せば、又却つて不是、事已むことを獲ずして迷悟取捨に因るが故に、道理を說くこと若干あることは、未だ㋗妙に至らざる者の爲にする㋳方便の語のみ。其れ實に本體亦㋮若干なし。㋘請ふ公、只だ恁麼に用心せよ。日用二六時中、生死佛道是れ有と執すること得ず、生死佛道を㋫撥して無に歸することを得ざれ。但只だ看よ、「狗子還つて佛性ありや也た無しや。」趙州云く、「無」と。切に意根下に向つて卜度すべからず、㋙言語の上に向つて活計をなすべからず。又㋓口を開く處に向つて承當することを得ず、㋢又擊石火閃電光の處に向つて會することを得ず、狗子還つて佛性ありや也た無しや、無、但只だ此くの如く參せよ。亦心を將て悟を待ち、休歇を待つことを得ず。若し心を將て悟を待ち休歇を待たば則ち轉た沒交涉ならん。

又

㋐示諭す。山野が向來の書を得てより後、㋚彈避し得ざる處に遇ふ毎に、常に自ら點檢すれども、而も未だ著力の工夫あらずと。只だ遮の彈避し得

㋧自然とは、心を疑はざるをいふ。言句云云とは、言句につきまはらぬをいふ。
㋤第三節、心清淨なること蓮花の如しといふを敷演す。滓は泥水をいふ。
㋶下は喩を法に合はす。
㋰外道二乘の有、無に滯着するは、本分に稱はざれば、みな塵勞なり。
㋒第四節、上の自心究竟本來成佛すの語を敷衍す。
㋼第五節、金剛經を引いて、前の至妙無二の說を敷演す。
㋨阿耨多羅三藐三菩提は梵語、無上正徧智と譯す、佛陀の智德を稱する一名號にして、佛は絕待智者にして其智に超えたるものなきが故に無上といひ、萬法の一一を了悟し通達せざるなきが故に正徧智といふ。
㋔恁麼の事とは、上の自在安樂

ざる處、便ち是れ工夫し了れり。㋖若し更に力を著けて點檢せば、則ち又却つて遠し。㋴昔、魏府の老華嚴云く、「佛法は日用の處、行住坐臥の處、喫茶喫飯の處、語言相問の處、所作所爲の處に在り、心を擧し念を動ずれば又却つて不是なり」と。正に彈避不得の處に當つて、㋱切に忌む心を起し、念を動して點檢の想をなすことを。㋯祖師の云く、「分別生せざれば、虛明自照す」と。又㋛龐居士の云く、「日用の事別なし、㋽唯だ吾れ自ら偶諧す。㋪頭々取捨せざれ、㋲處々張乖すること勿れ、㋝朱紫誰か號を爲す、丘山點埃を㋜絕す。神通並に妙用、水を運び及び㋑柴を般ぶ」と。又㋺先聖の云く、「但だ有心にして分別計較する、㋩自心見量の者は悉く皆是れ夢なり」と、㋥切に記取せよ。㋭彈避し得

本有具足するをいふ、恁麼の事ありとせば不可なり。
㋗本體無二の語を說いて眞淨の語を結す。
㋳方便の中に種種の妙用を具足して說く。
㋮無とも言はれざる故に若干といふ。
㋘第八段、再び正工夫を勸めて結す。
㋫撥は絕なり除なり。
㋙著語、頌作等の言語。
㋓口を開くとは師家に系る
㋢頓機を以て是となすは、一往の方便なり、其實は頓に在らず、漸に在らず、故にいふ。
㋐此書の大意は、擬心點檢せば、皆道に違するを叙す。第一段、來書を擧げて工夫を演ぶ。
㋚彈は韻學集成にさくる、彈避なりと、即ち回避の義なり。
㋖力を着くれば枝葉を生す。
㋴第二段、證據を引いて、力を着けて點檢すべからざることを示す。雲臥紀談下に云く、魏府の老華嚴は、諱は懷洞、五季の時、華嚴の敎を弘む、晚に興化の存獎禪師に參じて敎外別傳の旨を得、遂に天鉢に出世す、緇素之に尊事して老華嚴と稱す。今は示衆の語なり。
㋱好事面前に現ずれども即ち差過す、故に……。
㋯信心銘の語なり、力を著けて點檢せざれば虛明自ら照す、自照は彈避を得ざる處。
㋛傳燈八に云く、居士龐蘊は衡州衡陽縣の人、字は道玄、世世儒を以て業となす、而るに居士、唐の貞元の初、石頭和尙に謁し、言を忘じ旨に會ふ云云、復た一偈を呈して云く、日用の事云云。
㋽唯だ吾れ自ら偶諧の一句、肝要なり、偶諧はたまたまかな

ざる時、更に心を擬することを得ざれ。心を擬せざる時は、㋬一切現成す。亦㋣利を理會することを用ひざれ、亦鈍を理會することを用ひざれ。總て㋠他の利鈍の事に干らず、亦他の靜亂の事に干らず。正當彈避し得ざる時、忽然として㋷布袋を打失せば、覺えず掌を拊つて大笑せん。㋦記取せよ記取せよ。此の事若し㋸一毫毛の工夫を用ひて證を取らば、則ち人の手を以て㋾虛空を撮摩するが如し、只だ益自ら勞せんのみ。㋻應接の時は但だ應接せよ、靜坐を得んと要せば、但だ靜坐せよ、㋕坐の時、坐底を執着して究竟となすことを得ず。今時邪師の輩、多く默照靜坐するを以て究竟の法となして後昆を疑誤せしむ。山野、怨を結ぶことを怕れず、力めて之れを詆る、以て㋵佛恩を報じ、㋟末法

ふにて契當の義、分別を生ぜず、擧心動念せざる處自心に能く契當すとなり。

㋪頭頭物物、境上に於て揀擇なきをいふ。

㋲境に向ふ時、張乖するなし、取捨なきが故に。張乖とは違背の義、おしのけるを云ふ。

㋝これは自ら朱紫と言はず、外より朱紫と名くとの說を可となす。意は、只だ朱紫を號となす、早く是れ不是にし終るとなり。

㋜絕は清淨の義、本地の風光、些の汚染なきをいふ。東坡の所謂、山色清淨身これなり。

㋑只だ日用事、卽ち是れ神通妙用なりとなし、般の字、本錄に搬に作る、搬は俗字なり。

㋺先聖は達磨大師を指す、安心法門に出づ。

㋩自心見量に二義あり、一には自心は自巳の妄心なり、見量は各各の依報正報なりと。二には自心とは自己の本心、見量は十界の依正、本有の自性なりと。初義を是とす、卽ち自の妄心にて現見量度する境界の不實なるをいふ。着力點檢も夢、擧心動念も夢、有心分別も亦夢なりと。

㋥上の古語を結び、著力點檢することなからしむ。

㋭第三段、重ねて自心點檢を忘することを示す、かく重ねて言ふは陳少卿が鈍根なりと言來るが故に叮嚀に言ふなり。

㋬萬法の一一天眞一一妙明にして一切現成すと。

㋣利根なり。

㋠利は利處に現成し、鈍は鈍處に現成し、靜は靜處に、亂は亂處に現成す、現處は利鈍にあらず、靜亂にあらざるべからざるなりと。

㋷欄子を放下するが如くに修行

の弊を救はん。

㋹趙待制に答ふ　道夫

示諭せらる、一々に備悉す。㋡佛の言く、「心ある者は皆作佛を得」と。㋨此の心は世間塵勞妄想の心に非ず、無上大菩提心を發するを謂ふ。若し是の心あらば成佛せざる者なけん。士大夫學道多く自ら障難をなすこと、決定の信なきが爲の故なり。㋧佛又言く、「信は道の元、功德の母たり、一切の諸の善法を增長す。㋤疑網を斷除し、㋶愛流を出でしめ、涅槃無上道を開示す。」又云く、「信は能く智功德を增長す、信は能く必ず如來地に到る」と。㋰示諭せらる、鈍根にして未だ悟徹すること能はずんば、且く㋒佛種子を心田に種ゑんことをと。㋼此の語淺近なりと雖も、然も亦深遠なり。㋨但だ肯心を辨せよ、必ず

の人は日に損し、又損して一切煩惱を放捨せば、卽ち是れ放身命の處にして、此れ修行者の面目なり。拊は擊なり。大笑とは、無盡の法藏現成する故に。

㋦記取せよは、上の文に屬するなり。

㋸黃檗の所謂學道といふも、早く是れ接引の詞といふと一般なり。

㋾虛空云云とは、楞嚴二に出づ。

㋻第四段、再び前書に言ふ處を擧げて敎示す。

㋕然れども、坐の時云云。

㋵正法を傳へ、衆生を利益するを以て眞の報恩となす。

㋟異說ありと雖も、一說に云く、佛入滅後一千年を正法の世とし、次ぎの一千年を像法の世とし、其後萬年を末法の世とす。中論疏の說。敎、行、證の三備足するを正法といひ、像は似の義にて、敎、行ありて證の一を缺くをいひ、末は微少の義にて敎の一ありて他の二を缺くをいふ。而し多分に就いていふなり。

㋹趙待制のこと、萬姓統譜八十三に出づ。此書の大意は趙待制の少信根を責む。第一段は發心決定せんことを示す。

㋡南本涅槃經二十五、獅子吼品。圓覺略疏二。

㋨此心巳下は、大慧、經文を判ず。

㋧華嚴經十四、賢首品の偈。

㋤疑とは煩惱なり、煩惱の正理及び智等を覆蔽すること網の物を掩ふが如し、故に喩へて網といふ。

㋶愛流は貪愛流轉なり、吾人が對象に愛執し三界六道に流轉輪廻する有樣は水の流れて斷えざるが如し、故に流といふ、其流轉の本は愛なり、愛に由

相賺さず。㋔今時學道の士、往々に緩處は却つて急に、急處は却つて放緩にす。龐公云く、㋗「一朝蛇布裩襠に入る、試に宗師に問はん、甚の時節ぞと。」昨日の事、今日すら尚ほ記し得ざる者あり、況んや㋳陰を隔つる事をや、豈に忘失すること無かる容けんや。決めて今生に打して徹せしめんと欲せば、佛を疑はず、祖を疑はず、生を疑はず、死を疑はず、須らく㋮決定の信あり、決定の志を具して㋘念々頭然を救ふが如くすべし。此くの如く做し將ち去つて、打して、未だ徹せざる時、方に始めて鈍根なりと說くべきのみ。若し當下に便ち自ら我れ鈍根にして今生に打得徹すること能はず、且く佛種を種ゑて結緣せんと謂はゞ、乃ち是れ㋫行かずして到らんと欲するなり。是の處あること無し。㋙某、

り業を造るによる、故に愛流といふ、涅槃經に云く、「愛河は洄澓にして衆生を沒し、無明に育せられて、貪と愛とを出づることを得ざらしむ、」と。

㋰第二段、今生に徹悟せんことを勸む。

㋒大乘敎を一偈一句にても聞いて之を了解する智慧を佛種子といふ。心は第八識、田は能く五穀等を生ずるものなれば、種子に對して心を喩へて心田といふ。然らば大乘敎を聞いて、その了解せし智解を第八識に熏附するを種子を植ゑ付けたといふ、これが聞、思、修の緣に依りて聽て成佛する因となるなり。

㋼此語以下は大惠、趙道夫の語を批判す、その言辭緩かなれども、實は決烈の志なきを責む。

㋨肯心は、佛種子を種うることを肯ふなり。辨は趙道夫に系る、賺は大惠に系る。

㋔上は情に順じて與へ、自下は他を奪ふて緩緩地なるを責む。

㋗一朝云云は、顚倒怱忙をいふと。裩は褌なり、襠も亦褌なり、或は裲襠（うちかけ）なり。

㋳陰を隔つとは、陰は五陰にて、今世の五陰身壞して未來の五陰身を受く、故に隔といふ。

㋮悟徹を欲する信。

㋘頭然等、永嘉集下、華嚴七十八、中峰廣錄二十等に出づ。念念無間に精勵するをいふ。

㋫行かずして云云は、荀子一攸身篇の語。

㋙第三段、省力卽ち得力なることを辨ず、趙待制は少信根なる故に、吾は此道を信ずる者の爲に說く、信ぜざる者には說かずとの意。

毎に此の道を信ずる者の爲めに說く、漸く日用二六時中省力を覺得する處、便ち是れ學佛得力の處なり。自家得力の處、他人は知ることを得ず、亦㋓拈出して人に與へて看せしむること得ず。盧行者、道明上座に謂つて曰く、「汝若し自己本來の面目を返照せば、密意は盡く汝が邊に在り」といへる是れなり。密意といふは便ち是れ日用得力の處なり、得力の處、便ち是れ省力の處なり。㋢世間塵勞の事は㋐一を拈じ一を放つて、無窮無盡なり。四威儀の內未だ嘗て㋚相捨てざることは、無始時來之れと緣を結得すること深きが爲の故なり。般若の智慧は無始時來之れと緣を結び得ること淺きが故なり。乍ちに知識の說著するを聞いて、一へに會し難きに似たることを覺得す。若し是れ無始時來、塵勞の緣淺く、般若の緣深き者は、甚の會し難き處かあらん。但だ深處は放つて淺からしめ、淺處は放つて深からしめ、生處は放つて熟せしめ、熟處は放つて生ならしめよ。纔かに塵勞の事を思量することを覺ゆる時、㋖力を著けて排遣することを用ひざれ。只だ思量の處に就いて輕々に話頭を撥轉せよ。限りなき㋴力を省し、限りなき力を得ん。請ふ公、只だ此くの如く崖め將ち去れ、心を存して悟を等ると

㋓拈出とは、下の密意を言はんが爲に之をいふ。

㋢第四段、世事を放捨して話頭を參究せしむ。

㋐驢事未だ去らざるに、馬事到來すとの意。

㋚相捨とは、塵勞をなり、下の之と緣をの之とは塵勞を指す。

㋖力を著けて排遣すれば、排遣そのものが卽ち病なり、放つて蕩蕩地ならしめば、忘相に因つて大悟あらんとなり。力とは工夫の力なり。

㋴限りなき力とは得悟の力なり。

㋱第五段、道友に罰著せよと勸む。

㋯黒白、並に子とは碁石をいふ。

㋛一著とは、碁石一手を下すなり。

㋽宋史に傳なし、司理は蓋し法律の事を主る職ならん。此書の大意は、大信力を具せんこ

莫れ、忽地に自ら悟り去らん。(メ)參政公想ふに日々相會すらん、圍碁を除いて外、還つて曾て與に這般の事を說著するや否や。若し只だ圍碁して曾て這般の事を說著せずんば、只だ(ミ)黑白未だ分れざる處に就いて、盤を撅了し、子を撒了して、却つて他に問うて(シ)那一著を索取せよ。若し索不得ならば是れ眞箇に鈍根の漢ならん。姑く是の事を置く。

(ヱ)許司理に答ふ　壽源

黃面老子曰く、「信は道の元、功德の母たり。一切諸の善法を長養す。」又云く、「信は能く智功德を增長す、信は能く必ず如來地に到る」と。(ヒ)千里に行かんと欲するに一步を初めとなす。(モ)十地の菩薩の障を斷じ、法門を證するも、初め十信より入りて然して後に法雲地に登つて(セ)正覺を成ず。初めの歡喜地は信に因つて歡喜を生ずるが故なり。若し決定して脊梁骨を竪起して、世出世間(ス)沒量の漢と做らんことを要せば、須らく是れ箇の(イ)生鐵鑄就す底にして、方に了得すべし。若し(ロ)半明半暗、半信半不信ならば、決定して了ずることを得べし。(ハ)此の事人情なし、傳授すべからず、須らく是れ自家省發して始めて趣向の分あるべし。若し他人口頭の(ニ)辨を

とを勸む。第一段、古語を引いて信心を立てしむ。

(ヒ)老子經下六十四丁に出づ。

(モ)本業瓔珞經に因果の位を五十二位と立つ、十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺これなり、中に妙覺は佛果にして前の諸位は因位とす、因中にて次第に修證して十地中の初歡喜地に至りて一分斷惑證理し、進んで第十法雲地に至り、之を過ぎて正覺を成じて妙覺の佛陀となるとなり。今は等覺位を立てざる說に依る故に、法雲地に登つて正覺を成すといふなり。

(セ)正覺とは邪を離るるを正といひ、妄に背くを覺といふ。即ちあらゆる邪惡妄惑を斷じて涅槃の正理を證り諸法實相を窮盡したる佛果をいふ。

(ス)沒量は猶ほ過量の如し、即ち量度越えて格外の機用を具す

取らば、永劫にも歇する時あること無し。(ホ)千萬十二時中、(ヘ)空しく過さしむること莫れ。日を逐ふて起き來つて應用の處、(ト)圓陀陀地、釋迦達磨と少しも異なること無し。自ら是れ當人見不徹、透不過ならば、全身聲色の裏に(チ)跳在して、却つて(リ)裏許に向つて出頭を求めば、轉た沒交涉。(ヌ)此の事亦久しく知識に參じ、徧く叢林を歷て而して後に了得するに在らず、而今多少、叢林に在りて頭白く齒黃んで、了じ得ざる底あり、又多少、乍ちに叢林に入り(ル)一撥すれば、便ち轉じて千了百當する底あり、發心に先後あれども悟る時先後なし。(ヲ)昔李文和都尉、石門の(ワ)慈照に參じて、一句下に承當して便ち千了百當す。嘗て偈あり、慈照に呈して云く、「學道は須らく是れ(カ)鐵漢なるべし、手を心頭に著けて便ち判ず、直に無上菩提に趣いて、一切の是非管すること莫し」と。但だ脚下より崖め將ち去つて死せば、便ち休せん。後を念ひ前を思ふことを要せざれ、亦(ヨ)煩惱を生ずることを要せざれ、煩惱は則ち道を障ふ。(タ)祝祝。

(レ)又

(ソ)左右正信を具し正志を立つ、是れ乃ち成佛作祖の基本なり。山野、因

るをいふ。

(イ)生鐵云云とは大信根の人をいふ、第五段の張本となす。

(ロ)半明は信、半暗は不信なり。

(ハ)第二段、自悟を要するを明す。

(ニ)辨の字、辯に作るべし。

(ホ)第三段、欲境を離れんことを勸む、富貴の人は多く五欲に溺るるが故に。

(ヘ)空しく過すとは、光陰惜しむべしといひ、唯だ坐禪觀法を成ぜしむ、下に釋迦と異なるなしといふ、容易の看をなす勿れ、少しも差あらば空過す。

(ト)圓陀陀地とは、要するに六道の神光圓滿して缺少なきをいふ。臨濟云く「多般の用處この什麼をか缺少す」と。

(チ)跳在は、一生離れざるをいふ。

(リ)裏許とは聲色五欲を指す。

(ヌ)第四段、發心の遲きことを苦しむ莫れと示す。

つて湛然を以て公の㋡道號に名づく。㋧水の湛然不動なるが如くんば、則ち㋤虛明自照にして心力を勞せず。㋶世間出世間の法湛然を離れず、纖毫の透漏なし。只だ㋰此の印を以て、一切處に印定すれば是もなく不是もなし。一一解脫、一一明妙、一一實頭、用ひる時も湛然、用ひざる時も亦湛然たり。㋒祖師の云く、「但だ心あつて自心見量を分別計較する者は、悉く皆是れ夢なり」と。若し心識寂然として一動念なき處、是れを正覺と名く。覺既に正しきときは則ち日用二六時中に於て、色を見、聲を聞き、香を齅ぎ、味を了じ、觸を覺し、法を知る。行住坐臥、語默動靜、湛然ならずといふこと無し。亦自ら㋼顚倒の想を作さず、有想無想悉く皆清淨なり。既に清淨を得れば、動の時は湛然の用

㋸一撥とは一機一境なり。

㋾第五段、古人の發心遲うして早く悟りしことを引いて發心せしむ。李文和は宋史列傳二二三に云く、諡して和文と曰ふ云云と、李和文に作るべし。

㋻慈照は廣燈錄一四に出づ。

㋕鐵漢とは直に斯道に趣いて是非等を觀ざるをいふ。之を言はんと欲して前に生鐵鑄就すといひしなり。

㋵煩惱は常に言ふ、煩悶懊惱をいふ、前に辯する如し。

㋟祝祝は至禱に同じ、韻會に云く、「呪と通ず」と、かうあれと呪願するなり。

㋹許壽源に答ふる第二書なり。

㋞第一段、公の法願あるを讃す。信に依つて此道に入るを得、志を以て此道を成ずることを得。

㋡道號とは、道に名くるの意、號を以て其人の所得の道德を表はす、卽ち表德號なり。昔は別に道號なし、字を稱して名となす、道號卽ち字なり、明極語要に云く、「諏訪性了居士、門を過ぎ字を需む、以て其の道にす、余塗空の二字を以て之に授く」と。

㋧第二段、道號の義を解す。

㋤虛明云云は、三祖の信心銘に云く、「心力を勞せざれば、虛明自照を見るべし」と、虛明は水を喩ふ、水性明にして萬象を照映す、水と萬象と不卽不離なるをいふ。以て道眼の明かなるを表す。

㋶世間とは世は遷流の義、間は間隔差別の意なり、然らば宇宙萬有の一一が個個別別の相を現はし作用をなして、而もそれが少時も停ることなく、變遷生滅しつゝある故に名く、卽ち三界六道の迷界を世間と名く。此世間を出離した

を顯はし、不動の時は㋨湛然の體に歸す。體用殊なりと雖も、而も湛然は則ち一なり。㋔栴檀を析つに片々皆栴檀なるが如し。㋗今時一種の杜撰の漢ありて自己の脚跟下不實にして、只管に人を敎へて心を攝して靜坐し坐して氣息を絕せしむ。此の輩を名けて眞の㋳可憐愍となす。請ふ公、只だ㋮恁麼に工夫を做せ。㋘山野、然も此くの如く公に指示すと雖も、眞に已むを得ざるのみ。若し㋫實に恁麼に工夫をなす底の事あらば即ち是れ公を汚染せん。㋙此の心實體あること無し、如何んが硬く收攝し得て住せん。收攝して甚の處に向つてか安着せんと擬せん。既に安着の處なくんば則ち時なく節なく、古なく今なく、㋓凡なく聖なく、得なく失なく、靜なく亂なく、生なく死なく、亦湛然の名もなく、

ろ悟の光明世界を出世間といふ。されど世と出世と別にして而も同なり、必ずしも兩箇あるに非ず、分別妄見を以て差別の法を實有なりと固執せば、法の爲に繫縛せられて自由を得ず、之を世間と名く。若し智見を開き世間差別の眞實相に體達すれば、則ち法法塵塵みな光明を放ち、一多卽入無礙なることを知らん、之を假りに出世間と名く。然らば世間の其儘が出世間にして茲に至れば、世出世の假名も亦絕するに至る、譬へば金の獅子の如し、獅子の全體が金、金の當體卽獅子にして別異なし、差別と平等と其體は一、迷悟も亦一如なり、之を本來の面目ともいふ、故に纖毫の透漏なしといへり。

㋰此印とは湛然の印なり、印とは親しく法に契合するのいひなり、世出世の法本來自性、一にあらず、異にあらず、一異を超絕し湛然平等なり、この印を以て一切法に印すれば、迷も湛然悟も湛然、起滅も凡聖も是不是も悉く湛然ならぬはなし、此に至りて始めて行住坐臥一一に於て解脫自在を得らる、同時に明妙も實相にも達し得らるゝなりと。

㋒祖師とは達磨大士なり、安心法門に出づ、前辯の如し。起信論に云く、「心生ずれば種種の法生ず」と、動念妄想ある故に種種の妄境を生ず、臆病者が杭木を見て怪物と想ひ恐怖するが如し、若し妄念滅すれば妄境滅す、已下は上の湛然を解す、動に住するは是れ迷、寂滅不動を認得するも亦不是、此二を離れて任運なれば正覺と名くるをいふ。

亦㋢湛然の體もなく、亦湛然の用もなく、㋐亦恁麼に湛然を說く者もなく、亦恁麼に湛然の說を受くる者もなし。若し是くの如く見得徹し去らば、㋚徑山も亦虛しく此の號を作さじ、左右も亦虛しく此の號を受けじ、㋖如何ん如何ん。

㋴劉寶學に答ふ　彥脩

㋱即日烝溽、不審㋯燕處悠然とし、放曠㋛自如として諸の魔撓なきや否や、日用四威儀の內、狗子無佛性の話と㋓一如なりや否や、動靜の二邊に於て能く分別せざるや否や、㋲理と事と會するや否や、心と境と皆如なりや否や。老龐曰く、㋝「心、如なるときは境も亦如なり、實もなく亦虛もなし。㋑有も亦㋜管せず無も亦拘はらず。是れ聖賢にあらず、了事の凡夫なり。」若し眞箇に箇の了事の

㋭六識緣境中にありと雖も、卽ち是れ湛然の境界なり。

㋨且く體用を分ちて說明するも本不二なり、火の體と熱と不二なるが如し。又水波異なりと雖も、濕性は是れ同じ。隨つて千波萬浪同一水にして互に相融ず、以て迷悟不二、現象實在の相卽ち復た現象と現象との互融を識るべし。

㋔永明註心賦一、義法論に出づ。

㋗第三段、邪を捨て正に就かんことを勸む。湛然不動と云はば、則ち是を默照邪禪に濫するが故に、爾かいふ。

㋳楞嚴二、圓覺經四。

㋮恁麼とは、上の湛然の義を指す。

㋘湛然に滯着せざらんことを示す。

㋫湛然寂靜中に在つて、工夫せばの意。

㋙一轉して直に湛然の名なきことを知らしむ。

㋓既に安着すべき處なくんば、迷悟なし、何ぞ凡聖等あらん。

㋢眞如法性もと湛然の名なし、眞體自ら我れは湛然なりと言はず、猶ほ體なし、何の用かこれあらん。

㋐說く大惠もなく、聽受する許司理もなし。

㋚上の道號に結歸す、許司理は湛然の眞諦を見徹せる人故に。

㋖上の見得徹し去るに系けて看よ、果して見徹するや如何にとなり。

㋴宋史列傳百二九に、「劉子羽、字は彥脩、寶文閣の直學士なり」と、紹興十一年に卒、大惠の法嗣なり。名臣言行錄十二、居士分燈錄下、會元二十等に出づ。劉は狗子の話に於て悟處あり、其後に發する書なれば、是れ向上の說法なり。

凡夫と作得せば、釋迦達磨是れ甚麼の泥團土塊ぞ、㋺三乘十二分敎是れ甚麼の㋩熱盌鳴聲ぞ。㋥公既に此箇の門中に於て自ら㋭信じて疑はず。是れ小事にあらず、生處は放つて熱せしめ、熱處は放つて生ならしめんことを要須せば、始めて此の事と少分の相應あらんのみ。往々士大夫、多く㋬不意の中に於て箇の瞥地處を得れども、却

㋱此書の大意は、弟の彥沖を化度せしむ。第一段、心境一如を說く。烝溽は今日はむしあつい日といふ意。

㋯燕處は閒暇無事の時をいふ。論語、述而篇に云く、「燕居申申如たり」と、此意なり。

㋛自如は自然の意、心力を勞せず、法の儀に作作進退するをいふ。撓はかきみだすなり、宴如、若しくは好事を行はんとすれば魔、障碍撓亂をなす、故に問ふ。

㋓一如の一は絕待、如は契如、又は平等無差別の義、卽ち無佛性の話と不卽不離にして一體的の作用をなし居るやとなり。

㋪夢と覺とは、前辯の如し。

㋲理は眞理、事は事相にて日用事をいふ、合は融會するをいふ。

㋝如は不異の義、空如の義、能緣の心も所緣の境も倶に無自性空なりと了ずれば、心境の認取るべきなし、既に心境の認むべきなければ實なく、而も心境宛然たれば虛もなし。

㋜管せずとは、かまはぬの意なり。

㋑既に聖賢を認むるの病を治するが故に、聖賢の位に居らず、復た妄執なきが故に凡夫にもあらず。形容すべからざる那一人と作得す、之を强ひて了事の凡夫といふ。

㋺三乘とは聲聞、緣覺、菩薩の修學する敎をいふ。卽ち苦、集、滅、道の四諦の敎を聲聞乘といふ。苦諦は吾人の身心等にして迷界の果、集諦は煩惱業のことにして迷界の因なり。滅諦とは涅槃にして悟界の果、道諦とは佛陀の聖敎にして悟界の因なり。次に一に無明、二に行、三に識、四に名色、五に六入、六に觸、七に受、八に愛、九に取、十に有、十一に生、十二に老死の十二因緣の敎を緣覺乘といふ、之は吾人の三界六道に輪廻する道理を說明したるもの。次に布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅密を菩薩乘といふ、菩薩は此の六度を修して他を救濟し、同時に自の修養をなす、巳に前に略解す。十二分敎とは新譯に十二部經といふ、敎は經に通ず。一に修多羅、契經等と譯す。二に祇夜、重頌と譯す。三に和伽羅、授記と譯す。四に伽陀、孤起と譯す。五に優陀那、無問而自說と譯す。六に尼陀那、因緣と譯す。七に阿波陀那、譬喩と譯す。八に伊帝目多伽、本事と譯す。九に闍陀伽、本生と譯す。十に毘佛略、方廣と譯す。十一に阿浮陀達

つて如意の中に於て打失し了る、公をして知らしめずんばあるべからず。如意の中に在いて須らく時々に不如意の中の時節を以て、念に在いて切に暫くも忘るべからず。(ト)但だ本を得て末を愁ふること莫れ、但だ(チ)作佛を知つて、佛の語を解せざることを愁ふること莫れ。這の一著子、得ることは易く(リ)守ることは難し、切に忽にすべからず。須らく(ヌ)頭正しく尾正しからしめて、擴く之を充てゝ(ル)然して後、己が餘を推して以て物に及ぼさしむべし。(ヲ)左右の所得、既に一隅に滯在せず、想ふに日用の中に於て心を起して(ワ)管帶し、心を枯して忘懷することを著ざれ。(カ)近來以來、禪道佛法衰弊すること甚だし、有般の杜撰の長老、根本自ら悟る所なく、(ヨ)業識茫々として本の據るべき無く、實頭の(タ)伎倆の學者を(レ)收攝すること無く、一切の人を敎へて渠が如くに相似せしめて(ソ)黑桼桼地に緊しく眼を閑却して喚んで默して常に照すと作す。彥沖、(ツ)此の輩に敎壞し了る、(ネ)苦なる哉苦なる哉。遮箇の話、若し是れ左右の狗子無佛性を悟得するにあらずんば、徑山亦說く處なけん。(ナ)千萬面皮を捋下し、痛く手段を與へて這箇の

塵、未曾有と譯す。十二に優婆提舍、論議と譯す。これ經文の說相を十二種に分類したるものなり、略解は人天寶鑑に附するが如し。

(ハ)熱盌等とは、無用の意なり、盌は椀の正字なり、碧巖七十九則に云云す。これ咬にて、椀に熱湯を注ぐ時は、ぢりぢりとなる聲なり。

(ニ)第二段、聖胎長養の法を示す。

(ホ)劉彥脩、悟處ありと雖も、大慧未だ全く許すにあらず、故に言ふ。

(ヘ)不意の不の字の下に如の字を加ふべし、居士分燈錄下、彥脩傳に不如意に作る、これ紹興八年に遠流せられたる事を指すか、逆境界をいふなり。暫地とは、僧傳音義に、目を過ぐるなりとあり。

(ト)但だ本云云は、證道歌の語なり。

(チ)作佛とは本事なり、佛の語云云は末事なり。

(リ)若し聖胎長養せざれば本の凡夫に歸らん。

(ヌ)頭尾は始終の意、頭正は悟徹の意。

(ル)此の如く言ふは、弟の劉彥沖を接得せしめん爲の張本なり。

(ヲ)第三段、劉彥沖は邪師に誤らる、故に其方之を救ひ度せよと勸む。

(ワ)管帶とは、見聞覺知に實を認むるをいふ。百丈云く、「心を起すは增益の毀なり、心を枯らすは損減の毀なり」と。之れ弟の彥沖が事を言はんとするなり。

(カ)自下彥沖が事を說く、即ち邪師に誤らるるをいふ。

(ヨ)業識とは、第八阿梨耶識なりといふも可なり、阿梨耶識とは生滅と不生滅、即ち眞如と無明と和合して一にあらず、異にあらざるをいふとて、眞妄和合識なり、今は法相宗のそれとは異なり。其阿梨耶識に業、轉、現の三細ありとす、即ち平等一味の眞如の上に根本無明のちらつと起り、眞心を動かさんとする刹那を業相といふ、これ根本無明の起り始にて、至極微細にして凡見の及ぶ所にあらず。これが一轉して僅かに能見の用を起したる所を轉相といふ。更に一轉して所見の境界相なる少物を認むを現相といふ。この三は至極微細にして凡見の及ばざる所なれば三細といふ。業相の業は動の義、因の義なり、これ無明が動用を起す最初なれば別して業と名け、又この微動が轉變生起して竟に三界生死を生ずべき故に因の義あり。今業識とは業相なり。茫茫とは遙遠なり、或は云く、茫は忙に作るべしと、忙は怱遽なり、暇あらずの意。何れにしても此業識は恒に變遷生滅して停らざること流水の如く、而も幽遠微細にして眞心を蔽へるもの、此業識の支配を受けて徒らに昏々擾擾たる生活を茫茫といふ。本とは本分の田地をいふ。即ち杜撰の邪師が本分に倚らず、皆情識を以て人を敎ふるをいふ。

(タ)伎倆とは方便の意なり。

(レ)收攝は接得するをいふ。

(ソ)黑桼桼地は無分曉なり。

(ツ)此輩とは杜撰の長老なり。敎壞とは、人を導きそこなふをいふ。即ち正見解を破らるゝなり。

(ネ)遮箇の話とは、彥沖が邪師に敎壞せらるゝをいふ。

(ナ)千萬とは幾度の意。捋下は面を摩つること、人を離れてしつかりと敎導せよとの意。

(ラ)第四段、廣く彥沖を救ふの方便を說くに二節あり、初に同事攝方便を說く。

(ム)此公とは彥沖を指す。

(ウ)澹薄は澹は泊なり、うとうとしきをいふ。

(ヰ)此とは世味澹薄を指す。

(ノ)彥沖の如き人は功濟自在の人を看るも信ぜず、擇法眼を缺く故に言ふ。これ下の華嚴の文を引く張本とす。

(オ)維摩經佛道品。

(ク)欲の鉤の言、眼を著けよ、これ同事攝なり、彥沖が欲は淸淨澹薄これなり。經に云く、「或は現じて婬女となりて好色の者を引くは、先づ欲の鉤を以て牽いて後に佛智に入らしむ」と。

(ヤ)黃面云云は、華嚴經十八妙法品の文なり。

(マ)無邊の行門の語、肝要なり、

人を救取せよ、至懇至禱。㋶然も一事あり、亦知らずんばあるべからず。㋰此の公、清淨にして自居し、世味㋒澹薄なること積んで年あり、定めて㋼此れを執して奇特とせん。若し之れを救はんと欲せば、當に之れと事を同じうして、其れを歡喜せしめて㋨心に疑を生ぜざらしむべし。庶幾はくば信得及して肯つて頭を轉じ來らんことを。㋔淨名の所謂、先づ㋗欲の鉤を以て牽いて後に佛智に入らしむといへる是なり。㋳黃面老子云く、「法の先後を觀じて智を以て分別し、是非審定して法印に違せず、次第に㋮無邊の行門を建立して諸の衆生をして一切の疑を斷せしむ。此れ乃ち物の爲に則を作す萬世の㋘楷模なり。㋫況んや此の公の根性、左右と迥かに同じからず、㋙生天は定めて靈運が前

即ち是れ同事攝なり。

㋘楷模は法式なり、手本なり。

㋫第二節、傍ら劉寶學を激して言ふ。公とは彦沖を指す、況の字眼を著くべし。

㋙生天とは行業澹泊清淨の者は必ず天に生ずと、これは彦沖に喩ふ。靈運は謝靈運にして南史十九に傳あり、此處は弟の彦沖が課せし人。却つて兄の彦脩より勝るゝことを稱美するなり。靈運の怜悧發明なるを彦脩が悟得發明に喩ふ。今玆には生天は靈運の前にありの語を肝要として引くなり。上の文に欲鉤を以てすといふ、惡行すら之を救ふを得、況んや彦沖の行跡は彦脩の行跡に勝るるをや、若し公の行跡正しからざる時は唯だ公を信ぜざるのみならず、却つて公を近傍せしめざらんとなり。

㋓智慧は正見なり、彦沖は行跡正しと雖も、般若の緣薄くして正眼を缺く故に言ふ。

㋢好む所とは、世味澹薄なり。

㋐非を知らんとは默照の不可なることを知らんとなり。

㋚不定の義、非を知りて捨つることあるべし、或は捨てざるべし、今日定め難しと。

㋖頭を轉じとは、邪を捨て正に入るをいふ。

㋴一頭を出づとは邵氏聞見後錄に云く「一頭地を出づることを許すべし」と、今と同意なり。北磵外集に「要出二一頭地一」といふは、超出の義にて今の意にあらず、一頭は一人なり。今は一人の立つべき餘地を讓り退いて他をして先づ歩行せしむの意なり。

㋱第五段、彦沖が事を批判すれども、先づ總じて嘆許す。暐は名なり、禪は禪

にあらん、成佛は定めて靈運が後に在らん者なり。此の公決定して㋓智慧を以て攝すべからず、當に㋢好む所に隨つて攝すべし。日月を以て之れを磨せば、恐らくは自ら㋐非を知らんことを。忽然として㋚肯つて捨てんこと亦定まるべからず。若し肯つて㋖頭を轉じ來らば、却つて是れ箇の有力量底の漢ならん。左右亦須らく歩を退いて渠に㋴一頭を出づることを讓りて始めて得べし。㋱比ろ暐禪、歸るに渠が㋯紫巖老子に答ふる一書を錄し得たり。山僧㋛隨喜して讀むこと一遍、讚歎歡喜して日を累ね、㋾直に是れ一段の文章、又一篇の㋪大義に似たり。末後に㋲之れが與に箇の㋝謹對を下す、識らず左右如何とか以謂る。㋜昔達磨、二祖に謂つて曰く、「汝但だ外、諸緣を息めて內、心喘ぐことなく、心牆壁の如くにして以て道に入るべし」と。二祖、種々に心と說き性と說くに、俱に契はず。一日忽然として達磨の示す所の要門を㋑省得し、遽かに達磨に白して曰く、「弟子此回始めて㋺諸緣を息む」と。達磨、其の已に悟れることを知つて、更に窮詰せず、只だ曰く、「㋩斷滅となり去ること莫きや否や。」曰く、「無し。」達磨曰く、「子作麼生。」曰く、「了々常知の故に㋥之れを言ふも及ぶべからず。」達

人のいひなり、大慧の門下なり。

㋯紫巖老子は、張德遠なり、これ秦國夫人の子。

㋛隨喜、讚歎とは、心を斯道に寄することを嘆美するなり。書を美むるにあらず。

㋾下は彦沖が文章を賛むるなり。

㋪大義とは、及第の詞なりと、前漢蕭望の傳に出づ。

㋲之とは及第の文章なり、又は知許の人を指す、知許は文章を穿鑿する者なり。

㋝謹對とは及第の詞策文の始に先づ答と書す、終には必ず謹對と書す。

㋜昔云云、第六段、邪師の敎壞を論ずるに四節あり、初に達磨二祖の因緣を引く。之を引く意は、下の處をして緣する所なく云云の張本となす、又彦沖が方便に滯在すること

辭曰く、「此れ乃ち從上の諸佛諸祖、所傳の心體なり、（ホ）汝今既に得たり、更に疑ふこと勿れ。」（ヘ）彥沖が云く、「夜は夢み晝は思ふこと十年の間、（ト）未だ全く克つこと能はず、或は端坐靜默して一へに其の心を空じ、慮をして緣ずる所なく、（チ）事託する所なからしめて、（リ）頗る輕安なることを覺ゆ」と。讀んで此に至つて覺えず（ヌ）失笑す。何が故ぞ、既に慮、緣ずる所なくんば、豈に達磨の所謂內心喘ぐこと無きに非ずや、事託する所なくんば、豈に達磨の所謂外諸緣を息むるに非ずや。（ル）二祖初め達磨の示す所の方便を識らず、將に謂へり、（ヲ）外諸緣を息め內心喘ぐこと無うして、以て心を說き性を說き理を說くべしと。文字の證據を引いて印可を求めんと欲す、所以に達磨一々に（ワ）列下す。（カ）用心する所無うして方に始めて（ヨ）步を退いて、心、牆壁の如しといふの語、達磨の實法に非ざることを思量して、忽然として牆壁の上に於て頓に諸緣を（タ）息む。即時に月を見て指を亡じて便ち道ふ、了々常知の故に言これ及ぶべからずと。（レ）此の語亦是れ時に臨んで達磨に撥出せらるゝ底の消息なり、亦二祖の實法にあらず。（ソ）杜撰の長老輩、既に自ら所證なくして便ち（ツ）逐旋捏合して、他人をして歇めしむと雖も、（ネ）渠が自らの心火熠々として晝夜停まらず、（ナ）二稅を缺く百姓の如くに相似たり。彥沖、却つて許多の（ラ）勞攘なし、只だ是れ毒に中り得たること深し。只管（ム）外邊に亂走して動と說き靜と說き、語と說き默と說き、得と說き失と說く。（ウ）更に周易、內典を引いて（ヰ）硬く差排和會す。眞に是れ（ノ）他の閑事の爲めに無明を長ず。殊に一段（オ）生死の公案未だ曾て結絕せざることを思量せず。臘月三十日、作麼生か（ク）折合し去らん。眼光落ちんと欲して未だ落ちざる時、且く閻家老子に向つて、我が神を澄して慮を定むること少時せんことを待てと道ふべからず、却つて去つて（ヤ）相見し得んや。此の時に當つて（マ）縱橫無礙の說も亦使ひ著じ、（ケ）心木石の如くなるも亦使ひ著じ、須らく是れ當人生死の心破れて

が、二祖が錯りて達磨の語を認むるに偶同する故に、彥沖が語を結判せんが爲なり。

（イ）大悟せしをいふ。

（ロ）諸緣を息むとは、外六塵を却絕すといふにあらず。

（ハ）斷滅とは息の語に因んでいふ。

（ニ）之を言云云は言語道斷の意。

（ホ）汝今既云云は印可なり。

（ヘ）第二節、彥沖の語を以て、達磨の語に合す。夜は云云とは妄念の止むことなきをいふ。

（ト）道力の、業力に克つ能はざるをいふ。

（チ）託は寄の義なり、塵緣に拘はる無きをいふ。

（リ）これ靜を以て鬧を止む、石の草を壓するが如し。

（ヌ）彥沖が語は達磨の語に似、又二祖初め外諸緣を息む云云の語を認めて謬りし、彥沖が謬りは二祖に同ず、故に失笑するなり。

（ル）第三節、二祖の謬、彥沖が謬に同す、依つて暗に斥く。

（ヲ）心、墻壁の如くなるを以て便ち道なりと云つて、門頭戶口を認むるなり。

（ワ）列下すとは、それもそれもと取り除くなり。

（カ）二祖、如何んともする能はざるをいふ。

（ヨ）步を退くとは、心と說き、性と說くなり。

（タ）息は止め盡すなり、者裏に到れば、外諸緣を息むこともなく、內心喘ぐこと無きも亦無く、心墻壁の如きも無く、以て道に入るべきもなく、無も亦なきなり。

（レ）此語とは、了了等の二祖の語なり。

（ソ）第四節、彥沖を結判し、過を以て邪師に歸せしむ。

（ツ）逐旋は次第の義。

（ネ）渠とは邪師を指す。心火云云は心緣分別の止まざるをいふ。楞嚴十、長水の經。

（ナ）二稅とは二度の年貢、缺とは未納なり、生死相續の人の生死到來を怖懼するは、二稅を納めざる百姓の官徵を怖るゝが如くに相似たりと。

（ラ）勞攘は煩冗の貌、毒とは邪師の毒なり。

（ム）彥沖は、靜を說き默を說くを內邊と思へり、實は外邊亂走なり。

（ウ）第七段、古聖の語を謬解するを說く、三節あり、初に生死の心を破せんことを要す。周易一、內典とは佛敎經典なり廣弘明集八、道安の二敎論に云云す。

（ヰ）硬等とは、實安排すべからざるを。

（ノ）意は、內典外典を捏合するも無益の事なりと。洞山悟本の

(フ)始めて得べし。若し生死の心破るゝことを得ば、更に甚麽の神を澄しめ慮を定むるとか說かん、更に甚麽の縱橫放蕩とか說かん、更に甚麽の內典外典とか說かん。(コ)一了一切了、一悟一切悟、一證一切證、(エ)一結の絲を斬るが如し。一斬一時斷、無邊の法門を證するも亦然り、更に次第なし。(テ)左右既に狗子無佛性の話を悟る、還つて(ア)此くの如くなることを得るや也た未だしや。若し未だ此くの如くなることを得ずんば、直に須らく恁麽の田地に到つて始めて得べし。若し已に恁麽の田地に到らば、當に(サ)此の法門を以て大悲の心を興起して逆順の境の中に於て、(キ)和泥合水して身命を惜まず、口業を怕れず、一切を拯拔して以て佛恩を報ずべし。方に是れ大丈夫の所爲なり。若し是くの如くならずんば、是の處あること無し。(ユ)彥沖、孔子の(メ)易の道たるや、屢に遷まると稱するを引いて、佛書の中の(ミ)應無所住而生其心といふに和會して、一貫と爲す。又(シ)寂然不動といふを引いて(エ)土木と殊なること無しと云ふ、此れ尤も笑ふべし。(ヒ)渠に向つて道はん、(モ)無間の業を招かざることを得んと欲せば、如來の(セ)正法輪を謗ること莫れと。故に(ス)經に曰く、「色に住して心を生ずべからず、聲香味觸法に住しても心を生ず應らず」と。此の廣大寂滅の妙心は、色を以て見、聲もて求むべからざることを謂ふ。應無所住とは(イ)此の心實體なきを謂ふ。而生其心とは此の心、(ロ)眞を離れて立處あるに非ず、立處卽眞なることを謂ふなり。孔子、易の道たるや、屢に遷まると稱するは、(ハ)此れを謂ふに

偈に云く、「衣裳破處重重補。糧食無レ時旋旋營。一箇幻軀能幾日。爲二他閑事一長二無明一。」

(オ)生死を透脫するの公案なり。

(ク)折合とは、事のまにあはするをいふ、碧巖六十三則の下語。

(ヤ)大手振つて相見し得るや、さうはできまいとの意。

(マ)前の周易內典の語に對して言ふ。

(ケ)前の端靜默に對して言ふ。

(フ)此に於て闘老に向つて初めて折合し去らんと。

(コ)時節を經す。

(エ)一結等は碧巖十九則の垂示の語。

(テ)第二節、傍らに劉寶學を勸策す。

(ア)此の如とは、一了一切了の境界を指す。

(サ)上の無邊の法門を指す。

(キ)和泥等、そこ意は、彥沖を救はれよとなり。

(ユ)第三節、正しく謬つて周易內典を引き合はすことを論ず。

(メ)易注疏八下系辭なり。易大全二十三蘇氏易傳八等。

(ミ)應無等は金剛經の句、纂要上。林間錄上に老安國師を引けり、上の句は如理智、下の句は如量智。

(シ)寂然等は易の註疏七上の繫辭。

(エ)土木等は無心をいふ。楞嚴一、長水の釋あり。

(ヒ)渠とは彥沖なり。

(モ)無間とは、梵語阿鼻の譯、八大地獄の中の最苦處にして墮獄の罪人、劍樹、刀山、鑊湯等の痛苦を受けること間斷なきが故に、無間地獄といふ。今は無間地獄に墮する業因をいふ。業とは身、口、意の上に作す行爲をいふ。

(セ)正法輪とは、佛陀の說きたまひし聖敎をいふ。能く眞理に契ひし敎なれば、外道の邪法に簡んで正と云ふ。輪とは喩の名にして、輪王の輪寶のよく凹凸の地を平坦ならしめ、又人の惡心を破するが如く、佛陀の正法は能く衆生の煩惱、業、外道の邪見を破摧する力用ある故に喩へて法輪と名く。いま寂靜を認着し、或は強ひて外典に和會する等の名相を認むるを正法を謗るとなす。

(ス)金剛經なり。

(イ)此心は方處なし。安國師云く、「色聲に住せず、迷悟に住せず、體用に住せずして而も心を生ぜば、一切法に卽して一心を顯はす、若し善に住して心を生ぜば卽ち善現じ、若し惡に住して心を生ぜば卽ち惡現じて、本心卽ち隱る、若し所住なければ十方世界唯だ是れ一心なり」と。六祖云く「風幡動ぜず是の心動す云云」と。

(ロ)眞を離るは、體なり、立處は用なり。體用互融一如なること水波の如し。

(ハ)此とは應無所住の語を指す。

(ニ)遷は訓はしきりにて廻轉の義。

(ホ)易下繫辭十九、屢遷は吉凶等の變動をいふ、卽ち陰窮りて陽生じ、陽窮りて陰生じ、吉窮りて凶生ず等、吉凶に偏らざるをいふと。吉は得、凶は失、悔は憂、吝は虞なり。

(ヘ)始終輪環して而も寂然不動の體は、變易の道に合すと。

(ト)孔子のは世間の敎を說く、出世の敎に非ず、又大極無極等を說くも出世の至理にあらず、然るに二者を和會せんとする故に言ふ。

(チ)左右とは劉彥脩なり。

(リ)自在なるを喩ふ、法華譬喩品

は非ず、屢とは㋥荐なり、遷は革るなり、㋭吉凶悔吝は動より生ず、屢に遷るの旨は、㋬常に返いて道に合す。如何が應無所住而生其心と合して一塊と成ることを得ん。彥沖、但だ佛意を識らざるのみに非ず、亦㋣孔子の意を識らず、㋠左右、孔子の敎に於て出沒すること㋷園觀に遊ぶが如く、又吾が敎に於て深く㋦閫域に入る。㋸山野此くの如く杜撰、還つて是なりや無や。故に㋾圭峯の云く「㋻元亨利貞は乾の德なり、㋕一氣より始まる、㋵常樂我淨は佛の德なり、一心に本づく。一氣を專にして㋟柔を致し、一心を修して道を成ず」と。此の老の此くの如く和會す、始めより儒釋の二敎に於て㋹偏枯なく、遺恨なし。㋞彥沖、應無所住而生其心と易の屢遷とを以て大旨同貫すといふは、未だ敢て相許さず。若し彥沖が差排に依らば則ち孔㋡夫子と釋迦老子と㋧殺著して㋤草鞵を買はしめて始めて得ん。何が故ぞ、一人は屢遷、一人は無所住なればなり。想ふに㋶讀んで此に至らば必ず㋰絕倒せん。

㋒劉通判に答ふ　　彥沖

㋼令兄寶學公は、㋨初めより未だ嘗て㋔管帶忘懷の事を知らず、手に信せて鼻孔を摸著す、未だ盡く諸方の邪正を識得せずと雖も、而も基本堅實なれば、邪毒も侵すこと能はず、忘懷管帶も、㋗其の中に在り。㋳若し一向に忘懷管帶のみにして、生死の心破れずんば、㋮陰魔其の便を得ん。未だ免れず、虛空を把りて㋘隔截して兩處と作すことを。㋫靜に處する時は無量の樂みを受け、鬧に處する時は無量の苦みを受く。

㋦閫域とは奧域なり、佛境界に入るの深きをいふ。
㋸山野云云は、大慧自ら謙退して言ふ、此れは易を解するに系る。
㋾圭峯とは華嚴宗の宗密禪師のこと、終南山の圭峯に居せし故に稱す。果州西充の人、澄觀に謁して深く華嚴の奧義を窮め、復たあらゆる內外の學に深く、著述甚だ多し。
㋻元亨等は、易經一に「之を四德といふ、もとは萬物の始、亨とは萬物の長ずるなり、利とは萬物の遂ぐるなり、貞とは萬物の成ずるなり、唯だ乾坤に此四德あり云云」と。圓覺略疏一序等に云云す。此れは義通じて、而も理同じと謂ふにあらず。
㋕一氣とは、陰陽の未だ分れざる根本元氣なり。
㋵常等を涅槃の四德といふ。迷界の人は明智なきが故に、五蘊身に著し正理を顚倒して見る、卽ち世間の無常なるを常住とし、五欲に耽りて樂となし、非我を我とし、不淨を淨とす、之を凡夫の四顚倒といふ。二乘は諸法實相なる涅槃の常住なるを非常となし、樂を苦となし、自在なるを無我となし、淸淨なるを不淨とし、世法を苦、空、無常、無我なりとす、之を枯の四倒といふ。佛は眞實相に達し玉ふが故に、常、樂、我、淨の四德を具し智德圓滿の境界に住す。常とは法身の常住不變の德をいふ、生死の苦なきを樂といふ、煩惱束縛なく自在なる德を我といふ、又妄執等の染汚なき德を淨といふ。吾人若し智見を開きなば此世間の當相卽常樂我淨の涅槃なり、此四德は本と一心中の德にして四德も萬法も一心を出でざるなり。
㋟柔とは順なり、萬物と相應するをいふ。一氣發動して四象八卦萬物となる、その一氣に還へり之を體すれば、能く萬物に順應するなり。一心は一切の本なり、故に一心を硏修すれば無上道を成じ、萬德顯はれて物と諍はず、自在を得。故に二敎その致を一にすといふなり。
㋹偏枯は、片落なく、圓滿なるをいふ、遺恨なしとは、甲乙なきをいふか。
㋞正しく利根を結斥す。
㋡夫子とは有道者を尊稱するの辭。
㋧殺著とは、殺は降なり減なり衰小なり、今謂く、孔子と釋迦と共に其德位を減じ降して、再び學人となして奔馳せしむの意。孝經玄宗の序の注に云く、「長服を殺いで短衣と作す」と。
㋤草鞵は草鞋の如し、鞵は「くつ」なり、卽ち遊歷する爲に……
㋶讀とは、此書を讀んでなり。
㋰絕倒は、これ戲言なるに依る、公必ず笑ひ絕倒せんとなり。
㋒氏族大全五に云く「劉子翬字は彥沖、屛山先生と號す。朱熹、入道の次第を問ふ、答へて曰く、吾れ易に於て道に入るの門を得たり」と。朱晦庵の師なり、宋史列傳百二十三等に出づ。通判とは、宋史三十八職官志に曰く「太祖始めて諸州通判を置く云云」と、卽ち州事を通判するの官なり、今の縣知事の如きか。此章は、學者の智解、情識分別を剌破し、打成一片の工夫を示す。
㋼第一段、邪工夫を責む、之に

㋙苦樂均平なることを得んと要せば、但だ心を起して管帶し、心を將て忘懷すること莫れ。十二時中、放つて㋓蕩蕩地たらしめよ。忽爾として㋢舊習瞥起せば、亦心を用ひて㋐按捺することを著ざれ。只だ瞥起の處に就いて箇の話頭を看よ。狗子に還つて佛性ありや也た無きや。無と。正恁麼の時、㋚香爐上一點の雪の如くに相似

二節あり、初に彦脩を歎美す。

㋨嘗て邪師に見えざれば……。

㋔忘懷は、事を胸中に記せず、空寂を守つて木石の無心の如きをいひ、管帶は管は意を領じて忘れず、帶は物を帶びて身を離れずとて、一切を思量する知解情量なり。

㋗其中とは、邪毒も侵す能はずの語を指す。意は忘懷管帶は言はずして上の語に於て知るべしとなり。

㋳若し一向等は、第二節、正しく通弊の邪工夫を責む。若し公の如くに一向に……。

㋮陰魔とは四魔の一、四魔とは、一に煩惱魔とは、貪瞋等が吾人を惱亂して善事をなさざらしむるをいふ。二に天子魔とは、第六天の魔王等にて、吾人の正心を妨げ、善行を成ぜざらしむ。三に死魔とは、吾人は死あるが爲に、永く佛道を修行し慧命續くる能はざるをいふ。四に五陰魔、吾人は色(肉體)受、想、行、識(精神)の爲に束縛せられて善を行ずる能はざるをいふ。今はその五陰魔を指す、正念相續せざれば、知らぬ間に肉欲に耽けり、快感(受)を貪る樣になるを、魔、便りを得と名く。即ち物に執着するをいふ。

㋘隔は有云く、「唐本大惠書に隔に作るは誤なり」と、今云く、隔の方却つて正しきか。即ち隔截等とは、本來無自性なる虛空の如く障礙なき本地風光裡に強ひて靜閙を分隔して妄に苦樂に認着するをいふ。

㋫靜に處すとは、兩處となす樣子を述ぶ。

㋙第二段、用心の得益を述ぶ、苦樂の苦の上に「若し」を加へ見よ。

㋓蕩蕩地は、廣遠にして檢束なき貌。論語泰伯篇、維摩佛道品などに出づ。

㋢舊習等とは舊來の習氣が瞥然發起せばの謂なり。

㋐按捺は共に抑へるなり。「おさへやむ」は是れ妄想なり、妄想を以て妄想を止むるときは了期あることなし、故に無字の話頭を拈提して業識の根源を截斷せしむ。

㋚圓覺經講義に云く、「當に知るべし、圓覺寂照すること、香爐一點の雪の如し、豈に暫住すべけんや」と、聯燈十九、石頭章に云云す。

㋖眼辨等は、智眼も能くわかり、手も能くきく者は即今直ちに「ひつつかめ」との意なり。達は鷙なり、行なり。韻會に云く、「超なり、跳なり」と、一達に達得とは、矢の飛び來るを一つかみにつかむ程の意に見よ。

たり。㋖眼辨じ手親しき者は一達に達得すべきなり。㋴方に知らん嬾融の道く、㋱「恰恰として用心する時、恰恰として心用ふる無し、㋯曲談すれば名相に勞し、㋛直説すれば繁重なし、㋼無心にして恰恰として用ふ、常に用ふれども恰恰として無なり、㋪今無心と說く處、有心と殊ならず」と。是れ人を誑かすの語にあらざることを。㋲昔、婆修盤頭、常に一食にして臥せず、㋝六時に佛を禮し、淸淨無欲にして、衆の爲に歸せらる。二十祖、闍夜多、將に之れを度せんと欲して、其の徒に問うて曰く、「此の偏行㋜頭陀、能く㋑梵行を修す、佛道を得べけんや。」其の徒曰く、「我が師㋺精進なること此くの如し、㋩何が故にか不可ならん。」闍夜多曰く、「汝が師と道と遠し、設ひ苦行して㋥塵劫を歷るとも

㋴靜閙一味を說かんが爲に引くなり。嬾融は牛頭法融禪師にして三祖道信の法嗣なり、博陵王の問に答ふる偈なり。

㋱恰恰は心を用ふるなり、即ち事事物物に心を用ひ氣をつけるなり。

㋯曲談とは迂曲の談にして、直ちに眞理を顯はさず、廻はり遠く說くをいふ、即ち三乘十二分敎みな是れ迂曲の談なり、既に迂曲の方便說なれば聞く者、迷、悟、佛、凡夫等の名相に滯りて徒らに煩勞すとなり。

㋛直說とは敎相學解に涉らず、直ちに實相を說くをいふ。直說といふも早く是れ曲談に墮す、故に云ふ、言語道斷と、口を開くも早くこれ錯り了れりと。

㋼無心とは、心を用ひて而も用心の迹なく、任運に物に應ずるをいふ。此の意を以て下を見よ。

㋪人の無心の處を認めんことを恐れて、木石の如くにあらざるをいふ、是れ全く靜閙一味なるを示す。眞空は有に異ならざるの空といへるは、この意なり。

㋲第三段、古人の梵行を執することを破す。婆修盤頭は梵語、偏行と譯す、羅閱城の人、第二十一祖なり、傳燈二に出づ。

㋝六時とは晨朝、即ち卯の刻にして今の六時頃。二に日中、正午の意。三に日沒、酉の刻にして今の約六時なり。四に初夜、戌の刻にして約午後八時。五に中夜、子刻にして午後十二時。六に後夜、寅の刻にして、約午前四時なり。又卯の刻より、酉の刻に至る間を晝の六時とし、戌の刻より寅の刻に至る間を夜の六時と

皆虚妄の本なり。」其の徒(ホ)不憤して皆色を作し聲を厲して、闍夜多に謂つて曰く、「尊者何の德行を蘊んでか而も我が師を譏る。」闍夜多曰く、「(ヘ)我れ道をも求めず亦(ト)顛倒もせず、我れ佛をも禮せず亦輕慢もせず、我れ長坐もせず、亦懈怠もせず、我れ一食もせず亦(チ)雜食もせず、(リ)我れ足ることも知らず、亦貪欲もせず、心希ふ所なし、之れを名けて道と曰ふ。」婆修、聞き已つて(ヌ)無漏智を發す、所謂先づ(ル)定を以て動かして後に(ヲ)智を以て拔くなり。(ワ)杜撰の長老の輩、左右をして靜坐して作佛を等たしむ、豈に虚妄の本にあらずや。又言く、「靜處は失なく、鬧處は失あり」と、豈に世間の相を壞して而して實相を求むるに非ずや。若し此くの如くにして修行せば、如何んか孄融の所謂、今無心と

いへり。

(ヌ)頭陀は梵語、抖擻と譯す、眞心を障蔽する煩惱の塵垢を除去し、抖擻するの謂なり。此頭陀の行に十二あり、人天寶鑑に解說せし如し。

(イ)梵行とは、梵とは淨の義なり、無欲清淨に生活するを梵行といふ、又慈、悲、喜、捨の四無量心を行ずるを梵行といふ。今は前の義に近きか。

(ロ)雜亂心を離るるを精といひ、間斷なく進趣するを進といふ。又眞精の智を以て、眞淨の行に進むが故に精進と名く。

(ハ)我師佛道を成ずべし、何ぞ得べからずと云ふやの意。

(ニ)塵劫は塵沙劫といふに同じ、亦無量劫に同じ。劫は梵語、劫簸の略、大時分と譯す、普通の算數に數ふ能はざる長時間をいふ。塵は微塵にして世界を碎いて微塵にした其數、或は恒河の沙の數ほどの年月を經ることゝ。

(ホ)不憤は不意憤怒の義。

(ヘ)上に梵行にかゝる。

(ト)凡夫外道の顚倒の見。

(チ)雜食等は、摩訶止觀三之三。

(リ)知足等は、南本涅槃二十五、師子吼品に出づ。

(ヌ)無漏智とは、有漏に對する語にて、漏は漏泄、或は留住の義にして煩惱の異名なり、煩惱は能く吾人の六根より、殺、盜、邪婬等の種種の過失を漏泄し、隨つて吾人をして迷苦の三界に繫留し住せしむるが故に漏といふ。今はその煩惱を離れたる無碍清淨の智慧なれば無漏智と名く。

(ル)先定等は、南本涅槃經師子吼品の文。

(ヲ)智は兩人にかゝる。又闍夜は般若の智を以て他の無明の根本を拔くとの意。

說く處は、有心と殊ならずといふに契得せん。請ふ公、此に於て(カ)諦當に思量して看よ。婆修、初めは亦將に謂へり、長坐不臥にして以て成佛すべしと。纔かに闍夜多に點破せられて便ち言下に歸を知つて無漏智を發す、眞に是れ(ヨ)良馬の鞭影を見て行くなり。衆生の狂亂は是れ病なり、佛、寂靜波羅蜜の藥を以て之れを治す、病去つて藥存すれば其の病愈甚だし。(タ)一を拈り一を放てば、何れの時か是れ了ぜん。(レ)生死到來せんとき、靜鬧の兩邊、都て一點を用ふること得じ。道ふこと莫れ、鬧處に失する者多く、靜處に失する者は少しと。少と多と、得と失と、靜と鬧と。如かず、縛して一束となして他方世界に送放せんには。(ソ)却つて好し(ツ)日用多にあらず少にあらず、靜にあらず鬧にあらず、得にあらず失にあらざる處に就いて、(ネ)略提撕して看よ。是れ箇の甚麽ぞと。(ナ)無常迅速なり、百歲の光陰も一(ラ)彈指の頃に便ち過ぐ。(ム)更に甚麽の閑工夫ありてか、得を理會し失を理會し、靜を理會し鬧を理會し、多を理會し少を理會し、忘懷を理會し、管帶を理會せん。(ウ)石頭和尚云く、「謹んで(ヰ)參玄の人に白す、光陰虛しく度ること莫れ」と、(ノ)這の一句子、(オ)開眼にも也た著け、合眼にも也た

(ワ)第四段、上の二緣に對して邪見を結判す。

(カ)諦當とは、とつくと思案してといふ義なり。

(ヨ)雜阿含經三十三に云く、「四種の馬あり、一には鞭影を見て便ち驚き、二には毛に觸れて便ち驚き、三には肉に觸れて驚き、四には骨に徹して始めて驚く」と。

(タ)拈は取なり、即ち寂靜の一を取り、狂亂の一を棄つるをいふ。

(レ)第五段、世間の無常を說いて急に切りに斯事に趣向せしむ。

(ソ)却つて好しとは、下の是れ箇の甚麽に系る。

(ツ)日用云云は他方に送放するの端的なり。

(ネ)略とは、少しの謂なり、彥沖は終に未だ此の如き境界を見ず、少しく靜鬧に非ざる處に

著け、忘懷も也た著け、管帶も也た著け、狂亂も也た著け、寂靜も也た著くべし。(ク)此れは是れ徑山此くの如くに差排す。想ふに杜撰の長老の輩は、(ヤ)別に差排の處あらん。(マ)咄、且く是の事を置かん。

(ケ)又

左右、靜勝の工夫を做すこと(フ)積んで年あり、(コ)識らず眼を開きて物に應ずる處に於て、心地安閑なることを得るや否や。(エ)若し未だ安閑なることを得ずんば、是れ靜勝の工夫未だ力を得ざるならん。(テ)若干久しうすれども猶ほ未だ力を得ずんば、當に箇の徑截得力の處を求めて、方に始めて平昔許多の工夫に孤負せざるべきなり。平昔靜勝の工夫を做すことは只だ箇の鬧底を(ア)支遣せんことを要するが爲なり。正

於て試に工夫せよとなり。
(ナ)雜阿含經四十七に出づ。
(ラ)一彈指とは、一たび指を彈く時間といふことにて、百年といへば長きが如きも、瞬間に過ぎ去るの意。
(ム)此の如き生死の急切の事あるに、何の暇あつてか呑氣な無益の工夫をなすかとなり。斯く云ふは、上に忘懷管帶は生死到來の時に何の用をなすに堪へんと斷ぜし故に、今生死到來の時に用に堪へ利益ある活工夫を示す。
(ウ)第六段、古語を引いて、此事は忘懷管帶に在らざることを明す。即ち上に百歲の光陰を引き、又之を引いて警策して時光を惜ましむ。此は參同契の語、石頭は靑原に嗣ぐ、諱は希遷、端州の人、俗に在る時、每に民間に婬祀多きを厭ひ、輙ち牛を奪ひ祠を毀ちしことあり、老いて禁ずること能はず、靑原に參じて悟徹す、天寶の間、衡山に之き南寺の東に石あり、狀臺の如し、庵を其上に結ぶ、時に石頭と號す。傳燈十四に出づ。
(ヰ)玄理に參ずる學者といふこと。
(ノ)遮の一句子とは、光陰虛しく度す莫れの一句を指す。
(オ)開眼等、此れより、大惠の判釋なり、著は築著磕著の謂なり、碧巖十則の評に云ふ。時時刻刻皆是れ道なり、空しく看過するなかれ。
(ク)此れは是とは、邪師に對して言ふ。此の如く光陰虛しく度すこと莫れとの句を差排すと。
(ヤ)邪師は、虛しく度すと莫れの語を引いて、敎へて靜坐默照せよと云はんとなり。
(マ)咄云云とは、鈍滯の處を咄破

に鬧の時に却つて鬧底に自家の方寸を(サ)聒擾せらるれば、却つて(キ)平昔曾て靜勝の工夫を做さざるに似て一般なるのみ。(ユ)這箇の道理只だ太だ近しと爲す。遠くとも自家眼睛の裏を出でず、眼を開けば便ち(メ)刺著す、眼を合する處も亦缺少せず。(ミ)口を開けば便ち道著し、口を合する處も亦自ら現成す。(シ)心を起し念を動して(ヱ)渠に承當せんと擬欲せば、早く已に蹉過すること(ヒ)十萬八千にし了らん。直に是れ(モ)儞が心を用ふる處なき處、這箇最も是れ省力なり。(セ)而るに今此の道を學する者、多くは是れ力を用ひて求めんことを要す。(ス)之を求めば轉た失し、之れに向へば愈背く、(イ)那ぞ得失解路の上に墮在して、鬧處は失する者多く、靜處は失する者は少しと謂ふに堪へん。(ロ)左右、靜勝

するなり。意は此くの如く說話すと雖も、尙ほ滯著せば徑山如何ともする能はざれば、且く此事を置かんとなり。咄とは、人を呵し、人を罵る時に用ひる語。或は禪の妙旨の絕言の處に發することあるも、祖錄多くは叱咤の意に用ふ。楞嚴經に云く、「佛言く、咄、阿難」と是れ語原なり。
(ケ)第二書なり、大意は、專ら靜鬧を隔つる過を誡む。此書は甚だ微細妙密の文なり、彥沖が深く邪毒に當てらるる故に、普通の藥にては治すべからざれば親切に工夫を示す。先づ第一段に靜勝工夫の益あることを論す。
(フ)次の下に二十餘年といふを指す。
(コ)靜勝の工夫は益あるべきや否やとなり、これ定めて益なしと知り了つて之を斥けんが爲に先づ徵詰す。
(エ)利益あらば可なり、若し無くんば利益ある法を求むべしとなり。
(テ)寂然工夫は力を得んが爲めなり、若し力を得ずんば數年の工夫に孤負するなり、若し孤負せざらんと要せば、邪師の敎に執着せず、得力の工夫をなすべしと示す。
(ア)支遣、支は出なり、度、遮、分なり。遣は送、縱つ、祛く、發つなり。然らば鬧熱を拂ひ除くの意か。
(サ)聒擾は取り亂す貌、篇海に云く、「多言多語にて人意を亂す」と。意は一切境界に於て心を擾亂するなり。
(キ)靜坐工夫は境界に於て自由を得んが爲なり、然るに既に云ふ、晝は思ひ夜は夢むと、又鬧底に聒擾せらるれば、未だ修行せざる時と同じとなり。

の處に在つて住し了ること二十餘年、試に些子の得力底を將ち來れ看ん。(ハ)則箇若し(ニ)椿椿地底を將つて靜中得力の處と做さば、何が故ぞ却つて鬧處に向つて失却するや、而今省力に靜鬧一如なることを得んと要せば、但只趙州の無字を透取せよ。忽然として透得せば、方に知らん、靜鬧兩ながら相妨げざることを。亦力を用ひて(ホ)支樁することを著さざれ、亦支樁するなき解をも作さざれ矣。

(ヘ)秦國太夫人に答ふ

(ト)謙禪、歸るときに、賜ふ所の敎と並に親書の數頌を領ず。(チ)初めは甚だ之れを疑ひき、謙、子細を詢ふに及んで(リ)方に知りぬ自ら欺かざることを。(ヌ)曠劫未明の事、豁爾として現前す、人に從つて得るにあらず、始めて(ル)法喜禪悦の樂みは(ヲ)世間の樂みの比すべきに非ざることを知ると。山野、國太の爲に歡喜して累日寢食俱に忘る。(ワ)兒子は(カ)宰相となり、身は國夫人と作ること未だ貴しとするに足らず。(ヨ)糞掃堆頭に無價の寶を收め得て、百劫(タ)千生受用すれども盡きずして、方に始めて眞貴となすのみ。然れども(レ)切に此の貴を執著することを得ざれ、

(ユ)第二段、現成の受用に得失なきことを示す。此れ辯も及ばざる處、大惠、近しと云ふも早や是れ千萬里、言はんと要すれば昏吻重うし、故に遠しといふ、遠しと云ふも自家の中にあり。

(メ)刺著は、竹針を以て眼を刺すなり、元來者裏に在るが故に。

(ミ)言言句句皆是れ道。

(シ)此の如く太だ近し、之を求むれば轉た遠し、此等の語を見て學者誤りて多く無事の禪に墮して無明妄想を是となす、若し求心を歇得ざれば何れの時か了悟あらん、求心を歇めて初めて大道に契はん、此に到れば、咳唾掉臂も、祖師西來意も倘ほ通路あり、黃檗の道も亦學ぶべからずと云ふは、意路絕し義路絕する處を云ふなり。

(ヱ)渠とは道理を指す。承當とは肯諾なり、深く道理を體得するの意なり。

(ヒ)十萬八千里にて、遙遠の謂なり、里數にあらず。

(モ)用心の心を認めざるをいふ、卽ち無修の修なり。

(セ)此れは彥冲に對して言ふ、彥冲は多年工夫を費すが故に。應病與藥の佛祖の言句は元來實法なし、若し輕心慢心を生ぜば却つて毒藥となる。

(ス)臨濟云く、「之を求めば轉た遠く、求めざれば却つて目前にあり」と。

(イ)道は常に露現す、然るに靜處は得、鬧處は失ふと云ふ、豈に是れ眞道といふべけんやとの意。解路上とは、思量計較、智解分別をいふ。

(ロ)第三段、重ねて靜默の工夫の益なきことを述べて、徑截の工夫を勸む。

(ハ)則箇とは俗語なり、又云く、「禮語なり、日本の候と稱する語勢と一般なり、親しく通事の說を聞くなり」と。

(ニ)椿々地は、痴兀の貌、椿は橛杙なり、今は枯木の義を取る、此の靜默管帶の益なきこと椿の如く、其不自由なるをいふ。

(ホ)支樁は、心を用ひ胷間を支ふるなり。これ工夫を作す法を示すなり。

(ヘ)秦國太夫人とは、郭國夫人、小國夫人といふに同じ、所封の名なり、普燈十八、大惠法嗣なり。案ずるに張浚魏公、德遠の母なり。氏族排韵に云く、「計氏、張魏公の母を夫人に封ず云云」と。事物紀原一に云く、「夫人の封は王莽より始まる」と。又云く、「國夫人は宋の鄱陽侯、孟懷玉の母、國夫人を拜す、隋に洎んで高凉の冼氏、功を以て譙國太夫人に封ぜらる、これ夫人を國に封ずるの始めなり云云」。普燈錄十八に云く、「秦國夫人、計氏、法眞は常に蔬食して有爲の法を習ふ、因に大慧、謙禪者を遣はして、問を其子の魏公に致す云云」と、其の接得の話、委出す、披見せよ。此章の大意は、一旦の見地に安ぜず、人類救濟の願を發すべきを示す。

(ト)第一段、秦國夫人に隨喜す。謙は、開善の密庵禪師にして、法を師に嗣ぐ。

(チ)未だ修行の功を積まずして發明す、故に之を疑ふなり。

(リ)未だ悟らずして悟るが如くすれば、自らを欺き人を欺くなり、今は心と語と相應ず、故に自ら欺かざるなり。

(ヌ)曠劫已下非ざることを知るまで、來書の語なり。曠劫とは久遠劫と同じ、曠は空曠にして數量を超絕するをいふ、劫は劫波の略、時とも譯す、卽ち悠久の時間をいふ。今の意は無限の過去以來未だ明らめ得ざりし此事を、今豁爾として發悟し惠身を成就す、これ他に依つて悟らずとの意なり。

(ル)法華五百弟子授記品に云く、「法喜禪悅食にして更に餘の食想なし」と、科註に云く、「法を聞いて歡喜し、心地充足し、乃至禪定を修して、安穩の樂を得」と、華嚴淨行品に云く、「禪悅を食となし、法喜充滿す」と。卽ち諸法の實相を覺悟して苦惱を離れ、常に法性常樂の法味をあぢはふ樂みなり。

(ヲ)世間の樂とは、五欲の樂、五欲とは、色、聲、香、味、觸の五境に對して、眼、耳、鼻、舌、身の五官の上に起す情欲をいふ。又財寶、色、飮食、名譽、睡眠に對する欲をいふ、

若し執著せば則ち（ソ）尊貴の中に墮在して、復た（ツ）悲を興し智を起して有情を憐愍せざるべきのみ。記取せよ、記取せよ。

（ネ）張丞相に答ふ　德遠

（ナ）恭しく惟みるに、（ラ）阿練若に燕居して、彼の（ム）上人と同じく一處に會して（ウ）毗盧藏海に娯戲し、宜に隨つて（ヰ）佛事を作し、（ノ）少病少惱、（オ）鈞候動止萬福

吾人凡夫は此等に對して常に求欲を起し、少しにても之を得れば快樂の思ひをなして、益々執著して惱まされつつあり。

（ワ）第二段、向上の見解に滯ること無からしむ。兒子とは、秦國夫人の子、張德遠を指す、兒子以下眞貴となすのみまで夫人の問書中の語なり。

（カ）宰相とは、事物紀原四に云く、昔周公、冢宰に位し、百工を正して以て成王を相く、故に宰相の稱あり、其のこと秦漢より始まる、陳平の、宰相は上天子を佐くと言へる是れなり。亦上相ともいふ。

（ヨ）糞埽堆頭とは、はきだめをいふ、是れ煩惱妄想を喩ふ。無價の寶とは、佛性を比す、維摩經佛道品に出づ。

（タ）千生とは、佛敎は無始の昔より無終の未來に向つて循環轉生することを敎ふ、生とは生れて死に至るまでを一生といふ、今死するも生涯に造りし煩惱、業の力に由つて復た次きの生を受く、斯くの如くして生じては死し、死しては生じ、無量劫の間に千生萬生して、用ふれども盡きざる寶を眞の寶とすの意。

（レ）向上の寶を固守せば法執となるが故に。

（ソ）尊貴に墮在すとは、向上無差別にして、一塵一法をも立せざる境界に滯るをいふ。

（ツ）智は諸法の平等を照し、妄執を離れて證悟し、悲は差別の有情を緣じ其機に應じて之を救濟す。又悲智を俱に利他に約して解すれば、慈悲もて迷界の有情を憐愍し、智（後得智）もて其有情の智識の淺深を鑑みて說法利益するなり。今は向上に滯らずして度生せよと示すなり。

（ネ）排韵に云く、「張浚字は德遠、紫巖先生と號す、紹興中に相を拜し川陝宣撫に充てらる、忠は日月を貫き、孝は神明に通じ、勳は王室に在り、恩は生民に在り、威は四夷に震ひ、功は永世に垂る云云」と。金湯篇十四に云ふ、「紹興中に相を拜し和國公に封ぜられ、孝宗の朝に魏國公に封ぜらる。忠獻と諡す、南軒の父なり、圓悟勤公、蜀に歸へり昭覺寺に住す、公、道を師に問ふ云云」と。傳中に僕射といふは卽ち丞相の事なり、萬姓統譜三十八、名臣言行錄三などに出づ。別に張俊といふ惡しき人あり、濫すべからず。

（ナ）此書は公の永州に謫せられし時に寄する者に似たり。文意は謫居の用心を示すなり。

（ラ）阿蘭若は梵語、單に蘭若、ま

なることを。（ク）從上の諸聖、皆然らずといふこと莫し。（ヤ）所謂念念の中に於て一切法滅盡三昧に入りて（マ）菩薩の道を退せず、菩薩の事を捨てず、（ケ）大慈悲心を捨てず、（フ）波羅蜜を修習して未だ嘗て休息せず、一切の（コ）佛國土を觀察して厭倦あることなし、度衆生の願を捨てず、（エ）轉法輪の事を斷ぜず、敎化衆生の業を廢せず。乃至所有

たは練若ともいふ。空靜處、閑靜處、又は無喧諍と譯す、これ村落を離れたる閑靜の所にして、多く寺院を標する名にして、修行する好適の地なり。肇師云く、「忿競は衆聚より生じ、無諍は空閑より出づ、故に佛は蘭若に住することを讚したまふ」と。燕居とは閒暇無事なるをいふ。

（ム）上人とは何人を指すか詳かならず。摩訶般若經に云く、「一心に佛道を行じて、心を散亂せしめざるを上人と名く」と。增一阿含に云く、「人の世に處して過あれば自ら改むるを上人と名く」と。一般には聖人と同じく有德の僧の敬稱に用ひらる、今は其寺の住持を稱す。

（ウ）毘盧は梵語、毘盧遮那の略、處一切處、或は光明徧照等と譯す、これ佛の自性身なり、法身佛なり。卽ち釋尊の證り給ふ所の靈體にして、法身、般若、解脫の三德等の萬德を圓具し、十方に周徧し、能く任運に一切法を照し、而も差別を超絕したる平等絕待の唯佛與佛の境界なり、絕待といふも相待に對していふ絕待にあらず、唯絕待界なり、卽ち柳は綠花は紅、蝶舞ひ鳥歌ふ、所謂長者は長法身、短者は短法身、唯行、唯住、唯坐、唯臥にして些の思議を容れざる本地の風光裡に遊戲するをいふ。藏とは萬行萬德を包藏して受用するも盡くることなきを顯はし、海とは喩にして、其の甚深無量、甚廣の無涯なることを彰はす。華嚴疏抄一。

（ヰ）佛事とは、佛陀の事業にて、佛は人を敎化するを事とし給ふ。依つて佛敎の祭祀、法會等を始めとして說法度生の事業、みな是れ佛事なり。

（ノ）少病少惱とは、問候の詞なり、法華涌出品、維摩香積品に云云す。僧史略上に云く、「卑、尊に問ふときは、則ち不審少病少惱起居輕利なりや不やといふ云云」と。

（オ）鈞候等とは、尊候の起居動靜如何といふに同じ。今は宰相に對する故に鈞といふ、鈞とは、陶師が瓦を造るの模範なり、瓦形に軸あり、埏を其上に置きて之を旋回するときは方圓の形、手に隨つて成る故に、相公は天下の政柄を執る之を鈞軸と謂ふ、丞相は宰相なり故に鈞候といふ。詩經に國の鈞を秉る云云といへり。

（ク）第二段、張丞相の謫居を慰めて日用の用心を示す。諸聖云云とは、張丞相の謫せられたるを謂ふなり、然るに朝廷に憚る故に、顯露にその事をい

勝願、皆圓滿せしむることを得て、㋢一切國土の差別を了知して㋫佛種性に入りて彼岸に到ると。此れ㋚大丈夫四威儀の中に受用する家事なるのみ。㋖大居士、此に於て㋴力め行ふて倦むことなかれ、而して妙喜、此に於て亦㋱普州の人と作らん。又識らず、還つて㋯外人の手を挿むことを許さんや否や。聞く、長沙に到つて卽ち㋛口を毗耶に杜ぢて深く不二に入ると。此れ亦㋾分外に非ず、㋪法是くの如きが故に、願くは居士、㋲是くの如くに受用せば、則ち㋝諸魔外道、定らず來つて護法善神とならん。其の餘の㋜種種差別の異旨は皆自心現量の境界なり、亦他物に非ず、識らず居士、以て如何んと爲す。

㋑張提刑に答ふ　　暘　叔

はずして従上の諸聖といふ。意は古の聖賢も面を冒して直に諫を上りて横に謫罸に逢ひし、唯だ公のみにあらずと張丞相を慰諭するなり。

㋳所謂等とは、華嚴經十通品の文の取意なり、經に云く、「念念中に於て滅盡三昧正受に入り一切の漏を盡す云云」と。念念とは十二時中なり、一切法とは、佛法世法等の一切法なり、若しくは五蘊の法なり、五蘊とは肉體と精神なり、此等諸法の當體寂滅なりと達して差別の法に妄執せざるを滅盡三昧に入るといふ。滅盡とは空無をいふにあらず、世間出世間の萬法その儘が眞如の一大活動にして、眞如卽萬法なれば萬法の一一が卽眞如、一法と一切法と互に融攝無碍、一法の固執すべきなく、吾人の所作進退、治生產業の動作の其儘が寂滅なりと體達するを滅盡三昧に入ると稱す。

㋮菩薩とは梵語、菩提薩埵の略稱、菩提とは覺、或は道と譯す、覺智のこと、薩埵とは衆生或は有情と譯す、卽ち上、菩提を求め、下、有情を敎化する悲智の二大願を具して自利、利他の修行をする人をいふ。いま菩薩の道とは、上、佛陀に向つて覺智を求むることを退失せずとなり。菩薩の事とは、人類を救濟するの行事を捨てずとなり、卽ち佛國土を淨め、衆生を成就するなり。

㋘大慈悲心とは、佛菩薩の悟りの境界より、外、衆生に向つて發動する利他的作用にして、卽ち身、口、意の三業を活動して他に樂を與へるを慈といひ、他の苦惱を拔き去るを悲といふ。今は其佛の慈悲心を吾心となして、拔苦與樂の行を止めざるをいふ。心地觀經一などに出づ。

㋫波羅蜜とは、波羅蜜多の略、到彼岸、又は度と譯す、卽ち佛陀の敎法なる布施、戒等の船に乘つて生死の此岸より煩惱の中流を渡りて悟りの涅槃の彼岸に到るの意。これ菩薩の大行なり、之に布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六あり、之を六度行と稱す、一一の解釋は人天寶鑑に附すれば略す。智度論二十九、等。

㋙佛國土とは、唯佛のみ住したまふ境界なる常寂土、或は極樂淨土の如き諸佛の國土をいふ、又直接に佛の感化を受くべき國土をも佛國土といふ。而し外にのみ求むべきにあらず、吾人若し佛の慈悲心を以て心となし、聖敎に隨ひ噓詐のなき清淨なる生活をなす所これ佛國土にあらざるなけんや。吾宗にては、種種の因緣、話頭を參究するを、佛國土を觀察すといふ。

㋓轉法輪とは敎法を說くをいふ。前に解するが如し。

㋢一切等、衆生の類無量なるが故に、國土も亦種種差別あるなり。

㋫佛種性とは、佛性といふに同じ、中道實相の理性なり。種とは因の義なり、卽ち吾人の心內に本來佛性を具有するも、對境に向つて起す所の煩惱の爲に隱蔽せられて顯はれざれども、聖敎及び善知識等の勝緣に逢はば、本有の佛性漸く起動して次第に淨用を顯現するに至る、これが聽て成佛すべき因といふ、而して之を證悟する故に佛種性に入るといふ。入とは悟入なり、既に悟入すれば涅槃の彼岸に到るまでが華嚴經の文なり。以上彼岸に到るまでが華嚴經の文なり。

㋚大丈夫等とは、如上の經說の如きは、大丈夫の行住坐臥の四威儀の中に用ふる平常の茶飯事のみとなり。

㋖大居士は、張丞相を指す、梵語の迦羅越、居士と譯す、四德を具する士の美稱なり。一に官仕を求めず、私に云く、名利の爲に仕官を要求するを斥ふなり、敎化の爲めの仕官は其德を害せず、二に欲を寡うし德を蘊蓄す、三に居財大に富む、四に道を守り自悟す。

㋴力め行ふとは、華嚴の文の如くに行へとなり。

㋱同じ道を唱和するの意、之は身を兼て內に在りとの方語なりと。其意は、普州の人はみな賊なり、故に其身賊の中に在りとなり。案ずるに張丞相は紹興二十五年、永州（或は潁州に作る）に謫せらる、此書を得たるは其時なり。大惠も亦紹興二十年梅州に謫せられ、同二十五年十二月、恩を蒙つて自ら便ず、然らば大惠、張浚倶に謫處に在り、故に再びいふ。この意は道を守り忠を立てて屈せざるは、是れ菩薩の大事なり、我も亦普州人の賊とならんとて、此流寓を以て賊に比して言ふ。

㋯挿手とは、普州の人といふ語に因んで言ふ、賊人は外人の手を挿むを嫌ふ。外人とは大惠なり。

㋛毗耶は毗舍利國の毗耶離城なり、毗舍利國は釋尊傳道の舊址にして、今のゴラクプール縣とモチハクー縣に亘る地方にて卽ち恆河と那羅延河とにて包まれたる一帶の地域なり。其內の一都市を毗耶離城

(ロ)老居士の所作所爲、冥に道と合す、但だ未だ(ハ)囫地一下することを得ること能はざるのみ。若し日用の應緣、(ニ)故步を失せずんば囫地一下を得ずと雖も、臘月三十日閻家老子も亦須らく(ホ)手を拱いて歸降すべし、況んや(ヘ)一念相應せんをや。(ト)妙喜老漢未だ目擊せずと雖も、其(チ)行事を觀るに小大(リ)折中して過不及なし、只だ此れ便ち

といふ、これ維摩居士の居處なり。口を杜づとは、杜は閉なり、塞なり、嘗て佛弟子の、文殊菩薩を上首として、諸菩薩等、維摩の丈室に來り、佛敎の原理たる不二法門に就いて問答し、三十二の菩薩は各自に其了悟する所を說く、最後に文殊、維摩に向つて不二法門を問ふ、維摩默す、一も言說するなし、之を口を杜づと言ふなり。これ默を以て絕言絕慮の不二絕待の法門を說破せしなり、故に文殊も、善哉これを眞の不二法門となすと贊歎せり。後世に「維摩の一默雷の如し、」又「維摩の一默即ち千言萬答す」といへる、此意なり。維摩經不二法門品に出づ。今は張浚の論處にあるが故に、口を杜ぢて維摩と同一三昧なることを顯はすなり。

(エ)公に於ては當然の事の意か。

(ヒ)法とは萬物の道理なり、或は法本有の自然の理なりと。

(モ)是の如とは、上の華嚴經の文を指す。

(セ)諸魔等とは、讒人を指す、釋尊、大寶坊に於て大集經を說きたまふ時、天魔波旬等の言く、「我れ今より以往、正法を護持せん云云」と。今は是の如く受用せば、公の爲に敵となれる惡輩をも捨てずして、度衆生の願を専らにせば、彼惡輩必ず來つて公の爲に護法神とならんとなり。

(ス)差別等の意は、差別の異旨は皆これ自己本心の物、擒縱與奪は本有の境界なりと。

(イ)張は會元二十に云く、吳偉明居士、字は元昭、久しく眞歇了禪師に參じて自ら受用三昧を得、以て極致となす、後に大慧を洋嶼庵に訪ひ、衆に隨つて入室す、大慧、狗子無佛性の話を擧して之を問ふ、公、擬答す、慧、竹篦を以て便ち打つ、公、對ふるなし、遂に留つて咨參す云云。」提刑は、案ずるに本邦の刑部侍郎に當る、事物紀原六、事文外集八に出づ。此章は經言、祖句を擧して、言外に自證自得せんことを勸む。

(ロ)老居士等、第一段、張公が平生の行履を褒む。冥とは、自然に合するをいふ。

(ハ)囫地一下、囫は船を進むる聲なりと、宗門に或は囫地一聲などいひて、大悟徹底せし時に用ふ。廬山の優曇寶鑑十に云く、「世人の口中未だ嘗て說かず、喻へば物を失ひし人の如き、忽然として尋見して覺えず此一聲を發す、是れ囫の字なり」と。

(ニ)故步とは、前かどより佛道に

是れ道、所合の處なり。這裏に到つて塵勞の想を作すことを用ひざれ、亦佛法の想を作すことを用ひざれ、(ヌ)佛法といふも塵勞といふも都て是れ外事なればなり。然れども亦外事の想を作すことを得ざれ。但だ回光返照せよ。是くの如きの想を作す者は甚麼の處よりか得來る、所作所爲の時、何の(ル)形段かある。所作既に辨じて我が心意に隨つて(ヲ)周旋せずといふことなく、少剩あることなし。正當恁麼の時、(ワ)誰の恩力をか承くるやと、此くの如く工夫を做して、日久しく月深くんば、(カ)人の射を學んで自然に的に中るが如くならん。(ヨ)衆生顚倒して(タ)己に迷ふて物を逐ひ、(レ)少欲味に耽りて甘心して無量の苦を受く。日を逐ふて未だ眼を開かざる時、未だ牀を下らざる時、半惺半覺の時に、心識己に紛

一步を進み入る意。班固傳に云く、「邯鄲に學步する者あり、未だ髣髴を得ず、其故步を失す」と。前漢書百序傳等。莊子秋水篇に出づ。意は從來の所作所爲の如くならば悟徹の分なしと雖も、道力、業力に勝るべしとなり。

(ホ)手を拱くとは、泣力の業力に勝るをいふ。

(ヘ)一念相應とは、一念は時間の短きをいふ、相應とは眞理に相應契當するをいふ、即ち忽然として情識破れ、本有の妙智開發して法性の理に冥契し、境智倶に忘ずるをいふ。

(ト)第二段、工夫の法を示す。

(チ)行事とは、平日の所作所爲なり。

(リ)折中とは、楚辭四九章に云く、「兩端を折つて其中を取る」と。漢書七十二、及び左傳には中を衷に作る。過不及とは論語に出づ。

(ヌ)佛法とは塵勞に對して言ふのみ、性中に此の如き名なし、皆是れ閑名句の故に。智論十五に云く、「佛涅槃皆妄法より生じて實定あることなし」と。而し此性中に內事外事といふ者もなし、故に外事の想云云といふ。

(ル)形段とは、大小長短等の形をいふ、今は心法は形なうして十方に通貫するの意。

(ヲ)周旋とは、法華の六に云く、「周旋遊戲」と、左傳僖公二十三年及び孟子に云云す。今は周徧旋回自在の謂なり。

(ワ)誰の恩力とは、工夫をなし得たる樣子なり。

(カ)人の射云云は、宗鏡錄四十五に大寶積經を引けり。

(ヨ)衆生等、第三段、業識遷流の相を示す。楞嚴經二。

(タ)己に迷等は楞嚴二上に云く、

飛して、妄想に隨つて(ソ)流蕩す。善を作し惡を作すこと未だ發露せずと雖も、未だ牀を下らざる時、天堂も地獄も、方寸の中に在つて、已に(ツ)一時に成就す。發する時を待つに及んで已に(ネ)第八に落在す。(ナ)佛云はずや、一切の諸根は自心現なり、器身等の藏は自の妄想の相もて施設顯示す。河流の如く、種子の如く、燈の如く風の如く雲の如く、刹那に展轉して壞す。躁動することは猿猴の如く、(ラ)不淨の處を樂むことは飛蠅の如く、厭足なきことは風火の如く、無始の虛僞習氣の因は汲水輪等の事の如しと。此に於て(ム)識得破せば、便ち喚んで(ウ)無人無我智となす。(ヰ)天堂も地獄も別處に在らず、只だ當人の半惺半覺して未だ牀を下らざるときの方寸の中にあり、並に外より來らず、(ノ)發せんとして未だ發せず、覺めんとして未だ覺めざる時、切に須らく照顧すべし。照顧するの時亦之れと力を用ひて爭ふことを得ざれ、爭著すれば則ち力を費さん。(オ)祖云はずや、「動を止めて止に歸せんとすれば、止更に彌動す。」(ク)纔かに日用塵勞の中、漸漸に力を省くことを覺せん時、便ち是れ當人得力の處なり。便ち是れ當人作佛作祖の處なり。

「一切衆生、無始より以來、己に迷ひ物の爲に本心を失ふ」と。

(レ)少欲味とは、五欲味なり。少は些少、耽は過樂なり。

(ソ)日夜に爲す所の業根の兆すこと。

(ツ)不覺の心起りて麤業を成就すること。

(ネ)第八に落在とは、太だ遲しの謂なり、畢竟未だ發起せざる內に猛省せよとなり。舊鈔に第八を阿賴識のことゝせるは未詳、今は猶ほ遲八刻といふが如し。

(ナ)佛云等は、楞伽經一に出づ、諸根とは、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根なり、これ自己の一心より顯現する所なるをいふ。器とは器界にて國土世間なり、一切の有情等を容ること器の如きが故にいふ。身とは吾人の五蘊身をいふ、藏とは阿頼耶識の翻名、此の藏に能藏所藏等の義あり、此識は萬有の根本となりて能く根、器等の一切の種子(因)を具する故に能藏といふ、此種子より萬有を開發すとなす、同時に前七識の爲に所依處、所熏處(種を熏附する場所の義)となる邊を所藏といふ。今文の藏とは所藏の義か、謂く器、五根身等、及びその所藏の第八識は如何にして生起するか、曰く、吾人各自の妄想煩惱に依つて善惡の行爲をなして、その種子を第八識に熏附す、其種子が緣となりて、八識中の種子より五根身器界即ち萬有を顯現生起したるものなり。斯く萬法より種子を熏附し、種子より萬法を生じて循環窮りなく、又その所生の萬法も前滅後生して刹那も停らざること河水の流るるが如しといふなり。

(ラ)因緣生にして無常なる物を常と執し、不淨の物を淨と心得て妄執して諸の業を造りて、三界六道に輪廻轉生すること井の水を汲む輪の如く無始無終なりと。

(ム)識得破とは、佛說の如く、一切法は唯心所現なり、因緣生のものなれば心外に認むべき實法なく、復た五蘊假和合の身なれば、自己と固守し人我と執すべきものなしと識得看破せば云云となり。

(ウ)無人とは實我實人なしと知る智を無人智即ち人空智といひ、宇宙萬有も亦因緣生のものにて執着すべきものなし、本來空なりと悟る智を無我智即ち法無我智、法空智といふ。

(ヰ)第四段、用心の得益を示す。

(ノ)善惡の念の發す云云。

(オ)祖は、三祖僧璨大師の信心銘なり。臨濟の所謂已起の者は續くこと莫れ、未起の者は放起するを要せざれと一般なり。

(ク)第二節、得益を論ず。

(ヤ)疲倦等、これ得力の處に無緣の大悲を具する故なり。凋は傷なり、又凋瘁なり、瘵は病なり。唐詩紀四十八等に出づ。

(マ)孝故の所謂心を一處に制すれば事として辨ぜずといふことなしと一般なり。

(ケ)第五段、重ねて警策し法と非法とを捨てしむ。

(フ)先聖とは、金剛經に云く、「何に況んや非法をや」と。

(コ)證道歌の語。

(エ)請ふ等、此は上を結んで說佛說祖の一段の說を指す。

(テ)上の故步を失せずの語を敷衍す。

(ア)本地云云は、境に約して言ふ、本來の面目とは、人に約して言ふ。

(サ)第六段、妙悟を勸激す、已下四節あり、初に工夫を勸む。

(キ)此道を修行するの人。此話とは、省力得力の話なり。

(ユ)往往は重重なり、頻は數度相重なるをいふ。

(メ)此くの如くとは、發せんとして未だ發せず等を指す。

(ミ)先德は、淸涼國師なり、皇太子が心要を問ふに答ふる語なり、傳燈三十七にあり。之れ人に呈似すること得ずを證す。

(シ)第二節、正しく妙悟せんことを激す。天資は天稟の資質、卽ち生れつきなり。

(ヱ)更め云云は、眞道を以て安心にあらため易ふるに及ばずの意。

(ヒ)噴地一發は囫地一下に同じ。

(モ)士大夫等、第三段、思量は道にあらざることを示す。著實は實事に擔着するにて、眞實

便ち是れ當人、地獄を變じて天堂となすの處なり。便ち是れ當人穩坐の處、便ち是れ當人出生死の處、便ち是れ當人君を堯舜の上に致すの處、便ち是れ當人㋳疲氓を凋瘵の際に起すの處、㋮便ち是れ當人子孫を覆蔭するの處なり。㋘這裏に到つて佛と說き祖と說き、心と說き性と說き、玄と說き妙と說き、理と說き事と說き、好と說き惡と說くも、亦是れ外邊の事なり。此くの如き等の事すら尙ほ外に屬す、況んや塵勞の中、㋫先聖の訶する所の事を作さんをや。好事を作すすら尙ほ肯はず、豈に不好の事を作すことを肯はんや。若し此の說を信得及せば、㋙永嘉の所謂「行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜體安然なり」と、是れ虛語にあらず。㋓請ふ、此れに依つて行履せよ、㋢始終變易せずんば、則ち未だ自己㋐本地の風光を徹證せずと雖も、未だ自己本來の面目を明見せずと雖も、生處は已に熟し、熟處は已に生なるべきなり、切切に記取せよ。㋚纔かに省力を覺する處、便ち是れ得力の處なることを。妙喜老漢、每に㋖箇の中の人の爲に此の話を說く、㋴往往に說得することの頻なるを見了つて、多く之れを忽にして肯て將つて事となさず。居士試に㋱此くの如くに工夫を做して看よ。只だ十餘日にして便ち自ら省力不省力、得力不得力を見得せん。人の水を飮んで冷暖自知するが如く、人に說與すること得ず、人に呈似すること得ず。㋯先德の云く、「證を語るときは則ち人に示すべからず、理を說くときは則ち證に非ざれば了せず、自證自得、自信自悟の處は、曾て證し曾て得、已に信じ已に悟る者の方に默默として相契ふを除く。未だ證せず、未だ得ず、未だ信ぜず、未だ悟らざる者は、唯だ自ら信ぜざるのみならず、亦他人の此の如きの境界あることを信ぜず。」と㋛老居士、天資道に近し、現定の所作所爲、㋽更め易ふることを著ひざるなり。他人を以て之れに較ぶれば、萬分が中已に九千九百九十九分を省得す。只だ㋪噴地一發して便ち了ずることを缺くのみ。㋲士大夫の學道、多くは著實に理會せず、口議心思を除却すれば便ち茫然として手足を措く所なし。手足を措くなき處、正に是れ好處なることを信ぜず、只管心裏に思量し得て到らんことを要し、口裏に說得して分曉せんことを要す。㋝殊に知らず、錯り了ることを。佛の言く、「㋜如來、一切の譬喩を以て種種の事を說きたまへども、譬喩能く此の法を說くこと有ること無し。何を以ての故に、心智路絕して不思議なるが故に」と。

㋝棒打石人頭、嚗嚗論實議。
㋜華嚴經五十二、出現品。
㋑第八段、道體は思量を絕することを示す。前後等とは、維摩經に云く、「我れ如來を觀るに前際より來らず、後際に去らず、今は則ち住せず」と。又或離に云く、「前際の生死後際の涅槃」と。意は此の事の中には生死涅槃の前後際なきをいふ。
㋺金獅子の全躰これ金なるが如し。
㋩維摩一經の筋骨なり、解脫とは縛を離るるを解といひ、自在なるを脫といふ。
㋥只だ等は、言を以て言を遣るなり。
㋭環等は荀子の語、又越絕書十三、說苑三建本篇等に出づ。註に云く、「環の中の如きは始なく終なうして窮尖なし」と。卽ち言、不思議と言はんと欲すれば、一切の境界緣起し、緣起すと雖も而も蹤跡なきの謂なり、起る處等とは、法に合はずなり。
㋬菩薩等は、華嚴經十回向品、金剛幢菩薩の偈なり。
㋣思とは、思議の境にして卽ち凡夫又は生死等。非思とは、二乘空寂の涅槃等なり、此事の中本來二法なし。
㋠第九段、法塵煩惱を盡せば、能く道に契ふて自在の用を起すことを示す。
㋷法界に四あり、理、事、理事無碍、事事無碍法界なり。管攝は管包攝藏なり。
㋦法塵煩惱とは、法見をいふ、佛法中に於て種種の見解を生じ、或は殊勝を認め、或は澄湛の處を認むる等にて、要するに法執未だ盡きざるなり、等覺の菩薩も猶ほ一分の法塵

信に知る、思量分別は道を障ふること必せり。(イ)若し前後際斷することを得れば、心智の路自ら絕せん。若し心智の路絕することを得れば、此の明處に卽して便ち(ロ)種種の事を說くも皆此れ法なり。此の法既に明なれば、是れ(ハ)不思議大解脫の境界なり。(ニ)只だ此の境界も亦不可思議なり。既に不可思議なれば、一切の譬喩も亦不可思議、種種の事も亦不可思議なり。只だ這の不可思議底も亦不可思議なり。此の語も亦著くべき處なし。只だ這の著くべき處なき底も亦不可思議なり。是の如く展轉窮詰するに、若くは事、若くは法、若くは譬喩、若くは境界、(ホ)環の端なきが如く、起る處なく盡くる處もなく、皆不可思議の法なり。所以に云く、「(ヘ)菩薩是の不思議に住すれば、中に於て思議し盡くすべからず」と。此の不可思議の處に入れば(ト)思と非思と皆寂滅するなり。(チ)然も亦寂滅の處に住在することを得ざれ、若し寂滅の處に住在せば則ち(リ)法界の量に管攝せらるることを被る。敎の中に之を(ヌ)法塵煩惱と謂ふ。(ル)法界の量を滅却して(ヲ)種種の殊勝一時に蕩盡し了つて、方に始めて好し。(ワ)庭前の栢樹子、麻三斤、乾屎橛、狗子無佛性、一口吸盡西江水、東山の水上行の類を看るに、忽然として一句下に透得せば、方

あり。

(ル)羅湖野錄上に云云す。

(ヲ)種種等とは、次下の種種の勝妙の境界をいふ。

(ワ)趙州の庭前……。洞山の麻……。雲門の乾……。趙州の狗子……。馬祖の一口……。雲門の東山……。以上の公案は實參實究すべきなり、門より入るものは家珍にあらず、解說するの要なけん。

(カ)法界無量回向とは、瓔珞經に五十二位の階級を說く、十後、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺なり、その中十回向の第十が法界無量回向なり。華嚴に云く「此菩薩の修する所の願行は法界に等しく、虛空の量の如し、盡く廻して一切衆に與へ、同じく一究竟菩提に向はしむ、故に回向と名く」と。卽ち法界に四種あるもも融攝して一眞法界

に始めて之を(カ)法界無量回向と謂ふ。如實にして見、如實にして行し、如實にして用ひば、便ち能く(ヨ)一毛端に於て寶王刹を現じ、微塵裏に坐して大法輪を轉じて種種の法を(タ)成就し、種種の法を破壞すること一切我に由る。壯士の臂を展ぶるに他の力を借らず、師子の遊行するに伴侶を求めざるが如し。種種の勝妙の境界現前すれども、心驚異せず、種種の惡業の境界現前すれども、心怕怖せず、日用四威儀の中、(レ)緣に隨つて放曠し、性に任せて逍遙すべし。(ソ)這箇の田地に到り得て、方に天堂なく地獄なし等の事を說くべし。(ツ)永嘉の云く、「亦人もなく亦佛もなし、大千沙界海中の漚、(ネ)一切の聖賢電の拂ふが如し」と。此の老若し(ナ)這箇の田地に到らずんば、如何んが(ラ)說得出で來らん。(ム)此の語錯つて會する者甚だ多し、苟も未だ根源に徹せずんば、(ウ)語に依つて解を生ずることを免れず。便ち一切皆無なりと道ひて(ヰ)因果を撥無し、(ノ)諸佛諸祖の所說の言敎を將て、盡く以て虛なりとなす、之れを人を誑惑すと謂ふ。(オ)此の病除かずんば乃ち(ク)莽莽蕩蕩として殃禍を招くてふ者なり。(ヤ)佛言く、「虛妄の浮心は諸の巧見多し」と。若し有に著せざれば便ち無に著す、若し此の(マ)二種に著せざれば、便ち有

となる、その性德圓成して量の量るべきなきが故に、法界無量といふ。然るに吾宗は敎外別傳にして名相を絕する故に階級に墮せず、次位に關はらざるなり、然るに若し吾宗の大悟を以て第十回向の位に對當せば大に非なり、只だ義似たれば取り、以て之が助顯するのみ、階位を論ずるに非ざるなり。

(ヨ)一毛等は大小の融通、事事無碍を示す、楞嚴四上及び華嚴經に出づ。

(タ)成就とは建立、破壞とは掃蕩にして無自性をいふ。一切我れ等とは、自在なるをいふ。

(レ)緣に隨ふの二句、天皇の語、前に出づ。

(ソ)第十段、上の文を承けて遙かに天堂地獄の語を結す。田地とは、法界量盡る處をいふ。

(ツ)永嘉證道歌の語、註に云く、

無の間に於て(ケ)情量し卜度す。縱ひ此の病を識得するも定めて非有非無の處に在いて(フ)著到せん。(コ)故に先聖、苦口叮嚀に(エ)四句を離れ、百非を絕して直下に一刀兩段して、更に後を念ひ前を思はずして、(テ)千聖の頂顙を坐斷せしむ。四句とは乃ち有、無、非有非無、亦有亦無、是れなり。若し此の四句を透得し了れば、一切の諸法は實有なりと說くを聞きて、我れ亦隨順して之れと與に有と說けども、且く此の實有に礙へらるることを被らず。一切の諸法は實無と說くを聞きて、我れ亦隨順して之れと與に無と說けども、且く世間虛豁の無に非ず。一切の諸法は亦有亦無なりと說くを聞きて、我れ亦隨順して之れと與に亦有亦無と說くも、且く戲論に非ず。一切の諸法は非有非無と說くを聞きて、我れ亦隨順して之が與に非有非無と說くも、且く相違するにあらず。(ア)淨名の云く、「(サ)外道六師の墮する所、汝も亦隨つて墮せよ」といふ是なり。(キ)士大夫の道を學する多くは肯て心を虛却して、善知識の指示を聽かず、善知識纔かに口を開けば、渠已に言前に在いて一時に領會し了る。渠をして吐露し盡さしむるに至るに及んで、又却つて一時に錯つて會す。(ユ)正に好し、言前に在りて領略する底も、又却つて

「眞如界内に生佛の假名なく、平等性中に自他の形相なし、即ち物なく人なく佛なし云云」と。人とは迷者、佛とは悟の至極にして是れ人を空ず、大千等は境を空ず。
(ネ)一切等とは生と佛との中間の三賢十聖を擧ぐ。電等とは瞥爾として蹤なく卒爾として模索し難きをいふ。
(ナ)這箇の田地とは、法界量盡る處、即ち一眞法界をいふ。
(ラ)說得等とは、空を說いて空見に墮せず、有を說いて有見に墮せざるをいふ。
(ム)第十一段、上の文を承けて撥無の見を拂ふ。
(ウ)維摩經、法供養品。
(ヰ)因果等は、中阿含經四、智度論十八に出づ。
(ノ)大品般若十八、阿毘跋地品、道元の正法眼藏。佛教祖教な

言語の上に滯在す。又一種あり、一向に聰明を作し、道理を說き、世間種種の事藝、我れ會せざる者無し。只だ禪の一般ありて、我れ未だ會せずといつて、(メ)當官の處に在つて、(ミ)幾枚の杜撰の長老を呼び來つて、(シ)一頓の飯を與へて喫却せしめ了つて、渠をして意を恣にして亂說せしめ、便ち心意識を將つて這の杜撰の說底を記取して、却つて去つて人を勘して、一句し來り一句し去る、之れを(ヱ)厮禪と謂ふ。末後に我れは一句多くして、儞語なき時、便ち是れ我れ(ヒ)便宜を得了るといふ。箇の眞實明眼の漢に撞著するに至るに及んで、(モ)又却つて識らず、(セ)縱然識得するも、又決定の信なき故に肯て(ス)四楞塌地に放下せず。師家に就いて理會して(イ)舊に依つて印可を求めんと要す。師家、逆順の境

るものは、後人書して以て佛教祖教と名けて、人を誑かすなりと謂ふの意。
(オ)此病とは邪見の病なり。
(ク)莽莽等は、證道歌に云く、「豁達空は因果を撥ふ莽莽蕩蕩殃禍を招く」と。註に云く、「豁達空とは西天の外道の修する所の斷滅の空也、因果を撥すとは、一向に空に著して因果を撥無するなり、既に斷滅の見に落つ、招く所の殃禍、言說すべからず、譬へば大海の滂湃蕩蕩として邊表なきが如し」と。殃禍とは謗法墮獄なり。
(ヤ)圓覺經金剛藏章の語、虛妄の浮心とは、人の氣のつかぬを氣をつけていふ義なりと。
(マ)二種とは有無の二なり、實悟の人は有と說くも無と說くも妨なし。
(ケ)情は應なり勞なり、或は博に作る、博は廣なり、普なり。本錄に搏に作る、搏は取るなり、捕へるなり、攫なり。何れにても可なり、妄計分別するをいふ。
(フ)著到は「おちつく」なり。
(コ)第十二段、外道の四句、佛法の四句を辨ず。
(エ)四句とは、碧巖七十三則の評に云く、「有、無、非有非無、非非有非非無」と。楞伽二等に出づ。百非とは行願品別行疏、起信鈔創記に云く、一、異、有、無の四句に約して一一に各四あり、謂く、一、非一、亦一亦非一、非一非非一。異、非異、亦異亦非異、非異非非異。餘の二句も之に準ぜよ、以上四四十六を成す、之を三世に約すれば四十八を成す、又之を已起未起に約すれば九十六を成す、更に根本の四句を加ふれば即ち百非なり。楞嚴釋要鈔三に云云、意は有無、

中に於て示すに、本分の(ロ)鉗鎚を以てするに至るに及んで、又却つて怕懼れて敢て親近せず、此等を名けて可憐愍者となす。(ハ)老居士、妙年にして(ニ)高第に登つて家を起し、所在の處、時に隨つて利益の事を作す、(ホ)文章事業みな人に過えたり。而も未だ嘗て自ら衿らず、一心一意に只だ歩を退いて著實に此の段の大事の因緣を理會せんことを要す。其の至誠なるを見て、覺えず(ヘ)忉怛すること如許す。獨だ居士の(ト)這般の病痛を識得せんことを要するのみに非ず、亦初心の菩薩を勸發して道に入るの(チ)資糧と作さんとなり。

(リ)汪內翰に答ふ　彥章

(ヌ)承る門を杜ぢて壁觀すと、此れ(ル)息心の良藥なり。若し更に(ヲ)故紙を鑽らば定ず藏識中、

眞妄等の一切の見を立せざるをいふ。

(テ)千聖等とは、四句百非不到の處なり。

(ア)經の弟子品の說。今引く意は、上に言ふ所の實有實無等は皆外道の見に似て而も非なるを示す爲なり。鷺、雪に立つ同色にあらずの意なり。

(サ)六師とは、初めは釋尊の聖業に妨げをなせしも、弟子舍利弗尊者の敎化を受けて、遂にその弟子となりし六人の外道をいふ。一に富蘭那迦葉、空無を計す。二に末伽黎瞿賒黎子、これ無因外道なり。三に刪闍耶毘羅胝子、これ自然外道なり。四に阿耆多翅舍欽婆羅、これは樂因に非ざるものを樂因と計して苦行を修す。五に迦羅鳩駄迦旃延、これは斷常二見を計す。六に尼乾陀若提子、罪福の定因を認めて、修行するも之を動かす能はずと計す。是れ九十六種の外道の首なり。今文に隨つて墮すとは、其用處を迷人に同ずるをいふ、所謂和泥合水なり。

(キ)第十三段、士大夫の輕信を呵す。

(ユ)正に好しは、恰も好しの意、言前領略底は皆是れ識情妄想なり、故に師家の勘驗するに及んで言語の上に滑るなり。言前とは師家の言は前なるをいふ。

(メ)先づ張提刑に當る。

(ミ)物件を數へて枚といふ。

(シ)一頓は一度の謂なり。

(ヱ)斷禪は相禪するにて問答をいふ。

(ヒ)便宜は、唐の世話に買賣に利を得るを便宜を得といふ。

(モ)又等と、明眼の人なることを識らずと。

(セ)縱然の二字にてたとひと讀む

無始時來の生死の根苗を引起して善根の難をなし、障道の難とならんと疑なし。息心を得ば且く息心し已つて、過去底の事、或は善或は惡、或は逆或は順、都て思量すること莫れ。現在の事も、省することを得ば便ち省せよ、(ワ)一刀兩段して遲疑することを要せざれ。未來の事は、自然に相續せざれ。(カ)釋迦老子云く「心安に過去の法を

べし。

(ス)四楞とは冠註に云く、「兩手脚蹴、塌は地の低下なり、又墮なり、塌を一に榻に作る」と。即ち從來の自己の知見解會を捨てざるの意。

(イ)杜撰の長老に印可せられたるが如くにの意、印可とは念佛三昧經に云く、「今此三昧は一切諸佛の印可したまふなり」と、音義に云く、「印は信なり、可は許すなり」。

(ロ)鉗は「はさみ」、鎚は「つち」なり、學者を鍛錬するを、人を接する道功に比す、これ必ずしも棒喝のみにあらず。

(ハ)第十四段、此書を作る意を述ぶ。妙年とは少年なり、妙は少なり。

(ニ)史記の註に云く、「高第とは、才優れて品第高きなり」と、或は甲科を高第といふ。家を起すとは、布衣より起つて官人となるをいふ。

(ホ)文章とは必ずしも紙筆上の文字言句をいふに非ず、德を韜み儀自ら時に顯はるるをいふ。

(ヘ)忉怛は冠註に云く、「當に叨咀に作るべし、多言の貌なり」と。

(ト)病痛に三あり、一は世間の作業に熟して他の作善を蔑みす、二に今世の外、未來に天堂地獄あることを信ぜず、三に佛法を信ずと雖も妙悟あることを信ぜず。

(チ)資糧とは資身の糧食にて、喩へば人の遠きに行くに必ず身を資くる糧食を要する如く、今修行者も法身を開發し證悟を成ぜんとするには、必ず之を資助する勝緣を要す、それが資糧となさん爲に多言を費しきとなり。法相宗に立つる資糧、加行等の五位の中の資糧にはあらず。

(リ)汪藻字は彥章、德興の人、博學強記にして六經百家の書より、佛、老、兵法、天文、曆法、蠻夷の書に至るまで記覽せざるなし、其著述實に數十萬言、自ら一家を成せり。崇寧二年進士第に登り、紹興中に翰林學士となり、自ら龍溪居士と號す。內翰とは、事物紀原四に曰く、「開元二十六年翰林供奉を改めて學士となし、別に學士院を置く、後に選用ますます重く號して內相となす云云」と、內相を亦內翰といふ。宋史列傳二百四、宋名臣言行錄七、同外集二十七、等に出づ。

(ヌ)第一段、前後際斷するは即ち息心の法なることを示す。此時、汪は落職して永州にあり、時に六十三歲。

(ル)息心とは、外、諸緣を息め、

取らず、亦未來の事に貪著せず、現在に於て(ヨ)所住あらず、三世悉く空寂なりと了達す」と。但だ看よ、僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや。」州云く、「無」と。請ふ只だ(タ)閑思量底の心を把つて無の字の上に回在して試に思量して看よ。(レ)忽然として思量不及の處に向つて這の一念破することを得ば、便ち是れ三世を了達する處なり。了達する時、(ソ)安排することも得ず、計較することも得ず、引證することをも得ず。何を以ての故に、了達するの處には、安排を容れず、計較をも容れず、引證をも容れざればなり。縱然引證し得、計較し得、安排し得るも、了達底と了に沒交涉なり。但だ放つて蕩蕩地ならしめて、善惡都て思量すること莫れ、亦意を著くること莫れ、亦(ツ)忘懷する

内心喘ぐことなきをいふ。

(ヲ)文章に著し經典を究むるをいふ、これ書籍は故紙なれば爾かいふ、彥章は好學にして老に至るも捨てず文章を愛し、故紙に耽る故に此誡あり。之れ神讚禪師の語。

(ワ)此れ皆世事について言ふ、畢竟前後の念を相續せざらしめん爲なり、蓋し此くの如く言ふは汪内翰が老年に發心して從來の事を悔い、遲疑煩悶する故に、鎭靜せしめんが爲に爾かいふ。

(カ)證を引くなり、華嚴十回向品の金剛幢の偈なり。

(ヨ)第二段、提撕工夫の法を示す。

(タ)三世を思量する、これ閑事なり。

(レ)學者多く此處を認めて眞證となす、而し此れ所謂識の邊際なり。

(ソ)此は先づ初入の用心を示す、意は了達の處を長養せよとなり。安排、計較、引證といふは、汪内翰が文字を愛する故にして、學を好み老に至るも止めざるに當るなり。

(ツ)此れは了達の上の用心に就いて言ふ、忘懷とは昏沈をいふ、意を著くるは掉擧をいふ。

(ネ)流蕩とは、これ亦掉擧なり、即ち境界の上に於て掉擧流蕩するなり。

(ナ)臨濟曰く、「菩薩の疑ふが如きは生死の魔、便りを得」と。維摩問疾品に「生死の魔とは、善惡取捨し念念起滅するをいふ」と。

(ラ)第三段、警策して無常を示す。

(ム)文章巧みなるが故に名譽高し、名譽高きが故に官職高しと、次第を逐ふて言ふなり。

(ウ)始終成功し成就す、評に曰く、「所謂天眞喪盡して虛名を得」と。

こと莫れ、意を著くれば則ち(ネ)流蕩し、忘懷すれば則ち昏沈す。意を著けず懷を忘せざれば、善も是れ善ならず惡も是れ惡ならず。若し此くの如く了達せば、(ナ)生死の魔、何れの處にか摸揉せん。(ラ)一箇の汪彥章、聲名天下に滿てり、平生安排し得、計較し得、引證し得たる底は(ム)是れ文章なり、是れ名譽なり、是れ官職なり。晚年に(ウ)收因結果する處、那箇か是れ實なる、限り無きの(ヰ)之乎者也を做し了る、那の一句か力を得たる、名譽既に彰はると(ノ)德を匿し光を藏する者と、(オ)相去ること幾何ぞや。官職已に做して、(ク)大兩制に到ると(ヤ)秀才たりし時と、相去ること多少ぞ。而して今已に(マ)七十歲に近し、公の伎倆を(ケ)儘して如何せんと要待するや、臘月三十日、作麼生か折合し去らん、(フ)無常の

(ヰ)之乎者也とは、造作をいふ。

(ノ)德を匿し等とは、隱居退遯の謂なり。

(オ)意は、名を彰はすと德を匿すと異なりと雖も、眞實得力の處に至れば則ち名譽官職は虛妄の事のみ、一點も用不著なり、故に德を匿すと名彰はるると、眞實結果の處に於て何の差別ありやとなり。

(ク)大兩制とは、韵府に「宋の翰林を内制といひ、中書を外制といふ、その後に幷せ混じて之を兩制といふ」と。倘ほ職林及び文獻通考五十四、等に出づ。

(ヤ)秀才とは、未だ及第せざる人を稱すと、又云く、漢氏、士を取るに、孝廉、秀才の二等あり、齊宋以來は州に秀才の擧あり、唐以後は進士と雖も秀才を以て號となす。又云く、蓋し熙宗の時より進士の稱となすと、事物紀原三に出づ。

(マ)紹興二十三年より逆算するに此時は六十五歲なり。

(ケ)儘は盡に同じ。

(フ)無常卽ち殺鬼なり、四卷の金光明經捨身品、臨濟錄に出づ。

(コ)頌を引いて誡む、傳燈十六、雪峰義存禪師は泉州の人、首め隱官に謁し後に三たび投子に到り、九たび洞山に上ぼり、因緣契はず、後に德山に參ず。此頌は五燈に載せず、碧巖事苑に出づ。碧巖題して自贈と云ふ、意は、只だ自らを誡め其餘を以て人に及ぼすなり。

(エ)倏忽は疾きなり。須臾は敢て久しからざるをいふと。

(テ)嶺は飛猿嶺にして福建にあり。三十二は唐の宣宗の大中七年に當る。

(ア)閩に入等、註に云く、「時に四十六、閩に入り宗教を闡くこと四十餘年、八十七にて入滅

殺鬼は念念停らず。㋙雪峯の眞覺云く、「光陰㋓倏忽として暫須臾、浮世那ぞ能く久しく居ることを得ん、㋢嶺を出でて年三十二に登とす、閩㋗に入りて早く是れ四旬餘、他の非頻頻に擧ぐることを用ひず、己が過還つて須らく㋚旋旋に除くべし。爲に滿城の㋖朱紫に報じて道ふ、㋴閻王は金魚を佩ぶることを怕れずと。」㋱古人の苦口叮嚀なること、甚麼の事の爲ぞ。

㋯世間愚庸の人は飢寒に迫られ、日用他の念なし。只だ身上稍煖かにして肚裏飢ゑざることを得れば便ち了る。只だ是れ這の兩事のみにして生死の魔却つて惱をなすこと能はず、富貴を受くる者を以て之れに較ぶるに、輕重大いに等しからず、富貴を受くる底は身上既に常に煖かに肚裏又常に飽く。既に這の兩事に迫らるることを被らず、又却つて㋛一件不可説底の㋰無狀なるもの多し。故を以て常に生死魔網の中に在つて出離するに由なし。宿に㋪靈骨あつて方に見得徹し、識得破するを除く。㋲先聖云く、「瞥起は是れ病、續かざるは是れ藥、念の起るを怕れざれ、唯だ覺の遲きを恐れよ。」と㋝佛とは覺なり、其の常に覺するが爲の故に之を大覺と謂ひ、亦之れを覺王と謂ふ。然も㋜皆凡夫の中より做し得出で來るなり。㋑彼れ既に

す」と。

㋚旋旋は漸漸の義、次第の義なり。

㋖朱紫とは官人をいふ、白氏文集三十七、舊唐書志二十五に出づ。日本仁明天皇の時に服を唐制に隨はしむ、紫は上、緋は之に次ぐと。

㋴一と息斷える時は其の業に隨つて削刺磨椿等の責を受くとなり。金魚とは、事物紀原三、舊唐書志二十五に云云す。

㋱大惠の詰問なり、古人とは雪峯を指す。

㋯第四段、貧富業障の輕重を談す。

㋛一件は欲事を謂ふ。

㋰無狀とは「すぢなき、いはれなき」の意。後漢書三章帝紀に云く、尤を察して無狀とは、謂く、其罪惡尤も大にして言に寄すべきなきが故に無狀といふ。

丈夫なり、我れ寧ぞ爾らざらんや。㋺百年の光景能く幾時をか得ん。念念頭然を救ふが如くせよ。好事を做すすら尚ほ做して辨せざらんことを恐る、況んや念念塵勞の中に在りて覺せざるをや、畏るべし畏るべし。近ごろ呂居仁が四月初の書を收むるに、曾叔夏、劉彥禮が死を報ず。居仁云く、「交游の中、時に復た㋩一兩人を抽んで了る、㋥直に是れ畏るべし」と。㋭渠邇來此の事の爲にすること甚だ切なり、㋬亦瞥地に頭を回すとの稍遲きを以て恨となす。比に已に書を作して之れに答へて云く、「只だ末後非を知る底の一念を以て正となす、遲速を問はざれ、非を知る底の一念便ち是れ成佛し作祖する底の基本なり、魔網を破る底の利器なり、生死を出づる底の路頭なり」と、願くは㋣公亦只だ此の如く工夫を做せ。㋠工夫をなし得て漸く熟せば、則ち日用二六時中、便ち省力を覺せん、省力を覺得する時、放つて緩からしむることを要せざれ、只だ省力の處に就いて崖め將ち去れ、崖め來り崖め去つても這の省力の處に和して㋷亦有ることを知らざる時、㋦多きことを爭はざるべきなり。㋸但だ只だ箇の無の字を看よ。得と不得とを管すること莫れ。至禱至禱。

㋪靈異骨相なり。見得徹とは、五欲は卽ち是れ魔網なりと見得するなり。

㋲第五段、激勵す。此の語は何人の語か未詳、宗鏡錄三十八に龐居士の語として出せり。

㋝佛者等、大法炬陀羅尼經十二、華嚴疏抄二十。

㋜凡夫等、天然の彌勒、自然の釋迦なし。

㋑彼れ既等、宗鏡錄七十六、佛、羅睺羅を誡むるの頌、「乃至我も亦爾り、何ぞ自ら輕んじて退屈することを得んや」と。

㋺第六段、無常を說いて勸策す、縱ひ今七十歳に向はんとす、百年を窮まるとするも幾時もなしと。

㋩無常の殺鬼に抽き出し引き去られしとなり。

㋥漫りに死を畏るるにあらず、老年に發心して此事未だ了畢せざるに、空しく死し去るを

又

(ヲ)伏して承はる、門を杜ぢ(ワ)交を息めて、世事一切闊略にして、唯だ朝夕某が向に擧ぐる所の(カ)話頭を以て提撕すと。甚だ善し甚だ善し。既に此の心を辨ぜば當に悟を以て(ヨ)則となすべし。若し自ら退屈を生じて根性陋劣なりと謂つて、(タ)更に入頭の處を求めば、正に是れ(レ)含元殿裏にして長安は甚れの處に在りやと問ふがごときのみ。(ソ)正に提撕するの時、是れ(ツ)阿誰ぞ、能く根性陋劣なりと知る底、又是れ阿誰ぞ、入頭の處を求むる底、又是れ阿誰ぞ。妙喜、口業を避けず、分明に居士の爲に說破す。只だ是れ(ネ)一箇の汪彥章にして更に兩箇あることなし、只だ一箇の汪彥章のみあり。更に那裏にか箇の提撕する底、根性陋劣なりと知る底、入頭の

畏るべしとなり。

(ホ)第七段、晩年の發心を慰諭す、此れ上の呂居仁の事を承けて、此事に接入せしめんとして此くの如く轉換す、巧妙の文なり。

(ヘ)亦醫地等は、居仁、發心の遲きを恨む、汪內翰も亦云云となり。

(ト)公とは、居仁なり。

(チ)第八段、工夫の効驗を論ず。

(リ)省力あることを知らざる、これ打成一片の處なり。

(ヌ)全く許さざるの詞、意は漸く悟に近づいて能所一片の時、遮事に相應せんとなり。

(ル)此文を上に屬すべからず、頭を起して言ふなり。

(ヲ)第一段、隨喜して勸勵す。

(ワ)交を息めとは歸去來の辭に云く「交を息め以て游を絕す」と。闊略とは、疎闊省略の義にして、世間の事を「おほあらまし」にするなり。

(カ)話頭とは、趙州の無字の話なり。

(ヨ)則とは模範なり。潙山の警策の語なり。

(タ)更にの下に「別に」を加へ見よ。

(レ)含元殿とは、唐書に龍朔三年、高宗蓬萊宮に幸して新に含元宮を起す、後咸亨中に、又蓬萊宮を改めて含元となす云云と。秦宮は阿房宮を以て最となし、漢の宮は未央を以て最となし、唐宮にては含元殿を以て最となす。長安は唐の故都なり。天中記十三、通鑑綱目四十一、大明一統志三十一等に出づ。今の意は含元殿に入得し畢つて、甚麼として長安を問ふとなり。

(ソ)第二段、主人公を提示す。

(ツ)阿誰とは、此れ主人公にあらずやとなり。即ち自ら門外客

處を求むる底を得來らん。當に知るべし、(ナ)皆是れ汪彥章が影子なり、並に他の(ラ)汪彥章が事に干らず。若し是れ眞箇の汪彥章ならば、根性必ず陋劣ならず、必ず入頭の處を求めじ、但だ只だ(ム)自家の主人公を信得及せば、並に許多の勞攘を消得せざれ。(ウ)昔僧あり、仰山に問ふ、「(ヰ)禪宗の頓悟、畢竟して入門の的意如何ん。」山曰く、「此の意極めて難し、若し是れ祖宗門下、上根上智ならば、一聞千悟して(ノ)大總持を得べし。此の根の人は得がたし。其れ根微に智劣なるあり、所以に(オ)古德の道く、若し安禪靜慮せずんば、這裏に到つて總に須らく茫然たるべし。」僧曰く、「(ク)此の格を除いて外、還つて別に方便の學人をして得入せしむることありや也た無きや。」山曰く、「(ヤ)別に有り別に無しといはゞ、汝が心をして不安ならしめん、我れ今汝に問はん、汝は是れ甚の處の人ぞ。」曰く、「(マ)幽州の人。」山曰く、「汝還つて彼の處を思ふや否や。」曰く、「常に思ふ。」山曰く、「彼の處の樓臺林苑、人馬(ケ)駢闐す、汝が思ふ底を(フ)返思せよ、還つて許多の般ありや否や、也た無きや。」曰く、「某甲這裏に到つて(コ)一切有ることを見ず。」山曰く、「汝が解猶ほ(エ)境に在り、(テ)信位は即ち是、人位は即ち不是なり」と。(ア)妙喜已

作の漢となるなり。

(ネ)只だ血肉團欒にあらず。

(ナ)皆是れとは、知る底、求むる底、提撕する底を指す。

(ラ)他の等は、眞の主人公を謂ふ。此れ下の所謂人位に當る。

(ム)血肉團欒にあらず、亦血肉團欒ならざる者にもあらず、如何とも言ひ難し、言語路絕の處なり。

(ウ)昔等、第三段、古人の因緣を引いて示す、之を引かんが爲に別に入頭を求むといふ、下の僧曰く、此格を除く云云に應ず。傳燈十一、會元九仰山章に此因緣を載す、傳燈の方正しき歟。

(ヰ)禪宗等、直指人心見性成佛の處。

(ノ)大總持は陀羅尼の譯、前に解するが如しこれ百千の法門、無量の妙義を一毛頭に現ずる處をいふ。圓覺經一、大寶積

に是れ老婆心切なり、須らく更に箇の注脚を下すことを著すべし。人位は卽ち是れ汪彥章、信位は卽ち是れ根性陋劣なりと知りて、(サ)入頭の處を求むる底なりと。若し正に話頭を提撕する時に於て、能く提撕する底を(キ)返思せよ。(ユ)還つて是れ汪彥章なりや否や、這裏に到つて(メ)間に髮を容れず、若し佇思停機せば則ち(ミ)影子に惑せられん。請ふ快に精彩を著けよ、忽にすべからず、忽にすべからず。(シ)前書の中に嘗て寫し去ること記得するや。心を息むることを得んとならば、且く心を息め已つて過去底の事、或は善、或は惡、或は逆、或は順、都て理會すること莫れ。現在の事も省することを得んとならば、便ち省せよ、一刀兩段して遲疑することを要せざれ。未來の事、自然に相續せざるべきな

經四、等に出づ。
(オ)大珠海禪師の語、傳燈二十八、頓悟要門論下に出づ。若し安禪等とは、上根上智の者は動靜の外に出身す、下根下劣の者は安禪を要すの意。
(ク)此格とは、一聞千悟、安禪靜慮をいふ。
(ヤ)本來此事に許多の名相なし、然るに……。
(マ)幽州は東北方の國、廣輿記一。
(ケ)駢闐は連る貌、又物の盛に集る貌。
(フ)返思とは、傳燈に思の字なし、先づ此僧をして幽州の千差萬別の境を觀念せしめて、其を して有無を返照せしむるなり。
(コ)樓臺人馬等あらざるをいふ。
(エ)境に在りとは、境とは山河等をいふにあらず、空理の目前に在るを境といふ。還源觀に云云。

(テ)信位、此れ數量を以て之を辨ずるにあらず、祖宗門下の相承の秘妙の法門なり、臨濟錄の所謂人境俱不奪なり、百丈錄に依るに、境位は卽ち信位なり、人位は言を以て示し難し、主人公拄杖子を突出するなり、之を得ると見れば則ち境位となる、又無位を加へて三位となせり、宗門玄鑑の圖に見ゆ。又注に云く、金剛三昧經に云く、凡夫地より佛地に至るまで五等位あり、一に信位、謂く、身中に佛性あり、本來淸淨なり、諸の境界は皆是れ意識分別なりと觀ず云云と。信位人位は僞仰家の立つる所の宗旨なりと。
(ア)第四段、信位人位を解す。
(サ)驅求底みな信位。
(キ)返思する底、之を汪彥章と謂ふべきや、返思なき處何ほこれ信位なり、此れ一應方便を

りと識らず、曾て此くの如く(エ)覰捕するや否や。這箇便ち是れ第一力を省きて工夫をなすの處なり。至禱至禱。

(ヒ)又

(モ)伏して承はる、第五の(セ)令嗣、疾を以て(ス)起たず、父子の情は千生百劫、恩愛習氣の流注する處なり。想ふに(イ)此の境界に當つて、(ロ)是の處あること無し。(ハ)五濁世の中の種々の虛幻、(ニ)一も眞實なるあることなし。請ふ行住坐臥、常に是の觀をなさば、則ち日久しく月深うして漸漸に銷磨せん。(ホ)然して正に煩惱するの時に子細に(ヘ)揣摩窮詰せよ、甚麼の處より起ると。若し起る處を窮め得ずんば、(ト)現今の煩惱する底は却つて甚麼の處よりか得來るや、正に煩惱するの時、是れ有なるか是れ無なるか、是れ虛なるか是

垂れて言ふのみ、本來人中に返思提撕なきことを知らしめんが爲なり、方便は枝蔓上に枝蔓を生ずる故に工夫法にあらず、提撕の處を碍ろが故に。
(ユ)汪彥章を見得せしや。
(メ)意は信位を轉じて人位となす、太だ急、擊石火、閃電光の如し。前漢書五十一。
(ミ)影子は信位なり。
(シ)第五段、再び前書を顧みて指示す。
(エ)覰捕は把得して用ふるをいふ。
(ヒ)汪內翰に答ふ第三書なり。
(モ)第一段、亡子を弔慰す。
(セ)令嗣とは、人の兒子を稱して令郎、令嗣といふ、猶ほ好き子と言ふが如し。
(ス)起たずとは、死するをいふ。
(イ)此の境界とは、亡子の境界なり。
(ロ)是の處等とは、處置する所なきをいふ、或は處とは道理の意なり。

(ハ)五濁とは一に劫濁とは、天災、地變、疫病等絕えず起りて時節の惡しくなること。二に見濁とは、人類が惡見を逞しうし、是を非とし、非を是とする等顚倒の見解盛になれること。三に煩惱濁とは、人類が、貪欲、瞋恚、愚痴を始めとし諸の煩惱を盛に起す樣になれること。四に衆生濁とは、人類の果報衰へて、身體矮弱、精神痴鈍となれるをいふ。五に命濁とは、人類の壽命の漸次に短夭となることなり。其度の強くなりし時を五濁惡世といふ。濁とは滓なり、法華方便品に出づ、文句に解說せり。
(ニ)是の觀とは父となり、子となる皆是れ幻化の法なりと觀す。
(ホ)第二段、有惱の根源を斷ぜし

れ實なるか、窮め來り窮め去らば、心之く所なけん。㋠思量せんと要せば但だ思量せよ、哭せんと要せば、但だ哭せよ。哭し來り哭し去り、思量し來り思量し去つて、藏識中の許多の恩愛習氣を㋷抖擻し得て盡きん時、自然に㋦氷の水に歸するが如くにして、我れに箇の本來煩惱なく思量もなく、憂なく喜なき底に還り去らんのみ。㋸世間に入得すれば出世、餘なし、世間の法は則ち佛法、佛法は則ち世間の法なり。父子は天性一なるのみ、若し子喪すれども而も父煩惱せず思量せず、如し父喪すれども而も子煩惱せず思量せざること還つて得べけんや也た無や。若し硬く止遏して哭すべき時に哭せず、思量すべき時にも又敢て思量せずんば、是れ特に㋾天理に逆らひ天性を滅せんと欲するなり。聲を

む、前段は慰諭を以て主とし、此段は教化を以て本意となす。

㋬揣摩等は、他人に由らず獨自心に於て諦審揣度して道理を研磨せんことを勸む。戰國策三上、史記六十九。

㋣若し根源を休歇せば過去、現在、未來、不可得なるべし。

㋠前の所謂蕩蕩地ならしむと云ふ、是れなり、此の如く云ふは根源を截斷せしめんが爲なり。

㋷抖擻は震動振擧なり、日用規範に云く、精神を抖擻し身を將つて端坐すと。

㋦氷等、傳燈二十八、忠國師の語

㋸第三段、天理に順じて慰諭す、世間の實相を得ば、卽ち出世にして、世の外に出世なし。大惠普說二。

㋾天理も天性も同一なり。聲を揚ぐとは先づ喩を擧ぐ、哭思止歇は皆是れ妄想なり、根源を窮むるは水を潑いで火を救ふなり。圓覺經三、前漢書五十六、董仲舒傳。

㋻第四段、佛性中に煩惱なきことを示す。

㋕煩惱の時も悟徹も皆是れ佛性の用なり。

㋵證道歌の語。

㋟金剛經纂要に解譯す。

㋹恁麼とは、永嘉の語を指す。

㋞圓覺經四、楞嚴經八に出づ。

㋡法華譬喩品に云く、「無智人中にて此經を說くこと莫れ」と、卽ち無明卽佛性、幻化卽法身等の語、無智の人之を聞かば錯り會すべき故なり。今文は一は無智の人の前にて說いて人を敎壞する莫れと彥章を誡む。一は彥章は有智の人なれば此くの如くに說く、若し無智の人ならば之を說かずと、次ぎの義可ならん。

揚げて響を止めんとし、油を潑いで火を救はんとするのみ。㋻正に煩惱するに當る時㋕總て是れ外事にあらず、且つ外邊の想を作すことを得ざれ。㋵永嘉の云く、「無明の實性卽佛性、幻化の空身卽法身」と。㋟是れ眞語、實語、不誑、不妄等の語なり。㋹恁麼に見得し了れば思量せんと要し、煩惱せんと要するも亦不可得なり。㋞是の觀をなす者を名けて正觀となす。若し他觀ならば名けて邪觀となす。邪正未だ分れざるとき、正に好し力を著くるに、此れは是れ妙喜が決定の義なり。㋡無智人の前にて說くこと莫れ。

國譯大慧普覺禪師書上　終

國譯大慧普覺禪師書下

參學　慧然　錄

(イ)夏運使に答ふ

(ロ)示諭せらる、道契ふときは則ち霄壤共に處り、趣異なるときは則ち(ハ)覿面も楚越なりと。誠なるかな是の言、卽ち此れ乃し(ニ)不傳の妙なり、左右意を發して(ホ)妙喜が書を作らんと欲し、未だ(ヘ)觚を操り(ト)紙を拂はざるに、已に(チ)兩手に分付し了れり。又何ぞ(リ)堅忍究竟を待つて以て(ヌ)他日を俟たんや。此箇の道理は唯だ證する者のみ、方に(ル)默默として相契ふ、(ヲ)俗子ともに言難し。(ワ)延平は乃ち閩領の佳處なり。左右能く自ら(カ)調伏して(ヨ)逆順の關棙子の爲に轉ぜられずんば、便ち是れ大解脱の人なり。此人能く一切の關棙子を轉じて(タ)日用活鱍々地なり。他を(レ)拘牽惹絆すること得ず、苟も若し直下に便ち恁麽に承當せば、自然に一毫毛も我れに於て障を作すこと無けん。(ソ)古德の言へるとあり、「佛、一切の法を說くは、一切の心を度せんが爲なり、我れに一切の心なくんば、何ぞ一切の法

(イ)夏、字は志宏、今の題下に之を脫落す、年譜に見ゆ、覺明居士と號す。運使は、唐會要に云く、「先天二年、李傑、陝州の刺史となり、水陸發運使に充てらる、開元十八年、裴耀卿始めて江淮轉運使となる、此れ其官を命ずるの始なり」と。事物紀原六等に出づ、之れ運輸の事を司る官なり。此章は文字を離れて、有無の心を調伏せんことを示す。

(ロ)第一段、前來の書を擧げて道の契ふことを許す。道契とは夏運使が此道に契當すと謂ふにあらず、運使の得る所の道と大惠の道と相契ふなり、相契ふ時は千里を隔つと雖も、一處に居るが如し、君子は千里同風。

(ハ)覿面は面のあたり見ると、莊子、四十二章經に出づ。楚越とは莊子に曰く、「仲尼曰く、其の異なる者より之を見れば、肝膽も楚越なり、其同じき者より之を視れば、萬物皆一なり」と。

(ニ)道契ふのみを謂ふにあらず、道契ふも天寬も楚越も皆不傳の妙なり。

(ホ)上卷の雲門に發する書の例なり。

(ヘ)操觚、觚は竹簡なり、筆なり、淮南子に觚の欄柄なりと謂ふは、今は取らず。韵府に、「韓愈、皇甫湜、李賀家を過ぎる、賀忻然として觚を操りて輸に染む云云」。

(ト)紙とは、埜客叢書、八に云く、「帋の字或は紙に作る。蓋し古は縑帛を以て書す、故に糸に從ふ、後に蔡倫、故布を剉りて紙を作る、故に其字、巾に從ふ」と。今紙を拂ふとは紙上の塵を掃ふなり、或書に健筆を掃紙といふ、その早きこと塵を掃ふ如きをいふ。其義は、聯珠詩格一、李白詩集八に見ゆ。

(チ)兩手等とは、道契ふて妙旨を得、其の得る所の妙旨を以て妙喜が書を發せんと欲す、未だ筆にせざる已前に相見分付し了るとの意。

(リ)堅忍、五十二位の中の十回向道種性を堅忍の位といふ、仁王經下に云く、「道種性、堅忍中に住して一切法は無生無滅と觀ず」と、堅忍とは堅固なる智慧なり、或る抄に云く、「豈に十回向、十地、妙覺を待たんや、今圓融の理に入り主伴交參の處なり、千里を隔つと雖も、眉毛斷ひ結び、鼻孔相拄ふ故に云ふ、又何ぞ堅忍究竟を待たん」と。究竟とは佛果なり、卽ち三祇の修行、五十二位の階級を歷て相見すといふにあらざるなり。

(ヌ)他日等とは、夏の來書に他日の相見を待つと言ひ來りしにや、言は分付し了る、何ぞ他日を待たんやとなり。

(ル)默默等は、二人共に言語を交へずと雖も、默默として相契ふとなり。

(ヲ)俗子とは在家の人のみにあらず、縱ひ出家と雖も、凡夫庸流の漢をいふ。

(ワ)第二段、夏運使が境に轉ぜられざるを讃す。延平は、閩中の名津なり。

(カ)妄心を調伏して順境に轉ぜられざるをいふ、逆の字は今は意なし。

(ヨ)關棙子に、諸說ある中、正字通に、門樞(くるゝ)の車なりとあり、葛藤語箋に云く、「機關(からくり)を造り、多く小車を製して順に轉じ、逆に轉ず、之を關棙子といふ」と。今は此の義なり。又斯道の微妙なる處をいふことあり、傳燈錄、黃檗希運の章等に出づ。

(タ)活鱍々地とは、活達自在の義、恰も魚の水中に游泳するの自在なるが如く、又びちびちと水上にとびはねるが如くに活達なるをいふ。

(レ)拘牽等とは、圓悟心要上に云

を用ひん」と。又嬾融の云く「㋡恰恰として心を用ふる時、恰恰として無心に用ふ、曲談は名相に勞す、直說は繁重なし、無心にして恰恰として用ふれば、常に用ひて恰恰として無なり、今無心と說く處、有心と殊ならず」と。特に嬾融のみ㋧是くの如くなるに非ず、妙喜と左右と亦其の中にあり、㊉其の中の事、拈出して人に似し難し。前に所謂、默然として相契ふといふ是なり。

㋶呂舍人に答ふ　居仁

㋰千疑萬疑、只だ是れ一疑、話頭上に疑ひ破るれば、則ち千疑萬疑一時に破る。話頭破れずんば、則ち且く㋒上面に就いて之れを厮崖めよ。若し話頭を棄て了つて却け去つて、別に文字の上に疑を起し、經敎の上に疑を起し、古人の公案

云す、他とは大解脱の人を指す。

㋞第三段、古語を引いて前を結ぶ。古德とは六祖なりと。禪源諸詮都序下、傳心法要。文意は、順逆の境に轉ぜらるるが故に、佛は八萬四千の法門を說きたまふ、今夏運使は無心の故に。

㋡恰恰無心等は、上に既に辯ず、會元二に云云、抄に曰く、恰恰は間斷なき貌云云と。此は夏運使、國領の佳處に轉ぜられざるをいふ。

㋧是の如くとは、無心にして自在に物に應ずるをいふ、即ち無心なれども恰恰として用ふるなり。

㊉冷煖自知の處、得る所あるものは默契す、只だ自ら恰悅すべし、持して君に贈るにたへず。

㋶宋史列傳百三十五、名臣言行錄別集七、佛法金湯編十四等に出づ。舍人は、事物紀原五に出づ。此の章は打成一片の大疑團を要することを明す。

㋰第一段、多疑を斥く。來書に佛祖の語を引いて問ふ、故に大惠一一捋下して本參を疑はしむ。

㋒上面とは、話頭上面なり。

㋼第二段、工夫の法を示す。

㋨思量盡きんとする處、好消息なり、漸く道に近づく、木を鑽つて將に火の出でんとする時なり。

㋔老鼠等は、驀地に偸心絕する處、此語は五代史六十五に出づ、下に復た之を出す。

㋗斷は斷絕なり、㘞地一聲大悟の處をいふ、偸心絕する處倒斷するを見る。

㋳第三段、自家に看取すべきを示す。閙とは佛祖の語に就いて疑あるが故に閙なり。

㋮狗子云々は、人天寶鑑に德山

の上に疑を起し、日用塵勞の中に疑を起さば、皆是れ邪魔の眷屬なり。㋼第一に擧起の處に向つて承當することを得ざれ、又思量卜度することを得ざれ、但だ意を著けて㋨不可思量の處に就いて思量せよ。心之く所なくんば、㋔老鼠、牛角に入るがごとく便ち㋗倒斷を見ん。㋳又方寸若し閙しくんば但只だ㋮狗子無佛性の話を擧せよ。佛語祖語、諸方老宿の語、千差萬別なるも、若し箇の無の字を透得せば、一時に透過せん。人に問ふことを著ひざれ。若し一向に人に佛語又如何ん、祖語又如何ん、諸方の老宿の語又如何んと問はば、永劫に悟る時あること無けん。

㋘呂郎中に答ふ　隆禮

㋫令兄の居仁より兩び書を得たり、此の事の爲にすること甚だ忙はし、然も亦當に㋙著忙す

密禪師の會下云々と、往見。

㋘呂は居仁が弟なり、郎中は唐以來は正郎と號す、武德三年に尚書郎を改めて郎中となす、事物紀原五などに出づ。此章の大意は乾屎橛を擧げて萬疑を破し、涅槃經を引證して生滅の心を破す。此書は居仁が爲に前書を發す、後に再び佛祖の語の斷滅等を問ひ來る故に、再び答ふる時居仁が事を以て隆禮に告ぐる也、即ち居仁が事を本となし、隆禮が事を傍となして論ず、そは每每居仁を敎誨すれども居仁肯ぜず、故に暗に隆禮に託して相俱に居仁を勸督するなり。

㋫第一段、居仁に託して隆禮を勸誨す。

㋙著忙は唐の俗語。

㋓從官は官事に從ふなり。

㋢死を待つの外別にあらず。

㋐早は、早年の早にあらず、死後に對していふ。

㋚臘月等は、生死到來の時節なり。

㋖打疊は萬事をうちしまふをいふ。

㋴此事を透得せざる故に忙はし。

㋱消息とは、ありさまなり。

㋯第二段、徒らに他家の事を知ることを誡め、自家の事を知らざることを責む。措大とは、天下の大を措くなり、或は謂言長語するなりと、或は自負高慢の人を罵る意にも用ひらる、家とは人を指す詞なり。

㋛是事とは、世間の萬事即ち古今の故事來歷等。

㋽孟子、名は軻、字は子輿、鄒の人、戰國の初に出で、萬章の徒と仲尼の道を祖述す、史記七十四に載す。

㋪莊子、名は周、字は子休、楚國蒙縣の人、寓言荒唐を以て世

べし。年已に六十、(エ)從官又傲し了れり。(テ)更に如何んがせんと待たんや。若し(ア)早く著忙せずんば(サ)臘月三十日に如何んが(キ)打疊し得辨せんや。聞く左右も邇來亦(ユ)忙はしと。只だ這の著忙底、便ち是れ臘月三十日の(メ)消息なり、如何んが是れ佛乾屎橛と。這裏を透らずんば臘月三十日と何ぞ異ならん。(ミ)措大家が一生故紙を鑽りて、(シ)是の事知らんことを要し、博く群書を覽て、高談闊論し、孔子又如何ん、(ヱ)孟子又如何ん、(ヒ)莊子又如何ん、(モ)周易又如何ん、古今の治亂又如何んと。(セ)這些の言語に使はれ得來つて、七顚八倒す。(ス)諸子百家、纔かに人の一字を擧著するを聞かば、便ち卷を成して(イ)念じ將ち去りて一事の知らざるを以て恥となす。他に(ロ)自家屋裏の事を問著するに及んで、並に一人として知るものなし。謂つべし、(ハ)終日他の寶を數へて自ら半錢の分なしと。空しく世上に來りて(ニ)一遭を打するのみなり。這の(ホ)殼漏子を脫却せば、天堂に上ることも也た知らず、地獄に入ることも也た知らず、其の業力に隨つて(ヘ)諸趣に流入せんも並に知らず。若し是れ(ト)別人の家裏の事は、細大知らざる者あること無し。士大夫、書を讀み得ること多き底は無

を驚かす、史記列傳三に載す。

(モ)周易、本義に云く、易書の名なり、其卦は本伏羲の畫する所、交易あり、變易の義、故に之を易といふ。

(セ)這些等とは、學道の眼より之を看れば則ち些子なりとの意。

(ス)諸子とは、莊子、列子、墨子、韓非子、愼子、淮南子、荀子等なり。百家とは全數を擧ぐ。

(イ)念とは、暗誦、記憶なり。

(ロ)自家等とは、自己の本性。

(ハ)終日等は、華嚴經六菩薩明難品に出づ。

(ニ)一遭を打すとは、生より死に到るなり。

(ホ)殼漏子とは、身尸なり、普通に貝から、又からといふ義は蓋し此字を書く。傳燈二十八忠國師の語、掌珠故事四等に載す。

(ヘ)諸趣は地獄、餓鬼、畜生、人、

明少し。官を傲し得ること小なる底は人我小なり。官を傲し得ること大なる底は人我大なり。自ら道ふ、我れは聰明靈利なりと、(チ)秋毫ばかりの利害に臨むに及んでは聰明も也た見えず、靈利も也た見えず。平生所讀底の書の一字も也た使ひ著ず。蓋し(リ)上大人丘乙已の時より便ち錯り了れり、(ヌ)只だ富貴を取らんと欲するのみ。(ル)富貴を取り得る底、又能く幾人かある、肯て(ヲ)頭を回らし腦を轉じて、自己の脚跟下に向つて推窮せよ。我が這の富貴を取らんとする底、何れの處よりか來る、卽今富貴を受くる底、異日に却つて何れの處に向つてか去るや。既に來處を知らず、又去處をも知らず、(ワ)便ち心頭迷悶するを覺すべきなり。正しく迷悶の時、亦他物にあらず、只だ這裏に就いて箇の話頭を看よ。僧、雲門に問ふ「如何なるか是れ佛。」門云く、「乾屎橛」と。但だ此の話を擧せよ。(カ)忽然として伎倆盡きん時便ち悟らん。切に忌む文字の引證を尋ねて胡亂に(ヨ)博量注解す、縱然ひ注解し得て分明に說き得て(タ)下落あるも、盡く是れ(レ)鬼家の活計なり。疑情破れざれば生死(ソ)交加す、疑情若し破るれば則ち生死の心絕す。生死の心絕するときんば、(ツ)佛見法見亡ず、佛見法見すら尙ほ亡ず、況ん

天堂等なり。

(ト)自己に對して孔子、孟子等をいふ。

(チ)秋毫は、極小をいふ。利害とは、天下の政事の成敗利害なり、卽ち天下の利と害とを辨別する能はずと。卽ち自家屋裏の事を會せば、則ち智を以て前導となし、力を用ひずして而も君を堯舜に致す、若し本分の事を會せずんば則ち天下の政に臨んで利害成敗に一字も使ひ得ずとなり。

(リ)上大人等、普燈四、白雲章に出づ。冠註に云々す。上大人は上古の大聖人なり、丘乙已は孔丘一人のみの意、則ち孔子の時よりの意か。

(ヌ)士大夫、自利利他を求めず、故に此の如く富貴を取らんと欲するなり、學問をなすは天下を治めんが爲なり、然るに士大夫は然らず、故に云々す

や復た更に㋧衆生、煩惱の見を起さんや。㋤但だ迷悶する底の心を將つて乾屎橛の上に移し來つて、㋶一抵に抵住せよ。生死を怖るる底の心、迷悶底の心、思量分別する底の心、聰明を作す底の心、自然に㋰行ぜず、行ぜざることを覺得せん時、空に落ちんことを怕るること莫れ。忽然として抵住の處に向つて消息を絕せば、㋒平生を慶快にするに勝へざるべきなり。消息絕することを得了つて、佛見、法見、衆生見を起して思量分別し、聰明を作し、道理を說くも都て相妨げず、日用四威儀の中、但だ常に蕩蕩地ならしめて、靜處鬧處、常に乾屎橛を以て提撕せよ。日往き月來らば㋼水牯牛自ら純熟せん。㋨第一に外面に向つて別に疑を起すことを得ざれ、乾屎橛の上に疑破るれば、則ち㋔恒河沙數の疑一時に破れん。㋗此れより前に亦嘗て㋳此くの如く居仁に寫し與ふ。比ごろ趙景明來りて書を得たり、書中に再び㋮來問して云く「知らず㋘此れを離れて別に工夫を下す處ありや也た無きや。又擧手動足、著衣喫飯するが如き當に如何んが體究すべき。㋫復た只だ話頭を看んとやせん、復た別に體究すべきありとやせん。又平生の一大疑の事、今に至るまで未だ了せず、㋙只だ死後の斷滅か不斷滅かの如き如何んが決定して見得せん。又經論の所說を引くことを要せず、古人の公案を指すことを要せず、只だ目前に據つて、直截分明に斷滅不斷滅の實處を指示し㋓剖判せよ」と。渠が此くの如きの說話を觀るに、返つて㋢三家村裏に事を省する漢、却つて如許多の㋐糞壤無くして死すれども、也た死し得て㋚瞥脫なるに如かず。㋖分明に他に向つて道ふ、千疑萬疑只だ是れ一疑、話頭の上に疑破するときは、千疑萬疑一時に破せん。話頭破せざれば則ち且く話頭の上に就いて之れを厮崖めよ。若し話頭を棄て了つて、却つて去つて別の文字の上に疑を起し、經敎の上に疑を起し、古人の公案の上に疑を起し、日用の塵勞の中に疑を起さば、皆是れ邪魔の眷屬なり。又擧起の處に向つて承當すること

るなり。

㋸第四段、喚醒して語を轉ぜしむ、斯く警策して下の文を起す。取り得ば求め得る義なり、佛家には因果といひ、儒家には天命といふ。

㋾頭等とは、欲求の境より眞道に向ふ。

㋻好消息漸く相近づく。

㋕第五段、計較を斥く。

㋵悔は變るなり。注は物を記するをいふ。

㋟下落は落着の意、また證據正しきをいふ。

㋹鬼等は小理味を咬み出して愛着するなり。

㋞交加は、物の入り雜るをいふ。今の意は、念念前滅後生するをいふ。

㋡佛見法見の語は、思益經簡註三、菩薩無二品にあり、心外に佛陀、法門の存在を認むる等をいふ。

㋧衆生は佛見に對し、煩惱は法見に對す。

㋤第六段、工夫の法を示す。

㋶抵は、擠なり、擲なり、又は當なり、抵住は、當得の義なりと、どつしりとすわるが如し。

㋰行起せずの意。

㋒平生の碍膺の物一時に盡きるなり。

㋼水牯牛とは、心法を喩ふ、傳燈九、福州大安章。

㋨外面は、本參の外をいふ、これ隆禮に向つて言ふに似て、實は居仁に言ふなり。

㋔千疑萬疑をいふ。

㋗第七段、此に初めて居仁が書を述ぶ。

㋳此の如しとは隆禮にいふ、恒河沙數の疑を指す。

㋮問を致し來るなり。

㋘此れとは、乾屎橛なり。

㋫擧手動足等の上に於てなり。

㋙これ外道の邪計なり。楞嚴二、十、華嚴疏抄十七、大論三十八。死後の滅不滅の疑は五蘊を所依として起る邪見なり、五蘊に了達すれば此の疑なし。中阿含十六、廣弘明集九より十卷に至り、范子眞傳の神滅論を破せり、五蘊皆空を知らざれば生滅輪廻止むことなし。邵氏の聞見前錄十八に、邵康節が輪廻を信ぜざるを出す。

㋓剖判せよ、までが再問の書なり。渠已下は大惠の判語なり、渠とは居仁を指す。

㋢三家村裏は張無盡の語なり、大惠普說一の八十五丁。事を省すとは、事務を省略するなり、東坡詩集四。

㋐糞壤とは慮知分別をいふ。

㋚瞥脫は瞥地的脫にて、速かに成就するをいふ。

㋖第八段、答書の事を述ぶ。

を得ざれ、又思量卜度することを得ざれ。但只だ心意を著けて不可思量の處に就いて思量せよ、心之く所なくんば、老鼠の牛角に入るごとく、便ち倒斷を見んと、寫し得て此くの如くに分曉し了る。㋴又却つて更に來りて忉忉怛怛地にして問ふ、知らず許多の聰明知見甚の處に向つてか去る。㋱道ふことを信ぜずや、平生讀む底の書、這裏に到り一字も也た使ひ著じ。㋯而今已むことを得ずして更に他の爲に些の㋛惡氣息を放たん。若し只だ㋓恁麼に休し去らば却つて是れ妙喜、渠に㋪問ひ了られて更に答へ得ずといはん。此の書纔かに到らば便ち送つて㋲渠に與へて一看せしめよ。㋝居仁自ら言ふ、行年六十歲、此の事未だ了せずと。渠㋜に問へ、未だ了せざる底、復た是れ擧手動足、著衣喫飯する底、

㋴又云々は、趙景明が來時の來問をいふ。
㋱道ふこと等とは、前書に道ふことを信ぜずやとなり。
㋯第九段、惣論して下段を起す。
㋛惡とは息の臭きなり。大光明藏上。
㋓恁麼とは、已むことを得ずを指す。
㋪趙景の來書に對して、返答せずんば、居仁歎き言はん、大小の大惠も死後の不斷滅に於ては如何ともせずと。
㋲渠は居仁を指す。
㋝第十段、多疑即ち一疑なることを示す。
㋜他問を以て返詰す。居仁は擧手着衣等に疑をなし、何を以て未了といふや、平生の話頭を見了するは、着衣喫飯の上に於て了するや。又外に工夫すべきありや云々。
㋑了は體窮なり、自ら未了底と言つて未了の者にし去つて而も了ぜんと欲す、又如何んが了ぜんと詰るなり、畢竟、一疑を以て千萬疑生ずるを責む。
㋺殊に已下、大惠の評論なり。
㋩此の疑とは、本參の疑なり。
㋥五蘊の斷不斷を疑ふ故に。
㋭渠は居仁を指す也。
㋬第十一段、斷滅不斷滅を辨ず、中に初に不正の文を說く。斷滅は斷見、不斷滅は常見なり、元來常斷なきが故に、然るに居仁は剖判をせよといふ。
㋣人とは大惠なり。
㋠こちらからも、くさい息を吹きかへすぞとなり。
㋷第二節、故らに古人の公案を引く。前の居仁の書に、古人の公案を指すを要せず云云といふ、今は居仁に當りて、彼書の問語を徵して他の嫌ふ所を引くなり。志道は傳燈五に

未だ了せざるか、若し是れ擧手動足、著衣喫飯する底、又㋑如何んが他を了せんと要するや。㋺殊に知らず、只だ這の死後の斷滅不斷滅を了知し決定して見得せんと欲する底、便ち是れ閻家老子の面前にて鐵棒を喫する底なり。㋩此の疑破れずんば㋥生死に流浪して未だ了期あらじ。渠㋭に向つて道へ、千疑萬疑只だ是れ一疑なり、話頭若し破るれば死後の斷滅不斷滅の疑は當下に冰銷瓦解せん。㋬更に直截分明に斷滅不斷滅を指示剖判せしめんや、此くの如きの見識は外道と何ぞ異ならん。平生許多の之乎者也を做すは何の用を作さんとか要す。渠既に許多の遠地より這般の惡氣息を放ち來りて㋣人を熏ず、妙喜、只だ恁麼に休し去るべからず、㋠亦些しの惡氣息を放ち却つて去つて他を熏ぜん。則箇、渠、經教及び古人の公案を引くことを要せず、只だ目前に據つて直截分明に斷滅不斷滅の實處を指示せしむ。㋷昔、志道禪師、六祖に問ふ、「學人出家してより涅槃經を覽ること十餘歲に近し、未だ大意を明めず、願くは師、垂誨せよ。」祖曰く、「汝何れの處か未だ了せざる。」對へて曰く、㋦「諸行無常、是れ生滅の法なり、生滅滅し已つて、寂滅を樂となすと、此に於て疑惑す。」祖曰く、「汝作麼生か

云く、六祖慧能の法嗣云云檀經にも亦云す、古今異なりと雖も了解せば同じ、然るに居仁は滅か不滅かを疑ふのみならず、又古今の二見をなす故に、大惠、古今を一にせんと欲して之を引く、而して同時に復た志道の邪解と居仁の邪解と同じきことを擧げて、古邪今邪の異ならざるを示す。故に下に葛藤少からず等といふ。
㋦諸行等の偈は涅槃經十三聖行品に出づ。之れ釋尊因位の時、婆羅門となりて雪山に住して菩薩行を修す、時に釋提桓因、化して羅刹(食人鬼等と譯す)となりて、過去佛所說の此偈を宣べしなり、長ければ之を略す、祖庭事苑一に略抄せり。諸行とは、因緣の關係に因つて生成したる總ての法をいふ。生滅滅已とは、吾人本具

疑ふ。」對へて曰く、「一切衆生皆二身あり、謂く㋸色身と法身なり、（此れ乃ち居仁同じく道ふ。）色身は無常にして生あり滅あり、法身は有常にして知もなく覺もなし。㋾經に云く、生滅滅已寂滅爲樂とは、㋻未審、是れ何の身か寂滅し、何の身か樂を受くるや。若し色身なりといはば、㋕色身は滅する時、四大分散して全く是れ苦なり、苦を樂と言ふべからず。㋵若し法身は寂滅して即ち草木瓦石に同じ、㋟誰か當に樂を受くべきや。㋹又法性は是れ生滅の體、㋞五蘊は是れ生滅の用、一體五用なり。㋡生滅は是れ常なり、生ずるときは則ち㋧體より用を起し、滅するときは則ち用を攝して體に歸す。㋤若し更生することを聽さば、即ち有情の類は不斷不滅ならん。若し更生を聽さずんば即ち永く寂滅に歸して無情

の佛性に體達すれば、宇宙間の現象の一一の其儘が法性の活動妙用なることを如實に知ることを得、既に之を識れば生の欣ぶべきなく、死の厭ふべきなく、全く生死を超越するを、生滅滅已といふ。既に生滅を滅し已れば、無限の生命を得、理想境に達したるものにして、政事に、教育に、將た農、工、商等に奮鬪しつつある日用生活の其儘が寂滅にして、法身、般若、解脱自在の眞の樂地なれば、之を寂滅をもつて樂となすといふなり、迷情分別の境にあらず。

㋸色とは、佛教にては之を狹義に解せば眼識所緣の青黃等を色といひ、廣義に解せば物質を色といふ、今は廣義の方にて肉體を色身といふ。法身とは、法界に周偏せる常住不變の理をいひ、或は吾人本具の覺體をいひ、或は佛の靈覺をいふ。金光明經二、妙宗鈔二、等に出づ。

㋾疑に二あり、初に經文を擧ぐ。

㋻次に疑を述ぶ。

㋕疑惑を破す。四大とは地、水、火、風にして、吾人の肉體は四大和合して成ずとす。智度論五十二等。

㋵法身に樂なきの疑を破す。瓦石に同じとは志道の已見なり。

㋟志道は法身の眞樂を知らずして、世間の五欲の樂の如くに思ふて此疑をなす。

㋹又法等とは、生滅滅已を疑ふ、初に邪見を擧ぐ。法性とは萬法の體性、即ち吾人の本體、萬有の實體の意なり。

㋞五蘊とは、色、受、想、行、識にして、蘊とは積集の義、此五が調和し蘊積したるものを吾人の體とす、而して其同

の物に同じからん。是くの如くならば則ち一切の諸法、涅槃に禁伏せらるることを被つて、尙ほ生ずることを得ず、㋶何の樂か之れあらんや」と。（居仁と一㋰狀に領過すべし。）㋒祖師、這裏に到りて臨濟・德山の㋼事を用ふるがごとくなること能はずして、遂に些の氣息を放つて㋨他に還して云く、「㋔汝は是れ釋子なり、何ぞ外道の斷常の邪見を習ふて、而も㋗最上乘の法を議するや。㋳汝が所解に據らば、即ち色身の外に別に法身ありとし、生滅を離れて寂滅を求む。又涅槃の常樂といふを推して言へり、身に受くる者ありと。㋮斯れ乃ち生死を執吝し世樂に耽著するなり。汝今當に知るべし、佛一切の迷人の㋘五蘊の和合を認めて自體の相となし、一切の法を分別して㋫外塵の相なりとなし、生を好し死を惡み、

種類を集め分類したるものが五蘊なり。初の色とは物質にして肉體なり。受想行識の四は心にして精神上の分類なり。之を事苑に略盡して曰く、「變礙を色といひ、領納するを受といひ、像を取るを想といひ、造作するを行といひ、了知するを識といふ云云」と。舊譯には陰と云ふ、眞性を陰蔽するが故なり。名義集の六。

㋡これ生滅の當體即法性常住の意に非ずして今は前滅後生、前滅後生して相續して絕えざること流水の如くなるを常といふ。

㋧此は不斷常、相續常に似同す、眞法を著して言ふ。

㋤次に正しく疑ふ。更生は楞嚴八、法華二等に出づ。

㋶虛妄の心を以て、妄に生滅を認めて之を疑ふ。

㋰衆人同罪といふが如し、志道は斷滅不斷滅をいふ、居仁亦之をいふ、故に同罪なれば一狀に領過すといふ。

㋒祖師とは第六祖を指す、壇經に詳かなり。

㋼事を用ふとは、棒喝なり。

㋨他に還すは、答の義なり。

㋔邪解を破するに二、初に總して斥く。

㋗最上乘とは、涅槃をいふ。

㋳初に別して生滅滅已等の文を謬解するを破す。

㋮汝等は、六祖の正解を述ぶ、初に諸行無常、是生滅法を謬解するを破す。

㋘五蘊等は、圓覺經二。

㋫三界唯心、萬法唯識の理に暗くして妄に外に六塵を認む。

㋙當體即空なることを知らずして妄に生を好み死を惡み、受くべからざるに之を受け、强ひて生滅の法とす。

㋓上の何の樂か之れあらんの語

念念遷流すれども夢幻虚假なることを知らずして㋙枉げて輪回を受け常樂の㋓涅槃を以て翻つて苦相となし、終日馳求するが爲に㋢佛此れを愍むが故に、乃ち涅槃の眞樂を示す。㋐刹那も生相あること無く、刹那も滅相あるとなし。更に生滅の滅すべき無し。（此に到りて請ふ眼睛を著けよ。）是れ則ち寂滅の現前するなり。現前の時に當つて、亦現前の量なきを乃ち常樂と謂ふ。㋚此の樂は受くる者あること無く、亦受けざる者あること無し、（猶ほ些子に較れり。）㋖豈に一體五用の名あらんや、㋴何ぞ況んや更に涅槃、諸法を禁伏して、永く生ぜざらしむと言はんをや。此れ乃ち佛を謗り法を毀るなり。㋱（居仁亦一分子あり。）㋯吾偈を聽け、曰く㋛（分疎不下。）『㋽無上の大涅槃、圓明にして常に寂照す、凡愚は之れを死と謂ひ、外道は執して斷と爲す、諸の㋪二乘を求むる人は、目づけて以て無作となす。盡く情の所計に屬す、㋲六十二見の本なり、妄に虚假の名を立す、何ぞ眞實の義と爲さん。（居仁、實處を見んと要せば、但だ此の一句子を看よ。）唯だ過量の人のみ有りて、（未だ其の人を見ず。）㋝通達して取捨なし。（居仁、更に疑ふこと三十年せよ。）㋜五蘊の法及び蘊中の我、（居仁、裏許に在りて出づるを求むるに門なし。）外に衆の色像、（眼に花。）一一音聲の相、（人を賺殺す。）を現ずるも、㋑平等にして夢幻の如し（一半を救得す。）と知るを以て、凡聖の見を起さず涅槃の解を作さず、㋺二邊三際を斷ず。常に諸根の用に（亦た未だ其の人を見ず。）應じて而も㋩用の想を起さず、一切の法を分別すれども分別の想を起さず、㋥劫火海底を燒き、風山を皷して相擊てども、㋭眞常なる寂滅の樂、涅槃の相是くの如し。』吾れ今强ひて言說して汝をして邪見（只だ是れ居仁肯て捨てず。）を捨てしめんとす。汝、

に應ず。

㋢次に生滅滅已等の二句を解す、意は五陰の樂には壞苦、行苦あるが故に、佛、眞樂を示す。

㋐刹那等は、此の眞樂は刹那も云云となり、此の生相、滅相とは、凡夫外道の計着する所の生滅なり。

㋚此樂とは眞樂なり、如如の樂なり故に。

㋖之れは生滅滅已を解す、即ち眞箇の中に凡夫五陰なるものなし。

㋴何ぞ等、萬法は燃然、堂堂として露現す、涅槃百草頭の祖師意。禁伏とは禁錮といふが如し。

㋱志道は佛を謗り法を毀す、居仁も一分子。

㋯次ぎに偈を以て、重ねて示すなり。

㋛分疎とは、輟耕錄に云く、「人の自ら其事の是否を辨白するを俗に分疎と曰ふ」と。顔師古曰く、「解は今の分疎の若し云云。」

㋽無上、法藏心經疏に云云す、涅槃經如來性起品。圓滿明淨にして寂にして而かも照し、照にして而かも常に寂なり、然るに凡外は迷ふて云云すと。

㋪二乘とは聲聞乘、緣覺乘にて小乘の機なり。無作とは、智を滅し識を滅す故にいふ、法界次第中。

㋲六十二見とは、外道凡夫の迷執妄見をいふ。法華文句四の二、華嚴疏十七等に出づ。

㋝眞妄の實相に通達するが故に。

㋜蘊中の我とは、所謂卽蘊の我なり、凡そ我に卽蘊の我と、離蘊の我となり、我とは常一主宰の義とて、吾人の身心中に常住不變にして吾人を支配し事物を主宰する一實體あり、靈魂ありと認むるを卽蘊の我といふ、これ一般人類の迷執なり。又吾人の身心以外に別に宇宙間に梵とか、神とか、神我等と目すべき一箇の完全者ありて、よく萬物を造り、吾人を主宰せりと妄執するを離蘊の我といふ、これ多く外道の迷執する所なり。此等を總じて我執といふ。然るに吾人は物質と精神と結合して成れるものにして、決して我といふが如き主宰者あるに非ず、又五蘊其もの及び宇宙萬有も亦皆因緣の大道理に依りて成立し活動せるものにして、必ず神我といふが如き主宰者あるに非ずと敎ふるが佛敎なり。

㋑色を執取せば好醜、聲を取らば佳不佳を分別す、然るに色、聲も凡聖等の得べきものなきが故に。

㋺二邊は有の邊、無の邊なり。三際とは過去、現在、未來の三世なり。諸根とは、眼、耳等の六根なり。

㋩恰恰として心を用ふること無く、自在に時に臨み機に應ずる境界なり。玄沙廣錄中。

㋥世界の成立より破壞し終るまでを成、住、壞、空の四期に分つ、その四期各二十劫を經る中、最後の第八十劫の時に大火災起りて世界の一切を燒き盡すといふ、其火を劫火といふ。

㋭世界大戰の砲火相交ふる大慘劇中に在つても、震雷暴風雨の中に在るも、劫火洞然として大千界を燒き盡すも、涅槃眞常の樂は些の異相なし、性相常然として是くの如きのみ。

(ヘ)言に隨つて解すること勿くんば、居仁記取せよ。汝に許す少分を知ることを。」只だ這の少分もまた消得せず。志道、偈を聞いて忽然として大悟す。(ト)葛藤少からず。(チ)只だ這の一絡索、便ち是れ直截分明に居仁に指示する底の指頭子なり。居仁此れを見て、若は道はん、「猶ほ是れ經論の所説なり、尚ほ古人の公案を指すなり」と。若し尚ほ(リ)此くの如きの見を作さば、地獄に入ること(ヌ)箭を射るが如けん。

(ル)呂舍人に答ふ　　居仁

(ヲ)承はる日用工夫を做すことを輟めずと、工夫熟せば則ち關棙子を撞發せん。所謂工夫とは、世間の塵勞を思量する底の心をもて、乾屎橛の上に回在して情識を行ぜざること、(ワ)土木偶人の如くに相似たらしめよ。(カ)昏怛にして巴鼻の把捉すべき沒きことを覺得せん時、便ち是れ好消息なり。空に落ちんことを怕るる莫れ、亦前を思ひ後を算りて、幾時か悟を得んといふこと莫れ、若し此の心を存せば、便ち邪道に落ちん。(ヨ)佛の云く、「是の法は思量分別の能く解する所に非ず」と。(タ)解著すれば即ち禍生ず、思量分別の能く解せざることを知得する者は是れ誰そや、(レ)只だ是れ箇の呂居仁なり。(ソ)更に頭を回らし腦を轉ずることを得ざれ。此れより前に隆禮に答ふる書に、(ネ)禪病を説き盡す、諸佛諸祖並に(ナ)一法の人に與ふるなし。只だ當人のみ自ら信じ、自ら肯ひ、自ら見、自ら悟らんことを要するのみ。若し只だ(ラ)他人の口頭の説を取る底ならば、恐くは人を誤らん。此の事は決定して(ム)言説の相を離れ、心緣の相を離れ、文字の相を離る。能く諸相を離ると知る者も亦是れ呂居仁なり、(ウ)他の死後に斷滅するか斷滅せざるかと疑ふも亦只だ是れ呂居仁なり、直截の指示を求むる者も亦只だ是れ呂居仁なり。日用二六時中或は瞋り、或は喜び、或は思量し、或は分別し、或は昏沈し、或は掉擧するも皆只だ是れ呂居仁なり。只だ這の呂居仁、能く種種の奇特變化を作し、能く諸佛諸祖と同じく(ヰ)寂滅大解脱光明海中に遊んで、世間出世間の事を成就す、只だ是れ(ノ)呂居仁信不及

(ヘ)言語文字に拘泥することなく、言中の眞意を取らしむ。記取せよとは、志道は六祖の下に於て之を捨てしも公は未だ已執を捨てず、公自ら記取せよとなり。

(ト)第三節、古今を破して結示す。

(チ)千佛萬祖も救ふ能はず。

(リ)像法決疑經に出づ。

(ヌ)此語は志道の始終の一絡索にかかる。上來の六祖の公案は即ち是れ大惠の公案なることをいふ。居仁は經論等を指すを要せずといふ、本來古今なし、何ぞ古人を離れて示すといふかと、これ居仁の古今の二見を破せんとするなり。

(ル)此章は、專ら工夫をなすの徑要を示す。

(ヲ)第一段、工夫の用心を示す。

(ワ)土木偶とは、木像を木偶といひ、土像を土偶といふ。史記七十五云云。索隱云く、「木を以て之をつくり、偶、人に類するなり」と。

(カ)昏怛は、心頭悲慘悶絶し黙漫漫地の謂なり。即ち分明ならざるをいふ。

(ヨ)法華方便品。

(タ)解とは思量分別解會なり、著は助語の辭。

(レ)此れ直に主人公を示すに似たり、然し影子に依つて示す、曰く、影子直に是れ儞呂居仁なり。

(ソ)前後左右を顧視せず、直に生命を捨つべきなり、意は影子に依つて主人公を看取せよとなり。

(ツ)第二段、主人公の作用を示す。

(ネ)禪病、此は言を枉げて言ふ、意は隆禮に答ふる書は甚だ居仁を訶責せり、今其れを指して禪病といふなり、即ち眞禪に入らざるを禪病といふ。圓覺經四に出づ。

(ナ)此の如く言ふは、居仁が種種の疑問を作して問ひ來るが故に、自信自悟すべしといふ。會元七德山章に出づ。

(ラ)汝但だ大惠の口頭の説を取りて、其心を見ざるときは大惠の示す所却つて公を誤るならんの意なり。又一義に云く、「只だ他人の口頭の説のみを取らば唯だ自ら誤るのみならず亦他人を誤らん」と。前義を可とす。

(ム)言説等とは、起信論の語を假り用ふ、會元二、亦之を引けり。

(ウ)他とは、呂居仁を指す。

(ヰ)圓覺經一に出づ。虚妄の動相を離るるが故に寂滅といひ、五蓋十纏を出づるが故に大解脱といひ、通達自在の作用あるを光明海といふ。此は大惠禪師が傍より覷破したる處、故に此の如し、居仁は曾て之

なるのみ。若し信得及せば、請ふ此の注脚に依つて是の㋔三昧に入れ、忽然として三昧より起つて孃生の鼻孔を㋗失脚せば便ち是れ㋳徹頭ならん。

又

㋮令弟の子育、㋘經由するとき賜ふ所の敎を出し、之れを讀んで㋫喜慰することを知りぬべし。㋙無常迅速にして百歲の光陰も電閃の如し。便ち是れ㋓收因結果底の時節到來す、乾屎橛如何ん。沒巴鼻、無滋味にして肚裏悶することを覺得せん時、便ち是れ好底の消息なり。第一に擧起の處に向つて承當することを得ざれ、又無事甲裏に颺在することを得ず。擧する時は便ち有、擧㋢せざる時は便ち無なるべからず。但だ世間の塵勞を思量する底の心を將て、乾屎橛上に回在し、思量し來り思量し去りて奈何ともする處なくして、伎倆忽然として盡きなば、便ち自ら悟らん。心を將て悟を㋐等つことを得ざれ。若し心を將て悟を等たば、永劫に悟を得る能はじ。此より前、隆禮に答ふる書に㋚措大家の病痛を說き盡せり。只だ座右に置在すと承はる。若し此れに依つて工夫を做さば、未だ悟徹せずと雖も、亦能く㋖邪正を分別して邪魔の爲に障へられず、亦般若の種子を種ゑ得ること深からん。㋴縱ひ今生に了せずとも來生に㋱出頭して現成受用せんに、亦㋯力を費さじ、㋛亦惡業の奪ひ將ち去らるることを被らず、臨命終の時も亦能く業を轉せん。況んや一念相應せんをや。㋽逐日千萬、別事を思量することを要せざれ、但只だ乾屎橛を思量せよ。幾く時か悟らんと問ふこと莫れ。至禱至禱。㋪悟る時亦時節なし、㋲亦群を驚かし衆を動せじ、即時に怙怙地にして㋝自然に佛を疑はず、祖を疑はず、生を疑はず、死を疑はず。不疑の地に到ることを得ば、便ち是れ㋜佛地なり。佛地上本疑あることなし。㋑悟なく迷なく、生なく、死なく、有なく無なく、涅槃なく般若なく、佛なく衆生なく、亦恁麼に說く者もなし。此の語も亦受けず、亦受けざる者も無く、亦受けずと知る者も無く、

を知らず。五蓋とは、貪欲、瞋恚、睡眠、悼悔、疑なり、此五は蓋覆纏綿して吾人の心神を昏暗にして定慧を發せざらしむるが故に蓋と名く。十纏とは、無慚、無愧、嫉、慳、惡作、睡眠、悼擧、昏沈、忿、覆なり、此十は有情を纏縛して生死の獄に置くが故に纏と名く。

㋨堂堂たる居仁、信不及の故に眞箇の居仁を見ることを得ざるなり。

㋔三昧とは定、或は寂靜等と譯す、妄念分別を離れて理と智と契合したる寂靜の境をいふ。起つとは、三昧の垢を拂却するをいふ。

㋗失却とは、法の無生を得ること、即ち悟行底を奪却す、これ三昧より起つの端的なり。

㋳徹頭といふも猶ほ是れ靈龜、尾を曳く、何の徹頭か之れあらん。

㋮第一段、用心を示す。

㋘經由は他家に立寄るをいふ。又云く、往來の義と。

㋫喜慰は、大惠に系る、知るべしは、居仁に系る。

㋙無常等は、來書の語なり。

㋓世間を了畢する時節。

㋢平生打成一片ならんことを要す。

㋐第二段、深信を承知す。

㋚措大家とは居仁を指す、事苑に云く「置くなり」と、意は天下の大を措置く者。病痛とは前の禪病に同じ。

㋖邪正とは、斷滅不斷滅とは是れ正見か是れ邪見かを辨別すとなり。

㋴縱ひの上に「恁麼ならば」を加へ看よ。

㋱三途に墮せずに、人界に出頭して一度般若の種子を種ゑて……。現成受用とは、上の所謂る、擧手動足の上に受用すとなり、而し是れ甚だ難事なり。

㋯前世の般若の重習力あるが故に、工夫を費さずとなり。

㋛亦惡業等とは、影子を轉ずれば即ち主人公なるが故なり。

㋽逐日とは、毎日なり、千萬とは千回萬回なり。

㋪第三段、悟後の境界を示す。時節なしとは、時節を定め難しの意、自然に樂著するが故に。

㋲雲岩錄上に云く、「自心を以て自心を悟る故に、衆前に向て驚動底の事なし、紛飛の妄念を絶し、唯だ怙怙地なるのみ」と。怙怙とは安靜なり。

㋝悟後に種種差別の未曾有の境界を見聞するも、自己見得の境界なるが故に、分外となさず。今多くの疑の字を用ふるは、居仁が千疑萬疑を起すが

亦恁麼に受けずと說く者もなし。居仁是くの如くに信得及せよ。佛も亦只だ是くの如し。祖も亦只だ是くの如し。(ロ)悟も亦只だ是くの如し。迷も亦只だ是くの如し。疑も亦只だ是くの如し。生も亦只だ是くの如し。死も亦只だ是くの如し。日用塵勞の中も亦只だ是くの如し。死後の斷滅不斷滅も亦只だ是くの如し。朝廷に在りて從官と作るも亦只だ是くの如し。(ハ)宮觀にして靜處に在るも亦只だ是くの如し。(ニ)徑山に住して一千七百衆に圍遶せらるるも亦只だ是くの如し。(ホ)編管せられて衡州に在るも亦只だ是くの如し。居仁還つて信得及するや、信得及するも亦只だ是くの如し。信不及なるも亦只だ是くの如し。畢竟して如何ん、是くの如し、是くの如くなるも亦只だ(ヘ)是くの如し。

故なり。
(ス)智德、斷德、恩德を圓備するを佛とす、今は智德に就いていふ。華嚴、如來現相品。
(イ)悟の字の上に(故に)を加へ看よ。圓覺經三、淸淨慧章。
(ロ)日用の迷悟も生死も嚬喜も皆是れ現成受用。
(ハ)宮觀は道士の居處をいふ、卽ち呂が太平觀に居るを謂ふ、今は朝廷を去つて宮觀に居るの意なり。
(ニ)徑山等は、大慧が……、自己の事をいふ。
(ホ)編管とは、還俗せられし事、大慧、徑山に居るや、緇流の之に赴く者二千餘衆と、或日（宋孝宗の紹興十一年四月）侍郎張公九成は父の卒哭を以て徑山に登る、師陞座說法す、偈に曰く「神臂弓一發、射破千重甲云云」と、次で談論す、偶秦檜の爲に朝政を謗訕すと譏言せらる、大慧も坐せられて衡州に謫せらる。言行錄、通鑑續編十七、師の年譜等。
(ヘ)是の如しとは評に云く「馬を華山の陽に歸へし、牛を桃林の野に放つの境界」と。
(ト)汪は五歲にして書を讀み聰明靈利なり、十八年に及第す。宋史列傳百四十六。狀元とは、凡そ及第に第一甲第二甲第三甲第四甲第五甲あり、五人すべて進士及第といふ、中に第一を狀元といひ、第二を進士及第といひ、第三を進士出身及第といひ、第四第五を同進士出身及第といふ、上三甲に詔書を賜ひ、第四第五には敕書を賜ふ、狀元とは第一狀の元首なるが故にいふと。四河入海に見ゆ、及第して未だ官を授らざる時、自稱して狀元といふ。
(チ)此書は當人の囟地一下を欠く

(ト)汪狀元に答ふ　聖錫

(チ)左右妙年より自立して便ち(リ)一切の人の頂顙上に在れども、富貴の爲に籠羅せられず。(ヌ)百劫千生、願力の持する所に非ずんば、焉んぞ能く(ル)是れを致さん。又能く切切として此の一大事に於て念念退轉せず、決定の志を具す、此れ(ヲ)豈に淺丈夫の能くする所ならんや。(ワ)老瞿曇云く、「唯だ此の一事のみ實なり、餘の二は則ち眞に非ず」と。請ふ鞭を著けよ忽にすべからず。世間の事只だ這れ是れのみなり。(カ)先聖豈に云はずや、「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」と、(ヨ)知らず聞く底是れ何の道ぞ、這裏に到つて(タ)豈に眨眼することを容さんや。更に(レ)吾が道は一以て之れを貫くといふを引き去るべからず、須らく自ら信じ自

を惜んで切に鞭を著くるなり。今第一段、深心を嘆ず。妙年等とは、五歲にして書を讀み、十八にして及第するをいふ。
(リ)狀元及第の故にいふ。下文は富貴に惑はされざるを嘆ず。
(ヌ)煩惱無盡誓願斷の故に、色界に入りて色惑を被らず。
(ル)是れとは、富貴の爲に羅籠せられざるを指す。
(ヲ)凡そ士たるもの縱ひ世間の事を能くするも、或は富貴の爲に惑はさる、公は此等に惑はされざるのみに非ず、更に心を此の出世の一大事に留む、既に二事の奇特あり、故に之を稱贊す。
(ワ)第二段、佛儒一致を示す。これ法華一方便品の文なり、一事實とは一佛乘の法なり。餘二とは、空敎不空の敎なり、或は小乘と權大乘の二と見るも可なり、何れにしても方便敎を指す、釋尊は權機の爲に暫く方便を以て二乘の名を假るも、實は一乘の妙法を說きたまふのみ、終に小乘を以て衆生を濟度せずといふ是れなり。
(カ)唐書志五に、孔子を稱して先聖といふ。論語里仁篇の語なり。護法論に云云す。
(ヨ)知らず等は、一撥を與ふなり。
(タ)直下に看よとなり、情識を絕すれば則ち直下即ち是れ道なればなり、眨は目動くなり。
(レ)論語里仁篇の語、引き去るべからずとは、文字を以て文字の證を引く莫れ、引證は是れ空語なれば益なしとなり。
(ソ)第三段、空談して悟を求めざるを責む。
(ツ)法華方便品に出づ。增上慢とは、未だ得ずして得たりと思ひ、未だ證らずして證れりと

ら悟るべし、說き得る底終に是れ憑據なし。㋷自ら見得し自ら悟得し、自ら信得及し了らば、說き得ず、形容し出さざるも却つて妨げず。只だ說き得て似、形容し得て似て、却つて見ず却つて悟らざる者を怕る。㋡老瞿曇は、指して增上慢の人となしたまふ、㋧亦之れを般若を謗る人と謂ひ、亦之れを大妄語の人と謂ひ、亦之れを㋤佛の慧命を斷ずる人なりと謂ふ。㋶千佛出世したまふとも、㋰懺悔を通ぜじ、若し狗子無佛性の話を透得せば、㋒這般の說話、却つて妄語とならん、而れども今は便ち妄語の會を作すべからず。㋼呂居仁、比ごろ連りに兩書を收む、書中に皆云ふ、㋨夏中隆禮に答ふる書を常に座右に置いて、㋔得るを以て期と爲すと。又聞く、嘗て錄して左右に呈すと。㋗近世の貴公子、渠に似たる者、㋳優曇鉢花の時に一たび現ずるが如きのみ。㋮頃に山頭に在りて每に㋘公のために這般の話を說く、公の眼㋫目定動するを見るに、㋙領覽得すること九分㋓九釐にして、只だ囫地の一下を欠くのみ。若し囫地一下し了ることを得ば、㋢儒即釋、釋即儒、僧即俗、俗即僧、凡即聖、聖即凡、我れ即爾、爾即我れ、天即地、地即天、波即水、水即波、㋐酥酪、醍醐、攪して一味となし、缾盤

㋧亦等は、永明の註心賦二。
㋤佛の慧命は眞の證悟の處に在りて相續す。
㋶千佛等とは、千手千眼大悲心陀羅尼經に出づ。
㋰通とは、許容の謂なり。即ち千佛も其の懺悔を許したまはじとなり。
㋒這般の說話とは、前の語を指す、即ち證悟の境界には、增上慢の人もなく、乃至佛の慧命を斷つ人もなく懺悔を通ずてふこともなきが故に。妄語とは、無用の語といふ意なり。
㋼第四段、居仁を賛めて勸發す。
㋨夏とは春夏の夏なり、安居の夏にあらず。答とは大惠の答なり。
㋔證悟を得るなり。左右とは汪狀元を指す。
㋗公子とは公侯の子なり。渠と

釵釧、鎔して一金と成すこと、我れに在りて人に在らず、這箇の田地に到ることを得るも、我が㋚指揮に由る。所謂㋖我れは法王たり、法に於て自在なりといふものなり、得失是非、焉んぞ罣礙あらん。是れ强ひて爲すにはあらず、㋴法是くの如くなるが故なり。㋱此箇の境界は無垢老子を除いて他人如何が信得及せん、縱ひ信得及すれども如何が㋯手に入ることを得ん。左右已に信得及し、已に覷得見し、已に能く是れ邪是れ正を分別す。但だ未だ手に入ることを得ざるのみ、手に入ることを得る時、老少を分たず、㋛智愚に在らず、㋽梵位を將て直に凡庸に授くるが如し、更に階級次第あることなし。㋪永嘉の所謂、一超直入如來地てふ是れなり、但だ㋲相聽せ、決して相誤らず。

謂ふをいふ。自ら增上して法を慢じ人を慢ずるが故に。

は居仁を指す。
㋳優曇鉢羅花の略、靈瑞、又は瑞應花と譯す、三千年にして一度、世に現じて希有の花を開くといふ。般泥洹經に云く、「閻浮提の內に尊樹王あり、優曇鉢と名く、實あり花なし、若し金華生ぜば、世乃ち佛あり」と。
㋮第五段、悟後の圓融自在を述ぶ。山頭とは、蓋し紹興十二年師五十四歲より五十五歲までは丈室に據りて他處に移らず、故に山頭とは廣州の伊山或は花藥山ならん、徑山にあらずといへるも、案ずるに此の書は師五十六歲の作といふ、然らば或は徑山ならん、年譜を見よ。
㋘蓋し汪狀元、大惠を訪ふなり、本傳を案ずるに、諸方通路を絕す、然るに汪は之を憚らず、書を以て張九成を訪ひ、又廣と衡と相隣れば大惠を訪ふなり。
㋫定動は、目のぎよろつくをいふ。
㋙領覽は、領攬(うけとる)の義、覽は攬に通ずるなり。
㋓釐は韻會に、十絲を毫といひ、十毫を釐といふと。音は離、牛尾なり、長毛なり。又十毫を釐といひ、十釐を分といふと。
㋢上に釋迦、孔子を引く故に今之を融會す。
㋐酥等は、禪源諸詮の裴休の序の語なり、五味の喩は涅槃經聖行品に出づ。
㋚指揮は、さしはからひの義。
㋖我等は、法華二譬喩品に出づ。
㋴法は萬物の道理、即ち法性の德用として爾りの意。
㋱第六段、張無垢を引いて激勸す。
㋯手に入るは、悟得をいふ。

(セ)又

(ス)某萬緣休罷して、日用只だ此くの如し、煩しく(イ)念を軫すこと無れ。左右の分上、箇の甚麼をか缺少するや、世界の上に在つて謂つべし千足萬足すと。苟し能く此箇の門中に於て、(ロ)翻身一擲せば、(ハ)何ぞ止だ腰に千萬貫を纒ふて鶴に騎りて揚州に上るのみならんや。(ニ)昔、楊文公大年は(ホ)三十歲にして、廣慧の璉公に見えて膺に礙へる物を除去す、是れより已後朝廷に在るも田里に居るも始終一節なりき。功名の爲に移されず、富貴の爲に奪はれず、亦功名富貴を輕んずるに意あるにも非ざりき。道の在る所、法是くの如くなるが故なり。(ヘ)趙州云く、「諸人は十二時に使はる、老僧は十二時を使ひ得たり」と。此の老の此の說は是れ强ひて爲すに非ず、亦法

(シ)汪は妙年自立の聰明有智の人なれば爾かいふ。

(エ)梵位は、梵王の位、これ華嚴合論の語、合論には、梵を法の字に作る。凡庸は、至賤の稱。

(ヒ)證道歌の語。

(モ)相聽は聽信なり、心をゆるせの意、そなたをわるくはしなすまいとなり。

(セ)此章の大意は、仁義五常、格物致知みな自性に在り、文字言句にあるに非ざることを示す、即ち大道唯一の旨を說くなり。

(ス)第一段、汪狀元の問候に答へ、惣じて勸む。蓋し來書に衡州の謫處にありと旨ふ故に、其不自由を想ふてなり。某とは、大惠自ら言ふ。

(イ)軫念はきづかひの意、軫は動なり。

(ロ)翻身一擲とは、獅子の兒を試みるなり、抛擲に似たり、故に擲といふ。此れ轉身の一路に喩ふ。

(ハ)何ぞ止だ云云、之を言はんが爲に千足萬足といひしなり。詩學大成に云く、「小說に云く、客あり相從して各所志を言ふ、或は揚州の刺史たらんことを願ふと、或は貨財の多からんことを願ふ、或は鶴に騎つて上昇せんことを願ふと、其一人曰く、腰に十萬貫を纒ひ鶴に騎つて揚州に下らんと、三者を兼ねんと欲す云云。」野客叢書六に、前の三者を兼ぬるの文を擧げて次に云く「天下の美事、安んぞ兼得るの理あらんや、夏候嘉は、丹竈をよみし、又知制誥たらんことを欲す、乃至二願竟に遂げずして卒す」と。蓋し兼取を容さず、既に官ならんと欲し、又仙たらんと欲するも安

是くの如くなるが故なり。(ト)大率學爲り道爲る一なり、而るに(チ)今の學者は往往に仁義禮智信を以て學と爲し、(リ)格物、(ヌ)忠恕、一以貫之の類を以て道と爲す、只管(ル)博謎子の如くに相似たり。又(ヲ)衆盲の象を摸つて(ワ)各異端を說くが如し、(カ)釋の云はずや、「思惟の心を以て如來圓覺の境界を測度するは、螢火を取りて須彌山を燒かんとするが如し」と。生死禍福の際に臨んで、(ヨ)都て力を得ざることは、蓋し此れに由れり。(タ)楊子が云く、「學は性を修むる所以なり」と、性は即ち道なり。(レ)黃面老子云く、「性、無上道を成ず」と。(ソ)圭峯云く、「有義の事を作すは是れ惺悟の心なり、無義の事を作すは是れ狂亂の心なり、狂亂は情念に[illegible]ば、臨終に業に牽かる。惺悟は情に由らざれば臨終能く業を轉

んぞ是の理あらんや。今は轉身の一路を得ば三事成就するのみに非ずといふなり。

(ニ)第二段、得道の人の境を轉ずること自在なるを謂ふ。楊文公は會元十二に云く「文公楊億居士、字は大年、壯に及んで才名を負ふて而も未だ佛を知らず、一日、同僚に過ぎつて金剛經を讀むを見て、嘆じて且つ之を笑す、彼れ自若たり、公之を疑ふて曰く、是れ豈に孔孟の右に出でんやと、後に廣惠璉禪師に謁し、深く徹悟して其法を嗣ぐ、璉は首山念に嗣ぐ、云云」。普燈錄二十二、大惠普說、宋史列傳六十四、事文類聚前集四十六等を見よ。

(ホ)三十とは、大數を擧ぐるのみ、宋史大年傳を案ずるに、長和元年に生る、然らば此年は二十七歲ならん。廣惠は、普燈二十三に出づ。宋史大年傳に云く、「心を釋典禪觀に留む」といふ是れなり。

(ヘ)其本錄に出づ。

(ト)第三段、正しく道の一なることを述ぶ、之に四節あり、初に總じて述ぶ。大率は大略なり。學爲の爲の字を「なす」と點ずるは不可、學といひ、道といふの意にて、儒家の學道なり。

(チ)今の學者は妄に分別して別異の思をなす、殊に知らず縱ひ說得分明なるも皆是れ空言なることを、但だ此一性を識得すれば仁義禮智信、皆此中にあり、五常は孟子公孫丑下篇、白虎通三等に出づ。

(リ)格物は、大學の八條の一なり、朱子の註に曰く、「格は至なり、物は猶ほ事の如し、事物の理に窮め至り、其の極處に到らざる無からんを欲す」と。

(ヌ)忠恕、一以貫之は、論語里仁

ず、(ツ)所謂義とは是れ義理の義にして仁義の義に非ず」と。而るに今看來れば、(ネ)這の老子も亦未だ虛空を析つて兩處と爲すことを免れず。(ナ)仁とは乃れ性の仁、義とは乃れ性の義、禮とは乃れ性の禮、智とは乃れ性の智、信とは乃れ性の信なり。義理の義といふも亦性なり。(ラ)無義の事を作さば即ち此の性に背く、有義の事を作さば即ち此の性に順ず。(ム)然も順と背とは人に在りて性には在らざるなり。仁義禮智信は性に在りて人に在らざるなり。人に賢愚あれども性には即ち無し、若し仁義禮智信は賢のみに在りて愚に在らずんば、則ち聖人の道に(ウ)揀擇取捨するとあらん。天の雨を降すとき地を擇んで而して下さんが如し。(ヰ)所以に云ふ、「(ノ)仁義禮智信は性に在りて人に在らず、賢と愚と順と背と

篇。

(ル)悸は解なり、謎は隱語なり、なぞなり。これ實體を見ざるを喩ふ。

(ヲ)衆盲等は、六度集經に云く、「鏡面王、群盲を引いて象を摸せしむ、王、之に問うて曰く、汝等象を見しや、對へて曰く、我等倶に見たり、王曰く、象は何れの類か、足を持ちし者、對へて曰く、王よ象は漆桶の如しと、尾を持ちし者言く、象は掃帚の如しと、尾本を持ちし者言く、杖の如しと、腹を持ちし者言く、鼓の如しと、脇を持ちし者言く、壁の如しと、背を持ちし者言く、高坑の如しと、耳を持ちし者言く、箕の如しと、頭を持ちし者言く、魁の如しと、牙を持ちし者言く、角の如しと、鼻を持ちし者言く、大索の如しと、王前に於て共に訟へて言く、大王よ、象は我れ言ふところの如しと、時に王大に之を嘆じて曰く、瞽なる哉瞽なる哉、汝猶ほ見ず、今眼目なきが爲に諦觀すと謂ふ云云」と。又涅槃經獅子吼品、鏡面王經等に出づ。

(ワ)所說の同じからざるをいふ、儒書に謂ふ所の異端にあらず。

(カ)釋等、上は儒家の事を述ぶ、故に今は儒に對して釋を述ぶ。

思惟の心とは、上の悸謎子に應す。圓覺經二に出づ。

(ヨ)境に轉ぜらるるに依つて、力を得ざるなり。此れに由るとは、思惟測度をいふ。

(タ)第二節、謬解を破す。前漢書五十七、揚子法言一に出づ。

(レ)黃面等は、楞嚴經六文殊の偈なりと雖も、本の威神力を以ての故に佛と稱するも妨なし。性の全體元來無上道の故

は人に在りて性にあらず」と。楊子が所謂性を(オ)修むとは性も亦修むべからず、亦順背賢愚のみ。圭峯の所謂(ク)惺悟と狂亂とは是れなり、(ヤ)趙州の所謂十二時を使ひ得ると十二時に使はるといふも是れなり。若し仁義禮智信の(マ)性の起處を識得せば、則ち格物、忠恕、一以貫之は、其の中に在り。(ケ)肇法師云く、「能く天に、能く人なる者は豈に天人の能くする所ならんや」と。所以に云ふ、「學を爲め道を爲むるは一なり」と。(フ)大率聖人の(コ)敎を設くることは名を求めず、(エ)功に伐らず、春の花木に行くが如し、(テ)此の性を具する者、時節因緣の到來すれば、各各相知らざれども、其の根性に隨つて大小方圓長短、或は靑、或は黃、或は紅、或は綠、或は臭或は香、同時に發作す。(ア)春の能く大に能く小に、能く

に、縱ひ學といふも學の全體即ち性なる故に。

(ソ)圭峰宗密の傳は傳燈十三。有義の義は義理をいふ。林間錄上、洪覺範智證傳上等に出づ。八句偈あり、近くは冠註に之を引けり。

(ツ)頌を引くは、之を言はんが爲なり、上の頌には過なきも此の自註に過あり。義理の義とは之を道となし、仁義の義とは學となすなり。

(ネ)這の老子とは圭峰を指す。亦とは楊子に亦するなり。

(ナ)仁等とは、大惠の了解を述ぶ。義とは乃れ性の義の句肝要なり、正しく之を以て圭峯を破す、性の全體起つて義となる故に下に亦義理の義も亦性なりと云ふ、これ性と理と一物なり。

(ラ)第三節、性に本と五常を具す、修して始めて得るにあらざることを述ぶ。

(ム)取捨賢愚順背は人に在りて性の上にはなし、人人本來性に五常を具す。此性は賢に在つても増せず、愚に在つても減ぜず。

(ウ)此道は遍きが故に。天云云は、此理なきをいふ。

(ヰ)所以云云は、判じ畢つて自ら上を結ぶ。

(ノ)此は楊子の語を破して別に學なきことを明す。

(オ)修と不修とは人にあり性にあらず、上の所謂と同じ故に亦といふ。性に契當すれば、皆我家の作用なり。

(ク)惺悟は順賢、狂亂は愚背なり、此性は不増不減にして悟と狂とに干らずと。

(ヤ)十二時を使ひ得るは賢順惺悟なり、使はるるは愚背狂亂なり。是れとは、上に引き合はすなり。

方に能く圓に、能く長に能く短に、能く青に能く黄に、能く紅に能く緑に、能く臭に能く香ならしむるに非ず、此れ皆㋚本有の性、縁に遇ふて發するのみ。㋖百丈云く、「佛性の義を識らんと欲せば、當に㋴時節因縁を觀ずべし、時節若し至りぬれば其の理自ら彰はる」と。㋱又讓師、馬師に謂つて曰く、「汝が心地の法門を學ぶは種子を下すが如し、我が法要を説くことは彼の㋯天澤に譬ふ、汝縁合ふが故に當に其の道を見るべし」と。所以に云ふ、聖人の教を設くること名を求めず功に伐らず、只だ學者をして見性成道せしむるのみ。無垢老子の云く、㋛「道、一芥に在れば則ち一芥重く、道、天下に在れば則ち天下重し」と、是れなり。㋽左右嘗て無垢の㋪堂に升つて而して未だ其の室に入らず、其の表を見て而して未だ其の裏を見ず。百歳の光陰只だ㋲一刹那の間にあり、刹那の間に悟り去らば、如上の所説は皆實義に非ざるなり、然も既に悟り了らば以て實とするも亦我れに在り、以て實に非ずと爲すも亦我れに在り。㋝水上の葫蘆の人の動著する無ければ、常に㋜蕩蕩地に、㋑觸著すれば便ち動じ、㋺捺著すれば便ち轉轆轆地なるが如くならん。是れ强ひて爲すに非ず、亦法是くの如くなるが故なり。㋩趙州の狗子無佛性の話において左右は人の賊を捕ふるに、已に㋥窩盤する處を知れども但だ未だ捉著せざるが如きのみ。請ふ快かに精彩を著けよ、少しも間斷あることを得ざれ。時時に行住坐臥の處に向つて㋭看よ、書史を讀む處、仁義禮智信を修むる處、尊長に侍奉する處、學者を提

㋮性の起處とは、五常の起處と云ふに同じ、一往分てば仁義等の五常は用、性は體なり、而し別異のものにあらず、本と體用相卽すれば今且く體の起處といふなり。

㋘肇　涅槃無名論に云く、「是を以て至人は方に居しては方に、圓に止つては圓に、天に在つては天に、人に在つては人に、原夫れ能天能人は豈に天人の能くする所ならんや、果、天に非ず人に非ず、故に能く天に能く人なるのみ」と。維摩一、宗鏡錄二十三に既けり。此れ第四節、總結す。

㋗第四段、因緣感通の理を示し、傍に大道唯一を示す。

㋙教を設くるは、學者之れに依つて本有の性を開發せしめんが爲なり、名利の爲にあらずとなり。

㋓一法の人に與ふるなし、人人性自ら開發するなり、故に伐らず。春等とは、聖人教を垂る、學者之に依つて因緣熟して開發するに譬へ、名を求めざるを顯はす。

㋢此性とは、大小方圓乃至臭香を指す、法に合すれば大乘小乘の根性に喩ふなり、華嚴如來出現品に出づ。

㋐上の本性、用を發するをいふ、此れ學者の器に隨つて見性するを喩ふるなり。

㋚修行して始めて得るにあらず、學んで始めて得たるにあらず、故に本有といふ。宗匠、聖行等の緣に遇ふて本有の性を開發するのみとなり。

㋖百丈は傳燈九潙山章には涅槃經獅子吼品を引けり、今の文は聯燈七の大潙章の文なり。

㋴時節等とは、光陰空過する勿れの謂にして、時時刻刻をいふ。

㋱讓師は南嶽懷讓、馬祖道一なり、傳燈五に出づ。

㋯天澤とは、雨露の惠みなり。

㋛一芥重の重とは、厚重の義、一義に曰く、卑賤の人、道を得れば則ち一家一村、分に隨つて重く、天子宰相、道を得れば則ち天下國家重しとなり。これ上の大小方圓の證に引くも而も亦道の所在法是くの如きが故にの語に照應す。

㋽第五段、激發す。

㋪韻會に云く、「爾雅に古は半ばより已前之を虛にす之を堂といひ、半ば已後之を實にし室となす」と。

㋲一刹那とは今は悟時をいふ。

㋝水上等は碧巖四十三則にあり、巖頭の語。

㋜蕩蕩地は、廣平の貌、物に應じて自由なるの謂なり。

㋑觸の上に「纔に」を加へ見よ。

㋺捺著は、手もて按す(おす)なり、おさへるなり。轉轆轆地は、圓轉滑達して凝滯せざるをいふ、轆は水を汲む井上の車なり、轉はころがるなり、地は別に意味なし。

㋩第六段、提撕の法を示す。

㋥窩盤とは窩は窟なり、藏なり、穴居なり、盤は、かがまる、やすんずなり、即ち賊の藏れ居る窟は知りたるものの意なり。

㋭看とは無字の話を看よとなり。

㋬擔を放下するを喩ふ。

㋣何をか言はんとは、褒美の辭。

㋠名を失ふ、蓋し宗は姓、直閣は直祕閣の官ならん、事物紀原四に「端拱元年五月詔して崇文院中堂に就いて祕閣を建つ、是月に宋泌を以て祕閣に直す、此れ蓋し官を置くの始なり」と。

㋷第一段、宗直閣の謬解を破す、初に來書を擧げ略破して工夫

誨する處、喫粥喫飯の處、之れを斷崖めよ、忽然として(ヘ)布袋を打失せば、夫れ復た(ト)何をか言はん。

(チ)宗直閣に答ふ

(リ)示諭せらる、緣に隨つて日に差別の境界に涉れども、未だ嘗て佛法の中に在らずんばあらず。又日用動容の間に於て、狗子無佛性の話を以て情塵を(ヌ)破除すと。(ル)若し是くの如きの工夫を作さば、恐らくは卒に未だ悟入することを得ざらん。請ふ、(ヲ)脚跟下に於て照顧せよ。(ワ)差別の境界は甚麼の處よりか起る、(カ)動容周旋の間、如何してか狗子無佛性の話を以て情塵を破除するや、能く情塵を破除すと知る者は、又是れ阿誰ぞ。(ヨ)佛云はずや、「衆生顚倒して(タ)己に迷ふて物を逐ふ」と。物は本より自性なし、

を示す。

(ヌ)破除すまで來書なり。

(ル)略破して工夫を示す、此れ謬つて理會す。

(ヲ)脚の上に「自己の」の三字を加へ看よ、これ自己の當念に氣をつけて看よとなり。

(ワ)外境は皆妄念分別より生ずる故に、前に六祖、志道に示して云く、一切の迷人は五蘊和合を認めて云云に合せよ。

(カ)周旋は前に出でたり。此れは情塵を破除すと云ふを責めんが爲に、之を引いて詰責す、元來破除すべき情塵なきが故に。情塵とは六塵の境に對する迷情なり。圓覺經六に曰く、「六塵の緣影は自心の相となす」と、此の情塵元來兎角の無體なるが如し、無體の者を破するの理なし、然るに妄に之を破除せんと欲するは謬なり。

(ヨ)第二節、差別の境界なきことを示す。此は碧巖集の鏡清の語なり、而しもと楞嚴の文なるが故に佛云くといふ。

(タ)己とは自性なり、物とは外界の境界なり。物を逐ふの萬境は因緣假有の法なれば、固定的の自らの體性なし、或は自心所現の境なれば、心外に境の實體なきをいふ。

(レ)境等は、來書の差別の境に涉るの語を破す。本是れ一心法界、一一の境界皆是れ自心なり、法性なり、何れの處にか涉るべき差別の境あらんや。楞嚴に云く、「自心、自心を取れば非幻も幻法を成す」と、以て心得べし。

(ソ)第三節、正しく謬解を破す、宗直閣が最初に錯る故に二語矛盾す。

(ツ)此物を取り彼物を捨つるの謂なり。

己に迷ふ者自ら之れを逐ふのみ。(レ)境界本より差別あることなし、己に迷ふ者自ら差別するのみ。(ソ)既に日に差別の境界に涉るといひ、又佛法の中に在りといふ、既に佛法の中に在らば、則ち差別の境界に非じ、既に差別の境界の中に在らば、則ち佛法に非ざるべきなり。(ツ)一を拈り一を放てなば、甚の了期かあらん。(ネ)廣額屠兒は、涅槃會上に在りて屠刀を放下して立地に便ち成佛す、豈に(ナ)許多の忉忉怛怛し來ること有らんや。(ラ)日用應緣に應ずる處、纔かに差別の境界に涉ることを覺せん時には但だ只だ差別の處に就いて、狗子無佛性の話を擧せよ。(ム)破除の想を作すことを用ひざれ、情塵の想を作すことを用ひざれ、差別の想を作すことを用ひざれ、佛法の想を作すことを用ひざれ。但だ只だ狗子無佛性の話を看よ、但だ只だ箇の無の字を擧して亦心を存して悟を等つことを用ひざれ。(ウ)若し心を存して悟を等たば則ち境界も也た差別し、佛法も亦差別し、情塵も亦差別し、狗子無佛性の話も亦差別し、間斷の處も也た差別し、間斷なき處も也た差別し、情塵に惑亂せられて身心安樂ならざる處も也た差別し、能く許多の差別を知る底も亦差別ならん。若し(ヰ)此の病を除かんと要せば、(ノ)但

(ネ)今茲に之を引き合はす意は、廣額屠兒は大信根を有し、一言一句を說かず、立地に成佛して情塵を破する底の異解なかりし。今宗直閣も亦廣額の如くに異解を離れて直下に成佛せよとなり。

(ナ)許多等は、上の言句に當る。上に辯ずる如し。

(ラ)第二段、工夫の用心を示す。

(ム)想をなす處總べて妄想にして差別の境なればなり。

(ウ)第三段、若し用心錯るときは一切の境界現ずることを示す。妄心をもつて取る所は皆差別となればなり。

(ヰ)法に實を認め、物を差別するの病なり。

(ノ)差別の病を除くの方便なり。

(オ)直閣、直下に信得及するを得ざるが故に之を引く。

(ク)直閣が信得及せば、則ち直閣も亦是れ千佛の一數なり、若

だ只だ箇の無の字を看よ。㋔但だ只だ廣額屠兒が屠刀を放下して、我れは是れ千佛の一數なりと云ふを看よ。㋗是れ實か是れ虚か、若し虚實の商量を作さば、又差別の境界の上に打入し去らん。如じ㋳一刀に兩段して、後を念ひ前を思ふことを得ざらんには、後を念ひ前を思はば、則ち又差別ならん。㋮玄沙云く、「㋘此の事は限約すること得ず、㋫心思の路絶す、㋙莊嚴に因らず、本來㋓眞靜なり、動用語笑、處に隨つて明了にして更に㋢缺少することなし。今時の人は、箇の中の道理を㋻悟らず、妄に自ら㋚事に涉り塵に涉りて處處に染着し、頭頭に繫絆す。縱ひ㋖悟るも則ち塵境紛紜として名相實ならず、㋴便ち心を凝し念を斂め、㋱事攝して空に歸せんと擬して、㋯目を閉ぢ睛を藏め、㋛念の起るこ

し然らざれば屠兒の境界も亦疑ふべきなり。

㋳直下に信得及して虚實の商量を取りて一刀兩段せよと。

㋮第四段、古語を引いて直閣が情塵を破除するてふ謬解を判詰す。玄沙錄中、傳燈十八、會元七。

㋘此の事の字は大惠の加ふ所なり、本錄を案ずるに、此の前に此の事を詳敍せり、故に大惠その意を採りて但だ此事といへるなり。限約とは、限量約定にして、此事は心を以て約定する能はざるを言ふ。

㋫心思等とは、心識を以て思ひ現はす能はざるをいふ。心緣ぜんと欲せば、慮自ら亡ずといふ是れなり。華嚴五十二。

㋙六祖口義に云く、淸淨の佛土は無相無形なり、何物か能く莊嚴せんや、唯だ定惠の實を以て假に莊嚴と名く。事理の莊嚴に三あり、一に世間の佛土を莊嚴す、寺を造り經を寫し、布施し供養す、是れなり。二に身の佛土を莊嚴す、一切の人を見て普く恭敬を行ふ、是れなり。三に心の佛土を莊嚴す、心淸ければ卽ち佛土淨し、念念常に佛心を行ず、是れなりと。併し今は此の如き有相の莊嚴を斥す、縱令有相の六度萬行を以て莊嚴するも他之を受けず、永嘉の所謂六度萬行體中に圓なりといふ、是れなり。傳燈十八玄沙章に云云す。

㋓眞靜とは楞嚴、所謂寂滅現前の端的なり、靜鬧共に脫却の處を眞靜といふ。

㋢缺少等とは、妙用を缺かざるをいふ、臨濟の云く「今日多般の用處、箇の什麽をか缺少す。」

㋻悟らすとは、覺悟の悟にして

とあるに隨つて旋旋に破除し、細想纔かに生ずれば則便ち㋵遏捺す。此くの如きの見解は卽ち是れ㋪空亡に落つる底の外道なり、㋲魂不散底の死人なり。㋝溟溟漠漠として覺することなく、知ることもなし、㋜耳を塞いで鈴を偸むごとく徒らに自ら人を欺狂するなり」と。左右の來書に㋑云云するは、盡く是れ玄沙の㋺所訶底の病にして、默照邪師の㋩人を埋む底の坑子なり、知らずんばあるべからず。㋥擧話の時都て許多の伎倆を作すことを用ひざれ、但だ行住坐臥の處、間斷せしむること勿れ、喜怒哀樂の處において、分別を生ずること莫れ、擧し來り擧し去り、㋭看じ來り看じ去りて、理路沒、滋味沒うして、心頭熱悶することを覺得せん時、便ち是れ當人㋬放身命の處なり、記取せよ記取せよ。此くの

大悟の悟にあらず、輕く看よ。

㋚事、塵とは、世間の有相の事、六塵の境に認着するをいふ。

㋖悟とは、此れ亦覺悟の悟にて淺き意味に取る、此處の文意は、事に涉り塵境紛紜たるも但だ名相のみにして無自性不實なりと覺知するも、(巳上は可なり、次下に過あり)而も尙ほ靜閙に執着して便ち心を凝し云云となり。

㋴便巳下は邪解なり、凝の字別本に疑の字になりをるは寫誤なり。

㋱事相は本來無自性にして空なり、然るに心力を勞して强ひて空に歸せしめんとす、謬れるの甚だしきなり。

㋯目等は法雲の、黑山の鬼窟といへる、是れなり。

㋛意は心を以て心を破す了悟あることなしと、此れ直閣が情塵を破すといふを責む。

㋵遏捺とは心を防ぎ押へて起らざらしむるなり。

㋪空亡云云は、楞嚴經十。

㋲魂未だ散ぜざれども、死人に如同すの謂なり。

㋝溟は冥に通ず、昏蔽なり、漠は膜に通ず、また冥なり。

㋜耳を塞ぐの語、淮南子十三に出づ。今の意は、本性は元來無智無覺にあり、然るに邪人は强ひて本性を遏捺して無智無覺となすとなり。

㋑云云とは、文選四十二に銑曰く、「辭多く略して載する能はざるの謂なり」と、止觀輔行に曰く、「未だ盡さざるの貌」と、廣雅に云く、「巳下の文あること尙ほ雲の如しとの言なり」と。

㋺所訶等は、情塵を破除すの語を指す。

㋩臨濟曰く、「湛湛たる黑暗の深坑、實に怖畏すべし」と、是れ

如きの境界に見ふて便ち退心すること莫れ、此くの如きの境界、正に是れ成佛し作祖する底の消息なり。而るに(ト)今默照邪師の輩、只だ無言無說を以て極則と爲し、喚んで(チ)威音那畔の事と作し、亦喚んで空劫已前の事と作し、(リ)悟門あるを信ぜず、(ヌ)悟を以て誑となし、悟を以て第二頭と爲し、悟を以て方便の語と爲し、(ル)悟を以て接引の詞と爲す。此くの如きの徒は、人を謾じ自ら謾じ、人を誤り自ら誤る、亦知らずんばあるべからず。(ヲ)日用四威儀の中、(ワ)差別の境界に渉つて力を省くことを覺得せん時、便ち是れ得力の處なり、得力の處(カ)極めて力を省くべきなり。若し一毫毛の氣力を用ひて(ヨ)支撑せば、定めて是れ邪法にして佛法に非ず、(タ)但だ長遠の心を辨取して狗子無佛性の話を厮崖めよ。

なり。

(ニ)第五段、重ねて工夫の法を示す。

(ホ)下の曾宗丞に答ふる書等にも此の語出づ。話頭を擧し來るなり。

(ヘ)放身命とは無明の命根斷つをいふ。

(ト)第六段、邪師を避けしむ。會元に、道安の所謂纔かに言詮あらば、早く是れ今時に落つ等の語を見て、多く之を謬り認む。

(チ)威音等は、これ但だ久遠の義を取る、即ち差別の境、言論の發現せざる已前の本然の極理なりとなせりとなり。而し威音王佛の名なりと言ふにあらず、そは名義集八、法華七等に出づ。又事苑五に云く、威音王佛禪宗の不立文字之を敎外別傳といふ、今宗匠、經を引くは道を明す所以なり、且つ威音王佛以前は、蓋し實際理理を明し、已後は即ち佛事門中なり、此れ喩を借りて道を顯はす、庶はくは人に從つて得るにあらざることを知らしめん云云。

(リ)肇法師曰く「傳燈は妙悟にあり、妙悟は自心にあり」と。

(ヌ)悟を誑とすとは、仰山の語を謬解するなり。下の榮侍郎に答ふる書に解す。

(ル)傳心法要に出づ。

(ヲ)第七段、豫め得悟の境界を示す。

(ワ)來書の語を擧げて言ふ。

(カ)擧覺提撕を勞せざれども、水牯牛露迴迴地の處なり。

(ヨ)支撑は、きをはるをいふ、撑は撐と同じ、今は强ひて事を絕たんと欲せばの意なり。

(タ)圓覺經四、長遠不退轉の心。

(レ)心等とは、理路なく、心頭迷悶する處をいふ。

崖め來り崖め去つて(レ)心之く所なくんば忽然として(ソ)睡夢の覺むるが如く、蓮華の開くが如く、雲を披いて日を見るが如くならん。恁麼の時に到りて(ツ)自然に一片と成らん。(ネ)但だ日用七顚八倒する處、只だ箇の無の字を看よ。悟不悟、徹不徹を管すること莫れ、三世の諸佛も只だ是れ箇の無事の人なり、諸代の祖師も亦只だ是れ箇の無事の人なり。(ナ)古德云く「但だ事の上に於て無事に通ぜば、(ラ)見色聞聲も聾することを用ひず」と。又(ム)古德云く「愚人は境を除いて心を亡ぜず、智者は心を亡じて境を除かず」と。一切處に於て無心なれば、則ち種種差別の境界自ら無なり。(ウ)而るに今の士大夫、多くは是れ急性に便ち禪を會せんと要して經敎の上及び祖師の言句の中に於て博量して、說き得て分曉

(ソ)睡等の文、佛地經論一に出づ、又華嚴玄談九に此文を釋せり。

(ツ)佛法と平生差別の境界と融合し一片となると、これ眞の境界なり。

(ネ)第八段、境を除いて無事なることを誡む。

(ナ)古德とは、龍牙居遁禪師なり、僧寶傳九。

(ラ)聾とは、見色聞聲を絕するをいふ、即ち百事紛紜たる上に於て是聞是れ什麼ぞと工夫をなし、六根を閉塞せずして、見んと要せば便ち見、聞かんと要すれば便ち聞き、放つて蕩蕩地ならしめて後に返照せよと學者を勸誡す、意は紛紛たる事上即して無事に通ぜよ、見色聞聲を聾すること莫れと。

(ム)古德は黃檗或は黃龍を指す、傳心法要、續燈十二黃龍章を見よ。

(ウ)第九段、騷進を誡む。

(ヰ)殊に等とは、如何なるか是れ佛、師家云く、人人具足、箇箇圓成す、然るに箇の什麼をか具足し、箇の什麼を圓成すると云ふことを知らずと此等の謂なり。

(ノ)老漢とは、大慧自ら稱す、其例は傳燈十六巖頭章に見ゆ。

(オ)放とは放縱なり、鈍ならしむとは騷進急壯ならず、退步して著實に工夫をなさしむるなり。

(ク)鈍榜狀元とは、今は戲語をなす故にいふ、退步工夫に喩ふ。科擧及第に種種の名ある中の一の名をいふにあらず。

(ヤ)亦等とは、極めて好しとのいひなり。

(マ)白を抱くとは、意は世智才覺を止めて退步工夫をなせとなり、眞箇の道理を會せずんば

ならんことを要す。㋼殊に知らず、分曉の處、却つて是れ不分曉底の事なることを。若し箇の無の字を透得せば、分曉と不分曉と、人に問ふことを著ひざれ。㋨老漢、士大夫を敎へて㋔放に鈍ならしむることは、便ち是れ這箇の道理なり、㋗鈍勝の狀元と作らんこと㋳亦惡からず。只だ㋮白を拕かんことを怕るゝのみ。㋘一笑。

㋫李參政に答ふ　　泰發

㋙華嚴の重重の法界とは斷めて㋓虚語に非ずといふことを示諭せらる。既に虚語に非ず、必ず㋢分付の處あらん、必ず自ら肯ふ處あらん。讀んで㋐此に至りて嗟歎すること之れを久しうす。㋚士大夫、平昔の所學、死生禍福の際に臨んで、㋖手足倶に露はるゝ者十に常に八九

益なし、故に及第に託して白を拕くといふ。拕白は曳白に同じ。排韵に云く、張奭、唐の開元中に花蕚樓下に試に就く、手に試紙を持ち竟に日く、一字を成さずと、時人之を白を曳くといふ。文を成す能はざるを、白を曳くといふ。

㋘上の事迹の戯に依つて一笑といふ。

㋫此の章は逆順禍福の爲に顚倒せられざることを要すと示す。此の書短しと雖も言外に意あり、能く之を味ふべし。これ李參政荊州に在る時の往來の書なり、即ち李公が難に遇ひし時ならん。

㋙第一段、來書の語を述べて嗟歎す。華嚴等とは、華嚴宗に一心。理事に隨つて四法界を立つ、一に理法界、これは界とは性の義にて、平等一味の法性の理なり。二に事法界とは、界とは分の義、差別の義にして、森羅萬象の差別の事法をいふ。三に理事無碍法界とは、法性の理が緣に隨つて起動して萬法となりしなれば、萬法の事即理、理即事にて融通せること、水と波との如きをいふ。四に事事無碍法界とは、既に理の全體が事と顯現せしものなれば、事相の一一は理と異ならず、故に法法塵塵の當體が皆融通すれば、一枚の紙も此儘にして而も十方世界に周遍すると同時に、一切法は一紙の中に融攝せるが如く、一法と一切法と相即し相入し、亦大と小と同時に鎔融し、重重無盡にして障碍あることなきをいふ。之を無盡緣起とも法界緣起ともいふ。今之を重重法界といふ。これ唯だ佛と佛とのみ證知し給ふ境界にして、亦宇宙の眞實相なりとす。委しくは華嚴經及び其疏を看よ。

なり、其の行事を考ふるに、㋴三家村裏の省事の漢の富貴も貧賤も其の心を汨ること能はざるには如かず。是を以て㋱之れに較ぶれば㋯智は愚に如かず、貴は賤に如かざる者多し。何を以ての故に、生死禍福現前すれば、㋛那時は僞を容るゝべからざるが故なり。㋽大參相公の平昔の所學、已に㋪行事に見る、㋲禍福の際に臨んで、

㋓李公、法界の理に證入して虚語に非ずといふにあらず、但だ華嚴廣大の法門、佛境界は定めて是の如し、佛の虚語に非ずと信得せるを叙するなり。

㋢分付とは師家、悟理を分つて學者に分與するの謂なり。即ち師家が學者の得悟の處の十全なるを檢して之を證明し印可するをいふ。今の文意は、證入の分あるに非ざれば、虚語に非ざることを知らず、虚語に非ざることを知らずんば、手に入ること能はず、已に手に入ることを得れば、必ず自ら肯ふ處あり、若し實に自ら肯はば則ち嗟歎するに堪ふ。而し恐らくは證入の分ありて此くの如くなるにあらずして、妄心分別にあらずやとなり。

㋐此に至りとは虚語に非ずの語を指す。嗟歎とは文面は讃美するに似たるも、實意は然らず、舊鈔に云く、「此れ贊美に非ず、歎の義なり」と、可なり。二の必の字は、肯はざるの底意を表はす。

㋚士大夫等、第二段、士大夫の行業の學解に及ばざることを責む、此れ泰發を美めんが爲に、先づ世間の士を訶す、然し底意は泰發も亦世間の士大夫の中に在るか。平昔とは平日といふが如し。

㋖手足等とは、隱し居たる手脚一時に露現すと、俗にぼろをだす、化けの皮がはげたの謂なり。

㋴三家等は前に出づ、即ち尋常孔孟の書を學すと雖も、行解相應する者なり。其の心等とは、帝の力何ぞ加はらんの謂なり。

㋱之に較ぶとは、智愚貴賤を較量するなり。

㋯智は學者士大夫を指す、愚は省事の漢、貴は在官の士大夫、賤は三家村裏を指す。

㋛那時とは、其時の意なり、即ち生死禍福到來の時なり。僞を容るとは、士大夫は聖賢の道を得ざるが故に、平生の所說の如くならざるが故にとなり、容るべからずとは　受け入れずの意。

㋽第三段、德を歎じ所得を審定す。

㋪行事等、本傳に出づ。

㋲禍福等、生死禍福の際に臨んで、道力いよいよ露るゝを喩ふ。雜一阿含四十七。

㋝此れは虚妄ならんことを疑はんことを恐れて決定の字を下す。

㋜定めて等は、四法界を以て他

精金の火に入るれば愈明耀を見すが如し。(セ)又決定して華嚴重重の法界、斷じて虛語に非ざることを知らば、則ち(ス)定めて他物の想を作さじ、(イ)其の餘の七顚八倒、或は逆、或は順、或は正、或は邪も亦他物に非ず。願くは公、常に此の觀を作せ、妙喜も亦(ロ)其の中に在り、(ハ)異日寂寞の濱に相從つて、(ニ)當々來世の(ホ)香火の因緣を結び、重々の法界を(ヘ)成就して以て(ト)其の事を實にせん、豈に(チ)小補ならんや。(リ)更に須らく箇の注脚を下すべし、卽ち今這の一絡索も、(ヌ)寓言指物の會を作すことを。(ル)一切に忌む、一笑。

(ヲ)曾宗丞に答ふ　天際

(ワ)左右、天資、道に近し、身心淸淨にして他緣の障を作すなし、(カ)只だ這の一段も、誰人か能く及ばん。又能く行住坐臥、老僧が示す所の(ヨ)省要の處を以て時々に提撕せよ。一念相應して千了百當ならんことを說くことを休めよ。便ち是れ此の生に打して未だ徹せずとも、只だ恁麼に崖めば(タ)臘月三十日に到りて閻家老子も也た須らく倒退三千里して始めて得べし。何を以ての故に、(レ)念念般若の中に在りて異念なく間斷なきが爲の故に。(ソ)只だ道家の流の如き、(ツ)妄心を以て想を存するすら、日久しく月深うして尙ほ能く功を成じて(ネ)地水火風の所使と爲らず、況んや(ナ)全念般若の中に住在するをや、臘月三十日に、豈に(ラ)業を轉ずること能はざらんや。而(ム)るに今の人、多くは是れ(ウ)有所得の心を將つて道を學す、此れは是れ無妄想の中の眞の妄想なり。(ヰ)但だ放つて自在ならしめよ、然

の物との想をなさず、若し他物の想をなさば、如實に知らざるなり。

(イ)其の餘とは、四法界の餘をいふ。實を言はば、一切諸法は四法界を出でざるも、此れは且く四法界を佛境界となしていふ。

(ロ)其中とは、その觀中なり。

(ハ)異日等、此の時大惠は衡州の謫居にあり、故に他日免赦を蒙らば、則ち寂寞の濱に於て相見すべしとなり。年譜を案ずるに、紹興二十年に自便を蒙る、李參政は紹興十五年に荊州に謫せられ、居ること八年、同二十二年に赦されて歸へる。

(ニ)當々とは、當來は未來世のことなれば、當來世の當來世の謂にして、未來永久の意。

(ホ)香火の因緣とは、社を結んで佛事をなすの類にして、畢竟法緣を結ぶをいふ。白氏文集七十聖善寺の記に出づ。

(ヘ)成就とは、手に入れること。

(ト)其の事等は、實の字が一篇の眼目なり、問書の虛語の虛の字に反す、意は我れ勸辨の手を垂れん、其時に到つて則ち看驗して其事を成就せんとなり。

(チ)小補とは孟子盡心の上篇に云す。今の意は、若し華嚴の法界に證入せば、則ち是れ一佛の出世故に大補と謂つべしとなり。

(リ)第五段、四法界の現成受用を示す。巳上にて說法畢る、注脚とは下の卽ち今巳下を指す。

(ヌ)寓は寄なり、莊子九に大鵬に寓言するの類なり、指物は物に託して之を言ふなり。卽ち華嚴の四法界は生死禍福の際に現前し用ふる所にして、日用外に建立して目前に頓放するにあらざるなり。

(ル)一笑とは、四法界は生死禍福の上に現成す。然るに李參政は然らず、故に誤會する所を一笑するなり。斷じて虛語に非ずと云はば、卽ち大悟なり、李參政は恐らくは此に到らず、しかし遠方なれば其虛實を定め難し、故に下の二の必の字を下して彼れを諷して、其の事を實にせんといふ。一一の語に賊意あり。

(ヲ)宋史に傳なし、萬姓統譜五十七に出づ。宗丞は官名、事物紀原五に云云。此章は大疑、頓悶の處、これ緊要なることを示す。

(ワ)第一段、隨喜し勉を勸む。

(カ)只等とは、凡そ障緣なき人は知識に近傍せず、然るに曾宗丞は唯だ障緣なきのみにあらず、亦知識に近傍す、因緣共に勝るが故に、誰人か能く及ばんといふ。

(ヨ)省要とは、省略簡要なり、千了百當は、行、住、坐、臥の上に徹悟するをいふ、此處は猥りに唇皮を鼓する莫れとなり。

(タ)臘月等とは、眼光將に地に落ちんとして未だ落ちざる時なり。

(レ)念念等は、道力の業力に勝るなり。

(ソ)第二段、劣を引き勝を況顯して勸激す。

(ツ)妄心は迷妄の心、未だ徹悟せざる心なり、想とは觀念、若しくは念想分別なり、存とは心にかけるをいふ。

(ネ)地水等、之を四大といふ、地は堅性、水は濕性、火は煖性、風は動性なり、此の四は到る處に存在し、萬物に周遍する故に大と名く、而して世界の

も(ノ)太だ緊しくすることを得ざれ、太だ緩くすることを得ざれ、只だ恁麼に工夫を做さば限りなき心力を省かん。(オ)左右は生處は已に熟し、熟處は已に生なり、十二時中自然に心を枯して忘懷し、心を將て(ク)管帶することを著さざるべきなり。未だ透脱せずと雖も、(ヤ)諸魔外道、已に其の便を伺ふこと能はじ、亦自ら能く諸魔外道と(マ)

萬物は悉く此四者の和合に由りて成る、然らば萬有の四大原素なれば亦四大種といふ。且く吾人の身體に就いて見んか、骨、肉、髮、皮等は地の性、唾、涕、血等は水の性、煖溫は火の性、運動は風の性なり。然らば今この地水等を吾人の肉體と見て、肉感より起る情欲に支配せられざるをいふ。或は萬物も四大所成なれば、現象界の爲に使役せられずとの意と見るも可なり。

(ナ)般若は梵語、智慧と譯す、一切法の實相を照了する悟りの智慧なり。(他に解する如し)境に對して日夜に起る心念分別是れ何物ぞと究め明らめ得ば、あらゆる妄念の其儘が般若に契ふを全念、般若に住すといふ。

(ラ)繫縛の業を轉じて、解脱となすをいふ。

(ム)第三段、工夫の法を示す。

(ウ)迷、悟、染、淨、苦、樂、升、沈等の差別を認むる心を有所得の心といふ。

(ヰ)目前の理路や心を用ひて悟をまつ等の心を放ち、胸中を豁開して拘はる所なからしめよとなり。

(ノ)太等とは、四十二章經に、沙門、迦葉佛の遺敎經を誦す云云とあり、披見せよ。

(オ)第四段、此人の見處の正しきことを示す。生處とは案ずるに無明煩惱なり、凡夫の吾人は未だ修養を積まず唯だ煩惱の支配の許に生き居れば生處といふ、熟處は既に修養を積み道力熟する故に熟處といふ。佛敎にては煩惱卽菩提(道と譯す)と說き、煩惱と菩提と其作用には違順異あるも、其體は一なれば、修養の力に由つて柿の澁が轉じて甘味となるが如く、煩惱を轉じて菩提となすを得る故に、其處を生處は已に熟すといふ。既に菩提が增勝すれば、隨つて煩惱の闇は自ら轉滅するを、熟處は已に生なりといふ。

(ク)管帶は前に辯ずる如し、要するに認帶すること、今は見聞の境に認着するなかれの意。

(ヤ)魔は梵語の魔羅の略、能奪命、擾亂などと譯す、人天寶鑑に解する如し。外道とは佛敎以外の、宗敎を佛敎より名く。又佛敎の唯心論なるに對して、心外に法を求むる敎を外道といふ。今の文は管帶忘懷の邪師を指して諸魔外道といふ。

(マ)共一手等とは、實は彼の一手、一眼に共同せざるなり。

(ケ)彼れが事とは、諸魔外道の事なり。是れ彼の惡見に同じて而も惡見に墮せず、正法を成

共一手にし、同一眼にして(ケ)彼れが事を成就して、而も其の數に墮せざるべきなり。公、一人のみ以て(フ)此れを語るべきを除く、餘人は但だ公の行履の如くなる能はざるのみに非ず、亦未だ必ずしも信得及せじ。(コ)但だ話頭の上に於て看よ、看じ來り看じ去りて沒巴鼻、沒滋味にして、心頭悶することを覺得せん時、正に好し力を著くべし、切に忌む(エ)他に隨ひ去ることを。只だ這の悶する處、便ち是れ成佛作祖し、(テ)天下の人の舌頭を坐斷する處なり、忽にすべからず、忽にすべからず。

(ア)王教授に答ふ　大授

(サ)識らず左右別後、日用如何んが工夫を做すや。若し是れ曾て理性の上に於て(キ)滋味を得、經教の中に滋味を得、祖師の言句上に滋味を得、

就せしむるなり。

(フ)此を語るとは、一手を共にし、一眼を同じて、他を救ふことを語るに足る公のみは別だとの意。

(コ)第五段、提撕の法を示す。

(エ)他とは、心頭悶處なり、卽ち此に於て因循し去る莫れとなり。

(テ)天下の人、他を詰難する能はざるをいふ。

(ア)王大授は、宋史に傳なし、何人なるか詳かならず。敎授とは、事物紀原六に、「唐の武德の初、府郡にまた經學博士を置き、五經を以て敎授することを掌らしむ、乃至宋の神宗の元豐中に又諸の大郡府に始めて各敎授一人を置き、諸生の敎導を掌らしむ、大學博士の如し云云」。此の書は前に相見して後に書を皋し幾日もなく、密首座、彼に到る時に答書を附し去りしなり。大意は、心意識を破し、沒滋味の處に向つて工夫をなさんことを示す。

(サ)第一段、工夫の去就を示す。

(キ)有所得なるが故に、これは小理味を嚼み出したるなり。

(ユ)濟は事を遂ぐるなり、成なり、今は成就せざるをいふ。

(メ)他の是非を管する莫れとなり。

(ミ)撈摸なきとは、沒可把に同じ、手につかまへられぬ義なり。

(シ)行は行起にて作用をいふ、今は心識のはたらかぬ事なり。土木等とは、將に妄識轉じて智とならんとする處、卽ち肉的生活が一轉して靈的生活に入らんとする刹那の境界なり。

(ヱ)第二段、世智辯聰を斥く。途に觸るとは、猶ほ隨處といふが如し。

眼見耳聞の處に滋味を得、擧足動歩の處に滋味を得、心思意想の處に滋味を得ば、都て事を㋴濟さざるなり。若し直下に休歇せんことを要せば、應に是れ從前の滋味を得る處、都て㋱他を管すること莫く、却つて㋯撈摸すべきなき處、滋味沒き處に去つて試に意を著けて看るべし。若し意を著け得ず、撈摸し得ず、轉た欛柄の把捉すべき沒うして理路義路に心意識都て㋛行ぜざること、土木瓦石の如くに相似たることを覺得せん時、空に落ちんことを怕るゝこと莫れ。此れは是れ當人放身命の處なり、忽にすべからず、忽にすべからず。㋽聰明靈利の人、多くは聰明の所障を被る、故を以て道眼開けずして塗に觸れて滯をなす。衆生無始時來、心意識の爲に使はれ、生死に流浪して自在なることを得ざるなり。果して生死を出でゝ快活の漢と作らんことを欲せば、須らく是れ一刀兩段して心意識の路頭を絶却せば、方に少分の相應あるべし。故に㋪永嘉云く、「法財を損し功德を滅することは、茲の心意識に由らずといふこと莫し」と、豈に人を欺かんや。㋲頃に惡教を蒙る、其の中の㋝種々の趣向は皆某が平昔所訶底の病なり、㋜是れ般の事を知らば、腦後に颺在して且く沒巴鼻の處、沒撈摸の處、沒滋味

㋪證道歌の語。
㋲第三段、博量卜度を訶す。
㋝種種等とは、書中に說く所の……。
㋜是れ般の事とは、平昔所訶底の禪病を指す。
㋑博量は、分別量度なり、引證とは古書等を引き證明せんとすること。
㋺分付は、師家の印可證明なり、前辯の如し。
㋩引證等とは、明眼の宗匠は容さずとなり。
㋥髑髏等とは鬼窟裡の活計をいふ、前に出づ碧巖四の垂示。
㋭生死岸頭は、華嚴經二十、十行品。玄沙錄中。
㋬第四段、非を知る人を引いて、來書を反詰す。普天とは毛詩注疏十三、終南山篇。
㋣禪師長老とは、邪師を指す。
㋠禪師長老以外の……。
㋷言に在かずとは、言ふに及ば

の處に向つて、試に工夫を做して看よ。僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無や。」州云く、「無」といふが如き、尋常聰明なる人は纔かに擧記するを聞いて、便ち心意識を以て領會し、㋑博量し引證して、說き得て㋺分付する處あらんことを要す。殊に知らず、㋩引證を容さず、博量することを容さず、心意識を以て領會することを容さざることを。縱ひ引證し得、博量し得、領會し得るも、盡く是れ㋥髑髏前情識邊の事なり、㋭生死岸頭には定めて力を得ざるなり。㋬而るに今普天の下、喚んで㋣禪師長老と作す者も、會得し分曉する底は、左右の書中に寫き來る底の消息を出でざるのみ。㋠其の餘の種々の邪解は㋷言に在かず。㋦密首座、某、渠と同じく㋸平普融の會中に在りて相聚まる、盡く普融の要領を得て、㋾渠自ら以て安樂なりとなす。然も造る所の者亦左右の書中の消息を出でず、今始めて非なるを知りて、㋻別に箇の安樂の處を得たり、㋕方に知る、某、秋毫も相欺くこと無きことを。今時に去りて相見せしむ、㋵無事の時に試に渠をして吐露せしめて看よ、還つて左右の意に契得せんや否や。㋟八十の翁々の㋹場屋に入るがごとく、眞誠に是れ小兒の戲にあらざるなり。若し生死

すの意。
㋦密首座は、衡州伊山の冲密禪師にて、初め平普融に參じ、後に大惠に點破せられ、遂に大慧に嗣ぐ、普燈錄に出づ。某とは、大惠なり、渠とは密首座を指す。
㋸平普融は大潙慕喆の法嗣也、普燈八、會元十二。年譜を案ずるに、師三十四歳の時なり。
㋾渠等、少を得て足れりと爲す、此等の事を以て普融をして邪師となす莫れ。
㋻別等、再び大惠の鍛錬接得に遭ふて眞箇の安樂を得たり、素と大器量あるが故に此くの如し。
㋕方に知るは密首座に系る。
㋵無事とは、公事なき時なり。
㋟八十等、第五段、情識義解を止めて、實悟を得んことを勸む。此事は八十の三云云。傳燈十七。

到來せんときに力を得ずんば、縱ひ說き得て分曉に和會し得て下落あり、引證し得て㋞差別なきも、盡く是れ鬼家の活計なり、都て㋡我が一星事に干らず。㋧禪門に種々差別の異解あり、唯だ㋤法を識る者は懼る。大法明かならざる者は、往々に多くは㋶病を以て藥なりとなす、知らずんばあるべからず。

㋰劉侍郎に答ふ　季高

㋒臘月三十日㋼已に到る、之れを日用に要すと示諭せらる。當に是くの如くに觀察せば、則ち㋨世間の塵勞の心は自然に銷殞すべし。塵勞の心既に銷殞せば、則ち來日依前として㋔孟春猶ほ寒からん。㋗古德云く、「佛性の義を識らんと欲せば、當に㋳時節因緣を觀ずべし」と。乃ち是れ黃面老子出世成佛して、㋮金剛座に坐し、

㋹場屋とは、及第の試驗場なり、宋史傳七十八歐陽修傳に出づ、或は場屋とは、歌舞場なりと。意は八十の老翁が舞臺に入りて舞ふは、眞誠にして容易にあらず、小兒の戲をなすが如きにあらずと、即ち眞誠にして是れ小兒の戲にあらずとの方語なりと。取捨は情に任す。

㋞理に合して差別なきもとなり。鬼家等とは理味に愛着するをいふ。

㋡自己本分上に關らずとの意なり、一星事とは、予之を知らず。

㋧第六段、猥りに事緣を說くを破す。異解とは憶談なり。

㋤法は法令、法庭なり、法を識らざる者は、忌憚する所なし。これ世話を引用するなり。

㋶病等とは、誤つて祖師意を認むるをいふ。

㋰何人なるか未詳、宋史等に傳なし。紹興十八年、師六十歲の作。此の章は專ら觀念の邪正を示す。

㋒第一段、來書を拈じて直に示す。

㋼或は云く、巳に到るまでが來書の語なり、巳下は大惠の言なり、而して要とは、肝要の謂なりと。併し今の譯文の如くに解せば、臘月三十日とは世緣將に盡きなんとする時なれば、其際に臨んで呑氣に惰欲を充たさんと欲する者なく、心氣頗る緊張して正念に住するものなり、故に平生日用の上にも、其緊張眞面目を要すとなり。

㋨塵勞とは、環境に對して起す煩惱の異稱なり、塵は染汚の義、勞は勞役の義、貪瞋等の煩惱は吾人の本心を汚し、身心を驅役し勞苦せしむるが故に名く。銷殞とは、銷散殞滅なり。

㋘魔軍を降伏し、法輪を轉じて衆生を度し、涅槃に入る底の時節なり。㋫解空の所謂臘月三十日の時節と異なく別なし。這裏に到りて只だ是くの如くに觀ぜよ。此の觀を以てする者を名けて正觀となす。此の觀に異なる者を名けて邪觀と爲す。㋙邪正未だ分たざれば、未だ免れず、㋓他の時節に隨つて遷變することを、時節に隨はざることを得んと要せば、但だ一時に放下著せよ。㋢放つて放つべきなき處に到らば、㋐此の語も亦受けず、㋚依前として只だ是れ解空居士にして、更に是れ別人ならざるなり。

㋖又

㋴吾が佛大聖人は能く㋱一切の相を空じ萬法の智を成ず、而れども即ち㋯定業を滅すること能はず、況んや㋪博地の凡夫をや。居士は既に

㋔孟春猶寒しとは、叢林の兩展三禮の禮話なり、然し底意は悟了は未悟に同じきを謂ふ。孟春とは正月なり。

㋗第二段、古德を引いて證成す、此れ百丈和尙の語。

㋳來書の臘月三十日の語に因んで引く、時時刻刻なり。

㋮金剛座は、三千世界中の南贍部洲にあり、菩薩成道の時の坐處にて代代の佛の成道も、釋尊も此上に坐して成道し給ひしなり、此座處は下金輪際より地上まで拔け出でたるものにて、平素は地下に隱れ、菩薩成道の時には地上に上がり現はると傳ふ。俱舍論、同頌疏十一世間品に出づ。

㋘魔軍とは、第六天の魔王を始めとして世間總ての誘惑を外魔といひ、煩惱等を內魔といふ、內外の魔軍を皆降伏し斷破するをいふ。華嚴十八、妙法品に出づ。

㋫解空とは、劉侍郎の居士號なり、又杼山とも號す。

㋙正邪等、第三段、工夫の法を示す。邪の上に「然れども」を加へ見よ。

㋓他の時節とは、十二時に使はるるなり。

㋢放は棄つるなり。

㋐此の語とは、上の放つべき處なきの語を指す。

㋚依前等とは醒め來りて猶ほ見る舊風光で、孟春猶ほ寒く、悟了すれば未悟の處に同じく、之れを讚すれば便ち喜び、之を毀れば便ち瞋る、更に別事なし、併し容易の看をなす莫れ。

㋖劉侍郎に答ふる第二書なり、此章の大意は、老宿の言を擧げて定業を滅するの法を示

是れ エ箇の中の人なれば、想ふに亦常に是 ヒの三昧に入らん。モ昔僧あり、一老宿に問ふ、「世界恁麼に熱す、未審し甚麼の處に向つてか回避せん。」老宿曰く、セ「鑊湯鑪炭裏に向つて回避せよ。」曰く、「只だ鑊湯鑪炭裏の如き作麼生か回避せん。」ス曰く、「衆苦到ること能はず」と。願くは居士日用四威儀の中において、只だ イ是くの如くに工

す。此書は侍郎の病中に寄す。

ユ第一段。

メ山川草木人畜等の一切差別の法は、もと因緣生にして如幻の相なり、故に一切法は如幻虛妄なりと觀ずるを空ずといふ。佛陀は既に一切相を空じ、隨つて妄分別を絕離し給ふが故に、本具の智德一時に現成したまふ、故に萬法の智を成ずといふ。

ミ定業とは、決定業の略、業とは吾人の身、口の上の作業動作のこと、決定とは改轉し難きをいふ、即ち宿世に善或は惡の業を造らば、今世に決定して苦樂の果報を受くべき業因をいふ。恰も竊盜をなさば、後日必ず牢獄の苦役を免る能はざるが如し。今の語は嵩岳元珪禪師の語なり、謂く「佛は萬法智を成したまふも、而も定業を滅する能はず、佛は能く群有の性を知り、億劫の事を窮めたまふも、而も無緣を化導する能はず、佛は能く無量の有情を度したまふも、而も衆生界を盡すこと能はず、是を三不能となす。定業も亦牢久ならず、無緣も亦是れ一期の衆生界增減なりと云云」。會元二、傳燈四に出づ。佛の定業とは、佛、阿難等と城に入り食を乞ひたまふ時に、木槍、馬麥の難ありしを言ふ。法苑珠林七十三に興起行經を引けり、近くは冠註に引けり、披見せよ。今の文は病を慰むるなり、故に病中の事を引くを是となす。

シ博地とは、三大部補註に云く、「廣大なり」と、凡夫、賢人、聖人等ある中に凡夫最も大多數を占むる故に博地の凡夫といふ。

エ箇中の人とは、決定して佛を信ずる中の人といふこと。

ヒ是の三昧とは、疾病三昧なり、意は病を任持して、定業避くべからざるを知るなりと。

モ昔等、第二段、古則を授けて、劉季高が病を治せしむ。傳燈二十二、曹山章、碧巖四十二則、大惠錄一。

セ此は世界の熱に託して三界の熱を問ふ、故に三界の火宅の中に向つて回避せよと道ふ、然るに今は病苦に系けて言ふなり。

ス曰く等、傳燈錄十八、了悟章に出づ。

イ是の如しとは、鑊湯裏に向つて回避すの語を指す。

ロ此れは等、病に因んで藥方に喩へて言ふ。

ハ傳授とは、これ亦藥方に因んでいふ。

ニ一念等、一念相應の無漏智を藥に喩へて草湯といふ、此藥

夫を做せ、老宿の言をば忽にすべからず、ロ此れは是れ妙喜、効を得る底の藥方なり。居士と此の道相契ひ、此の心相知るに非ずんば、亦肯て容易に ハ傳授せじ。只だ ニ一念相應の草湯を用て下せ、更に ホ別湯を用て使はざれ。若し別湯を用て使はゞ ヘ人をして發狂せしめん、ト知らずんばあるべからず。チ一念相應草は他に求むることを用ひざれ、亦只だ居士の四威儀の中に在り、明處は明かなること日の如く、黑處は黑きこと桼の如し。リ若し手に信せて拈じ來つて本地の風光を以て ヌ一照せば、錯る者あること無く、亦能く人を殺し、亦能く人を活す。故に佛祖常に ル此の藥を以て鑊湯鑪炭裏に向つて苦惱の衆生の生死大病を醫するを ヲ大醫王と號す、識らず、ワ居士還つて信得及するや否や。カ若

は能く一切の煩惱の病を治するなり。文意は此公案に相應せざれば、則ち此病を治する能はずとなり。下せとは飮み下すなり。羅胡野錄下、湛堂準の炮炙論に云云す。

ホ別湯とは、其の病に適せざる藥にて、分別計較草、憎愛草湯等を指す、使とは使用なり。

ヘ人等とは、次下の嚴教授に答ふる書中に、「淨潔の處を戀ふこと莫れ、淨處は人をして困ぜしむ云云」と、是の意なり。

ト知等とは、藥を服用せんと欲せば、先づ藥の適不適を辨別せよ、然らざれば藥却つて毒となるとなり。

チ第三段、性上の功德を示す。

リ圓悟心要上、正禪人に示す法語。

ヌ一照とは、上の風光の光の字に因んでいふ、藥種の善惡を鑑定するをいふ。

ル此藥とは、眞藥なり、前の因緣に應ず、三界の火宅に入りて、衆生を度脫するをいふ。

ヲ大醫王とは、維摩經佛國品に出づ。又涅槃經に云云す。

ワ居士等、意は四威儀の中に、一念相應の奇特ありや否やとなり。

カ第四段、向上の本分を以て結ぶ。

ヨ父子等とは、學得、修得に涉らざる底の祕方の謂なり。鑊湯裏に向へば早く是れ今時に墮す、纔かに對治道を云はば、早く是れ功勳の邊に墮す、此の如く氣宇王の如くんば大惠亦下風に立つべし。これは伴位に立つて言ふなり。

タこれ臨濟下坐し、麻谷に對して曰く、不審の類、又數中の文殊、維摩は皆古佛の應化にして釋尊の會座に來り、主位を退き伴位に立つ、是れ古佛

し我れに自ら(ヨ)父子不傳の祕方ありて、鑊湯鑪炭裏に向つて回避する底の妙術を用ひずと言はば、(タ)卻つて居士の布施せんことを望む。

(レ)李郎中に答ふ　似表

(ソ)士大夫の此の道を學する、(ツ)聰明ならざることを患へざれ、太だ聰明なることを患へんのみ、知見なきことを患へず、知見太だ多きことを患ふるのみ。故に常に(ネ)識前の一歩を行じて脚跟下の快活自在底の消息を昧卻す。邪見の(ナ)上なる者は見聞覺知を和會して自己となし、(ラ)現量の境界を以て(ム)心地の法門となす。(ウ)下なる者は業識を弄して(ヰ)門頭戸口を認め、兩片皮を簸て、玄と談じ妙と說く。(ノ)甚だしき者は發狂して字數を勒せず、胡言漢語、(オ)東を指し西を畫するに至る。(ク)下々なる者は默照無言、空々

の家風なり、今大慧も亦伴位に下つて却つて居士の藥を布施せんことを望むなり。

(レ)李は傳なし、郎中は、唐の武德三年、尙書郎を改めて郎中となす。事物紀原五。此章は、識前沒巴鼻の處に向つて工夫を做すことを示す。

(ソ)第一段、聰明邪見解を破す。

(ツ)聰明とは知見多きをいふ。

(ネ)識は意識なり、識上に纔かに一念を生ずるを一歩といふ、纔かに一念を生ずれば早く是れ妄見に墮す、故に自在を得る能はざるなり。

(ナ)上なる者とは、邪見の淺きをいふ。見聞等とは、此法は見聞覺知を離れず、亦者箇の道理に卽せず、一回、筋斗を打する者にあらずんば如何んが知得せん。故に眞言には阿字三密の觀を用ひ、天台は一念三千の觀を用ふ、一度退治道に入り、功勳の邊を盡さずんば、本分の田地に到ること能はず、故に佛陀は六年苦行を積み、見性の規則を垂れたまふなり。

(ラ)現量等は、分別を雜へずして直觀したる境界てふこと。

(ム)心地等とは、前に辨ぜり。卽ち一回發明の者は當に然るべし、未だ發明せずして此くの如きの會をなさば、何ぞ具縛の凡夫と異ならん、若し爾らば佛敎も祖錄も亦無用とならん。無眼の長老にして、元來迷もなく悟もなしと云はば可憐愍者なり、碧巖六十二則の評に云云す。

(ウ)下とは邪見深き者。

(ヰ)門頭戸口とは、內容なくして唯だ口さきにだけに弄する言語といふ如し、卽ち口に只だ玄妙の佛法を說き、以て玄妙となすを門頭戸口といふ、こ

寂々を以て鬼窟裏に在つて著到し、究竟の安樂を求めんとす。(ヤ)其の餘の種々の邪解は、言に在らずして知りぬべし。(マ)沖密等歸るとき、賜ふ所の敎を領ず、之れを讀んで喜慰すること言ふべからず、(ケ)更に復た世諦を叙して相酬酢せず、只だ左右の道に向つて勇猛なるの志を以て、便ち(フ)葛藤に入る。(コ)禪に德山、臨濟の殊なり、法眼、曹洞の異なりあることなし。但だ學者に(エ)廣大決定の志なく、而して師家に亦廣大融通の法門なし。故に入る所に差別あり、究竟歸趣する處には、並に如許の差別あることなし。(テ)妙喜書に因つて徑要の處を指示せんことを欲すと示諭せらる、只だ這の徑要を指示せんことを求むる底の一念、早く是れ(ア)頭を刺し膠盆に入り了れり、更に(サ)雪上に向つて霜を加ふべ

れ前の志道の見解と一般なり。簸とは播揚ぐるなり、みをひる、米を揚げて糠を去るなり。

(ノ)甚しき者とは、所謂野狐者流をいふ。發狂とは、狂者の如くに口に任せて叨叨たるをいふ。字數等とは、法式に拘らず猥りに偈頌の類を作ること、勒は鑣なり、刊る、抑る、剋むなり、字餘りの詩の如し。

(オ)東を指し等とは、模様をなすをいふ。臨濟錄に云云、會元五、三平傳に出づ。

(ク)下下なる者とは、邪見深く至極卑劣の者、以は用の義。

(ヤ)其餘云云とは、詳論するを待たずして知るべしとなり。

(マ)第二段、來書を贊歎す。喜慰は、平安を聞いてなり。

(ケ)更已下は、來書の文體を贊美す、意は李似表の書は世間の寒暄等を敍せず、但だ此事を以て酬酢すとなり。酬酢とは書翰の往復をいふ。

(フ)葛藤とは李の來敎を指す。

(コ)禪等、第三段、究竟の法は意味なきことを論ず。蓋し李郎中の書中に五家七宗の事を問ひ來るか、此の文の意は、究竟の處は差別なきをいふ。永平正法眼藏四十八に宗旨を分つを訶す、楞伽經中にも之を悲む。德山は宣鑑禪師、龍潭崇信の法嗣なり。臨濟は、義玄禪師。法眼は文益禪師、人天眼目に出づ。曹洞は雲巖の法嗣洞山良价禪師、何れも傳燈十五に出づ。

(エ)決定の志なきが故に、纔かに一家の門庭を窺ふのみ、若し自他の深源底を究めば、則ち是れ歸家穩坐の處。眞に決定の志を具する者は、善財童子の如き是れなり。

(テ)第四段、徑要工夫の法を示す。

からず。然りと雖も問あり答へずんばあるべからず、請ふ左右都べて平昔或は自ら經教、話頭を看、或は人の擧覺し指示するに因つて(キ)滋味を得て歡喜する處を將て、一時に放下し、依前として百不知百不會なること、三歲の孩兒の如くに相似て、(ユ)性識有れども而も未だ行ぜず、卻つて未だ徑要を求むる底の一念子を起さざる前頭に向つて看よ。看來り看去りて轉た巴鼻を沒して方寸轉た寧(メ)怗ならざることを覺得せん時、放緩することを得ざれ、這裏是れ千聖の頂顙を(ミ)坐斷する處なり。往往に學道の人、多くは這裏に向つて(シ)打退し了る。(エ)左右若し信得及せば、只だ未だ徑要の指示を求むる一念を起さざる前に向つて看よ。看來り看去りて忽然として睡夢覺めなば是れ(ヒ)差事ならず、此れは是れ妙喜平昔

(ア)頭を剌す等は、頭を膠盆につき込むにて、言語に粘着して出過する能はざるをいふ。圜悟心要下。

(サ)雪上等、來問する已に不是なるに、我れ復た一言半句を垂れば、是れ雪上に霜を加ふなりと、是れ大惠の徑要指示の處なり。

(キ)滋等は、上の經教等に係る、理味の喜ぶべき處あらば、皆是れ鬼家の活計なり。

(ユ)これ三歲の孩兒の履行なり。

(メ)怗は帖に同じ、安なり、靜なり。

(ミ)坐斷とは、佛祖齊しく下風の地位に立つをいふ。

(シ)所謂鄕念を生ずる底なり。

(エ)第五段、實驗の處を說いて信心を固む。

(ヒ)差は差異なり、意はこれ別物にあらず、睡覺る處即ち是れ悟處なりと。

(モ)悟り來り看れば則ち我が本有の性、此に到つて悟といふ、愧づべし、大惠の面前一場の敗闕なり、所謂悟は是れ第二頭とは便ち此等の處なり。

(セ)宋史に傳なし、年譜に彥嘉に作る、寶文とは、事物紀原四英宗の治平の初、寶文閣を以て仁宗の御書御製を藏す、即ち寶文閣學士、直學士及び待制の官を置く云云と。此書は師六十歲の作、大意は鈍根にして而も妙悟を得るの捷徑を示す。

(ス)第一段、鈍根の工夫を扶くることを述ぶ。

(イ)黽とは勉なり、嚴氏の曰く、「力堪へざる所、心に欲せざる所、而も勉强して之を爲すを黽と曰ふ」云云。

(ロ)超悟は超脫妙悟なり。

(ハ)某とは、大惠なり、雙徑とは浙江名勝志一に杭州餘杭縣に

做す底の得力の工夫なり。公に決定の志あることを知る、故に泥を拕き水を帶びて(モ)這の一場の敗闕を納る。此の外別に指示すべき無し、若し指示すべきことあらば、則ち徑要ならざるなり。

(セ)李寶文に答ふ　茂嘉

(ス)向に示諭を承く、性根昏鈍にして而も(イ)黽勉して修持すれども、終に未だ(ロ)超悟の方を得ずと。(ハ)某、頭に雙徑に在りしとき、(ニ)富季申が所問に答へき、正に此の問と同じ。能く昏鈍なりと知る者は(ホ)決定して昏鈍ならず、更に甚の處に向つてか超悟を求めんと欲するや。(ヘ)須らく昏鈍を借りて入るべし。(ト)若し昏鈍を執して自ら我れは分なしと謂はば、則ち(チ)昏鈍の魔の爲に攝せられん。(リ)蓋し平昔の知見多きは證悟を求むる

あり。

(ニ)富季申に答ふる書は上卷の初の方、復た陳季任に答ふる書にも根鈍云云の事あり。

(ホ)これ早や主人公の様子なり、李寶文を詰つて言ふなり。

(ヘ)能く昏鈍と知る者は阿誰ぞと返照せば、是れ昏鈍を借つて入るなり。

(ト)昏鈍と知る者を知らず、昏鈍を執るをいふ。

(チ)善事の障碍となるを魔といふ。これ昏鈍魔につかれたる也。

(リ)第二段、主人公を揭げ示す、季寶文の意を推するに、彼れ以爲らく、利根の者は頓悟に當る、我れは昏鈍なる故に超悟を得ずと。故に道ふ、唯昏鈍の者、悟を得ざるのみにあらず、縱ひ利根聰明の者も求心あらば、證悟を得ずと、臨濟云く、「求心歇む處、便ち無事」と。

(ヌ)自ら障碍をなすのみ。

(ル)此は主人公の影子に着いて、主人公の字を出す、これ下に瑞巖を引かん爲の張本なり。

(ヲ)瑞巖師彥禪師、これ巖頭大歲の法嗣なり、會元七。傳燈十七には、此話を載せず。

(ワ)諾は答なり、應なり。惺惺著とは、うつかりするなといふ義、惺の字の上に「乃ち曰く」を加へて看よ。

(カ)牓樣は、手本の義なり、上に出づ。

(ヨ)謾は謾且なり、字彙に「未定の辭」と、或は義理會解をなさず、一切管せざるなり、此れめつたといふ義なり、杜詩の註に「謾は徒なり」と。

(タ)本命元辰は上に註す。生時の歲をいふ、本分を喩ふ。

(レ)第三段、言語の迹を拂ふて認著せざらしむ、此の上に「而れども」を加へ見よ。

(ソ)已むこと等は、不可言の事な

の心、前に在いて障を作すを以ての故に、自己の正知見、現前すること能はざるなり。此の障も亦外より來るに非ず、亦㋦別事にも非ず、㋸只だ是れ箇の能く昏鈍なりと知る底の主人公なるのみ。故に㋾瑞巖和尚居常丈室の中に在りて自ら喚んで云く、「主人公。」又自ら應じて云く、「諾、」又自ら應じて云く、「㋻諾、惺惺著なれ。」又自ら應じて云く、「諾、他時後日人の謾を受くること莫れ。」又自ら應じて云く、「諾諾」と。古來幸に恁麽の㋕膀様あり、㋵謾に這裏に向つて提撕して看よ。是れ箇の甚麽と只だ這の提撕する底亦是れ別人ならず、只だ是れ這の能く昏鈍と知る者なるのみ。能く昏鈍なりと知る者亦是れ別人ならず。便ち是れ李寶文が㋟本命元辰なり。㋹此れは是れ妙喜、病に應じて藥を與ふるなり。已む㋞ことを得ずして、略居士の爲に箇の歸家穩坐底の路頭を指すのみ。若し便ち㋡死語を認定して眞箇喚んで本命元辰と作さば、則ち是れ㋧識神を認めて自己と爲すなり。轉た沒交涉ならん矣。故に㋤長沙和尚云く、「學道の人、眞を識らざることは只だ從前識神を認むるが爲なり、無量劫來生死の本なるを、痴人は喚んで本來人と作す」と。前に云ふ所の㋶昏鈍を借りて入るといふ是なり。㋰但だ只だ看よ、能く是

るも、多く錯り會するが故に已むことを得ずの意。

㋡大惠自ら自語を指していふ、意は昏鈍を知る底を認めて、謬つて本命元辰と爲さんことを恐るるが故に。

㋧識神は、對象に隨つて轉變する第六意識を指す。

㋤長沙は、傳燈十に出づ。湖南長沙の景岑招賢禪師なり、南泉に嗣ぐ、初め鹿苑に住す、第一世なり、其後、居に定處なく、緣に徇ひ物を接す、請に隨つて說法す、故に時の衆、之を長沙和尚といふ、今の文は和尚の偈なり。

㋶聰明を恃み早く領會を作す、是れを識神を認むといふなり。

㋰第四段、正しく工夫を示す。

㋒未だ悟らざる時の境界と大に異なる處を大笑せんとなり。或は主人公の影子を亡じ、生

くの如きの昏鈍を知得する底は、畢竟是れ箇の甚麽ぞと。只だ這裏に向つて看よ、超悟を求むることを用ひざれ。看來り看去らば忽地に㋒大笑し去らん、此の外に言ふべき者なし。

㋼向侍郎に答ふ　　伯恭

㋨悟と末悟と、夢と覺と一なりといふ一段の因緣を示諭せらる。黃面老子云く、「汝㋔緣心を以て法を聽かば、此の法も亦緣なり」と。㋗至人には夢なしと謂ふは有無の無には非ず、㋳夢と非夢と一なるを謂ふのみ。是を以て之れを觀れば則ち㋮佛の金鼓を夢み、㋘高宗の說を夢み、㋫孔子、兩楹に奠らるゝを夢みるも、亦夢と非夢との解を作すべからず。㋙得ることを夢み、世間を觀ずれば猶ほ㋓夢中の事の如し却り來りて世間を觀ずれば猶ほ夢中の事の如しといふ、敎の中に自ら明文あり。唯だ夢は

死の根本破れて本分の田地に證入する初一念の歡喜にて覺えず大笑せん。

㋼向の傳は、宋史列傳百三十六、萬姓統譜百六、侍郎は戶部侍郎なり、事文新集十二。此章は寤寐恒一、夢覺不二の旨を示す。

㋨第一段、略して聖人に夢なきことを論ず。

㋔緣心等とは、楞嚴經三の文意なり、其の註の意に云く、「此の如く問はる、我れ之を說くべし、然るに緣心を以て聞かば則ち此の法も亦緣となる、故に緣心を離れて看ば益あるべきなり」と。緣心とは緣念分別の心なり、凡夫は周遍計度して物に著する故に、猶ほ妄心といふが如し。

㋗至人に夢なしの語は、事文後集の夢部に文中子を引けり、而し今之を檢するに今の文中子に此の文なし、此の語の出據未詳、列子三、莊子三、淮南子二、論語述而篇、智度論九十、等。

㋳夜夢は言ふに及ばず、非夢とは日用の事夢幻なりと觀ずる底の淺近の事にあらず、全體是れ夢なりと云ふが故に、夢とは夜夢及び日用の七顚八倒を指す、非夢とは、下の夢を全うして是れ實等を指す、此の夢と非夢と一如なる處、是れ聖人に夢なき處。

㋮佛の金鼓等は、金光明最勝王經の妙幢菩薩の事なり、新譯の經には信相菩薩に作る、既に菩薩の事なるに今佛といふは、下の孔子に對するが故に、今は能化に歸して佛といふ、或は佛とは佛子のいひなり、或は云く、佛經中にある故に佛といふなりと、何れも可な

乃ち全く妄想なり、(テ)而るに衆生、顚倒して日用目前の境界を以て(ア)實となす、殊に知らず、全體是れ夢なることを。而も(サ)其の中に於て復た虛妄の分別を生じ、(キ)想心と繫念と神識の紛飛するとを以て實夢と爲す。殊に知らず、正に是れ夢中に夢を說くことを。顚倒の中の又顚倒なり。(ユ)故に佛の大慈悲、老婆心切にして、(メ)悉く能く徧く(ミ)一切法界の諸の安立海の所有の微塵に入り、一一の塵中に於て(シ)夢自在の法門を以て世界海微塵數の衆生の邪定に住する者を開悟せしめて、正定聚に入らしむ。(エ)此れ亦普く顚倒の衆生に示すに、目前實有底の境界を以て安立海と爲し、夢と非夢と悉く皆是れ(ヒ)幻なることを悟らしむ。則ち夢を全うして是れ實、實を全うして是れ夢、取るべからず、

り。經に云く、「此菩薩、佛の說法を聞き、後に夢に金鼓の日輪の如きを見る、婆羅門之を擊つに其の音聲、種種の說法をなす甚だ殊勝なり、覺めて後に佛に詣でて白す、佛贊歎じたまひ(乃至)言く善哉云云善男子、彼が夢みる所の如く、金鼓、聲を出し、如來を贊歎す、眞實の功德並に懺悔の法、若し聞くある者は福を獲ること甚だ多く云云」と、甚だ長し、往見せよ。

(ケ)高宗等は、史記殷本紀に出づ。說又尙書註疏十說命に出づ。說とは高宗が夢に逢ひし聖人の名なり。近くは冠註に引けり。

(ク)孔子等とは、禮記註疏七檀弓に出づ。史記四十七、孔子世家は禮記の說と少し異なり。夢と非夢と一なるが故に、次下の文に捨つべからず、取るべからずといふ。

(コ)第二段、正しく凡夫の夢覺を分つことを斥く、中が第一節數を引いて證す。此文は楞嚴經六文殊の偈なり。世間とは凡夫日用の目前の境界なり。

(エ)夢中等は、夢覺一如と悟り了れば、則ち夢中の事の如しとなり。

(テ)而るに等、第二節、正しく夢覺を分つを破す。

(ア)實と爲すとは、是れ各自の所見に隨つて異を生ず。文意は凡夫は夜夢のみを夢とし、日川を實となす、聖人は十界の依正悉く自心所現にして、心外に實法なく全く如夢如幻とす、幻夢となすといふも虛無といふにあらず、强ひて言はば、心境一如の絕待的夢幻の境なるをいふ。

(サ)其中とは、凡夫の世間日夜の夢中なり。

(キ)想の心所にて、境の相貌を取

捨つべからず、(モ)至人に夢なしといふの義、是くの如くなるのみ。(セ)來書に問はるること、乃ち是れ某、三十六歲の時に疑ひし所なり、(ス)之を讀んで覺えず痒處を抓著するがごとし。(イ)亦嘗て此を以て圜悟先師に問ふに、但だ手を以て指して曰く、「住みね住みね、妄想することを休めよ妄想することを休めよ」と。某復た曰く、「某が未だ睡著せざる時の如き、佛の讚したまふ所の者をば依つて之れを行じ、佛の訶したまふ所の者をば敢て違犯せず、從前、師に依り及び自ら工夫を做して(ハ)受用することを得、(ロ)零碎に得る所の者、惺々たる時は都て受用することを得、牀に上りて半惺半覺の時に及んでは、已に主宰と作ること得ず、夢に金寶を得と見るときは則ち夢中に歡喜する こと限りなし、夢に人に刀杖を以て相逼らるる

る精神作用をいふ、念とは明記不忘の義とて、心の記憶作用をいふ、所緣の境に念を繫ける注意をいふ。神識は獨頭の意識にて特に夢中の意識をいふ。是等は衆生の夜夢の狀を形容するなり。

(ユ)第三段、佛の說敎に約して廣く夢なきことを明すに二節あり、初に華嚴經を引く。

(メ)悉等は、華嚴六、如來現相品。

(ミ)一切法界は、十方世界といふが如し、强ひて對せば事法界、事事無碍法界に當る。安立海とは、安は安置なり、立は建立なり、海とは喩にて、其深廣涯なきことを贊歎す、卽ち山河草木、人畜等の諸世界に入るをいふ。華嚴疏抄六、又は七、瑜伽五十八。

(シ)夢自在の法門とは是れ法門の名、卽ち十種の法門の中の隨一なり、故に今解して云く、

夢と非夢と皆是れ幻なり、若し實體あらば自在なること能はず、夢の全體實、實の全體これ夢にして夢と實と一體互融す、故に圓覺經に云く「十方の穢土、十方の淨土、悉く空花の如し、亂起亂滅するこ と、華嚴の帝網の重重なるが如し」と。然らば大小融通し、一多相卽すれば、十方の世界は一界に攝入し、一世界は十方世界に周遍し、乃至法法塵塵互に鎔融無碍なる、是れ世界海なり、其法に達し自在を得るを夢自在法門と名く、悲智圓滿の大自在なる佛は、微塵數の無量の邪定の衆生を悟らしめたまふと。邪定とは凡そ三聚に一切衆生を該攝す、一に正定聚、これは決定して證悟し得る者にて、起信論に依れば五十位の中十住位已上の人をいふ。二に邪定

ことを被り、及び諸の惡境界を見る時は則ち夢中に怕怖し惶恐す。自ら念ふ此の身尚ほ存するすら、只だ是れ睡著すれば已に主宰と作ること得ず、況んや地水火風分散して、衆苦熾然たらんをや。如何ぞ㋥囘換せざることを得んや、這裏に到りて方に始めて著忙す」と。㋭先師又曰く、「汝が說く底の許多の妄想絕する時を待ちて汝自ら㋬寤寐恒一の處に到らん」と。初め聞きしとき亦未だ之を信せず、毎日我れ自ら顧みるに、寤と寐と分明に兩段と作る、如何ぞ敢て大口を開いて禪を說かんや。佛の寤寐恒一と說きたまふは是れ㋣妄語なりと除非するときは、則ち我が此の病除くことを須ひず、佛語果して人を欺かずんば、乃ち是れ我れ自ら未だ了せざるなり。㋠後に因に先師の諸佛出身の處、㋷薰

乘とは、證悟し得ざるもの、即ち十信已前の凡夫の因果を信ぜざる者、三に不定乘とは、二者の中間に在りて、緣あれば證悟し、緣に逢はざれば證悟せざるもの、即ち十信位の人を指す。今は邪定の人をも悉く導きて正定乘に入らしむと、況んや不定の者に於てをや。

㋽第二節、上の文を解釋す。

㋪幻とは、夢と實と倶に無自性にて體一互融なれば、有無の解をなさざる故に幻といふ、若し幻を空無となすときは法に違すると同時に下の文に應ぜず。

㋲此は前の語を結ぶなり、夢と非夢と一如にて實を全うするの夢なれば、佛に夢あるを得るなり。

㋝第四段、自らの昔の疑の來歴の疑と同じきことを述ぶ。三節あり、初は未だ悟らざる時は、夢覺を二となすを述ぶ。

㋜之れとは來書を指す。

㋑亦は向侍郎に亦す、公は我れに問ふ、我亦圓悟に問ひしとなり。

㋺零碎とは零は落なり、凡そ數の零餘なり、碎は細破なり、即ち微細の義なり。

㋩眞價の受用にあらず。

㋥囘換とは、病苦等に牽き將ち去らるるをいふ。

㋭これ圓悟に非ずんば如何んぞ此くの如き勦絕の手を下さんや。

㋬首楞嚴經第十に云云す、其疏に云く、「想陰若し存すれば、寤めたるときは像を想ひ、寐れば即ち夢を成す、今想陰盡れば即ち夢あることなし、想は是れ夢の元なるを以ての故に、寤寐一なれば、寤寐ありと雖も、無想を以ての故に寤

風自南來といふを擧するを聞いて、忽然として礙膺の物を去却す。方に知る㋦黃面老子の說きたまふ所は、是れ㋸眞語、實語、如語、不誑語、不妄語にして、人を欺かざることを。眞の大慈悲なり、粉身沒命するとも報ずべからず、㋾礙膺の物既に除いて、方に知る、夢時便ち是れ寤時底、寤時便ち是れ夢時底にして、佛の寤寐恒一と言ふことを。方に始めて自ら知る、這般の道理拈出して人に呈似すること得ず、人に說與すること得ず、夢中の境界の取ること得ず、捨つること得ざるが如くなることを。㋻妙喜に未悟已前と已悟の後に於て異なりありや異なりなしやと問ふことを承りて、覺えず實に依つて㋕供通す。子細に來敎を讀むに字字至誠なり、是れ禪を問ふにもあらず亦詰ら見るにも非ず、昔時所疑の處を以て吐露することを免れず。㋵願くは居士試に老龐が語を將て讀く提撕せよ。但だ願くは諸の所有を空せよ、切に諸の所無を實とすること勿れと。㋟先づ目前日用の境界を以て夢の會を作し了つて、然して後却つて夢中底を將て目前に移し來らば、則ち佛の金鼓と、高宗の說を得ると、孔子の兩楹に奠られしと、㋹決して是れ夢ならじ。

亦寐の如く、寐も亦寤の如し、故に恒一といふ」と。

㋣是れ假設の言なり、寤寐元來別物なりとせばの意。除は拂除なり。

㋠後とは師の年譜に宣和七年、師三十七歲の四月、天寧に掛搭す。案ずるに、禮侍者の爲の普說に云云す。

㋷薰風自南來とは、舊唐書列傳百十五。

㋦黃面等とは、上の華嚴の說を指す。

㋸眞語等は金剛經の語。

㋾第二節、悟りて後、夢覺の一如なることを敍す。

㋻第三節、供通の意を結す。

㋕供通とは、白狀の謂なり。

㋵第五段、夢覺一如の工夫を示して前書を結ぶ。

㋟全く自心現なるが故に。

㋹全夢是れ實なるが故に。

㋞隙の傳は宋史には無し、萬姓

(ソ)陳敎授に答ふ　阜卿

(ツ)此の道の(ネ)寂寥たること今日より出でたるは無し、邪師の說法(ナ)惡叉聚の如くにして、各各(ラ)自ら謂ふ無上道を得と、咸く邪說を唱へて凡愚を(ム)幻惑す。(ウ)故に某、每々(ヰ)齒を此に(ノ)切り身命を惜まず、之れを扶持せんと欲す。(オ)萬一に衆生界中に(ク)佛種をして不斷ならしむることを得ば、亦虛しく(ヤ)黃面老子の覆蔭を受けざるなり。(マ)所謂此の深心を將つて塵刹に奉ず、是れ則ち名けて佛恩を報ずと爲すといふものならん。(ケ)然れども亦是れ時を知らず、(フ)力を量らざるの一事なり。(コ)左右は既に是れ箇の中の人なり、得て箇の中の事を說かざることを得ざるなり。筆に因りて覺えず此に及ぶのみ。

(エ)林判院に答ふ　少瞻

(テ)一語を求めて道を信ずる人と工夫を做さんと示諭せらる。既に圓覺經を看るに經中豈に止だ一語のみならんや、(ア)諸の大菩薩各自の所疑の處に隨つて問を發す、世尊、所疑に據りて一々分明に(サ)剖析す、大段分曉なり。前に(キ)給する所の話頭も亦其の中に在り。(ユ)經に云く、「一切時に居して妄念を起さざれ、(メ)諸の妄心に於て亦息滅せざれ、(ミ)妄想の境に住して了知を加へざれ、(シ)此の語最も親切。(ヱ)了知なきに於て眞實を辨せず」と。(ヒ)老漢、昔雲門庵に居せし時、嘗て之れを頌して曰く、「(モ)荷葉團々として鏡よりも團く、菱角尖々として錐よりも尖し、風柳絮を吹いて毛毬走り、雨梨花を打して蛺蝶飛ぶ」

統譜十八、張九成の友人なり。師五十七歳の作、大意は邪師の說法を憂ひて述懷するなり。

(ツ)第一段、邪說の盛なることを悲歎す。

(ネ)寂寥とは楚辭九の註に云く、「寂は人聲なきなり、寥は空虛なり」と、出は出過なり。

(ナ)惡叉聚は、楞嚴一に出づ。註に云く、「惡叉は梵語、線貫珠と譯す云云」と、應法師云く、「惡叉は樹の名、其子の形、沒食子の如し、彼國は多く聚めて之を賣る、此方の仁杏の如し、故に以て喩となす」と。今は邪師の說法連續繁多なるをいふ。名義集三。

(ラ)是れ楞嚴經十に依つて言ふ。

(ム)幻術師が愚人を迷はすが如くに。

(ウ)第二段、邪を破し佛祖の恩を報ず。

(ヰ)史記七十、張儀の傳に出づ。

(ノ)此は衆生を指す、光明とは般若の智光なり、一切衆生は本來一切種智を具するが故に。即ち種子の耀なり。

(オ)萬一とは、萬人中の一人を濟度するをいふ、此れ人を得ることの極めて難きをいふなり。

(ク)佛種は、止觀輔行一之一、佛祖統紀。

(ヤ)菩薩本行經中、佛藏經四、祇園圖經下。

(マ)楞嚴經三、同釋要鈔四に云云、深心とは、上求下化の悲智の二心は先づ妙覺性を悟りしより生ずる所、故に深心と名づく。塵刹とは、清涼の釋に云く、「心心作佛し、一心も佛ならざるなく、念念成道す、一塵として佛國ならざるなし云云」と。奉とは捧なり、此の心を微塵の刹土に捧ずるなり。

(ケ)上の說に飜轉す、大惠の謙退なり、配流の人なるが故に。

(フ)力を量らずとは、邪師、天下に滿つるが故に。

(コ)第三段、上を結す。

(エ)林は宋史に傳なし、判院は知判院か、事物紀原四に云く、「知は某官を知るをいひ、判は某官を判するをいふ云云」。此書は師五十七歳の作なり。此章は荷葉團團の頌を骨目とす。

(テ)第一段、法語を求むる意に答ふ、二節あり、初に先づ圓覺に讓る。道を信ずる人とは原文は信道人と書せり、故に或說に云く、林少瞻の妻なりと。又云く、信實道業の人の意と。或は之れ人名にして、東山外集に云ふ所の、淨信道人の事か、或は云く、尼を稱して道人といふと、未詳。今は道を信ずる諸人の意にて國譯したり。

(ア)圓覺經中の十二菩薩。

(サ)析は拆と通ずるが、拆は擘なり、開なり。

(キ)給はあてがふの義。

(ユ)第二節、經を拈じて頌することを示す、圓覺經中、淸淨菩薩章の文。

(メ)諸等の註に云く、若し妄を捨てんことを求むるは、猶ほ影を棄てて形を勞するが如し、若し眞を滅して妄を存せば、聲を揚げて響を止むるに似たり。

(ミ)妄想等の註に云く、境は心より現ず、元是れ自心なり、若し了知を加へば即ち迷現す、乃至論に云く、心、心を見ず、但だ情を生ぜざれば自然に鏡の物を照すが如し、且つ心體自ら知覺す、何ぞ了知を加へん。知の上に知を起すを加ふといふ。

と。但だ此の頌を將つて上面に放在し、卻つて經文を將つて下面に移し來らば、頌卻つて是れ經、經卻つて是れ頌ならん。(セ)試に此くの如く工夫を做して看よ、悟と不悟とを管すること莫れ。(ス)心頭熱忙することを休めよ、亦(イ)放緩すべからず。(ロ)調絃の法の緊緩其の所を得れば、則ち曲調自ら成るが如し。(ハ)歸り去つて但だ沖が輩と相親しうして、遞に(ニ)相琢磨せよ、道業辨せざる者あること無けん。祝祝。

(ホ)黄知縣に答ふ　子餘

(ヘ)書を收めてより、此の一大事因緣の爲に甚だ力むることを知れり。大丈夫の漢、所作所爲當に是くの如くなるべきのみ。無常迅速にして(ト)生死事大なり、一日を過し了れば則ち一日の好事を銷し了る、(チ)畏るべし、畏るべし。(リ)左右、(ヌ)春秋、鼎に盛なり、正に是れ作業、好惡を識らざる時、能く是の心を回して無上菩提を學すべし、此れは是れ世界の上に第一等、(ル)容れ難き靈利の漢なり。五濁界中に、甚麼の奇特の事か此の段の因緣の如きに過ぎたる有らん。色力强健なるときを趂ふて(ヲ)早く頭を回らすことは、老に臨んで頭を回らすに(ワ)比するよりは其の力量の勝ること百千萬億倍せん。老漢、(カ)私かに左右の爲に喜ぶ。(ヨ)此れより前に寫し去る法語を嘗て時々に覰看するや否や。第一に記取すべきは、心を起し念を動かし、肚裏熱忙して急に悟らんと要することを得ざれ、纔かに此の念を作さば、則ち此の念に路頭を塞斷せらるゝことを被つて、永く得悟すること能はじ。(タ)祖師云く、「之れを執して度を失すれば、必ず邪路に入る、(レ)之れを放つて自然なれば體去住なし」と。此れ乃ち祖師、心を吐き膽を吐いて人の爲にする處なり。(ソ)但だ日用、力を費す處をば做すことを要すること莫れ、此れ箇の門中、力を費すことを容れず。老漢常に人の爲に此の話を說く、「力を省く處は乃ち是れ得力の處なり」と。若し一念希望の心を起して悟入の處を求めなば大いに人の自家堂屋の裏に

(シ)此語等とは、了知を加へざれの一句を指す、此語は提撕して力を得やすきが故に、此一句義路明白の故に、此に於て着語して知らしむるなり。

(ヱ)了知等の註に云く、能知旣に寂す、卽ち眞實知なり、眞實卽ち知なり、誰か眞實を知る、眼自ら見ざるが如し云云。宗鏡錄八十二に此四句を辨す。

(ヒ)師五十五歲の時、海昏の雲門庵に在りて頌古百則を作る、竹庵珪禪師の跋あり、古尊宿錄には百則の頌古のみを載す。

(モ)荷等、聯燈二十一夾山章に出づ。八方珠玉に、「遠見山見色、近聞水無聲」と、又佛海拈に「芍藥花開菩薩面、椶櫚葉撒夜叉頭」と。これ鏡に似て鏡に非ず、錐に似て錐に非ずといふ。下の二句亦此に同じ。

(セ)第二段、工夫の法を示す。

(ス)急悟せんと要する故に熱忙す。

(イ)大品に云く、「急に道心を起す、是れ菩薩の魔事、急に道心を起さざれ、是れ菩薩の魔事の故に」と。

(ロ)四十二章經。

(ハ)第三段、同參の士を求めしむ。沖とは隆彥沖に非ず、案ずるに、普燈十八に大慧法嗣に福州の慶成沖禪あり、蓋し此を指すか。

(ニ)琢磨とは、大學傳に云く、「切るが如く、磋くが如しとは學を道ふなり、琢するが如く、磨するが如しとは自修するなり」と、詩經衞風淇澳之篇に云云。

(ホ)黄の傳、宋史になし、知縣は事物紀原六。此章は、專ら工夫の要徑を示す。

(ヘ)第一段、無常を示して向道を歎ず。

(ト)生死等は、壇經永嘉章、莊子二德充符の季逸註に、「天堂に升り地獄に入らんも知るべからざる故に」と。

(チ)此の日巳に過ぎぬれば、今亦隨つて減ず、少水の魚の如し、何の樂みかあらん、一息來らざれば黃泉萬劫故に。

(リ)第二段、此の道は盛年の時に學ぶべきを論ず。

(ヌ)鼎盛は、前漢書四十八、賈誼傳。

(ル)容は至大なり、靈利の漢故に措置する所なきなり。史記四十七。

(ヲ)早等は老少を況辨す。

(ワ)此の字、正保版に以に作るは誤、比を正となす。

(カ)心の裏に思ふを私かといふ。

(ヨ)第三段、急に悟を求むることを誡む、下二節あり、初に語を引いて示す。

(タ)祖師とは三祖信心の銘の語。

在りて坐して、卻つて他人に問うて住處を覓むるに似て異なること無し。㋡但だ生死の兩字を把りて、鼻尖兒上に㋧貼在して忘了することを要せず。時々に話頭を提撕せよ、提し來り提し去らば、生處は自ら熟し熟處は自ら生ならん。此の語已に寫して㋤空想道人の書中に在り、便ち請ふ、此の書と同じく互換して一看せよ、了得せん。

㋶嚴教授に答ふ　子卿

㋰眞實に不疑の地に到れる者は、㋒渾鋼打就し、生鐵鑄成すが如し。直饒千聖出頭し來つて無量殊勝の境界を現ずるも、之れを見ること亦見ざるが如くならん。況んや㋼此に於て奇特殊勝の道理を作さんや。㋨昔藥山坐禪する次で、石頭問ふ、「子、這裏に在りて甚麼をか作す。」

之れは一回省力ある人に就いて言ふ、之とは得力の處をいふ。底とは急緩中を得るをいふ。

㋹之とは、得力なり、臨濟曰く、「之を求むれば轉た遠く、求めざれば卻つて目前に在り」と。

㋞第二節、力を費して悟らんとを望むを誡む。力を費すとは、前の劉通判に答ふる第二書に今此の道を學する者云云と。

㋡但だ等、第四段、提撕を勸む。

㋧貼は粘置なり。

㋤空想道人は、大慧法語下に空相道人に示すの法話あり、その註に「黃道判宅なり」と、蓋し黃知縣の慈母なり。

㋶嚴は宋史に傳なし、萬姓統譜六十七、續傳燈三十四、天童應庵云云。此書は師五十七歲の作、大章は、法身邊に住して足れりとなすを呵す。

㋰第一段、奇特の會を作さざらんことを要す。

㋒渾は渾然全きなり、鋼は堅鐵なり。生鐵は鑛なり、未だ鍛錬を受けざる鐵なり。此れは本地の風光にして、意識も緣する能はず、言詮も及ばざる境界をいふ。

㋼此にとは不疑の地を指す。奇特等とは、天花亂墜、動地放光等の類にして、此れ順道法愛の境なり。

㋨第二段、奇特の會を作さざる人を引いて證とす。傳燈十四、續燈も皆藥山は石頭に嗣ぐといふ、虎關の五家辨には馬祖に嗣ぐといへり。

㋔勘辨なり。

㋗眞の無生法を得たる故に。

㋳一箇は上の無量に應じ、閑坐は、殊勝に應ず、卽ち無量の殊勝の道理を認む。

㋮第三段、邪見邪師を指出す、二節あり、初は默照邪禪。

藥山云く、「一物も爲さず。」石頭云く、「㋔恁麼ならば則ち閑坐なり。」藥山云く、「閑坐ならば則ち爲すなり。」石頭㋗之れを然りとす。看よ他の古人、㋳一箇の閑坐も也た他を奈何ともすることを得ず。㋮今時學道の士、多くは閑坐の處に在りて打住す。近日叢林㋘無鼻孔の輩、之れを默照と謂ふ者是れなり。㋫又一種の脚跟、元曾て地に㋙點せず、箇の㋓門頭戶口の㋢光影を認得して、一向に狂發して與に平常の話を說くこと得ず。盡く禪の會を作し了る有り、這般底に似たらば㋐業識を喚んで本命元辰と作す、更に是れ與に本分の事を語るべからず。㋚見ずや雲門大師、言へることあり、「㋖光透脫せざれば兩般の病あり、㋴一切處明めざれば面前に物ある是れ一、㋱又一切法空を透得すれども㋯隱々地にして㋛箇

㋘祖師の巴鼻を失するをいふ、前と別なり。

㋫第二節、奇特玄妙の處を認むる邪師を敍す。

㋙點は落著の義。

㋓門頭戶口とは、淺近の處をいふ、堂奧の處に非ず、前と異なり。

㋢光影は、夾下の業識なり。

㋐業識とは、迷妄の八識なり、今は夏の蟲、與に氷を語るべからず、井蛙、東海を語るべからざるの類なり。

㋚第四段、雲門を引いて微細の禪病を示す、二節あり、初に正しく示す。此語は、雲門錄中卷室中語要に出づ。會元十五、宏智小參に云く、「此れ皆中路に滯る故に此病あり」と。冠註に云云。

㋖光とは光影邊なり、濟北集十六に、「二光は能取所取なり」と。

㋴一切處未だ透得せざれば則ち銀山鐵壁。

㋱差別界の一切法の其儘自性なり卽空なりと。

㋯隱々は、分明ならざるをいふ、五位顯訣に云く、「隱々猶ほ舊日の嫌を懷く」と。

㋛仰山の所謂汝が解は猶ほ境に在りの處なり。

㋽古德云く、「見地未だ脫せず」と、是れなり。

㋪放過等の一句解し難し、人人眼を著けよ、既に法身を透得せば法執なく、己見なし、者裏に到れば、佛見法見を絕す、況んや世間の塵勞をや、然らば則ち大死底の境界なり、若し此くの如くし去らば、則ち氣息を絕するが故に用處なし、此に於て大活現前せざるときは、則ち不可なり。

㋲死漢の謂なり。

㋭第二節、判斷す。禪を以て名

の物あるに似て相似たり、亦是れ光透脱せざるなり。又法身に亦兩般の病あり、法身に到ることを得れども、法執忘せず、(エ)己見猶ほ存するが爲に、法身邊に坐在す、是れ一、直饒法身を透得し去るも(ヒ)放過せば卽ち不可なり。子細に檢點し來らば(モ)甚麽の氣息かあらんといふ、亦是れ病なり」と。(セ)而るに今の實法を學する者は、法身を透過するを以て(ス)極致と爲す、而も雲門返つて以て病となす。知らず法身を透過し了つて作麽生かす(イ)合き、這裏に到つて、人の水を飮んで冷煖自知するが如し、別人に問ふことを著ず、別人に問はゞ則ち(ロ)禍事なり。(ハ)所以に云ふ「眞實に(ニ)不疑の地に到る者は、渾鋼打就し、生鐵鑄成すが如し」と是れなり。(ホ)人の飯を喫して飽く時、更に人に我れは飽くか、未だ飽かざるかと問ふべからざるが如し。昔、黃檗、(ヘ)百丈に問ふ、「(ト)從上の古人、何の法を以てか人に示す。」百丈只だ(チ)坐に據る、黃檗云く、「後代の兒孫、何を將つてか傳授せん。」百丈衣を(リ)拂つて便ち起つて云く、「(ヌ)我れ將に謂へり、汝は是れ箇の人」と、(ル)這箇は便ち是れ爲人底の樣子なり。(ヲ)但だ自信の處に向つて看よ、(ワ)還つて自ら信ずる底の消息絕することを得るや也た未だしや、若し自ら信ずる底の消息絕せば、則ち自然に(カ)他人の口頭の辯を取らじ。臨濟云く、「汝若し念々馳求するの心を歇得せば、釋迦老子と別ならず」と、是れ人を欺かず。(ヨ)第七地の菩薩、(タ)佛智を求めて心未だ滿足せざる故に之れを煩惱と謂ふ。直ちに是れ儞が安排するの處なけん、(レ)一星兒の(ソ)外料を著くること得ず。(ツ)數年前に箇の許居士といふものあり、(ネ)箇の門頭戶口を認得して、書を將ちて來りて見解を呈して云く、「日用の中、空豁々地にして(ナ)一物の對待を作すなし、方に知る三界萬法一切元無なることを。直に是れ安樂快活にして放得下す」と。因に之れに示すに偈を以てして曰く、「(ラ)淨潔の處を戀ふこと莫れ、淨處は人をして(ム)困せしむ、快活の處を戀ふこと莫れ(ウ)快活は人をして狂せしむ、

相となし、低聲にして傳授するの類は、所謂自己の道理、智不到の道理なり、此等を以て計較安排し、義解卜度す、此の如くんば實法あるなり、即ち是れ法と人とあるなり。佛語は本と名相に非ず、然るに教家取つて以て名相となす、是れ猶ほ可なり、禪門祖語を以て名相となさば、甚だ不可なり。

(ス)至極趣致なり。

(イ)合とは畢竟の意なり。此の意は如何んが放過不放過の病を免れ得んや、進退此に谷まる。

(ロ)禍事は、わるいことぞの意、自得すべく、別人に問ふべき事にあらず、問は卽ち禍事なり。

(ハ)所以等は前を結ぶ。

(ニ)不疑の地は、大活現前の境界なり。

(ホ)第五段、自得の道にして人に向つて求むべからざることを論ず、三節あり、初に百丈を引く。

(ヘ)洪州百丈山の懷海禪師なり、傳燈六、聯燈七。

(ト)從上等、傳燈九、黃檗章。

(チ)坐に據る、嚴敎授、若し此田地に到らば則ち是れ光影なりや否を疑はざるなり。

(リ)拂は褰げるなり、揭げるなり。

(ヌ)我れ云々これ生鐵鑄成すの處

(ル)遮箇とは、大慧の別語なり、據坐を指す。

(ヲ)第二節、臨濟を引く。

(ワ)尙ほ求心ある故にいふ。

(カ)光影なりや否や、須らく自ら知るべし、辨は口頭の辨別なり、辯舌をいふにあらず。

(ヨ)第三節、七地の菩薩を引く。八地巳上は自心を見ること明かにして、純無漏智相續すれば、上に攀仰するなく、下、巳躬を絕す。

(タ)佛智等、華嚴三十七卷、十地品、成唯識論九。佛智を求むるすら尙ほ許さず、之を拂ひ去る外、少分の安排求心を許さざるなり。

(レ)一星兒とは少分の義。

(ソ)外料とは、本分外の求心これなり、意は一事に著することを得ずと、料は度なり、計なり。

(ツ)第六段、許居士に示す所の偈を擧げて光影を勦絕す。

(ネ)此れ業識を弄するなり。

(ナ)迷妄の外に覺悟の心ありといはば、是れ對待なり。

(ラ)淨潔の處とは、法身邊をいふ、上の書に云ふ空豁々地の處に當る。傳燈二十九、寶誌の十二時の頌に、「淨潔を作すも却つて神を勞す」と。これ不淨潔に對する淨潔なれば久しからずして疲勞す、淨不淨を忘する便ち是れ眞箇の淨潔なり。

(ム)困の字は罔の字の形誤か、何

㋼水の器に任せて方圓短長に隨ふが如し。㋨放下と不放下と、更に請ふ細に思量せよ、三界と萬法と㋔何有の鄕に歸するに匪ず。㋗若し只だ便ち恁麼ならば、㋳此の事大いに乖張せん。爲に報ず許居士、㋮家親、禍殃を作す、㋘千聖の眼を豁開せよ、頻に禱禳することを須ひざれ」と。㋫偶々晨に起きて稍涼し、㋙驀然として記得す、子卿道友、初め箇の入頭を得る時に、倘ほ恐らくは是れ光影ならんかと㋓疑はゞ、遂に從來疑ふ所の㋢公案を將つて㋐挖照して、方に㋚趙州老漢敗闕の處を見ん、覺えず、筆に信せて葛藤すること如許す。

㋖張侍郞に答ふ　子韶

㋴左右、自らの㋱所得の瞥脫なる處を以て極則と爲す。纔かに理路に涉り、泥に入り水に入りて人の爲にする底を見ては、便ち掃除して蹤跡を滅せしめんと欲す。㋯某が集むる所の正法眼藏を見て便ち云ふ、「臨濟下に㋛數箇の庵主の㋽好機鋒なるあり、何ぞ收め入れざる。㋪忠國師の如き㋲義理の禪を說いて人家の男女を敎壞す、決定して刪るべし」と。㋝左右道を見ること此くの如く諦當にして、而して忠國師の㋜老婆禪を說くことを喜ばずして、淨々潔々の處に坐在して、只だ擊石火閃電光の一著子を愛して、㋑此の外は一星兒の㋺別の道理を容れず、眞に惜しむべきのみ。故に㋩某、力を盡して㋥主張す、若し法性寬からず、波瀾闊からざれば、佛法の知見亡せず、生死の命根斷ぜずんば、則ち㋭敢て此くの如くに㋬四楞著地に泥に入り水に入りて人の爲にせざるべきなり。㋣蓋し衆生

となれば、此偈は全篇、陽韻を押す、然るに但だ此一字元韻なればなり。若し今の困字誤らずとせば、相對的の淨潔地は人を囚へて自由を得ざらしむるが故に困といふなり。

㋒快活は、上書に云ふ所の安樂快活の處なり。

㋼水等とは、任運の應物は淨不淨、快不快に頁かず、我れに於て一物なき故に、佛身は無身の故に一切に應ぜずといふことなきをいふ。

㋨放下等は、居士、放得下といふ、若し放下の物あらば則ち眞の放下にあらず、子細に看よ、恐らくは空豁々地を守るならん。

㋔何有鄕とは、莊子に曰く、「無何有の鄕、廣莫の野云々」と。此には空無の義なり、意は三界萬法は一向に空無に非ずとなり。圓覺經二。

㋗若し等は、居士の無の見を責む。

㋳此事とは、一大事なり、意は萬法は無なりと云はゞ、此の一大事と相乖く、此の事は空有の差別を絕したるが故にと。

㋮家親等とは、淨潔、快活等は本是れ屋裏の物にして他物にあらず、然るに之に愛着せば、却つて祟りをなすと。

㋘千聖等とは、己が眼正しき時は、頻りに法執、己見を禱禳するを須ひずとなり。禳は鄭玄曰く、「變異を卻くるをいふ、禳は攘なり祛逐なり」と。

㋫第七段、此書を作る所以を敍す。

㋙驀等は、大惠、趙州老漢敗闕の處を見るの語を記得す。驀然とは、所由なき思出なり。下の筆に信すの語に應ず、文意は敎授の悟後の事にして、彼れをして聖胎長養せしめん爲に此書を作る、道友已下が記得の語なり。

㋓疑は子卿自ら疑ふなり。

㋢公案とは狗子の話なり。

㋐挖照は、引き合すの謂なり、敎授に系る。

㋚敗闕の處とは、宗師、未悟の人の爲に一言半句を垂るる爲、人の手段を悟後に之を見れば則ち大小の敗闕なり。

㋖張九成、字は子韶、無垢と號し、又橫浦居士と號す、大惠に嗣ぐ、八歲にして六經を點誦す、諸老之を嘆異して奇童と曰ふ、未だ第せず、因に客、楊文公、呂徽仲の諸名儒の造る所の精妙なるは皆禪學に由ると談ず、是に於て心に之を慕ひ、寶印明禪を淨慈に訪ひ、入道の要を請問す、明、之を諭し復た柏樹子の話を擧し、時時に提撕せしむ、公、一夕厠に如き蛙鳴を聞いて釋然として契入す、偈あり云く、「春天月下一聲蛙、撞破乾坤共一家、正恁麼時誰會得、嶺頭脚痛有玄妙。」宋史列傳百三十三、萬姓統譜三十九に禮部侍郞となす、聯燈十八、會元二十。此書は師六十一歲の作。大意は、己見を以て猥りに古德を批判することを誡む。

㋴第一段、正法眼藏に理路禪を收むることを論ず、之に三節あり、初に頓機を破す。

㋱所得とは、大悟の處をいふ。瞥脫とは、擧起の處に向つて承當する靈利の漢をいふ。

㋯第二節、他の正法眼藏を難ずるを述ぶ。師五十九歲の時、衡州に於て正法眼藏を編む。

㋛數箇等とは、傳燈十二、臨濟下に、虎溪、覆盆、桐峰、杉洋の四庵主を列ぬ、皆機緣あり。

㋽石火電光の頓機をいふ。

の根器同じからざる故に、從上の諸祖各門戸を立して施設し、衆生の機を備にして機に隨つて㋠攝化す。故に㋷長沙の岑大蟲言へるとあり、「我れ若し一向に宗教を擧揚せば、㋦法堂前須らく草深きこと一丈にして、人を傭うて看院せしめて始めて得べし」と。既に這の㋸行戸裏に落在して、人の喚んで宗師と作さるれば、須らく衆生の機を備にして法を說くべし。擊石火閃電光の一著子の如きは、是れ這般の根器にして方に承當し得ん、根器不是なる處に之れを用ひば、則ち苗を揠くごとし。㋾某も豈に瞥脫の一椎の便ち七穿八穴にして、是れ性燥なることを曉らざらんや。所以に正法眼藏を集むるに門類を分たず、雲門、臨濟、曹洞、潙仰、法眼宗を問はず、但だ正知正見の、以て人をして悟入せしむ

㋪忠國師は傳燈五に出づ。
㋲義理禪は理致なり、張侍郎は機關向上を極則となす、國師の眞箇は理致と向上を分たず、故に若し分つべきあらば則ち眞箇の禪にあらず。
㋝第三節、忠國師を主張す。
㋜老婆禪とは、老婆の叮嚀なるを繞路に禪を說くといふに喩ふ。臨濟錄に曰く、「普化手を以て指して曰く、河陽は新婦子、木塔は老婆禪、臨濟は小廝兒」と。
㋑頓機の外なり。
㋺別等とは、理路に涉り、泥に入る水に入るをいふ。
㋩某とは大慧なり。
㋥主張は總べ主るをいふ、これ忠國師を助援するなり。法性は智德なり。
㋭敢は果敢決斷なり、意は知見未だ亡ぜず生死未だ斷ぜざれば唯だ他人を誤るのみにあらず、自ら手を傷つけん、國師にあつては然らざるなり。
㋬四楞著地とは、向上の見解を放下して人の爲にし物を接するをいふ。
㋣第二段、總じて應機不同なることを論ず。根器とは喩に約す、木の根に大小あり、器に方圓淺深あるが故に、衆生の智惠性質に利鈍大小の差別あるをいふ、又は根は能生の義にて衆生天眞の性に新しき智を生じ、本具の靈智を開發すべき能力あるを喩ふなり。
㋠攝化は引攝化度なり。
㋷長沙は、傳燈十、景岑禪師章、南泉普願禪師の法嗣なり、岑大蟲とは指呼名なり、虎を大蟲といふ、碧巖三十六則評、干寶搜神記二。
㋦說法、聽法の人なきをいふ。
㋸行戸裏とは、商買列肆をいふ、行とは魚行酒肆の行の字の義

べきある者をば、皆之れを收めたり。忠國師、大珠の二老宿を見るに、禪に衆體を備ふ、故に收めて以て此の一類の根器の者を救ふ。左右の書來つて云く、「決定して删るべし」と、公の意を觀るに正法眼藏盡く諸家の門戸を去除して、只だ公の見解に似たる者のみを收めば、方に是ならん。若し爾らば則ち公自ら一書を集めて大根器の者を化せんに、何の不可かあらん。必ずしも妙喜をして、公の意に隨つて之れを去けしむるを須ひざるべきなり。若し㋻忠國師は拕泥帶水の老婆禪を說くがゆゑに、便ち後を絕すと謂はゞ、則ち㋕巖頭、睦州、烏臼、汾陽の無業、鎭州の普化、定上座、雲峰の悅、法昌の遇の諸大老の如き、兒孫地に滿つべきに、今亦寂然として化を主る者なし。諸公豈に是れ泥を拕き水を帶びて、老婆禪を說かんや。㋵然れども妙喜は國師を主張し、無垢は破除す。㋟初より相妨げざるなり。

㋹徐顯謨に答ふ　雅山

㋞左右頻に㋡聲を妙喜に寄す、㋧想ふに只だ是れ㋤水牯牛を調伏し、這の㋶猢猻子を捏殺せんことを要するのみ。㋰此の事は久しく叢林を歷て飽

なり、此は宗師、刹竿を立て說法する市の如きをいふ。
㋾第三段、正法眼藏を撰述する大意を述ぶ。
㋻第四段、老婆禪は兒孫を絕すといふを破す。
㋕睦州は傳燈十二。烏臼は傳燈八。無業は傳燈八。普化は傳燈二〇定上座は林間錄に云く、「臨濟會中に龍象と稱す」と、傳燈に載せず、廣燈十三に之を載す。巖頭は全豁禪師なり。睦州は臨濟の法嗣にして睦州の龍興寺に居す。烏臼は馬祖道一の法嗣なり。無業も馬祖の法嗣、普化は盤山寶積禪師の法嗣にして佯狂、言を出すに度なし、盤山順世に暨んで北行して行化し一鐸を振つて云く、「明頭來や暗頭來や云云」と、近くは臨濟錄に出づ。雲峯の悅は續燈八。法昌遇は同六に載す。

まで知識に參ずるに在らず、只だ一言一句の下に於て直截に承當して㋒之遶を打せざることを貴ぶのみ。實に據りて論ぜば間に髮を容れず、已むことを得ずして箇の㋼直截と說くも已に是れ紆曲にし了れり。箇の承當と說くも已に是れ嗟過し了れり。況んや復た㋨枝を牽き蔓を引いて、㋔經を擧し敎を擧し、理を說き事を說いて究竟せんと欲するをや。㋗古德云く、「但だ纖毫あれば卽ち是れ塵」と。㋳水牯牛未だ調伏せず、猢猻子未だ死せずんば、縱ひ恒沙の道理を說き得るも、並びに我が一星兒の事に干らず。㋵然れども說き得るも說き得ざるも、㋘亦外邊の事にあらず、見ずや㋫江西の老宿、言へることあり、「說き得るも亦是れ汝が心、說き得ざるも亦是れ汝が心なり」と。㋙決して直截に擔荷せんと欲せば、㋓佛を見、祖を見ること㋢生寃家の如くにして、方に少分の相應あらん。此くの如くに工夫を做すこと日久しく月深ければ、心を起して悟を求むることを著さずとも、水牯牛も自ら調伏し、猢猻子も自ら死せん。記取せよ記取せよ。㋐但だ平昔の心意識の湊泊すること得ざる處、取ること得ざる處、捨つること得ざる處に向つて、箇の話頭を看よ。僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ

㋵第五段、機を轉じて蓋覆却す。若し此の一轉なくんば、則ち大惠も五代の檢點を免れざるなり。
㋟眞理は主張と破除とに相あづからず、或は云く「主張も破除も俱に眞性の作用なるが故に」と。而し初義を可とす。
㋹徐の傳、宋史になし、萬姓統譜七、顯謨は專文遺集二。此書は師五十八歲の作。大意は心意識を捏殺するの肝要なることを示す。
㋷第一段、來書の意を述ぶ。
㋡聲を寄すとは、音問をいふ。
㋭想ふに道を問ふ爲にあらず、但だ妄識を捏殺し進道を得んが爲のみとの意か。
㋤水牯牛等とは、福州の大安の緣、前に見ゆ。
㋶猢猻子は、妄識に比す、傳燈六、宗鏡錄三。

佛。」門云く、「乾屎橛」と。看る時、平昔の聰明靈利を將つて思量し卜度することを用ひざれ。心を擬して思量せば、十萬八千も未だ是れ遠からじ、㋚是れ思量せず計較せず、心を擬せざる、便ち是なること莫けんや。㋖咄、更に是れ箇の甚麼ぞ、㋴且く是の事を置く。

㋱楊敎授に答ふ　彥候

㋯左右强項なるの中に却つて不可思議底の柔和なるありて、一言の下に千了百當することを致す、此の事殊勝なり。㋛若し間强項の中に於て幾く人を打發し得るにあらずんば、佛法豈に今日に到らんや。㋽般若の根性あるに非ずんば則ち是くの如くなること能はず、㋪盛事盛事。㋲來年の春夏の間に㋝無底の船に棹し、㋜無孔の笛を吹き、㋑無盡の供を施し、㋺無生の話を

㋰第二段、强ひて言句を求むるに及ばざることを論ず。
㋒之遶は迂曲の義、普燈二十五。
㋼直截は師家にかかり、承當は學者に系るなり。
㋨言句か葛藤といふ、故に枝蔓といふ。
㋔經は黃卷赤軸、敎は十二分敎。
㋗傳燈二十九、寶誌和尚の十二時の頌。
㋳水牯牛とは、上の無明妄識未だ滅せずてふに應ず。
㋮第三段、自心を信じて、他に求めざることを示す。
㋘說得底これ汝が心なるが故に。
㋫江西は馬祖なり、四家錄一。
㋙外に向つて心を求むるは紆曲し了れり。
㋓佛等は、傳燈十七、碧巖四。下の文の如し。
㋢生等は外に向つて馳求せざるを喩ふ、生とは熟せざるなり、佛祖の言敎は皆自心の中に在るなり。
㋐第四段、本參を授けて提撕せしむ。
㋚是れ等とは、上に擬心思量す、故に恐らくは是を認む、故に此くの如くに言つて一撥す。
㋖咄は、不思量底是れ什麽ぞと咄破す。
㋴且く等とは、此に於て進まざれば則ち大惠、之れを奈何ともするなし、然らば則ち是の事を置くと、除公は信心薄き人なる故に。
㋱楊の傳は宋史になし。
㋯第一段、參許す、强項は俗に所謂情强きなり。後漢書列傳五十七、十八史略三。意は此の如き强項底には說法敎誨すれども、多くは信ぜず、却つて此の柔和ありて、我慢を摧くことを致さんと。
㋛若し等とは先づ佛法の靈驗を

説いて、㋩無窮無始不有不無の巴鼻を了せんと要することを欲すと示諭せらる。㋥但だ請ふ、來りて這の㋭無面目漢と商量せよ、定めて㋬這の話を錯り了らじ。㋣又道號を需めらると承はる、政に㋠相塗糊せんと欲す、快然居士と稱すべし。㋷故に眞淨老人云く「快然たる大道只だ目前に在り、㋦縱横十字、擬して留連す」と。便ち是れ此の義なり。㋸某、只だ長沙に在つて久住の計を作す、左右、他日果して此れに從ひ來らば、則ち㋾林下寂寞たらざるべきなり。

㋻樓樞密に答ふ

㋕識らず別後、日用緣に應ずるの處、外境の所奪を被らざるや否や、㋵堆案の文を視て能く㋟撥置するや否や、物と相遇ふ時、能く㋹動轉するや否や、㋞寂靜の處に住して妄想せざるや否や、箇の事を體究して雜念あること無きや否や。㋡故に黃面老子の言へることあり、「心妄に過去の法を取らず、亦未來の事に貪著せず、㋧現在に於て住する所あらず、三世は悉く空寂なりと了達せよ」と。過去の事、或は善或は惡、思量することを須ひざれ、思量すれば則ち道を障ふ。未來の事、計較することを須ひざれ、計較すれば則ち狂亂せん。現在の事面前に到らん、或は逆或は順、㋤意を著くることを須ひざれ、意を著くれば則ち方寸を擾さん。但だ一切、時に臨み緣に隨つて酬酢せば、自然に這箇の道理に合著せん。㋶逆境界は打し易く、順境界は打し難し。我が意に逆ふ者には只だ一箇の㋰忍の字を消ひて㋒定省すること少時すれ

㋓般若等はこれ所被の楊敎授の機を贊す。
㋪盛事云々とは、俗にいふめでたいぞなり。
㋲來年等とは第二段、會過せんことを許す。
㋝無底等は、傳燈十六道遙山忠の章。
㋜無孔等は、碧巖四十一則の評。
㋑無盡等とは、法供養は無盡なるが故に、蓋し書中に齋を設くといひ來る故に、此くの如く言ふなり。維摩經、香積品。
㋺無生等は、龐居士錄下。
㋩無窮は未來窮盡なきをいひ、無始は過去始めなきをいふ。
㋥但だより、大慧の判語なり。
㋭無面目漢とは、大慧自ら稱す、これ大いに自信自覺あるを暗示せり。商量とは、事苑に云く「商賈の量度の如し、中平を失はず、以て各其の意を得せしむなり」と。
㋬這の話とは、來書の無窮無始の話を指す、意は這の話を決了することを錯らずとなり。了は了畢をいふにあらず。
㋣第三段、道號を授く。
㋠塗糊とは碧巖不二鈔に云く、「模糊の義」と、意は那一人もと名なし、今故らに之に名づく、便ち他を染汚するなりと。文面は大惠謙退の辭。
㋷眞淨の語を引いて快然の字を證す、其錄に出づ。
㋦縱横等は、大道の語より出づ、意は逆違自在なるをいふ。留連は、留滯の義、意は當人自ら擬義し、自ら留滯するなりと。
㋸第四段、相招くの情を露はす。長沙は師の衡州にある時なり。廣輿記十五。
㋾寂寞等とは、相與に道話を打するが故になり。

㋻樓の傳は、宋史列傳百三十九、萬姓統譜六十二。師六十九歲の作、此章は專ら順境界は打し難く逆境界は打し易きことを示す。
㋕第一段、平生の行履を問ふ。
㋵堆案とは堆は滿なり、土を聚むるなり、うづたかし、案は机なり。樞密院の職は重く、天下の公事多く、武事此れより出づ、故に文簿も亦案上に堆きなり。
㋟撥置は、事畢りて能く置ける物を收むるをいふ。意は安置せる文簿等を能く安置し收拾するや否やとなり。
㋹動轉等とは、變動究轉のいひなり、物に應じて滯著せざるなり。華嚴六十三入法界品。
㋞寂靜等とは、寂靜の處を認めて是となさば、便ち是れ妄想なり、或は云く、坐禪して紛然として妄想起らざるや否やと、前義を可とす。
㋡第二段、三世空寂なることを示す。
㋧現在の事とは、上に能く撥置するや否や、能く動轉するや否やといふの類なり。
㋤意を等とは、此れ懶融の所謂恰恰として用心する時、恰恰として無心にして用ふるの謂なり。
㋶逆等は第三段、順境は打し難きを述ぶ。巳下は遠法師の語意を帶用す、人天寶鑑を見よ。打の字は上には一切の事を成するをいふ。今此に境を轉ずるを打といふ。
㋰消の字は用なり、忍とは遺敎經に曰く「忍の德たること持戒苦行も及ぶこと能はず云云。」
㋒定省とは、字は曲禮に出づ。今此には心を定むるをいふ。省は論語に所謂三たび吾が身

ば便ち過ぎ了る。順境界は直に是れ儞が回避する處なし。㋭磁石と鐵と相遇ふて彼此覺えずして合して一處と作るが如し。無情の物すら尚ほ爾り、況んや㋨現行の無明の全身、裏許に在つて活計を作すものをや。此の境界に當つて若し智慧なくんば、覺えず知らずして㋔他の羅網に引入せらるることを被つて、㋕卻つて裏許に向つて出路を求めんと要す、亦難からずや。㋳所以に先聖云く、「世間に入得すれば㋮出世餘なし」と、便ち是れ這箇の道理なり。㋘近世に一種の修行に方便を失する者あり、㋫往往に現行の無明を認めて世間に入るとなして、便ち出世間の法を將つて㋙強ひて差排して出世餘なきの事と作す、悲しまざるべけんや。夙に㋓誓願あり、即時に㋢識得破して主と作り得て、㋐他の

を省みるの謂にして、省察をいふ。

㋭宗鏡錄五十三に密嚴經を引けり。

㋨現行とは、顯現行起なり、無明とは不了一法界の惑とて、本有の面目及び吾人の眞智を掩へる煩惱を指す、即ち現在吾人の上に現起して吾人の總てを支配せる煩惱の謂なり。全身とは全體に同じ。裏許とは順境界を指す。

㋔他とは順境を指す、羅網とは生死の業報の脫し難きに喩ふ。若し之を覺知せば則ち出路を得べきなり。

㋕卻つて等は、富貴高名の中に居して出離を求めんと欲し、卻つて裏許に向つて出路を求めんと要す、甚だ易からずとなり。亦難からずやとは、一說は前の如し、又は、生死界に卽して出離を求めんと要す、亦難からずやの義もあり。

㋳所以に等とは、上に既に寶積經四、智度論三十九等を引いて之を辨ぜり。

㋮出世餘なし等とは、全備の義、意は覺知するを以ての故に、順逆の中に於て轉ぜられず、即ち離衰等の八風を把得して用ひて名字に著せず、直に本體を把得して用ふ、故に出世無餘といふ、是れ大力量の人。

㋘近世は第四段、世間即出世間といふの邪解者を破す。方便とは善巧方便を得て世間の實相を知る人は、世間の縛を被らず、故に知論四十三に云々す、今は之に反す。

㋫往往等とは謬解して、現行の無明三毒を以て直に佛法となす。又染着を離れ、如實に世間の相を知るを、入得すとい

牽引を被らざるを除く。㋚故に淨名言へることあり、「佛、增上慢の人の爲に㋖婬怒痴を離るるを解脫と爲すと說きたまふのみ。若し增上慢なき者には、佛は㋴婬怒痴の性即ち是れ解脫なりと說きたまふ」と。若し㋱此の過を免れ得ば㋯逆順の境界の中に於て起滅の相あることなうして、始めて增上慢の名字を離れ得ん。恁麼ならば方に世間に入得すと作すべし、㋛之れを有力量の漢と謂ふ。㋽已上の所說、都て是れ妙喜が㋪平昔に經歷過せし底なり。即今の日用も亦只だ此くの如くに修行す。願はくは公、色力の强健を㋲趁ふて亦是の三昧に入れ、此の外は時時に趙州の無字を以て提撕せよ、久久にして純熟せば驀然として無心にして㋝桼桶を撞破すべし。便ち是れ徹頭の處なり。

ふ、然るに智論に所謂五陰の性本來空寂なりと徹見せず、世相に認着して而も入るとなす、謬れり謬れり。

㋙これは實に其の道理なきをいふ。

㋓煩惱無盡誓願斷なり。

㋢三毒何ものぞ、業何物ぞと、其實相を識得すれば、決定して經となり得るなり。

㋐他とは現行の無明なり。

㋚第五段、淨名經を引いて上の義を證成す。增上慢とは、未得を已得といひ、未證を已證といふ人。法華方便品、楞嚴經十の注。

㋖修惡即性惡なれば、實は離るといふも、即してといふも同じ、而し婬怒痴を認着して其性に達し得ざれば法に背く、故に今離るといふ、認着を離るれば諸法實相を知る是れ眞の解脫なればなり。

㋴諸法無行經上に云く、「淫欲即ち是れ道、恚痴も亦復た然り云々」と。

㋱此過とは三毒無明の過失なり。

㋯逆順の境界に入りて、逆順の實相皆空なりと見得せば則ち逆順の中に於て……、起滅とは憎愛をいふ。

㋛世間に於て、出世間を打得する故に。蓮忍法師の安心法門。

㋽第六段、自行を引き證として勸勉す。

㋪學地の時をいふ。即今等とは、大惠、昔しは勸めて精神せしも、今は已に熟す、故に自然に行ずるなり、大安の所謂露逈逈地にして遂に亦去らざるなり。

㋲趁とは隨逐のいひなり。

㋝桼桶等は疑團の破るるをいふ。

㋦此章は、古德の痛處を擧げて

(ヌ)又

(イ)日用の工夫は前書に已に葛藤すること少からず、但だ只だ舊に依つて(ロ)不變不動にして物來らば、則ち之れと酬酢せよ、(ハ)自然に物と我と一如ならん。(ニ)古德云く、「放曠として其の去住に任せ(ホ)靜鑑して其の源流を覺せよ、證を語るときは則ち人に示すべからず、理を說くときは則ち證に非ざれば了せず」と。自證自得の處は拈出して人に呈似すること得ず、唯だ親證親得したる者は(ヘ)略目前の些子を露せば、彼此便ち默默として相契ふ。(ト)此れより人の謾を被らず、(チ)錯つて工夫を用ひずといふことを示諭せらる。(リ)大槩已に正しく欛柄已に得たり。(ヌ)善く牛を牧ふ者の如き、索頭常に手中に在らば、爭か人の苗稼を犯すことを得ん。(ル)驀地に索頭を放卻すれば、鼻孔(ヲ)撈摸する處なく、(ワ)平田の淺草、縱橫するに一任す。(カ)慈明の老人の所謂四方に放ち去つて(ヨ)攔遏すること休れ、八面拘ることなく意に任せて游ぶ、收めんと要すれば只だ索頭に在つて(タ)撥すと。未だ是くの如くなること能はずんば、(レ)當に緊しく索頭を把りて且く與に順に摩捋すべし。(ソ)淹浸の工夫既に熟せば(ツ)自然に意を用ひて隄防することを著ざれ。(ネ)工夫急なるべからず、急なるときは則ち(ナ)躁動す。又緩なるべからず、緩なるときは則ち昏怛す。忘懷し、著意せば俱に蹉過せん。(ラ)譬へば劍を擲つて空に揮ふが如し、(ム)及ぶと及ばざるとを論ずること莫れ。(ウ)昔、嚴陽尊者、趙州に問ふ、「一物不將來の時如何ん。」州云く、「放下着。」嚴陽云く、「一物既に不將來、箇の甚麼をか放下せん。」州云く、「放不下ならば擔取し去れ。」嚴陽、言下に於て大悟す。(ヰ)又僧あり、古德に問ふ、「學人、奈何ともすること得ざる時如何ん。」古德云く、「老僧も亦奈何ともすること得ず。」僧云く、「學人は學地に在り、故に是れ奈何ともすること得ず、和尚は是れ大善知識なり、甚麼と爲てか亦奈何ともすること得ざる。」古德云く、「我れ若し奈何ともすること得ば則便ち儞が這の奈何ともせざることを拈

深錐を下す。

(イ)第一段、來意を承知す。

(ロ)境に對して轉ぜられざる也。

(ハ)法即ち人、人卽ち法にして法と人と融合せるを一如といふ。聯燈三、嵩山破竈章、碧巖十の評に云々。

(ニ)第二段、自得自知を論ず、自得の境は別人に問はざる處に在り、然れども知識の證明を受けずんばあるべからず、故に之を引く。古德とは、淸涼鎭國大師澄觀なり、傳燈三十五に詳なり。放曠は、物に拘はらざるなり。

(ホ)靜鑑は靜寂鑑照なり、所謂止觀なり、これ自悟の境界をいふ。源流は本末又は體用なり、其の源を靜にし、其流を鑑みるのいひなり。

(ヘ)略はすこしくの意。

(ト)第三段、牧牛の法を敎ふ。謾は一に瞞の字に作れり。

(チ)錯り等とは人の射を學ぶが如し、的を得ずんば虛棄となす、今は既に見得するが故に錯らざるなり。

(リ)大槩の上に「公」の字を加へ見よ、大槪は大抵なり、正は眞正なり。

(ヌ)善く等は、遺敎經に云々。

(ル)驀地等とは、此れより前きは心の師となりて、心を師とせず、即ちいまは心の師となつて自然に自由にして觸犯せずとなり。鼻孔は、牛の鼻孔に曲木を施す故に爾かいふ。

(ヲ)撈摸とは繩索を拈却す、故に沒可把、沒巴鼻の境界、次第に純熟す、好箇の境界なり。

(ワ)平田は碧巖八十一則の垂示。

(カ)慈明は正法眼藏、僧寶傳二十一、慈明。牧童の歌を作つて曰く云々。

(ヨ)從前は他の苗稼を犯さんことを懲る、今は已に純熟する故に、放去すと雖も犯さざるなり。

(タ)撥は索端を撥くるなり。

(レ)當等とは心の師となりて、放逸せしめざるなり。摩捋はなでおろさなり、此は心を安住するをいふ、若し逆毛を摩捋すれば心動亂するが故に。

(ソ)淹浸は打成一片の工夫を喩ふ。

(ツ)自然に苗稼を犯さざるなり。隄防とは心を制禁して放逸せざらしむるをいふ。

(ネ)第四段、直前の工夫を示す。

(ナ)躁動は鬧亂なり、昏怛は心傷き黑漫漫地の謂なり、即ち掉擧昏沈をいふ。

(ラ)譬等は傳燈七盤山章。意は無心にして任運に物に應じて誤らざるをいふ。

(ム)及と不及とは、物に應ずると物に應ぜざるとなり、意は是非得失に管せざるなり。管せ

卻せん。」僧、言下に於て大悟す。㋨二僧の悟處卽ち是れ樓樞密が迷處なり。樓樞密が㋔疑處は卽ち是れ二僧の問處なり。㋗法は分別より生じて還つて分別より滅す、㋳諸の分別の法を滅すれば、是の法は生滅なし。㋮細かに來書を觀るに、病已に去り盡きぬ、㋘別の證候も亦生ぜじ、㋻大段相近し、亦漸く力を省けり。請ふ只だ省力の處に就いて、放つて㋙蕩蕩地ならしめよ。忽然として㋓啐地に破し、曝地に斷せば便ち了せん。千萬之れを勉めよ。

㋢曹太尉に答ふ　功顯

㋐某、年運つて往くと雖も、敢て勉強して力めて此の事を以て衲子の輩と激揚せずんばあらず。㋚一日㋖粥後に牌子を撥して、一百人を㋴輪して入室せしむ。間㋱命を負ふ者鉤に上

ざれば自然に恰好なり。此は工夫の用心を示し、有心無心に墮せざらしめんが爲にいふ。

㋒第五段、款に依つて案を決す、傳燈十一。引く意は、一物不將來といふ、此には不變不動といふ、其見解相同じきが故に之を引く。此は大惠、樓を贊して言ふ。嚴陽は趙州從諗禪師の法嗣。

㋼又僧とは、傳燈十六。雲蓋山子元禪師なり、聯燈二十二に云云。

㋨二僧は悟り去る、樓は未だ悟らず、故に迷處といふ。

㋔疑處とは、意は他に對して不變不動の地位に至る、此れ是なりや否やと問ふ、これ光影邊の第二病の處に到り得る故に。

㋗之れは學者を激發する親切の語なり、金剛三昧經下の文、法とは一切萬法なり、卽ち萬法は妄分別より生ず、生滅に別物の生滅なし。

㋳諸法は元來生滅にあらず、然るに是か不是かと疑ふ便ち是れ妄分別に依る、不變不動は是にあらず不是にあらず、之に依つて修し去らば、自然に本分地に到り得ん、不變不動の處卽ち是といふにあらず。

㋮細等、第六段、得道は遠にあらざることを示して、勉を勸む。

㋘證候とは徵候に同じきか、これ病に從へて云ふ、醫して不變不動の處に到る故に餘の毛病生ぜず、然るに是を認めて可となさば、却つて大病とならん。

㋻大段は大抵の樣子なり、得道に近づくをいふ。

㋙蕩蕩は、法度敗壞の貌。

㋓啐は驚なり、上に出づ。

り來るあり、亦㋯人を咬む師子あり、此の法喜禪悅を以て樂みと爲して殊て倦むことを覺えず、亦㋛造物に憐まるるのみ。㋓左右は福慧兩ながら全し、日に㋪至尊の側に在りて、而して意を此の段の大事因緣に留む、眞に不可思議の事なり。㋲釋迦老子曰く、「勢ありて臨まざること難し、豪貴にして道を學ぶこと難し」と。百劫千生、曾て善知識に承事して般若の種子を種ゑ得ること深きに非ずんば、焉んぞ能く是くの如くに信得及せんや。只だ這の信得及する處、便ち是れ成佛作祖する底の基本なり。願くは公、只だ信得及するの處に向つて覰捕せば、久久にして自ら透脫せん。㋝然も第一には意を著けて安排して、透脫の處を覓むることを得ざれ。若し意を著けば則ち蹉過せん。㋜釋迦老子

㋢曹功顯の傳は宋史列傳百三十八。太尉は南宋第二主、高宗の時に此官を設く、事物紀原四、初學記十一、下を安んずるを尉といふ、武事を掌る官なり。此章は始め居士の志を讚し、中間に維摩經を引き、後に邪見を擧げて居士の爲にす。師六十九の時の作なり。

㋐第一段、自らの老いて化度を廢せざることを敍す。此時は師、育王山に住す。

㋚一日とは或る日なり。

㋖禪家にては朝の食事は粥を喫する故に之を粥座と稱す。牌子とは、禪門寶訓に云く、「古人入室には、先づ牌を掛けしむ云々」。「入室」と大書せし札を掛くるをいふ。

㋴輪とは、上位より漸次下位に至りて輪轉連接して絕えざること車輪の如きをいふ。

㋱命を負、命は命令、負は孤負の義なり、謂く、太公望、釣に直鉤を以てして謂く「左せんと欲せば便ち左せよ、右せんと欲せば便ち右せよ、命を負ふ者は鉤に上り來るなり」と。今の意は師家は、勘辨の機に乘ぜしむるを欲せず、左せんと欲せば左せよと、然らば學者之に乘じ來るなり。

㋯人を咬むは、學者、勘辨の機に乘ぜざるなり。傳燈十一、趙州。

㋛造物とは、猶ほ天公といふが如し。

㋓第二段、道を信ずるの深きを歎ず、意は佛者は福慧長ずるをいふ。優婆塞戒經二、莊嚴品。

㋪至尊とは、天子を指して言ふ、是れ福全なり。意を此の段等とは、慧全を言ふ。

㋲釋迦等とは、四十二章經の文なり。威勢ありて而も之を抑

又曰く、「佛道は不思議なり、誰か能く佛を思議せんや」と。(イ)又佛、文殊師利に問うて曰く、「汝不思議三昧に入るや。」文殊曰く、「弗也、世尊、我れ即ち不思議ならば、心の能く思議する者あることを見ず、云何んぞ而も不思議三昧に入ると言はんや。」我れ初め發心して(ロ)是の定に入らんと欲す、(ハ)如今思惟するに實に心想の而も三昧に入るなし。人の射を學ぶが如き、久しく習ふときは則ち巧なり、(ニ)後には無心なりと雖も久習せるを以ての故に、箭發すれば皆中る。我も亦是くの如し、初め不思議三昧を學せしとき、(ホ)心を一緣に繫けき、久しく習ふて成就するが若きは、更に心想することなけれども常に定と倶なりきと、佛と祖師と所受用の處は、無二無別なり。(ヘ)近年叢林に一種の邪禪あり、目を閉ぢ睛を藏して、(ト)觜盧都地にして妄想を作すを、之れを不思議の事と謂ひ、亦之れを威音那畔、空劫已前の事と謂ひて、纔かに口を開けば便ち喚んで今時に落つと作し、亦之れを(チ)根本の上の事と謂ひ、亦之れを(リ)淨極まりて光通達すと謂ひ、(ヌ)悟を以て第二頭に落在すと爲し、悟を以て枝葉邊の事なりと爲す。蓋し渠、初め步を發する時より便ち錯り了れり、亦是れ錯なることを知らずして、悟を以て建立なりと爲す。既に自ら悟門なければ、亦悟ある者を信ぜず、這般底を之れを大般若を謗り佛の慧命を斷ずと謂ふ。千佛出世すれども懺悔を通ぜじ、左右は人を驗する眼を具ふや久し。此等の輩の似き(ル)師子皮を披却して野干鳴を作す、知らずんばあるべからず。(ヲ)某、左右と未だ顏を承け論を接へずと雖も、此の心は已に默默として相契ふこと多年、此れより前答字極めて禮の如くならず、(ワ)今專ら(カ)法空禪人を遣して代つて往いて敬を到さしむ。故に(ヨ)善思惟三昧に入るに暇あらず、只だ恁麼に手に信せ意に信せて、覺えず葛藤すること如許す。聊か(タ)不敏を謝するのみ。

(レ)榮侍郎に答ふ　茂實

(ソ)心を留めて此の一段の大事因緣を究竟せんと欲すといふことを承はる。既に此の心を(ツ)辨ぜんとならば、第一に急なることを要せざれ、急なるときは則ち轉た遲し。又緩なることを得ざれ、緩なるときは則ち怠墮す。調琴の法の如く緊と緩と中を得て、方に曲調を成すことを要す。但だ日用應緣の處に向つて時時に(ネ)覷捕せよ。我が這の能く人の爲に是非曲直を決斷する底は、(ナ)誰が恩力をか承くる。畢竟して甚麼の處よりか流出するや

へて下に臨まざる難し。豪貴の人は常に五欲の境に耽けるの故に道を學び難しとなり。

(セ)第三段、道は思議を容れざることを論ず。臨濟錄に云く、「求着すれば即ち轉た遠し等」と。

(ス)釋迦等とは華嚴經二十三、兜率偈贊品。

(イ)又佛等は、大寶積經百十六の文、宗鏡錄四十五。

(ロ)入らんと欲せば、則ち是れ思議なり。

(ハ)此くの如く工夫をなして三昧に入る底、是れ無修の修、無學の學なり、然るに學人謬つて死語を認めて悟なしと道ふ、無事禪に墮するなり。

(ニ)後に等は、心を起して的に中ることを欲せざれども箭を發せば皆中る、所謂恰恰の用心の時、恰恰として無心にして用ふる是れなり。

(ホ)心を不思議なる一緣境に專注するをいふ。

(ヘ)第四段、邪師を斥く。

(ト)觜盧都地とは、正宗贊、風穴章の古解に云く、「坐して鼻端を守るなり」と。人天眼目章に、「言はずして言ふの貌」と。普燈錄抄に云く、「緘默なり、口を閉ぢて言はざるなり」と。

(チ)根本の上とは、下の枝葉邊に應す。

(リ)淨極等は楞嚴經六。

(ヌ)悟を以て等は、前に出づ。これ仰山の語を誤解するなり、謂く、「悟といふは無事にして事を生ずるなり」と。

(ル)師子皮等とは、身に佛衣を着し、心に外道の見解を作すをいふ。臨濟錄に云云。

(ヲ)第五段、專使を遣はす意を叙す。

(ワ)專は專使にて、餘事を雜へざ

と、覷捕し來り覷捕し去らば、平昔の生處の路頭は自ら熟せん。生處既に熟すれば、卽ち熟處却つて生るべきなり。(ラ)那箇か是れ熟處なるや、(ム)五陰六入、十二處、十八界、(ウ)二十五有、(ホ)無明業識にて思量し計較する心識、晝夜(ノ)熠熠として野馬の暫くも停息すること無きが如き底是なり。(オ)這の一絡索、人を使ひ得て生死に流浪せしめ、人を使ひ得て(ク)不好の事を做さしむ。(ヤ)這の一絡索既に生なるときは、則ち(マ)菩提も涅槃も眞如も佛性も便ち現前すべきなり。(ケ)現前するの時に當つて亦現前の量なし。故に(フ)古德契證し得了つて、便ち道ふことを解す。(コ)「眼に應ずる時は千日の若くにして萬象、影質を(エ)逃るること能はず、(テ)耳に應ずる時は幽谷の若くにして大小の音聲足らずといふことな

るをいふ。
(カ)法空禪人は、宗派圖、普燈、續傳燈。大慧法嗣の下に之を載せず。
(ヨ)善思惟等とは卑下の辭なり、今此書を作るに善三昧に入らずとなり。
(タ)不敏とは愚鈍の謂なり、此には失禮のいひなり。
(レ)榮は宋史に傳なし、萬姓統譜五十四。師六十九の時の作。
(ソ)第一段、工夫の法を示す。
(ツ)此心を辨ずの辨とは、もののきはつけてとのふるを言ふ。
(ネ)覷捕とは把得の義、緣に應ずる處、把得し用ふるなり。我が這巳下は覷捕底の樣子なり。我とは榮侍郎を指すも大惠代つて言ふの詞なり。
(ナ)此の如く自由自在なるは誰の恩力を受くとなり。
(ラ)第五段、凡夫の熟處を論ず。
(ム)五陰は、色、受、想、行、識なり、六入とは眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根の六根の事なり、十二處とは、六根と、色、聲、香、味、觸、法の六境とを合して十二處といふ。十八界とは、六根と六境と、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識の六識を合して十八界といふ。これ色心法の分類の異なり、卽ち心に迷ふことの強き人の爲に五陰を說き、色卽ち物質は常住なりと迷ふことの強き人の爲に十二處を說き、色心の二法に並び迷ふことの強き人には十八界と說くなり。
(ウ)二十五有とは、有は因果不亡の義とて、煩惱業の因に依つて人、天等の果を招き得、果中に復た因を造り藏す、其因に依りて復た次の果を引く等にて、要するに迷界の存在な

し」と。此くの如き等の事、他に求むることを假らず、他の力を借らずして自然に應緣の處に向つて活鱍鱍地なり。(ミ)未だ此くの如くなることを得ずんば且く這の世間の塵勞を思量する底の心を將つて思量不及の處に回在して、試みに思量して看よ、那箇か是れ思量不及の處なるや。僧、趙州に問ふ「狗子に還つて佛性ありや也た無き

有といふ。而して二十五とは、東、弗婆提。南、閻浮提。西、衢耶尼。北、鬱單越（以上を須彌四洲といふ）。次ぎに地獄、餓鬼、畜生（巳上を四惡趣といふ）。次ぎに四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天（巳上欲界の六天なり）。次ぎに梵天（之れは實は色界初禪天中の一處にて大梵天なり）。次ぎに初禪天、二禪天、三禪天、四禪天（巳上色界の四禪天なり）。次ぎに空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非非想處（巳上無色界の四天なり）。次ぎに無想天、五那含天（無煩、無熱、善見、善現なり）以上の二天は實は色界第四禪天の中にあるも、外道は之を誤り執して無生死の世界と想ひ、又前の梵天は外道之を認めて世界の創造者なりと迷ふ故に、何れも迷界にして生死を離れざることを彰はして、別に開出して一の有と立てしなり。以上の二十五有を合すれば五道となり、五道を更に合すれば三界となるなり、今は一一を委しく解する能はず。法苑珠林八十七、近くは四敎儀中卷、冠註に倶舍論を引けり、見よ。
(ホ)無明卽業識にて、要するに迷妄の識なり、前に解するが如し。
(ノ)熠熠とは、閃爍の貌、生滅の絕えざるをいふ。
(オ)這の一絡索とは、凡夫の熟處を指す。
(ク)不好等は三毒に依つて然り。
(ヤ)這の一等は、第三段、悟後の境界を叙す。
(マ)菩提とは梵語、覺と譯す、眞如の理等を照す靈覺の智慧なり。涅槃とは、圓寂、寂滅、滅度等と譯す、これ常住不變の理なり、何れも上に解す、眞如とは、眞實にして虛妄を離れ、如常にて不生滅常住なるをいふ、これ宇宙の靈體に强ひて附したる名稱なり。佛性とは、佛陀の靈性にして吾人の本來具有せる本心、覺性にして、眞如　法性等と其體を同じうす。宗鏡錄十一、圓覺經疏一、大乘義章一等に出づ。
(ケ)現前等は、方處の指すべき無きが故に。
(フ)古德等は、高城和尚の歌なり、諸祖偈頌上、永明註心賦二。
(コ)六道の神光明了なり、この道理を會得せる人は、內に塵垢なきが故に眼に應ずる作用、物として照さざるなし。
(エ)逃るとは、遺餘なきをいふ。
(テ)靈妙の心性、妙用を發するも亦此くの如し。
(ミ)未だ等、第四段、本參を授けて

や。」州云く、「無」と、只だ這の(サ)一字、(キ)儞に儘す甚麼の伎倆かある。請ふ安排して看よ、請ふ計較して看よ、思量し計較し安排し、以て(ユ)頓放すべき處なうして只だ肚裏悶し、(メ)心頭煩惱することを覺得せん時、正に是れ好底の時節なり、第八識相次で行せざらん。(ミ)此くの如きことを覺得せん時、放却せんことを要すると莫れ、只だ這の無の字の上に就いて提撕せよ、提撕し來り提撕し去らば、生處は自ら熟し、熟處は自ら生るべきなり。(シ)近年以來叢林の中に一種の邪說を唱へて宗師と爲る者あり、學者に謂つて曰く、「但だ只管(ヱ)靜を守れ」と。守る者は是れ何物ぞ、靜なる者是れ何人なることを知らず、却つて靜底は是れ基本なりと言ふ。却つて悟ある底を信せずして、(ヒ)悟底は是れ枝葉なりと謂ふ。更に(モ)僧の仰山に問うて曰く、「今時の人還つて悟を假るや也た無や。」(セ)仰山曰く、「悟は則ち無きにはあらず、爭奈せん、第二頭に落在す」といふことを引く、癡人面前に夢を說くことを得ず、便ち實法の會を作して悟は是れ第二頭に落つと謂ふ。殊に知らず、(ス)潙山自ら學者を警覺するの言あることを。直に是れ痛切なり、曰く、(イ)「至理を研窮して悟を以て則とせよ」と。此の語又甚麼の處

(サ)一字とは、無の一字なり。
(キ)你に儘すとは、儘は盡と同じ、任なり。意は安排せんと欲せば、你、安排して看よ、你に任す、畢竟、安排することを得ずとなり。
(ユ)頓放は今は置くべき處なきなり。
(メ)煩惱とは、今は普通にいふ所の煩悶のことなり。
(ミ)此の如きとは、肚裏悶を指す。
(シ)第五段、邪解を擧げて破斥す。
(ヱ)此の靜は是れ賊將なり。守る者とは之に使はるゝなり。これ賊を認めて子となす、此れは賊を認めて主となすなり。
(ヒ)悟は是れ殺賊者、枝葉とは靜底にて是れ基本故に。
(モ)僧等、此の問答は、聯燈、會元、傳燈には載せず、禪林類聚五に之を載す、萬松老人の從容錄四。

に向つてか著かん。潙山、後人を疑誤して第二頭に落在せしめんことを要すべからざるなり。(ロ)曹閣使も亦心を此の事に留む、其の邪師の輩に誤らるゝことを被らんことを恐れて、比に亦此くの如く書して忉忉怛怛として寫して與ふ。此の公は聰明も識見も、皆大いに人に過ぐる處あれば、決して錯つて方便の語を認めて實法の會を作すに到らじ。但だ某、未だ之れと目擊することを得ざれば、(ハ)私かに憂へ過ぎて計るのみ。(ニ)老居士も亦之れと是れ道友なることを聞きて、(ホ)筆に因りて覺えず葛藤す。無事相見せん時に試みに渠に問うて書を取りて一看せよ。方に知らん、(ヘ)妙喜が相期することは(ト)眼底にあらず、彼此氣義相投じ、又勢利の交に非ざることを。一紙を寫し了り、紙盡くれば又一紙を添ふ。更に(チ)形迹を事とするに暇あらず、(リ)此の書も亦是くの如し。(ヌ)前書に是れ箇の中の人なるに託す。故に曰く、「(ル)切に老老大大にして甚の來由をか著けんといふべからず、若し此くの如くならば則ち好事面前に在れども定めて放過すべきなり」と。(ヲ)寫す時卒易なるに似たりと雖も、(ワ)然も亦機感相投じて、亦覺えず紙上に書在す。公の妙喜を信得及して(カ)便ち把りて事と做すことを荷ふてなり。

(セ)仰山等、悟了して之を見れば、元來悟といふ、早く是れ功勳邊に落つ、然らざる時は皆是れ邪解なり。大品般若十九、不轉品に云云。
(ス)緇林寶訓、潙山警策文銘。
(イ)至理等は、警策の銘の詞なり。
(ロ)第六段、曹閣使を誡むるの事を引く、これ強く榮侍郎を諫めんが爲に、下の文の張本となす、卽ち他に對して言ひ難き事なれば書を以て寫與す、曹閣使は曹功顯なり、紹興二十七年閣使となる。
(ハ)私には心中の煩悶を憂といふ、過計は過失計度なり、意は未だ顏を承けず、恐らくは過つて計度せん、故に豫め之を告知せしむ。
(ニ)老居士とは榮侍郎なり。
(ホ)筆等とは、曹閣使に與ふ書をいふ。

(ヨ)日用應緣の處、便ち此箇の法門を恢張して以て聖主の賢を求めて天下を安せんとするの意に報せば、眞に(タ)其の知る所に負かざるなり。(レ)願くは種種堪忍して始終只だ今日の如くに做し將ち去らば、佛法と世法と打して一片と作るべきなり。(ソ)且耕し且く戰ふて、久久にして純(ネ)熟せば、(ツ)一擧にして而も之れを兩得せん。豈に腰に十萬貫を纏ふて鶴に騎りて揚州に上るに非ずや。

(ナ)又

(ラ)鐘鳴り漏盡くるの譏を示諭せらる。君上の爲に誠を盡し、下百姓を安んせば、(ム)自ら絃を聞いて音を賞する者あらん。願くは公、凡事堅忍して逆順の境に當つて(ウ)政に好し力を著くるに、所謂此の深心を將つて塵刹に奉ず、是を則ち名けて國恩を報ずとなす。(ヰ)平昔、學道は只だ逆順界中に於て受用せんことを要す。(ノ)逆順現前するときに苦惱を生ぜば、大いに似たり、平昔、曾て(オ)箇中に向つて用心せざるに。(ク)祖師曰く、(ヤ)「境緣には好醜なし、好醜は(マ)心より起る、心若し强ひて名けずんば、(ケ)妄情何れより起らん、妄情既に起らずんば(フ)眞心、偏知に任す」と。請ふ逆順の境中に於て常に是の觀を作さば、久々にして自ら苦惱を生ぜじ、苦惱既に生ぜずんば、則ち以て(コ)魔王を驅つて護法善神と作すべし。(エ)此れより前老老大大として甚の來由をか著けんといふの說、(テ)言猶ほ耳に在り豈に之れを忘れんや。佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべし。以るに居士、前十餘載、閑なりしは、自ら閑

(ヘ)妙喜巳下形迹に至るまで、曹閣使に答ふる書の意なり。
(ト)眼底等は、上の目擊に應ず、目前といふが如し、意は相見不相見を論ぜざるなり、倶に箇中の人故に氣義相投ずるなり。氣義とは氣志義交なり。
(チ)形迹とは、外を飾るの謂なり、即ち貴官に呈する文書の體式をいふ、意は覆藏なく誠實を述ぶるなり。
(リ)此の書等は彼此氣相投なり。
(ヌ)前書、第七段、榮侍郎の深信を見て發し難きを發せしむ、前書とは榮侍郎の問書を指す、託すは榮侍郎自ら委託するなり。
(ル)切に巳下は諫言の詞なり。意は仕官即佛法、佛法即仕官なり。來由とは、大道を修行することなりと。考ふべし。
(ヲ)寫す等、上は諫の詞、下は上書を寫す時の事をことわる。

(ワ)然も、亦とは曹閣使に亦す、意は公も亦機應相投ず故に此の如く言ふなりと。
(カ)把るに足らすと雖も、然も把つて事をなすは則ち公の恩を荷ふなりと、荷とは感荷なり。
(ヨ)日用等、第八段、仕官中に佛法を成ずべきを示す。日用とは世法をいふ、應緣は政事に務むるなり。
(タ)其とは天子を指す、意は天子その才賢を知りて擧げて仕官せしむ、而るに罷仕するときは却つて天子に負くとなり。
(レ)願くは種種とは、一切の事なり、年老いての仕官、想ふに煩勞なり。
(ソ)且耕等は、佛法を學ぶを喩ふ、又世法なり。
(ツ)一擧とは、凡そ事を成すを擧といふ、戰國策三、史記七十。兩得とは、佛法、世法自在無碍なるなり。

(ネ)豈云々は前に出づ。意は佛法世法も萬事萬足なり。上るとは、一本には下に作る。
(ナ)榮侍郎に答ふる第二書、大意は官途に在つて逆順閑忘一如の境界を鍛鍊せんとを示す。
(ラ)第一段、老大を以て退屈すべからざることを勸む。鐘鳴り漏盡くは、魏志列傳二十六、田豫答へて曰く、「年七十を過ぎて以て位に居るは、譬へば鐘鳴り漏盡きて而も夜行して休めざるが如し」と、遂に疾と稱して大中大夫を拜し、年八十二歲にして薨ず、即ち天曉けて猶ほ夜行するが如し。譏は人の老年にして致さずと譏るなり。
(ム)自ら等、意は譏る者あれば却つて之を賞する者あり。列子に云く、「伯牙善く琴を皷す云云。」
(ウ)政には、世法と佛法と一處に於て、政に好し力を著くるに。

(ヰ)第二段、逆順の境を轉ずべきを勸む。
(ノ)逆の上に「而るに」を加へ見よ。
(オ)箇中とは、佛法を指す。
(ク)祖師は四祖道信禪師。
(ヤ)境即ち緣なり、六塵の緣影なり。好醜とは、逆順なり、傳燈四、牛頭融章。
(マ)心とは妄心なり、分別なり、强ひて名くとは、逆順好醜なり。
(ケ)一心法界の故に。
(フ)眞心偏知は、前の眼に應ずる時千日の如きの類に應ず、維摩九。意は佛の十號中の偏知の義に合す、故に引く。
(コ)魔王とは仕官して政を秉りて而して罷仕せざることを譏る者あらば、但だ此くの如く工夫せよ、魔却つて善神と作さんと。

の時節あり、今日㋐仕權手に在り、便ち忙底の時節あるなり。當に念ふべし、㋚閑の時は是れ誰か閑なるや。忙の時は是れ誰か忙なるや。須らく信ずべし、忙の時に却つて閑の時の㋖道理あり、閑の時却つて忙の時の道理あることを。㋴政に忙中に在りて當に㋱主上の公を起すの意を㋯體して頃刻も暫忘るべからざるべし。自ら警し自ら察せよ、㋛何を以てか之れを報いんと。若し常に是の念を作さば、則ち鑊湯鑪炭、刀山劒樹の上にも亦須らく㋽向前することを著べし。況んや目前些少の逆順の境界をや。公と此の道相契ふを以ての故に、情を留めずして、淨盡し吐露す。

㋪黃門司に答ふ　節夫

㋲審幷に許多の葛藤を收む、意はざりき、便

㋙第三段、閑と忙と一如なるを示す。

㋢言等は、左傳杜預注八、文公七年の語なり。

㋐仕權は、仕官權柄なり。

㋚時時刻刻に佛性現ずるなり。

㋖道理とは佛性をいふなり、此くの如く之を推忙の時却つて閑の道理あり、佛性は閑と忙との中に於て異なく別なし。

㋴第四段、忠を忘れざることを誡勸す。

㋱主上とは事物紀原一、冠註に之を引けり。

㋯體とは天子の心を以て、我が心となすこと。

㋛何を以て等とは、自ら省察の樣子なり。

㋽向前は對向進前なり。

㋪黃門司は事物紀原五に云云、或は云く、黃姓にして門司は官名なりと。節夫は、妙德居士と號す、大惠の嗣なり。會元二十、居士分燈錄下。宋史には傳なし、冠註に引けり。此書は、師六十九歲の時の作なり。

㋲第一段、拈弄諦當なることを贊す。許多の葛藤とは、頌古拈提の類なり。

㋝但等、第二段、引證。

㋜本分とは、此にては君に奉じ職を掌るをいふ、これ官人の本分なり。然るに自らの本分に依らずして拈弄參學甚だ無用なり。若し既に但だ此くの如くなれば、他の譏るに一任すと。

㋑他家とは大惠自らを指すなり、通人とは理に通達せる人なり。傳燈二十九、誌公の十二時の頌中の語なり。

㋺是れ曾ては、第三段、悟は情解卜度を容れざるを論ず。

㋩響を聽くとは、推量卜度をいふ。

ち此くの如く拈弄することを解せんとは。直に是れ弄し得來つて活鱍鱍地なり、眞に是れ自ら證し自ら得するものなり、喜ぶべし喜ぶべし。㋝但だ只だ此くの如くならば從教人の這の官人㋜本分に依らずして亂說亂道すと道ふことを、㋑他家に自ら通人の愛ずる有らん。㋺是れ曾て證し曾て悟る者は方に知るを除く。若し是れ㋩響を聽くの流は他の㋥龜を鑽り瓦を打して㋭更に如來禪と祖師禪とを批判し得て、好し儘に妙喜が拄杖を喫し得るに一任す。且く道へ是れ㋬伊を賞するか伊を罰するか、諸方の更に疑ふこと三十年するに一任す。

㋣孫知縣に答ふ

㋠修する所の金剛經を以て相示さるることを蒙る、幸に隨喜一徧することを得たり。近世の士大夫、肯て左右の心を內典に留むるが如くなる者は實に希有なりと爲す。意趣を得ずんば則ち是くの如く信得及すること能はじ、看經の眼を具せずんば、則ち經中深妙の義を窺ひ測ること能はず、㋷眞に火中の蓮なり、詳かに味ふこと之れを久しうして疑無きこと能はざるのみ。㋦左右諸の聖師の翻譯、眞を失して而も本眞を汨亂し、文句增減し

㋥龜を鑽りとは莊子八外物篇にあり、瓦を打すとは、潛確類書八十二、巫占に瓦を龜に代ふと。此等の翟は計較卜度するに一任す。

㋭第四段、再び拈弄葛藤を勘絕す。意は葛藤を拈弄するは猶ほ可なり、若し更に批判し得て恰好なるも飽まで大惠の拄杖を喫得するに任すと。好しとは恰好の謂なり、喫は黃門司に系る、儘は任なり、多く喫するをいふ。

㋬伊とは黃門司を指す。

㋣孫は宋史に傳なし。此書は、師七十歲の時の作。大意は小知小見もて譯經の諸師を批判するを戒む。

㋠第一段、讚歎して縱奪す、修とは金剛經の註を修するなり。

㋷上の希有となすの語に應ず。

て佛意に違背すと誣る。又云く、「始め持誦せしより、卽ち其の非を悟り定本を求めて㋸舛差を是正せんことを欲すれども、而も㋾習僞已に久しうして㋻雷同一律せり。㋕京師の藏本を得るに暨びて始めて據依するところあり。復た㋵天親、無著の論頌を考繹するに、其の義㋟脗合す。遂に泮然として疑なし」といふ。又㋹長水、孤山の二師は皆句に依りて義に達すといふことを以てす。㋞識らず左右、敢て是くの如く批判せば、則ち定めて嘗て㋡六朝に譯する所の梵本を見、諸師の翻譯の錯謬を盡し得て、方に始めて泮然して疑なけん。㋧既に梵本なし、便ち臆見を以て聖意を刊削せば、則ち且㋤未だ因を招き果を帶びて、聖教を毀謗して無間獄に墮せんことを論せざるなり。恐らくは識者之れを見て却つ

㋜第二段、總じて破す、下に三節あり、初に孫知縣の語を擧ぐ。
㋸舛は差なり、錯亂なり、舛差は過失なり、錯なり。
㋾習僞とは久しく僞謬を習ふ。
㋻雷同とは、禮記曲禮上の註に云く、「雷の聲を發する、物として同時に應ぜざる者なし云云」。一律とは、音曲の亂同なるに比す。
㋕京師とは、公羊傳に云く、「天子の居なり、京は大なり、師は衆なり、天子の居は必ず衆大の辭を以て之を言ふ」。
㋵天親、無着は名義集一、西域記五を引く、會元二に出づ。無着論は隋の達磨笈多の譯する所、十八段の疑を立つ。天親論は元魏の菩提流支の譯する所、二十七の疑を立つ。
㋟脗合とは事相同じき者をいふ。
㋹長水は諱は子璿、普燈三、通載十八、佛祖統紀三十等に出づ。孤山は智圓法師なり、佛祖統紀十に出づ、人天寶鑑に出づ。
㋞識等、第二節、假に詞を設けて暫く許す。
㋡六朝とは、晉、宋、齊、梁、魏、隋を謂ふにあらず、六代の譯にして、一に後秦の羅什、二に後魏の菩提流支、三に陳朝の眞諦、四に隋の笈多、五に唐初の玄奘、六に大周の義淨なり。今傳ふる所は羅什三藏、弘始四年に長安草堂寺にて譯する所のものなり。
㋧既に等、第三節、正しく實を論じて大集破す。
㋤未だ等は、謗法の因、墮獄の果なり。
㋶還等は、法華經普門品に出づ。
㋰古人等、第三段、斥破する所の意を叙す。

て左右の諸師の過を檢點するが如くにして、㋶還つて本人に著することを有らんことを。㋰古人言へることあり、「交淺うして言深き者は、尤を招ぐの道なり」と。某、左右とは㋻素より平生に昧し、左右、此の經を以て印證を求めて萬世に流布して、衆生界中に於て佛種子を種ゑんと欲す。此れは是れ第一等の好事なり。而も又某が㋼箇の中の人たるを以て、箇の中の消息を以てして㋨形器の外に相期す、故に敢て上稟せずんばあらず。㋔昔、清涼國師、㋗華嚴の疏を造る時に、譯師の訛舛を正さんと欲すれども、而も梵本を得ざれば、但だ之れを經の尾に書するのみ。㋳佛不思議法品の中に所謂一切の佛に無邊際の身あり、色相清淨にして普く諸趣に入れども而も染着なしといふが如き、清涼

㋻素より等とは、未だ相見せざれば其識見の程度を知らずとの意。
㋼箇の中の人とは、佛法中の人の意なり。
㋨形器等とは、形骸を忘れて會見を期せんとなり、卽ち僧、俗の形を忘れて印證を求む、實に道を以て交はると謂つべし。
㋔第四段、古人の猥りに改めざるを引く。清涼の傳は宋僧傳五、編年通論十八、佛祖統紀四十二等に出づ。清涼は澄觀、字は大休、唐の玄宗開元二十六年(日本聖武天皇天平十年)に生る、幼にして出家し、沙彌の時に已に九經十四論を講ず、其非凡推して知るべし、後に律、三論、涅槃、天台、禪宗等の奧義を究め、華嚴は賢首門下の異義者たる法詵に就いて修習せしも、遠く賢首の正統を傳へて華嚴の行門を大成して功あり。貞元十一年般若三藏、勅を奉じて四十華嚴を譯するや、圓照等と共に潤文證義の任に當る。文宗の開成四年に寂す、壽百二歲、身の長け九尺四寸なりき、傳法の弟子一百餘人、著書數百巻あり。
㋗華嚴の疏とは、八十華嚴の疏にして、之れ宗義復興の爲に撰述せしものにして、其年代は、宋高僧傳に據れば、唐第十代德宗の興元元年正月に筆を下し貞元三年十二月に其功を畢へ、二十卷を成す、今之を大疏といふ、其後弟子の爲に再び筆を執り、大疏を解釋す、演義鈔四十卷是れなり、今はその大疏と演義鈔を經文に會し、更に科文を加へて一百卷となりて盛に世に流布せり。

(ヤ)但だ云ふ、「佛不思議法品の上卷第三葉の(ケ)第十行の一切諸佛とは舊諸の字を脫す」と、其の餘の經本の脫落も皆之れを經の尾に注す。(フ)清涼も亦聖師なり、添入し及び減削すること能はざるには非ず、止だ敢て之れを經の尾に書することは法を識る者は懼るればなり。又(コ)經中に大瑠璃寶といふあり、淸涼曰く、「恐らくは是れ(エ)吠瑠璃ならん、舊本錯りて寫す」といふ。亦敢て改めず、亦只だ此くの如く之を經の尾に注するのみ。(テ)六朝の翻譯の諸師は皆淺識の士に非ず、翻譯の場には(ア)譯語の者あり、譯義の者あり、潤文の者あり、(サ)梵語を證する者あり、正義の者あり、(キ)唐梵相校する者あり。而るを左右尙は以て錯つて聖意を譯すと爲す、左右既に梵本を得ず、(ユ)便ち妄りに刋削を加へ、却つ

(ヤ)佛不等は、八十華嚴經の品名。

(マ)但だ云等の文は今の本には削除す、惜むべし。

(ケ)十行、古は十七字を以て一行とすと、孤山の閑居編に見ゆ。

(フ)清涼等とは、大惠の批評なり。

(コ)經中とは、華嚴經六十六、入法界品無厭足主章。

(エ)吠瑠璃は具には吠瑠璃耶、略して瑠璃といふ、此に不遠山、又は遠山寶と名く、寶珠の名なり、謂く、西域に山あり、波羅奈城を去ること遠からず、此寶は彼れより產出す、故に以て名く。其寶は靑色にして瑩徹し光あり、凡ての物之れに近づけば皆同一色となる、玄應音義二十三、等に出づ。

(テ)第五段、翻譯眞を失するてふ語を斥す。以下に諸役を列ぬるは、證據の正しきことを言はんが爲なり。

(ア)譯語は梵字を轉じて漢字となす、譯義は梵語の表はす若しくは含蓄せる義理を漢語に顯はす役なり。潤文とは、文章を潤色す、卽ち語を譯し義を移したる後に、字句を添削增減して文章を潤飾す、梵語を其儘に譯すれば彼岸到となる故に、之を潤して到彼岸となるの類なりと。

(サ)梵語を證すとは、梵漢を對照して、文字を加減して譯語に誤なきことを證する役なり。證義は義を譯して後に再び子細に其義を正すなり。

(キ)唐本と梵本とを相校合するなり。

(ユ)此くの如きは胡亂改作なり。

(メ)第六段、長水を難ずるを斥す。

(ミ)其とは長水を指す。長水の子璿なり、趙宋の世に出て、華嚴を興せし一人なり、仁宗の天聖八年に寂す。講人とは、

て後世の人の諦信せんことを要するは、亦難からずや。(ミ)長水は句に依りて義に違すといふことを論ずるが如き、梵本の證なくんば如何して便ち決定して其れを以て非なりと爲んや。此の公は是れ講人なりと雖も他の講人と同じからず。嘗て瑯琊の(シ)廣照禪師に參ず、因に瑯琊に(ヱ)首楞嚴の中の(ヒ)富樓那、佛に問ふ、「清淨本然ならば云何が忽ちに山河大地を生ずるや」といふ義を(モ)請益す、瑯琊遂に聲を(セ)抗げて云く、「清淨本然云何が忽ちに山河大地を生ず」と、長水言下に於て大悟す。後に方に(ス)襟を披いて自ら(イ)座主と稱す。蓋し座主は(ロ)多くは是れ行を尋ね墨を數ふ。左右の所謂句に依つて義に依らざるものなり。長水は(ハ)見識なきに非ず、亦行を尋ね墨を數ふる者に非ず。(ニ)具足相を以て

經論を講解する人の謂なり

(シ)廣照は、廣燈十八、續燈四、會元十二等に出づ。

(ヱ)首楞嚴とは、大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經の略稱なり、唐の般若密帝の譯する所、十卷あり、今の文は四卷に出づ。

(ヒ)富樓那は略稱、具さには富樓那彌多羅尼子（ぷーろなまーいとらーやにーぷとら）といふ、滿慈子、滿願子等と譯す、此人は家兄に疎ぜられて商人となる、而も能く佛に供養し、精舍を建立し復たよく慈善行を爲す、後に釋尊に歸依して十大弟子の隨一たり、其の說法の巧妙なること衆中第一位にありしといふ。

(モ)請益とは、法を問ふを謂ふ、他に辯ぜり。

(セ)抗は激杭なり、これ機關なり。

(ス)襟を披くとは、披は開くにて、蘊奧を遺す無きを謂ふ。文選十三、宋玉賦、圓悟心要、中峰錄五に出づ。

(イ)座主とは禪家より敎家を稱する語なり、釋氏要覽上に出づ。もと學識高き僧を名けしが、本朝にて一の僧官となりし。

(ロ)多くは等とは、隋の道生、唐の義方等の名相に滯るを訶する故に多といふ。行を等は傳燈二十九、寶誌和尙の大乘讃第九首に云く、「口內に經を誦すること千卷、體上に經を問ふに識らず、佛法の圓通を解せず、徒らに勞して行を尋ね、墨を數ふ」と、以て解すべし。

(ハ)見識とは、品字箋に曰く、目に見る所あり、而るに心に分ろあるをいふと。

(ニ)具足相等とは、第七段、孫知縣の異解を破す、下三節あり、初に大意を破す、此は但だ文字を增減するを訶す、佛意に

せざるが故に。㋭阿耨菩提を得たまふと、經文の大段分明なり。㋬此の文至淺至近なり、自ら是れ左右奇を求むること太だ過ぎて、異解を立て人の己に從はんことを求めんと要するのみ。㋣左右、無著の論を引いて云く、「㋠法身を以てする如來を見たてまつるべし、㋷相具足を以てするに非ざるが故にと。㋦若し爾らば如來は相具足を以て見たてまつるべからずと雖も、相具足を因と爲して阿耨菩提を得べし」と、㋸此の著を離れしめんが爲の故に。經に言く、「須菩提よ意に於て云何ん、如來は相成就を以て阿耨菩提を得たまふべきや、須菩提よ是の念を作すこと莫れ」といふ等とは、㋾此の義は、相具足の體は菩提に非ず、亦相具足を以て因となすにあらざることを明す。相は是れ色の自性なるを以ての故に

といふ。㋻此の論も大段分明なり。自ら是れ左右錯りて見、錯りて解するのみ。㋕色は是れ相の緣起、相は是れ法界の緣起なり。㋵梁の昭明太子、「是の念を作す莫れ、如來は具足相を以てせざるが故に、阿耨菩提を得」と謂へることを、㋟三十二分の中に此の分を以て無斷無滅分となすは、㋹須菩提の具足相を以てせずといはば、則ち緣起滅せんといふことを恐れてなり。蓋し須菩提は初め母胎に在りて卽ち空寂を知り、多くは緣起の相に住せざればなり。㋞後に功德施菩薩の論の末後を引けり。若し㋡相成就是れ㋧眞の實有ならば、此の相滅する時卽ち名けて斷と爲さん、何を以ての故に、㋤生を以ての故に斷あればなり。㋶又人の會せざらんことを怕れて、又云く、「何を以ての故に㋰一切法は是れ無生の

違するが故に破すると謂ふにあらず。但だ大段分明といふて其義を責めず若し佛意を害せば、豈に此れに止めんや。畢竟、羅什所譯の經文、無著の論文等各其理あり、猥りに文字を增減すること莫れとなり。

㋭阿耨菩提は、阿耨多羅三藐三菩提の略なり、此に無上正等覺、或は無上正偏智と譯す。これ佛陀の智德を稱する一名號にして、佛は絕待智者にして、其の智以上の大なるもの無きが故に、無上といひ、萬法の一一を了悟せざるなきが故に、正偏智といふ。具足相とは、佛の具足したまふ三十二相をいふ、通じては清淨なる佛境界をも攝む。今の文意は蓋し長水は、如來は相好を具足する故に菩提を得たまひしとか、相を具することを認て唯だ自ら證知すべきを說きしなり。

㋦若し等は凡夫第二の疑なり、爾らば眞の如來は云云と。

㋸此の着とは、相具足を因と爲すを指す。

㋾此の義とは、前上の法身を以て如來を見るの文を解釋す、體とは相の體なり、此は差別門に約するが故に相の體と菩提の覺性と別となす、若し圓融門より云はば無差別なり。

㋻此論等、理を以て推すに、論は相は色の自性なりと明して、別に相を拂除して如來の覺體を得といふにあらず、而るに孫知縣は以て相を拂ふとなし、誤つて論は相と覺體とは別なりとなすと言へりとの意なり。これ明昭太子の說を引くの根本とす。

㋕色は等、色とは凡夫所見の色法をいふ。相の緣起とは事法

識せざるが故に得たまひしとかの有無見を離れて、正直に如來を見たてまつつて居るとなり。

㋬此の文等は大慧の批判なり。

㋣左右無等とは、第二節、錯つて無著論を解することを破す、此論は北藏本は三卷、麗本は二卷なり、是れ經文を挾會せざるが故なり。

㋠法身等とは、佛の內證なる法身の理を通じて如來を見よとなり、凡夫は諸法を有なりと認むる故に佛に對しても、但だ佛の外相なる三十二相を見て眞の佛を見たりと爲す、故に今之を非とするなり。

㋷相具足、色相、音聲は是れ外塵なり、之を以て佛の覺體を見るべからざるが故なり。無著論の偈に曰く、「法を以て佛を見るべし、導師(佛)は法を身となす」と、これ分別を離れ界なり、法界とは理法界なり、(實は理事と事事とを含む)謂く、法性の理が活動せるを現象差別の事法界といふ、故に事の外に理なく理の外に事なく、理事本と圓融無礙なり、故に色は是れ等といふ。緣起とは、隨緣生起の意なり。

㋵梁書八、列傳二に云く、昭明太子統字は德施、高祖の長子なり云云と、著す所の書、文集二十卷、文選三十卷等多し。

㋟金剛般若經の內容三十二分に章段を分てり、其中此の第二十七分をとるなり。此功德施論に、菩薩は法の斷するを見ること無しと云へり。昭明は此の文に依つて無斷と云ひしなり。

㋹須の上に「佛」を加へて見よ。

㋞後に…引けりとは、孫知縣の書中の後方に引用せるをいふ。具には金剛般若波羅蜜經

性なり、所以に斷常の二邊を遠離す、二邊を遠離するは是れ法界の相なり」と。㋒性と說かずして相と言ふことは、謂く、「法界は是れ性の緣起なるが故なり、相は是れ法界の緣起なるが故に性と說かずして相と言ふ。」梁の昭明の所謂無斷無滅といふは是れなり。此の段も更に分明なれども、又是れ左右、奇を求むること太だ過ぎて㋼强ひて節目を生ずるのみ。㋨若し金剛經以て刊削すべくんば、則ち一大藏敎凡そ看ることある者は、各々㋔臆解に隨つて都て刊削すべきなり。㋗韓退之が論語の中の㋳畫の字を指して㋮晝の字と爲し、舊本差錯すと謂ふが如き、退之が見識を以てせば便ち改め了るべし。而るに只だ此くの如く論じて㋘書中に在くとは何ぞや、亦是れ法を識る者は懼るゝのみ。圭峯の密禪師、

破執着不壞假名論といふ、唐の地婆訶羅の譯、二卷あり。
㋡相成就とは、法界の相成就なり。
㋧眞の實有とは、凡夫の實有に同じて言ふ、法界の德相は斷不斷を離る、若し凡夫所執の實有の如きを、相成就といはば、此相滅する時は名けて斷となさん、然れども法界緣起の法は本と生滅を離る。
㋤生を等、凡夫の認むる實有は生あるが故に、又滅あるなり。
㋫又人のより何を以ての故にまでは論文にあらず、論を發揮せんが爲に大惠之を加ふるなり。
㋰一切法は因緣に由つて生ず、因緣既に自性なし、所生の法亦無自性なり、何ぞ生の認むべきあらんや、故に生起の全體即無生なり、萬法既に無生ならば法の體性亦無自性にして、一と一切と互に鎔融無碍、もと思慮の境にあらず、何の生滅と說き斷常と說かんや、是れ法界の眞相なり。
㋒性と說く等とは大惠が論の法界相の相の字を通譯するなり、性とは法性の理なり、相とは法界緣起の事相即ち宇宙萬有をいふ、法性の全體が隨緣生起して萬有となり、萬有の全體が法性にして、理事無碍なれば、性といふも相といふも倶に得たり、されど性と說かば、人の事相の外に別に理性ありと誤認せんことを恐れて相といひしなりと。既に一切法は事理無碍にして、生なく滅もなければ昭明が無斷無滅といひし所以なり。
㋼强ひて等、孫知縣の書なき故に節目を生ずるの意を知る能はざるも、强を以て之を推すに孫が功德施論を解して、相

圓覺經の疏鈔を造る、密は圓覺に於て證悟の處ありて、方に敢て筆を下す。㋫圓覺經の中の一切衆生皆圓覺を證すといふを以て、㋙圭峯、證を改めて具と爲し、譯者の訛なりと謂へり。而も梵本を見ざれば亦只だ此くの如くに論じて、疏中に在いて敢て便ち經を改め正さず。㋓後來泐潭の眞淨和尙、皆證論を撰す、論の內に㋢痛く圭峯を罵りて、之れを㋐破凡夫臊臭の漢と謂ふ。若し一切衆生皆圓覺を具して而して證せずんば、畜生は永く畜生と作り、餓鬼は永く餓鬼と作らん。盡十方世界㋚都盧て是れ箇の㋖無孔の鐵鎚にして、更に㋭一人の眞を發して元に歸する無し、凡夫も亦解脫を求むることを須ひざるべし。何を以ての故に、一切の衆生は皆已に圓覺を具して亦證を求むることを須ひざるが故

を拂ふの義となす。然るに此論は相を拂除せず、これ孫の謬なり。
㋨第八段、重れて古人を引いて、猥りに經文を削るべからざることを論ず。
㋔臆解は臆斷の義解なり。
㋗韓退之、唐書列傳第百一に云く、「韓愈字は退之、鄧州南陽の人なり、卒して禮部尙書を贈られ、諡して文と曰ふ云云」。論語等とは、公冶長篇に出づ。此事は論語筆海に論せり。
㋳畫の字は誤、一に晝に作る。
㋮晝の字は誤、一に畫に作るを正とす。
㋘書中とは論語筆海を指す。
㋫圓覺經第四、彌勒章。
㋙疏に云く、「譯經の訛なり、應に諸の衆生皆圓覺を有りと證すと云ふべし」と。これ圭峰は決然として之を改むるにあらず、文字の足らざるをいふのみ、然るに今の文に直截に證を改め等といふ、而して復た有を具とするは具有と熟して其義同じきが故のみ。
㋓泐潭の名は諸傳に出づるも未だ其所在を詳にせず、按ずるに石門山の谿の名か、傳燈には洪州泐潭といへり、然らば此は南昌府にあり、江西名勝志一。眞淨文禪師は僧寶傳二十三に出づ、又續燈十三。皆證論は今流傳せず。
㋢痛く等は、僧寶傳の眞淨傳に出づ、これ舒王、即ち王荊公の問に答へしなり。
㋐破等は、雲門錄中に云く、此れは方言なりと、何孟春、餘冬序錄四十八に雲漢志を引いて云く、「醜惡、之を潑賴と謂ふ」と、破の音は潑なり、然らば此れは潑泿潑賴のいひなり、凡夫とは生死海に迷惑流

に。(メ)左右、京師の藏經本を以て是と爲して、遂に京本を以て據となす。京師の藏本の若きは(ミ)外州府より納め入る。徑山の(シ)兩藏經の如きも、皆是れ(ヱ)朝廷全盛の時に賜はり到らしむ。亦是れ外州府の(ヒ)經生の寫す所なり。萬一錯あるとも又卻つて如何んが改め正さんや。(モ)左右若し人我無くんば、定ず妙喜が言を以て至誠なりとなして、必ず(セ)古今の一大錯の上に泥在せざれ。若し己見を執して是となして、決して改め削りて一切の人の唾罵することを要せんと欲せば、(ス)版に刊りて印行するに一任す、妙喜も亦(イ)只だ隨喜讃歎することを得んのみ。公、既に(ロ)得々として人をして經を以て來りて印可を求めしむ、(ハ)相識にあらずと雖も、法を以て親となすが故に、覺えず忉々怛々として(ニ)

轉するものを凡夫といふ、凡は庸なり、輕なり、輕賤の稱なり。臊は犬豕の膏臭きなり。

(サ)都盧は遊仙窟の註に云く「大空の義」と、即ち全體の義なり、放光般若七に出づ。

(キ)無孔の鐵鎚とは、用ひる處なきをいふ。

(ユ)一人等とは、楞嚴經九。

(メ)第九段、孫知縣の但だ京師の藏本に據るを云ふ。

(ミ)外州府とは京師の外を指していふ。或は高麗、印度などを指すは鑿說なり。

(シ)兩藏經とは、叢林東西の兩藏經なり。百丈清規下の知藏に云云。

(ヱ)全盛とは唐詩紀二十四に。

(ヒ)經生とは、本邦に云ふ、筆耕の類なり。品字箋に云く「生とは人の如し、俗に老人を老生、壯丁を壯生と言ふが如し」。元史列傳四十七に「又唯だ佛經を寫す、之を書生と謂ふ」と。

(モ)第十段、他の取捨に任して許縱す、人我とは、實に人間なるものがあると認め、隨つて自己、おれが、心得て居るを人執とも我執とも、或は人我見などといふ、即ち五蘊が假りに和合して成れる人身の上に常一主宰の我なる者の實在せるが如くに思はば、自他を區別するをいふ。

(セ)古今とは、古今の人をいふ、錯はやすりなり、磨なり、厲石なり。泥は滯なり。增韵に云く、執して通ぜざるなり。

(ス)版に刊るは夢溪筆談十八、事物紀原七、揮麈餘話四。印行とは、普通には活字印行をいふ、此は板に鐫るをいふ。

(イ)只だ等は、世間底の欣慕稱美の語をなし去るの意。

(ロ)得得は禪月詩集二十。

相觸忤す、公の至誠を見て所以に更に情を留めず。(ホ)左右決して敎乘を窮めて奧義に造らんと欲せば、當に一りの(ヘ)名行の講師を尋ねて一心一意に之れに參詳して、徹頭徹尾ならしめて、一等に是れ心を(ト)敎綱に留むべし。若し無常迅速生死事大に己事未だ明めざれば、當に一心一意に一の(チ)本分の作家の能く人の(リ)生死の窠窟を破する者を尋ねて、伊が與に(ヌ)死工夫を著けて厮崖むべし。忽然として(ル)桼桶を打破せば、便ち是れ徹頭の處ならん。(ヲ)若し只だ是れ談柄を資けて、我れ博く群書を極めて通達せずといふこと無く、(ワ)禪も我れ也た會せり、敎も我れ也た會せり、又能く前輩の諸の譯主講師の不到の處を檢點し得たりと道ふて、我能我解を逞しうせんと要せば、則ち(カ)三敎の聖人都て檢點す

(ハ)相の字の上に「我れ元」を加へ見よ。

(ニ)觸忤は碧巖四に出づ。忤は逆ふなり、戻るなり。

(ホ)第十一段、一轉して生死事大を決了せんことを勸薦す。

(ヘ)名行とは、名聲人に勝れ、行業の正しき師の意。梁僧傳の序。講師とは經論を講じ、學徒を提撕するをいふ。華嚴玄談一。

(ト)敎綱は敎相の細目は且く措いて敎門の大綱要旨に着眼せんことを敎ふるなり。碧巖七十八則の評に云云す。

(チ)本分の作家とは、自己の本分を體得し法に自在を得て爲人度生する宗匠をいふ、作家とは作者の家の謂にして、衲僧家といふが如し。

(リ)生死の窠窟とは、三界二十五有の迷界をいふ。

(ヌ)死とは、痛切の辭なり、即ち死は盡なり窮なり、身命を賭して努力工夫するをいふ。

(ル)桼桶は前に出づ。

(ヲ)第十二段、警策して結す。從容たる大篇此に到つて活機を以て活弄するなり。談柄は、晉書列傳十三、王衍傳に出づ。

(ワ)禪等とは、儒家の義は言ふに及ばず、禪も云ふなり。

(カ)三敎は、道の老子と儒の孔子と釋敎となり。

(ヨ)人の云云とは、上の印可を求むの語に應ず、而して其自ら言ふ所の辭を結歸す。

(タ)放行とは、此は世間に流布すといふの義なり。

(レ)張の傳は宋史列傳百四十八に出づ、三十八歲にして卒せり。萬姓統譜三十九。此書は師七十一歲の時の作。

(ソ)第一段、入道の用心を示す。

(ツ)方寸をして虛豁豁地とは、胸中に一物なく、知解情慮を絕

べし。亦必ずしも更に㋵人の印可を求めて、然る後に㋟放行せじ、如何ん如何ん。

㋹張舍人狀元に答ふ　安國

㋞左右、決して此の事を究竟せんと欲せば、但だ常に㋡方寸をして虛豁豁地ならしめて、物來らば即ち應ぜよ、人の射を學んで久々にして的に中るが如くならん。見ずや㋧達磨、二祖に謂つて曰く、「汝但だ外諸緣を息め內心喘ぐこと無く、㋤心牆壁の如くにして以て道に入るべし」といふことを、如今の人纔かに此の說を聞けば、便ち差排して㋶頑然無知の處に向つて硬く自ら遏捺して、心牆壁の如くなることを得去らんと要す。㋰祖師の所謂「錯り認めば何ぞ曾て方便を解せん」といふ者なり。巖頭云く、「㋒纔かに恁麼なれば便ち不恁麼なり、是句も亦剗り

するをいふ。

㋧達磨等とは前に出づ。內心喘ぐとは疾息なり、是れ心の起滅するを、氣の出入する喘息の切なるに喩ふ。

㋤心牆等とは一物にも倚らず、虛豁豁地なるをいふ。

㋶頑然は痴なり、鈍なり。即ち謬つて方便の語を解して、强ひて心を遏捺し、頑然無知の處を以て虛豁豁地となさんとすと。

㋰祖師とは六祖大師なり、六祖檀經、傳燈五、會元二。六祖旁出の信州知常禪師に示す六祖の偈に云く、「一法を見ざれば無の見を存す、大に浮雲の日面を遮るに似たり。一法を知らざれば空知を守る、遂に大虛に閃電を生ずるが如し、此の知見瞥然として興り、錯つて認めば何ぞ曾て方便を解せん、汝當に一念自ら非を知り、自己の靈光常に顯見すべし」と。錯り認むとは不見不知の處を認むるなり。

㋒纔かに等とは、今之を引き合に出すの意は、頑然無知の處に向つて心を牆壁の如くならしめんと欲す、これ此の恁麼の處なり。

㋼啐地等の語は前に出づ。これ大悟をいふ。此に因つて之を觀るに、上に所謂是の句も亦剗る等は、是れ猶ほ方便にして未悟の時なり、されど既に言語の爲に轉ぜられず、況んや大悟の境界に到らんをや。

㋨月を見る等は、傳燈三十、丹霞の翫珠吟の語なり、指と程とは並に方便に喩ふ、見道の後は入道の方便を用ひず、然らば張舍人が此位に到るといふにあらず、但だ公、此くの如くに着去れとなり。

非句も亦剗る」と。這箇便ち是れ外諸緣を息め、內心喘ぐこと無き底の樣子なり。㋼縱ひ未だ啐地に折し嚗地に破することを得ずとも、亦語言に轉ぜらるゝことを被らじ。㋨月を見て指を觀ることを休めよ、家に歸つて程を問ふことを罷めよ。㋔情識未だ破せずんば則ち㋗心火熠熠地なり、正當恁麼の時但だ只だ所疑底の話頭を以て提撕せよ。僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや。」州云く、「無」といふが如き、只管提撕し擧覺せよ。㋳左來も也た不是、右來も也た不是なり。又心を將つて悟を等つことを得ざれ、又擧起の處に向つて承當することを得ざれ、㋮又玄妙の領畧を作すことを得ざれ、㋘又有無の商量を作すことを得ざれ、又㋫眞無の無の卜度を作すことを得ざれ、又㋙無事甲裏に坐在することを得ざれ、又㋓擊石火閃電光の處に向つて會することを得ざれ。直に心を用ふる所なく、心の之く所無きことを得ん時、空に落ちんことを怕るゝこと莫れ、這裏却つて是れ好處なり。驀然として㋢老鼠、牛角に入つて便ち倒斷することを見ん。㋐此の事は難に非ず易に非ず、是れ夙に曾て般若の種智を種ゑ得ること深うして、曾て無始曠大劫より來に於て眞の善知識に承事して、正知

㋔情識、第二段、本參を授けて提撕せしむ。情の上に「然れども」を加へ見よ。

㋗心火等とは、凡夫の緣慮の心は念念生滅する故に智度論に蛇の舌に喩へり。

㋳左來右來して計較分別する莫れとの意。

㋮又玄妙は、意は若し深妙幽玄の解を作さば、便ち是れ鬼家の活計なり、此事元來靑天白日の如きが故に。

㋘又有無は、趙州の無字の話をいふ。

㋫眞無等は、別に眞無なきが故に。

㋙無事甲裏とは前に出づ。

㋓擊石云々は頓機の處に無の字をみよ。

㋢老鼠は、俗語なり、前に出づ。

㋐此の事、第三段、得力の難易を論ず。

㋚藏識とは、第八識を指すと。

正見を熏習し得、(サ)靈識の中に在りて、境に觸れ縁に遇ふて(キ)現行の處に於て、築著し磕著して、(ユ)萬人叢裏に在りて自家の父母を認得するが如くに相似たるを除く。恁麼の時に當つて、(メ)人に問ふことを著ざれ、自然に求覓する底の心馳散せず。(ミ)雲門云く、「説く時は卽ち有、説かざる時は便ち無なるべからず、(シ)商量するの時は便ち有、商量せざる時は便ち無なるべからず。」又自ら提起して云く、「且く道へ不商量の時是れ箇の甚麽ぞ」と。又人の會せざらんことを怕れて又自ら云く、「(ヱ)更に是れ甚麽ぞ」と。

(ヒ)近年以來禪に多途あり、(モ)或は一問一答して末後に一句を多くするを以て禪となす者あり。(セ)或は古人入道の因縁を以て頭を聚めて(ス)商確して云く、「這裏は是れ(イ)虛なり、那裏は是れ

(キ)現行とは、顯現行起にて、今は現成受用なり。
(ユ)萬人等とは、その獨露の處をいふ。意は夙慧あるが故に、本性を見得する難きにあらざるをいふ。
(メ)人に等は、冷煖自知の處。
(ミ)雲門等、下は易きにあらざることを論ず、雲門室中錄に見ゆ。說く時等とは、口頭の禪にして眞實の禪にあらざるが故に、物物の上に受用する能はざる底を謂ふ。
(シ)商量等の語は今世に流布する錄中になし。
(ヱ)更に等は、人謬つて云ふ、商量せざる時は便ち無と、故に云ふ、其無なる處、更に是れ甚麽ぞと看よと。
(ヒ)近年等、第四段、邪師を破す。
(モ)或は等は、是れ口頭禪なり、此れは問答を破するに非ず、問答其のものを以て禪とす、故に之を訶するなり。
(セ)古人等は、計較の禪をいふ、是れ亦人の爲に頌古を拈弄する等を訶するに非ず、今は叨りに分別計較し、之を以て禪となすをいふ。
(ス)商確とは、確は堅なり、正字通に榷に通用して、相爭較するなりと註せり。倶舍麟記に云く、「商確は商量なり」と、今の意は勝負優劣を相爭ふをいふ。
(イ)是れ虛とは、方便をいふ、下の實に對す。
(ロ)代は代語にて之に二種あり、一は現前の衆に代る師家の垂語にして、衆に下語せしめて契はざる時は自ら衆に代つて語を下すを代語といひ、又は別語といふ、雲門錄に其例多し、蓋し雲門に始まりしか。二は古人に代つて古則を擧揚して他の古人無語の處に代語

實なり、這語は玄なり、那語は妙といふて、(ロ)或は代し、(ハ)或は別するを禪とする者あり。(ニ)或は眼見耳聞を以て和會して(ホ)三界唯心萬法唯識といふ上に在いて禪とする者あり。(ヘ)或は無言無説を以て黑山下の鬼窟裏に坐在して、眉を閉ぢ眼を合して、之れを威音王那畔、父母未生の時の消息なりと謂ひ、亦之れを(ト)默而常照と謂つて禪となす者あり。此くの如き等の輩、妙悟せんことを求めずして悟を以て第二頭に落在すと爲し、悟を以て人を(チ)誑謼すと爲し、悟を以て(リ)建立なりと爲す。自ら既に曾て悟らず、亦悟ある底を信ぜず。妙喜常に衲子の輩に謂つて説く、「(ヌ)世間の工巧技藝すら若し悟處なければ、尚ほ其の妙を得ず。」(ル)況んや生死を脱せんと欲して、而して只だ(ヲ)口頭を以て靜を説いて

するなり。
(ハ)或は別とは、古人の語に別する別語といふ、卽ち先德の古則を擧揚せる中に、他の語を下せりと雖も、今我が意に契はず、別に一轉語を下す、之を別語といふ。例せば、古人の語を拈じて云く、若し是れ吾れならば便ち然らず、或は若し是れ我れならば是くの如くに道はん等と言つて別に語を下せるの類をいふ。今は只だ語言三時を以て禪となすをいふ。
(ニ)或は眼等は光影邊の禪なり、此事は見聞を離れず卽せずして、而して之を認めて和會するとなり。
(ホ)僧寶傳九永明章に云云す。華嚴十地品に云く、「三界の所有は但だ是れ一心」と、十地經第六地に云く、「三界は虛妄、皆是れ一心なり」と、宗鏡錄二、臨濟、會元十等。萬法唯識とは、唯識論七、同述記七に出づ。
(ヘ)無言等、此は默照邪禪なり、これは仰山の所謂安禪靜慮ならずんば、這裏に到つて茫然たるの語を謬り認めて、心、言を閉塞するを以て禪となし、解會轉た深きが故に、邪に入ること轉た深きなり。
(ト)默而等、永嘉集下に、優畢叉云云と。
(チ)誑はたぶらかす、惑はす、欺くなり。謼は誑なり、意は元來悟なくして而も悟ありと云つて人を誑すなりと。
(リ)建立は方便なり。
(ヌ)世間等とは、山谷詩集十に云く、「丹青の妙處は傳ふべからず」等と、莊子の五に云云。
(ル)況んや等は妙悟を拂ふを破するなり。
(ヲ)口頭等は默照邪禪に當る。

便ち(ワ)收殺せんと要するをや。大いに(カ)頭を埋めて東に向つて走りて西邊の物を取らんと欲するに似たり、轉た求むれば轉た遠く、轉た急なれば轉た遲し、此の輩を名けて可憐愍の者と爲す。教中に之を大般若を謗じ佛の慧命を斷ずる人と謂ふ。千佛出世すとも懺悔を通ぜじ、(ヨ)是れ善因なりと雖も返つて惡果を招ぐべきなり。(タ)寧ろ此の身を以て碎いて微塵の如くするとも、終に佛法を以て人情に當てじ、決して生死に敵せんと要せば、須らく是れ這の桼桶を打破して始めて得べし。切に忌む邪師に順に摩捋して(レ)冬瓜印子を將つて印定せらるることを被つて便ち我れは千了百當すと謂ふことを、此くの如きの輩、(ソ)稻麻竹葦の如し。(ツ)左右は聰明にして(ネ)識見あり、必ず這般の惡毒を受けじ。(ナ)然れど

(ワ)收殺とは合殺に同じ、うたひどめ、まひどめをいふ、卽ち事畢るをいふなり。

(カ)頭を埋むとは、俗語なり、無分曉をいふ。寒山詩、圜悟心要下に見ゆ。東に向ふ等は、計較を以て計較なき處に到らんと欲するなり、若し之を求めんと欲せば但だ須らく計較安排を離るべし。

(ヨ)是れ善因、傳燈二十八に出づ。計較安排を以て口に佛法を說くは惡業にあらず、是れ善因なり、而して默照禪を認めて妙悟を撥するは是れ惡果なり。

(タ)寧ろ等とは大慧平生の誓願なり、此れは下の決して生死云云の語を起さんが爲に、先づ之れを言ふて、人をして深く其虛にあらざることを信ぜしむるなり。

(レ)冬瓜等とは、惡知識、杜撰の長老の謾に印定するを冬瓜印子に喩ふるなり、碧巖九十八則の評に見ゆ。

(ソ)稻麻等とは、邪師邪徒の多きを喩ふ。法華方便品の偈、同戒環要解に云云す。

(ツ)第五段、如上の邪を開くの意を述ぶ。

(ネ)識見とは、目に見る所ありて、心に分別あるなり。物を知ること多ければ則ち識見增多なり。

(ナ)然れど等は、諸方の善知識に遍問するの時を謂ふ。

(ラ)千萬等、第六段、重れて工夫提撕の法を示す。

(ム)古德とは、潙山を指す、警策の文なり。

(ウ)天花等、碧巖第一則の評、傳燈十七、雲居篇、唐僧傳六、法雲の章。

(ヰ)凝なる等は、畢竟自己の事にあづからない意。

も亦用心すること切にして速効を求めんことを要し、覺えず知らずして他に染汚せられんことを恐る。故に筆に信せて葛藤すること如許す、明眼の人に覰見せらるれば、一場の敗闕なり、(ラ)千萬相聽せよ。只だ趙州一箇の無字を以て、日用應緣の處に提撕せよ、間斷することを要せざれ。(ム)古德言へることあり、「至理を研窮して悟を以て則と爲せよ」と。若し說き得て(ウ)天花亂墜すとも、悟らずんば總に(ヰ)是れ癡狂外邊に走るのみ。之れを勉めよ、忽にすべからず。

(ノ)湯丞相に答ふ　進之

(オ)丞相既に心を此の段の大事因緣に存す、(ク)缺減界の中の虛妄不實なると、或は逆、或は順、一一皆是れ(ヤ)機を發する時節なり。但だ常に方寸をして虛豁豁地ならしめて、日用做すべ

(ノ)湯の傳は、宋史列傳百三十二、丞相は杜氏通典三十一に云く、「秦悼武王二年に始めて丞相の官を置く、乃至金印紫綬、天助を丞けて萬機を理むることを掌る、秦に初に左右あり、二世に至りて中丞相あり、丞相の月俸錢は六萬云云」。日本の左右大臣に當ると、有云く、三公丞相にあらず、此は左右僕射をいふと。師七十一歲の作なり、年譜に紹興三十二年の處に湯丞相の韻に和するの偈あり。

(オ)第一段、用心を示す。

(ク)缺減界とは、娑婆世界のことなり、吾人の住する現世界は精神的にも、物質的にも滿足を得ること難く、事事物物が希求通りにならず、淨土の果報の滿足なるに同じからざるが故に缺減界といふ。缺減に三種あり、居家必用集に出づ。

(ヤ)機は發動の義、機根等と熟字す、根は物の根源にして能生の義、卽ち人類の佛教を修行し證悟し得る能力をいふ、今の文意は吾人の遭遇すべき逆境若しくは順境、其の他見聞覺知の一一は、皆本具の佛性覺體を開悟すべき能力を開發すべき好箇の時節なれば、平常ぼんやりとして日を過ごすなとの意なり。

(マ)分に等とは、前の樓樞密に答ふる書に云く、「但だ一切時に臨み緣に隨つて酬酢し、自然に這箇の道理に合著す」と、此意なり。

(ケ)第二段、工夫の法を示す。

(フ)生死の心とは、念念起滅の虛妄の心をいふ、これ次下に華嚴を引かんが爲に先づ之れを言ふ。

(コ)第三段、豫め悟後の境界を示す。

き底の事は㋮分に隨つて撥遣し、境に觸れ緣に逢ひ、時時に話頭を以て提撕せよ。速効を求むること莫れ、至理を硏窮して悟を以て則と爲せよ。㋘然も第一に心を存して悟を等つことを得ざれ。若し心を存して悟を等たば、則ち等つ所の心に道眼を障却せらるることを被らん。轉た急なれば轉た遲し、但だ只だ話頭を提撕せよ、驀然として提撕の處に向つて㋫生死の心、絕するときは則ち是れ歸家穩坐の處なり。㋙恁麼の處に到ることを得了らば、自然に㋓古人の種種の方便を透得して、種種の異解自ら生せじ。㋢敎中に所謂心の生死を絕し、㋐心の稠林を伐り㋚心の垢濁を浣ひ、心の執着を解くといへるものなり。執着の處に於て㋖心を動轉せしめ、動轉の時に當つて㋴亦動轉する底の道理あること

㋓古人の話則因緣をいふ。

㋢敎中とは、華嚴經六十三入法界品、解脫長者章。

㋐心の稠林とは、斷常等の異見をいふ、華嚴經三十八に十種の稠林を說けり、十地論十一。法華一、方便品に云く「邪見の稠林に入り、若しくは有若しくは無等、此諸見に依止して六十二見を具足す云云」。科註に云く「五見交加はりて稠林の茂密なるが如し、若し有に着せば是れ常見、若し無と著せば是れ斷見なり、此の兩に因るが故に、所以に六十二見を出生するなり」と。心とは、第六意識なり。

㋚心の垢濁とは、吾人の意識には貪瞋痴等の煩惱の垢が附着して同時に作用をなせり、故に所緣の境を實の如く取ること能はず、妄境に執着し隨つて境の爲に支配せられ束縛せられて、自由を得ざるなり、故に其垢濁を洗除し、執着を解脫するを要す。

㋖心を等、此れは大惠は一回此の田地に到りし人なれば、此くの如くに言ふなり。

㋴亦等、動轉するもの是れ何物ぞと、纔かに察覺すれば動轉底の道理なし。

㋱自然等は、傳燈十七、雲居章。

㋯珠等とは、拘泥執着せざるをいふ。

㋛撥は發なり、之を轉ずるなり。

㋽南陽等、第四段、邪師を轉破す。傳燈五、會元二、六祖旁出の忠國師なり。說法等とは、謂く、邪師は實法を與ふなり、邪師自ら實法を認め以て眞の歸處となす、故に之を以て人に與ふ、これ唯だ自ら迷ふのみにあらず、又人を迷昧するなり。野干鳴とは說法を指す、佛藏經北藏四。

となく、㋱自然に頭々上に明かに、物物上に顯れて日用應緣の處、或は淨、或は穢、或は喜或は怒、或は順或は逆、㋯珠の盤に走つて㋛撥せざれども自ら轉ずるが如くならん。這箇の時節に到ることを得れば、拈出して人に呈似することを得ず。人の水を飮んで冷煖自知するが如し。㋽南陽の忠國師言へることあり、「說法有所得なる是れを野干鳴と爲す」と。此の事は㋪青天白日の一見便見するが如し、眞實自ら見得する底は、邪師も㋲走作せしむること得ざるなり。前日亦嘗て面言して㋝此の事は傳授あるとなし、纔かに奇特玄妙ありと說かば、㋜六耳謀を同うせずといふの說、卽ち是れ相欺くことを。便ち好し拽住して劈面に便ち唾するに。㋑書生より宰相に做到る是れ世間法の中の最尊最貴なる

㋪青天白日とは、黑白分明なるをいふ、意は邪師の正不正を見わけること白日に物を見るが如しと、一見便見はこれ擇法眼なり。

㋲走作とは突出して事を作すをいふ。意は湯丞相、此の境界に到らば亦此くの如しと。

㋝此事等は、邪師の傳口令を破す、上に死語といふ是なり、總て言語には作用なき故に死語といふ、看經の眼を具すべしと言ふ如く、今傳授なしと云ふ底意には有の義あり、然し直に有と云ふべからず、故に無しといふのみ、故に六祖は黃梅の忍大師の處に於て三更入室す、心大師は袈裟を以て遮圍して、人をして說法を聞きかしめず、此等は是れ傳授の處なり、然らば一向に傳授なしと謂ふにあらず。

㋜六耳云云とは、意は但だ自ら知るべきをいふ。此れは耳語密談をいふ、譬へば密計せんと欲せば、三人同處に在る時は必ず其事漏れ易し、故に漏れざらしめんと欲せば、則ち或は但だ兩人相對して密に謀るべきなり。耳とは、耳に附して語るなり、六耳相集りて倶に謀らざるの謂なり。古云く、多人相會して計略せば其事漏ると、而し此の如き事は今の要にあらず、今の畢竟の意は若し自悟自證にあらざれば、本分の田地に到る能はざるをいふ。拽住とは大惠を……。

㋑第五段、有漏の善業は眞の佛法にあらざることを論ず。書生とは、史記百二十一儒林傳の上に「公は」を加へ見よ、書に辯ず。宰相とは、此れは三公中の宰相にあらずと。杜氏通典二十一。

㋺此の事とは、出世間法なり。

者なり。若し㋺此の事の上に向つて了却せずんば、即ち是れ虛しく㋩南閻浮提に來つて㋥打一遭す。㋭收因結果の時には一身の惡業を帶び得て去らん。㋬敎中に說く、癡福を作すは是れ第三生の寃なりと謂ふ。何をか第三生の寃と謂ふ、第一生には癡福を作して㋣性を見ず、第二生には癡福を受けて慚愧あることなければ、好事を做さずして一向に㋠業のみを作す。第三生には癡福を受け盡して好事を做さざれば、㋷殼漏子を脫却する時、㋦地獄に入ること箭を射るが如し。㋸人身は得難く㋾佛法には逢ひ難し、㋻此の身、今生に向つて度せずんば更に何れの生に向つてか此の身を度せん。㋕此の道を學せんには須らく決定の志あるべし。若し決定の志なくんば、則ち聲を聞いて卜する者の㋵人の

㋩南閻浮提とは、此世界を云ふ、前に之を註せり。法苑珠林四、名義集三等に出づ。
㋥一遭とは、一周の義なり、前に出づ。
㋭收因結果とは、諸事の成就するをいふ。今は此の世を去らんとするの時をいふなり。
㋬敎中とは、未詳、金剛經刊定記。癡福とは、此事に回向せずして謾に有漏の善事をなすを謂ふ。
㋣性とは、人人本具の佛性なり。華嚴離世間品。
㋠業のみを作すとは、惡業を作すをいふ。
㋷殼漏子は此れ第二生を離れて將に第三生に到らんとする時なり、俗語なり、五尺の形骸をいふ。徒然草にいふ、からきやうときのべにすてて云云、此れ殼漏子を指す。
㋦地獄、正に是れ第三生なり、證道歌に云く、住相の布施は生天の福なり、猶ほ仰箭の虛空の如し、勢力盡れば箭還つて墜ち、未來の不如意。
㋸人身等は、南本涅槃經三十一迦葉品なりと、冠註に云く、「小涅槃經の文なり」と。何れも未だ檢せず。梵網經に云く、「一たび人身を失へば萬劫にも復らず、壯なる色の停らざること猶ほ奔馬の如し」と。これ小事にあらざるが故に玆に之を勸勵す。
㋾佛法等は、法華經八。此二句は大般若三百九十一、成熟有生品。
㋻此身等は洞山价和尚、母に贈る書中の語なり。諸祖偈頌下。
㋕第六段、決定の志を立てんことを要す。決定等とは、實智慧を以て邪正を辨別すれば、人惑を受けず、又妙悟を以て決定をなすの義なり。擊を聞

東と說くを見ては便ち人に隨つて東に向つて走り、西と說けば便ち人に隨つて西に向つて走るが如くならん。若し決定の志あらば則ち把得住して主宰と作り得。㋟爛融の所謂設ひ一法の涅槃に過ぎたるあるも、吾は說く亦夢幻の如しと。㋹況んや世間の虛幻不實の法をや。更に甚麼の心情あつてか㋞之れと交渉を打せんや。願くは公、此の志を堅うして以て手に入ることを得て決定の義をなさば、則ち縱使ひ大地の有情盡く㋡魔王と作つて來つて惱亂せんと欲すとも、其の便を得る處あること無けん。㋧般若の上には虛しく棄つる底の工夫あることとなし。若し心を存して㋤上面に在かば、縱ひ今生に未だ了せずとも亦㋶種子を種ゑ得ること深からん。臨命終の時に亦業識に所牽を被つて諸の惡趣

くとは、上の黃門司に答ふる書中に出づ。
㋵人の等とは、東西とは喩なり、猶ほ此事を說くに彼事を說くと言ふが如し。めなし、どちとち、擊について、ましませで、般若を以て定量となさずんば皆此くの如し。大論三十に云云。
㋟爛融は傳燈牛頭章。此は邪師が種種の奇特玄妙を說くと雖も、而も彼の惑を被らざるなり。大論五十五等。
㋹況等は、邪師傳授の法に況す。
㋞之とは、邪師の口耳の上の傳授を指す。
㋡魔王とは、邪師を喩ふ。大般若四百六十六に、「大地、魔王となる云云」と。
㋧第七段、心を般若に寄せて失せざることを論す。虛等とは華嚴五十二、如來出現品に云云。意は一切處一切時一切事に於て小善根を種うるも存心の工夫なきが故に、虛しく棄つるなしと。六祖經三昧品に云云す。
㋤上面は猶ほ面前といふが如し、上に出づ。
㋶成佛の種子。
㋰殼漏子とは、將に今世を捨てんとするの時なり。
㋒後世の人趣に出頭し來るをいふ。我底とは本來の人を指す。
㋼獎は萬姓統譜二十三に出づ。獎提刑は事物紀原六に云云、景德四年六月、眞宗筆記六事の一に曰く「提點刑獄」と、七月詔して官を擇び諸路の刑獄公事を提點す等」と。此章は禪道佛法一如の義を明かにし、其の根本に達するの要徑を說く。
㋨第一段、佛事と禪語と異なきことを示す。蓋し獎提刑は、六度萬行を以て佛事となし、

に墮せず。(ム)殼漏子を換却して(ワ)頭を轉じ來るとも亦我底を昧すこと得じ、之れを察せよ。

(ヰ)樊提刑に答ふ　茂實

(ノ)能く佛事を行ずれども禪語を解せずと示諭せらる。能くすると解せざると別なく同なし、但だ能く行ずと知る者、卽ち是れ禪語なり。(オ)禪語を會して而して能く佛事を行ぜずんば、人の(ク)水底に在つて坐して渴すと叫び、(ヤ)飯籮裏に坐して飢うと叫ぶが如くと何ぞ異ならんや。當に知るべし、禪語は卽ち佛事、佛事は卽ち禪語なることを。能く行ずると能く解するとは、人に在つて(マ)法には在らず。若し更に(ケ)箇の裏に向つて同を覓め別を覓めば、則ち是れ(フ)空拳指上に實解を生じ、(コ)根境法中に虛しく揑怪す。(エ)却き行じて而も前まんことを求むるが如

無義味の語を以て禪語と爲す、これ言迹を解するを得ざるなり。故に大惠の意の謂く、根元を截斷せば則ち解せざるなしと。

(オ)禪語を會すとは、來書に云く、能く佛事を行じ等と、これ然らず、此れ亦來書の佛事を行ず云云の句に反影して、一邊を借りて言ふ。

(ク)水底に在るとは、佛事を行ずるに喩ふ、坐して渴すと叫ぶとは、禪語を解せざるを喩ふ。

(ヤ)籮とは竹を以て造りし籃なり、飯籮裏とは、佛事を行ずるに喩ふ、意は實に飯籮裏に坐し、實に水底に在らば何ぞ飢渴せんや、今も眞に佛事を行ぜば何ぞ禪語を解せざらんや、當に知るべし、禪語卽佛事、佛事卽禪語なることを。

(マ)法とは、能く行じ能く解すと知る者を云ふ、前の汪狀元に答ふる書中に、順背は人に在りて性にあらず云云と、其の意同じ。

(ケ)箇の字、一本に這に作る。箇は此に同じ、法を指す。

(フ)空拳指上とは、能く行じ能く解し、行ぜず解せずを指していふ。此事は能行能解等の上にあらざる故に。

(コ)根境法中は、能行能解等が此れ根境法なり、者裡に此事なし、故に虛しく揑怪といふ、終日解し終日說くとも終に此法にあづからざるが故に。怪の字を一に恠に作れり。

(エ)却行等は、淮南子九に出づ。意は能行能解を以て佛事を求めば、却行して前まんことを求むるが如し、能行能解は佛事にあらず禪語にあらず、故に終に斯事にあづからず、これ其理にあらざるをいふ。

し。(テ)轉た急なれば轉た遲く、轉た疎なれば轉た遠し。(ア)徑截に心地豁如たることを得んと要せば、但だ能くすると能くせざると、解すると解せざると、同なると同ならざると、別なると別ならざると、能く是くの如くに思量し、是くの如くに卜度する者を將つて、(サ)他方世界に掃向せよ。却つて掃ふべからざる處に向つて看よ、是れ有なるか是れ無なるか、是れ同なるか是れ別なるか、驀然として(キ)心思意想絕すれば、恁麼の時に當つて自ら人に問ふとを著ひざるべきなり。

(ユ)聖泉珪和尙に答ふ

(メ)既に外護者の心を存して相照すことを得、自ら人事を撥置して、頻に衲子の輩の與に(ミ)佛事を作すべし、久久にして自ら殊勝ならん。(シ)更に望むらくは室中之れが與に(ヱ)子細にして

(テ)急と遲と相背くの詞なるも、疎と遠とは同義なり、故に疎は恐らくは親の字の寫誤か。

(ア)徑截、第二段、妄解を捨て實工夫をなさんことを勸む。意は眞に佛事を行ぜば、必ず禪語を解すべしとなり。

(サ)他方等、計較卜度する者を他方世界に掃却し終れば、掃ふべからざる物現前す、これ有にあらず無にあらず、同にあらず別にあらず、一切なき處、これ達磨の所謂心牆壁の如きの類なり。

(キ)心思とは、心想の絕する時に自ら證悟すべしとなり。六祖の不思善不思惡、正與麼の時、那箇かこれ明上座の父母未生已前の本來の面目と拶ず、是れ掃ふべからざるの處なり、大慧錄下、九十六丁、玄提禪人に示す法語に云云す、皆一轍にして冷煖自知の處なり。

(ユ)普燈錄十六、溫州龍翔の竹庵士珪禪師にして、佛眼遠に嗣ぐ、政和の末、法を天寧に開く、會元二十、大惠の法從姪なり。

(メ)第一段、世俗を濶略して斯道を荷擔せんことを勸む。心を存して相照すとは庫司邊の事を照顧するをいふ。撥置とは、之を收めて一邊に除き置くをいふ。人事とは、世俗の事務なり、意は食輪は既に轉ずれば、但だ當に法輪を轉ずべしとなり。

(ミ)佛事とは、今は佛法商量等をいふ。

(シ)第二段、本分を以て、學者を接すべきを示す。

(ヱ)子細等とは、第二義門の處に於て學者を接すべからず、第一義本分の處に於て接すべきをいふ、峨侍者は、我が國師の會下に在つて二十五度、打

人情を容るることを得ざれ、伊と共に(ヒ)落草することを得ざれ。直ちに之に似すに本分の草料を以てして、伊をして自語自得せしめば、方に是れ尊宿、人の爲にする(モ)體裁なり。若し是れ伊が遲疑して薦まざるを見て便ち(セ)之れが爲に注脚を下さば、(ス)但だ他の眼を瞎却するのみに非ず、亦乃ち自家本分の手段を失却せん。(イ)人を得ざれば卽ち是れ吾輩の(ロ)緣法只だ此くの如し。若し一箇半箇の本分底を得ば、亦平昔の(ハ)志願に負かざるなり。

(ニ)鼓山の(ホ)逮長老に答ふ

(ヘ)專使來つて書幷に(ト)信香等を收めてより、(チ)開法、出世して道を石門に唱へ、從來する所を忘れず、(リ)岳長老の爲に(ヌ)拈香して(ル)楊岐の宗派を續ぐことを知る。既に已に(ヲ)箇の事を承當す、須らく(ワ)卓卓地にして徹頭徹尾ならしむることを做すべし。平昔の實證實悟底の一著子を以て、丈室に端居し、(カ)百二十斤の擔子を擔うて(ヨ)獨木橋上より過ぎて脚蹉き手跌へば、則ち(タ)自家の性命と和に保つべからざるが如くせよ。況んや復た人の與に釘を抽き楔を拔いて、他人を救濟せんをや。(レ)古德云く、「此の事は八十の翁翁の場屋に入るが如し、豈に是れ兒戲ならんや。」(ソ)又古德云く、「我れ若し一向に宗敎を擧揚せば、法堂前草深きこと一丈にして、須らく人を倩うて看院せしめて始めて得べし。」(ツ)巖頭每に云く、「未だ屙せざる已前に向つて、(ネ)一たび覷て便ち眼卓朔地なるべし」と。(ナ)晏國師の石門に跨がらざる句、(ラ)睦州の現成公案、儞に三十棒を放す。汾陽の(ム)無業の莫妄想、魯祖の

出せらる等の人情を容れざる處、還つて大慈悲なり。

(ヒ)落草とは、向上より地上に下りて人に接し、心と說き性と說くをいふ、碧巖三十四則。前に辯ず。

(モ)體裁とは、體格風裁なり、格式といふが如し、十八史略の註に、「體裁は猶ほ風致といふが如し」と。

(セ)之とは學者を指す。若し落草し注脚を下さば、枝蔓上に枝蔓を生じて、心を以て悟を等つに至るが故に。

(ス)緇門警訓下に出づ。

(イ)人を等、第三段、吾家は人を得るは多きにあらざることを論ず。

(ロ)緣法とは、因緣の法にて緣とは禪宗の機緣を指す、法は法則なり、恰俐具眼の士を得ると否とは宿緣に由るをいふ。

(ハ)志願とは、傳法度生の願なり、達磨の所謂、「我れ本と此の土に來るは法を傳へ、迷情を救はんが爲なり」と、是れなり。

(ニ)鼓山は福州閩縣に在り、白雲湧泉禪寺と號す、其の開山興聖神安國師は雪峰に嗣ぐ、鼓山に十境あり、石門は其の一なり。福縣名勝志。

(ホ)逮は會元二十に云く、「東禪の蒙庵思岳禪師の法嗣、宗逮禪師なり。」普燈二十一、續傳燈三十四等。此章は、學者の根器に隨つて拕泥することを戒む、卽ち宗師の體裁、本分を以て人を接すべきを示す。

(ヘ)第一段、書信を領す、專使とは、專ら其事の爲に使を發して他事を雜へざるをいふ。

(ト)信香とは、嗣法の信を表し、傳法の由來を識るをいふ、逮禪師は大慧の法孫なるが故に、信香を送りしなり。

(チ)開法とは師より得る所の法を開演するをいふ、出世とは佛の出世に準じていふ、法華方便品。

(リ)岳は前記の思岳禪師なり、普燈十八、汝達の宗派圖大惠法嗣の下に出づ。

(ヌ)拈香とは、舊說鈔に云く、「拈は燒の義、唯だ佛祖の前に燒香す、これ拈香なり」と、備用淸規達磨忌に曰く、「住持拈香の佛事を擧す」と。卽ち徹悟の人に對してすることにて、報恩、賞養等の意あり。

(ル)楊岐は舟峰補僧傳に。

(ヲ)箇の事とは、普通には本分を指していふ、今は道を唱へ人の爲にするをいふ。承當とは荷擔するをいふ。

(ワ)卓卓地は、獨立の貌、委委隨隨地ならざるをいふ。徹頭等は碧巖三十一則に。

(カ)百二十斤とは、丈室内に於てなす爲人度生の極めて重大なるをいふ、百二十斤とは此れは但だその重きをいふのみ。史記五十五、留侯世家に云云。

(ヨ)獨木橋とは、これ但だ其語勢を假るのみ、傳燈九、長慶章のと其意別なり。

(タ)自家等とは、萬仞の懸崖に墮して自ら尙ほ度すべからず、況んや他人を救濟することをやの意。

(レ)古德、第三段、廣く古人を引いて證す、八十の翁等は前に註す。

(ソ)又古德等、前には不好事に之を引く、今は好事に之を引く、巳下師家の峭峻を引く。

(ツ)此語は諸傳の巖頭章に之を載せず。未だ屙等とは、未だ言句を吐露せざる以前をいふ。

(ネ)一たび等とは、一見便見の靈利の漢をいふ。

(ナ)晏國師は雪峰存の法嗣、會元七。鼓山の神安章に云く、「鼓

凡そ僧の門に入るを見ては便ち轉身面壁して坐す。人の爲にせん時は當に㋻這般の體裁を昧さずして、方に從上の宗旨を失せざるべきのみ。㋼昔、潙山、仰山に謂つて曰く、㋨「法幢を建て宗旨を立するは、一方に於て五種の緣備つて始めて成就することを得」と。五種の緣とは謂く、㋔外護の緣、檀越の緣、㋗衲子の緣、土地の緣、㋳道の緣なり。聞く㋮霜臺趙公は是れ汝が請主なりと。㋘致政司業、鄭公は汝を送つて入院せしめしと。二公は㋫天下の士なり、此を以て之れを觀れば、汝は五種の緣に於て稍備はれり。衲子の㋙閩中より來る者ある每に、㋓法席の盛なると、檀越の歸向せると、士大夫の外護せると、㋢住持に魔障なきと、衲子雲のごとくに集まるとを稱歎せざるもの無し、以て色力未だ衰へざるの時を趁ふて頻りに衲子の爲に箇の事を激揚すべし。㋐手を垂るゝの際、須らく精彩を著けて㋚莽鹵なることを得ざるべし。㋖蓋し近年以來、一種㋴稗販の輩あり、到る處に㋱一堆一擔の㋯相似の禪を學得す。往往に宗師も㋛造次に放過して遂に㋽虛を承け響を接して、遞に相印授して、後人を誤り賺し、㋪正宗をして淡薄にして單

山尋常の道、更に一人の石門を跨らざるあり、須らく石門を跨らざるの句あるべし、作麼生か是れ石門を跨らざるの句」。傳燈九。

㋶睦州は睦州龍興寺に居し、迹を晦まし用を藏す、常に草履を製して密に道上に置く、乃ち陳蒲鞋の號あり、師、僧の來るを見て云く「現成公案、汝に三十棒を放す」と、僧云く「某甲、是の如し」と、傳燈十二。公案式目上に、三十棒を喫すべきの罪禍現成して之れあり、然るに今之を放過するなり。

㋰無業は馬祖の法嗣、僧俗歸嚮す。凡そ學者の問を致すあらば、師多く之に答へて云く、「莫妄想」と。傳燈八。魯祖も亦馬祖の法嗣、池州魯祖山の寶雲禪師なり、傳燈七。門に入るとは室中に入るの門也。

㋻這般の這は者に作るを是とす、事を指すの辭なり、事苑二に之を辯ず。體裁は格式なり。

㋼第四段、緣の備足することを喜ぶ。

㋨法幢等は、一方に於て法幢を建て宗旨を立つるの謂なり、楞嚴一。證道歌に曰く「法幢を建て宗旨を立つ、明明たる佛敕曹溪是れなり」と。五種の緣とは出所不明。

㋔外護の緣とは、官人等之を守護して魔障なからしむるをいふ。檀越の緣とは、衣、食、住の窮乏せざるをいふ。檀越とは、南海寄歸傳一、事苑五、名義集一等に出づ。正しくは陀那鉢底(Dānapati)といふ。施主と譯す、布施の主なり、寺院の信者を檀徒等といへるに同じ。施に財施、法施等あり、財物を施して他の窮乏を

へざるの時を趁ふて頻りに衲子の爲に箇の事を激揚すべし。

救ふを財施といひ、說法度生するを法施といふ、財施の主は多く在家の人、法施の主は主として出家の人なり、今は財施の主をいふ。梵漢兼擧とは未詳。

㋗衲子の緣は、諸方の學者來會し隨從するをいふ。土地の緣とは、地理の關係にして所住の處若し緣を闕かば自然に之を離れ去るが故に。

㋳道の緣とは、師家の所說所唱各各その家風あるが故に、學者は自らの機宜に隨つて之を追慕するをいふ。

㋮霜臺は杜氏通典二十二に云く、御史、風霜の任となり、不法を彈糾す、百僚震恐す、官の雄峻なる之れに比するなしと、此意を取つていふか、祕笈新書に、御史臺を以て霜稜といふ、蓋し日本の彈正臺に當る。趙公は未だ詳ならず。

㋘致政は、禮記註疏十六、同十一曲禮上、白虎通六。司業は、もと仕ふる所の官なり、事文新集三十一。鄭公は未詳。

㋫天下の士とは、天下高顯の士の謂なり。史記二十三。

㋙閩中は鼓山の所在地なり。

㋓法席の盛は、土地の緣に當る、他は知るべし。

㋢住持等は道緣に當る、魔障とは師家と學者と融和せざるをいふ。大品般若十六、不和合品、大般若三百三、四百四十。

㋐垂手不垂手とは是れ洞家の呼稱、碧巖四十三則の評に、學者の爲に泥に入り、水に入るをいふなり。

㋚莽鹵は事苑に云く「不分明の貌」と、莊子八則陽篇に云云す、君、政をなすに鹵莽する勿れ、民を治むるに滅裂する勿れ等、鹵莽は粗略にして心を用ひざるなり、滅裂は輕易なり。

㋖第五段、猥りに印可するを斥す。

㋴稗販は小販(ふれうり)の謂、惡學邪解の者の法を賣弄するをいふ。楞嚴六、同釋要鈔。

㋱一堆一擔は、臨濟錄に曰く、「三重五重、複子につつんで人をして見せしめず」と、是れなり。大簑子上に死老漢の語を抄すと、卽ち經教の語を鈔錄する等をいふ。

㋯相似禪とは、取相實法に依つて說くをいふ、前の汪狀元に答ふる書に「說いて似たることを得、形容して似たることを得るも、却つて見ず、却つて悟らざるを怕る」といふ是れなり。智論六十に云云す。衆生の常顚倒を破せんが爲に無常と說けば則ち無常を認むるの類なり。

傳直指の風、（モ）幾ど地を掃はしむることを致すに至る、子細にせずんばあるべからず。（セ）五祖師翁、白雲に住せし時、嘗て（ス）靈源和尙に答ふる書に云く、「今夏諸莊の顆粒、收めざれども以て憂とせず、其の憂ふべき者は一堂數百の衲子、一夏に一人の箇の狗子無佛性の話を透得するもの無きことなり。佛法の將に滅せんとするを恐るるのみ」と。汝看よ主法底の宗師の心を用ふるは、又何ぞ曾て（イ）產錢の多少、山門の（ロ）大小を以て重輕と爲し、米鹽の細（ハ）務を急切となし來らんや。（ニ）汝既に出頭して箇の善知識の名字を承當せば、當に（ホ）一味に本分の事を以て（ヘ）方來を接待すべし。有ゆる庫司の財穀は因を知り果を識る（ト）知事に分付して、司を分ち（チ）局を列ねて之れを掌らしめて、時時に大綱を提擧せよ。

（シ）造次等は、論語里仁篇の朱註に出づ。放過とは容易に許可するをいふ。

（エ）虛を承くとは、不實なるを喩へいふ。

（ヒ）正宗記十二に云云、又宗門と稱するは多く禪門に限る、宗鏡錄一。單傳直指は達磨宗なり。碧巖第一則。

（モ）幾どは絕無なるをいふ。

（セ）五祖等、第六段、財法の輕重をいふ。會元十九、聯燈十六、五祖法演禪師は綿州の人、白雲の端禪師の法嗣なり。相承を示さば、五祖—圓悟—大慧。故に今大慧より師翁といふなり、白雲は舒州に在り。

（ス）靈源は、會元十七、續燈二十六、僧寶傳三十、普燈六等に出づ。此語は靈源筆語に出づ。

（イ）產は五穀をいひ、錢は金錢なり。

（ロ）大小等は、大刹を重んじ、小刹を輕しとするなり。

（ハ）細務は孟子盡心篇上に云く、「知者は知らざることなし、當に之れを務むべきを急と爲す」と、朱子の註に云云す。

（ニ）汝等、第七段、寺務の處分を論す。

（ホ）一味は餘味を雜へざるなり、猶ほ專一といふが如し。

（ヘ）方來は、四方より來る者なり。孟子滕文公。

（ト）知事とは、釋氏要覽下に、主事に四員あり、一は監寺なり、監は總領の稱なり、寺院の主と稱せざる所以なり、蓋し長老を推尊す。二に維那、悅衆と譯す、授受の人をいふ。三に典座、次を典し、牀座を付す。四に直歲は、直は當るなり、一切の作務を掌る役なり、即ち年中寺內の修理を掌り、門窓等を修補し、動用の什物器具を修換し、山林田園の栽

僧を安ずること必ずしも多からざれ、日用の齋粥、常に（リ）後手をして餘あらしめ、自然に力を費さざるべきなり。（ヌ）衲子室中に到らば刄を下すこと緊しからんを要せよ、泥を拕き水を帶ぶることを得ざれ。（ル）雪峯の空禪師の如き、頃に（ヲ）雲居雲門に在りて相聚る、老漢、渠が自ら欺かずして是れ箇の佛法中の人なることを知る、故に一味に本分の鉗鎚を以て之れに似す。後來に自ら（ワ）別處に在りて打發す、大法既に明め、向の所受（カ）過底の鉗鎚をば一時に受用することを得て、方に知る妙喜が佛法を以て人情に當らざることを。去年一冊の語錄を送り得來る、造次顚沛にも臨濟の宗旨を失せず、今乘寮の中に送り、衲子の輩に看せしむ。老漢因に筆を援つて（ヨ）其の後に書して特に爲に（タ）發提し本分の衲子

種を提擧す、此等を知事といふ、即ち心、法道に通じて諸有に着せざる身を撰んで知事となす。

（チ）局は「やくやく」なり。

（リ）後手の手は助語なり。餘あるは之を以て不時の用に充つるなり。

（ヌ）第八段、本分を以て人を接すれば利益あることを證す。

（ル）泐潭の草堂淸禪師の法嗣、福州雪峯の東山慧空禪師なり。會元十八、普燈十。

（ヲ）雲居等は上に出づ、此れは海昏の雲門なり。建炎三、四年にして、師四十一、二歲の時。

（ワ）別處とは、靈源の省禪師の處なり。

（カ）過は助字なり、大慧下に在つて受けし所の鉗鎚を受用するなり。

（ヨ）其後に書すとは、大慧、其の語錄に跋するなり。

（タ）發提は、其語錄の語を助證するをいふ。此時、師六十五歲なり。

（レ）所以等、第九段、引證して上の意を結ぶ。古人とは、傳燈十五、洞山章に云云。

（ソ）若し已下は香嚴の語意、同じきが故に、今合せ用ふるなり。

（ツ）這箇等、古人の牓樣看るべし、泥を拕き水を帶ぶることを莫れ。

（ネ）只本分等、前の張侍郎に答ふる書には、衆生の機を備さにして機に隨つて接化せよと云ふ、これ前と矛盾するに似たり、然し佛祖の人の爲にするや、或は推し、或は控く、曾て一準ならず、實法の人に與ふるなきが故に、畢竟隨機はこれ權、本分を以て接するは是れ實なり、學者に利根の者少なるが故に、或はまま其機に隨ふのみ。

をして將來の說法の式と爲さしむ。若し老漢をして初め渠が爲に拕泥帶水して、老婆禪を說かしめば、眼開けて後、定めて我れを罵ること疑なけん。(レ)所以に古人云く、「我れ先師の道德を重んぜず、只だ先師の我が爲に說破せざることを重んず。(ソ)若し我が爲に說破せば豈に今日あらんや」と。便ち是れ這箇の道理なり。趙州云く、「若し老僧をして伊が根機に隨つて接せしめば、人自ら三乘十二分敎の他を接し了るあり。老僧が這裏は(ネ)只だ本分の事を以て人を接す、若し接不得ならば、自ら是れ學者の根性遲鈍なるなり。老僧が事に干からず」と。之を思へ之を思へ。

國譯大慧普覺禪師書下　終

(イ)大慧禪師、說法(ロ)四十餘年にして、言句天下に滿つ。(ハ)平昔參徒の編錄するを許さず、而も衲子私かに自ら傳寫して遂に(ニ)卷帙を成す。晚年に衆の力めて請ふに因つて乃ち流通することを許す。然れども(ホ)在會に先後あり、(ヘ)見聞に詳略あり、又賢士大夫の得る所の(ト)法語、各自に寶藏して盡く覩るに緣なし。今の收むる所殊に未だ盡さずと爲す。更に採集して別に後錄を爲らんことを(チ)俟つ。文昌、謹んで白す。

(イ)三十七歲にして圜悟に見えて大悟す。
(ロ)四十餘年は實は三十九年なり。
(ハ)平昔は猶ほ平生の如し。
(ニ)卷帙は、書卷なり、增韵に、「舒卷すべきを卷といひ、編次するを帙といふ」と。古には書は皆卷となす、後に方册となせしなり、故に今尙ほ古に順じて卷と稱す。松亭晤語一。
(ホ)在會は大惠の會下に在るなり。
(ヘ)見聞は衲子の見聞なり、略は功を用ふる少きを略といふと。
(ト)法語とは、論語子罕篇に法語の言能く從ふなからんかと。
(チ)俟つは天下の人に俟つなり。
○終に一言す、以上の註解は主として寫傳「大惠書泄聞」に據る、予其作者を知らずと雖も、願はくは後昆の眼目を開け。
(譯註者　齋藤探玄識す)

大慧普覺禪師書上

參學 慧然 錄
淨智居士 黃文昌 重編

答曾侍郎 天游 問書附

開、頃在長沙得圜悟老師書、稱公晚歲相從、所得甚是奇偉、念之再三、今八年矣、常恨未獲親聞緒餘、惟切景仰、某自幼年發心、參禮知識、扣問此事、弱冠之後、卽爲婚宦所役、用工夫不純、因循至今老矣、未有所聞、常自愧歎、然而立志發願、實不在淺淺知見之間、以爲不悟則已、悟則須直到古人親證處、方爲大休歇之地、此心雖未嘗一念退屈、自覺工夫終未純一、可謂志願大而力量小也、向者痛懇圜悟老師、老師示以法語六段、其初直示此事、後擧雲門趙州放下著、須彌山兩則因緣、令下鈍工、常自擧覺、久久必有入處、老婆心切如此、其奈鈍滯太甚、今幸私家塵緣都畢、閑居無佗事、政在痛自鞭策以償初志、第恨未得親炙教誨耳、一生敗闕已一一呈似、必能洞照此心、望委曲提警、日用當如何做工夫、庶幾不涉佗塗、徑與本地相契也、如此說話敗闕亦不少、但方投誠自難隱逃、良可愍也、至扣。

承叙及自幼年至仕宦、參禮諸大宗匠、中間爲科擧婚宦所役、又爲惡覺惡習所勝、未能純一

做工夫、以此爲大罪、又能痛念無常世間種種虛幻無一可樂、專心欲究此一段大事因緣、甚愜病僧意、然既爲士人、仰祿爲生、科擧婚宦、世間所不能免者、亦非公之罪也、以小罪而生大怖懼、非無始曠大劫來承事眞善知識、熏習般若種智之深、焉能如此、而公所謂大罪者、聖賢亦不能免、但知虛幻非究竟法、能回心此箇門中、以般若智水、滌除垢染之穢、清淨自居、從脚下去一刀兩段、更不起相續心足矣、不必思前念後也、既曰虛幻、則作時亦幻、受時亦幻、知覺時亦幻、迷倒時亦幻、過去現在未來皆悉是幻、今日知非則以幻藥復治幻病、病瘥藥除、依前只是舊時人、若別有人有法、則是邪魔外道見解也、公深思之、但如此崖將去、時時於靜勝中、切不得忘了須彌山、放下著兩則語、但從脚下著實做將去、已過者不須怖畏、亦不必思量、思量怖畏卽障道矣、但於諸佛前發大誓願、願此心堅固、永不退失、仗諸佛加被遇善知識、一言之下、頓亡生死、悟證無上正等菩提、續佛慧命以報諸佛莫大之恩、若如此則久久無有不悟之理、不見善財童子、從文殊發心、漸次南行、過一百一十城、參五十三善知識、末後於彌勒一彈指頃、頓亡前來諸善知識所得法門、復依彌勒敎、思欲奉觀文殊、於是文殊遙伸右手、過一百一十由旬、按善財頂曰、善哉善哉、善男子若離信根、心劣憂悔、功行不具、退失精勤、於一善根、心生住著、於少功德、便以爲足、不能善巧發起行願、不爲善知識之所攝護、乃至不能了知如是法性、如是理趣、如是法門、如是所行、如是境界、若周徧知、若種種知、若盡源底、若解了、若趣入、若解說、若分別、若證知、若獲得、皆悉不能、文殊如是宣示善財、善財於言下成就阿僧祇法門、具足無量大智光明、入普賢門、於一念中、悉見三千大千世界微塵數諸善知識、悉皆親近恭敬承事、受行其敎、得不忘念智莊嚴藏解脫、以至入普賢毛孔刹、於一毛孔行一步、過不可說不可說佛刹微塵數世界、與普賢等、諸佛等、刹等、行等、及解脫自在悉皆同等、無二無別、當恁麼時、始能回三毒爲三聚淨戒、回六識爲六神通、回煩惱爲菩提、回無明爲大智、如上遮一絡索、只在當人末後一念眞實而已、善財於彌勒彈指之間、尙能頓亡諸善知識所證三昧、況無始虛僞惡業習氣耶、若以前所作底罪爲實、則現今目前境界皆爲實有、乃至官職富貴恩愛悉皆是實、既是實則地獄天堂亦實、煩惱無明亦實、作業者亦實、受報者亦實、所證底法門亦實、若作遮般見解、則盡未來際、更無有人趣佛乘矣、三世諸佛、諸代祖師、種種方便、翻爲妄語矣、承公發書時、焚香對諸聖、及遙禮庵中而後遣、公誠心至切如此、相去雖不甚遠、未得面言、信意信手、不覺忉怛如許、雖若繁絮、亦出誠至之心、不敢以一言一字相欺、苟欺公則是自欺耳、又記得、善財見最寂靜婆羅門、得誠語解脫、過去現在未來諸佛菩薩、於阿耨菩提、無已退、無現退、無當退、凡有所求、莫不成滿、皆由誠至所及也、公既與竹椅蒲團爲侶、不異善財見最寂靜婆羅門、又發雲門書、對諸聖遙禮而後遣、只要雲門信許、此誠至之劇也、但相聽、只如此做工夫、將來於阿耨菩提成滿無疑矣。

又

公處身富貴而不爲富貴所折困、非夙植般若種智、焉能如是、但恐中忘此意、爲利根聰明所障、以有所得心在前頓放、故不能於古人直截徑要處、一刀兩段直下休歇、此病非獨賢士大夫、久參衲子亦然、多不肯退步就省力處做工夫、只以聰明意識、計較思量、向外馳求、乍聞知

識向聰明意識思量計較外、示以本分草料、多是當面蹉過、將謂從上古德有實法與人、如趙州放下著、雲門須彌山之類、是也、巖頭曰、却物爲上、逐物爲下、又曰、大統綱宗、要須識句、甚麼是句、百不思時喚作正句、亦云居頂、亦云得住、亦云歷歷、亦云惺惺、亦云恁麼時、將恁麼時、等破一切是非、纔恁麼、便不恁麼、是句亦剗、非句亦剗、如一團火相似、觸著便燒、有甚麼向傍處、今時士大夫、多以思量計較爲窟宅、聞恁麼說話、便道莫落空否、喩似舟未翻先自跳下水去、此深可憐愍、近至江西見呂居仁、居仁留心此段因緣甚久、亦深有此病、渠豈不是聰明、某嘗問之曰、公怕落空、能知怕者是空耶是不空耶、試道看、渠佇思欲計較祗對、當時便與一喝、至今茫然討巴鼻不著、此蓋以求悟證之心、在前頓放自作障難、非干別事、公試如此做工夫、日久月深、自然築著磕著、若欲將心待悟、將心待休歇、從脚下參到彌勒下生、亦不能得悟、亦不能得休歇、轉加迷悶耳、平田和尙曰、神光不昧、萬古徽猷、入此門來、莫存知解、又古德曰、此事不可以有心求、不可以無心得、不可以語言造、不可以寂默通、此是第一等入泥入水老婆說話、往往參禪人、只恁麼念過、殊不子細看是甚道理、若是箇有筋骨底、聊聞舉著、直下將金剛王寶劍、一截截斷此四路葛藤、則生死路頭亦斷、凡聖路頭亦斷、計較思量亦斷、得失是非亦斷、當人脚跟下、淨倮倮赤灑灑、沒可把、豈不快哉、豈不暢哉、不見昔日灌谿和尙、初參臨濟、濟見來便下繩牀驀胷擒住、灌谿便云、領領、濟知其已徹、卽便推出、更無言句與之商量、當恁麼時、灌谿如何思量計較祗對得、古來幸有如此牓樣、如今人總不將爲事、只爲麁心、灌谿當初若有一點待悟待證待休歇底心在前、莫道被擒住便悟、便是縛却手脚、遶四天下、拕一遭

也不能得悟、也不能得休歇、尋常計較安排底是識情、隨生死遷流底亦是識情、怕怖慞惶底亦是識情、而今參學之人、不知是病、只管在裏許頭出頭沒、敎中所謂隨識而行不隨智、以故昧却本地風光本來面目、若或一時放得下百不思量計較、忽然失脚蹋著鼻孔、卽此識情便是眞空妙智、更無別智可得、若別有所得別有所證、則又却不是也、如人迷時喚東作西、及至悟時、卽西便是東、無別有東、此眞空妙智與太虛空齊壽、只遮太虛空中、還有一物礙得佗否、雖不受一物礙、而不妨諸物於空中往來、此眞空妙智亦然、生死凡聖垢染著一點不得、雖著不得、而不礙生死凡聖於中往來、如此信得及見得徹、方是箇出生入死得大自在底漢、始與趙州放下著、雲門須彌山、有少分相應、若信不及放不下、却請擔取一座須彌山、到處行脚、遇明眼人、分明舉似、一笑。

又

老龐云、但願空諸所有、切勿實諸所無、只了得遮兩句、一生參學事畢、今時有一種剃頭外道、自眼不明、只管敎人死獦狚地休去歇去、若如此休歇、到千佛出世、也休歇不得、轉使心頭迷悶耳、又敎人隨緣管帶、忘情默照、照來照去、帶來帶去、轉加迷悶、無有了期、殊失祖師方便、錯指示人、敎人一向虛生浪死、更敎人是事莫管、但只恁麼歇去歇得來、情念不生、到恁麼時、不是冥然無知、直是惺惺歷歷、遮般底更是毒害、瞎却人眼、不是小事、雲門尋常見此輩、不把做人看待、彼既自眼不明、只管將冊子上語、依樣敎人、遮箇作麼生敎得、若信著遮般底、永劫參不得、雲門尋常不是不敎人坐禪向靜處做工夫、此是應病與藥、實無恁麼指示人處、不見黃

檗和尙云、我此禪宗、從上相承以來、不曾敎人求知求解、只云、學道早是接引之詞、然道亦不可學、情存學道、却成迷道、道無方所、名大乘心、此心不在內外中間、實無方所、第一不得作知解、只是說汝而今情量處爲道、情量若盡心無方所、此道天眞本無名字、只爲世人不識迷在情中、所以諸佛出來說破此事、恐儞不了、權立道名、不可守名而生解也、前來所說瞎眼漢、錯指示人、皆是認魚目作明珠、守名而生解者、敎人管帶、此是守目前鑑覺而生解者、敎人硬休去歇去、此是守忘懷空寂而生解者、歇到無覺無知如土木瓦石相似、當恁麼時、不是冥然無知、又是錯認方便解縛語而生解者、敎人隨緣照顧、莫敎惡覺現前、遮箇又是認著髑髏情識而生解者、敎人但放曠、任其自在、莫管生心動念、念起念滅、本無實體、若執爲實、則生死心生矣、遮箇又是守自然體、爲究竟法而生解者、如上諸病、非干學道人事、皆由瞎眼宗師錯指示耳、公既淸淨自居、存一片眞實堅固向道之心、莫管工夫純一不純一、但莫於古人言句上只管如疊塔子相似、一層了又一層、枉用工夫無有了期、但只存心於一處、無有不得底、時節因緣到來、自然築著磕著、噴地省去耳、不起一念還有過也無、云、須彌山、一物不將來時如何、云、放下著、遮裏疑不破、只在遮裏參、更不必自生枝葉也、若信得雲門及、但恁麼參、別無佛法指似人、若信不及、一任江北江南問王老、一狐疑了一狐疑。

又

細讀來書、乃知四威儀中無時間斷、不爲公冗所奪、於急流中常自猛省、殊不放逸、道心愈久愈堅固、深愜鄙懷、然世間塵勞如火熾然、何時是了、正在鬧中、不得忘却竹椅蒲團上事、平昔留心靜勝處、正要鬧中用、若鬧中不得力、却似不曾在靜中做工夫一般、承有前緣駁雜今受此報之歎、獨不敢聞命、若動此念、則障道矣、古德云、隨流認得性、無喜亦無憂、淨名云、譬如高原陸地不生蓮花、卑濕淤泥乃生此花、老胡云、眞如不守自性、隨緣成就一切事法、又云、隨緣赴感靡不周、而常處此菩提座、豈欺人哉、若以靜處爲是、鬧處爲非、則是壞世間相而求實相、離生滅而求寂滅、好靜惡鬧時、正好著力、驀然鬧裏撞翻靜時消息、其力能勝竹椅蒲團上千萬億倍、但相聽、決不相誤、又承以老龐兩句爲行住坐臥之銘箴、善不可加、若正鬧時生厭惡、則乃是自擾其心耳、若動念時、只以老龐兩句提撕、便是熱時一服淸涼散也、公具決定信、是大智慧人、久做靜中工夫、方敢說這般話、於佗人分上則不可、若向業識茫茫增上慢人前、如此說、乃是添佗惡業擔子、禪門種種病痛已具前書、不識曾子細理會否。

又

承諭、外息諸緣、內心無喘、可以入道、是方便門、借方便門以入道則可、守方便而不捨則爲病、誠如來語、山野讀之、不勝歡喜踊躍之至、今諸方泰桶輩、只爲守方便而不捨、以實法指示人、以故瞎人眼不少、所以山野作辨邪正說以救之、近世魔强法弱、以湛入合湛爲究竟者不可勝數、守方便不捨爲宗師者、如麻似粟、山野近嘗與衲子輩舉此兩段、正如來書所說、不差一字、非左右留心般若中念念不間斷、則不能洞曉從上諸聖諸異方便也、公已捉著欄柄矣、既得欄柄在手、何慮不捨方便門而入道耶、但只如此做工夫、看經敎幷古人語錄種種差別言句、亦只如此做工夫、如須彌山、放下著、狗子無佛性話、竹篦子話、一口吸盡西江水話、庭前柏

樹子話、亦只如此做工夫、更不得別生異解、別求道理別作伎倆也、公能向急流中時時自如此提撥、道業若不成就、則佛法無靈驗矣、記取記取、承夜夢焚香入山僧之室甚從容、切不得作夢會、須知是眞入室、不見舍利弗問須菩提、夢中說六波羅蜜與覺時同別、須菩提云、此義幽深、吾不能說、此會有彌勒大士、汝往彼問、咄、漏逗不少、雪竇云、當時若不放過隨後與一箚、誰名彌勒、誰是彌勒者、便見冰銷瓦解、咄、雪竇亦漏逗不少、或有人問只如曾待制夜夢入雲門之室、且道與覺時同別、雲門卽向佗道、誰是入室者、誰是爲入室者、誰是作夢者、誰是說夢者、誰是不作夢會者、誰是眞入室者、咄、亦漏逗不少。

又

來書細讀數過、足見辨鐵石心立決定志、不肯草草、但只如此崖到臘月三十日、亦能與閻家老子廝抵、更休說豁開頂門眼握金剛主寶劍坐毘盧頂上也、某嘗謂方外道友曰、今時學道之士、只求速效、不知錯了也、却謂無事省緣、靜坐體究、爲空過時光、不如看幾卷經、念幾聲佛、佛前多禮幾拜、懺悔平生所作底罪過、要免閻家老子手中鐵棒、此是愚人所爲、而今道家者流、全以妄想心想日精月華、呑霞服氣、尙能留形住世、不被寒暑所逼、況回此心此念、全在般若中耶、先聖明明有言、喩如太末蟲處處能泊、唯不能泊於火燄之上、衆生亦爾處處能緣、唯不能緣於般若之上、苟念念不退初心、把自家心識緣世間塵勞底、回來抵在般若上、雖今生打未徹、臨命終時、定不爲惡業所牽流落惡道、來生出頭、隨我今生願力、定在般若中現成受用、此是決定底事、無可疑者、衆生界中事不著學、無始時來習得熟、路頭亦熟、自然取之左右逢其原、須著撥置出世間學般若心、無始時來背違、乍聞知識說著、自然理會不得、須著立決定志與之作頭抵、決不兩立、此處若入得深、彼處不著排遣、諸魔外道自然竄伏矣、生處放敎熟、熟處放敎生、政爲此也、日用做工夫處、捉著欛柄、漸覺省力時、便是得力處也。

答李參政　漢老　問書附

邴、近扣籌室、伏蒙激發蒙滯、忽有省入、顧惟、根識暗鈍、平生學解、盡落情見、一取一捨、如衣壞絮行草棘中、適自纏繞、今一笑頓釋、欣幸可量、非大宗匠委曲垂慈、何以致此、自到城中、著衣喫飯、抱子弄孫、色色仍舊、既亡拘滯之情、亦不作奇特之想、其餘夙習舊障、亦稍輕微、臨別叮嚀之語、不敢忘也、重念始得入門、而大法未明、應機接物、觸事未能無礙、更望有以提誨、使卒有所至、庶無玷於法席矣。

示諭、自到城中、著衣喫飯、抱子弄孫、色色仍舊、既亡拘滯之情、亦不作奇特之想、宿習舊障、亦稍輕微、三復斯語、歡喜踊躍、此乃學佛之驗也、儻非過量大人、於一笑中百了千當、則不能知吾家果有不傳之妙、若不爾者、疑怒二字法門、盡未來際終不能壞、使太虛空爲雲門口、草木瓦石皆放光明、助說道理、亦不奈何、方信此段因緣不可傳不可學、須是自證自悟、自肯自休、方始徹頭、公今一笑頓亡所得、夫復何言、黃面老子曰、不取衆生所言說、一切有爲虛妄事、雖復不依言語道、亦復不著無言說、來書所說、既亡拘滯之情、亦不作奇特之想、暗與黃面老子所言契合、卽是說者名爲佛說、離是說者卽波旬說、山野平昔有大誓願、寧以此身代一切衆生受地獄苦、終不以此口將佛法以爲人情瞎一切人眼、公既到恁麼田地、自知此事不從人

得、但且仍舊、更不須問大法明未明應機礙不礙、若作是念、則不仍舊矣、承過夏後方可復出、甚恢病僧意、若更熱荒馳求不歇、則不相當也、前日見公歡喜之甚、以故不敢說破、恐傷言語、今歡喜既定、方敢指出、此事極不容易、須生慚愧始得、往往利根上智者、得之不費力、遂生容易心、便不修行、多被目前境界奪將去、作主宰不得、日久月深、迷而不返、道力不能勝業力、魔得其便、定爲魔所攝持、臨命終時、亦不得力、千萬記取前日之語、理則頓悟、乘悟併銷、事非頓除、因次第盡、行住坐臥、切不可忘了、其餘古人種種差別言句、皆不可以爲實、然亦不可以爲虛、久久純熟、自然默默契自本心矣、不必別求殊勝奇特也、昔水潦和尙、於採藤處問馬祖、如何是祖師西來意、祖云、近前來向儞道、水潦纔近前、馬祖攔胷一蹋蹋倒、水潦不覺起來拍手呵呵大笑、祖曰、汝見箇甚麼道理便笑、水潦曰、百千法門、無量妙義、今日於一毛頭上、盡底識得根源去、馬祖便不管佗、雪峯知鼓山緣熟、一日忽然驀胷擒住曰、是甚麼、鼓山釋然了悟、了心便亡、唯微笑擧手搖曳而已、雪峯曰、子作道理耶、鼓山復搖手曰、和尙何道理之有、雪峯便休去、蒙山道明禪師、趁盧行者至大庾嶺奪衣鉢、盧公擲於石上曰、此衣表信可力爭耶、任公將去、明擧之不動、乃曰、我求法非爲衣鉢也、願行者開示、盧公曰、不思善不思惡、正當恁麼時、那箇是上座本來面目、明當時大悟、通身汗流、泣涙作禮曰、上來密語密意外、還更有意旨否、盧公曰、我今爲汝說者、卽非密意、汝若返照自己面目、密却在汝邊、我若說得、卽不密也、以三尊宿三段因緣、較公於一笑中釋然、優劣何如、請自斷看、還更別有奇特道理麼、若更別有、則却似不會釋然也、但知作佛、莫愁佛不解語、古來得道之士、自己既充足、推己之餘、應機接物、

如明鏡當臺、明珠在掌、胡來胡現、漢來漢現、非著意也、若著意則有實法與人矣、公欲大法明、應機無滯、但且仍舊、不必問人、久久自點頭矣、臨行面禀之語、請書於座右、此外別無說、縱有說、於公分上盡成剩語矣、葛藤太多、姑置是事。

又

鄗、比蒙誨答、備悉深旨、鄗自有驗者三、一、事無逆順、隨緣卽應、不留胷中、二、宿習濃厚、不加排遣、自爾輕微、三、古人公案、舊所茫然、時復瞥地、此非自昧者、前書大法未明之語、葢恐得少爲足、當擴而充之、豈別求勝解耶、淨除現流、理則不無、敢不銘佩。

信後益增瞻仰、不識日來隨緣放曠、如意自在否、四威儀中、不爲塵勞所勝否、寤寐二邊得一如否、於仍舊處無走作否、於生死心不相續否、但盡凡情、別無聖解、公既一笑、豁開正眼消息頓亡、得力不得力、如人飮水冷煖自知矣、然日用之間、當依黃面老子所言、刳其正性、除其助因、違其現業、此乃了事漢、無方便中眞方便、無修證中眞修證、無取捨中眞取捨也、古德云、皮膚脫落盡、唯一眞實在、又如栴檀繁柯脫落盡、唯眞栴檀在、斯違現業、除助因、刳正性之極致也、公試思之、如此說話、於了事漢分上、大似一柄臘月扇子、恐南地寒暄不常、也少不得、一笑。

答江給事　少明

人生一世、百年光陰、能有幾許、公白屋起家、歷盡清要、此是世間第一等受福底人、能知慙愧、回心向道、學出世間脫生死法、又是世間第一等討便宜底人、須是急著手脚、冷却面皮、不得受人差排、自家理會本命元辰、敎去處分明、便是世間出世間一箇了事底大丈夫也、承連日

去與參政道話、甚善甚善、此公歇得馳求心、得言語道斷、心行處滅、差別異路、覷見古人脚手、不被古人方便文字所羅籠、山僧見渠如此、所以更不曾與之說一字、恐鈍置佗直候渠將來自要與山僧說話、方始共渠眉毛厮結理會在、不只恁麼便休、學道人若馳求心不歇、縱與之眉毛厮結理會何益之有、正是癡狂外邊走耳、古人云、親近善者、如霧露中行、雖不濕衣、時時有潤、但頻與參政說話、至禱至禱、不可將古人垂示言教、胡亂穿鑿、如馬大師遇讓和尚說法、云、譬牛駕車、車若不行、打車即是、打牛即是、馬師聞之言下知歸、遮幾句兒言語、諸方多少說法、如雷如霆如雲如雨底、理會不得、錯下名言、隨語生解、見與舟峯書尾杜撰解注、山僧讀之、不覺絕倒、可與說如來禪祖師禪底、一狀領過、一道行遣也、來頌子細看過、却勝得前日兩頌、自此可已之、頌來頌去、有甚了期、如參政相似、渠豈是不會做頌、何故都無一字、乃識法者懼耳、間或露一毛頭、自然抓著山僧痒處、如出山相頌云、到處逢人驀面欺之語、可與叢林作點眼藥、公異日自見矣、不必山僧注破也、某近見公頓然改變、爲此事甚力、故作此書、不覺縷縷、

答富樞密 季申

示諭、蚤歲知信向此道、晚年爲知解所障、未有一悟入處、欲知日夕體道方便、既荷至誠、不敢自外、據款結案葛藤、少許只遮求悟入底、便是障道知解了也、更別有甚麼知解爲公作障、畢竟喚甚麼作知解、知解從何而至、被障者復是阿誰、只此一句、顚倒有三、自言爲知解所障、是一、自言未悟甘作迷人、是一、更在迷中將心待悟、是一、只遮三顚倒、便是生死根本、直須一念不生、顚倒心絕、方知無迷可破、無悟可待、無知解可障、如人飮水冷煖自知、久久自然不作遮般見解也、但就能知知解底心上看、還障得也無、能知知解底心上、還有如許多般也無、從上大智慧之士、莫不皆以知解爲儔侶、以知解爲方便、於知解上行平等慈、於知解上作諸佛事、如龍得水、似虎靠山、終不以此爲惱、只爲佗識得知解起處、既識得起處、卽此知解便是解脫之場、便是出生死處、既是解脫之場、出生死處、則知底解底、當體寂滅、知底解底既寂滅、能知知解者不可不寂滅、菩提涅槃眞如佛性、不可不寂滅、更有何物可障、更向何處求悟入、釋迦老子曰、諸業從心生、故說心如幻、若離此分別、則滅諸有趣、僧問大珠和尚、如何是大涅槃、珠云、不造生死業是大涅槃、僧云、如何是生死業、珠云、求大涅槃是生死業、又古德云、學道人一念計生死、卽落魔道、一念起諸見、卽落外道、又淨名云、衆魔者樂生死、菩薩於生死而不捨、外道者樂諸見、菩薩於諸見而不動、此乃是以知解爲儔侶、以知解爲方便、於知解上行平等慈、於知解上作諸佛事底樣子也、只爲佗了達三祇劫空、生死涅槃俱寂靜故、既未到遮箇田地、切不可被邪師輩、胡說亂道、引入鬼窟裏、閉眉合眼作妄想、邇來祖道衰微、此流如麻似粟、眞是一盲引衆盲、相牽入火坑、深可憐愍、願公硬著脊梁骨、莫作遮般去就、作遮般去就底、雖暫拘得箇臭皮袋子、住便以爲究竟、而心識紛飛、猶如野馬、縱然心識暫停、如石壓草、不覺又生、欲直取無上菩提到究竟安樂處、不亦難乎、某亦嘗爲此流所誤、後來若不遇眞善知識、幾致空過一生、每每思量、直是叵耐、以故不惜口業、力救此弊、今稍有知非者、若要徑截理會、須得遮一念子、曝地一破、方了得生死、方名悟入、然切不可存心待破、若存心在破處、則永劫無有破時、但將妄想顚倒底心、思量分別底心、好生惡死底心、知見解會底心、欣靜厭鬧底心、一時

按下、只就按下處看箇話頭、僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、此一字子、乃是摧許多惡知惡覺底器仗也、不得作有無會、不得作道理會、不得向意根下思量卜度、不得向揚眉瞬目處揬根、不得向語路上作活計、不得颺在無事甲裏、不得向擧起處承當、不得向文字中引證、但向十二時中、四威儀內、時時提撕、時時擧覺、狗子還有佛性也無、云、無、不離日用、試如此做工夫看、月十日便自見得也、一郡千里之事、都不相妨、古人云、我這裏是活底祖師意、有甚麼物能拘執佗、若離日用別有趣向、則是離波求水、離器求金、求之愈遠矣。

又

竊知、日來以此大事因緣爲念、勇猛精進、純一無雜、不勝喜躍、能二六時中、熾然作爲之際、必得相應也未、寤寐二邊得一如也未、如未切不可一向沈空趣寂、古人喚作黑山下鬼家活計、盡未來際、無有透脫之期、昨接來誨、私慮左右必已耽著靜勝三昧、及詢直閣公、乃知果如所料、大凡涉世有餘之士、久膠於塵勞中、忽然得人指令向靜默處做工夫、乍得胷中無事、便認著以爲究竟安樂、殊不知似石壓草、雖暫覺絕消息、奈何根株猶在、寧有證徹寂滅之期、要得眞正寂滅現前、必須於熾然生滅之中、驀地一跳跳出、不動一絲毫、便攪長河爲酥酪、變大地作黃金、臨機縱奪殺活自由、利佗自利、無施不可、先聖喚作無盡藏陀羅尼門、無盡藏神通遊戲門、無盡藏如意解脫門、豈非眞大丈夫之能事也、然亦非使然、皆吾心之常分耳、願左右快著精彩、決期於此廓徹大悟、胷中皎然如百千日月、十方世界、一念明了、無一絲毫頭異想、始得與究竟相應、果能如是、豈獨於生死路上得力、異日再秉鈞軸、致君於堯舜之上、如指諸掌耳。

又

示諭、初機得少靜坐工夫亦自佳、又云、不敢妄作靜見、黃面老子所謂、譬如有人自塞其耳、高聲大叫、求人不聞、眞是自作障難耳、若生死心未破、日用二六時中、冥冥蒙蒙地、如魂不散底死人一般、更討甚閑工夫理會靜理會鬧耶、涅槃會上廣額屠兒、放下屠刀便成佛、豈是做靜中工夫來、渠豈不是初機、左右見此、定以爲不然、須差排渠作古佛示現、今人無此力量、若如是見、乃不信自殊勝、甘爲下劣人也、我此門中、不論初機晚學、亦不問久參先達、若要眞箇靜、須是生死心破、不著做工夫、生死心破、則自靜也、先聖所說、寂靜方便、正爲此也、自是末世邪師輩、不會先聖方便語耳、左右若信得山僧及、試向鬧處看狗子無佛性話、未說悟不悟、正當方寸擾擾時、謾提撕擧覺看、還覺靜也無、還覺得力也無、若覺得力便不須放捨、要靜坐時、但燒一炷香靜坐、坐時不得令昏沈、亦不得掉擧、昏沈掉擧、先聖所訶、靜坐時纔覺此兩種病現前、但只擧狗子無佛性話、兩種病不著用力排遣、當下怗怗地矣、日久月深、纔覺省力便是得力處也、亦不著做靜中工夫、只遮便是工夫也、李參政頃在泉南、初相見時、見山僧力排默照邪禪瞎人眼、渠初不平、疑怒相半、驀聞山僧頌庭前栢樹子話、忽然打破桼桶、於一笑中千了百當、方信山僧開口見膽無秋毫相欺、亦不是爭人我、便對山僧懺悔、此公現在彼、請試問之、還是也無、道謙上座已往福唐、不識已到彼否、此子參禪喫辛苦更多、亦嘗十餘年入枯禪、近年始得箇安樂處、相見時試問渠、如何做工夫、曾爲浪子偏憐客、想必至誠吐露也。

答李參政別紙　漢老

富樞頭在三衢時、嘗有書來問道、因而打葛藤一上、落草不少、尙爾滯在默照處、定是遭邪師引入鬼窟裏無疑、今又得書、復執靜坐爲佳、其滯泥如此、如何參得徑山禪、今次答渠書、又復縷縷葛藤、不惜口業、痛與剗除、又不知肯回頭轉腦、於日用中看話頭否、先聖云、寧可破戒如須彌山、不可被邪師熏一邪念、如芥子許在情識中、如油入麪、永不可出、此公是也、如與之相見、試取答渠底葛藤、一觀因而作箇方便、救取此人、四攝法中、以同事攝爲最强、左右當大啓此法門、令其信入、不唯省得山僧一半力、亦使渠信得及肯離舊窟也。

答陳少卿　季任

承諭、欲留意此段大事因緣、爲根性極鈍、若果如此、當爲左右賀也、今時士大夫多於此事、不能百了千當、直下透脫者、只爲根性太利、知見太多、見宗師纔開口動舌、早一時會了也、以故返不如鈍根者無許多惡知惡覺、驀地於一機一境上、一言一句下撞發、便是達磨大師出頭來、用盡百種神通、也奈何他不得、只爲他無道理可障、利根者返被利根所障、不能得啐地便折、嚗地便破、假饒於聰明智解上學得、於自己本分事上轉不得力、所以南泉和尙云、近日禪師太多、覓箇癡鈍人不可得、章敬和尙曰、至理亡言、時人不悉、强習佗事以爲功能、不知自性元非塵境、是箇微妙大解脫門、所有鑑覺、不染不礙、如是光明未曾休廢、曩劫至今、固無變易、猶如日輪遠近斯照、雖及衆色不與一切和合、靈燭妙明非假鍛鍊、爲不了故、取於物象、但如捏目妄起空花、徒自疲勞、枉經劫數、若能返照、無第二人、擧措施爲不虧實相、左右自言根鈍、試如此返照看、能知鈍者、還鈍也無、若不回光返照、只守鈍根更生煩惱、乃是向幻妄上重增幻妄、空花上更添空花也、但相聽、能知根性鈍者、決定不鈍、雖不得守著遮箇鈍底、然亦不得捨却遮箇鈍底、參、取捨利鈍在人不在心、此心與三世諸佛一體無二、若有二則法不平等矣、受敎傳心俱爲虛妄、求眞覓實、轉見參差、但知得一體無二之心、決定不在利鈍取捨之間、則便當見月亡指、直下一刀兩段、若更遲疑、思前算後、則乃是空拳指上生實解、根境法中虛捏怪、於陰界中妄自囚執、無有了時、近年以來有一種邪師、說默照禪、敎人十二時中、是事莫管、休去歇去、不得做聲、恐落今時、往往士大夫爲聰明利根所使者多是厭惡鬧處、乍被邪師輩指令靜坐、却見省力、便以爲是、更不求妙悟、只以默然爲極則、某不惜口業、力救此弊、今稍稍有知非者、願公只向疑情不破處參、行住坐臥不得放捨、僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、遮一字子、便是箇破生死疑心底刀子也、遮刀子欛柄、只在當人手中、敎別人下手不得、須是自家下手始得、若捨得性命、方肯自下手、若捨性命不得、且只管在疑不破處崖將去、驀然自肯捨命一下便了、那時方信靜時便是鬧時底、鬧時便是靜時底、語時便是默時底、默時便是語時底、不著問人、亦自然不受邪師胡說亂道也、至禱至禱、昔朱世英嘗以書問雲庵眞淨和尙云、佛法至妙、日用如何用心、如何體究、望慈悲指示、眞淨曰、佛法至妙無二、但未至於妙、則互有長短、苟至於妙、則悟心之人、如實知自心究竟本來成佛、如實自在、如實安樂、如實解脫、如實清淨、而日用唯用自心、自心變化、把得便用、莫問是之與非、擬心思量、早不是也、不擬心一一天眞、一一明妙、一一如蓮花不著水、心清淨超於彼、所以迷自心故作衆生、悟自心故成佛、而衆生卽佛、佛卽衆生、由迷悟故有彼此也、如今學道人、多不信自心、不悟自心、不得自

心明妙受用、不得自心安樂解脫、心外妄有禪道、妄立奇特、妄生取捨、縱修行、落外道二乘禪寂斷見境界、所謂修行恐落斷常坑、其斷見者、斷滅却自心本妙明性、一向心外著空滯禪寂、常見者不悟一切法空、執着世間諸有爲法以爲究竟也、邪師輩、敎士大夫、攝心靜坐、事事莫管、休去歇去、豈不是將心休心、將心歇心、將心用心、若如此修行、如何不落外道二乘禪寂斷見境界、如何顯得自心明妙受用、究竟安樂、如實淸淨解脫、變化之妙、須是當人自見得、自悟得、自然不被古人言句轉、而能轉得古人言句、如淸淨摩尼寶珠、置泥潦之中、經百千歲、亦不能染汚、以本體自淸淨故、此心亦然、正迷時爲塵勞所惑、而此心體本不曾惑、所謂如蓮花不著水也、忽若悟得此心本來成佛、究竟自在、如實安樂、種種妙用、亦不從外來、爲本自具足故、黃面老子曰、無有定法名阿耨多羅三藐三菩提、亦無有定法如來可說、若確定本體實有恁麼事、又却不是也、事不獲已、因迷悟取捨故、說道理有若干、爲未至於妙者、方便語耳、其實本體亦無若干、請公只恁麼用心、日用二六時中、不得執生死佛道是有、不得撥生死佛道歸無、但只看狗子還有佛性也無、趙州云、無、切不可向意根下卜度、不可向言語上作活計、又不得向開口處承當、又不得向擊石火閃電光處會、狗子還有佛性也無、無、但只如此參、亦不得將心待悟待休歇、若將心待悟待休歇、則轉沒交涉矣、

又

示諭、自得山野向來書之後、每遇鬧中嚲避不得處、常自點檢、而未有著力工夫、只遮嚲避不得處、便是工夫了也、若更著力點檢、則又却遠矣、昔魏府老華嚴云、佛法在日用處、行住坐臥處、喫茶喫飯處、語言相問處、所作所爲處、擧心動念、又却不是也、正當嚲避不得處、切忌起心動念作點檢想、祖師云、分別不生、虛明自照、又龐居士云、日用事無別、唯吾自偶諧、頭頭非取捨、處處勿張乖、朱紫誰爲號、丘山絕點埃、神通幷妙用、運水及般柴、又先聖云、但有心分別計較、自心見量者、悉皆是夢、切記取、嚲避不得時、不得更擬心、不擬心時、一切現成、亦不用理會利、亦不用理會鈍、總不干佗利鈍之事、亦不干佗靜亂之事、正當嚲避不得時、忽然打失布袋、不覺拊掌大笑矣、記取記取、此事若用一毫毛工夫取證、則如人以手撮摩虛空、只益自勞耳、應接時但應接、要得靜坐但靜坐、坐時不得執著坐底爲究竟、今時邪師輩、多以默照靜坐爲究竟法、疑誤後昆、山野不怕結怨、力詆之以報佛恩、救末法之弊也。

答趙待制 道夫

示諭、一一備悉、佛言、有心者皆得作佛、此心非世間塵勞妄想心、謂發無上大菩提心、若有是心、無不成佛者、士大夫學道多自作障難、爲無決定信故也、佛又言、信爲道元功德母、長養一切諸善法、斷除疑網出愛流、開示涅槃無上道、又云、信能增長智功德、信能必到如來地、示諭、鈍根未能悟徹、且種佛種子於心田、此語雖淺近、然亦深遠、但辦肯心、必不相賺、今時學道之士、往往緩處却急、急處却放緩、龐公云、一朝蛇入布裩襠、試問宗師甚時節、昨日事、今日尙有記不得者、況隔陰事、豈容無忘失耶、決欲今生打敎徹、不疑佛、不疑祖、不疑生、不疑死、須有決定信、具決定志、念念如救頭然、如此做將去、打未徹時、方始可說根鈍耳、若當下便自謂我根鈍、不能今生打得徹、且種佛種結緣、乃是不行欲到無有是處、某每爲信此道者說、漸覺得日

用二六時中省力處、便是學佛得力處也、自家得力處、佗人知不得、亦拈出與人看不得、盧行者謂道明上座曰、汝若返照自己本來面目、密意盡在汝邊是也、密意者便是日用得力處也、得力處、便是省力處也、世間塵勞事、拈一放一、無窮無盡、四威儀內、未嘗相捨、爲無始時來、與之結得緣深故也、般若智慧、無始時來、與之結得緣淺故也、乍聞知識說著、覺得一似難會、若是無始時來、塵勞緣淺、般若緣深者、有甚難會處、但深處放敎淺、淺處放敎深、生處放敎熟、熟處放敎生、纔覺思量塵勞事時、不用著力排遣、只就思量處、輕輕撥轉話頭、省無限力、亦得無限力、請公只如此崖將去、莫存心等悟、忽地自悟去、參政公想日日相會、除圍碁外還曾與說著遮般事否、若只圍碁、不曾說著遮般事、只就黑白未分處、掀了盤撒了子、却問佗索取那一著、若索不得、是眞箇鈍根漢、姑置是事。

答許司理　壽源

黃面老子曰、信爲道元功德母、長養一切諸善法、又云、信能增長智功德、信能必到如來地、欲行千里、一步爲初、十地菩薩、斷障證法門、初從十信而入、然後登法雲地、而成正覺、初歡喜地因信而生歡喜故也、若決定竪起脊梁骨、要做世出世間沒量漢、須是箇生鐵鑄就底方了得、若半明半晤、半信半不信、決定了不得、此事無人情、不可傳授、須是自家省發、始有趣向分、若取佗人口頭辦、永劫無有歇時、千萬十二時中、莫令空過、逐日起來應用處、圓陀陀地與釋迦達磨無少異、自是當人見不徹、透不過、全身跳在聲色裏、却向裏許求出頭、轉沒交涉矣、此事亦不在久參知識、偏歷叢林、而後了得、而今有多少在叢林、頭白齒黃了不得底、又有多少乍入叢林、一撥便轉千了百當底、發心有先後、悟時無先後、昔李文和都尉、參石門慈照、一句下承當、便千了百當、嘗有偈呈慈照云、學道須是鐵漢、著手心頭便判、直趣無上菩提、一切是非莫管、但從脚下崖將去、死便休、不要念後思前、亦不要生煩惱、煩惱則障道也、祝祝。

又

左右具正信、立正志、此乃成佛作祖基本也、山野因以湛然名公道號、如水之湛然不動、則虛明自照、不勞心力、世間出世間法、不離湛然、無纖毫透漏、只以此印、於一切處印定、無是無不是、一一解脫、一一明妙、一一實頭、用時亦湛然、不用時亦湛然、祖師云、但有心分別計較、自心見量者、悉皆是夢、若心識寂滅、無一動念處、是名正覺、覺既正則於日用二六時中、見色聞聲、齅香了味、覺觸知法、行住坐臥、語默動靜、無不湛然、亦自不作顚倒想、有想無想、悉皆清淨、既得清淨、動時顯湛然之用、不動時歸湛然之體、體用雖殊、而湛然則一也、如析栴檀、片片皆栴檀、今時有一種杜撰漢、自己脚跟下不實、只管敎人攝心靜坐、坐敎絕氣息、此輩名爲眞可憐愍、請公只恁麽做工夫、山野雖然如此指示公、眞不得已耳、若實有恁麽做工夫底事、卽是汚染公矣、此心無有實體、如何硬收攝得住、擬收攝向甚處安著、既無安著處、則無時無節、無古無今、無凡無聖、無得無失、無靜無亂、無生無死、亦無湛然之名、亦無湛然之體、亦無湛然之用、亦無恁麽說湛然者、亦無恁麽受湛然說者、若如是見得徹去、徑山亦不虛作此號、左右亦不虛受此號、如何如何。

答劉寶學　彥脩

卽日忝源、不審燕處悠然、放曠自如、無諸魔撓否、日用四威儀內、與狗子無佛性話一如否、於動靜二邊能不分別否、夢與覺合否、理與事會否、心與境皆如否、老龐云、心如境亦如、無實亦無虛、有亦不管、無亦不拘、不是聖賢、了事凡夫、若眞箇作得箇了事凡夫、釋迦達磨是甚麼泥團土塊、三乘十二分敎、是甚麼熱盌鳴聲、公既於此箇門中、自信不疑、不是小事、要須生處放敎熟、熟處放敎生、始與此事少分相應耳、往往士大夫、多於不意中、得箇瞥地處、却於如意中打失了、不可不使公知、在如意中、須時時以不如意中時節在念、切不可暫忘也、但得本莫愁末、但知作佛、莫愁佛不解語、遮一著子、得易守難、切不可忽、須敎頭正尾正、擴而充之、然後推己之餘、以及物、左右所得、既不滯在一隅、想於日用中、不著起心管帶、枯心忘懷也、近年已來、禪道佛法衰弊之甚、有般杜撰長老、根本自無所悟、業識茫茫、無本可據、無實頭伎倆、收攝學者、敎一切人如渠相似、黑漆漆地、緊閉却眼、喚作默而常照、彥沖被此輩敎壞了、苦哉苦哉、遮箇話、若不是左右悟得狗子無佛性、徑山亦無說處、千萬捋下面皮、痛與手段、救取這箇人、至懇至禱、然有一事、亦不可不知、此公淸淨自居、世味澹薄、積有年矣、定執此爲奇特、若欲救之、當與之同事、令其歡喜、心不生疑、庶幾信得及、肯轉頭來、淨名所謂、先以欲鈎牽、後令入佛智是也、黃面老子云、觀法先後、以智分別、是非審定不違法印、次第建立無邊行門、令諸衆生斷一切疑、此乃爲物作則、萬世楷模也、況此公根性、與左右迥不同、生天定在靈運前、成佛定在靈運後者也、此公決定不可以智慧攝、當隨所好攝、以日月磨之、恐自知非、忽然肯捨、亦不可定、若肯轉頭來、却是箇有力量底漢、左右亦須退步讓渠出一頭始得、比暐禪歸錄得渠答紫

巖老子一書、山僧隨喜讀一徧、讚歎歡喜累日、直是好一段文章、又似一篇大義、末後與之下箇謹對、不識左右以謂如何、昔達磨謂二祖曰、汝但外息諸緣、內心無喘、心如牆壁、可以入道、二祖種種說心說性、俱不契、一日忽然省得達磨所示要門、遽白達磨曰、弟子此回始息諸緣也、達磨知其已悟、更不窮詰、只曰、莫成斷滅去否、曰無、達磨曰、子作麼生、曰了了常知故、言之不可及、達磨曰、此乃從上諸佛諸祖所傳心體、汝今既得、更勿疑也、彥沖云、夜夢晝思、十年之間、未能全克、或端坐靜默、一空其心、使慮無所緣、事無所託、頗覺輕安、讀至此不覺失笑、何故、既慮無所緣、豈非達磨所謂內心無喘乎、事無所託、豈非達磨所謂外息諸緣乎、二祖初不識達磨所示方便、將謂外息諸緣、內心無喘、可以說心說性、說道說理、引文字證據、欲求印可、所以達磨一一列下、無處用心、方始退步、思量心如牆壁之語、非達磨實法、忽然於牆壁上、頓息諸緣、卽時見月亡指、便道了了常知、故言之不可及、此語亦是臨時被達磨拶出底消息、亦非二祖實法也、杜撰長老輩、既自無所證、便逐旋揑合、雖敎他人歇、渠自心火熠熠、晝夜不停、如欠二稅百姓相似、彥沖却無許多勞攘、只是中得毒深、只管外邊亂走、說動說靜、說語說默、說得說失、更引周易內典、硬差排和會、眞是爲佗閑事長無明、殊不思量、一段生死公案、未曾結絕、臘月三十日、作麼生折合去、不可眼光欲落未落時、且向閻家老子道、待我澄神定慮少時、却去相見得麼、當此之時、縱橫無礙之說、亦使不著、心如木石、亦使不著、須是當人生死心破始得、若得生死心破、更說甚麼澄神定慮、更說甚麼縱橫放蕩、更說甚麼內典外典、一了一切了、一悟一切悟、一證一切證、如斬一結絲、一斬一時斷、證無邊法門亦然、更無次第、左右既悟

狗子無佛性話、還得如此也未、若未得如此、直須到恁麼田地始得、若已到恁麼田地、當以此法門、興起大悲心、於逆順境中、和泥合水不惜身命、不怕口業、拯拔一切、以報佛恩、方是大丈夫所爲、若不如是、無有是處、彥沖引孔子稱易之爲道也屢遷、和會佛書中、應無所住而生其心爲一貫、又引寂然不動、與土木無殊、此尤可笑也、向渠道、欲得不招無間業、莫謗如來正法輪、故經云、不應住色生心、不應住聲香味觸法生心、謂此廣大寂滅妙心、不可以色見聲求、應無所住、謂此心無實體也、而生其心、謂此心非離眞而立處、立處卽眞也、孔子稱易之爲道也屢遷、非謂此也、屢者荐也、遷者革也、吉凶悔吝生乎動、屢遷之旨、返常合道也、如何與應無所住而生其心、合得成一塊、彥沖非但不識佛意、亦不識孔子意、左右於孔子之敎、出沒如游園觀、又於吾敎深入閫域、山野如此杜撰、還是也無、故圭峯云、元亨利貞、乾之德也、始於一氣、常樂我淨、佛之德也、本乎一心、專一氣而致柔、修一心而成道、此老如此和會、始於儒釋二敎、無偏枯無遺恨、彥沖以應無所住而生其心與易之屢遷、大旨同貫、未敢相許、若依彥沖差排、則孔夫子與釋迦老子、殺著買草鞵始得、何故一人屢遷、一人無所住、想讀至此必絕倒也。

答劉通判　彥沖

令兄寶學公、初未嘗知管帶忘懷之事、信手摸著鼻孔、雖未盡識得諸方邪正、而基本堅實、邪毒不能侵、忘懷管帶、在其中矣、若一向忘懷管帶、生死心不破、陰魔得其便、未免把虛空隔截作兩處、處靜時受無量樂、處閙時受無量苦、要得苦樂均平、但莫起心管帶、將心忘懷、十二時中、放敎蕩蕩地、忽爾舊習瞥起、亦不著用心按捺、只就瞥起處看箇話頭、狗子還有佛性也無、無、正恁麼時、如紅爐上一點雪相似、眼辨手親者一逴逴得、方知嬾融道、恰恰用心時、恰恰無心用、曲談名相勞、直說無繁重、無心恰恰用、常用恰恰無、今說無心處、不與有心殊、不是誑人語、昔婆修盤頭、常一食不臥、六時禮佛、淸淨無欲、爲衆所歸、二十祖闍夜多、將欲度之、問其徒曰、此偏行頭陀、能修梵行、可得佛道乎、其徒曰、我師精進如此、何故不可、闍夜多曰、汝師與道遠矣、設苦行歷於塵劫、皆虛妄之本也、其徒不憤、皆作色厲聲、謂闍夜多曰、尊者蘊何德行、而譏我師、闍夜多曰、我不求道、亦不顚倒、我不禮佛、亦不輕慢、我不長坐、亦不懈怠、我不一食、亦不雜食、我不知足、亦不貪欲、心無所希、名之曰道、婆修聞已、發無漏智、所謂先以定動、後以智拔也、杜撰長老輩、敎左右靜坐等作佛、豈非虛妄之本乎、又言、靜處無失、閙處有失、豈非壞世間相而求實相乎、若如此修行、如何契得嬾融所謂今說無心處、不與有心殊、請公於此諦當思量看、婆修初亦將謂、長坐不臥、可以成佛、纔被闍夜多點破、便於言下知歸、發無漏智、眞是良馬見鞭影而行也、衆生狂亂是病、佛以寂靜波羅蜜藥治之、病去藥存、其病愈甚、拈一放一何時是了、生死到來、靜閙兩邊、都用一點不得、莫道閙處失者多、靜處失者少、不如少與多、得與失、靜與閙、縛作一束、送放他方世界、却好就日用非多非少、非靜非閙、非得非失處、略提撕看、是箇甚麼、無常迅速、百歲光陰、一彈指頃便過也、更有甚麼閑工夫、理會得、理會失、理會靜、理會閙、理會多、理會少、理會忘懷、理會管帶、石頭和尙云、謹白參玄人、光陰莫虛度、遮一句子、開眼也著、合眼也著、忘懷也著、管帶也著、狂亂也著、寂靜也著、此是徑山如此差排、想杜撰長老輩、別有差排處也、咄、且置是事。

又

左右做靜勝工夫、積有年矣、不識於開眼應物處、得心地安閑否、若未得安閑、是靜勝工夫未得力也、若許久猶未得力、當求箇徑截得力處、方始不孤負平昔許多工夫也、平昔做靜勝工夫、只爲要支遣箇鬧底、正鬧時却被鬧底聒擾自家方寸、却似平昔不曾做靜勝工夫一般耳、遮箇道理只爲太近、遠不出自家眼睛裏、開眼便刺著、合眼處亦不缺少、開口便道著、合口處亦自現成、擬欲起心動念承當渠、早已蹉過十萬八千了也、直是無儞用心處、遮箇最是省力、而今學此道者、多是要用力求、求之轉失、向之愈背、那堪墮在得失解路上、謂鬧處失者多、靜處失者少、左右在靜勝處、住了二十餘年、試將些子得力底來看、則箇若將椿椿地底、做靜中得力處、何故却向鬧處失却、而今要得省力靜鬧一如、但只透取趙州無字、忽然透得、方知靜鬧兩不相妨、亦不著用力支撐、亦不作無支撐解矣。

答秦國太夫人

謙禪歸、領所賜敎幷親書數頌、初亦甚疑之、及詢謙子細、方知不自欺、曠劫未明之事、豁爾現前、不從人得、始知法喜禪悅之樂、非世間之樂可比、山野爲國太歡喜累日、寢食俱忘、兒子作宰相、身作國夫人、未足爲貴、糞埽堆頭、收得無價之寶、百劫千生、受用不盡、方始爲眞貴耳、然切不得執著此貴、若執著則墮在尊貴中、不復興悲起智、憐愍有情耳、記取記取。

答張丞相　德遠

恭惟、燕居阿練若、與彼上人同會一處、娛戲毗盧藏海、隨宜作佛事、少病少惱、鈞候動止萬福、從上諸聖、莫不皆然、所謂於念念中、入一切法滅盡三昧、不退菩薩道、不捨菩薩事、不捨大慈悲心、修習波羅蜜、未嘗休息、觀察一切佛國土、無有厭倦、不捨度衆生願、不斷轉法輪事、不廢敎化衆生業、乃至所有勝願、皆得圓滿、了知一切國土差別、入佛種性、到於彼岸、此大丈夫四威儀中、受用家事耳、大居士於此力行無倦、而妙喜於此亦作普州人、又不識還許外人挿手否、聞到長沙、即杜口毗耶、深入不二、此亦非分外、法如是故、願居士如是受用、則諸魔外道、定來作護法善神也、其餘種種差別異旨、皆自心現量境界、亦非他物也、不識居士、以爲如何。

答張提刑　暘叔

老居士所作所爲、冥與道合、但未能得団地一下耳、若日用應緣、不失故步、雖未得団地一下、臘月三十日、閻家老子、亦須拱手歸降、況一念相應耶、妙喜老漢雖未目擊、觀其行事、小大折中、無過不及、只此便是道所合處、到遮裏不用作塵勞想、亦不用作佛法想、佛法塵勞都是外事、然亦不得作外事想、但回光返照、作如是想者、從甚麼處得來、所作所爲時、有何形段、所作既辨、隨我心意、無不周旋、無有少剩、正當恁麼時、承誰恩力、如此做工夫、日久月深、如人學射、自然中的矣、衆生顚倒、迷己逐物、耽少欲味、甘心受無量苦、逐日未開眼時、未下牀時、半惺半覺時、心識已紛飛、隨妄想流蕩矣、作善作惡、雖未發露、未下牀時、天堂地獄在方寸中、已一時成就矣、及待發時、已落在第八、佛不云乎、一切諸根、自心現、器身等藏、自妄想相、施設顯示、如河流、如種子、如燈、如風、如雲、剎那展轉壞、躁動如猿猴、樂不淨處、如飛蠅、無厭足、如風火、無始虛僞習氣因、如汲水輪等事、於此識得破、便喚作無人無我智、天堂地獄不在別處、只在當人

半惺半覺、未下牀時方寸中、並不從外來、發未發、覺未覺時、切須照顧、照顧時亦不得與之用力爭、爭著則費力矣、祖不云乎、止動歸止、止更彌動、纔覺日用塵勞中、漸漸省力時、便是當人得力之處、便是當人成佛作祖之處、便是當人變地獄作天堂之處、便是當人穩坐之處、便是當人出生死之處、便是當人致君於堯舜之上之處、便是當人起疲氓於凋瘵之際之處、便是當人覆蔭子孫之處、到遮裏說佛說祖、說心說性、說玄說妙、說理說事、說好說惡、亦是外邊事、如此等事尚屬外矣、況更作塵勞中先聖所訶之事耶、作好事尚不肯、豈肯作不好事耶、若信得此說及、永嘉所謂行亦禪、坐亦禪、語默動靜體安然、不是虛語、請依此行履、始終不變易、則雖未徹證自己本地風光、雖未明見自己本來面目、生處已熟、熟處已生矣、切切記取、纔覺省力處、便是得力處也、妙喜老漢、每與箇中人說此話、往往見說得頻了、多忽之不肯將爲事、居士試如此做工夫看、只十餘日、便自見得省力不省力、得力不得力矣、如人飲水冷煖自知、說與人不得、呈似人不得、先德云、語證則不可示人、說理則非證不了、自證自得、自信自悟處、除曾證曾得、已信已悟者、方默默相契、未證未得、未信未悟者、不唯自不信、亦不信佗人有如此境界、老居士、天資近道、現定所作所爲不著更易、以佗人較之、萬分中已省得九千九百九十九分、只缺噴地一發便了、士大夫學道、多不著實理會、除却口議心思、便茫然無所措手足、不信無措手足處、正是好處、只管心裏要思量得到、口裏要說得分曉、殊不知錯了也、佛言、如來以一切譬喩、說種種事、無有譬喩能說此法、何以故、心智路絕不思議故、信知思量分別、障道必矣、若得前後際斷、心智路自絕矣、若得心智路絕、說種種事、皆此法也、此法既明、卽此明處、便是不思議大解脫境界、只此境界亦不可思議、境界既不可思議、一切譬喩亦不可思議、種種事亦不可思議、只遮不可思議底亦不可思議、此語亦無著處、只遮無著處底、亦不可思議、如是展轉窮詰、若事若法若譬喩若境界、如環之無端、無起處、無盡處、皆不可思議之法也、所以云、菩薩住是不思議、於中思議不可盡、入此不可思議處、思與非思皆寂滅、然亦不得住在寂滅處、若住在寂滅處、則被法界量之所管攝、敎中謂之法塵煩惱、滅却法界量、種種殊勝一時蕩盡了、方始好看庭前栢樹子、麻三斤、乾屎橛、狗子無佛性、一口吸盡西江水、東山水上行之類、忽然一句下透得、方始謂之法界無量回向、如實而見、如實而行、如實而用、便能於一毛端現寶王刹、坐微塵裏轉大法輪、成就種種法、破壞種種法、一切由我、如壯士展臂、不借佗力、師子游行、不求伴侶、種種勝妙境界現前、心不驚異、種種惡業境界現前、心不怕怖、日用四威儀中、隨緣放曠、任性逍遙、到得遮箇田地、方可說無天堂、無地獄等事、永嘉云、亦無人亦無佛、大千沙界海中漚、一切聖賢如電拂、此老若不到遮箇田地、如何說得出來、此語錯會者甚多、苟未徹根源、不免依語生解、便道一切皆無、撥無因果、將諸佛諸祖所說言敎、盡以爲虛、謂之誑惑人、此病不除、乃莽莽蕩蕩招殃禍者也、佛言、虛妄浮心多諸巧見、若不著有、便著無、若不著此二種、便於有無之間、博量卜度、縱識得此病、定在非有非無處著到、故先聖苦口叮嚀、令離四句、絕百非、直下一刀兩段、更不念後思前、坐斷千聖頂顎、四句者乃有、無、非有非無、亦有亦無是也、若透得此四句了、見說一切諸法實有、我亦隨順與之說有、且不被此實有所礙、見說一切諸法實無、我亦隨順與之說無、且非世間虛豁之無、見說一切諸法亦有亦無、我亦隨

順與之說、亦有亦無、且非戲論、見說一切諸法非有非無、我亦隨順與之說非有非無、且非相違、淨名云、外道六師所墮汝亦隨墮、是也、士大夫學道、多不肯虛却心、聽善知識指示、善知識纔開口、渠已在言前、一時領會了也、及至教渠吐露盡、一時錯會、正好在言前領略底、又却滯在言語上、又有一種、一向作聰明、說道理、世間種種事藝、我無不會者、只有禪一般、我未會、在當官處、呼幾枚杜撰長老來、與一頓飯喫却了、教渠恣意亂說、便將心意識記取遮杜撰說底、却去勘人一句來一句去、謂之厮禪、末後我多一句、儞無語時、便是我得便宜了也、及至撞著箇眞實明眼漢、又却不識、縱然識得、又無決定信、不肯四楞塌地放下、就師家理會、依舊要求印可、及至師家於逆順境中、示以本分鉗鎚、又却怕懼不敢親近、此等名爲可憐愍者、老居士妙年登高第起家、所在之處、隨時作利益事、文章事業皆過人、而未嘗自矜、一心一意、只要退步著實理會此段大事因緣、見其至誠、不覺忉怛如許、非獨要居士識得遮般病痛、亦作勸發初心菩薩、入道之資糧也、

答汪內翰　彥章

承杜門壁觀、此息心良藥也、若更鑽故紙、定引起藏識中無始時來生死根苗、作善根難、作障道難無疑、得息心、且息心、已過去底事、或善或惡、或逆或順、都莫思量、現在事得省便省、一刀兩段不要遲疑、未來事自然不相續矣、釋迦老子云、心不妄取過去法、亦不貪著未來事、不於現在有所住、了達三世悉空寂、但看、僧問、趙州狗子還有佛性也無、州云、無、請只把閑思量底心、回在無字上、試思量看、忽然向思量不及處、得遮一念破、便是了達三世處也、了達時、安排不得、計較不得、引證不得、何以故、了達處不容安排、不容計較、不容引證、縱然引證得、計較得、安排得、與了達底了沒交涉、但放教蕩蕩地、善惡都莫思量、亦莫著意、亦莫忘懷、著意則流蕩、忘懷則昏沈、不著意、不忘懷、善不是善、惡不是惡、若如此了達、生死魔何處摸揬、一箇汪彥章、聲名滿天下、平生安排得、計較得、引證得底、是文章、是名譽、是官職、晚年收因結果處、那箇是實、做了無限之乎者也、那一句得力、名譽既彰、與匿德藏光者、相去幾何、官職已做到大兩制、與作秀才時、相去多少、而今已近七十歲、儘公伎倆、待要如何、臘月三十日、作麼生折合去、無常殺鬼、念念不停、雪峯眞覺云、光陰倏忽暫須臾、浮世那能得久居、出嶺年登三十二、入閩早是四旬餘、佗非不用頻頻擧、己過還須旋旋除、爲報滿城朱紫道、閻王不怕佩金魚、古人苦口叮嚀、爲甚麼事、世間愚庸之人、飢寒所迫、日用無佗念、只得身上稍煖、肚裏不飢便了、只是遮兩事、生死魔却不能爲惱、以受富貴者較之、輕重大不等、受富貴底、身上既常煖、肚裏又常飽、既不被遮兩事所迫、又却多一件不可說底無狀、以故常在生死魔網中、無由出離、除宿有靈骨、方見得徹、識得破、先聖云、瞥起是病、不續是藥、不怕念起、唯恐覺遲、佛者覺也、爲其常覺、故謂之大覺、亦謂之覺王、然皆從凡夫中做得出來、彼既丈夫、我寧不爾、百年光景能得幾時、念念如救頭然、做好事尙恐做不辦、況念念在塵勞中而不覺也、可畏可畏、近收呂居仁四月初書、報曾叔夏、劉彥禮死、居仁云、交游中、時復抽了一兩人、直是可畏、渠邇來爲此事甚切、亦以瞥地回頭稍遲爲恨、比已作書答之云、只以末後知非底一念爲正、不問遲速也、知非底一念、便是成佛作祖底基本、破魔網底利器、出生死底路頭也、願公亦只如此做工夫、做得工夫漸

熟、則日用二六時中、便覺省力矣、覺得省力時、不要放緩、只就省力處崖將去、崖來崖去、和遮省力處、亦不知有時、不爭多也、但只看箇無字、莫管得不得、至禱至禱。

又

伏承、杜門息交、世事一切闊略、唯朝夕以某向所舉話頭提撕、甚善甚善、既辨此心、當以悟爲則、若自生退屈、謂根性陋劣、更求入頭處、正是含元殿裏問長安在甚處爾、正提撕時是阿誰、能知根性陋劣底、又是阿誰、求入頭處底、又是阿誰、妙喜不避口業、分明爲居士說破、只是箇汪彥章、更無兩箇、只有一箇汪彥章、更那裏得箇提撕底、知根性陋劣底、求入頭處底來、當知皆是汪彥章影子、並不干佗汪彥章事、若是眞箇汪彥章、根性必不陋劣、必不求入頭處、但只信得自家主人公及、並不消得許多勞攘、昔有僧問仰山、禪宗頓悟、畢竟入門的意如何、山曰、此意極難、若是祖宗門下、上根上智、一聞千悟、得大總持、此根人難得、其有根微智劣、所以古德道、若不安禪靜慮、到遮裏總須茫然、僧曰、除此格外、還別有方便令學人得入也無、山曰、別有別無、令汝心不安、我今問汝、汝是甚處人、曰幽州人、山曰、汝還思彼處否、曰、常思、山曰、彼處樓臺林苑、人馬駢闐、汝返思思底、還有許多般也無、曰、某甲到遮裏、一切不見有、山曰、汝解猶在境、信位即是、人位即不是、妙喜已是老婆心切、須著更下箇注脚、人位即是汪彥章、信位即是知根性陋劣、求入頭處底、若於正提撕話頭時、返思能提撕底、還是汪彥章否、到遮裏間不容髮、若佇思停機、則被影子惑矣、請快著精彩、不可忽不可忽、記得前書中嘗寫去、得息心且息心、已過去底事、或善或惡、或逆或順、都莫理會、現在事得省便省、一刀兩段、不要遲疑、未來事自然不相續矣、不識曾如此覷捕否、遮箇便是第一省力做工夫處也、至禱至禱。

又

伏承、第五令嗣、以疾不起、父子之情、千生百劫恩愛習氣之所流注、想當此境界、無有是處、五濁世中、種種虛幻、無一眞實、請行住坐臥、常作是觀、則日久月深、漸漸銷磨矣、然正煩惱時、子細揣摩窮詰、從甚麼處起、若窮起處不得、現今煩惱底、却從甚麼處得來、正煩惱時、是有是無、是虛是實、窮來窮去、心無所之、要思量但思量、要哭但哭、哭來哭去、思量來思量去、抖擻得藏識中許多恩愛習氣盡時、自然如冰歸水、還我箇本來無煩惱無思量無憂無喜底去耳、入得世間出世無餘、世間法則佛法、佛法則世間法也、父子天性一而已、若子喪而父不煩惱、不思量、如父喪而子不煩惱、不思量、還得也無、若硬止遏哭時、又不敢哭、思量時又不敢思量、是特欲逆天理滅天性、揚聲止響、潑油救火耳、正當煩惱時、總不是外事、且不得作外邊想、永嘉云、無明實性即佛性、幻化空身即法身、是眞語實語不誑不忘等語、恁麼見得了、要思量要煩惱、亦不可得、作是觀者、名爲正觀、若佗觀者、名爲邪觀、邪正未分、正好著力、此是妙喜決定義、無智人前莫說。

大慧普覺禪師書上 終

大慧普覺禪師書下

參學　慧然　錄

答夏運使

示諭、道契則霄壤共處、趣異則覿面楚越、誠哉是言、即此乃不傳之妙、左右發意、欲作妙喜書、未操觚拂紙、已兩手分付了也、又何待堅忍究竟以俟佗日耶、此箇道理唯證者方默默相契、難與俗子言、延平乃閩嶺佳處、左右能自調伏、不爲逆順關棙子所轉、便是大解脫人、此人能轉一切關棙子、日用活鱍鱍地、拘牽惹絆佗不得、苟若直下便恁麼承當、自然無一毫毛於我作障、古德有言、佛說一切法、爲度一切心、我無一切心、何用一切法、又嬾融云、恰恰用心時、恰恰無心用、曲談名相勞、直說無繁重、無心恰恰用、常用恰恰無、今說無心處、不與有心殊、非特嬾融如是、妙喜與左右、亦在其中、其中事難拈出似人、前所謂默默相契是也。

答呂舍人　居仁

千疑萬疑只是一疑、話頭上疑破、則千疑萬疑一時破、話頭不破、則且就上面與之厮崖、若棄了話頭、却去別文字上起疑、經敎上起疑、古人公案上起疑、日用塵勞中起疑、皆是邪魔眷屬、第一不得向舉起處承當、又不得思量卜度、但著意就不可思量處思量、心無所之、老鼠入牛角、便見倒斷也、又方寸若鬧、但只舉狗子無佛性話、佛語祖語、諸方老宿語、千差萬別、若透得箇無字、一時透過、不著問人、若一向問人佛語又如何、祖語又如何、諸方老宿語又如何、永劫無有悟時也。

答呂郎中　隆禮

令兄居仁、兩得書、爲此事甚忙、然亦當著忙、年已六十、從官又做了、更待如何、若不早著忙、臘月三十日、如何打疊得辦、聞左右遞來亦忙、只遮著忙底、便是臘月三十日消息也、如何是佛乾屎橛、遮裏不透、與臘月三十日何異、措大家、一生鑽故紙、是事要知、博覽群書高談闊論、孔子又如何、孟子又如何、莊子又如何、周易又如何、古今治亂又如何、被遮些言語使得來、七顛八倒、諸子百家、纔聞人舉著一字、便成卷念將去、以一事不知無恥、及乎問著佗自家屋裏事、並無一人知者、可謂終日數佗寶、自無半錢分、空來世上打一遭、脫却遮殼漏子、上天堂也不知、入地獄也不知、隨其業力、流入諸趣、並不知、若是別人家裏事、細大無有不知者、士大夫讀得書多底無明多、讀得書少底無明少、做得官小底人我小、做得官大底人我大、自道我聰明靈利、及乎臨秋毫利害、聰明也不見、靈利也不見、平生所讀底書、一字也使不著、蓋從上大人丘乙已時、便錯了也、只欲取富貴耳、取得富貴底、又能有幾人、肯回頭轉腦、向自己脚跟下推窮、我遮取富貴底、從何處來、即今受富貴底、異日却向何處去、既不知來處、又不知去處、便覺心頭迷悶、正迷悶時、亦非佗物、只就遮裏看箇話頭、僧問雲門、如何是佛、門云、乾屎橛、但舉此話、忽然伎倆盡時便悟也、切忌尋文字引證、胡亂慱量注解、縱然注解得、分明說得有下落、盡是鬼家活計、疑情不破、生死交加、疑情若破、則生死心絕矣、生死心絕、則佛見法見亡矣、佛見

法見尙亡、況復更起衆生煩惱見耶、但將迷悶底心、移來乾屎橛上、一抵抵住、怖生死底心、迷悶底心、思量分別底心、作聰明底心、自然不行也、覺得不行時、莫怕落空、忽然向抵住處絕消息、不勝慶快平生、得消息絕了、起佛見法見衆生見、思量分別、作聰明、說道理、都不相妨、日用四威儀中、但常放敎蕩蕩地、靜處鬧處、常以乾屎橛提撕、日往月來、水牯牛自純熟矣、第一不得向外面別起疑也、乾屎橛上疑破、則恒河沙數疑、一時破矣、前此亦嘗如此寫與居仁、比趙景明來得書、書中再來問云、不知離此別有下工夫處也無、又如擧手動足著衣喫飯、當如何體究、爲復只看話頭、爲復別有體究、又平生一大疑事、至今未了、只如死後斷滅不斷滅、如何決定見得、又不要引經論所說、不要指古人公案、只據目前直截分明、指示剖判斷滅不斷滅實處、觀渠如此說話、返不如三家村裏省事漢、却無如許多糞壞死、也死得瞥脫、分明向佗道、千疑萬疑只是一疑、話頭上疑破、則千疑萬疑一時破、話頭不破、則且就話頭上與之厮崖、若棄了話頭、却去別文字上起疑、經敎上起疑、古人公案上起疑、日用塵勞中起疑、皆是邪魔眷屬、又不得向擧起處承當、又不得思量卜度、但只著意就不可思量處思量、心無所之、老鼠入牛角便見倒斷也、寫得如此分曉了、又却更來忉忉怛怛地問、不知許多聰明知見、向甚處去也、不信道、平生讀底書、到遮裏一字也使不著、而今不得已、更爲佗放些惡氣息、若只恁麼休去、却是妙喜被渠問了、更答不得也、此書纔到、便送與渠一看、居仁自言、行年六十歲、此事未了、問渠未了底、爲復是擧手動足著衣喫飯底未了、若是擧手動足著衣喫飯底、又要如何了佗、殊不知只遮欲了知決定見得死後斷滅不斷滅底、便是閻家老子面前喫鐵棒底、此疑不破、流浪生死、未有了期、向渠道、千疑萬疑只是一疑、話頭若破、死後斷滅不斷滅之疑、當下冰銷瓦解矣、更敎直截分明、指示剖判斷滅不斷滅、如此見識、與外道何異、平生做許多之乎者也、要作何用、渠既許多遠地、放遮般惡氣息來熏人、妙喜不可只恁麼休去、亦放些惡氣息却去熏佗、則箇渠敎不要引經敎及古人公案、只據目前直截分明、指示斷滅不斷滅實處、昔志道禪師問六祖、學人自出家、覽涅槃經近十餘載、未明大意、願師垂誨、祖曰、汝何處未了、對曰、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂、於此疑惑、祖曰、汝作麼生疑、對曰、一切衆生皆有二身、謂色身法身也、（此乃居仁同道）色身無常、有生有滅、法身有常、無知無覺、經云、生滅滅已、寂滅爲樂者、未審是何身寂滅、何身受樂、若色身者、色身滅時、四大分散全是苦、苦不可言樂、若法身寂滅、即同草木瓦石、誰當受樂、又法性是生滅之體、五蘊是生滅之用、一體五用、生滅是常、生則從體起用、滅則攝用歸體、若聽更生、即有情之類不斷不滅、若不聽更生、即永歸寂滅、同於無情之物、如是則一切諸法、被涅槃之所禁伏、尙不得生、何樂之有、（可與居仁一狀領過）祖師到遮裏、不能臨濟德山用事、遂放些氣息還佗云、汝是釋子、何習外道斷常邪見、而議最上乘法、據汝所解、即色身外別有法身、離生滅求於寂滅、又推涅槃常樂、言有身受者、斯乃執客生死、耽著世樂、汝今當知、佛爲一切迷人認五蘊和合爲自體相、分別一切法爲外塵相、好生惡死、念念遷流、不知夢幻虛假、枉受輪回、以常樂涅槃、翻爲苦相、終日馳求、佛愍此、故乃示涅槃眞樂、刹那無有生相、刹那無有滅相、更無生滅可滅、（到此請著眼睛）是則寂滅現前、當現前時、亦無現前之量、乃謂常樂、此樂無有受者、亦無有不受者、（猶較些子）豈有一體五用之名、何況更言涅槃禁伏諸法、令永

不生、此乃謗佛毀法、（居仁亦有一分子）聽吾偈曰、（分疎不下）無上大涅槃、圓明常寂照、凡愚謂之死、外道執爲斷、諸求二乘人、目以爲無作、盡屬情所計、六十二見本、妄立虛假名、何爲眞實義、（居仁要見實處、但看此一句子）唯有過量人、（未見其人）通達無取捨、（居仁更疑三十年）以知五蘊法、及以蘊中我、（居仁在裏許求出無門）外現衆色像、（莫眼花）一一音聲相、（賺殺人）平等如夢幻、（教得一半）不起凡聖見、不作涅槃解、（亦未見其人）二邊三際斷、常應諸根用、而不起用想、分別一切法、不起分別想、劫火燒海底、風鼓山相擊、眞常寂滅樂、涅槃相如是、吾今强言說、令汝捨邪見、（只是居仁不肯捨）汝勿隨言解、（居仁記取）許汝知少分、（只遮少分也不消得）志道聞偈、忽然大悟、（葛藤不少）只遮一絡索、便是直截分明、指示居仁底指頭子也、居仁見此、若道猶是經論所說、尙指古人公案、若尙作如此見、入地獄如箭射。

答呂舍人　居仁

承、日用不輟做工夫、工夫熟則撞發關棙子矣、所謂工夫者、思量世間塵勞底心、回在乾屎橛上、令情識不行、如土木偶人相似、覺得昏怛沒巴鼻可把捉時、便是好消息也、莫怕落空、亦莫思前算後、幾時得悟、若存此心、便落邪道、佛云、是法非思量分別之所能解、解著即禍生、知得思量分別不能解者是誰、只是箇呂居仁、更不得回頭轉腦也、前此答隆禮書、說盡禪病矣、諸佛諸祖、並無一法與人、只要當人自信自肯自見自悟耳、若只取佗人口頭說底、恐誤人、此事決定離言說相、離心緣相、離文字相、能知離諸相者、亦只是呂居仁、疑佗死後斷滅不斷滅、亦只是呂居仁、求直截指示者、亦只是呂居仁、日用二六時中、或瞋或喜、或思量或分別、或昏沈或掉擧、皆只是呂居仁、只遮呂居仁、能作種種奇特變化、能與諸佛諸祖、同游寂滅大解脫光明海中、成就世間出世間事、只是呂居仁信不及耳、若信得及、請依此注脚、入是三昧、忽然從三昧起、失却孃生鼻孔、便是徹頭也。

又

令弟子育、經由出所賜教、讀之喜慰可知、無常迅速、百歲光陰如電閃、便是收因結果底時節到來也、乾屎橛如何、覺得沒巴鼻、無滋味、肚裏悶時、便是好底消息也、第一不得向擧起處承當、又不得颺在無事甲裏、不可擧時便有、不擧時便無也、但將思量世間塵勞底心、回在乾屎橛上、思量來思量去、無處奈何、伎倆忽然盡、便自悟也、不得將心等悟、若將心等悟、永劫不能得悟也、前此答隆禮書、說盡措大家病痛矣、承只置在座右、若依此做工夫、雖未悟徹、亦能分別邪正、不爲邪魔所障、亦種得般若種子深、縱今生不了、來生出頭、現成受用、亦不費力、亦不被惡業奪將去、臨命終時、亦能轉業、況一念相應耶、逐日千萬不要思量別事、但只思量乾屎橛、莫問幾時悟、至禱至禱、悟時亦無時節、亦不驚群動衆、即時怗怗地、自然不疑佛不疑祖、不疑生不疑死、得到不疑之地、便是佛地也、佛地上本無疑、無悟無迷、無生無死、無有無無、無涅槃無般若、無佛無衆生、亦無恁麼說者、此語亦不受、亦無不受者、亦無知不受者、亦無恁麼說不受者、居仁如是信得及、佛亦只如是、祖亦只如是、悟亦只如是、迷亦只如是、疑亦只如是、生亦只如是、死亦只如是、日用塵勞中亦只如是、死後斷滅不斷滅亦只如是、在朝廷作從官亦只如是、宮觀在靜處亦只如是、住徑山一千七百衆圍遶亦只如是、編管在衡州亦只如是、居仁還信得及麼、信得及亦只如是、信不及亦只如是、畢竟如何、如是、如是亦只如是。

答汪狀元 聖錫

左右妙年自立、便在一切人頂顯上、不爲富貴所籠羅、非百劫千生願力所持、焉能致是、又能切切於此一大事、念念不退轉、有決定信、具決定志、此豈淺丈夫所能、老瞿曇云、唯此工事實、餘二則非眞、請著鞭不可忽、世間事只遮是、先聖豈不云乎、朝聞道夕死可矣、不知聞底是何道、到遮裏豈容眨眼、不可更引吾道一以貫之去也、須自信自悟說得底終是無憑據、自見得自悟得、自信得及了、說不得形容不出却不妨、只怕說得似、形容得似、却不見却不悟者、老瞿曇指爲增上慢人、亦謂之謗般若人、亦謂之大妄語人、亦謂之斷佛慧命人、千佛出世、不通懺悔、若透得狗子無佛性話、遮般說話却成妄語矣、而今不可便作妄語會、呂居仁比連收兩書、書中皆云、夏中答隆禮書、常置座右、以得爲期、又聞嘗錄呈左右近世貴公子似渠者、如優曇鉢花時一現耳、頃在山頭每與公說遮般話、見公眼目定動、領覽得九分九釐只欠囫地一下、爾若得囫地一下了、儒即釋、釋即儒、僧即俗、俗即僧、凡即聖、聖即凡、我即爾、爾即我、天即地、地即天、波即水、水即波、酥酪醍醐、攪成一味、缾盤釵釧、鎔成一金、在我不在人、得到遮箇田地、由我指揮、所謂我爲法王、於法自在、得失是非、焉有罣礙、不是强爲、法如是故也、此箇境界、除無垢老子、他人如何信得及、縱信得及、如何得入手、左右已信得及、已覷得見、已能分別是邪是正、但未得入手耳、得入手時、不分老少、不在智愚、如將梵位、直授凡庸、更無階級次第、永嘉所謂一超直入如來地是也、但相聽決不相誤。

又

某萬緣休罷、日用只如此、無煩軫念、左右分上、欠少箇甚麼、在世界上、可謂千足萬足、苟能於此箇門中、翻身一擲、何止腰纏十萬貫騎鶴上揚州而已哉、昔楊文公大年三十歲見廣慧璉公、除去礙膺之物、自是已後、在朝廷居田里、始終一節、不爲功名所移、不爲富貴所奪、亦非有意輕功名富貴、道之所在、法如是故也、趙州云、諸人被十二時使、老僧使得十二時、此老此說、非是强爲、亦法如是故也、大率爲學爲道一也、而今學者、往往以仁義禮智信爲學、以格物忠恕一以貫之之類爲道、只管如博謎子相似、又如衆盲摸象各說異端、釋不云乎、以思惟心測度如來圓覺境界、如取螢火燒須彌山、臨生死禍福之際、都不得力、蓋由此也、楊子云、學者所以修性、性即道也、黃面老子云、性成無上道、圭峯云、作有義事、是惺悟心、作無義事、是狂亂心、狂亂由情念、臨終被業牽、惺悟不由情、臨終能轉業、所謂義者是義理之義、非仁義之義、而今看來、遮老子亦未免析虛空爲兩處、仁乃性之仁、義乃性之義、禮乃性之禮、智乃性之智、信乃性之信、義理之義亦性也、作無義事、即背此性、作有義事、即順此性、然順背在人不在性、仁義禮智信在性不在人、人有賢愚、性即無也、若仁義禮智信在賢而不在愚、則聖人之道有揀擇取捨矣、如天降雨擇地而下矣、所以云仁義禮智信在性而不在人也、賢愚順背在人而不在性也、楊子所謂修性、性亦不可修、亦順背賢愚而已、圭峯所謂惺悟狂亂是也、趙州所謂使得十二時、被十二時使是也、若識得仁義禮智信之性起處、則格物忠恕一以貫之、在其中矣、肇法師云、能天能人者豈天人之所能哉、所以云爲學爲道一也、大率聖人設教、不求名、不伐功、如春行花木、具此性者、時節因緣到來、各各不相知、隨其根性、大小方圓長短、或靑或黃、

或紅或綠、或臭或香、同時發作、非春能大能小、能方能圓、能長能短、能青能黃、能紅能綠、能臭能香、此皆本有之性、遇緣而發耳、百丈云、欲識佛性義、當觀時節因緣、時節若至、其理自彰、又讓師謂馬師曰、汝學心地法門、如下種子、我說法要、譬彼天澤、汝緣合故、當見其道、所以云、聖人設敎、不求名不伐功、只令學者見性成道而已、無垢老子云、道在一芥則一芥重、道在天下則天下重、是也、左右嘗升無垢之堂、而未入其室、見其表而未見其裏、百歲光陰、只在一刹那間、刹那間悟去、如上所說者、皆非實義、然既悟了、以爲實亦在我、以爲非實亦在我、如水上葫蘆、無人動著、常蕩蕩地、觸著便動、捺著便轉轆轆地、非是强爲、亦法如是故也、趙州狗子無佛性話、左右如人捕賊、已知窩盤處、但未捉著耳、請快著精彩、不得有少間斷、時時向行住坐臥處看、讀書史處、修仁義禮智信處、侍奉尊長處、提誨學者處、喫粥喫飯處、與之厮崖、忽然打失布袋、夫復何言。

答宗直閣

示諭應緣日涉差別境界、未嘗不在佛法中、又於日用動容之間、以狗子無佛性話、破除情塵、若作如是工夫、恐卒未得悟入、請於脚跟下照顧、差別境界從甚麽處起、動容周旋之間、如何以狗子無佛性話、破除情塵、能知破除情塵者又是阿誰、佛不云乎、衆生顛倒迷己逐物、物本無自性、迷己者自逐之耳、境界本無差別、迷己者自差別耳、既日涉差別境界、又在佛法中、既在佛法中則非差別境界、既在差別境界中則非佛法矣、拈一放一、有甚了期、廣額屠兒在涅槃會上、放下屠刀、立地便成佛、豈有許多忉忉怛怛來、日用應緣處、纔覺涉差別境界時、但只就差別處、擧狗子無佛性話、不用作破除想、不用作情塵想、不用作差別想、不用作佛法想、但只看狗子無佛性話、但只擧箇無字、亦不用存心等悟、若存心等悟、則境界也差別、佛法也差別、情塵也差別、狗子無佛性話也差別、間斷處也差別、無間斷處也差別、遭情塵惑亂、身心不安樂處也差別、能知許多差別底亦差別、若要除此病、但只看箇無字、但只看廣額屠兒放下屠刀云、我是千佛一數、是實是虛、若作虛實商量、又打入差別境界上去也、不如一刀兩段、不得念後思前、念後思前則又差別矣、玄沙云、此事限約不得、心思路絕、不因莊嚴、本來眞靜動用語笑、隨處明了更無欠少、今時人不悟箇中道理、妄自涉事涉塵、處處染著、頭頭繫絆、縱悟則塵境紛紜名相不實、便擬疑心斂念、攝事歸空、閉目藏睛、隨有念起、旋旋破除、細想纔生、卽便遏捺、如此見解、卽是落空亡底外道、魂不散底死人、溟溟漠漠無覺無知、塞耳偸鈴、徒自欺誑、左右來書云云、盡是玄沙所訶底病、默照邪師埋人底坑子、不可不知也、擧話時、都不用作許多伎倆、但行住坐臥處、勿令間斷、喜怒哀樂處、莫生分別、擧來擧去、看來看去、覺得沒理路沒滋味、心頭熱悶時、便是當人放身命處也、記取記取、莫見如此境界便退心、如此境界、正是成佛作祖底消息也、而今默照邪師輩、只以無言無說爲極則、喚作威音那畔事、亦喚作空劫已前事、不信有悟門、以悟爲誑、以悟爲第二頭、以悟爲方便語、以悟爲接引之詞、如此之徒、謾人自謾、誤人自誤、亦不可不知、日用四威儀中、涉差別境界、覺得省力時、便是得力處也、得力處極省力、若用一毫毛氣力支撐、定是邪法非佛法也、但辦取長遠心、與狗子無佛性話厮崖、崖來崖去、心無所之、忽然如睡夢覺、如蓮花開、如披雲見日、到恁麽時、自然成一片矣、但日用

七顚八倒處、只看箇無字、莫管悟不悟徹不徹、三世諸佛只是箇無事人、諸代祖師亦只是箇無事人、古德云、但於事上通無事、見色聞聲不用聾、又古德云、愚人除境不亡心、智者亡心不除境、於一切處無心、則種種差別境界自無矣、而今士大夫、多是急性、便要會禪、於經敎上及祖師言句中、博量要說得分曉、殊不知、分曉處却是不分曉底事、若透得箇無字、分曉不分曉、不著問人矣、老漢敎士大夫放敎鈍、便是遮箇道理也、作鈍牓狀元亦不惡、只怕拕白耳、一笑。

答李參政　泰發

示諭華嚴重重法界、斷非虛語、既非虛語、必有分付處、必有自肯處、讀至此嗟歎久之、士大夫平昔所學、臨死生禍福之際、手足俱露者、十常八九、考其行事、不如三家村裏省事漢、富貴貧賤、不能汨其心、以是較之、智不如愚、貴不如賤者多矣、何以故、生死禍福現前、那時不容僞故也、大參相公、平昔所學、已見於行事、臨禍福之際、如精金入火愈見明耀、又決定知華嚴重重法界斷非虛語、則定不作佗物想矣、其餘七顚八倒、或逆或順、或正或邪、亦非佗物、願公常作此觀、妙喜亦在其中、異日相從於寂寞之濱、結當當來世香火因緣、成就重重法界、以實其事、豈小補哉、更須下箇注脚、卽今遮一絡索、切忌作寓言指物會、一笑。

答曾宗丞　天隱

左右、天資近道、身心清淨無佗緣作障、只遮一段、誰人能及、又能行住坐臥、以老僧所示省要處、時時提撕、休說一念相應千了百當、便是此生打未徹、只恁麼崖到臘月三十日、閻家老子、也須倒退三千里始得、何以故、爲念念在般若中、無異念無間斷故、只如道家流、以妄心存想、日久月深、尙能成功、不爲地水火風所使、況全念住在般若中、臘月三十日、豈不能轉業耶、而今人多是將有所得心學道、此是無妄想中眞妄想也、但放敎自在、然不得太緊、不得太緩、只恁麼做工夫、省無限心力、左右生處已熟、熟處已生、十二時中、自然不著枯心忘懷、將心管帶矣、雖未透脫諸魔外道已不能伺其便、亦自能與諸魔外道共一手、同一眼、成就彼事而不墮其數矣、除公一人可以語此、餘人非但不能、如公行履、亦未必信得及也、但於話頭上看、看來看去、覺得沒巴鼻沒滋味、心頭悶時、正好著力、切忌隨佗去、只遮悶處、便是成佛作祖、坐斷天下人舌頭處也、不可忽不可忽。

答王敎授　大授

不識左右別後、日用如何做工夫、若是曾於理性上得滋味、經敎中得滋味、祖師言句上得滋味、眼見耳聞處得滋味、擧足動步處得滋味、心思意想處得滋味、都不濟事、若要直下休歇、應是從前得滋味處、都莫管佗、却去沒撈摸處、沒滋味處、試著意看、若著意不得、撈摸不得、轉覺得沒欛柄可把捉、理路義路心意識都不行、如土木瓦石相似時、莫怕落空、此是當人放身命處、不可忽不可忽、聰明靈利人、多被聰明所障、以故道眼不開、觸途成滯、衆生無始時來、爲心意識所使、流浪生死、不得自在、果欲出生死作快活漢、須是一刀兩段、絕却心意識路頭、方有少分相應、故永嘉云、損法財滅功德、莫不由茲心意識、豈欺人哉、頃蒙惠敎、其中種種趣向、皆某平昔所訶底病、知是般事、颺在腦後、且向沒巴鼻處沒滋味處、試做工夫看、如僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、尋常聰明人、纔聞擧起、便以心意識領會、博量引證、要說

得有分付處、殊不知、不容引證、不容博量、不容以心意識領會、縱引證得、博量得、領會得、盡是髑髏前情識邊事、生死岸頭、定不得力、而今普天之下、喚作禪師長老者、會得分曉底、不出左右書中、寫來底消息耳、其餘種種邪解、不在言也、密首座、某與渠同在平普融會中相聚、盡得普融要領、渠自以爲安樂、然所造者、亦不出左右書中消息、今始知非、別得箇安樂處、方知某無秋毫相欺、今特令去相見、無事時、試令渠吐露看、還契得左右意否、八十翁翁入場屋、眞誠不是小兒戲、若生死到來不得力、縱說得分曉、和會得有下落、引證得無差別、盡是鬼家活計、都不干我一星事、禪門種種差別異解、唯識法者懼、大法不明者、往往多以病爲藥、不可不知。

答劉侍郎　季高

示諭臘月三十日已到、要之日用、當如是觀察、則世間塵勞之心、自然銷殞矣、塵勞之心既銷殞、則來日依前孟春猶寒矣、古德云、欲識佛性義、當觀時節因緣、此箇時節、乃是黃面老子出世成佛、坐金剛座、降伏魔軍、轉法輪度衆生、入涅槃底時節、與解空所謂臘月三十日時節、無異無別、到遮裏、只如是觀、以此觀者名爲正觀、異此觀者名爲邪觀、邪正未分、未免隨佗時節遷變、要得不隨時節、但一時放下著、放到無可放處、此語亦不受、依前只是解空居士、更不是別人。

又

吾佛大聖人、能空一切相、成萬法智、而不能即滅定業、況博地凡夫耶、居士既是箇中人、想亦常入是三昧、昔有僧問一老宿、世界恁麼熱、未審向甚麼處回避、老宿曰、向鑊湯鑪炭裏回避、曰、只如鑊湯鑪炭裏、作麼生回避、曰、衆苦不能到、願居士日用四威儀中、只如此做工夫、老宿之言不可忽、此是妙喜得効底藥方、非與居士此道相契、此心相知、亦不肯容易傳授、只用一念相應草湯下、更不用別湯使、若用別湯使、令人發狂、不可不知也、一念相應草、不用佗求、亦只在居士四威儀中、明處明如日、黑處黑如漆、若信手拈來、以本地風光一照、無有錯者、亦能殺人、亦能活人、故佛祖常以此藥、向鑊湯鑪炭裏、醫苦惱衆生生死大病、號大醫王、不識居士還信得及否、若言我自有父子不傳之祕方、不用向鑊湯鑪炭裏回避底妙術、卻望居士布施也。

答李郎中　似表

士大夫學此道、不患不聰明、患太聰明耳、不患無知見、患知見太多耳、故常行識前一步、昧卻脚跟下快活自在底消息、邪見之上者、和會見聞覺知爲自己、以現量境界爲心地法門、下者弄業識、認門頭戶口、簸兩片皮、談玄說妙、甚者至於發狂不勒字數、胡言漢語、指東畫西、下下者、以默照無言空空寂寂、在鬼窟裏著到、求究竟安樂、其餘種種邪解、不在言而可知也、沖密等歸、領所賜教、讀之喜慰不可言、更不復叙世諦相酬酢、只以左右向道勇猛之志、便入葛藤、禪無德山臨濟之殊、法眼曹洞之異、但學者無廣大決定志、而師家亦無廣大融通法門、故所入差別、究竟歸宿處、並無如許差別也、示諭欲妙喜因書指示徑要處、只遮求指示徑要底一念、早是刺頭入膠盆了也、不可更向雪上加霜、雖然有問不可無答、請左右都將平昔或自看經教話頭、或因人擧覺指示、得滋味歡喜處、一時放下、依前百不知百不會、如三歲孩兒相似、

有性識而未行、卻向未起求徑要底一念子前頭看、看來看去、覺得轉沒巴鼻、方寸轉不寧怗時、不得放緩、遮裏是坐斷千聖頂𩕳處、往往學道人、多向遮裏打退了、左右若信得及、只向未起求徑要指示一念前看、看來看去、忽然睡夢覺、不是差事、此是妙喜平昔做底得力工夫、知公有決定志、故拕泥帶水、納遮一場敗闕、此外別無可指示、若有可指示、則不徑要矣。

答李寶文　茂嘉

向承示諭、性根昏鈍、而黽勉修持、終未得超悟之方、某頃在雙徑、答富季中所問、正與此問同、能知昏鈍者、決定不昏鈍、更欲向甚處求超悟、士大夫學此道、卻須借昏鈍而入、若執昏鈍自謂我無分、則爲昏鈍魔所攝矣、蓋平昔知見多、以求證悟之心、在前作障故、自己正知見不能現前、此障亦非外來、亦非別事、只是箇能知昏鈍底主人公耳、故瑞巖和尚、居常在丈室中、自喚云、主人公、又自應云、諾、惺惺著、又自應云、諾、佗時後日莫受人謾、又自應云、諾諾、古來幸有恁麼牓樣、謾向遮裏提撕看、是箇甚麼、只遮提撕底亦不是別人、只是遮能知昏鈍者耳、能知昏鈍者、亦不是別人、便是李寶文本命元辰也、此是妙喜應病與藥、不得已略爲居士、指箇歸家穩坐底路頭而已、若便認定死語、眞箇喚作本命元辰、則是認識神爲自己、轉沒交涉矣、故長沙和尚云、學道之人不識眞、只爲從前認識神、無量劫來生死本、癡人喚作本來人、前所云、借昏鈍而入是也、但只看能知得如是昏鈍底、畢竟是箇甚麼、只向遮裏看、不用求超悟、看來看去、忽地大笑去矣、此外無可言者。

答向侍郎　伯恭

示諭悟與未悟、夢與覺一、一段因緣、黃面老子云、汝以緣心聽法、此法亦緣、謂至人無夢、非有無之無、謂夢與非夢一而已、以是觀之、則佛夢金鼓、高宗夢得說、孔子夢奠兩楹、亦不可作夢與非夢解、卻來觀世間、猶如夢中事、教中自有明文、唯夢乃全妄想也、而衆生顚倒、以日用目前境界爲實、殊不知全體是夢、而於其中復生虛妄分別、以想心繫念神識紛飛爲實夢、殊不知正是夢中說夢、顚倒中又顚倒、故佛大慈悲、老婆心切、悉能徧入一切法界、諸安立海所有微塵、於一一塵中、以夢自在法門、開悟世界海微塵數衆生、住邪定者、入正定聚、此亦普示顚倒衆生、以目前實有底境界、爲安立海、令悟夢與非夢、悉皆是幻、則全夢是實、全實是夢、不可取不可捨、至人無夢之義如是而已、來書見問、乃是某三十六歲時所疑、讀之不覺抓著痒處、亦嘗以此問圜悟先師、但以手指曰、住住休妄想、休妄想、某復曰、如某未睡著時、佛所讚者、依而行之、佛所訶者、不敢違犯、從前依師、及自做工夫、零碎所得者、惺惺時、都得受用、及乎上牀半惺半覺時、已作主宰不得、夢見得金寶、則夢中歡喜無限、夢見被人以刀杖相逼、及諸惡境界、則夢中怕怖惶恐、自念此身尚存、只是睡著、已作主宰不得、況地水火風分散、衆苦熾然、如何得不被回換、到遮裏方始著忙、先師又曰、待汝說底許多妄想絕時、汝自到寤寐恒一處也、初聞亦未之信、每日我自顧、寤與寐分明作兩段、如何敢開大口說禪、除非佛說寤寐恒一是妄語、則我此病不須除、佛語果不欺人、乃是我自未了、後因聞先師舉諸佛出身處、薰風自南來、忽然去卻礙膺之物、方知黃面老子所說、是眞語實語如語、不誑語不妄語、不欺人、眞大慈悲、粉身沒命不可報、礙膺之物既除、方知夢時便是寤時底、寤時便是夢時底、佛言寤寐恒一、

方始自知、遮般道理拈出呈似人不得、說與人不得、如夢中境界取不得、捨不得、承問妙喜於未悟已前、已悟之後有異無異、不覺依實供通、子細讀來敎、字字至誠、不是問禪、亦非見詰、故不免以昔時所疑處吐露、願居士試將老龐語諦提撕、但願空諸所有、切勿實諸所無、先以目前日用境界作夢會了、然後却將夢中底移來目前、則佛金鼓、高宗得說、孔子奠兩楹、決不是夢矣。

答陳敎授　阜卿

此道寂寥、無出今日、邪師說法、如惡叉聚、各各自謂得無上道、咸唱邪說、幻惑凡愚、故某每每切齒於此、不惜身命、欲扶持之使光明種子知有吾家本分事、不墮邪見網中、萬一得衆生界中佛種不斷、亦不虛受黃面老子覆蔭、所謂將此深心奉塵刹、是則名爲報佛恩、然亦是不知時不量力之一事也、左右既是箇中人、不得不說箇中事、因筆不覺及此耳。

答林判院　少瞻

示諭求一語與信道人做工夫、既看圓覺經、經中豈止一語而已哉、諸大菩薩各隨自所疑處發問、世尊據所疑、一一分明剖析、大段分曉、前所給話頭、亦在其中矣、經云、居一切時不起妄念、於諸妄心亦不息滅、住妄想境不加了知、（此語最親切、）於無了知不辨眞實、老漢昔居雲門庵時、嘗頌之曰、荷葉團團團似鏡、菱角尖尖尖似錐、風吹柳絮毛毬走、雨打梨花蛺蝶飛、但將此頌放在上面、卻將經文移來下面、頌卻是經、經卻是頌、試如此做工夫看、莫管悟不悟、心頭休熱忙、亦不可放緩、如調絃之法、緊緩得其所、則曲調自成矣、歸去但與沖虛相親、遞相琢磨、道業無有不辨者、祝祝。

答黃知縣　子餘

收書、知爲此一大事因緣甚力、大丈夫漢所作所爲、當如是耳、無常迅速、生死事大、過了一日、則銷了一日好事、可畏可畏、左右春秋鼎盛、正是作業不識好惡時、能回此心學無上菩提、此是世界上第一等難容靈利漢、五濁界中、有甚麼奇特事、過如此段因緣、趁色力强健、早回頭比臨老回頭、其力量勝百千萬億倍、老漢私爲左右喜、前此寫去法語、曾時時覷看否、第一記取、不得起心動念、肚裏熱忙急要悟、纔作此念、則被此念塞斷路頭、永不能得悟矣、祖師云、執之失度、必入邪路、放之自然、體無去住、此乃祖師吐心吐膽爲人處也、但日用費力處莫要做、此箇門中不容費力、老漢常爲人說此話、得力處乃是省力處、省力處乃是得力處、若起一念希望心求悟入處、大似人在自家堂屋裏坐、卻問佗人覓住處、無異、但把生死兩字貼在鼻尖兒上、不要忘了、時時提撕話頭、提來提去、生處自熟、熟處自生矣、此語已寫在空相道人書中、請同此書互換一看、便了得也。

答嚴敎授　子卿

眞實到不疑之地者、如渾鋼打就、生鐵鑄成、直饒千聖出頭來現無量殊勝境界、見之亦如不見、況於此作奇特殊勝道理耶、昔藥山坐禪次、石頭問、子在遮裏作甚麼、藥山云、一物不爲、石頭云、恁麼則閑坐也、藥山云、閑坐則爲也、石頭然之、看佗古人、一箇閑坐也奈何佗不得、今時學道之士、多在閑坐處打住、近日叢林無鼻孔輩、謂之默照者是也、又有一種脚跟元不曾點

地、認得箇門頭戶口光影、一向狂發、與說平常話不得、盡作禪會了、似遮般底、喚業識作本命元辰、更是不可與語本分事也、不見雲門大師有言、光不透脫、有兩般病、一切處不明、面前有物、是一、又透得一切法空、隱隱地似有箇物相似、亦是光不透脫、又法身亦有兩般病、得到法身、爲法執不忘、己見猶存、坐在法身邊、是一、直饒透得法身去、放過卽不可、子細檢點來、有甚麼氣息、亦是病、而今學實法者、以透過法身爲極致、而雲門返以爲病、不知透過法身了、合作麼生、到遮裏、如人飮水冷煖自知、不著問別人、問別人則禍事也、所以云眞實到不疑之地者、如渾鋼打就、生鐵鑄成、是也、如人喫飯飽時、不可更問人我飽未飽、昔黃檗問百丈、從上古人、以何法示人、百丈只據坐、黃檗云、後代兒孫、將何傳授、百丈拂衣便起云、我將謂、汝是箇人、遮箇便是爲人底樣子也、但向自信處看、還得自信底消息絕也未、若自信底消息絕、則自然不取他人口頭辦矣、臨濟云、汝若歇得念念馳求心、與釋迦老子不別、不是欺人、第七地菩薩、求佛智心未滿足、故謂之煩惱、直是無儞安排處、著一星兒外料不得、數年前有箇許居士、認得箇門頭戶口、將書來呈見解云、日用中空豁豁地、無一物作對待、方知三界萬法一切元無、直是安樂快活放得下、因示之以偈、曰、莫戀淨潔處、淨處使人困、莫戀快活處、快活使人狂、如水之任器、隨方圓短長、放下不放下、更請細思量、三界與萬法、匪歸何有鄉、若只便恁麼、此事大乖張、爲報許居士家親作禍殃、豁開千聖眼、不須頻禱禳、偶晨起稍涼、驀然記得、子卿道友、初得箇入頭時、尙疑恐是光影、遂將從來所疑公案、把照方見趙州老漢敗闕處、不覺信筆葛藤如許。

答張侍郎　子韶

左右以自所得瞥脫處爲極則、纔見涉理路、入泥入水、爲人底、便欲掃除使滅蹤跡、見某所集正法眼藏、便云、臨濟下有數箇庵主好機鋒、何不收入、如忠國師、說義理禪、教壞人家男女、決定可刪、左右見道如此諦當、而不喜忠國師說老婆禪、坐在淨淨潔潔處、只愛擊石火閃電光一著子、此外不容一星兒別道理、眞可惜耳、故某盡力主張、若法性不寬、波瀾不闊、佛法知見不立、生死命根不斷、則不敢如此四楞著地、入泥入水爲人、蓋衆生根器不同、故從上諸祖、各立門戶施設、備衆生機、隨機攝化、故長沙岑大蟲有言、我若一向舉揚宗教、法堂前須草深一丈、倩人看院始得、旣落在遮行戶裏、被人喚作宗師、須備衆生機說法、如擊石火閃電光一著子、是遮般根器、方承當得、根器不是處用之、則揠苗矣、某豈不曉瞥脫一椎便七穿八穴是性燥、所以集正法眼藏、不分門類、不問雲門、臨濟、曹洞、潙仰、法眼宗、但有正知正見可以令人悟入者、皆收之、見忠國師大珠二老宿禪備衆體、故收以救此一類根器者、左右書來云、決定可刪、觀公之意、正法眼藏、盡去除諸家門戶、只收似公見解者、方是、若爾則公自集一書、化大根器者、有何不可、不必須教妙喜隨公意去之、若謂忠國師說拖泥帶水老婆禪、便絕後、則如巖頭、睦州、烏臼、汾陽無業、鎭州普化、定上座、雲峯悅、法昌遇、諸大老、合兒孫滿地、今亦寂然無主化者、諸公豈是拖泥帶水、說老婆禪乎、然妙喜主張國師、無垢破除、初不相妨也。

答徐顯謨　稚山

左右頻寄聲妙喜、想只是要調伏水牯牛、捏殺遮猢猻子耳、此事不在久歷叢林、飽參知識、只

貴於一言一句下、直截承當、不打之遶爾、據實而論、間不容髮、不得已說箇直截、已是紆曲了也、說箇承當、已是蹉過了也、況復牽枝引蔓、擧經擧教、說理說事、欲究竟耶、古德云、但有纖毫卽是塵、水牯牛未調伏、猢猻子未死、縱說得恒沙道理、並不干我一星兒事、然說得說不得亦非外邊事、不見江西老宿有言、說得亦是汝心、說不得亦是汝心、決欲直截擔荷見佛見祖、如生寃家、方有少分相應、如此做工夫、日久月深、不著起心求悟、水牯牛自調伏、猢猻子自死矣、記取記取、但向平昔心意識湊泊不得處、取不得處、捨不得處、看箇話頭、僧問雲門、如何是佛、門云、乾屎橛、看時不用將平昔聰明靈利思量卜度、擬心思量、十萬八千未是遠、莫是不思量、不計較、不擬心、便是麼、咄、更是箇甚麼、且置是事。

答楊教授　彥候

左右强項中、却有不可思議底柔和、致一言之下千了百當、此事殊勝、若不間於强項中、打發得幾人、佛法豈到今日、非有般若根性、則不能如是、盛事盛事、示諭欲來年春夏間棹無底船吹無孔笛、施無盡供、說無生話、要了無窮無始不有不無巴鼻、但請來與遮無面目漢商量、定不錯了遮話、又承需道號、政欲相塗糊、可稱快然居士、故眞淨老人云、快然大道只在目前、縱橫十字、擬而留連、便是此義也、某只在長沙作久住計、左右佗日果從此來、則林下不寂寞也、

答樓樞密

不識別後日用應緣處、不被外境所奪否、視堆案之文、能撥置否、與物相遇時、能動轉否、住寂靜處、不妄想否、體究箇事、無雜念否、故黃面老子有言、心不妄取過去法、亦不貪著未來事、不於現在有所住、了達三世悉空寂、過去事或善或惡、不須思量、思量則障道矣、未來事不須計較、計較則狂亂矣、現在事到面前、或逆或順、亦不須著意、著意則擾方寸矣、但一切臨時隨緣酬酢、自然合著遮箇道理、逆境界易打、順境界難打、逆我意者、只消一箇忍字、定省少時便過了、順境界直是無儞回避處、如磁石與鐵相偶、彼此不覺合作一所、無情之物尙爾、況現行無明、全身在裏許作活計者、當此境界若無智慧、不覺不知被佗引入羅網、却向裏許要求出路、不亦難乎、所以先聖云、入得世間、出世無餘、便是遮箇道理也、近世有一種修行失方便者、往往認現行無明爲入世間、便將出世間法强差排作出世無餘之事、可不悲乎、除夙有誓願、卽時識得破、作得主、不被佗牽引、故淨名有言、佛爲增上慢人、說離婬怒癡爲解脫耳、若無增上慢者、佛說婬怒癡性卽是解脫、若免得此過、於逆順境界中、無起滅相、始離得增上慢名字、恁麼方可作入得世間、謂之有力量漢、已上所說、都是妙喜平昔經歷過底、卽今日用亦只如此修行、願公趁色力强健、亦入是三昧、此外時時以趙州無字提撕、久久純熟、驀然無心撞破泰桶、便是徹頭處也、

又

日用工夫、前書已葛藤不少、但只依舊不變不動、物來則與之酬酢、自然物我一如矣、古德云、放曠任其去住、靜鑑覺其源流、語證則不可示人、說理則非證不了、自證自得處、拈出呈似人不得、唯親證親得者、略露目前些子、彼此便默默相契矣、示諭、自此不被人謾、不錯用工夫矣、大槩已正、欛柄已得、如善牧牛者、索頭常在手中、爭得犯人苗稼、驀地放却索頭、鼻孔無撈摸

處、平田淺草一任縱橫、慈明老人所謂、四方放去休攔遏、八面無拘任意游、要收只在索頭撥、未能如是、當緊把索頭、且與順摩捋、淹浸工夫既熟、自然不著用意隄防矣、工夫不可急、急則躁動、又不可緩、緩則昏怛矣、忘懷著意俱蹉過、譬如擲劒揮空、莫論及之不及、昔嚴陽尊者、問趙州、一物不將來時如何、州云、放下著、嚴陽云、一物既不將來、放下箇甚麼、州云、放不下擔取去、嚴陽於言下大悟、又有僧問古德、學人奈何不得時如何、古德云、老僧亦奈何不得、僧云、學人在學地、故是奈何不得、和尚是大善知識、爲甚麼亦奈何不得、古德云、我若奈何得、則便拈却儞遮不奈何、僧於言下大悟、二僧悟處、卽是樓樞密迷處、樓樞密疑處、卽是二僧問處、法從分別生、還從分別滅、滅諸分別法、是法無生滅、細觀來書、病已去盡、別證候亦不生矣、大段相近、亦漸省力矣、請只就省力處、放敎蕩蕩地、忽然啐地破、曝地斷便了、千萬勉之。

答曹太尉　功顯

某、雖年運而往矣、不敢不勉强力以此事、與衲子輩激揚、一日粥後撥牌子、輪一百人入室、間有負命者上鉤來、亦有咬人師子、以此法喜禪悅爲樂、殊不覺倦、亦造物見憐耳、左右福慧兩全、日在　至尊之側、而留意此段大事因緣、眞不可思議事、釋迦老子曰、有勢不臨難、豪貴學道難、非百劫千生曾承事善知識、種得般若種子深、焉能如是信得及、只遮信得及處、便是成佛作祖底基本也、願公只向信得及處覷捕、久久自透脫矣、然第一不得著意安排覓透脫處、若著意則蹉過也、釋迦老子又曰、佛道不思議、誰能思議佛、又佛問文殊師利曰、汝入不思議三昧耶、文殊曰、弗也、世尊、我卽不思議、不見有心能思議者、云何而言入不思議三昧、我初發心欲入是定、如今思惟、實無心想而入三昧、如人學射、久習則巧、後雖無心、以久習故、箭發皆中、我亦如是、初學不思議三昧、繫心一緣、若久習成就、更無心想、常與定俱、佛與祖師、所受用處、無二無別、近年叢林、有一種邪禪、以閉目藏睛、觜盧都地、作妄想、謂之不思議事、亦謂之威音那畔、空劫已前事、纔開口便喚作落今時、亦謂之根本上事、亦謂之淨極光通達、以悟爲落在第二頭、以悟爲枝葉邊事、蓋渠初發步時便錯了、亦不知是錯、以悟爲建立、既自無悟門、亦不信有悟者、遮般底謂之謗大般若、斷佛慧命、千佛出世不通懺悔、左右具驗人眼久矣、似此等輩披却師子皮、作野干鳴、不可不知、某與左右、雖未承顏接論、此心已默默相契多年矣、前此答字極不如禮、今專遣法空禪人、代往致敬、故不暇入善思惟三昧、只恁麼信手信意、不覺葛藤如許、聊謝不敏而已。

答榮侍郎　茂實

承留心欲究竟此一段大事因緣、既辨此心、第一不要急、急則轉遲矣、又不得緩、緩則怠墮矣、如調琴之法緊緩要得中、方成曲調、但向日用應緣處、時時覷捕、我遮能與人決斷是非曲直底、承誰恩力、畢竟從甚麼處流出、覷捕來覷捕去、平昔生處路頭自熟、生處既熟、則熟處却生矣、那箇是熟處、五陰、六入、十二處、十八界、二十五有、無明業識思量計較、心識晝夜熠熠、如野馬無暫停息底是、遮一絡索、使得人流浪生死、使得人做不好事、遮一絡索既生、則菩提涅槃眞如佛性便現前矣、當現前時、亦無現前之量、故古德契證得了便解道、應眼時若千日、萬象不能逃影質、應耳時若幽谷大小音聲無不足、如此等事、不假佗求、不借佗力、自然向應緣處、

活鱍鱍地、未得如此、且將遮思量世間塵勞底心、回在思量不及處、試思量看、那箇是思量不及處、僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、只遮一字、儘爾有甚麼伎倆、請安排看、請計較看、思量計較安排、無處可以頓放、只覺得肚裏悶、心頭煩惱時、正是好底時節、第八識相次不行矣、覺得如此時、莫要放却、只就遮無字上提撕、提撕來提撕去、生處自熟、熟處自生矣、近年以來叢林中有一種唱邪說、爲宗師者、謂學者曰、但只管守靜、不知守者是何物、靜者是何人、却言靜底是基本、却不信有悟底、謂悟底是枝葉、更引僧問仰山曰、今時人還假悟也無、仰山曰、悟則不無、爭奈落在第二頭、癡人面前、不得說夢、便作實法會、謂悟是落第二頭、殊不知、潙山自有警覺學者之言、直是痛切曰、研窮至理、以悟爲則、此語又向甚處著、不可潙山疑誤後人要教落在第二頭也、曹閤使亦留心此事、恐其被邪師輩所誤、比亦如此書、忉忉怛怛寫與、此公聰明識見、皆有大過人處、決不到錯認方便語作實法會、但某未得與之目擊、私憂過計耳、聞老居士亦與之是道友、因筆不覺葛藤、無事相見時、試問渠取書一看、方知妙喜相期不在眼底、彼此氣義相投、又非勢利之交、寫了一紙、紙盡又添一紙、不暇更事形迹、此書亦如是、前書託是箇中人、故曰、切不可道老老大大著甚來由、若如此則好事在面前定放過矣、寫時雖似率易、然亦機感相投、亦不覺書在紙上、苟公信得妙喜及、便把做事、日用應緣處、便恢張此箇法門、以報聖主求賢安天下之意、眞不負其所知也、願種種堪忍、始終只如今日做將去、佛法世法打作一片、且耕且戰、久久純熟、一擧而兩得之、豈非腰纏十萬貫、騎鶴上揚州乎。

又

示諭鐘鳴漏盡之譏、爲　君上盡誠、而下安百姓、自有聞絃賞音者、願公凡事堅忍、當逆順境政好著力、所謂將此深心奉塵刹、是則名爲報　國恩、平昔學道只要於逆順界中受用、逆順現前而生苦惱、大似平昔不曾向箇中用心、祖師曰、境緣無好醜、好醜起於心、心若不強名、妄情從何起、妄情既不起、眞心任徧知、請於逆順境中、常作是觀、則久久自不生苦惱、苦惱既不生、則可以驅魔王作護法善神矣、前此老老大大、著甚來由之說、言猶在耳、豈忘之耶、欲識佛性義、當觀時節因緣、以居士前十餘載閑、自有閑時時節、今日仕權在手、便有忙底時節、當念閑時是誰閑、忙時是誰忙、須信忙時却有閑時道理、閑時却有忙時道理、政在忙中、當體　主上起公之意、頃刻不可暫忘、自警自察、何以報之、若常作是念、則鑊湯鑪炭、刀山劒樹上亦須著向前、況目前些小逆順境界耶、與公以此道相契故、不留情淨盡吐露。

答黃門司　節夫

收書幷許多葛藤、不意便解如此拈弄、直是弄得來、活鱍鱍地、眞是自證自得者、可喜可喜、但只如此、從教人道遮官人不依本分亂說亂道、伲家自有通人愛、除是曾證曾悟者方知、若是聽響之流、一任佗鑽龜打瓦、更批判得如來禪祖師禪、好儘契得妙喜拄杖也、且道是賞伊罰伊、一任諸方更疑三十年。

答孫知縣

蒙以所修金剛經相示、幸得隨喜一徧、近世士大夫、肯如左右留心內典者、實爲希有、不得意趣、則不能如是信得及、不具看經眼、則不能窺測經中深妙之義、眞火中蓮也、詳味久之、不能

無疑耳、左右詆諸聖師翻譯失眞、而汨亂本眞、文句增減、違背佛意、又云、自始持誦、卽悟其非、欲求定本是正舛差、而習僞已久、雷同一律、曁得京師藏本、始有據依、復考釋天親無著論頌、其義脗合、遂泮然無疑、又以長水孤山二師皆依句而違義、不識左右敢如是批判、則定嘗見六朝所譯梵本、盡得諸師翻譯錯謬、方始泮然無疑、旣無梵本、便以臆見刊削聖意、則且未論招因帶果、毀謗聖敎、墮無間獄、恐有識者見之、却如左右檢點諸師之過、還著於本人矣、古人有言、交淺而言深者招尤之道也、某與左右素昧平生、左右以此經求印證、欲流布萬世於衆生界中、種佛種子、此是第一等好事、而又以某爲箇中人、以箇中消息、相期於形器之外、故不敢不上禀、昔清涼國師、造華嚴疏、欲正譯師訛舛、而不得梵本、但書之于經尾而已、如佛不思議法品中、所謂一切佛、有無邊際身、色相清淨、普入諸趣、而無染著、清涼但云、佛不思議法品上卷、第三葉第十行、一切諸佛舊脫諸字、其餘經本脫落、皆注之于經尾、清涼亦聖師也、非不能添入及減削、止敢書之于經尾者、識法者懼也、又經中有大瑠璃寶、清涼曰、恐是吠瑠璃、舊本錯寫、亦不敢改、亦只如此注之經尾耳、六朝翻譯諸師、非皆淺識之士、翻譯場有譯語者、有譯義者、有潤文者、有證梵語者、有正義者、有唐梵相校者、而左右尙以爲錯譯聖意、左右旣不得梵本、便妄加刊削、却要後世人諦信、不亦難乎、如論長水依句而違義、無梵本證、如何便決定、以其爲非、此公雖是講人、與佗講人不同、嘗參琅瑘廣照禪師、因請益琅瑘首楞嚴中、富樓那問佛、清淨本然云何忽生山河大地之義、琅瑘遂抗聲云、清淨本然云何忽生山河大地、長水於言下大悟、後方披襟自稱座主、蓋座主多是尋行數墨、左右所謂依句而不依義、長水非

無見識、亦非尋行數墨者、不以具足相故、得阿耨菩提、經文大段分明、此文至淺至近、自是左右求奇大過、要立異解求人從己耳、左右引無著論云、以法身應見如來、非以相具足故、若爾如來雖不應以相具足見、應相具足爲因、得阿耨菩提、爲離此著故、經言、須菩提於意云何、如來可以相成就得阿耨菩提、須菩提莫作是念等者、此義明相具足體非菩提、亦不以相具足爲因也、以相是色自性故、此論大段分明、自是左右錯見錯解爾、色是相緣起、相是法界緣起、梁昭明太子、謂莫作是念如來不以具足相故得阿耨菩提、三十二分中、以此分爲無斷無滅分、恐須菩提不以具足相、則緣起滅矣、蓋須菩提初在母胎、卽知空寂、多不住緣起相、後引功德施菩薩論末後、若相成就、是眞實有、此相滅時、卽名爲斷、何以故、以生故有斷、又怕人不會、又云、何以故一切法是無生性、所以遠離斷常二邊、遠離二邊、是法界相、不說性而言相、謂、法界是性之緣起故也、相是法界緣起故、不說性而言相、梁昭明所謂、無斷無滅是也、此段更分明、又是左右求奇太過、强生節目爾、若金剛經可以刊削、則一大藏敎、凡有看者、各隨臆解都可刊削也、如韓退之指論語中畫字爲晝字、謂舊本差錯、以退之之見識、便可改了、而只如此論、在書中何也、亦是識法者懼爾、圭峯密禪師、造圓覺疏鈔、密於圓覺、有證悟處、方敢下筆、以圓覺經中一切衆生皆證圓覺、圭峯改證爲具、謂譯者之訛、而不見梵本、亦只如此論在疏中、不敢便改正經也、後來泐譚眞淨和尙、撰皆證論、論內痛罵圭峯、謂之破凡夫臊臭漢、若一切衆生皆具圓覺而不證者、畜生永作畜生、餓鬼永作餓鬼、盡十方世界都盧是箇無孔鐵鎚、更無一人發眞歸元、凡夫亦不須求解脫、何以故一切衆生皆已具圓覺、亦不須求證故、左右以

京師藏經本為是、遂以京本為據、若京師藏本、從外州府納入、如徑山兩藏經、皆是　朝廷盛時賜到、亦是外州府經生所寫、萬一有錯、又卻如何改正、左右若無人我、定以妙喜之言為至誠、不必泥在古今一大錯上、若執己見為是、決欲改削要一切人唾罵、一任刊版印行、妙喜也只得隨喜讃歎而已、公既得得遣人以經來求印可、雖不相識以法為親、故不覺忉忉怛怛相觸忤、見公至誠、所以更不留情、左右決欲窮教乘造奧義、當尋一名行講師、一心一意、與之參詳、教徹頭徹尾、一等是留心教網也、若以無常迅速生死事大、己事未明、當一心一意、尋一本分作家、能破人生死窠窟者、與伊著死工夫廝崖、忽然打破桼桶、便是徹頭處也、若只是要資談柄、道我博極群書、無不通達、禪我也會、教我也會、又能檢點得前輩諸譯主講師不到處、逞我能我解、則三教聖人、都可檢點、亦不必更求人印可、然後放行也、如何如何。

答張舍人狀元　安國

左右決欲究竟此事、但常令方寸虛豁豁地、物來卽應、如人學射久久中的矣、不見達磨謂二祖曰、汝但外息諸緣、內心無喘、心如牆壁、可以入道、如今人纔聞此說、便差排向頑然無知處、硬自遏捺、要得心如牆壁去、祖師所謂、錯認何曾解方便者也、巖頭云、纔恁麼便不恁麼、是句亦剗、非句亦剗、遮箇便是外息諸緣、內心無喘底樣子也、縱未得啐地折嚗地破、亦不被語言所轉矣、見月休觀指、歸家罷問程、情識未破、則心火熠熠地、正當恁麼時、但只以所疑底話頭提撕、如僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、只管提撕舉覺、左來也不是、右來也不是、又不得將心等悟、又不得向舉起處承當、又不得作玄妙領略、又不得作有無商量、又不得作眞無之無卜度、又不得坐在無事甲裏、又不得向擊石火閃電光處會、直得無所用心、心無所之時、莫怕落空、遮裏卻是好處、驀然老鼠入牛角、便見倒斷也、此事非難非易、除是夙曾種得般若種智之深、曾於無始曠大劫來、承事眞善知識、熏習得正知正見、在靈識中、觸境遇緣、於現行處築著磕著、如在萬人叢裏、認得自家父母相似、當恁麼時、不著問人、自然求覓底心不馳散矣、雲門云、不可說時卽有、不說時便無也、不可商量時便有、不商量時便無也、又自提起云、且道、不商量時是箇甚麼、又怕人不會、又自云、更是甚麼、近年以來、禪有多塗、或以一問一答、末後多一句為禪者、或以古人入道因緣、聚頭商確云、遮裏是虛、那裏是實、遮語玄、那語妙、或代或別、為禪者、或以眼見耳聞、和會在三界唯心、萬法唯識上、為禪者、或以無言無說、坐在黑山下鬼窟裏、閉眉合眼、謂之威音王那畔、父母未生時消息、亦謂之默而常照、為禪者、如此等輩、不求妙悟、以悟為落在第二頭、以悟為誑謼人、以悟為建立、自既不曾悟、亦不信有悟底、妙喜常謂衲子輩說、世間工巧技藝、若無悟處、尚不得其妙、況欲脫生死、而只以口頭說靜、便要收殺、大似埋頭向東走、欲取西邊物、轉求轉遠、轉急轉遲、此輩名為可憐愍者、教中謂之謗大般若、斷佛慧命人、千佛出世不通懺悔、雖是善因、返招惡果、寧以此身碎如微塵、終不以佛法當人情、決要敵生死、須是打破遮桼桶始得、切忌被邪師順摩捋、將冬瓜印子印定、便謂我千了百當、如此之輩、如稻麻竹葦、左右聰明有識見、必不受遮般惡毒、然亦恐用心之切、要求速效、不覺不知遭佗染汙、故信筆葛藤如許、被明眼人覷見一場敗闕、千萬相聽、只以趙州一箇無字、日用應緣處提撕、不要間斷、古德有言、研窮至理、以悟為則、若說得天花亂墜、不悟總是癡

狂外邊走耳、勉之不可忽。

答湯丞相　進之

丞相既存心此段大事因緣、缺減界中、虛妄不實、或逆或順、一一皆是發機時節、但常令方寸虛豁豁地、日用合做底事、隨分撥遣、觸境逢緣、時時以話頭提撕、莫求速效、研窮至理、以悟爲則、然第一不得存心等悟、若存心等悟、則被所等之心、障却道眼、轉急轉遲矣、但只提撕話頭、驀然向提撕處生死心絕、則是歸家穩坐之處、得到恁麼處了、自然透得古人種種方便、種種異解自不生矣、敎中所謂絕心生死、伐心稠林、浣心垢濁、解心執著、於執著處使心動轉、當動轉時、亦無動轉底道理、自然頭頭上明、物物上顯、日用應緣處、或淨或穢、或喜或怒、或順或逆、如珠走盤、不撥而自轉矣、得到遮箇時節、拈出呈似人不得、如人飲水冷煖自知、南陽忠國師有言、說法有所得、是爲野干鳴、此事如青天白日、一見便見、眞實自見得底、邪師走作不得、前日亦嘗面言、此事無傳授、纔說有奇特玄妙、六耳不同謀之說、卽是相欺、便好拽住劈面便唾、書生做到宰相、是世間法中、最尊最貴者、若不向此事上了却、卽是虛來南閻浮提打一遭、收因結果時、帶得一身惡業去、敎中說作癡福、是第三生寃、何謂第三生寃、第一生作癡福不見性、第二生受癡福無慚愧不做好事、一向作業、第三生受癡福盡、不做好事、脫却殼漏子時、入地獄如箭射、人身難得、佛法難逢、此身不向今生度、更向何生度此身、學此道、須有決定志、若無決定志、則如聽聲卜者、見人說東、便隨人向東走、說西便隨人向西走、若有決定志、則把得住作得主宰、嬾融所謂設有一法過於涅槃、吾說亦如夢幻、況世間虛幻不實之法、更有甚麼心情與之打交涉也、願公堅此志以得入手、爲決定義、則縱使大地有情、盡作魔王、欲來惱亂、無有得其便處、般若上無虛棄底工夫、若存心在上面、縱今生未了、亦種得種子深、臨命終時、亦不被業識所牽、墮諸惡趣、換却殼漏子、轉頭來、亦昧我底不得、察之。

答樊提刑　茂實

示諭能行佛事、而不解禪語、能與不解、無別無同、但知能行者、卽是禪語、會禪語而不能行佛事、如人在水底坐叫渴、飯籮裏坐叫飢何異、當知禪語卽佛事、佛事卽禪語、能行能解、在人不在法、若更向箇裏覓同覓別、則是空拳指上生實解、根境法中虛揑怪、如却行而求前、轉急轉遲、轉踈轉遠矣、要得徑截心地豁如、但將能與不能、解與不解、同與不同、別與不別、能如是思量、如是卜度者、掃向佗方世界、却向不可掃處看、是有是無、是同是別、驀然心思意想絕、當恁麼時、自不著問人矣。

答聖泉珪和尚

既得外護者存心相照、自可撥置人事、頻與衲子輩作佛事、久久自殊勝、更望室中與之子細、不得容人情、不得共伊落草、直似之以本分草料、敎伊自悟自得、方是尊宿爲人體裁也、若是見伊遲疑不薦、便與之下注脚、非但瞎却佗眼、亦乃失却自家本分手段、不得人、卽是吾輩緣法只如此、若得一箇半箇本分底、亦不負平昔志願也。

答鼓山逮長老

尊使來、收書幷信香等、知開法出世、唱道於石門、不忘所從來、爲岳長老拈香續楊岐宗派、既

已承當箇事、須卓卓地做敎徹頭徹尾、以平昔實證實悟底一著子、端居丈室、如擔百二十斤擔子、從獨木橋上過、脚蹉手跌、則和自家性命不可保、況復與人抽釘拔楔、救濟他人耶、古德云、此事如八十翁翁入場屋、豈是兒戲、又古德云、我若一向擧揚宗敎、法堂前草深一丈、須倩人看院始得、巖頭每云、向未屙已前、一覷便眼卓朔地、晏國師不跨石門句、睦州現成公案、放儞三十棒、汾陽無業莫妄想、魯祖凡見僧入門、便轉身面壁而坐、爲人時、當不昧這般體裁、方不失從上宗旨耳、昔潙山謂仰山曰、建法幢立宗旨於一方五種緣備、始得成就、五種緣、謂外護緣、檀越緣、衲子緣、土地緣、道緣、聞霜臺趙公、是汝請主、致政司業鄭公送汝入院、二公天下士、以此觀之、汝於五種緣稍備、每有衲子自閩中來者、無不稱歎法席之盛、檀越歸向、士大夫外護、住持無魔障、衲子雲集、可以趁色力未衰時、頻與衲子激揚箇事、垂手之際、須著精彩、不得莽鹵、蓋近年以來、有一種裨販之輩、到處學得一堆一擔相似禪、往往宗師造次放過、遂至承虛接響遞相印授、誤賺後人、致使正宗淡薄、單傳直指之風、幾掃地矣、不可不子細、五祖師翁住白雲時、嘗答靈源和尚書云、今夏諸莊顆粒不收、不以爲憂、其可憂者、一堂數百衲子、一夏無一人透得箇狗子無佛性話、恐佛法將滅耳、汝看主法底宗師用心、又何曾以產錢多少、山門大小、爲重輕、米鹽細務爲急切來、汝既出頭承當箇善知識名字、當一味以本分事接待方來、所有庫司財穀、分付知因識果知事、分司列局令掌之、時時提擧大綱、安僧不必多、日用齋粥常敎後手有餘、自然不費力、衲子到室中下及要緊、不得拕泥帶水、如雪峯空禪師、頃在雲居雲門相聚、老漢知渠不自欺、是箇佛法中人、故一味以本分鉗鎚似之、後來自在別處打發、大法既明、向所受過底鉗鎚、一時得受用、方知妙喜不以佛法當人情、去年送得一冊語錄來、造次顚沛、不失臨濟宗旨、今送在衆寮中、與衲子輩看、老漢因援筆書其後、特爲發揚、使本分衲子、爲將來說法之式、若使老漢初爲渠拕泥帶水、說老婆禪、眼開後、定罵我無疑、所以古人云、我不重先師道德、只重先師不爲我說破、若爲我說破、豈有今日、便是遮箇道理也、趙州云、若敎老僧隨伊根機接人、自有三乘十二分敎接他了也、老僧遮裏只以本分事接人、若接不得、自是學者根性遲鈍、不干老僧事、思之思之。

大慧普覺禪師書下終

大慧普覺禪師書　跋

大慧禪師說法、四十餘年、言句滿㆓天下㆒、平時不㆑許㆓參徒編錄㆒、而衲子私自傳寫遂成㆓卷帙㆒、晩年因㆓衆力請㆒乃許㆓流通㆒、然在會有㆓先後㆒、見聞有㆓詳略㆒、又賢士大夫所㆑得法語、各自寶藏、無㆑緣㆓盡覩㆒、今之所㆑收殊爲㆑未㆑盡、俟㆓更採集別爲㆓後錄㆒。

文昌謹白

國譯禪家龜鑑

解題

禪家龜鑑は朝鮮李朝の高僧葆眞大師退隱の撰述する所のものなり。師は明の嘉靖・萬曆年間、曹溪に住すること十數年、其の間、五十餘の經論・祖錄を覽て、日用參禪に要切なる語句を撮り、錄して以て室中の弟子に與へ、更に鈍根迷蒙の輩のために、其の各句の下に詳細なる注を加へて之を解釋し、門人魯願之を筆寫し、同じく義天之を校訂し、同じく惟政は更に之れが評文を作りて、遂に同志と共に梓に鏤りて流通せしめ、以て參學の龜鑑に資したるものなり。

今其の大要を察するに、朝鮮に於ける禪宗は、由來禪敎混淆して金沙分つべからず、敎を宗とするものは徒らに古人の糟粕を嘗めて、五敎の上に更に直指人心、悟入の門あるを知らず、禪を宗とするものは自ら天眞を恃んで、頓悟の後、始めて發心して萬行を修習するの意を知らず、寔に斯道の眞を傳へざること久しかりき。玆に於て大師は、敎門は唯だ一心法を傳へ、禪門は唯だ見性の法を傳ふることを提示し、學者須らく活句に參じて、死句に參ずべからざるを諭し、若しそれ生死を脫せんと欲せば、先づ須らく貪欲及び諸の愛渴の念を斷ぜよ。無礙淸淨の慧は、皆禪定によつて生ずと喝破す。師は斯くの

如く論じ來り論じ去つて、其の妄を破し眞を發揮し、延いて五家の宗途を辨じ、其の家風を論じて、別に臨濟の宗旨を闡明す。誠にそれ勉めたりと言ふべし。

然れども我が義諦和尚は其の著禪籍志に於て、「禪家龜鑑は名大にして僭に似たり。或は曰く、是れ朝鮮禪鑑のみ、敢て天下の禪鑑と曰ふに非ず」と貶すれども、義諦の此の論たるや甚だ中らず。而も義諦は本書を說いて、「葆眞大師宗遂號㆓退隱㆒」といひ、又「其ノ弟子惟政號㆓松雲㆒、嗣㆓住曹溪㆒、於㆓龜鑑句々之下㆒、委曲注解、名爲㆓口訣㆒」といふが如きは妄の最も甚だしきものといふべし。宗遂は退隱の名には非ず。宗は繼、遂は備にして、即ち法嗣の意なり。次に各句下の注解の凡てが松雲の作に非ずして、唯だ其の評文のみ。他は皆退翁自らの作なることは、松雲の跋文によつて明瞭なり。

本書は明の萬曆七年（我が正親町天皇の天正七年）に發刊せられて以來、同じく四十六年更に朝鮮に於て刊行せられ、我が國に於ては寬永十二年及び同じく十五年と延寶五年及び同じく六年との四回刊行せられたり。其の外、續大藏經、禪學寶典、朝鮮佛教通史などに合編せられて行はる。其の注釋本は本國譯の外、我が忽滑谷快天師の禪家龜鑑講話一卷、朝鮮、浮休（善修）の禪家龜鑑釋義一卷などあり。何れも參考するに足れり。

著者退隱の傳を案ずるに、諱は休靜、字は玄應、清虛と號し、また葆眞大師の號あり。多く西山に在りしを以て西山大師とも號す。俗姓は崔氏、完山（今の全羅北道全州）の人、朝鮮、李朝の中宗十三年（我が後柏原帝の永正十五年、紀元二一七八）を以て生る。これより先き、外祖府尹金禹、燕山君に忤ひ、安州（今の平安南道安州）に謫せられ、遂に其の地に居る。父世昌、科擧に應じて箕子殿參奉となるも就かず、詩酒を以て自ら娛む。母金氏は師が九歲の時に歿す。十歲にして復た父を喪ふ。伶仃依るべき所なく、南のかた智異山（今の慶尙南道にあり）に游び、忽ち禪家頓悟の法あることを知り、遂に法を靈觀大師に聽き、崇仁長老によつて剃髮す。居ること七八年、遍く名山に歷游し、年三十、禪科に中り、陞つて禪教兩宗判事に至る。一日歎じて曰く、「吾が出家の意は、豈に此所に在らんや」と。即ち綬を解いて、金剛山に還り、三夢詞を作る、曰く、「主人夢を客に說く、客夢を主人に說く、今二夢を說くの客、亦是れ夢中の人」と。宣祖の二十二年（我が後陽成帝の天正十七年）事に坐して獄に投ぜられ、辯疏甚だ該當、上其の寃なるを知り、直ちに之を釋す。同じく二十五年、即ち我が文祿元年、豐臣秀吉朝鮮を征伐するに當り、宣祖、西に狩す。休靜劍に仗つて之を迎へ謁す。上諭して曰く、「今や國家正に急なり、爾能く慈悲の心を發して普く救濟せよ」と。休靜泣いて對へて曰く、「臣老病、戎に從ふに堪へず、幸ひに弟子諸路に散在す。謹んで當に義旅を激倡すべし」と。上以て之を義とし、即ち命じて十六宗摠攝となす。是に於て、弟子惟政、七百餘の僧徒を率ゐて關東に起り、同じく處英、一千餘僧を率ゐて湖南に起り、休靜も亦門徒及び自ら募る所の僧五十餘名を率ゐて順安の法興寺に會す。官、兵、仗軍糧を給し、休靜、指揮號令す。僧徒感憤して死を願はざるもの莫し。遂に日本軍と牡丹峯下に戰ひ、翌二

十六年正月、大いに日軍と平壤城の北に劇戰して三京を復するを得たり。休靜、勇士百人を以ゐて駕を迎へて都に還る。日軍既に退くや、休靜上言して曰く、「臣年八十に垂んとし、筋力正に盡く。請ふ、軍事を以て惟政及び處英に屬し、願はくば印を納めて山に還らん」と。上其の老を憫み、號を扶宗樹教普濟登階尊者、國一紫都大禪師と賜ふ。宣祖の三十七年（我が後陽成帝の慶長九年、紀元二二六四）正月、弟子を會して說法し、像を描かしめ、其の背に書して曰く、「八十年前渠是我、八十年後我是渠」と。書を作りて惟政に附し訖つて、趺坐して寂す。壽八十五。著書は本書の外に詩文を集めたる清虛堂集二卷あり。

評文の作者惟政、字は離幻、俗姓は任氏、隱峰と號し、松雲大師と稱す。豐川の人なり。豐臣秀吉、征韓の結果、和議成るに及び、師は命を奉じて日本に來り、諸將及び諸僧の間に折衝し、事竣つて還るに及び、宣祖之を嘉し、禪號を賜うて四溟大師と曰ふ。官は中樞府事に至る。私に謚して慈通弘濟尊者と曰ふ。著書、四溟堂集三卷あり。

國譯㋑禪家龜鑑

㋺曹溪㋩退隱述

一物此に有り、從本以來、昭昭靈靈として、曾て生ぜず、曾て滅せず、名くることを得ず、狀ることを得ず。

一物とは何物ぞ。㋥古人の頌に云く、「古佛未生前、凝然たる一相圓、釋迦猶ほ未だ會せず、迦葉豈に能く傳へんや。」此れ一物の曾て生ぜず、曾て滅せず、名くることを得ず、狀ることを得ざる所以なり。㋭六祖、衆に告げて云く、「吾れに一物あり、無名無字、諸人還つて識るや否や。」㋬神會禪師卽ち出でて曰く、「㋣諸佛の本源、神會が佛性」と。此れ六祖の孽子たる所以なり。㋠懷讓禪師、嵩山より來る、六祖問うて曰く、「什麽物か伊麽に來る。」師措くこと罔し、八年に至りて方に自ら肯つて曰く、「㋷說似一物卽不中」と。此れ六祖の嫡子たる所以なり。

㋤三教の聖人、此の句より出づ。誰か是れ擧する者ぞ、㋸眉毛を惜取

㋑禪家。禪門は禪寂を以て家と爲す、故に禪宗を以て禪家と云ふ。龜鑑とは龜は吉凶を明し、鑑は好醜を照す、又龜鏡ともいふ、世の模範の意なり。
㋺曹溪。支那の廣東省韶州府にあり。
㋩退隱。諱は休靜、清虛大師と號す、朝鮮の人、法眼宗なり。法系は、天台德詔—永明智覺—道峯靈炤—道藏神範—清涼道國—龍門天隱—平山崇信—妙香懷澄—玄鑑覺照—頭流信修—普濟懶翁—南峯修能—碧松智岩—芙蓉靈觀—退隱休靜
㋥古人頌。雲門下の慈覺宗賾禪

せよ。

佛祖の出世、㋾風無きに浪を起す。

佛祖といふは、世尊迦葉なり。出世といふは、㋻大悲を體と爲して衆生を度するなり。然れども一物を以て之を觀るときは、則ち人人の面目、本來圓成なり、豈に他人の脂を添へ粉を著くることを假らんや。此れ出世の波浪を起す所以なり。虛空藏經に云く、「文字は是れ魔業、名相は是れ魔業、佛語に至りても亦是れ魔業」と、是れ此の意なり。此れは直に本分を擧す、佛祖功能無し。

乾坤色を失し、日月光なし。

然れども法に多義あり、人に㋕多機あり。妨げず施設することを。

法といふは一物なり、人といふは衆生なり。法に㋵不變隨緣の義あり、人に頓悟漸修の機あり。故に文字語言の施設を妨げず。此れ所謂㋟官には針をも容れず、私に車馬を通ずるものなり。衆生、圓成すと曰ふと雖も、生れながらにして慧目なければ、甘んじて㋹輪轉を受く。故に若し出世の㋞金鎞に非ずんば、誰か無明の厚膜を刮せんや。苦海を

師の圓相の頌。
㋭六祖。大鑑慧能禪師なり。
㋬神會。荷澤神會禪師なり。
㋣諸佛。六祖此の答を聞きて曰く、「汝に向つて道ふ、名なく字なしと、汝便ち喚んで本源佛性となす、汝向去、把茆頭を蔽ふことあるもまた只だ箇の知解の宗徒とならんのみ。」
㋠懷讓。南嶽懷讓禪師なり。
㋷說似。似は示に同じ、說明指示すること。
㋦三敎。佛敎、儒敎、道敎。
㋸惜取眉毛。下らぬことを饒舌する勿れと。佛意を誤り說くときは、眉鬚墮落すと稱せらる、故に斯く云ふなり。
㋾無風起浪。平地に波瀾を生ず好肉を剜つて瘡を生ずなど皆同意味の語なり。
㋻大悲。觀經に云く、「佛心とは是れ大悲を體と爲す」と。
㋕多機。人の根機の種種雜多な

越えて樂岸に登るに至つては、皆大悲の恩に由るなり。然るときんば則ち恒沙の身命も、萬一を報じ難し。此れは廣く新熏を擧して、佛祖の深恩を感ず。

王寶殿に登れば、野老謳歌す。

強ひて種種の名字を立つ、或は㋡心或は佛或は衆生と。名を守つて解を生ずべからず、當體便ち是、念を動ずれば則ち乖く。

一物上に強ひて三の名字を立つるものは、敎の已むことを得ざるなり。名を守つて解を生ずべからずとは、亦禪の已むことを得ざるなり。㋔一擡一搦、旋立て旋破る。皆㋤法王法令の自在なるものなり。此れは上を結び下を起す、佛祖の事體各別なることを論ず。

ろを云ふ。
㋵不變。緣に應じて能く萬有を生起すと雖も、本體如然として不變なるを云ふ。隨緣とは本體不變にして、而も能く差別の萬有を生起するを云ふ。此の二を喩ふれば、黃金を以て種種の器物を作るに、其の形は隨緣にして千差萬別なるも、其の金性に至りては依然として不變なるが如し。
㋟官には針云云。此の語はもと公事には嚴格にして、些の間隙を與へざるも、私事には寬大にして融和せるを云へる語なるが、宗門にては上の句を把住と見、下の句を放行と見る、卽ち上は一切を奪ふて一塵をも立せず、下は一切を放つて無礙自在。把住放行、自由自在。
㋹輪轉。輪廻轉生なり、出生入死して迷界に浮沈すること。

㋞金鎞。涅槃經第八に、盲人の目を治せんがために、良醫を請じて卽ち金鎞を以て其の眼膜を刮ると。
㋡心。華嚴經に曰く、「心佛及び衆生是れ三無差別」と。
㋔一擡一搦。一手擡一手搦の略、擡はもたげあぐる、搦はおさへる。師家の作用をいふ。
㋤法王。法華に云く、「我れ法王たり、法に於て自在」と。久旱云々の句は四喜の詩の二句なり、人天眼目に出づ。
㋶多子塔。吠舍釐城の西北三里の所にあり、千人の子が其の父のために建てたるものと。佛此處にて說法のとき、迦葉弊衣をつけて到る、他の諸弟子達、之を見て輕侮の念を生ず、佛之れを知りて卽ち迦葉のために、自ら半座を讓りて迦葉に與へ給ふ。
㋰靈山會上。佛靈鷲山上に於て

久旱に佳雨に逢ひ、他鄕に故人を見る。

世尊三處に心を傳ふるものを禪旨と爲し、一代說く所のものを敎門と爲す。

故に曰く、禪は是れ佛心、敎は是れ佛語と。

三處といふは、㋶多子塔前に半座を分つ、一なり、㋰靈山會上に拈花を擧す、二なり、㋒雙樹下に槨に雙趺を示す、三なり。所謂迦葉別に禪燈を傳ふるもの此れなり。一代といふは、四十九年の間、說く所の㋼五敎なり。人天敎、一なり。小乘敎、二なり、大乘敎、三なり、頓敎、四なり、圓敎、五なり。所謂阿難、敎海を流通するもの此れなり。然るときは則ち禪敎の源は世尊なり、禪敎の派は迦葉阿難なり。無言を以て無言に至るものは禪なり、有言を以て無言に至るものは敎なり、乃至心は是れ禪法なり、語は是れ敎法なり。則ち法は一味なりと雖も、見解は則ち天地懸隔なり。此れは禪敎二途を辨ず。

㋨放過することを得ず、㋔草裏に身を横ふ。

是の故に若し人之を口に失するときは、則ち拈花微笑、皆是れ敎迹。之を心に得るときは、則ち世間の㋗麁言細語、皆是れ敎外別傳の禪旨。

華を拈じて大衆に示す。衆皆默然たり、獨り迦葉のみ破顏微笑す、佛曰く、「吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり、摩訶迦葉に附屬す」と。

㋒雙樹。佛沙羅雙樹の下に於て涅槃に入り給ふ、此時迦葉は其の弟子等と共に他處にあり神通力に依りての故に、佛の入滅を知り、急に雙樹の下に到る、佛乃ち金棺の中より異相を示して以て附法の弟子たる迦葉の敬禮を入れ給ふと。悉しくは祖庭事苑一にあり。

㋼五敎。宗密禪師の原人論に曰く、「佛敎は淺より深に之く、略して五等あり、一に人天敎云云。」其の他佛一代の敎說を五時に判釋せるもの華嚴宗を初め諸說あり、今縷述せず。有言は五時八敎、無言は四十九年一字不說をいふ。

㋨放過。ウッカリと打過すと。

法に名もなし、故に言及ばざるなり、法に相もなし、故に心及ばざるなり。之を口に擬するものは、本心王を失す、本心王を失するときは、則ち世尊拈花、迦葉微笑、盡く陳言に落ちて、終に是れ物なし。之を心に得るものは、但だ談を衒ひ、善く法を說くのみに非ず、㋳鷰語に至つても、深く實相を談ず。是の故に㋮寶積禪師は哭聲を聞いて、身心を踊悅し、㋘寶壽禪師は諍拳を見て、面目を開豁するものは此れを以てなり。此れは禪敎の深淺を明す。

明珠手に在り、弄し去り弄し來る。

㋫吾れに一言あり、慮を絕し緣を忘ず、兀然として無事にして坐すれば、春來草自ら靑し。

慮を絕し緣を忘ずるは、之を心に得るなり、所謂㋙閑道人なり。於戲其の人たるや、本來無緣、本來無事、飢ゑ來れば卽ち食し、困じ來れば卽ち眠る。綠水靑山、意に任せて逍遙し、漁村酒肆、自在に安眠す。年代㋓甲子總に知らず、春來舊に依つて草自ら靑し。此れは別に一念㋢回光せんと欲するものなり。

㋔艸裏に身を横ふ。第二義門に下ること。

㋗麁言。涅槃經に、「諸佛常に輭語、衆の爲の故に麁と說く、麁言及輭語、皆第一義に歸す」と。陳言は古腐りたる言句。

㋳鷰語。五燈會元に云く、「玄沙師備禪師、因みに參ずる次で、鷰子の聲を聞く。乃ち云く、深く實相を談じ、善く法要を說くと。便ち下座。」

㋮寶積禪師。馬祖の法嗣幽州盤山寶積禪師、一日出でて葬列に會す、孝子の哭聲を聞きて忽ち省悟す。身心踊悅は法喜禪悅の貌なり。

㋘寶壽禪師。會元十一に出づ、寶壽第二世、先寶壽の所にありて父母未生以前本來の面目を問はる、答ふるを得ず、一日街頭に兩人拳を揮ふを見る、曰く、「儞恁麼の無面目を得たり」と。師之を聞いて言下に

將に謂へり人無しと、賴に一箇あり。

敎門は惟だ一心法を傳へ、禪門には惟だ見性の法を傳ふ。心は鏡の體の如く、性は鏡の光の如し。性自ら淸淨なれば、卽時に割然として還つて本心を得。此れは㋐得意の一念を秘重す。

重重山と水と、淸白たり舊家風。

㋚評に曰く、「心に二種あり、一には本源心、二には無明取相心なり。性に二種あり、一には本法性、二には性相相對性なり。故に禪敎者同じく迷へば名を守つて解を生じ、或は淺を以て深と爲し、或は深を以て淺と爲して、遂に㋖觀行の大病と爲る。故に此に於て之を辨ず。」

然して諸佛は經を說くに、先づ諸法を分別して、後畢竟空を說く。祖師は句を示すに、迹を㋴意地に絕し、理を心源に顯はす。

諸佛は萬代の依憑たり、故に理は須らく委示すべし、祖師は卽時㋱度脫するに在り、故に意は玄をして通ぜしむ。迹は祖師の言迹なり、意は學者の意地なり。

豁然として大悟すと。
㋫此句は南嶽懶瓚の語なり。
㋙閑道人。證道歌に曰く、「絕學無爲の閑道人、妄想をも除かず眞をも求めず云云」と。是非善惡、生死涅槃等、差別の境界を脫して無念無作無功用にして、而も自由自在に大機大用を發する底の人。
㋓甲子。甲は甲乙丙丁等の十干、子は子丑寅等の十二支。曆或は年月日等に當て用ふ。
㋢回光返照と熟字す。外に向て馳求するを止めて自己本來の面目に向て尋ねるを。一箇の箇は枚也、數也、一人をいふ。
㋐得意。冷暖自知の處。割然は豁然と同じ、重重山とは穩坐得意の境界。
㋚評。大師の門人惟政の付する所なりと。惟政は豐公征韓役の後慶長十年三月和議使と共に入朝、家康に謁見したると

㋯胡亂に指注するも、臂は外に曲らず。

諸佛は㋛弓を說き、祖師は弦を說く。佛は無礙の法を說いて、方に一味に歸す。此の一味の迹を拂ふて、方に祖師の示す所の一心を現ず。故に云く、庭前の柏樹子の話は、㋽龍藏所に未だ有らざる底なりと。

龍藏は龍宮の藏經なり。僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ㋪祖師西來意。」州答へて曰く、「庭前の柏樹子」と。此れ所謂格外の禪旨なり。

㋲魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。「方語に云く、蹤跡猶ほ在りと。」

故に學者は先づ如實の言敎を以て、委しく不變隨緣の二義は、是れ自心の㋝性相、頓悟漸修の兩門は、是れ自行の始終なることを辨じて、然して後に敎義を放下し、但だ自心現前の一念を將つて、禪旨に參詳するときんば、則ち必ず所得あり、所謂出身の活路なり。

上根上智は此の限りに在らず、中下根の者は等を躐ゆべからず。敎義といふは不變隨緣、頓悟漸修、先有り後有り。禪法といふは一念中、不變隨緣、性相體用、元是れ一時、㋜離卽離非、是卽非卽。故に宗師は法に

あり、羅山文集に僧松雲と記すもの卽ち此人なり。外蕃通書等には松雲と誌せり。松雲は道號にして惟政は諱なり。
㋖觀行。觀は觀心なり、行は修行なり。大病とは識神を認めて悟と爲すは却て痴と爲る。
㋴意地。意識は心地則ち掃蕩門なり、心源とは建立門なり。
㋱度脫。度は濟度、脫は得脫成佛。
㋯胡亂に指注す。佛語祖語を勝手に引き來りて種々に說きたるを指す、出鱈目と云ふ意。
㋛弓を說く。曲げて方便施設するを云ふ。弦を說くとは直に本分を示すを云ふ。
㋽龍藏。如來滅後、一切の經典は龍宮に收まりて龍王の守護する所となれりと傳ふ、されば龍樹菩薩は龍宮に入りて、華嚴經を將來せりと云ふ。
㋪祖師西來意、達磨直傳の佛法

據つて言を離る、直指一念、見性成佛のみ。教義を放下するといふは此れを以てなり。

明歴歴の時雲深谷に藏れ、深密密の處日晴空を照す。

大抵學者は須らく(イ)活句に參ずべし、死句に參ずること莫れ。活句下に薦得すれば、佛祖の與に師と爲るに堪へたり、死句下に薦得すれば、自救不了。此れより下、特に活句を擧して、自をして悟入せしむ。

臨濟(ロ)を見んと要せば、須らく是れ(ハ)鐵漢なるべし。

評に曰く、「話頭に句意の二門有り、句に參ずるものは徑截門活句なり、心路沒く語路沒く、摸𢱢無きが故なり。意に參ずるものは圓頓門死句なり、理路あり語路あり、聞解思相あるが故なり。」

凡そ本公案上に參ずるには、切心に工夫を做すこと雞の卵を抱くが如く、猫の鼠を捕ふるが如く、飢えて食を思ふが如く、渴して水を思ふが如く、兒の母を憶ふが如くにして、必ず透徹の期あり。

祖師の公案、一千七百則あり、(ニ)狗子無佛性、(ホ)庭前の柏樹子、(ヘ)麻三斤、(ト)乾屎橛の流の如し。鷄の卵を抱くは、暖氣相續するなり、猫の鼠を捕ふるは、心眼不動なり、飢えて食を思ひ、渴して水を思ひ、兒の母を憶ふに至つては、皆眞心より出づ、(チ)做作底の心に非ず、故に切と云ふ。禪に參ずるに此の切心なくして、能く透徹する者、是の處あること無し。

(リ)參禪は須らく三要を具すべし。一には(ヌ)大信根あり、二には大憤志あり、三には大疑情あり。苟し其の一を闕かば、折足の鼎の如し、終に廢器と成る。

佛云く、「成佛は信を根本と爲す。」(ル)永嘉云く、「修道は先づ須らく志を立つべし。」(ヲ)蒙山云く、「禪に參ずるもの言句を疑はざる、是れを大病と爲す。」又云く、「大疑の下に必ず大悟あり。」

日用應緣の處、只だ狗子無佛性の話を擧せよ。擧し來り擧し去り、疑ひ來り疑ひ去りて、(ワ)理路を沒し、義路を沒し、滋味沒く、心頭熱悶することを覺得する時、便ち是れ當人(カ)放身命の處、亦是れ成佛作祖底の基本なり。

の極意。

(モ)魚行。蹤跡を隱さんとすれば愈よ顯はるることを云ふ。

(セ)性相。性は不變の本性、相は隨緣の形相。

(ス)離卽離非。楞嚴の四に云く、「卽ち如來藏妙明の心元、卽を離れ非を離れ、是卽非卽」と。疏に云く、「此れ二門不二にして唯だ是れ一心なるに約して雙べて眞俗を遮す云云」と。卽は俗諦にして非は眞諦なり。

(イ)活句死句。洞山和尚曰く、「語中に語なきを活句と云ひ、語中に語有るを死句と云ふ」と。卽ち活句とは思慮分別、意識情想を超越せる靈活の言句を云ひ、死句とは理路に滯り知解に陷るの言句を指す。

(ロ)臨濟を見る。臨濟和尚の眞の面目を徹見する。

(ハ)鐵漢。心肝鐵の如き大丈夫兒。

(ニ)狗子無佛性。僧あり、趙州に問ふ、狗子に還つて佛性ありやまた無や。州曰く、無。

(ホ)庭前の柏樹子。僧、趙州に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。州曰く、庭前の柏樹子。

(ヘ)麻三斤。僧、洞山に問ふ、如何なるか是れ佛。山曰く、麻三斤。

(ト)乾屎橛。僧、雲門に問ふ、如何なるか是れ佛。門曰く、乾屎橛。暖氣云云は間斷なきの謂なり。

(チ)做作底。眞似ごと作りごと、ごまかしごとなり。

(リ)此の一節は高峯錄に出づ。

(ヌ)大信根。華嚴經に曰く、「信は道の本源、功德の母」と。又曰く、「佛法の大海は信を能入となす。」

(ル)永嘉。眞覺大師は六祖に嗣ぐ、俗姓は戴氏、幼にして出家し、偏く教相を研究し、深く止觀に通ず、後又志を發して六祖

僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性有りや也た無や。」州曰く、「無」。

此の一字子は宗門の一關、亦是れ許多の惡知惡覺を摧く底の器仗、亦是れ諸佛の面目、亦是れ諸祖の骨髓なり。須らく此の關を透得して、然して後佛祖期す可し。(ヨ)古人の頌に曰く、「趙州の露刄劍、寒霜光焰焰、擬議して如何と問はゞ、身を分つて兩段と作さん。」

話頭、擧起の處に(タ)承當することを得ざれ、思量卜度することを得ざれ、迷を將つて悟を待つことを得ざれ、不可思量の處に就きて、思量して心之く所なきは、(レ)老鼠の牛角に入りて、便ち倒斷を見るが如し。又尋常計較安排底是れ識情、生死に隨つて遷流する底是れ識情、怕怖慞惶する底是れ識情。今人是れ病なることを知らず、只管に裏許に在りて頭出頭沒す。

話頭に十種の病あり、意根下の卜度と曰ひ、揚眉瞬目の處に(ソ)探根すと曰ひ、語路上に活計を作すと曰ひ、文字中に證を引くと曰ひ、擧起の處に承當すと曰ひ、(ツ)無事匣裏に颺在すと曰ひ、有無の會を作すと曰ひ、眞無の會を作すと曰ひ、道理の會を作すと曰ひ、迷を將つて悟を待つと曰ふ。此の十種の病を離るる者は、但だ話を擧する時、略精神を抖擻す、

に參じ、一夜にして印可を受く、世に一宿覺と呼ぶ。證道歌は其の作にして盛んに世に行はる、又永嘉集なるものあり。

(ヲ)蒙山。五祖法演禪師八世の法孫、蒙山異禪師は皖山凝に嗣ぐ。

(ワ)理路。大燈國師遺誡に曰く、「無理會のところに向つて究め來り究め去るべし」と。

(カ)放身命。放身捨命なり。

(ヨ)古人頌。五祖法演禪師の頌也。

(タ)承當。肯諾の義なり、早呑込なり。

(レ)老鼠牛角に入る。又云ふ、鼠錢筒に入ると、力盡き神疲れ、技窮まり進退共に谷まる底の消息。鼠、牛角に入りて咬み來り咬み去つて、出路を求むるに得べからず、還つて倒翻するに當りて大活路を得るが如し。

(ソ)探根。採跟とも書す、滯在の

只だ是れ箇の甚麼をか疑はん。

此の事は(ネ)蚊子の鐵牛に上るが如し、更に如何若何を問はず、嘴を下すことを得ざる處、棄命一攅、身に和して透入す。

重ねて上の意を結して、活句に參ずる者をして、退屈を得ざらしむ。古に云く、「(ナ)參禪は須らく祖師の關を透るべし、妙悟は心路を窮め絕せんことを要す。」

工夫は絃を調ぶるの法の如し、緊緩其の中を得よ、勤むるときは則ち執着に近く、忘ずるときは則ち無明に落つ。(ラ)惶惶歷歷、密密綿綿。

琴を彈ずる者の曰く、「緩急中を得て、然して後淸音普し。」工夫も亦此の如し、急なるときは則ち(ム)血囊を動じ、忘ずるときは則ち(ウ)鬼窟に入る。

徐ならず疾ならず、妙其の中に在り。

工夫到れば、行いて行くことを知らず、坐して坐することを知らず。此の時に當つて、八萬四千の魔軍、(ヰ)六根門頭に在つて伺候す、心の生ずるに隨つて設く。心若し起らずんば、爭か之を如何せん。

魔といふは、生死を樂む鬼の名なり、八萬四千の魔軍は、乃ち衆生の八

義、又行いて進まざる貌、卽ちグヅグヅして自由を得ざること。

(ツ)無事匣。唐土の風に重重に棚を作りて、記するに甲乙丙等の十干の字を以て符號となす、而して第一の甲の棚には何物をも置かず、之を無事匣と云ふ。

(ネ)蚊子鐵牛に上る。思慮分別を以て處理すべからざるに喩ふ。蚊が鐵にて造りたる牛を刺すも嘴も立たぬなり。

(ナ)此の句は無門關第一則、狗子無佛性の評の初に出づ。

(ラ)惶惶。恐らくは惺惺の誤ならん。

(ム)血囊。身體のこと、身心を動亂するなり。白隱禪師夜船閑話に曰く、「自ら謂へらく、猛く精彩を着け、重ねて一回放身捨命し去らんと、玆に於て牙關を咬定し、雙眼睛を瞠開

萬四千の煩惱なり。魔本種無し、修行念を失する者、遂に其の源を派つ。衆生は其の境に順ふが故に(ノ)之に順ふ、道人は其の境に逆ふが故に之に逆ふ。故に云ふ、「(オ)道高ければ魔盛なり。」禪定の中に、或は(ク)孝子を見て股を斫り、或は猪子を見て鼻を把る者、亦自心より見を起して、此の外魔を感ずるなり。心若し起らざるときは、則ち種種の伎倆、翻つて(ヤ)割水吹光と爲る。古に云く、「(マ)壁隙よりは風動じ、心隙よりは魔侵す。」

起心は是れ(ケ)天魔、不起心は是れ(フ)陰魔、或は起或は不起は是れ(コ)煩惱魔。然れども我が正法中、本是の如きの事なし。

大抵(エ)忘機は是れ佛道、分別は是れ魔境。然れども魔境は夢の事、何ぞ辨詰するに勞せん。

し、寢食共に廢せんとす、旣にして未だ朞月に亘らざるに、心火逆上し肺金焦枯し云云」と。是れ急に過ぎて疾患を得たるなり。

(ウ)鬼窟。只だ漫然と目を閉ぢ、坐禪すること。坐禪儀に曰く、「法雲圓通禪師も亦人の目を閉ぢ坐禪するを訶して、黑山鬼窟と云へり」と。

(ヰ)六根門。眼、耳、鼻、舌、身、意のこと。

(ノ)之れとは魔を云ふ。

(オ)道高ければ魔盛なり。坐禪儀にある語。又小止觀には、道高ければ方に知る魔盛んなりと云云と。

(ク)孝子を見て云云。楞嚴疏鈔に出づ。一禪師あり、禪定中に一孝子の死屍を捧げ來るを見る、師是れ魔なりと知つて、斧を振ふて之を斬る、覺めて後に之を見れば、自ら其の股を傷けたるを見ると。宗鏡錄に曰く、「禪師あり、坐時一猪の來るを見る、卽ち猪鼻を把つて一拽し、火を把り來れと叫ぶ、乃ち把を見るに自らの鼻孔なり云云」と。

(ヤ)割水吹光。如刀割水、如風吹光の略。無功に歸すること。心起らざれば天魔外道も如何ともする能はざるを云ふ。

(マ)起信論筆削記に出づ。

(ケ)天魔。欲界の第六天のこと。人の修道するを見ては、己の宮殿を破壞するとなし、魔軍を起して之を妨ぐ。

(フ)陰魔。又蘊魔とも云ふ、五蘊假和合の身體のこと。身は心を繫縛して自由ならしめず、故に魔と云ふ。

(コ)煩惱魔。煩惱は心身を惑亂して修行の妨げとなる故に魔と云ふ。

(エ)忘機。所求の心の止むこと、無念無作なること。傳心法要に、忘機は則ち佛道隆なり、分別は則ち魔軍熾なりと。

工夫若し打成一片なるときは、則ち縱ひ今生に透ること得ざるも、(テ)眼光落地の時、惡業の爲に牽ゐられず。

業とは無明なり、禪とは般若なり。(ア)明暗相敵せざるの理、固然たり。

大抵、禪に參ずる者、還つて四恩の深厚を知る麽、還つて四大醜身、念念衰朽することを知る麽、還つて人命の呼吸に在るを知る麽、生來佛祖に値遇する麽、無上法を聞くに及んで、(サ)希有の心を生ずる麽、僧堂を離れず、節を守る麽、(キ)隣單と雜話せざる麽、切に是非を鼓扇することを忌む麽、(ユ)話頭十二時中、明明不昧なる麽、人に對して接話の時、(ヌ)間斷なき麽、見聞覺知の時、打成一片なる麽、自己を返觀し、佛祖を(ミ)捉敗する麽、今生に決定し、佛の慧命を續ぐ麽、起坐便宜の時、還つて地獄の苦を思ふ麽、此の一報身、定んで輪廻を脫する麽、(シ)八風の境に當つて、心動ぜざる麽、此れは是れ參禪の人、日用中點檢する底の道理なり。(ヱ)古人云く、「此の身今生に向つて度せずんば、更に何れの生を待つてか此の身を度せん。」

(ヒ)四恩といふは、父母・君・師・施主の恩なり。四大醜身といふは、父の精

(テ)眼光落地の時。臨命終の時をいふ。

(ア)明暗相適せず。光生ずれば暗は拂はざるに自然に去る、心眼明かなれば無明自ら消失せん。

(サ)希有の心。遭遇し難きを思ふこと、踊悅すること。

(キ)隣單。僧堂に於ける隣坐の人のこと。

(ユ)話頭。頭は助字、古則公案のこと。自己が工夫しつゝある公案を指す。

(ヌ)間斷。正念工夫相續の有無。

(ミ)捉敗。とらまへること。

(シ)八風。利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂のこと。佛地經論に出づ、此の八は人心を煽動するものなるが故に風と云ふ。

(ヱ)古人云云。此の語、中峯和尙

一滴、母の血一滴は、水大の濕なり。精は骨と爲り、血は皮と爲る者は、地大の堅なり。精血一塊して、腐れず爛れざるは、火大の暖なり。鼻孔先づ成りて出入の息を通ずる者は、風大の動なり。阿難曰く、「㋲欲氣麁濁、腥臊交遘ふ」と。此れ醜身たる所以なり。念念衰朽といふは、頭上の光陰刹那も停らず、面自ら皺んで髮自ら白し。今既に昔に如かず、後當に今に如かざるべしと云ふが如し、此れ無常の體なり。然して無常の鬼は、殺を以て戲と爲す、實に念念畏るべし。呼といふは出息の風なり、吸といふは入息の風なり。人命の寄托、㋝只だ出入の息に在り。八風といふは順逆の二境なり。地獄の苦といふは、人間の六十劫は㋜泥犁の一晝夜、鑊湯爐炭、劍樹刀山の苦、口に形り言ふべからず。人身の得難きことは、㋑海中の鍼よりも甚だし、故に此に於て愍んで之を警す。

評に曰く、「上來の法語、人の水を飲んで冷暖自知するが如し。聰明も㋺業に敵すること能はず、㋩乾慧も未だ苦輪を免れず、各須らく察念すべし、以て自謾すること勿れ。」

坐右銘の終にあり。又黄龍死心禪師の語策にもあり。

㋪四恩。心地觀經には父母、國王、衆生、三寶の恩を稱す。今上記の說は釋氏要覽に出づ、此の四恩は出家に就いて云ふなり。

㋲楞嚴經卷第一に此文あり。

㋝人命在呼吸。四十二章經に曰く、「佛、復た沙門に問ふ、人命幾の間に在りや。答へて曰く、呼吸の間と。佛言はく、善哉、子道を知ると。」

㋜泥犁。梵音 Naraka の音寫の訛なり、地獄のこと。

㋑海中の鍼。菩薩處胎經の偈に曰く、「一鍼投ㇾ海底、求ㇾ之倘可ㇾ得」と。

㋺業。善惡の業報、生死流轉の根元。

㋩大般若經に曰く、「十地の最切乾慧地、謂く、未だ理水あらざるが故に其の名を得たり、

語を學ぶの輩は、說の時は悟に似て、境に對して還つて迷ふ。所謂言行の相違ふ者なり。

此れは上の自謾の意を結ぶ、言行の相違、虛實辨ずべし。

若し生死に敵せんと欲せば、須らく㋥此の一念子の爆地一破することを得て、方に生死を了得すべし。

爆は漆桶を打破する聲なり。㋭漆桶を打破して、然して後生死に敵すべし。諸佛㋬因地の法行といふは、只だ此れのみ。

然れども一念子爆地一破して、然して後に須らく㋣明師を訪ふて、正眼を決擇すべし。

此の事は極めて容易ならず、須らく慚愧を生じて、始めて道を得べし。大海の如し、轉た入れば轉た深し、愼んで小を得て足れりと爲ること勿れ。悟後若し人に見えざるときは、則ち㋠醍醐の上味も翻つて毒藥と成る。

古德云く、「只だ子が眼の正しきことを貴ぶ、汝が㋷行履の處を貴ばず。」

㋦昔仰山、潙山の問に答へて云く、「涅槃經四十卷、總に是れ魔說」と。此れ仰山の正眼なり。仰山又行履の處を問ふ、潙山答へて曰く、「只だ子

卽ち外凡の位なり、未だ苦輪を免れず。」

㋥此一念子。無明業識を指す。

㋭漆桶。黑暗暗にして辨別し難きより、煩惱無明の巢窟に喩ふ。生死可敵とは生死本來空と見たればなり。

㋬因地。果地に對す、因位とも云ふ。菩薩の佛地に至る道程にして、六度の行願を修しつつある地位のこと。

㋣明師を訪ふ。馬鳴云く、「正因有りと雖も、薰習の力、諸佛菩薩知識に遇はずんば、爭か煩惱を斷じて涅槃に入るを得ん。」

㋠醍醐。五味の一、牛乳にて製したるもの、其の味ひ最上甘美なり。

㋷行履。日常の行持を云ふ、行は躬行、履は履踐なり。

㋦此の話は會元九に出づ。

㋸本來無一物。六祖大師の偈に、

が眼の正しきことを貴ぶ」と云ふ。此れ先づ正眼を開いて、而して後行履を説く所以なり。故に云ふ、若し修行せんと欲せば、先づ須らく頓悟すべし。

願はくは諸道者、深く自心を信じて、自ら屈せず、自ら高ぶらざれ。此の心平等にして本凡聖なし、然れども人に約すれば、迷悟凡聖あり。師に因つて激發して、忽ち眞に我れと佛と殊なる無きことを悟るものは頓なり。此れ自ら屈せざる所以なり。(ル)本來無一物と云ふが如きなり。悟に因つて習を斷じ、凡を轉じて聖と成すものは漸なり、此れ自ら高ぶらざる所以なり。(ヲ)時時に勤めて拂拭せよと云ふが如し。屈といふは教學者の病なり、高といふは禪學者の病なり。教學の者は、禪門に悟入の秘訣有ることを信ぜず、深く橫敎に滯り、別に眞妄を執し、觀行を修せず、(ワ)他の珍寶を數ふ、故に自ら退屈を生ずるなり。禪學の者は、教門に修斷の正路あることを信ぜず、(カ)染習起ると雖も、慚愧を生ぜず、(ヨ)果級初なりと雖も、多く法慢あり、故に言を發すること過高なり。是の故に(タ)得意修心の者は、自ら屈せず自ら高ぶらざるなり。

「菩提もと樹に非ず、明鏡また臺に非ず、本來無一物、何れのところにか塵埃を惹かん。」と。

(ヲ)時時に勤めて。神秀禪師の偈に、「身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時時に勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむること勿れ」と。

(ワ)他の珍寶を數ふ。華嚴十三に「人の他の珍寶を數ふるが如し、自らは半錢の分なし、法に於て修行せざれば多聞も亦是の如し。」修斷は修善斷惡也。

(カ)染習。染心習氣なり。

(ヨ)果級。佛果に至るまでの修行の道程に於ける階級。

(タ)得意。深意を會得すること。

(レ)一位。佛位なり。華嚴經梵行品に曰く、「初發心時得阿耨菩提」と。

(ソ)五十五位。十信、十行、十回向、十地の五十位に加ふるに乾惠、煖、頂、忍、世第一の

評に曰く、「自ら屈せず、自ら高ぶらずとは、略初心の因を擧して、果海を該ぬるときは、則ち之を信ずと雖も、(レ)一位なり。廣く菩薩の果を擧して、因源に徹するときは、(ソ)則ち五十五位なり。」

迷心にして道を修すれば、但だ無明を助く。

悟若し未だ徹せざれば、修豈に眞に稱はんや。悟修の義は、(ツ)膏明の相賴りて、目足の相資くるが如し。

修行の要は、但だ(ネ)凡情を盡せ、別に聖解なし。

(ナ)病盡き藥除けば、還つて是れ本人。

衆生心を用捨せず、但だ自性を染汚すること莫れ、正法を求むる是れ邪。

捨者求者、皆是れ染汚なり。

煩惱を斷ずるを二乘と名け、煩惱生ぜざるを大涅槃と名く。

斷とは(ラ)能所なり、不生とは無能所なり。

須らく(ム)虛懷自照して、一念緣起無生を信ずべし。

此れは單に性起を明す。

諦かに殺盜婬妄は、一心上より起ることを觀ぜよ。當處便ち寂ならば、何

五位を以てす、即ち五十五位となる。

(ツ)膏明。燈火となり。

(ネ)凡情。天皇道悟云く、「性に任せて逍遙し、緣に隨つて放曠す、但だ凡情を盡せ、別に聖解なし」と。

(ナ)病盡き。大慧の曾侍郎に答ふる書に、「今日非を知るは則ち幻藥を以てまた幻病を治するなり、病瘥え藥除けば依然として舊時の人」と。

(ラ)能所。能は斷ずるもの、所は斷ぜらるるもの、此の二者の相對立するは、即ち絕對不二の妙境にあらず。

(ム)虛懷自照。虛心坦懷、自己返照なり。

(ウ)此の文は圓覺經にあり、幻を知るとは世間一切の法は皆夢幻の如しと觀ずるなり。華嚴經に曰く、「世間種種の法一切皆幻の如し、若し能く是の如

ぞ更に斷ずることを須ひん。」

此れは雙に性相を明す。

經に云く、「不起一念を名けて永く無明を斷ずと爲す。」又云く、「念起卽覺。」

㋒幻を知れば卽ち離る、方便を作さず。幻を離るれば卽ち覺す、亦・㋖漸次なし。

心を幻師と爲し、身を幻城と爲す、世界は幻衣なり、名相は幻食なり。起心・動念・虛妄。言眞に至るまで幻に非ずといふと無し。又無始の幻無明皆覺心より生ず、幻幻は空花の如し、幻滅するを不動と名く、故に瘡を夢みて醫を求むるもの、寤め來れば方便なし。幻を知るものも亦是の如し。

衆生の㋨無生中に於て、妄に生死涅槃を見るは、空花の起滅を見るが如し。性本無生、故に㋔生涅なし、空本無花、故に起滅なし。生死を見るものは、空花の起るを見るが如し、涅槃を見るものは、空花の滅するを見るが如し。然れども起本無起、滅本無滅、此の二見に於て窺詰することを用ひず。是の故に㋗思益經に云く、「諸佛の出世、衆生を度せんが爲に非ず、只だ生死涅槃の二見を度せんが爲のみ。」

く知らば、其心動くとなし。」

㋖漸次なし。漸次に階級を追ふて至るに非ず、卽時大覺なり、一超直入如來地なり。幻城は「すみやか」、幻衣は身は世界に覆はるる故なり、幻食は名相は目前の境、妄心は之に依りてそだち長ずるなり。

㋨無生。華嚴疏卅八に曰く、「妄法はもと空なり、稱して無生と云ふ、眞法は相を離る、亦無生と云ふ。」

㋔生涅。生死涅槃の略。

㋗思益經。具には梵天思益經。四卷あり、其の一の卷正問品の意を取る。

菩薩は㋳衆生を度して滅度に入らしむ、又實に衆生の滅度を得る無し。

菩薩は只だ念念を以て、衆生の爲にす、體空を了念するは度衆生なり、念旣に空寂なれば、實に衆生の滅度を得るもの無し。此れより上は信解を論ず。

理は頓に悟ると雖も、事は頓に除くに非ず。

㋮文殊は天眞に達し、普賢は緣起を明す。解は電光に似て、行は㋘窮子に同じ。此れより下には修證を論ず。

㋡婬を帶びて禪を修するは、沙を蒸して飯と作すが如し。殺を帶びて禪を修するは、耳を塞いで叫聲するが如し。偸を帶びて禪を修するは、漏巵に滿たんことを求むるが如し。妄を帶びて禪を修するは、糞を刻んで香と爲すが如し。縱ひ多智あるとも皆魔道と成る。

此れは修行の軌則、㋙三無漏の學を明す。㋙小乘は法を稟くるを戒と爲す、粗其の末を治む。大乘は心を攝するを戒と爲す、細に其の本を絕す。然らば則ち法戒は身犯なく、心戒は思犯なし。㋢婬は清淨を斷ち、殺は慈悲を斷ち、盜は福德を斷ち、妄は眞實を斷つ。能く智惠を成じ、縱ひ㋐

㋳衆生。金剛經大乘正宗分第三に曰く、「是の如く無量無數無邊の衆生を滅度すれども、實に衆生の滅度を得るものなしと云云。」滅度は涅槃の譯語なり。

㋮文殊。此の菩薩は智を代表す、卽ち理なり、普賢菩薩は行を代表す、卽ち事なり。

㋘窮子。法華信解品に出づ「長者の一子あり、父の家を離れ、他國に流浪困窮して多年の後、我が家に歸りたるも、尙ほ我が家たるを信ぜずして、僅に奴僕として賤役に服すること又多時の後、漸く父の教示によりて自ら長者の相續者たるを知れり」と。是れ衆生が本來佛子にてありながら、迷妄邪念に覆はれて之を自知せず、後に至りて之を悟ると雖も、多年困窮の餘習未

六神通を得るとも、如し殺盜婬妄を斷ぜざるときは、則ち必ず魔道に落ちて、永く菩提の正路を失す。此の四戒は百戒の根なり、故に別に之を明して、思犯無からしむ。(サ)無憶を戒と曰ひ、無念を定と曰ひ、莫妄を慧と曰ふ。又戒を捉賊と爲し、定を縛賊と爲し、慧を殺賊と爲す。又戒器完固にして、定水澄清なれば、慧月方に現ず。此の三學は、實に萬法の源たり、故に特に之を明して、諸漏無からしむ。

(キ)靈山會上に豈に無行の佛あらんや、少林門下に豈に妄語の祖あらんや。

無德の人、佛戒に依らず、(ユ)三業を護らざることは、放逸懈怠にして、佗人を輕慢し、是非を輕量するを根本と爲す。

一たび心戒を破れば、百過俱に生ず。

評に曰く、「此の如きの魔徒、末法熾盛にして、正法を惱亂す、學者之を詳かにせよ。」

若し戒を持せざれば、尙ほ(メ)疥癩野干の身をも得ず、況んや淸淨菩提の果を冀ふべけんや。

だ去らず、長者の態度備はらざるを云ふ。

(ノ)婬を帶びて云云。此の義楞嚴六に詳かに出づ。

(コ)三無漏學。戒定慧のこと。

(エ)「小乘は」より「思犯なし」に至るまで、溫陵の解語。

(テ)「婬は淸淨」以下「正路を失す」までは智覺壽禪師垂誡の語。

(ア)六神通。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通なり。

(サ)無憶。思犯なきこと。

(キ)靈山。釋尊說法の地、少林寺は達磨大師面壁坐禪の所。

(ユ)三業。身、口、意の三所に就て起す所作なり。殺盜婬等は身業、妄語綺語等は口業、貪瞋痴慢等は意業なり。

(メ)疥癩。惡病なり。野干は狐に似て小なり、色は靑黃、群行して夜鳴くこと狼の如しと、獸の名。

戒を重んずること佛の如くなれば、佛常に焉に在り。須らく(ミ)草繫、鵞珠以て先導と爲すべし。

生死を脫せんと欲せば、先づ貪欲及び諸の愛渴を斷ぜよ。

愛は輪廻の本たり、欲は受生の緣たり。(シ)佛云はく、「婬心除かずんば、(ヱ)塵出づべからず。」(ヒ)又云はく、「恩愛に一たび縛著すれば、人を牽ゐて罪門に入る」と。渴は情愛の至切なるなり。

無礙(モ)淸淨の慧、皆禪定に因つて生ず。

凡を超えて聖に入り、(セ)坐脫立亡するもの、皆禪定の力なり。(ス)故に云く、聖道を求めんと欲せば、此れを離れて路なし。

心、(イ)定にあるときは、則ち能く世間生滅の諸相を知る。

虛隙の日光、纖埃擾擾たり。淸潭の水底、影像昭昭たり。

境(ロ)を見て心の起らざるを不生と名く、不生を無念と名く、無念を解脫と名く。

戒や定や解や、一を擧すれば三を具す、是れ單相にあらず。

道を修し滅を證するは、是れ亦眞に非ず、心法本寂、卽ち眞滅なり。故に

(ミ)草繫。大莊嚴論經に出づ、昔比丘あり、草野に於て賊のために掠奪せられ、且生草を以て繫がる、比丘、身を脫せんとするに、草を傷けんことを恐れ、炎熱の下に裸體にして立つ、偶遊獵の王のために助けらる。草木を毀傷せざるは佛戒なり、王之に感じて佛門に入ると。鵞珠とは大藏一覽三にあり、古一比丘あり、珠師の家に到る、偶一鵞來りて誤りて珠玉を呑む、珠師之を知らずして比丘を責む、比丘は鵞の害せられんことを恐れ默して之を語らず、珠師又鵞を追はんとして過つて之を死に致す、而して後始めて比丘告ぐるに實を以てせりと、不殺生戒は戒の第一なり。

(シ)佛云く。楞嚴卷六にあり。

(ヱ)塵。迷妄の世界のこと。

曰く、「（ハ）諸法本來より、常に自ら寂滅相」と。眼は自らを見ず、見眼は妄なり。故に（ニ）妙首は思量し、淨名は杜默す。此れより下には、散じて細行を擧す。

貧人來つて乞へば、分に隨つて施與す。同體の大悲、是れ眞の布施なり。自他の一たるを（ホ）同體と曰ふ。（ヘ）空手にして來り空手にして去る、吾が家の活計。

人あり來つて害せんに、當に自ら心を攝すべし、嗔恨を生ずること勿れ。一念の嗔心起れば、百萬の障門開く。

煩惱無量なりと雖も、嗔慢を甚だしと爲す。涅槃に云く、「（ト）塗割兩ながら無心。」嗔は冷雲中の霹靂の火を起し來るが如し。

若し（ナ）忍行無くんば、萬行成らず。

（ヒ）又云く。正法念經に出づ。

（モ）此の語は圓覺經の文なり。辨音章の偈に、「辨音汝當に知るべし、一切諸菩薩無礙清淨云云。」

（セ）坐脫立亡。坐禪しながら死し立ちながら死すること、卽ち生死に於て自由自在を得ること。

（ス）故に云く。以下の文、禪源集の上の六丁にあり。

（イ）此の語は遺敎經に出づ。

（ロ）境。眼、耳、鼻、舌、耳、意の六識の對象となるもの。

（ハ）此の語は法華經方便品に出づ。

（ニ）妙首。文殊菩薩の譯名なり、淨名は維摩居士の譯名なり。維摩、文殊に問ふて曰く「何等か是れ菩薩入不二の法門。」文殊曰く「我が意の如きんば無言無說無示無識、諸の問答を離る、之を入不二の法門となす。」是に於て文殊、維摩に問ふて曰く「我等各自に說き已る、仁者當に說くべし、何等か是れ菩薩入不二の法門。」維摩默然たりと。悉しくは維摩經卷八入不二法門品に出づ。

（ホ）同體。妻の憂は夫の憂となり、子の病は親の苦となる、是れ同體なり。

（ヘ）空手。餘物を蓄積せぬこと。

（ト）塗割兩無心。華嚴經論に、尸利毱多なるもの、佛を害せんとして、火坑毒食を設く、而も害することを得ず、乃ち過を悔いて號泣す。佛告げて曰く、「汝憂怖すること勿れ」と、卽ち偈を說き給ふ云云と。塗は栴檀香水を塗ることを指し、割は刀を加ふることを云ふ、此の異なれる二人に對しても、佛は愛憎なしと。

（ナ）此の語は法空經に出づ。

行門無量なりと雖も、慈忍を根源と爲す、忍心は幻夢の如く、辱境は龜毛の如し。

本眞心を守るは、第一の精進なり。若し精進心を起さば是れ妄、精進するに非ず。故に云く、「（リ）莫妄想莫妄想。」懈怠といふは、常々に後を望む、是れ自棄の人なり。

持（ヌ）呪といふは、現行は制し易し、自ら行じて違すべし。宿業は除き難し、必ず神力を借る。

（ル）魔登が得果は信に誣ひず。故に神呪を持せずして、魔事を遠離する者には是の處あること無し。

禮拜といふは敬なり伏なり、眞性を恭敬し、無明を屈伏す。身口意清淨なるときは、則ち佛出世す。

念佛といふは口にあるを誦と曰ひ、心にあるを念と曰ふ。徒に誦して念を失すれば、道に於て益なし。

阿彌陀佛六字の法門は、定んで輪廻を出づるの捷徑なり。心則ち佛境界に縁すれば、憶持して忘ぜず、口則ち佛の名號を稱すれば、分明にして亂れず、是の如く心口相應するを名づけて念佛と曰ふ。

（リ）莫妄想。汾陽無業禪師、一生凡そ所問あれば、只だ道ふ、「莫妄想」と。

（ヌ）呪。梵語陀羅尼のこと、總持、能持、能遮等と譯す、支那の禁呪法に似たるを以て、亦呪とも稱す。衆德を能持し、諸惡を捨離する不思議の神力を有せる經文なり。

（ル）魔登伽。賤業の女なり、神呪を誦するの力によりて、愛欲を斷じて聖果を證するを得たり。楞嚴經の四に出づ。

評に曰く、「(ヲ)五祖云く、『本眞心を守るは、十方の諸佛を念ずるに勝れり。』(ワ)六祖云く、『常に佗佛を念ずれば、生死を免れず、我が本心を守れば、即ち彼岸に到る。』又云く、『佛は性中に向つて作す、身外に向つて求むること莫れ。』又云く、『迷人は佛を念じて(カ)生を求む、悟人は自ら其の心を淨うす。』又云く、『大抵は衆生、心を悟つて自ら度す、佛、衆生を度すること能はず、云云。』如上の諸德は直に本心を指す、別に(ヨ)方便なし、「方は一法を將ち、便は諸根に逗る。」理實に是の如し。然れども(タ)迹門實に極樂世界あり、阿彌陀佛四十八の大願あり、凡そ(レ)念ずること十聲する者は、此の願力を承けて、蓮胎に往生し、徑に輪廻を脫す。三世の諸佛、異口同音、十方の菩薩、同じく往生せんことを願ふ。又況んや古今往生の人、傳記昭昭たり、願はくは諸行者、愼んで錯つて認むること勿れ。之を勉めよ之を勉めよ。」

梵語に阿彌陀、此には無量壽と云ふ、亦無量光と云ふ、十方三世第一の佛號なり。(ソ)因名は法藏比丘、(ツ)世自在王佛に對す。四十八願を發して云はく、「我れ作佛の時、十方無央數世界の諸天人民より以て蜎飛蠕動の流に至るまで、我が名を念ずること十聲する者は、必ず我が(ネ)刹中に生ぜん、是の願を得ずんば、終に成佛せじ、云云」と。先聖云く、「唱佛一聲、天魔膽を喪す、除鬼簿と名づく、(ナ)蓮は金池より出づ。」又(ラ)懺法に云く、「自力他力、一遲一速、海を越えんと欲するもの、樹を種ゑて船を作るは遲なり、自力に比す。船を借りて海を越ゆるは速なり、佛力に比す。」又曰く、「世間の稚兒、水火に迫られ、高聲に大いに叫ぶときは、則ち父母之を聞きて急に走つて救援す。人臨命終の時、高聲に念佛するが如きんば、則ち佛神通を具して、決定して來つて爾を迎ふ。」是の故に大聖の慈悲は、父母に勝れり、衆生の生死は、水火よりも甚だし。人有りて云ふ、自心淨土、淨土生ずべからず、自性彌陀、彌陀見るべからずと。此の言是に似て非なり。彼の佛は貪なく嗔なし、我れも亦貪嗔無からん乎。彼の佛は地獄を變じて蓮花と作すこと、掌を返すよりも易し。我れは則ち業力を以て常に自ら地獄に墮ちんことを恐る、況んや變じて蓮花と作さんをや。彼の佛は無盡世界を觀ること目前に在るが如し、我れは則ち壁を隔つる事、猶ほ知らず、況んや十方世界を見ること目前の如くならんをや。是の故に人人、性は則ち佛なりと雖も、而も行

(ヲ)五祖。弘仁大滿禪師をいふ。
(ワ)六祖。慧能大鑑禪師をいふ。
(カ)生。往生淨土の略。
(ヨ)方便。淨名疏に云く、「巧に諸法を用ひて機に隨つて物を利用す、故に方便と云ふ。」又演義に云く、「方は所謂方法、便は所謂便宜。」
(タ)迹門。本門に對す、方便垂迹の門なり。
(レ)念ずること十聲。觀無量壽經に說く十念往生是れなり。
(ソ)因名。因地の修行をなしつつありし時の名。因地は又因位とも稱す、未だ佛果を得ざる菩薩の地位なり。
(ツ)世自在王佛。法藏比丘の師佛なり、比丘此の佛の前に於て四十八願を建立せり。無量壽經に出づ。
(ネ)刹。梵語、譯して田、土、國等となす、國土のこと。
(ナ)蓮は金池。阿彌陀經に云く、「池底は純ら金沙を以て地に布く、乃至池中の蓮花の大さ車輪の如し、云云。」
(ラ)懺法五部九卷に出づ。

は則ち衆生なり、其の相用を論ずれば、天地懸隔す。㋰圭峯云く、「設ひ實に頓悟すとも、終に須らく漸行すべし」と。誠なるかな是の言や。然れば則ち語を寄す、自性彌陀といふ者に、豈に天生の釋迦、自然の彌陀あらんや。須らく忖量すべし、人豈に自ら知らざらんや。臨命終の時、生死の苦際、定んで自在を得るや否や。若し是の如くならずんば、一時の貢高を以て却つて永劫の沈墮を致すこと莫れ。又㋒馬鳴・龍樹は悉く是れ祖師なり、皆明かに言教を垂れて、深く往生を勸む。我れ何人ぞや、往生せんと欲せざる。又自ら云ふ、西方此を去ること遠し、夫れ十萬「㋖十惡」八千「八邪」と。此れは鈍根の爲に相を說くなり。又云ふ、西方此を去ること遠からず、卽心「衆生」是佛「彌陀」と。此れは利根の爲に性を說くなり。教に權實あり、語に顯密あり、若し解行相應する者は、遠近倶に通ず。故に祖師門下にも、亦或は阿彌陀佛と喚ぶ者「㋨惠遠」、或は主人公と喚ぶ者「㋔瑞岩」有り。

㋰圭峰。五燈會元卷二に曰く、「終南山圭峯宗密禪師は果州西充の人姓は何氏云云」と。原人論其他多くの著あり。禪を遂州道圓に參じ、華嚴を淸涼澄觀に學び、大いに教禪の一致を唱ふ。

㋒馬鳴。西天の第十二祖、大乘起信論、大莊嚴論、佛所行讃等の著あり、盛んに大乘佛教を鼓吹す。龍樹は西天の第十四祖、大智度論百卷、十住毘婆娑論十七卷、中觀論四卷、十二門論一卷等の著あり、八宗共に祖師と仰ぐ。

㋖十惡。殺生、偸盜、邪婬、兩舌、惡口、綺語、妄語、貪欲、嗔恚、邪見。八邪とは邪見、邪思惟、邪語、邪業、邪精進、邪定、邪念、邪命。

㋨惠遠。廬山の白蓮社に一百廿三人と共に念佛を修す。

聽經は經耳の緣、隨喜の福あり。幻軀は盡くることあり、實行は亡ぜず。此れは智學を明す、㋗金剛を食するが如きんば、七寶を施すに勝れり。㋳壽師云く、「聞いて信ぜざるも、尙ほ佛種の因を結ぶ、學んで成ぜざるも、猶ほ人天の福を益す」と。看經若し自己上に向つて工夫を做さずんば、㋮萬藏を看盡すとも猶ほ益無し。此れは愚學を明す、㋘春禽晝啼き、秋蟲夜鳴くが如し。㋫密師云く、「字を識り經を看るも、元悟を證せず、文を銷し義を釋するは、唯だ貪瞋邪見を熾んにす」と。學未だ道に至らずして、見聞を衒耀して、徒らに口舌辨利を以て相勝つものは厠屋に㋙丹雘を塗るが如し。別に末世の愚學を明す、學は本性を修す、全習人の爲にす、是れ誠に何の心ぞや。出家の人の㋓外典を習ふは、刀を以て泥を割くが如し、泥用ふる所なくして刀自ら傷る。

㋔瑞岩。師彥禪師は岩頭全奯に嗣法し、台州丹丘の瑞岩山に住す、一生常に座して自ら喚んで曰く、「主人公」と、亦自ら應諾す、乃ち曰く、「惺々着、他時人の瞞を受くることを勿れ」と。

㋗金剛を食す。金剛は身中に入るも肉身に雜らずして、遂に體外に穿出す。凡夫の佛經を聽くも亦斯の如し、迷妄に雜穢せずして、因緣熟すれば菩提の華を開く。

㋳壽師。永明智覺延壽禪師は法眼下の天台德韶に嗣ぐ、宗鏡錄百卷其の他の著あり。

㋮萬藏。藏は藏經の意、一切藏經のこと。

㋘春禽。張無盡が倚堂記に、「春禽晝啼き、秋蟲夜鳴く、風氣の使ふ所、曾て意謂なし」と。

㋫密師。圭峰宗密禪師、上記の語は其の著禪源諸詮に出づ。

㋢門外の長者子、還つて火宅の中に入る。

家を出で僧となる、豈に細事ならんや。安逸を求むるに非ず、溫飽を求むるに非ず、利名を求むるに非ず、生死の爲なり、煩惱を斷ぜんが爲なり、佛の慧命を續がんが爲なり、㋐三界を出でて衆生を度せんが爲なり。

謂つべし、衝天の大丈夫と。

佛云はく、「㋚無常の火、諸の世間を燒く。」又云はく、「㋖衆生の苦火、四面倶に燒く。」又云はく、「㋴諸煩惱賊、常に人を殺さんと伺ふ」と。道人宜しく自ら警護して、㋱頭燃を救ふが如くすべし。

身に生老病死あり、界に成住壞空あり、心に生住異滅あり、此れ無常の苦火、四面倶に焚く者なり。謹んで參玄の人に白す、光陰虛しく度ること勿れと。

世の浮名を貪りて、功を枉げて形を勞し、世利を求めんことを營めば、業火に薪を加ふ。

世の浮名を貪るもの、人の詩あり、云く、「鴻天末に飛んで迹を沙に留む、人黃泉に去つて名家に在り。」世利を求むることを營む者、人の詩あり、

㋙丹髏。丹は赤色、髏は說文に「美丹なり」とあり。

㋓外典。佛學を內典と云ふに對し、他の諸種の學問を外典と云ふ。

㋢門外の長者子。法華經譬喩品に出づ、三界を火宅に喩ふ。

㋐三界。迷界の三種、欲界、色界、無色界。

㋚遺教經に出づ。

㋖法華經に出づ。

㋴遺教經に出づ。

㋱頭燃を救ふ。又頭然とも書く、二解あり。一、頭上の火を救ふが如くせよとの意、天台補注第十四に見ゆ。二、頭を救ふ、然は助辭と見る、大論十三に出づ、云く、「野干ありて人家に入る、人あり、其の耳を切り取る、又他の人あり、其の尾を取り、又其の牙を取る、野干思へらく、將に頭をも取らるべしと、則ち勇を鼓して隙を伺ひ、漸くに脫するを得、以て其の頭を救ひ得たりと。」

云く、「㋯百花を采り得て蜜と成して後、知らず辛苦誰が爲にか甜き。」功を枉げて形を勞するもの、氷を鑿つて彫刻す、不用の巧なり。業火に薪を加ふるもの、㋛色香を麁弊して、火の具を致す。

名利の衲子は草衣の野人に如かず。

㋽金輪を唾して雪山に入る、千世の尊、不易の軌則なり。末世の㋪羊質、虎皮の輩、廉恥を識らず、風を望んで勢に隨ひ、陰かに媚びて寵を取る、噫夫れ懲なる也夫。

心、世利に染むものは、權門に阿附し、㋲風塵に趨走して、返つて笑を俗人に取る。此れ衲子、羊質を以て此の多行を證す。「懲なる也夫」の三字を以て之を結ぶ、此の三字の文は㋝莊子に出づ。

佛云はく、「㋜云何が賊人我が衣服を假りて、如來を裨販して種種の業を造る。」

末法の比丘、多般の名字あり、或は㋑烏鼠僧、或は㋺啞羊僧、或は㋩禿居士、或は地獄滓、或は被袈裟賊。噫其の所以は此れを以てなり。

如來を裨販するといふは、因果を撥し、罪福を排し、身口を沸騰

㋯羅隱が蜂の詩に、「不レ論平地與二山尖一、無レ限風光盡被レ占、採得百花成レ蜜後、不レ知辛苦爲レ誰甜。」

㋛色香云云。法華經譬喩品に、「麁弊の色聲香味觸を貪ること勿れ、若し貪着して愛を生ぜば、則ち爲に燒かる、云云」と。

㋽金輪。四輪王の最尊なり。金輪王、銀輪王、銅輪王、鐵輪王。今は釋尊の王位を捨てて出家せられたるを云ふ。

㋪羊質虎皮。揚子法言に、「文有つて質無きものを羊質虎皮の犟と云ふ」と。

㋲風塵に趨走す。晉の潘岳は性輕躁にして世利に趨る、賈謐に諂事し、每に其の出づるを候ひ、塵を望んで拜せりと、

して迭に愛憎を起す、愍と謂つべし。僧を避け俗を避くるを烏鼠と曰ひ、舌法を說かざるを啞羊と曰ひ、僧形にして俗心なるを禿居士と曰ひ、罪重うして遷らざるを地獄滓と曰ひ、佛を賣つて生を營むを被袈裟賊と曰ふ。被袈裟賊を以て此の多名を證す。(ニ)「以此」の二字にて之を結ぶ、此の二字の文は老子より出づ。

於戲、佛子一衣一食、農夫の血と織女の苦に非ずといふことなし、道眼未だ明かならずんば、如何が消得せん。

傳燈に、「一道人道眼未だ明かならず、故に身(ホ)木菌と爲りて、以て信施を還す」と。

故に曰く、「披毛戴角底を知らんと要すや、卽今虛しく信施を受くるもの是れなり。人あり、(ヘ)未だ飢ゑずして食し、未だ寒からずして衣る、是れ誠に何の心ぞや。都べて目前の樂みは便ち是れ身後の苦なることを思はず。」

(ト)智論に、「一道人五粒の粟にて牛身を受く。生きては筋骨を償ひ、死しては皮肉を還す。虛しく信施を受くれば、報應響の如し。」

故に曰く、「(チ)寧ろ熱鐵を以て身に纏ふとも、信心の人の衣を受けざれ、寧ろ(リ)羊銅を以て口に灌ぐとも、信心の人の食を受けざれ、寧ろ鐵鑊を以て身に投ずとも、信心の人の房舍等を受けざれ」と。

梵網經に云く、「破戒の身を以て、信心の人の種種の供養乃至種種の施物を受けざれ、菩薩だも若し是の願を發せざるときは、則ち輕垢罪を得。」

故に曰く、「(ヌ)道人は食を進むるを毒を進むるが如くにし、施を受くるを箭を受くるが如くにす。幣厚く言甘きは、道人の畏るる所なり。」食を進むるは毒を進むるが如しとは、其の道眼を喪はんことを畏るるなり。施を受くること箭を受くるが如しとは、其の道果を失せんことを畏るるなり。

故に曰く、「修道の人は、一塊の(ル)磨刀の石の如し、(ヲ)張三も也た來り磨し、李四も也た來り磨す、磨し來り磨し去りて、別人の刀快にして、自家の石漸く消す。然れども人有りて、更に佗人の我が石上に來り磨せざることを嫌ふ。實に惜むべしと爲す。」

此の如き道人は、平生の所向、只だ溫飽にあり。

故に(ワ)古語に亦之れ有り、曰く、「(カ)三途の苦は、未だ是れ苦ならず、袈裟

是れ諂諛の甚だしきものなり。

(セ)莊子第六卷山木篇に出づ。

(ス)楞嚴六に出づ。

(イ)烏鼠。蝙蝠のこと、外形は僧に似て內心は俗に同じ、之を蝙蝠の鳥の如く亦獸の如きに喩ふ。百喩因緣經に出づ。

(ロ)啞羊僧。大智度論に出づ。

(ハ)禿居士。涅槃經卷之三に出づ。

(ニ)以此の二字。老子經五十七章に出づ。

(ホ)木菌となる。傳燈卷二に出づ、「毘羅國に長者あり、梵摩淨德と云ふ、一比丘を尊信供養す。而も此の比丘道眼明ならず、死して卽ち長者の家に木菌となりて生じ、以て其の信施を償ふ云云」と。

(ヘ)此の語は慈受深禪師の示衆。

(ト)智論。具に大智度論、龍樹の著にして百卷あり。

(チ)此語は梵網經に出づ、第三十六不發誓戒。

(リ)洋銅。洋は鎔の意。

(ヌ)此の語は法眼宗の永明延壽禪師小參にあり。

(ル)磨刀の石。石を僧に比し、刀を施主に比す。僧に供養するは刀を磨するなり、僧の德を減じ、施主の光を加ふ。

(ヲ)張三李四。張、李は支那に最も多き姓氏なり、三四は猶ほ我が國の三郞四郞の如し、誰れも彼れもと云ふほどのこと。

(ワ)古語。傳燈十五、洞山の章に出づ。

(カ)三途。三惡趣に同じ、火途、血途、刀途の稱。地獄、畜生、餓鬼に當る。

(ヨ)滴水。傳心法要に云く、「佛、阿難に告げ給ふ、汝千日慧を學せんより、一日道を學せずんば若かず、若し道を學せずん

下に人身を失する、始めて是れ苦なり」と。

古人云く、「今生に未だ心を明めずんば、(ヨ)滴水も也た消し難し、此れ袈裟下に人身を失する所以なり。佛子佛子、之を憤し之を激せよ。」此の章は始め「一」の「於戲」に起り、終り「一」の古語に結ぶ、中間に許多の「故に曰」の字を細繹す、亦一段の文法なり。

咄哉此の身九孔、常に百千の(タ)癰疽、一片の薄皮を流ふ。又云く、「(レ)革嚢に糞を盛る、膿血の聚、臭穢鄙んずべし。之を貪惜すること勿れ、何に況んや(ソ)百年の將養、一息に恩に背くをや。」

上來の諸業、皆此の身に由る、聲を發して叱咄す、深く警あり。此の身は諸愛の根本、之を虛妄と了ずるときは、則ち諸愛自ら除く、其の耽着するが如きんば、則ち無量の過患を起す。故に此に於て特に之を明して、以て修道の眼を開く。

評に曰く、「(ツ)四大主なし、故に一に四寃を假ると爲す。四大恩に背く、故に一に(ネ)四蛇を養ふと爲す。我が虛妄を了ぜざるが故に、佗人の爲に也た之を嗔し之を慢ず、佗人も亦虛妄を了ぜざる

ば滴水も消し難し。」

(タ)癰疽。醫書に曰く、「癰は六腑不和の生ずる所、疽は五臟不調の致す所、陽の陰に滯るときは癰を生じ、陰の陽に滯るときは疽を生ず」と。

(レ)革囊。四十二章經に曰く、「天神、玉女を佛に獻じ、佛意を壞せんとす。佛の云く、革囊の臭穢、爾ち來つて何爲るものぞ、去れ吾れ用ひず。」

(ソ)金光明經に出づ。

(ツ)四大。地水火風の四なり、萬物は此の四によりて成る。

(ネ)四蛇。大經二十四に云く、「四大の毒蛇之を一篋中に盛る云云」と。又涅槃經に出づ。

(ナ)二鬼の一屍を爭ふ。大智度論に出づ。要は內身は四大假和合によりて成るものにして、實體なきことを說けるものなり。

(ラ)寶殿。佛殿のこと。

が故に、我が爲に也た之を嗔し之を慢ず。(ナ)二鬼の一屍を爭ふが若し、一屍の體たるや、一には泡聚と曰ひ、一には夢聚と曰ひ、一には苦聚と曰ひ、一には糞聚と曰ふ。徒速に朽つるのみに非ず、亦甚だ鄙陋なり。上の七孔は常に涕唾を流し、下の二孔は常に屎尿を流す。故に須らく十二時中、身器を潔淨にして以て衆數に參ずべし。凡そ行儀不淨の者をば、善神必ず背き去る。因果經に云く、「不淨の手を將つて經卷を執り、佛前に在つて涕唾するものは必ず當に厠蟲の報を獲べし」と。文殊經に云く、「大小便の時狀木石の如くにして、愼んで語言作聲すること勿れ、又壁に畫し字を書すること勿れ、又痰を吐いて厠中に入るること勿れ。」又云く、「厠に登りて洗淨せざるものは、禪牀に坐することを得ざれ、(ラ)寶殿に登ることを得ざれ。」律に云く、「初め厠に入る時、先づ須らく(ム)彈指三下して以て在穢の鬼を警むべし、默して神咒を誦すること各七遍、初め入厠の咒を誦して曰く、『(ウ)唵狠嚕陀耶莎訶。』次に洗淨の咒を誦して曰く、『唵賀曩密嘌帝莎訶。』右手に瓶を取り、左手に〔無名指を用ふ〕之を洗ふ、淨水旋旋に之を傾けて、著實に洗淨す。次に洗手の咒を誦して曰く、『唵主迦囉野莎訶。』次に去穢の咒を誦して曰く、『唵室利曳婆醯娑嚩賀。』次に淨身の咒

(ム)彈指。指を以てはじくこと。彈指に二種あり、一に驚覺彈指、二に不淨彈指之れなり、一は寮中又は厠中等に入るとき、豫め其の人を驚覺せしむるため、二は不淨なるものを見、又は厠より出でたるとき其の不淨を除くため。

(ウ)唵狠。原本には此の以下五個の咒文には梵字を附しあれども、編輯上の都合により省く。

を誦して曰く、『唵跋折囉惱迦吒娑嚩賀』と。此の五神咒は大威德あり、諸の惡鬼神聞けば必ず手を拱く。若し如法に誦持せざるときは、則ち七恒河の水を用つて、洗ふて金剛際に至ると雖も、亦身器清淨なることを得じ。」又云く、「洗淨には須らく冷水を用ふべし、洗手には須らく、㋼皂角を用ふべし、又木屑灰泥も亦通ず。若し灰泥を用ひざるときんば、則ち觸水其の手背に淋ぐとも、垢穢尙ほ存す。禮佛誦經すれば必ず罪を得云云」と。此れ登厠洗淨の法、亦是れ道人日用の行實なり。故に略經語を引いて幷せて此に附す。

罪有れば ㋨懺悔す、業を發すれば卽ち慚愧す、丈夫の氣象有り。又過を改めて自ら新にすれば、罪心に隨つて滅す。

懺悔といふは其の前愆を懺し、其の後過を悔す。慚愧といふは慚を內に責め、愧を外に發す。然して心本空寂なれば、罪業寄るところ無し。

道人は宜しく應に ㋔心を端しうして、質直を以て本と爲すべし。一瓢一衲旅泊にも累なし。

佛云はく、「心は直絃の如し。」又云はく、「㋗直心是れ道場」と。若し此の身に耽着せざるときんば、則ち必ず旅泊にも累なし。

凡夫は ㋳境を取り、道人は心を取る。心境兩ながら忘じて、乃ち是れ眞

㋼皂角。さいかちの實にて作れる一種の洗粉、實は藥用莢は物を洗ふに用ふ。
㋨懺悔。懺は梵語懺摩の略、悔過と譯す、更に悔の字を加へたるは、梵漢兼擧せるなり。
㋔此の語は遺教經に出づ。
㋗直心是道場。維摩經に出づ。
㋳境。心識の對象となる一切萬法のこと。
㋮鹿の空華を趁ふ。楞伽經に曰

法。

境を取るものは ㋮鹿の空華を趁ふが如し、心を取るものは ㋘猿の水月を捉ふるが如し。境心殊なりと雖も、病を取ることは則ち一なり。此れは合せて凡夫と ㋫二乘とを論ず。

天地尙ほ空ず秦の日月、山河にも見ず漢の君臣。

聲聞は林中に宴坐すれども、魔王に捉せらる、菩薩は世間に遊戲すれども、外魔見れず。

聲聞は靜を取つて行となす、故に心動ず、心動ずるときんば則ち鬼見る。菩薩は性自ら空寂なり、故に迹無し、迹無きときんば則ち外魔見れず。此れは合せて二乘と菩薩とを論ず。

三月遊ぶに懶し花下の路、一家愁ひ閉づ雨中の門。

㋙凡そ人臨命終の時、但だ ㋓五蘊皆空と觀じて、四大無我、眞心無相、不去不來、生ずる時性亦生ぜず、死する時性亦去らず、湛然圓寂、心境一如。但だ能く是の如く直下に頓了すれば、三世の爲に拘繫せられず、便ち是れ出世自由の人なり。若し諸佛を見て隨ひ去るに心なく、若し地獄を

く、「群鹿渴のために逼られ、春時の燄を見て水の想をなし、迷亂馳趣して水に非ざるを知らず云云」と。
㋘猿の水月を捉ふ。賢愚經に曰く、「晴夜に衆獼猴有りて、樹井の傍に於て忽ち月影を見る、更に便ち遞相して井に下り、月を捉へんとするが如し、其の所得を欲して終に得べからず云云」と。天地云云の句は人境兩倶奪をいふ。
㋫二乘。聲聞乘と緣覺乘なり、共に小乘の行者。
㋙此の語は黃檗希運禪師の傳心法要に出づ。三月は菩薩、一家は聲聞。
㋓五蘊。色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊のこと。蘊は積集の義。一切諸法を此の五に分類す、但し有爲法に限る。
㋢此の句は無業國師の語なり。
㋐泥犂。梵語なり、那落迦とも

見て怖畏するに心なく、但だ自ら無心なれば法界に同じ、此れ卽ち是れ要節なり。然れば則ち平常は是れ因、臨終は是れ果。道人須らく眼を著けて看るべし。

　死を怕れて老年に釋迦に親む、如し此の時に向つて自己を明めば、百年の光影頭を轉じて非ならん。

㋢凡そ臨命終の時、若し一毫毛も凡聖の情量盡きず、思慮未だ忘ぜずんば、驢胎馬腹裏に向つて托質し、㋐泥犂鑊湯中に煮煠せられん。乃至依然として再び螻蟻蚊虻と爲らん。

白㋚雲云く、「設ひ一毫毛凡聖の情念をして淨盡せしむるとも、亦未だ驢胎馬腹の中に入ることを免れず。㋖二見星飛んで、散じて諸趣に入る。」

　烈火茫茫として、寶劍門に當る。

　評に曰く、「此の二節は特に宗師の無心合道の門を開いて、權に敎中念佛求生の門を遮る。然れども根器同じからず、志願も亦異なり、各各是の如し、兩ながら相妨げず。願はくは諸道者、平常に分に隨つて、各自に力を勞し、最後刹那に疑悔を生ずること莫れ。」

禪學の者本地の風光、若し未だ發明せざるときんば、則ち孤峭玄關何れよりか透らんと擬す。往々に㋴

云ふ、地獄、冥府など譯す、鑊湯とは大鼎に沸騰せる湯なり、地獄の苦を云ふ。

㋚白雲。白雲守端禪師は楊岐方會禪師に嗣法す。

㋖二見。斷見、常見、又は有見、無見など指す、但し玆は凡聖の情念を指せるなり。寶劍は二見を截斷するをいふ。

㋴斷滅空。一切空空蕩蕩として虛無なりとなす偏見。

斷滅空を以て禪と爲し、㋱無記空を以て道と爲し、一切俱に無を以て高見と爲す。是れ冥然たる頑空にして、病を受くること幽し矣。今天下の禪を言ふ者多くは此の病に坐在す。

向上の一關、足を措くに門なし。㋯雲門云く、「光透脫せざるに、兩種の病あり、法身を透過するも、亦兩種の病あり、須らく一一透得して始めて得べし。」

　芳草の路に行かずんば、落花の村に至り難し。

宗師にも亦多病あり。㋛病耳目に在るものは、㋽瞠眉怒目、側耳點頭を以て禪と爲す、病口舌にある者は、顚言倒語、胡喝亂喝を以て禪と爲す、病手足にある者は、進前退後、東を指し西を畫するを以て禪と爲す、病心腹にある者は、玄を窮め妙を究め、情を超え見を離るゝを以て禪と爲す。實に據つて論ずれば、是れ病に非ずといふことなし。

　㋪父母を殺す者は、佛前に懺悔す、般若を謗ずるものは、懺悔するに路なし。

　空中に影を撮るも妙とするに非ず、物外に蹤を追ふも豈に俊機なら

㋱無記空。無慧の定なり、此れ但だ冥冥として揀擇する所なきなり。

㋯雲門云く。五燈會元卷十五に曰く、「上堂云く、光透脫せざるに兩般の病あり、一切處明かならず、面前に物有り、是れ一、又一切法空なりと透得すれども、隱隱地に箇の物あるに似て相似たり、亦是れ光透脫せざるなり。又法身にも亦兩般の病あり、法身に到ることを得るも、法執忘ぜざるがために、已見猶ほ存して法身邊に坐在す、是れ一、たとへ法身を透得し去るも放過せば、卽ち不可なり、子細に點檢し將ち來らば、甚麼の氣息かある、亦是れ病なり」と。

㋛病耳目より以下以て禪となすに至る文は、禪門寶訓の下卷に出づ。

㋽瞠眉怒目。一原本には「瞠眉

んや。

本分の宗師は、此の句を全提す。木人唱拍し、紅爐の點雪の如く、亦石火電光の如し、學者實に擬議すべからず。故に㋲古人師恩を知つて曰く、「先師の道德を重んぜず、只だ先師の我が爲に說破せざることを重んず。」

道はじ道はじ恐らくは紙墨に上せん、箭江月の影を穿つ須らく是れ射鵰の人なるべし。

大抵學者は先づ須らく詳かに宗途を辨ずべし。昔㋝馬祖一喝するや百丈耳聾し、黃檗舌を吐く。這の一喝は便ち是れ㋜拈花の消息、亦是れ達磨初來底の面目なり。吁此れ臨濟宗の淵源なり。

法を識るものは懼る、聲に和して便ち打たん。杖子一枝節目なし、慇懃に分付す夜行の人。

昔馬祖一喝するや、百丈大機を得、黃檗大用を得。大機とは圓應を義と爲し、大用とは直截を義と爲す。事は傳燈錄に見えたり。

大凡そ祖師の㋑宗途五あり。曰く臨濟宗、曰く曹洞宗、曰く雲門宗、曰く潙仰宗、曰く法眼宗。

努目」に作る。

㋪僧あり、雲門に問ふ、「父を殺し母を殺しては、佛前に向つて懺悔す、佛を殺し祖を殺しては何れの處に向つてか懺悔せん。」門云く、「露。」

㋲古人。洞山良价禪師なり。會元十三洞山の章に出づ。

㋝馬祖一喝。百丈侍立する次で、祖繩床角の拂子を目視す、師曰く、「此の用に卽するか此の用に離るるか。」祖曰く、「汝向後兩片皮を開きて、何を將つてか人の爲にせん。」師、拂子を取つて竪起す。祖曰く、「此の用に卽するか此の用に離るるか。」師拂子を舊處に挂く。祖、威を振つて一喝す。師直に得たり三日耳聾することを。他日黃檗、百丈の此の話を擧するを聽きて、覺えず舌を吐く。事は傳燈卷六に詳かなり。

臨濟宗

本師釋迦佛より㋺三十三世に至り、六祖慧能大師下直傳、曰く南嶽懷讓、曰く馬祖道一、曰く百丈懷海、曰く黃檗希運、曰く㋩臨濟義玄、曰く興化存奬、曰く南院首顒、曰く風穴延沼、曰く首山省念、曰く汾陽善昭、曰く慈明楚圓、曰く楊岐方會、曰く白雲守端、曰く五祖法演、曰く圓悟克勤〔曰く徑山宗杲〕禪師等。

曹洞宗

六祖下傍傳、曰く青原行思、曰く石頭希遷、曰く藥山惟儼、曰く雲巖曇晟、曰く㋥洞山良价、曰く曹山耽章、曰く雲居道膺禪師等。

㋜拈花。世尊一日靈鷲山に於て說法の時、梵王金波羅華を獻す。世尊高座上より此の花を拈出して一語なし、大衆其の意を會せず。只だ迦葉のみあつて破顏微笑すと。

㋑宗途五あり。以上記する所のもの是を禪の五家と稱し、之に後世臨濟下より楊岐、黃龍の二分派を生じたるものを加へて七宗と云ふ。中峯錄に云ふ、五家とは其人を五家にす、其道を五家にするに非ずと。

㋺三十三世。世尊より迦葉、阿難等を經て廿八傳して達磨に至り、更に六傳して慧能大師に至る。西天の四七、東土の二三と云ふ、卽ち是れなり、達磨は西天の第廿八祖にして其の東土の第一祖として重れて數ふ、故に三十四祖となる樣なれども、實は三十三祖たり、但し西天には釋尊を除き、迦葉を第一祖とするなり。

㋩臨濟義玄。姓は刑氏、曹州南華の人、幼にして出家、初な毘尼を究め、深く經論を探ろ、後黃檗に參じて三頓の棒を喫し、高安大愚の許に至りて、黃檗の深旨を領ず、卽ち黃檗の印可を得。後鎭州城東南滹沱河の畔に住し、大に宗風を擧ぐ、臨濟は其の住院の名なり、依つて後世此の法系に屬するものを臨濟宗と云ふ。師の家風極めて峭峻なり、爲めに臨濟將軍の稱あり、門下に興化、三聖等の英俊を打出す。南院首顒は慧顒と作すべし、原本の誤なり。

㋥洞山良价。姓は兪氏、會稽の人、幼にして出家、諸方に歷參し、後雲風巖晟に參じて其の衣鉢を嗣ぐ、洞山普利院に住して門下常に數百の衆を擁す、此の法脈を嗣ぐものを曹

雲門宗

馬祖傍傳、曰く天王道悟、曰く龍潭崇信、曰く德山宣鑑、曰く雪峯義存、曰く(ホ)雲門文偃、曰く雪竇重顯、曰く天衣義懷禪師等。

潙仰宗

百丈傍傳、曰く(ヘ)潙山靈祐、曰く仰山慧寂、曰く香嚴智閑、曰く南塔光涌、曰く芭蕉慧淸、曰く霍山景通、曰く無著文喜禪師等。

法眼宗

雪峯傍傳、曰く玄沙師備、曰く地藏桂琛、曰く(ト)法眼文益、曰く天台德韶、曰く永明延壽、曰く龍濟紹修、曰く南臺守安禪師等。

洞宗と云ふ。曹洞の名は六祖大師住院の地、曹溪の曹と洞山の洞の二字を取りて名づけたるものなりと、又一說には洞山の嗣曹山本寂禪師が、師の宗風を繼承して、大に家聲を擧ぐ、卽ち其の曹の一字と洞山の洞をとりて斯く稱せりとも云ふ。五位は師の唱出せる所たり、其の宗風綿密、依つて曹洞土民の稱あり。

(ホ)雲門文偃。支那姑蘇嘉興の人、姓は張氏、初め睦州に參じ、後雪峯義存に詣りて大事を了ず、韶州雲門山光泰院に移りて、宗乘を擧揚す、天下の俊秀競ふて其の門に趨る、師の宗旨を擧するや、妙唱古今に絕し、幽玄機微に入る、すなはち雲門天子の稱あり、雲門宗は師の法系なり。

(ヘ)潙山靈祐。福州長谿の人、姓は趙氏、十五にして出家、初め律を學び、又大小乘の諸敎を究む、後百丈に參じて其の宗風を嗣ぐ。弟子に仰山慧寂あり、今の廣東省廣州府の人、能く師の宗風を受けて師資唱和、共に手に攜へて家聲を揚ぐ、潙仰の一宗是れより起る。

(ト)法眼文益。支那餘杭の人、姓は魯氏、幼にして出家、諸敎を探る、長じて羅漢桂琛に參じ、苦修多年、遂に其の蘊奧を盡す、報恩院、淸凉寺等に住し、盛んに化を揚ぐ、學者常に門下に輻湊す、嗣法の弟子六十餘員を打出す、師の門下是れを法眼宗と云ふ。

(チ)以下五家の家風、多く人天眼目によつて之を述ぶ。

(リ)玄要。濟臨錄に「一句語に須らく三玄門を具すべし、一玄門中に須らく三要を具すべし」とあり。三玄とは體中玄、句中玄、玄中玄にして、三要と

(チ)臨濟家風

赤手單刀にして佛を殺し祖を殺し、古今を(リ)玄要に辨じ、龍蛇を(ヌ)主賓に驗む。(ル)金剛の寶劍を操つて、竹木の精靈を掃除し、獅子の全威を奪つて、狐狸の心膽を震裂す。臨濟宗を識らんと要すや。

青天に霹靂を轟かし、平地に波濤を起す。

曹洞家風

權に(ヲ)五位を開いて、善く(ワ)三根を接す、橫に寶劍を抽いて、諸見の稠林を斬り、妙に弘通に協つて、萬機の穿鑿を截る。(カ)威音那畔、滿目烟光、(ヨ)空劫以前、一壺の風月。曹洞宗を識らんと要すや。

佛祖未生空劫の外、正偏有無の機に落ちず。

雲門家風

劍鋒路有り、鐵壁門なし、(タ)露布の葛藤を掀飜し、常情の見解を剪却す。迅電思量するに及ばず、裂焰寧ろ湊泊を容れんや。雲門

は一要、二要、三要なり。

(ヌ)主賓。臨濟に四賓主の語あり、賓中賓、賓中主、主中賓、主中主、是れなり。

(ル)金剛の寶劍。臨濟曰く、「或時の一喝は金剛王寶劍の如く、或時の一喝は踞地金毛の獅子の如く云云。」所謂四喝是れなり。

(ヲ)五位。洞山良价の唱出せるもの、正中偏、偏中正、正中來、兼中至、兼中到是れなり。曹山曰く、「正位は空界に屬し、本來物無し、偏位は色果に屬し、萬の形像有り、云云。」

(ワ)三根。上中下の三種の根機。

(カ)威音。威音王如來の略、古佛の名なり、法華經常不輕品に出づ、威音王以前とは天地未分以前の義。那畔とは又那邊とも云ふ、這邊に對す、彼方の義。

(ヨ)空劫。四劫の一、四劫とは成

宗を識らんと要すや。

拄杖子跨跳して天に上り、盞子裏に諸佛說法す。

潙仰家風

師資唱和、父子一家、(レ)脇下に字を書して、頭角崢嶸、室中に人を驗して、獅子の腰折る。四句を離れ、百非を絕す、一槌粉碎す。兩口有つて一舌なし、(ソ)九曲珠通ず。潙仰宗を識らんと要すや。

斷碑古路に橫はり、鐵牛少室に眠る。

法眼家風

言中に響有り、句裡に鋒を藏す、(ツ)髑髏常に世界に于てし、鼻孔家風に磨觸す。風柯月渚、眞心を顯露し、翠竹黃化、妙法を宣明す。法眼宗を識らんと要すや。

風斷雲を送つて嶺に歸り去り、月流水に和して橋を過ぎ來る。

別に臨濟の宗旨を明す

大凡そ(ネ)一句中に三玄を具し、一玄中に三要を具す、一句は無文綵の(ナ)卽、三玄三要は有文綵の卽。權實は玄、(ラ)照用は要。

住壞空の四にして、世界の生成より破滅に至るまでの四大時期なり、壞劫の廿小劫終りて、世界全く空に歸し、更に次の成劫に至るまでの間を云ふ。

(ヌ)露布。祖庭事苑第六に曰く、「詔表を封ぜざるを露布」と。

(レ)脇下に字を書す。會元第九に曰く、「潙山、上堂して曰く、老僧百年後、山下に向って一頭の水牯牛と作らん、左脇下に五字を書して、潙山僧某甲と、恁麼の時に當り、喚んで潙山僧の作さば又是れ牛牯牛、喚んで水牯牛と作さば、又是れ潙山僧、畢竟喚んで甚麼と作さば卽ち得ん云云。」

(ソ)九曲珠。東坡が詩の註に、「九曲の寶珠を得る有り、之を穿つことを得ず、孔子敎へて以て脂を線に塗りて蟻をして通ぜしむ」と。又事苑第五に見え

(ム)三句

第一句、喪身失明。第二句、未だ口を開かざるに錯。第三句、糞箕掃帚。

三要

一要、照卽大機。二要、照卽大用。三要、照用同時。

三玄

體中玄、三世一念等。句中玄、徑截言句等。玄中玄、良久棒喝等。

(ウ)四料揀

奪(ヰ)人不奪境、下根に待す。奪境不奪人、中根に待す。人境兩倶奪、上根に待す。人境倶不奪、出格の人に待す。

(ノ)四賓主

賓中賓、學人鼻孔無し、問有り、答あ

たり。

(ツ)髑髏。雲峰悅禪師の上堂、「髑髏常に世界に于てし、鼻孔家風に磨觸す、」驀に拄杖を拈起して云く、「玄沙老穿過し了れり、會すや」と。

(ネ)臨濟錄に曰く、師又云ふ、「一句語に須らく三玄門を具すべし、一玄門に須らく三要を具すべし、權あり用あり、汝等諸人作麼生か會せん」と。

(ナ)卽。古板には「印」に作る。

(ラ)照用。照は照鑑、用は妙用の義なり、機を見るは照にして、其の機に應ずるは用なり。

(ム)三句。臨濟錄上卷に、上堂僧問ふ、「如何なるか是れ第一句。」師云く、「三要印開して朱點側だつ、未だ擬議を容れざるに主賓分る。」問ふ、「如何なるか是れ第二句。」師云く、「妙解豈に無着の問を容れんや、漚和いかでか截流の機を負はん。」問ふ、「如何なるか是れ第三句。」師云く、「棚頭に傀儡を弄するを看取せよ、抽牽都來裏に人有り」と。

(ウ)四料揀。臨濟錄上卷に、師晚參、衆に示して曰く、「有る時は奪人不奪境、有る時は人境兩倶不奪、有る時は人境倶不奪」と。

(ヰ)人と境。人とは主觀なり、心と云ふも自と云ふも同じ、境とは客觀にして物なり、一切萬法なり。臨濟錄註に、「人とは心意識を謂ひ、境とは一切の文字言句並に山河大地等を謂ふ」と。

(ノ)四賓主。臨濟錄上卷に云く、「主客相見するが如きんば便ち言論往來あり、或は物に應じて形を現じ、或は全體作用し、或は機權を把つて喜怒し、或は半身を現じ、或は獅子に乘り、或は象王に乘る云云。」

り。賓中主、學人(オ)鼻孔有り、主有り法あり。主中賓、師家鼻孔無し、問の在る有り。主中主、師家鼻孔あり、妨げず奇特なることを。

(ク)四照用

先照後用、人の在る有り。先用後照、法の在る有り。照用同時、(ヤ)耕を驅り食を奪ふ。照用不同時、問有り答有り。

(マ)四大式

正利、(ケ)少林面壁の類。平常、(フ)禾山打鼓の類。本分、(コ)山僧不會の類。貢假、(エ)達磨不識の類。

(テ)四喝

金剛王寶劍、一刀揮つて一切の情解を斷つ。踞地の獅子、言を發し氣を吐け

(オ)鼻孔。眼と云ふに同じ、卽ち鼻孔の有無とは宗旨の眼の有無なり。

(ク)四照用。人天眼目上卷に出づ、云く、一日衆に示して云く、「或る時は先照後用、有る時は云云」と。

(ヤ)耕を驅り。人天眼目の上に、「照用同時、耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ひ、骨を敲き髓を取り、痛の針錐を下す」とあり。

(マ)四大式。此の語は人天眼目をはじめ他書に未だ見えざる所なり、尙ほ下に出づる八棒と共に著者の唱出せるものか。

(ケ)少林面壁。達磨大師、梁武帝に見えて機契はず、去つて嵩山の少林寺に面壁九年す。

(フ)禾山打鼓。碧巖第四十四則に僧問ふ、「如何なるか是れ眞過」山曰く、「解打鼓、云云」とあり。

(コ)山僧不會。僧あり、百丈に問ふ、「四句を離れ百非を絕して請ふ師某甲に西來意を直指せよ。」師云く、「山僧這裏に到つて却つて不會。」

(エ)達磨不識。碧巖第一則に出づ、梁武帝、達磨大師に問ふ、「如何なるか是れ聖諦第一義。」磨云く、「廓然無聖。」帝云く、「朕に對するものは誰ぞ。」磨云く、「不識。」

(テ)四喝。臨濟錄勘辨に、師、僧に問ふ、「有る時の一喝は金剛王寶劍の如く、ある時の一喝は踞地金毛獅子の如く、ある時の一喝は探竿影草の如く、ある時の一喝は一喝の用を作さず、汝作麼生か會す。」僧擬議す。師便ち喝す。

(ア)探竿影草。探影は外より屋內へ差し入れて其の樣子を探る竹竿の類、影草は隱れ簑にして、共に盜人の用ふるものな

ば、衆魔腦裂す。(ア)探竿影草、其の有無師承の鼻孔を探る。一喝一喝の用を作さず、上の三玄四賓主等を具す。

(サ)八棒

令に觸れて玄に返し、接掃して正に從ひ、玄に靠けて正に復る。苦責は罰棒、宗旨に順ふは賞棒、虛實あるは辨棒、盲枷は瞎棒、凡聖を掃除するは正棒。

此等の法、特に臨濟の宗風のみに非ず、上諸佛より下衆生に至るまで、皆分上の事なり。若し此れを離れて法を說かば、皆是れ妄語。

臨濟の喝、(キ)德山の棒、皆(ユ)無生を徹證す、透頂透底、大機大用、自在無方、全身出沒し、全身に擔荷して、退いて(メ)文殊普賢大人の境界を守る。然れども實に據つて論ぜば、此の二師も亦(ミ)偸心の鬼子なることを免れず。

凜凜たる(シ)吹毛鋒鋩を犯さず、爍爍たる寒光珠水に媚び、寥寥たる雲散じて月天に行く。

(ヱ)大丈夫は佛を見、祖を見るを寃家の如くす。(ヒ)若し佛に着いて求めば、

り、其の他異說あり、されど何れも物を探るに用ふる道具なるは一なり。

(サ)八棒。臨濟錄、人天眼目等にも見えず。禪苑蒙求下卷に、楊岐の八棒なるもの見ゆれども、註脚を缺くを以て知るを得ず。

(キ)德山の棒。德山宣鑑禪師は龍潭崇信の嗣なり。能く棒を行じて來機を接す。五燈會元卷七德山の篇に、小參、衆に示して曰く、「今夜答話せず、問話するものは三十棒。」時に僧有り、出でて禮拜す。師便ち打つと。此の類の如し。

(ユ)無生を徹證す。不生不滅の本來の面目を徹底證見するなり。

(メ)文殊普賢大人。文殊は智、普賢は行、共に是れ有力の大人なり。此の智行兼ね備へて、初めて眞の大人と謂つべし。

佛に縛せられ、若し祖に着いて求めば、祖に縛せられん。求むること有るは皆苦なり、如かじ無事ならんには。

佛祖は寃の如しとは、上の無風起浪を結ぶ。求むることあるは皆苦なりとは、上の當體便是を結ぶ。如かじ無事ならんにはとは上の動念卽乖を結ぶ。此に到つて天下の人の舌頭を坐斷す、生死の迅輪、庶幾ど停息せん。危を扶け亂を定む、(モ)丹霞の木佛を燒き、(セ)雲門の狗子に喫せしめ、(ス)老母の佛を見ざるが如きんば、皆是れ邪を摧き正を顯はす底の手段なり。然れども畢竟如何。

　常に憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。

(イ)神光不昧、萬古の徽猷此の門に入り來らば、知解を存すること莫れ。

神光不昧とは、(ロ)上の昭昭靈靈を結ぶ。萬古の徽猷とは、上の本不生滅を結ぶ。知解を存すること莫れとは、上の不可守名生解を結ぶ。門といふは、凡聖出入の義あり、(ハ)荷澤の所謂知の一字衆妙の門といふが如し。吁、名狀不得に起つて、莫存知解に結ぶ、一篇の葛藤、一句に都べて破す。然して始終一解中に萬行を擧す、(ニ)世典の三義の如し。知解の二字は佛法の大害、故に時に擧げて之を終ふ。荷澤の神會禪師、(ホ)曹溪の嫡子たることを得ざることは此れを以てなり。因つて頌に曰く、「斯くの如く擧唱して宗旨を明す、笑殺す(ヘ)西來の碧眼僧。」然れども畢竟如何。「孤輪獨り照して江山靜かなり、自ら笑ふ一聲天地驚く。」

國譯禪家龜鑑 終

(ミ)偸心の鬼子。偸心はぬすみ心なり、所求の心のやまざるなり。鬼子は人を罵る語、餓鬼、小僧なぞの如し。

(シ)吹毛。支那に於ける名劍の名、刄に向つて毛を吹けば、悉く斷つ、故に此の名を得たりと。

(エ)新豐和尚云く「祖佛の言教を見ること、生寃家の如くにして、始めて參學の分あり、若し道ひ得ずんば、卽ち祖佛に瞞ぜらん」と。

(ヒ)以下は臨濟和尚の語、同語錄に出づ。

(モ)丹霞木佛。丹霞天然は石頭に嗣ぐ、寒日に木佛を燒いて暖を取る。院主見て之を責む。曰く「燒いて舍利を取る」と。詳しく禪林類聚に見ゆ。

(セ)雲門狗子。會元雲門の章に曰く、擧す、世尊初め生下して一手は天を指し、一手は地を指し、周行七歩、四方を目顧して云く、「天上天下唯我獨尊」と。師曰く「我れ當時若し見ば一棒に打殺して狗子に與へて喫却せしめん云云。」

(ス)老母佛を見ず。會元に曰く、「昔城東に老母あり、佛と同生にして佛を見るを欲せず、佛の來るを見る毎に、便ち廻避す、然も如此なりと雖も、東西を回顧すれば、總に是れ佛、遂に手を以て面を掩へば、十指掌中に於て總に是れ佛云云」と、大藏一覽の五、三十八丁に見えたり。

(イ)神光不昧。此の句は平田普岸和尚の語なり、會元の四に出づ。

(ロ)上。卷頭なり。昭昭靈靈等の句、本書の最初に出づ。

(ハ)荷澤神會禪師は六祖の傍傳の法嗣たり。師の語に云く「空寂の體の上、自ら本智有りて能く知る、知の一字衆妙の門」と。

(ニ)世典の三義。中庸に、程子曰く「其の書始めは一理を言ひ、中は散じて萬事となり、末復た合して一理となる」と、此の謂なり。

(ホ)曹溪。六祖大鑑惠能禪師のこと、曹溪は其の住居の地名。

(ヘ)西來碧眼僧。達磨大師のこと。

跋

右の編は乃ち曹溪の老和尚退隱師翁の著す所なり。噫二百年來師法盛喪して、㋑禪教の徒、各異見を生ず。教を宗とする者は、唯だ糟粕に耽り、徒に自ら㋺沙を算へて、㋩五教の上に直指人心自らをして悟入せしむるの門あることを知らず。禪を宗とするものは、自ら天眞を恃んで修證を撥無して、頓悟して後始めて卽ち發心して萬行を修習するの意を知らず。禪教混濫して、沙金分つこと罔し、圓覺の所謂本來成佛と說くを聞いては、本迷悟なしと謂つて、因果を撥置するときは則ち便ち邪見と成る。又無明を修習するを聞いては、眞能く妄を生ずと謂つて、眞常の性を失するときは、則ち亦邪見と成る者是れなり。嗚呼殆い哉、斯の道の傳はらざること何ぞ是の若く其れ甚だしきや。綿綿涓涓として、一髮に千鈞を引くが如し、幾乎ど地に落ちて從ふこと無し。賴に我が師翁の西山に住すること一十年、㋥牛に鞭つて暇あれば㋭五十本の經論語錄を覽て、間に日用中參決要

㋑禪教。禪は卽ち教外別傳の禪宗、教は卽ち教內の諸宗。
㋺沙を算す。證道歌に、「海に入りて沙を算す、徒らに自ら困ずと云云」とあり。
㋩五教。釋尊一代の教說を五種に判別したるもの、小乘教、大乘始教、終教、頓教、圓教是れなり。是れは華嚴宗の判釋に依る、他の宗旨にも五教の名あるものあり、之と異なれり、今は之を省く。但し今云ふ五教とは、是等の別を云ふに非ずして御一代の言教を指すなり。
㋥午に鞭つ。作務するなり、心田を耕すなり。
㋭五十本。或は五卷或は十卷。

切の語句あるときは卽ち輙ち之を錄して、時に室中の二三子に與へて、詢然として之を誨ふ、一へに羊を牧するの法の如し。過ぎたるは之を抑へ、後れたるは之を鞭ちて驅つて大覺の門に入らしむ、老婆心、徹困なることを得たる是の如く其れ切なり。二三子の鈍根なるを奈せん、返つて法門の高峻なるを以て病と爲す。師翁其の迷蒙を愍むが爲に、各語句下に就いて註を入れて之を解し、編次して之を繹す。鈎鎖連環、血脈相通、㋬萬藏の要、㋣五宗の源、極めて此に備はれり。言言見諦し、句句朝宗す、向の偏なる者をば之を圓にし、滯る者をば之を通ず、謂つべし禪教の龜鑑、解行の良藥なりと。然して師翁常に與に這般の事を論ずるに、一言半句と雖も、㋠劍刃上の事を弄ずるが如し、紙墨に上さんことを恐る、豈に此れを以て方外に流通して、己が能に誇衒せんことを欲せんや。門人白雲禪子魯願之を寫し、門人碧泉、禪德の義天之を校す。門人大禪師大常、門人靑霞道人法融等、稽首再拜して曰く、「未曾有なり」と。遂に同志六七人と鉢囊の中に儲ふる所を傾けて、梓に入れて流通して以て師翁訓蒙の恩を報ず。㋷大機龍藏、汪洋渺として淵海の如し。㋦龍珠を探

㋬萬藏。一切藏經、卽ち釋尊一代所說の經文なり。
㋣五宗。禪の五派、臨濟宗、曹洞宗、雲門宗、潙仰宗、法眼宗、是れなり、又五家とも云ふ、是に臨濟下の楊岐、黃龍の二分派を加へて七宗と稱す。
㋠劍刃上の事。苟もせざること。劍刃の前には僅かに過てば喪身失命す、是を以て喩となす。
㋷大機龍藏。大機は祖師の大機大用より發せられたる言句の類。龍藏は佛一代權說實說の一切藏經。
㋦龍珠を探り。河上の翁の子、川に沒して千金の珠を得たり。翁曰く、「珠は驪龍頷下にあるもの云云」と。莊子列禦寇篇に出でたり。珠を探り珊瑚を采る者、水練の達者ならざるべからず。上の淵海の句に對す。
㋸撮要の功。佛經語錄中の肝要

り、珊瑚を采る者と言ふと雖も、孰か從つて之を求めん、海に入ること陸の如くするの手段に非ずんば、頗る望涯の嘆を免れず。然るときは則ち(ル)撮要の功、(ヲ)發蒙の惠、山の高きが如く、海の深きが如し。設ひ若し萬骨を碎き、千命を粉にすとも、如何ぞ一毫を報じ得んや。千里の外に、之を見之を聞くことあつて、驚かず疑はず、之を敬し之を讀んで、以て寶玩とするときは則ち眞に所謂千歲の下も(ワ)一子雲耳。

時(カ)萬曆己卯春　曹溪の(ヨ)宗遂四溟隱峰惟政拜手口訣、因つて爲に謹んで跋す、

なるものを撮り出したる功。
(ヲ)發蒙。蒙昧を啓發するなり。
(ワ)一子雲。昔揚子雲一書を著はして「太玄」と云ふ、人皆之を笑ふ、子雲が言はく「世の我を知らざること害なし、後世に揚子雲なるものあつて必ず之を好しとせん」と。
(カ)萬曆己卯。朝鮮李氏昭の敬王代にして宣祖十三年なり、我が朝正親町天皇の天正七年に相當す。而して萬曆は明の十三代神宗の年號なり。
(ヨ)宗遂。遂は經なり、又嗣の義なり、嗣法をいふ、四溟は蓋し山の名なりと古抄にあり。

禪家龜鑑

曹溪退隱述

有一物於此、從本以來、昭昭靈靈、不曾生、不曾滅、名不得、狀不得。

一物者何物。　古人頌云、古佛未生前、凝然一相圓、釋迦猶未會、迦葉豈能傳、此一物之所以不曾生、不曾滅、名不得、狀不得也、六祖告衆云、吾有一物、無名無字、諸人還識否、神會禪師卽出曰、諸佛之本源、神會之佛性、此所以爲六祖之孽子也、懷讓禪師自嵩山來、六祖問曰、什麼物伊麼來、師罔措、至八年方自肯曰、說似一物卽不中、此所以爲六祖之嫡子也。　三敎聖人、從此句出、誰是擧者、惜取眉毛。

佛祖出世、無風起浪。

佛祖者世尊迦葉也、出世者大悲爲體度衆生也、然以一物觀之、則人人面目、本來圓成、豈假他人添脂著粉也、此出世之所以起波浪也、虛空藏經云、文字是魔業、名相是魔業、至於佛語亦是魔業、是此意也、此直擧本分、佛祖無功能。

乾坤失色、日月無光。

然法有多義、人有多機、不妨施設。

法者一物也、人者衆生也、法有不變隨緣之義、人有頓悟漸修之機、故不妨文字語言之施設也、此所謂官不容針、私通車馬者也、衆生雖曰圓成、生無慧目、甘受輪轉、故若非出世之金鎞、誰刮無明之厚膜也、至於越苦海而登樂岸者、皆由大悲之恩也、然則恒沙身命、難報萬一也、此廣擧新熏、感佛祖深恩。

王登寶殿、野老謳歌。

强立種種名字、或心或佛或衆生、不可守名而生解、當體便是、動念卽乖。

一物上强立三名字者、敎之不得已也、不可守名生解者、亦禪之不得已也、一擡一搦、旋立旋破、皆法王法令之自在者也、此結上起下、論佛祖事體各別。

久旱逢佳雨、他鄉見故人。

世尊三處傳心者爲禪旨、一代所說者爲敎門、故曰、禪是佛心、敎是佛語。

三處者多子塔前分半座、一也、靈山會上擧拈花、二也、雙樹下槨示雙趺、三也、所謂迦葉別傳禪燈者此也、一代者四十九年間、所說五敎也、人天敎、一也、小乘敎、二也、大乘敎、三也、頓敎、四也、圓敎五也、所謂阿難流通敎海者此也、然則禪敎之源者世尊也、禪敎之派者迦葉阿難也、以無言至於無言者禪也、以有言至於無言者敎也、乃至心是禪法也、語是敎法也、則法雖一味、見解則天地懸隔、此辨禪敎二途。

不得放過、草裏橫身。

是故若人失之於口、則拈花微笑、皆是敎迹、得之於心、則世間麁言細語、皆是敎外別傳禪旨

法無名、故言不及也、法無相、故心不及也、擬之於口者、失本心王也、失本心王、則世尊拈花、迦葉微笑、盡落陳言、終是無物也、得之於心者、非但街談善說法要、至於鷰語、深談實相也、是故寶積禪師、聞哭聲踊悅身心、寶壽禪師、見諍拳開豁面目者以此也、此明禪敎深淺。

明珠在手、弄去弄來。

吾有一言、絕慮忘緣、兀然無事坐、春來草自靑。

絕慮忘緣者、得之於心也、所謂閒道人也、於戲其爲人也、本來無緣、本來無事、飢來卽食、困來卽眠、綠水靑山、任意逍遙、漁村酒肆、自在安眠、年代甲子摠不知、春來依舊草自靑、此別歎一念回光者。

將謂無人、賴有一箇。

敎門惟傳一心法、禪門惟傳見性法。

心如鏡之體、性如鏡之光、性自淸淨、卽時割然還得本心、此秘重得意一念。

重重山與水、淸白舊家風。

評曰、心有二種、一本源心、二無明取相心也、性有二種、一本法性、二性相相對性也、故禪敎者同迷守名生解、或以淺爲深、或以深爲淺、遂爲觀行大病、故於此辨之。

然諸佛說經、先分別諸法、後說畢竟空、祖師示句、迹絕於意地、理顯於心源。

諸佛爲萬代依憑、故理須委示、祖師在卽時度脫、故意使玄通、迹祖師言迹也、意學者意

地也。

胡亂指注、臂不外曲。

諸佛說弓、祖師說弦、佛說無礙之法、方歸一味、拂此一味之迹、方現祖師所示一心、故云、庭前柏樹子話、龍藏所未有底。

說弓曲也、說弦直也、龍藏龍宮之藏經也、僧問趙州、如何是祖師西來意、州答云、庭前柏樹子、此所謂格外禪旨也。

魚行水濁、鳥飛毛落。〔方語云、蹤跡猶在。〕

故學者先以如實言敎、委辨不變隨緣二義、是自心之性相、頓悟漸修兩門、是自行之始終、然後放下敎義、但將自心現前一念、參詳禪旨、則必有所得、所謂出身活路。

上根大智不在此限、中下根者不可躐等也、敎義者、不變隨緣、頓悟漸修、有先有後、禪法者、一念中不變隨緣、性相體用、元是一時離卽離非、是卽非卽、故宗師據法離言、直指一念、見性成佛耳、放下敎義者以此。

明歷歷時雲藏深谷、深密密處日照晴空。

大抵學者須參活句、莫參死句。

活句下薦得、堪與佛祖爲師、死句下薦得、自救不了、此下特擧活句、使自悟入。

要見臨濟、須是鐵漢。

評曰、話頭有句意二門、參句者徑截門活句也、沒心路沒語路、無摸𢱢故也、參意者圓頓門死句也、有理路有語路、有聞解思相故也。

凡本參公案上、切心做工夫、如雞抱卵、如猫捕鼠、如飢思食、如渴思水、如兒憶母、必有透徹之期。

祖師公案、有一千七百則、如狗子無佛性、庭前柏樹子、麻三斤、乾屎橛之流也、雞之抱卵、暖氣相續也、猫之捕鼠、心眼不動也、至於飢思食、渴思水、兒憶母、皆出於眞心、非做作底心、故云切也、參禪無此切心、能透徹者無有是處。

參禪須具三要、一有大信根、二有大憤志、三有大疑情、苟闕其一、如折足之鼎、終成廢器。

佛云、成佛者、信爲根本、永嘉云、修道者先須立志、蒙山云、參禪者不疑言句、是爲大病、又云、大疑之下必有大悟。

日用應緣處、只擧狗子無佛性話、擧來擧去、疑來疑去、覺得沒理路沒義路沒滋味、心頭熱悶時、便是當人放身命處、亦是成佛作祖底基本也。

僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、此一字子宗門之一關、亦是摧許多惡知惡覺底器仗、亦是諸佛面目、亦是諸祖骨髓也、須透得此關、然後佛祖可期也、古人頌云、趙州露刄劍、寒霜光燄燄、擬議問如何、分身作兩段。

話頭不得擧起處承當、不得思量卜度、又不得將迷待悟、就不可思量處、思量心無所之、如老鼠入牛角、便見倒斷也、又尋常計較安排底是識情、隨生死遷流底是識情、怕怖慞惶底是識情、今人不知是病、只管在裏許頭出頭沒。

話頭有十種病、曰意根下卜度、曰揚眉瞬目處挨根、曰語路上作活計、曰文字中引證、曰擧起處承當、曰颺在無事匣裏、曰作有無會、曰作眞無會、曰作道理會、曰將迷待悟也。離此十種病者、但擧話時略抖擻精神、只疑是箇甚麼。

此事如蚊子上鐵牛、更不問如何若何、下嘴不得處、棄命一攢、和身透入。

重結上意、使參活句者不得退屈、古云、參禪須透祖師關、妙悟要窮心路絕。

工夫如調絃之法、緊緩得其中、勤則近執着、忘則落無明、惺惺歷歷、密密綿綿。

彈琴者曰、緩急得中、然後淸音普矣、工夫亦如此、急則動血囊、忘則入鬼窟、不徐不疾、妙在其中。

工夫到行不知行、坐不知坐、當此之時、八萬四千魔軍、在六根門頭伺候、隨心生設、心若不起、爭如之何。

魔者樂生死之鬼名也、八萬四千魔軍者、乃衆生八萬四千煩惱也、魔本無種、修行失念者、遂派其源也、衆生順其境故順之、道人逆其境故逆之、故云、道高魔盛也、禪定中或見孝子而斫股、或見猪子而把鼻者、亦自心起見、感此外魔也、心若不起、則種種伎倆、翻爲割水吹光也、古云、壁隙風動、心隙魔侵。

起心是天魔、不起心是陰魔、或起或不起是煩惱魔、然我正法中、本無如是事。

大抵忘機是佛道、分別是魔境、然魔境夢事、何勞辨詰。

工夫若打成一片、則縱今生透不得、眼光落地之時、不爲惡業所牽。

業者無明也、禪者般若也、明闇不相敵、理固然也。

大抵參禪者、還知四恩深厚麼、還知四大醜身、念念衰朽麼、還知人命在呼吸麼、生來値遇佛祖麼、及聞無上法、生希有心麼、不離僧堂守節麼、不與隣單雜話麼、切忌鼓扇是非麼、話頭十二時中、明明不昧麼、對人接話時、無間斷麼、見聞覺知時、打成一片麼、返觀自己捉敗佛祖麼、今生決定續佛慧命麼、起坐便宜時、還思地獄苦麼、此一報身、定脫輪迴麼、當八風境心不動麼、此是參禪人日用中點檢底道理、古人云、此身不向今生度、更待何生度此身。

四恩者、父母・君・師・施主恩也、四大醜身者、父之精一滴、母之血一滴者、水大之濕也、精爲骨、血爲皮者、地大之堅也、精血一塊、不腐不爛者、火大之暖也、鼻孔先成通出入息者、風大之動也、阿難曰、欲氣麁濁、腥臊交遘、此所以醜身也、念念衰朽者、頭上光陰、刹那不停、面自皺而髮自白、如云今既不如昔、後當不如今、此無常之體也、然無常之鬼、以殺爲戲、實念念可畏也、呼者出息之風也、吸者入息之風也、人命寄托、只在出入息也、八風者、順逆二境也、地獄苦者、人間六十劫、泥犂一晝夜、鑊湯爐炭劍樹刀山之苦、口不可形言也、人身難得甚於海中之鍼、故於此愍而警之。

評曰、上來法語、如人飮水冷暖自知、聰明不能敵業、乾慧未免苦輪、各須察念、勿以自謾。

學語之輩、說時似悟、對境還迷、所謂言行相違者也。

此結上自謾之意、言行相違、虛實可辨。

若欲敵生死、須得這一念子爆地一破、方了得生死。

　爆打破漆桶聲、打破漆桶、然後生死可敵也、諸佛因地法行者只此而已。

然一念子爆地一破、然後須訪明師決擇正眼。

　此事極不容易、須生慚愧始得道、如大海轉入轉深、愼勿得小爲足、悟後若不見人、則醍醐上味翻成毒藥。

古德云、只貴子眼正、不貴汝行履處。

　昔仰山答潙山問云、涅槃經四十卷總是魔說、此仰山之正眼也、仰山又問行履處、潙山答曰、只貴子眼正云、此所以先開正眼、而後說行履也、故云若欲修行、先須頓悟。

願諸道者、深信自心、不自屈、不自高。

　此心平等本無凡聖、然約人有迷悟凡聖也、因師激發、忽悟眞我與佛無殊者頓也、此所以不自屈、如云本來無一物也、因悟斷習、轉凡成聖者漸也、此所以不自高、如云時時勤拂拭也、屈者敎學者病也、高者禪學者病也、敎學者不信禪門有悟入之秘訣、深滯權敎、別執眞妄、不修觀行、數他珍寶、故自生退屈也、禪學者不信敎門有修斷之正路、染習雖起、不生慚愧、果級雖初、多有法慢、故發言過高也、是故得意修心者、不自屈不自高也。

　　評曰、不自屈不自高者、略擧初心因、該果海、則雖信之一位也、廣擧菩薩果、徹因源、則五十五位也。

迷心修道、但助無明。

　悟若未徹、修豈稱眞哉、悟修之義、如膏明相賴、目足相資。

修行之要、但盡凡情、別無聖解。

　病盡藥除、還是本人。

不用捨衆生心、但莫染汚自性、求正法是邪。

　捨者求者、皆是染汚也。

斷煩惱名二乘、煩惱不生名大涅槃。

　斷者能所也、不生者無能所也。

須虛懷自照、信一念緣起無生。

　此單明性起。

諦觀殺盜婬妄、從心上起、當處便寂、何須更斷。

　此雙明性相。

　　經云、不起一念、名爲永斷無明、又云、念起卽覺。

知幻卽離、不作方便、離幻卽覺、亦無漸次。

　心爲幻師也、身爲幻城也、世界幻衣也、名相幻食也、至於起心・動念・虛妄・言眞、無非幻也、又無始幻、無明皆從覺心生、幻幻如空花、幻滅名不動、故夢瘡求醫者、寤來無方便、知幻者亦如是。

衆生於無生中、妄見生死涅槃、如見空花起滅。

性本無生故、無生涅也、空本無花、故無起滅也、見生死者、如見空花起也、見涅槃者、如見空花滅也、然起本無起、滅本無滅、於此二見不用窺詰、是故思益經云、諸佛出世、非為度衆生、只為度生死涅槃二見耳。

菩薩度衆生入滅度、又實無衆生得滅度。

菩薩只以念念為衆生也、了念體空者度衆生也、念既空寂者、實無衆生得滅度也、此上論信解。

理雖頓悟、事非頓除。

文殊達天眞、普賢明緣起、解似電光、行同窮子、此下論修證。

帶婬修禪、如蒸沙作飯、帶殺修禪、如塞耳叫聲、帶偸修禪、如漏巵求滿、帶妄修禪、如刻糞為香、縱有多智皆成魔道。

此明修行軌則、三無漏學也、小乘禀法為戒、粗治其末、大乘攝心為戒、細絕其本、然則法戒無身犯、心戒無思犯也、婬者斷清淨、殺者斷慈悲、盜者斷福德、妄者斷眞實也、能成智慧、縱得六神通、如不斷殺盜婬妄、則必落魔道、永失菩提正路矣、此四戒百戒之根、故別明之、使無思犯也、無憶曰戒、無念曰定、莫妄曰慧、又戒為捉賊、定為縛賊、慧為殺賊、又戒器完固、定水澄清、慧月方現、此三學者、實為萬法之源、故特明之、使無諸漏也。

靈山會上、豈有無行佛、少林門下、豈有妄語祖。

無德之人、不依佛戒、不護三業、放逸懈怠、輕慢佗人、輕量是非、而為根本。

一破心戒、百過俱生。

評曰、如此徒、末法熾盛、惱亂正法、學者詳之。

若不持戒、尙不得疥癩野干之身、況清淨菩提果可冀乎。

重戒如佛、佛常在焉、須草繫鵞珠以為先導。

欲脫生死、先斷貪欲及諸愛渴。

愛為輪廻之本、欲為受生之緣、佛云、婬心不除、塵不可出、又云、恩愛一縛著、牽人入罪門、

渴者情愛之至切也。

無礙清淨慧、皆因禪定生。

超凡入聖、坐脫立亡者、皆禪定之力也、故云、欲求聖道、離此無路。

心在定則能知世間生滅諸相。

虛隙日光、纖埃擾擾、清潭水底、影像昭昭。

見境心不起名不生、不生名無念、無念名解脫。

修道證滅、是亦非眞也、心法本寂、乃眞滅也、故曰、諸法從本來、常自寂滅相。

戒也定也慧也、擧一具三、不是單相。

眼不自見、見眼者妄也、故妙首思量、淨名杜默、此下散擧細行。

貧人來乞、隨分施與、同體大悲、是眞布施。

自他為一曰同體、空手來空手去、吾家活計。

有人來害、當自攝心、勿生瞋恨、一念瞋心起、百萬障門開。

　煩惱雖無量、瞋慢爲甚、涅槃云、塗割兩無心、瞋如冷雲中霹靂起火來。

若無忍行、萬行不成。

　行門雖無量、慈忍爲根源、忍心如幻夢、辱境若龜毛。

守本眞心、第一精進。

　若起精進心、是妄、非精進、故云、莫妄想、莫妄想、懈怠者常常望後、是自棄人也。

持呪者現業易制、自行可違、宿業難除、必借神力。

　魔登得果信不誣矣、故不持神呪、遠離魔事者、無有是處。

禮拜者敬也伏也、恭敬眞性、屈伏無明。

　身口意清淨則佛出世。

念佛者在口曰誦、在心曰念、徒誦失念、於道無益。

　阿彌陀佛六字法門、定出輪廻之捷徑也、心則緣佛境界、憶持不忘、口則稱佛名號、分明不亂、如是心口相應、名曰念佛。

　評曰、五祖云、守本眞心、勝念十方諸佛、六祖云、常念佗佛、不免生死、守我本心、卽到彼岸、又云、佛向性中作、莫向身外求、又云、迷人念佛求生、悟人自淨其心、又云、大抵衆生悟心自度、佛不能度衆生、云云、如上諸德、直指本心、別無方便〔方將一法便逗諸根〕理實如是、然迹門實有極樂世界、阿彌陀佛有四十八大願、凡念十聲者、承此願力、往生蓮胎、徑脫輪廻、三世諸佛、異口同音、十方菩薩、同願往生、又況古今往生之人、傳記昭昭、願諸行者、愼勿錯認、勉之勉之。

　梵語阿彌陀、此云無量壽、亦云無量光、十方三世第一佛號也、因名法藏比丘、對世自在王佛、發四十八願、云、我作佛時、十方無央數世界諸天人民、以至蜎飛蠕動之流、念我名十聲者、必生我刹中、不得是願、終不成佛、云云、先聖云、唱佛一聲、天魔喪膽、名除鬼簿、蓮出金池、又懺法云、自力他力、一遲一速、欲越海者、種樹作船遲也、比自力也、借船越海速也、比佛力也、又曰、世間稚兒、迫於水火、高聲大叫、則父母聞之、急走救援、如人臨命終時、高聲念佛、則佛具神通、決定來迎爾、是故大聖慈悲勝於父母也、衆生生死甚於水火也、有人云、自心淨土、淨土不可生、自性彌陀、彌陀不可見、此言似是而非也、彼佛無貪無瞋、我亦無貪瞋乎、彼佛變地獄作蓮花、易於返掌、我則以業力、常恐自墮於地獄、況變作蓮花乎、彼佛觀無盡世界、如在目前、我則隔壁事猶不知、況見十方世界如目前乎、是故人人性則雖佛、而行則衆生、論其相用、天地懸隔、圭峯云、設實頓悟、終須漸行、誠哉是言也、然則寄語自性彌陀者、豈有天生釋迦自然彌陀耶、須自忖量、人豈不自知、臨命終時、生死苦際、定得自在否、若不如是、莫以一時貢高、却致永劫沈墮、又馬鳴・龍樹悉是祖師、皆明垂言敎、深勸往生、我何人哉、不欲往生、又自云、西方去此遠、夫十萬〔十惡〕八千〔八邪〕、此爲鈍根說相也、又云、西方去此不遠、卽心〔衆生〕是佛〔彌陀〕、此

爲利根說性也、敎有權實、語有顯密、若解行相應者、遠近俱通也、故祖師門下、亦有或喚阿彌陀佛者〔惠遠〕、或喚主人公者〔瑞岩〕。

聽經有經耳之緣、隨喜之福、幻軀有盡、實行不亡。

此明智學、如食金剛、勝施七寶、壽師云、聞而不信、尙結佛種之因、學而不成、猶益人天之福。

看經若不向自己上做工夫、雖看盡萬藏猶無益也。

此明愚學、如春禽晝啼、秋蟲夜鳴、密師云、識字看經、元不證悟、銷文釋義、唯熾貪嗔邪見。

學未至於道、衒耀見聞、徒以口舌辨利相勝者、如廁屋塗丹雘。

別明末世愚學、學本修性、全習爲人、是誠何心哉。

出家人習外典、如以刀割泥、泥無所用、而刀自傷焉。

門外長者子、還入火宅中。

出家爲僧、豈細事乎、非求安逸也、非求溫飽也、非求利名也、爲生死也、爲斷煩惱也、爲續佛慧命也、爲出三界度衆生也。

可謂衝天大丈夫。

佛云、無常之火、燒諸世間、又云、衆生苦火、四面俱焚、又云、諸煩惱賊常伺殺人、道人宜自警悟、如救頭燃。

身有生老病死、界有成住壞空、心有生住異滅、此無常苦火、四面俱焚者也、謹白參玄人、光陰莫虛度。

貪世浮名、枉功勞形、營求世利、業火加薪。

貪世浮名者、有人詩云、鴻飛天末迹留沙、人去黃泉名在家、營求世利者、有人詩云、采得百花成蜜後、不知辛苦爲誰甜、枉功勞形者、鑿氷彫刻、不用之巧也、業火加薪者、麁弊色香、致火之具也。

名利衲子、不如草衣野人。

唾金輪入雪山、千世尊不易之軌則、末世羊質虎皮之輩、不識廉恥、望風隨勢、陰媚取寵、噫其懲也夫。

心染世利者、阿附權門、趨走風塵、返取笑於俗人、此衲子以羊質證此多行、以懲也夫三字結之、此三字文出莊子。

佛云、云何賊人、假我衣服、裨販如來、造種種業。

末法比丘有多般名字、或烏鼠僧、或啞羊僧、禿居士、或地獄滓、或被袈裟賊、噫其所以以此。

裨販如來者、撥因果排罪福、沸騰身口、迭起愛憎、可謂愍也、避僧避俗曰烏鼠、舌不說法曰啞羊、僧形俗心曰禿居士、罪重不遷曰地獄滓、賣佛營生曰被袈裟賊、以被袈裟賊證此多名、以此二字結之、此二字文出老子。

於戲佛子、一衣一食、莫非農夫之血、織女之苦、道眼未明、如何消得。

傳燈、一道人道眼未明、故身爲木菌、以還信施。

故曰要識披毛戴角底麼、卽今虛受信施者是、有人未飢而食、未寒而衣、是誠何心哉、都不思目前之樂、便是身後之苦也。

智論、一道人五粒粟受牛身、生償筋骨、死還皮肉、虛受信施、報應如響。

故曰、寧以熱鐵纒身、不受信心人衣、寧以洋銅灌口、不受信心人食、寧以鐵鑊投身、不受信心人房舍等。

梵網經云、不以破戒之身、受信心人種種供養、乃種種施物、菩薩若不發是願、則得輕垢罪。

故曰、道人進食如進毒、受施如受箭、幣厚言甘、道人所畏。

進食如進毒者、畏喪其道眼也、受施如受箭者、畏失其道果也。

故曰、修道之人、如一塊磨刀之石、張三也來磨、李四也來磨、磨來磨去、別人刀快而自家石漸消、然有人更嫌他人不來我石上磨、實爲可惜。

如此道人、平生所向只在溫飽。

故古語亦有之、曰、三途苦未是苦、袈裟下失人身、始是苦也。

古人云、今生未明心、滴水也難消、此所以袈裟下失人身也、佛子佛子、憤之激之、此章始起於一於戲、終結於一古語、中間細繹許多故曰字、亦一段文法也。

咄哉此身九孔常流、百千癰疽一片薄皮、又云、革囊盛糞、膿血之聚、臭穢可鄙、無貪惜之、何況百年將養、一息背恩。

上來諸業、皆由此身、發聲叱咄、深有警也、此身諸愛根本、了之虛妄、則諸愛自除、如其耽着、則起無量過患、故於此特明之、開修道之眼也。

評曰、四大無主、故一爲假四寃、四大背恩、故一爲養四蛇、我不了虛妄故、爲他人也嗔之慢之、他人亦不了虛妄故、爲我也嗔之慢之、若二鬼之爭一屍也、一屍之爲體也、一曰泡聚、一曰衆魔、一曰苦聚、一曰糞聚、非徒速朽、亦甚鄙陋、上七孔常流涕唾、下二孔常流屎尿、故須十二時中潔淨身器、以參衆數、凡行麁不淨者、善神必背去、因果經云、將不淨手執經卷、在佛前涕唾者、必當獲厠蟲報、文殊經云、大小便時、狀如木石、愼勿語言作聲、又勿畫壁書字、又勿吐痰入厠中、又云、登厠不洗淨者、不得坐禪牀、不得登寶殿、律云、初入厠時、先須彈指三下、以警在穢之鬼、默誦神咒各七遍、初誦入厠咒曰、唵狠魯陀耶莎訶、次誦洗淨咒曰、唵賀曩蜜㗚帝莎訶、右手執瓶、左手用無名指洗之、淨水旋旋傾之、著實洗淨、次誦洗手咒曰、唵主迦囉野莎訶、次誦去穢咒曰、唵室利曳婆醯、娑嚩賀、次誦淨身咒曰、唵跋折囉惱迦吒娑嚩賀、此五神咒有大威德、諸惡鬼神聞必拱手、若不如法誦持、則雖用七恒河水、洗至金剛際、亦不得身器淸淨、又云、洗淨須用冷水、洗手須用皂角、又木屑灰泥亦通、若不用灰泥、則觸水淋其手背、垢穢尙存、禮佛誦經必得罪、云云、此登厠洗淨之法、亦是道人日用行實、故略引經語幷附于此。

有罪即懺悔、發業即慚愧、有丈夫氣象、又改過自新、罪隨心滅。

懺悔者懺其前愆、悔其後過、慚愧者慚責於內、愧發於外、然心本空寂、罪業無寄。

道人宜應端心以質直爲本、一瓢一衲、旅泊無累。

佛云、心如直絃、又云、直心是道場、若不耽着此身、則必旅泊無累。

凡夫取境、道人取心、心境兩忘、乃是眞法。

取境者如鹿之趁空華也、取心者如猿之捉水月也、境心雖殊、病則一也、此合論凡夫二乘。

天地尙空秦日月、山河不見漢君臣。

聲聞宴坐林中、被魔王捉、菩薩遊戲世間、外魔不見。

聲聞取靜爲行、故心動、心動則鬼見也、菩薩性自空寂、故無迹、無迹則外魔不見、此合論二乘菩薩。

三月懶遊花下路、一家愁閉雨中門。

凡人臨命終時、但觀五蘊皆空、四大無我、眞心無相、不去不來、生時性亦不生、死時性亦不去、湛然圓寂、心境一如、但能如是直下頓了、不爲三世所拘繫、便是出世自由人也、若見諸佛無心隨去、若見地獄無心怖畏、但自無心、同於法界。此卽是要節也、然則平常是因、臨終是果、道人須著眼看。

怕死老年親釋迦、如向此時明自己、百年光影轉頭非。

凡人臨命終時、若一毫毛凡聖情量不盡、思慮未忘、向驢胎馬腹裏托質、泥犁鑊湯中煮煠、乃至依前再爲螻蟻蚊虻。

白雲云、設使一毫毛凡聖情念淨盡、亦未免入驢胎馬腹中。

二見星飛、散入諸趣、烈火茫茫、寶劍當門。

評曰、此二節、特開宗師無心合道門、權遮敎中念佛求生門、然根器不同、志願亦異、各各如是、兩不相妨、願諸道者、平常隨分各自勞力、最後刹那莫生疑悔。

禪學者本地風光若未發明、則孤峭玄關擬從何透、往往斷滅空以爲禪、無記空以爲道、一切俱無以爲高見、此冥然頑空、受病幽矣、今天下之言禪者、多坐在此病。

向上一關措足無門、雲門云、光不透脫、有兩種病、透過法身、亦有兩種病、須一一透得始得。

不行芳草路、難至落花村。

宗師亦有多病、病在耳目者、以瞠眉怒目、側耳點頭爲禪、病在口舌者、以顚言倒語、胡喝亂喝爲禪、病在手足者、以進前退後、指東畫西爲禪、病在心腹者、以窮玄究妙、超情離見爲禪、據實而論、無非是病。

殺父母者、佛前懺悔、謗般若者、懺悔無路。

空中撮影非爲妙、物外追蹤豈俊機。

本分宗師、全提此句、如木人唱拍、紅爐點雪、亦如石火電光、學者實不可擬議也、故古人知師

思、曰、不重先師道德、只重先師不爲我說破。

不道不道、恐上紙墨、箭穿江月影、須是射鵰人。

大抵學者先須詳辨宗途、昔馬祖一喝也、百丈耳聾、黃檗吐舌、這一喝便是拈花消息、亦是達磨初來底面目、吁此臨濟宗之淵源。

識法者懼和聲便打、杖子一枝無節目、慇懃分付夜行人。

昔馬祖一喝也、百丈得大機、黃檗得大用、大機者圓應爲義、大用者直截爲義、事見傳燈錄。

大凡祖師宗途有五、曰臨濟宗、曰曹洞宗、曰雲門宗、曰潙仰宗、曰法眼宗。

臨濟宗

本師釋迦佛至三十三世、六祖慧能大師下直傳、曰南嶽懷讓、曰馬祖道一、曰百丈懷海、曰黃檗希運、曰臨濟義玄、曰興化存獎、曰南院首顒、曰風穴延沼、曰首山省念、曰汾陽善昭、曰慈明楚圓、曰楊岐方會、曰白雲守端、曰五祖法演、(曰圓悟克勤、曰徑山宗杲)禪師等。

曹洞宗

六祖下傍傳、曰青原行思、曰石頭希遷、曰藥山惟儼、曰雲巖曇晟、曰洞山良价、曰曹山耽章、曰雲居道膺禪師等。

雲門宗

馬祖傍傳、曰天王道悟、曰龍潭崇信、曰德山宣鑑、曰雪峯義存、曰雲門文偃、曰雪竇重顯、曰天衣義懷禪師等。

潙仰宗

百丈傍傳、曰潙山靈祐、曰仰山慧寂、曰香嚴智閑、曰南塔光涌、曰芭蕉慧淸、曰霍山景通、曰無著文喜禪師等。

法眼宗

雪峯傍傳、曰玄沙師備、曰地藏桂琛、曰法眼文益、曰天台德韶、曰永明延壽、曰龍濟紹修、曰南臺守安禪師等。

臨濟家風

赤手單刀殺佛殺祖、辨古今於玄要、驗龍蛇於主賓、操金剛寶劍、掃除竹木精靈、奮獅子全威、震裂狐狸心膽、要識臨濟宗麼。

青天轟霹靂、平地起波濤。

曹洞家風

權開五位、善接三根、橫抽寶劍、斬諸見稠林、妙協弘通、截萬機穿鑿、威音那畔、滿目烟光、空劫已前、一壺風月、要識曹洞宗麼。

佛祖未生空劫外、正偏不落有無機。

雲門家風

劍鋒有路、鐵壁無門、掀飜露布葛藤、剪却常情見解、迅電不及思量、裂焰寧容湊泊、要識雲門宗麽。

　拄杖子𨁝跳上天、盞子裏諸佛說法。

潙仰家風

師資唱和、父子一家、脇下書字、頭角崢嶸、室中驗人、獅子腰折、離四句絕百非、一槌粉碎、有兩口無一舌、九曲珠通、要識潙仰宗麽。

　斷碑橫古路、鐵牛眠少室。

法眼家風

言中有響、句裡藏鋒、髑髏常于世界、鼻孔磨觸家風、風柯月渚、顯露眞心、翠竹黄花、宣明妙法、要識法眼宗麽。

　風送斷雲歸嶺去、月和流水過橋來。

別明臨濟宗旨

大凡一句中具三玄、一玄中具三要、一句無文綵卽、三玄三要有文綵卽、權實玄、照用要。

三句

第一句、喪身失命、第二句、未開口錯、第三句、糞箕掃箒。

三要

一要、照卽大機、二要、照卽大用、三要、照用同時。

三玄

體中玄、三世一念等、句中玄、徑截言句等、玄中玄、良久棒喝等。

四料揀

奪人不奪境、待下根、奪境不奪人、待中根、人境兩俱奪、待上根、人境俱不奪、待出格人。

四賓主

賓中賓、學人無鼻孔、有問有答、賓中主、學人有鼻孔、有主有法、主中賓、師家無鼻孔、有問在、主中主、師家有鼻孔、不妨奇特。

四照用

先照後用、有人在、先用後照、有法在、照用同時、驅耕奪食、照用不同時、有問有答。

四大式

正利、少林面壁類、平常、禾山打鼓類、本分、山僧不會類、貢假、達磨不識類。

四喝

金剛王寶劍、一刀揮斷一切情解、踞地獅子、發言吐氣、衆魔腦裂、探竿影草、探其有無師承鼻孔、一喝不作一喝用、具上三玄四賓主等。

八棒

觸令返玄、接掃從正、棄玄復正、苦責罰棒、順宗旨賞棒、有虛實辨棒、盲枷瞎棒、掃除凡聖正棒。

此等法、非特臨濟宗風、上自諸佛下至衆生、皆分上事、若離此說法、皆是妄語。

臨濟喝、德山棒、皆徹證無生、透頂透底、大機大用、自在無方、全身出沒、全身擔荷、退守文殊普賢大人境界、然據實而論、此二師亦不免偸心鬼子。

凜凜吹毛不犯鋒鋩、爍爍寒光珠媚水、寥寥雲散月行天。

大丈夫見佛見祖、如寃家、若着佛求、被佛縛、若着祖求、被祖縛、有求皆苦、不如無事。

佛祖如寃者、結上無風起浪也、有求皆苦者、結上當體便是也、不如無事者、結上動念卽乖也、到此坐斷天下人舌頭、生死迅輪、庶幾停息也、扶危定亂、如丹霞燒木佛、雲門喫狗子、老母不見佛、皆是摧邪顯正底手段、然畢竟如何。

常憶江南三月裏、鷓鴣啼處百花香。

神光不昧、萬古徽猷、入此門來、莫存知解。

神光不昧者、結上昭昭靈靈也、萬古徽猷者、結上本不生滅也、莫存知解者、結上不可守名生解也、門者有凡聖出入義、如荷澤所謂知之一字衆妙之門也、吁起於名狀不得、結於莫存知解、一篇葛藤、一句都破也、然始終一解中擧萬行、如世典之三義也、知解二字、佛法之大害、故時擧而終之、荷澤神會禪師、不得爲曹溪嫡子者以此也、因而頌曰、如斯擧唱明宗旨、笑殺西來碧眼僧、然畢竟如何。

孤輪獨照江山靜、自笑一聲天地驚。

禪家龜鑑　終

跋

右編乃曹溪老和尚退隱師翁所著也、噫二百年來、師法益喪、禪敎之徒、各生異見、宗敎者、唯耽糟粕、徒自算沙、不知五敎之上、有直指人心、使自悟入之門、宗禪者自特天眞、撥無修證、不知頓悟後始卽發心、修習萬行之意、禪敎混濫沙金罔分、圓覺所謂聞說本來成佛、謂本無迷悟、撥置因果則便成邪見、又聞修習無明、謂眞能生妄、失眞常性、則亦成邪見者是也、嗚呼殆哉、斯道不傳何若是其甚也、綿綿涓涓如一髮引千鈞、幾乎落地無從矣、賴我師翁、住西山一十年、鞭牛有暇、覽五十本經論語錄、間有日用中參決要切之語句、則輒錄之、時與室中二三子詢詢然誨之、一如牧羊之法、過者抑之、後者鞭之、驅入於大覺之門、老婆心得徹困、若是其切也、奈二三子鈍根也、返以法門之高峻爲病、爲師翁愍其迷蒙、各就語句下入註而解之、編次而繹之、鉤鎖連環、血脈相通、萬藏之要、五宗之源、極備於此、言言見諦、句句朝宗、向之偏者圓之、滯者通之、可謂禪敎之龜鑑、解行之良藥也、然師翁常與論這般事、雖一言半句、如弄劍刄上事、恐上紙墨、豈欲以此流通方外、誇衒己能也哉、門人白雲禪師魯願寫之、門人碧泉禪德義天校之、門人大禪師淨源、門人大禪師大常、門人青霞道人法融等、稽首再拜曰、未曾有也、遂與同志六七人傾鉢囊中所儲、入梓流通、以報師翁訓蒙之恩也大機龍藏、汪洋渺若淵海、雖言探龍珠采珊瑚者、孰從而求之、非入海如陸之手段、頗不免望涯之嘆、然則撮要之功、

發蒙之惠、如山之高若海之深、設若碎萬骨粉千命、如何報得一毫哉、千里之外有見之聞之、不驚不疑、敬之讀之以爲寶玩、則眞所謂千歲之下一子雲耳。

時萬曆己卯春

曹溪宗遂四溟隱峰惟政拜手口訣、因爲謹跋

國譯禪學大成奥付

昭和五年三月十五日印刷
昭和五年三月二十日發行

不許複製

編者　國譯禪學大成編輯所
代表者　宮裡祖泰

發行者　東京市神田區錦町一丁目十六番地
宮下軍平

印刷者　東京市神田區表猿樂町二丁目五番地
藤本茂人

印刷所　東京市神田區表猿樂町二丁目五番地
藤本印刷所

發行所　東京市神田區錦町一ノ十六
振替口座東京三四〇九番
二松堂書店